

Journal of Japanese Culture

---

---

# 日本文化學報

---

---

•第 51 輯•

2011. 11

韓國日本文化學會



目 次

---

---

· 日本語の拗音(ゃ/ゅ/ょ)を伴うオノマトペの形態 .....	金 昌 男	5
· 副詞「結局」の定着と意味用法について .....	趙 英 姬	23
-雑誌『太陽』を中心に-		
· 振動器と身体リズム運動による発音指導 .....	姜 蓮 華	39
-特殊音素の促音を中心に-		
· 韓国人学習者と中国人学習者の聞き取りにおける外来語の認知傾向 .....	田中節子	57
· 일본현대시를 이용한 비블리오테라피 수업 .....	남 이 숙	77
· 視聽覚資料を用いたシャドーイング練習 .....	崔 真 姬	95
- 上級レベルの学習者を対象に -		
· 가계키요 관련 일화 고찰 - 「측근의 배신」 일화를 중심으로 - .....	김 미 옥	113
· 『扶桑略記』에서 본 불상 도래에 관한 인식 .....	松本真輔	133
· パトロンとしての藤原道長 - 『紫式部日記』を主軸にして- .....	鄭 順 粉	147
· 『풀 베개(草枕)』론 - 中庸의 美를 중심으로 - .....	姜 賢 模	165
· 『히카루의 바둑』과 일본의 바둑 문화 .....	김 청 균	185
· 시마자키 도손 연구 .....	김 희 중 · 임 성 규	201
-한국에서 시마자키 도손 연구 성과와 과제 조명II-		
· 村上春樹『スプートニクの恋人』論 .....	徐 忍 宇	221
· 정비석의 『자유부인』과 다니자키준이치로의 『열쇠』 .....	吳 秉 禹	243
- 오선영, 이쿠코를 중심으로 한 비교연구 -		
· 巖谷小波の「梢之月」とキリスト教 .....	俞 在 真	263
· 「厭世詩家와 女性」論 -에머슨의 「LOVE」(「戀愛」)의 受容을 中心으로- .....	李 淙 煥	281
· 金嬉老事件と<反共> -映画「金の戦争」論-- .....	林 相 珉	305
· 일본근현대문학 수업 사례 연구 -일본근대문학사 수업 사례를 중심으로- .....	임 태 균	321
· 『或る女』論 -木部という人物について- .....	鄭 旭 盛	339
· 재일코리아안 고령자의 사회 보장에 관한 연구 .....	조 문 기	353
-민생(방면)위원제도를 중심으로-		
· ‘황민화’와 ‘내선일체’로 본 친일문학의 양상 .....	鄭 昌 石	373
· 한국의 울릉도·독도개척사에 대한 일본의 조작행위 .....	崔 長 根	407
-川上健三와 田村清三郎를 중심으로-		
<hr/>		
■ 彙報 .....		427
■ 韓國日本文化學會 任員名簿 .....		439
■ 韓國日本文化學會 會則 .....		441



# 日本語の拗音(ゃ/ゅ/ょ)を伴うオノマトペの形態

金昌男\*

(e-mail: cnkim42@hotmail.com)

---

## 目次

---

1. はじめに
  2. 先行研究
  3. 考察対象
  4. 考察結果及び分析
    - 4.1 拗音(ゃ/ゅ/ょ)の語彙数と現れ方
    - 4.2 拗音(ゃ/ゅ/ょ)が現れる形式
      - 4.2.1 「～y(～y～)」形式
      - 4.2.2 「～yt(～y～t)」形式
      - 4.2.3 「～yr(～y～r)」形式
      - 4.2.4 「～yn(～y～n)」形式
  5. まとめ
- 

## 1. はじめに

現代日本語のオノマトペの語形式をみると、「めちやめちや、しゆるしゆる、びしょびしょ」のように拗音(ゃ/ゅ/ょ)を伴うもの、長音(ー)を伴うもの(ちーん、じゃーじゃー、おぎゃーおぎゃー)、促音(っ)を伴うもの(ぶつつ、あっさり、がっかり)、撥音(ん)を伴うもの(がちゃん、しょんぼり、のんびり)、仮名「り」を伴うもの(うんざり、しょんぼり、ぼちゃり)、反復型のもの(すやすや、ごちゃごちゃ、ちょこちょこ)などがある。

本稿では拗音(ゃ/ゅ/ょ)を伴うものを中心に、拗音「ゃ」「ゅ」「ょ」それぞれが現れているオノマトペの語形式と語彙数について考察を行うことにする。

---

\* 金剛大学校, 副教授, 日本語学

## 2. 先行研究

日本語のオノマトペに関する従来の研究をみると、崔(2005:563)ではオノマトペの具体的なタイプについて以下の23形態を紹介している。(以下の「O」は仮名一文字を、「t」は促音(っ)、「n」は撥音(ン)、「r」は仮名「り」、「-」は長音(ー)を表す。)

O形態、Ot形態、On形態、O-形態、O-t形態、O-n形態、OtOt形態、OnOn形態、O-O-形態、OO形態、OOt形態、OOr形態、OOn形態、OtO形態、OnO形態、OtOr形態、OnOr形態、OOの反復形態、OO変形態Ⅰ、OO変形態Ⅱ、OO変形態Ⅲ、OOnの反復形態、OtOの反復形態

また、石黒(2008:25-26)ではオノマトペの形態的な特徴について以下のように述べている。

オノマトペらしくするためには、それらしい形にする必要があります。オノマトペらしい形とは、たとえば以下のようなものです。

- Oっ … 「さっ」 「きっ」 「ぶっ」
- On … 「ばん」 「つん」 「でん」
- OOっ … 「ぼきっ」 「がくっ」 「ばちっ」
- OOr … 「ぼたり」 「ぼどり」 「さらり」
- OOn … 「ごろん」 「ぼきん」 「どかん」
- 反復形 … 「がながん」 「からんからん」 「ばちゃばちゃ」
- OっOr … 「びっしり」 「すっぼり」 「きっちり」
- OnOr … 「こんがり」 「ぼんやり」 「にんまり」

Oに入るそれぞれの音も、子音がカ行・サ行・タ行・ナ行・ハ行・マ行・ヤ行・ラ行・ワ行のどの行か、清音か濁音か半濁音か、母音がア段・イ段・ウ段・エ段・オ段のどの段かによって、作られるオノマトペのイメージはある程度決まってきます。

さらに、李(2005:412-416)では『漢語形容動詞辞典』に見られる漢語の疊語592個のオノマトペを音型別に七つに分類している。その七つの音型とそれぞれに該当する一部の例と語彙数を表にまとめると以下ようになる。

順位	音型	例	語数(%)
1	甲ウ甲ウ	オウオウ(央央)、オウオウ(応応)、キョウキョウ(兢兢)、クウクウ(空空)、コウコウ(皓皓)、コウコウ(高高)、シュウシュウ(習習)…、	197語 (33.3%)
2	甲ン甲ン	アンアン(安安)、エンエン(延延)、オンオン(温温)、カンカン(閑閑)、ギンギン(吟吟)、ケンケン(乾乾)、コンコン(懇懇)、シンシン(新新)…、	159語 (26.9%)

3	甲イ甲イ	アイアイ(哀哀)、エイエイ(英英)、カイカイ(快快)、ケイケイ(軽軽)、サイサイ(崔崔)、スイスイ(垂垂)、セイセイ(晟晟)、テイテイ(亭亭)…、	70語 (11.8%)
4	甲ク甲ク (甲ッ甲ク)	アクアク(啞啞)、カクカク/カックカク(格格)、サクサク(削削)、シャクシャク(灼灼)、ソクソク(促促)、ダクダク(諾諾)、バクバク(莫莫)…、	59語 (10.0%)
5	甲甲	イイ(依依)、ガガ(娥娥)、キキ(奇奇)、クク(区区)、シシ(糸糸)、チチ(遅遅)、ヒヒ(比比)…、	57語 (9.6%)
6	甲ツ甲ツ (甲ッ甲ツ)	アツアツ(軋軋)、ウツウツ(蔚蔚)、カツカツ(渴渴)、コツコツ(忽忽)、セツセツ(切切)…、	31語 (5.2%)
7	甲キ甲キ	エキエキ(役役)、セキセキ(蹟蹟)、テキテキ(適適)、ヘキヘキ(碧碧)、レキレキ(歴歴)…、	19語 (3.2%)
計			592語

上記の他にも、日本語のオノマトペの形態的な特徴を述べている研究に中里(2008)、金(2011)があり、またオノマトペと助詞との共起について扱っているものに崔(2005)、峯(2007)、田守(2008)がある。さらにオノマトペと日本語教育(教材)に関して言及している研究には守山(2006)、秋元(2007)、有賀(2007)、葛西(2007)、三上(2007)があり、また日本語と韓国語のオノマトペの対照研究には康(1999)、松本(2006)、伊東(2007)などがある。

以上、オノマトペに関する従来の研究を見てきたが、先行研究においては拗音(ゃ/ゅ/ょ)を伴うオノマトペについて詳細に述べているものは見つからなかった。そこで、本稿では拗音(ゃ/ゅ/ょ)を伴うオノマトペについて考察を行うことにする。

### 3. 考察対象

本稿で考察対象とするオノマトペは山口(2003)『暮らしのことば擬音・擬態語辞典』<sup>1)</sup>に記載されている2,033語の中から拗音(ゃ/ゅ/ょ)を伴っている367語を中心に考察を行う。この367語は形式別に71形式に分類することができるが、以下でこの71形式の語彙数と語形式について詳細に見ていくことにする。

## 4. 考察結果及び分析

### 4.1 拗音(ゃ/ゅ/ょ)の語彙数と現れ方

まず拗音「ゃ」「ゅ」「ょ」と組み合わせが可能な仮名を挙げると「き、ぎ、し、じ、

1) 本稿で山口(2003)を考察資料として取り扱った理由は拗音(ゃ/ゅ/ょ)を伴っているオノマトペの語彙数も多く、また各用例も分かりやすいと思ったからである。

ち、に、ひ、び、び、み、り」がある。それぞれの組み合わせについては〈表1〉のようになる。

〈表1〉 拗音(ゃ/ゅ/ょ)と仮名との組み合わせ

仮名 拗音	き	ぎ	し	じ	ち	に	ひ	び	び	み	り
「ゃ」	きゃ	ぎゃ	しゃ	じゃ	ちゃ	にゃ	ひゃ	びゃ	びゃ	みゃ	りゃ
「ゅ」	きゅ	ぎゅ	しゅ	じゅ	ちゅ	にゅ	ひゅ	びゅ	びゅ	みゅ	りゅ
「ょ」	きょ	ぎょ	しよ	じよ	ちよ	にょ	ひょ	びょ	びょ	みょ	りょ

つまり、〈表1〉は拗音「ゃ」「ゅ」「ょ」と仮名との組み合わせを示したものである。これを基にして、今回の調査で見つかったオノマトペの分析結果をまとめると〈表2〉のようになる。

〈表2〉 拗音(ゃ/ゅ/ょ)と仮名との組み合わせの語彙数及び現れ方

仮名 拗音	き	ぎ	し	じ	ち	に	ひ	び	び	み	り	計
「ゃ」	きゃ	ぎゃ	しゃ	じゃ	ちゃ	にゃ	ひゃ	びゃ	びゃ	みゃ	りゃ	186
	6	13	60	22	67	16	2	0	0	0	0	(50.68%)
「ゅ」	きゅ	ぎゅ	しゅ	じゅ	ちゅ	にゅ	ひゅ	びゅ	びゅ	みゅ	りゅ	76
	7	8	11	11	7	6	10	8	8	0	0	(20.71%)
「ょ」	きょ	ぎょ	しよ	じよ	ちよ	にょ	ひょ	びょ	びょ	みょ	りょ	105
	9	5	11	4	35	9	19	0	13	0	0	(28.61%)
計	22	26	82	37	109	31	31	8	21	0	0	367 (100.00%)

(表の中の数字は語彙数を表す)

上記の〈表1〉で、拗音「ゃ」「ゅ」「ょ」のそれぞれが現れているオノマトペの語彙数をみると、「ゃ」の場合が186語(50.68%)でもっとも多く、次に「ょ」の場合が105語(28.61%)で、その次に「ゅ」の場合が76語(20.71%)である。このことから、拗音(ゃ/ゅ/ょ)を伴うオノマトペの中で「ゃ」を伴っているものがもっとも多いことがわかった。

また「ゃ」「ゅ」「ょ」の現れ方については、「ゃ」の場合は、「ちゃ」が67例でもっとも多く、次に「しゃ」が60例、「じゃ」が22例、「にゃ」が16例、「ぎゃ」が13例、「きゃ」が6例、「ひゃ」が2例の順に現れている。但し、今回の調査では「びゃ」「びゃ」「みゃ」「りゃ」の例は一例も見つかっていない<sup>2)</sup>。

「ゅ」の場合は、「しゅ」と「じゅ」がそれぞれ11例、次に「ひゅ」が10例、「ぎゅ」

<sup>2)</sup> 仮名「び」「び」「み」「り」と拗音(ゃ/ゅ/ょ)との組み合わせは元々不可能なわけではない。次の例はオノマトペの例ではないものの、上記の仮名と拗音(ゃ/ゅ/ょ)が組み合わせられたものである。例)「びゃ」:びゃくえ(白衣)、「びゃ」:はつびゃく(八百)、「みゃ」:みゃく(脈)、「みゅ」:ミュージック(music)、「みょ」:みょじ(名字)、「りゃ」:りゃくず(略図)、「りゅ」:りゅう(竜)、「りょ」:りょう(料理)



「びゅ」「ぴゅ」が各8例、「きゅ」と「ちゅ」が7例、「にゅ」が6例の順である。しかし「みゅ」「りゅ」の例は見つかっていない。

さらに「ょ」の場合は、「ちょ」が35例でもっとも多く、次に「ひょ」が19例、「びょ」が13例、「しょ」が11例、「きょ」と「にょ」が各9例、「ぎょ」が5例、「じょ」が4例の順に現れている。但し、「びょ」「みょ」「りょ」の例は一例も見つかっていない。

以上の結果から、拗音「ゃ」「ゅ」「ょ」の三つの形式の中で「ちゃ」を伴っている例がもっとも多く、次に「しゃ」、その次に「ちょ」「じゃ」「ひょ」「ぎゃ」の順に現れていることが明らかにされた。その一方、「びゃ」「びょ」「びゃ」、「みゃ」「みゅ」「みょ」、「りゃ」「りゅ」「りょ」を伴うオノマトペは一例も見つかっていないことがわかった。

次に、拗音「ゃ」「ゅ」「ょ」を伴うオノマトペの語彙数と用例を挙げると以下のようになる。なお、( )の数字はそれぞれの語彙数を表す。

### 1) 拗音「ゃ」を伴うオノマトペ

- ①きゃ(6)：きゃー、きゃーきゃー、きやつ、きやつきやつ、きゃん、きゃんきゃん
- ②ぎゃ(13)：ぎゃー、ぎゃーぎゃー、おぎゃ、おぎゃー、おぎゃーおぎゃー、おぎゃおぎゃ、ほぎゃー、ほぎゃーほぎゃー、ふぎゃああ、ぎゃーつ、ぎゃん、ぎゃんぎゃん、ぎゃふん
- ③しゃ(60)：しゃー、がたびしゃ、ぎくしゃく、むしゃくしゃ、いけしゃーしゃー、がしゃがしゃ、くしゃくしゃ、ぐしゃぐしゃ、ごしゃごしゃ、どしゃどしゃ、ばしゃばしゃ、ばしゃばしゃ、びしゃびしゃ、ぴしゃぴしゃ、むしゃむしゃ、もしゃもしゃ、しゃかしゃか、しゃきしゃき、しゃぶしゃぶ、しゃらしゃら、しゃーしゃー、かしゃつ、がしゃつ、くしゃつ、ぐしゃつ、ぴしゃつ、ぺしゃつ、ぼしゃつ、ほしゃつ、くしゃくしゃつ、しゃつきり、しゃつしゃつ、しゃきつ、しゃりつ、ぐしゃり、びしゃり、ぴしゃり、ぺしゃり、ぼしゃり、ぼしゃり、ぐっしゃり、どんぴしゃり、しゃりしゃり、しゃなりしゃなり、がしゃん、くしゃん、ぐしゃん、ばしゃん、ばしゃん、ぴしゃん、ほしゃん、ほしゃん、しゃん、きりりしゃん、きりりしゃん、ころりんしゃん、ちんとんしゃん、しゃんしゃん、ぺしゃんこ、ぴんしゃん
- ④じゃ(22)：じゃー、じゃかすか、うじゃうじゃ、ぐじゃぐじゃ、ごじゃごじゃ、ほじゃほじゃ、もじゃもじゃ、じゃかじゃか、じゃぶじゃぶ、じゃぼじゃぼ、じゃらじゃら、じゃーじゃー、じゃりつ、ぐじゃり、じゃりじゃり、じゃらり、がじゃん、じゃん、じゃんじゃん、じゃぼん、じゃらんじゃらん、じゃぼーん
- ⑤ちゃ(67)：かちゃ、がちゃ、しわくちゃ、べちゃくちゃ、べちゃくちゃ、むちゃくちゃ、めちゃくちゃ、いちゃいちゃ、かちゃかちゃ、がちゃがちゃ、ぎちゃぎちゃ、くちゃくちゃ、ぐちゃぐちゃ、ごちゃごちゃ、にちゃにちゃ、ねちゃねちゃ、ばちゃばちゃ、ばちゃばちゃ、びちゃびちゃ、ぴちゃぴちゃ、べちゃべちゃ、べちゃべちゃ、ぼちゃぼちゃ、ぼちゃぼちゃ、めちゃめちゃ、ちやかちゃか、ちゃきちゃき、ちゃぶちゃぶ、ちゃぶちゃぶ、ちゃぼちゃぼ、ちやらちやら、かちやつ、がちやつ、びちやつ、びちやつ、ぼちやつ、ぼちやつ、ちやつかり、ちやつぶちやつぶ、か

ちやり、がちやり、くちやり、ぐちやり、びちやり、ぴちやり、ぼちやり、ぽちやり、ぼっちやり、か  
 ちゃん、がちちゃん、ばちゃん、ぱちゃん、ぴちゃん、ぺちゃん、ぼちゃん、ぽちゃん、ちゃ  
 ん、かっちゃん、がっちゃん、ぼっちゃん、どんちゃん、ぺちゃんこ、ぺっちゃんこ、ちゃぶ  
 ん、ちゃぼん、ちゃりん、ちゃりーん

⑥にや(16)：くにやくにや、ぐにやぐにや、ふにやふにや、むにやむにや、にやごにやご、にやー  
 にやー、にやーごにやーご、にやごーにやごー、ふにやつ、ふにやり、くにやり、ぐにやり、ぐ  
 んにやり、ふにやん、にやん、にやんにやん

⑦ひや(2)：ぴーひやら、ひやらら

⑧びや(0)、⑨びや(0)、⑩みや(0)、⑪りや(0)

## 2) 拗音「ゆ」を伴うオノマトペ

①きゆ(7)：きゆー、きゆーきゆー、きゆつ、きゆつきゆつ、きゆ一つ、きゆん、きゆーん

②ぎゆ(8)：ぎゆー、ぎゆーぎゆー、ぎゆつ、ぎゆつきゆつ、ぎゆ一つ、ぎゆん、ぎゆんぎゆん、  
 ぎゆーん、

③しゆ(11)：しゆー、ぐしゆぐしゆ、しゆるしゆる、しゆーしゆー、しゆつ、しゆつしゆつ、しゆつぽ  
 しゆつぽ、くしゆん、しゆん、しゆんしゆん、しゆーん

④じゆ(11)：じゆー、ぐじゆぐじゆ、じゆくじゆく、じゆわじゆわ、じゆーじゆー、じゆつ、じゆぼつ、  
 じゆるつ、じゆわつ、じゆ一つ、じゆわ一つ

⑤ちゆ(7)：ちゆー、ちゆちゆ、ちゆーちゆー、ちゆつ、ちゆつちゆつ、ちゆんちゆん、ちゆんちゆく

⑥にゆ(6)：にゆー、にゆるにゆる、にゆつ、にゆるつ、にゆ一つ、にゆるり

⑦ひゆ(10)：ひゆー、ひゆーどろどろ、ひゆるひゆる、ひゆーひゆー、ひゆつ、ひゆ一つ、ひゆん、  
 ひゆんひゆん、ひゆーん、ひゆるるーん

⑧びゆ(8)：びゆー、びゆーびゆー、びゆつ、びゆ一つ、びゆん、びゆんびゆん、びゆーん、  
 びゆーんびゆーん

⑨ぴゆ(8)：ぴゆー、ぴゆーぴゆー、ぴゆつ、ぴゆつぴゆつ、ぴゆ一つ、ぴゆん、ぴゆんぴゆん、  
 ぴゆーん

⑩みゆ(0)、⑪りゆ(0)

## 3) 拗音「よ」を伴うオノマトペ

①きよ(9)：ほーほけきよ、けつきよ、きよときよと、きよろきよろ、きよろつ、きよろり、きよとり、きよと  
 ん、きよろん

②ぎよ(5)：ぎよろぎよろ、ぎよつ、ぎよろつ、ぎよろり、ぎよろん

③しよ(11)：ぐしよぐしよ、びしよびしよ、しよほしよほ、ぐっしより、びっしより、しよりしより、はくしよ  
 ん、へつくしよん、しよんぼり、しよんぼりしよんぼり、しよぼん

④じよ(4)：ぐじよぐじよ、じよきじよき、じよりつ、じよりじより

⑤ちよ(35)：すいっちよ、ちよい、うろちよろ、ちよこまか、ぴーちよほい、ぐちよぐちよ、こちよこ

ちよ、ごちよごちよ、びちよびちよ、ちよいちよい、ちよきちよき、ちよくちよく、ちよごちよご、ちよびちよび、ちよぼちよぼ、ちよろちよろ、ちよつきり、ちよっこり、ちよっぴり、ちよっきん、ちよっくら、ちよっくらちよいと、ちよこっ、ちよびっ、ちよぼっ、ちよろっ、ちよろりっ、ちよごちよこっ、ちよろり、ちよびりちよびり、ちよん、ちよんちよん、けちよんけちよん、ちよこん、ちよこなん

⑥によ(9)：ぐによ、ごによごによ、によきによき、によろによろ、によつきり、によつき、によきっ、によろっ、によろり

⑦ひよ(19)：ひよい、ぴーひよろ、ぴんひよろ、うひょうひよ、ひよいひよい、ひよこひよこ、ひよろひよろ、ひよっ、ひよっくり、ひよっこり、ひよこっ、ひよろっ、ひよこり、ひよろり、ひよこりひよこり、ひよろりひよろり、ひよんひよん、ひよこん、ひよこんひよこん

⑧びよ(0)：

⑨びよ(13)：びよい、びよいびよい、びよこびよこ、びよっこり、びよっこん、びよいつ、びよこっ、びよこり、びよん、びよんびよん、びよこん、びよーん、びよこんびよこん

⑩みよ(0)、⑪りよ(0)

## 4.2 拗音(ゃ/ゅ/ょ)が現れる形式

以下で、拗音(ゃ/ゅ/ょ)を伴うオノマトペ(367語/71形式)を型の上から「～y(～y～)」「～yt(～y～t)」「～yr(～y～r)」「～yn(～y～n)」の四つの形式に分類して考察を行っていく<sup>3)</sup>。

### 4.2.1 「～y(～y～)」形式

この「～y(～y～)」形式には「～y」と「～y～」の他に「～y～y」「～y～y～」の形式も含まれている。それぞれの形式の例と語彙数をまとめると以下ようになる。

〈表3〉 「～y(～y～)」の形式及び語彙数

順位	形式	例	語彙数	～y(～y～) (151)の中 の割合(%)	～y全体 (367)の中 の割合(%)
1)	～y				
①	OOy型	おぎゃ、かちゃ	4	2.65	1.09
②	OOOOy型	がたびしゃ、しわくちゃ	2	1.32	0.54
③	O-OOOy型	ほーほけきよ	1	0.66	0.27
④	OtOy型	けつきよ	1	0.66	0.27
⑤	OOtOy型	すいっちよ	1	0.66	0.27
		計	9	5.96	2.45
2)	～y～				

<sup>3)</sup> 本稿では拗音(ゃ・ゅ・ょ)は「y」、促音(っ)は「t」、撥音(ん)は「n」、仮名「り」は「r」、長音(ー)は「-」で表す。また「～y(～y～)」の「～」は仮名を指し、なお仮名数は「O」で表す。例えば、仮名一文字は「O」、仮名二文字は「OO」、仮名三文字は「OOO」…のように示す。

①	Oy-型	きゃー、しゃー	13	8.61	3.54
②	OyO型	ちよい、ひよい	3	1.99	0.82
③	OOy-型	おぎゃー、ほぎゃー	2	1.32	0.54
④	OOOyO型	うろちよろ、ぎくしゃく	2	1.32	0.54
⑤	O-OyO型	ぴーひやら、ぴーひよろ	2	1.32	0.54
⑥	OyOOO型	じゃかすか、ちょこまか	2	1.32	0.54
⑦	OyOO型	ひやらら	1	0.66	0.27
⑧	OOyOO型	ふぎゃああ	1	0.66	0.27
⑨	O-OyOO型	ぴーちょほい	1	0.66	0.27
⑩	Oy-OOOO型	ひゅーどろどろ	1	0.66	0.27
⑪	OnOyO型	ぴんひよろ	1	0.66	0.27
		計	29	19.21	7.90
3)	~y~y				
①	OOy反復型	いちゃいちゃ、ばしゃばしゃ	50	33.11	13.62
②	OOyOOy型	べちやくちや、むしゃくしゃ	5	3.31	1.36
③	Oy反復型	ちゅちゅ	1	0.66	0.27
		計	56	37.09	15.26
4)	~y~y~				
①	OyO反復型	きよときよと、ちゃらちゃら	39	25.83	10.63
②	Oy-反復型	きゃーきゃー、じゅーじゅー	13	8.61	3.54
③	OOy-反復型	おぎゃーおぎゃー、 ほぎゃーほぎゃー	2	1.32	0.54
④	Oy-O反復型	にゃーごにゃーご	1	0.66	0.27
⑤	OyO-反復型	にゃごーにゃごー	1	0.66	0.27
⑥	OOOy-Oy-型	いけしゃーしゃー	1	0.66	0.27
		計	57	37.75	15.53
合計	25形式(35.21%)/71形式(「y」全体)		151	100	41.14

上記の〈表3〉は「~y(~y~)」形式と語彙数を表したものであるが、この種のものは「~y」全体(71形式)のうち25形式(35.21%)で、他の「~yt(~y~t)」「~yr(~y~r)」「~yn(~y~n)」の形式より多く見られていることがわかった。

また「~y(~y~)」形式の「~y」「~y~」「~y~y」「~y~y~」の語彙数をみると、「~y~y~」型が57例(37.75%)、「~y~y」型が56例(37.09%)、「~y~」型が29例(19.21%)、「~y」型が9例(5.96%)見られた。この結果から、「~y(~y~)」形式の場合は「~y~y~」と「~y~y」の語彙数が他の二つより多いことが明らかにされた。

さらに形式別にみると、「~y~y」の「OOy反復型」が50例(33.11%)で一番多く、次に「~y~y~」の「OyO反復型」が39例(25.83%)、「Oy-反復型」と「~y~」の「Oy-型」がそれぞれ13例(8.61%)、また「~y~y」の「OOyOOy型」が5例(3.31%)、「~y」の「OOy型」が4例(2.65%)、「~y~」の「OyO型」が3例(1.99%)

%)…の順に現れている。このことから、「～y」「～y～」「～y～y」「～y～y～」の四つの中で「OOy反復型」の語彙数がもつとも多いことがわかった。

次に「～y(～y～)」形式のそれぞれの例を挙げると以下ようになる。

1) 「～y」形式

- ①OOy型(4)：おぎゃ、かちゃ、がちゃ、ぐによ
- ②OOOOy型(2)：がたびしゃ、しわくちゃ
- ③O-OOOy型(1)：ほーほけきよ
- ④OtOy型(1)：けつきよ
- ⑤OOtOy型(1)：すいっちよ

2) 「～y～」形式

- ①Oy-型(13)：きゃー、ぎゃー、きゅー、ぎゅー、しゃー、じゃー、しゅー、じゅー、ちゅー、にゅー、ひゅー、びゅー、ぴゅー
- ②OyO型(3)：ちよい、ひよい、ぴよい
- ③OOy-型(2)：おぎゃー、ほぎゃー
- ④OOOyO型(2)：うろちよろ、ぎくしゃく
- ⑤O-OyO型(2)：ぴーひゃら、ぴーひよろ
- ⑥OyOOO型(2)：じゃかすか、ちよこまか
- ⑦OyOO型(1)：ひゃらら
- ⑧OOyOO型(1)：ふぎゃああ
- ⑨O-OyOO型(1)：ぴーちよほい
- ⑩Oy-OOOO型(1)：ひゅーどろどろ
- ⑪OnOyO型(1)：びんひよろ

3) 「～y～y」形式

- ①OOy反復型(50)：いちゃいちゃ、うじゃうじゃ、うひょうひよ、おぎゃおぎゃ、がしやがしや、かちゃかちゃ、がちゃがちゃ、ぎちゃぎちゃ、くしゃくしゃ、ぐしゃぐしゃ、ぐじゃぐじゃ、ぐしゅぐしゅ、ぐじゅぐじゅ、ぐしよぐしよ、ぐじよぐじよ、くちやくちゃ、ぐちやくちゃ、ぐちよぐちよ、くにやくにゃ、ぐにやくにゃ、ごしゃごしゃ、ごじゃごじゃ、ごちゃごちゃ、ごちよごちよ、ごちよごちよ、ごによごによ、どしゃどしゃ、にちゃにちゃ、ねちゃねちゃ、ばしやばしや、ばしやばしや、ばちゃばちゃ、ばちゃばちゃ、びしやびしや、びしやびしや、びしよびしよ、びちゃびちゃ、びちゃびちゃ、びちよびちよ、ふにゃふにゃ、べちゃべちゃ、べちゃべちゃ、ぼじゃぼじゃ、ぼちゃぼちゃ、ぼちゃぼちゃ、むしやむしや、むにゃむにゃ、めちゃめちゃ、もしやもしや、もじやもじや
- ②OOyOOy型(5)：べちやくちゃ、べちやくちゃ、むしやくしや、むちやくちゃ、めちやくちゃ
- ③Oy反復型(1)：ちゅちゅ

4) 「～y～y～」形式

- ①OyO反復型(39)：きよときよと、きよろきよろ、ぎよろぎよろ、しゃかしゃか、じゃかじゃか、しゃき

しゃき、しゃぶしゃぶ、じゃぶじゃぶ、じゃぼじゃぼ、しゃらしゃら、じゃらじゃら、じゅくじゅく、しゅるしゅる、じゅわじゅわ、じよきじよき、しよぼしよぼ、ちやかちやか、ちゃきちゃき、ちやぶちやぶ、ちやぶちやぶ、ちやぼちやぼ、ちやらちやら、ちよいちよい、ちよきちよき、ちよくちよく、ちよこちよこ、ちよびちよび、ちよぼちよぼ、ちよろちよろ、にやごにやご、にゆるにゆる、によきによき、によろによろ、ひゆるひゆる、ひよいひよい、ぴよいぴよい、ひよこひよこ、ぴよこぴよこ、ひよろひよろ

- ②Oy-反復型(13)：きゃーきゃー、ぎゃーぎゃー、きゅーきゅー、ぎゅーぎゅー、しゃーしゃー、じゃーじゃー、しゅーしゅー、じゅーじゅー、ちゅーちゅー、にゃーにゃー、ひゅーひゅー、びゅーびゅー、びゅーびゅー
- ③OOy-反復型(2)：おぎゃーおぎゃー、ほぎゃーほぎゃー
- ④Oy-O反復型(1)：にゃーごにゃーご
- ⑤OyO-反復型(1)：にゃごーにゃごー
- ⑥OOOy-Oy-型(1)：いけしゃーしゃー

#### 4.2.2 「～yt(～y～t)」形式

この「～yt(～y～t)」形式はさらに「～yt(～yt～yt)」「～yt～(～yt～yt～)」  
「～y～t」に分けられるが、以下では「～yt(～yt～yt)」は「～yt」で、「～yt～(～yt～yt～)」は「～yt～」で示すことにする。

それぞれの形式の例と語彙数をまとめると以下の〈表4〉のようになる。

〈表4〉 「～yt(～y～t)」形式及び語彙数<sup>4)</sup>

順位	形式	例	語彙数	～yt(～y～t) (82)の中の 割合(%)	「y」全体 (367)の中の 割合(%)
1)	～yt				
①	OOyt型	びしゃっ、ぼちやっ	15	18.29	4.09
②	Oyt型	ぎゅっ、びゅっ	12	14.63	3.27
③	Oyt反復型	ぎゅっぎゅっ、 ちゅっちゅっ	7	8.54	1.91
④	OOyOOyt型	くしゃくしゃっ	1	1.22	0.27
		計	35	42.68	9.54
2)	～yt～				
①	OytOr型	ちよっぴり、ひよっこり	9	10.98	2.45
②	OytO反復型	しゅっぼしゅっぼ、 ちやっぶちやっぶ	2	2.44	0.54
③	OytOn型	ちよっきん、びよっこん	2	2.44	0.54
④	OytO型	によつき	1	1.22	0.27

4) 上記の〈表4〉は金(2011:47-48)の〈表4〉を若干修正したものである。

⑤	OytOO型	ちよつくら	1	1.22	0.27
⑥	OytOOyOO型	ちよつくらちよいと	1	1.22	0.27
		計	16	19.51	4.36
3)	~y~t				
①	OyOt型	によろっ、ひよろっ	20	24.39	5.45
②	Oy-t型	ぎゅーっ、じゅーっ	8	9.76	2.18
③	OyO-t型	じゅわーっ	1	1.22	0.27
④	OyOOt型	ちよろりっ	1	1.22	0.27
⑤	OyOOyOt型	ちよこちよこっ	1	1.22	0.27
		計	31	37.80	8.45
合計	15形式(21.13%)/71形式(「y」全体)		82	100	22.34

上記の〈表4〉は「~yt(~y~t)」形式とそれぞれの語彙数を示したものである。この形式は「~y」全体の71形式のうち15形式(21.13%)で、「~y(~y~)」 「~yt(~y~t)」 「~yr(~y~r)」 「~yn(~y~n)」の四つの中で三番目に多く現れている。

また「~yt(~y~t)」形式はさらに「~yt」 「~yt~」 「~y~t」の三つに分けて考察したが、それぞれの語彙数をみると、「~yt」型が35例(42.68%)でもっとも多く、次に「~y~t」型が31例(37.80%)、その次に「~yt~」型が16例(19.51%)に見られた。つまり、「~yt」 「~yt~」 「~y~t」の三つの中で「~yt」の語彙数が一番多く現れている。

さらに形式別にみると、「~y~t」の「OyOt型」が20例(24.39%)でもっとも多く、次に「~yt」の「OOyt型」と「Oyt型」がそれぞれ15例(18.29%)と12例(14.63%)、また「~yt~」の「OytOr型」が9例(10.98%)、「~y~t」の「Oy-t型」が8例(9.76%)、「~yt」の「Oyt反復型」が7例(8.54%)、「~yt~」の「OytO反復型」と「OytOn型」が各2例(2.44%)・・・の順に現れている。この結果から、「~yt(~y~t)」形式では「~y~t」の「OyOt型」の語彙数がもっとも多く、次に「~yt」の「OOyt型」が多いことがわかった。

次に「~yt(~y~t)」形式のそれぞれの例を挙げると以下の通りである。

#### 1) 「~yt」形式

- ①OOyt型(15)：かしゃっ、がしゃっ、かちやっ、がちやっ、くしゃっ、ぐしゃっ、ぴしゃっ、びちやっ、びちやっ、ふにやっ、べしゃっ、ぼしゃっ、ぼしゃっ、ぼちやっ、ぼちやっ
- ②Oyt型(12)：きやっ、きゅっ、ぎゅっ、ぎょっ、しゅっ、じゅっ、ちゅっ、にゅっ、ひゅっ、びゅっ、ぴゅっ、ひょっ
- ③Oyt反復型(7)：きやっきやっ、きゅっきゅっ、ぎゅっぎゅっ、しゃっしゃっ、しゅっしゅっ、ちゅっちゅっ、ぴゅっぴゅっ

④OOyOOyt型(1)：くしゃくしゃっ

2) 「～yt～」形式

①OytOr型(9)：しゃっさり、ちゃっかり、ちよっさり、ちよっこり、ちよっぴり、によっさり、ひよっさり、ひよっこり、ぴよっこり

②OytO反復型(2)：しゅつぼしゅつぼ、ちゃつぶちゃつぶ

③OytOn型(2)：ちよっきん、ぴよっこん

④OytO型(1)：によっき

⑤OytOO型(1)：ちよっくら

⑥OytOOOyOO型(1)：ちよっくらちよいと

3) 「～y～t」形式

①OyOt型(20)：きよろっ、ぎよろっ、しゃきっ、しゃりっ、じやりっ、じゅぼっ、じゅるっ、じゅわっ、じょりっ、ちよこっ、ちよびっ、ちよぼっ、ちよろっ、にゅるっ、によきっ、によろっ、ぴよいつ、ひよこっ、ぴよこっ、ひよろっ

②Oy-t型(8)：ぎゃーっ、きゅーっ、ぎゅーっ、じゅーっ、にゅーっ、ひゅーっ、びゅーっ、ぴゅーっ

③OyO-t型(1)：じゅわーっ

④OyOOt型(1)：ちよろりっ

⑤OyOOyOt型(1)：ちよこちよこっ

4.2.3 「～yr(～y～r)」形式

この「～yr(～y～r)」形式はさらに「～yr(～yr～yr)」 「～y～r(～y～r～y～r)」に分けられるが、以下では「～yr(～yr～yr)」は「～yr」で、また「～y～r(～y～r～y～r)」は「～y～r」で表すことにする。

それぞれの形式の例と語彙数をまとめると以下のようになる。

〈表5〉 「～yr(～y～r)」形式及び語彙数

順位	形式	例	語彙数	～yr(～y～r) (42)の中の 割合(%)	「y」全体 (367)の中の 割合(%)
1)	～yr				
①	OOyr型	かちやり、ほちやり	18	42.86	4.90
②	OtOyr型	ぐっしやり、びっしより	4	9.52	1.09
③	Oyr反復型	しゃりしゃり、しよりしより	4	9.52	1.09
④	OnOyr型	ぐんにやり	1	2.38	0.27
⑤	OnOOyr型	どんびしやり	1	2.38	0.27
		計	28	66.67	7.63
2)	～y～r				
①	OyOr型	きよろり、じやらり	10	23.81	2.72



②	OyOr反復型	ちよびりちよびり、 ひよろりひよろり	4	9.52	1.09
		計	14	33.33	3.81
合計	7形式(9.86%)/71形式(「y」全体)		42	100	11.44

上記の〈表5〉は「 $\sim yr(\sim y\sim r)$ 」形式と語彙数を表したものであるが、この種のものは「 $\sim y$ 」全体(71形式)のうち7形式(9.86%)で前述した四つの形式の中でもっとも少ない。

また「 $\sim yr(\sim y\sim r)$ 」形式は「 $\sim yr$ 」「 $\sim y\sim r$ 」の二つに分けられるが、それぞれの語彙数をみると、「 $\sim yr$ 」型が28例(66.67%)と「 $\sim y\sim r$ 」型が14例(33.33%)である。

さらに形式別にみると、「 $\sim yr$ 」の「OOyr型」が18例(42.86%)でもっとも多く、次に「 $\sim y\sim r$ 」の「OyOr型」が10例(23.81%)、その次に「 $\sim yr$ 」の「OtOyr型」「Oyr反復型」と「 $\sim y\sim r$ 」の「OyOr反復型」がそれぞれ4例(9.52%)・・・の順に見られた。このことから、「 $\sim yr(\sim y\sim r)$ 」形式では「 $\sim yr$ 」の「OOyr型」の語彙数をもっとも多いことがわかった。

次に「 $\sim yr(\sim y\sim r)$ 」形式のそれぞれの例を挙げると以下のようになる。

#### 1) 「 $\sim yr(\sim yr\sim yr)$ 」形式

- ①OOyr型(18)：かちやり、がちやり、ぐしやり、ぐじやり、くちやり、ぐちやり、びしやり、びしやり、びちやり、びちやり、ふにやり、べしやり、ぼしやり、ぼしやり、ぼちやり、ぼちやり、くになり、ぐになり
- ②OtOyr型(4)：ぐっしやり、ぐっしより、びっしより、ぼっちやり
- ③Oyr反復型(4)：しやりしやり、じやりじやり、しよりしより、じよりじより
- ④OnOyr型(1)：ぐんにやり
- ⑤OnOOyr型(1)：どんびしやり

#### 2) 「 $\sim y\sim r(\sim y\sim r\sim y\sim r)$ 」形式

- ①OyOr型(10)：きよろり、ぎよろり、きよとり、じやらり、ちよろり、にゆるり、によろり、ひよこり、ひよこり、ひよろり
- ②OyOr反復型(4)：ちよびりちよびり、ひよこりひよこり、ひよろりひよろり、しゃなりしゃなり

#### 4.2.4 「 $\sim yn(\sim y\sim n)$ 」形式

この「 $\sim yn(\sim y\sim n)$ 」形式はさらに「 $\sim yn(\sim yn\sim yn)$ 」「 $\sim yn\sim(\sim yn\sim yn\sim)$ 」「 $\sim y\sim n(\sim y\sim n\sim y\sim n)$ 」に分けられるが、以下では「 $\sim yn(\sim yn\sim yn)$ 」は「 $\sim yn$ 」、「 $\sim yn\sim(\sim yn\sim yn\sim)$ 」は「 $\sim yn\sim$ 」、「 $\sim y\sim n(\sim y\sim n\sim y\sim n)$ 」は「 $\sim y\sim n$ 」で表すことにする。

それぞれの形式の例と語彙数をまとめると以下の〈表6〉のようになる。

〈表6〉 「～yn(～y～n)」形式及び語彙数

順位	形式	例	語彙数	～yn(～y～n)(92)の中の割合(%)	「y」全体(367)の中の割合(%)
1)	～yn				
①	OOyn型	がしゃん、べちゃん、	19	20.65	5.18
②	Oyn型	きゃん、しゅん、	14	15.22	3.81
③	Oyn反復型	きゃんきゃん、 ちゅんちゅん	14	15.22	3.81
④	OtOyn型	かっちゃん、ぼっちゃん	3	3.26	0.82
⑤	OnOyn型	どんちゃん、ぴんしゃん	2	2.17	0.54
⑥	OOOyn型	はくしょん	1	1.09	0.27
⑦	OOOOyn型	きりりしゃん	1	1.09	0.27
⑧	OOOOOyn型	きりきりしゃん	1	1.09	0.27
⑨	OOyn反復型	けちよんけちよん	1	1.09	0.27
⑩	OtOOyn型	へっくしょん	1	1.09	0.27
⑪	OOOnOyn型	ころりんしゃん	1	1.09	0.27
⑫	OnOnOyn型	ちんとんしゃん	1	1.09	0.27
		計	59	64.13	16.08
2)	～yn～				
①	OOynO型	べしゃんこ、べちゃんこ	2	2.17	0.54
②	OynOr型	しょんぼり	1	1.09	0.27
③	OynOr反復型	しょんぼりしょんぼり	1	1.09	0.27
④	OynOyO型	ちゅんちゅく	1	1.09	0.27
⑤	OtOynO型	べっちゃんこ	1	1.09	0.27
		計	6	6.52	1.63
3)	～y～n				
①	OyOn型	きよとん、じゃぼん	12	13.04	3.27
②	Oy-n型	きゅーん、びゅーん	7	7.61	1.91
③	OyOn反復型	じゃらんじゃらん、 ひよこんひよこん	3	3.26	0.82
④	OyO-n型	じゃぼーん、ちゃりーん	2	2.17	0.54
⑤	Oy-n反復型	びゅーんびゅーん	1	1.09	0.27
⑥	OyOOOn型	ちよこなん	1	1.09	0.27
⑦	OyOO-n型	ひゆるるーん	1	1.09	0.27
		計	27	29.35	7.36
合計	24形式(33.80%)/71形式(「y」全体)		92	100	25.07

上記の〈表6〉は「～yn(～y～n)」形式と語彙数をまとめたものである。この種のもの  
は「～y」全体(71形式)のうち24形式(33.80%)で、四つの形式のうち「～y(～y～)」の

次に多く現れている。

また「～yn(～y～n)」形式の「～yn」「～yn～」 「～y～n」の語彙数をみると、「～yn」型が59例(64.13%)でもっとも多く、次に「～y～n」型が27例(29.35%)、その次に「～yn～」型が6例(6.52%)である。この結果から、「～yn(～y～n)」形式では「～yn」型の語彙数が一番多く現れていることがわかった。

さらに形式別にみると、「～yn」の「OOyn型」が19例(20.65%)でもっとも多く、次に「～yn」の「Oyn型」と「Oyn反復型」が各14例(15.22%)、その次に「～y～n」の「OyOn型」と「Oy-n型」が12例(13.04%)と7例(7.61%)、「～yn」の「OtOyn型」と「～y～n」の「OyOn反復型」がそれぞれ3例(3.26%)・・・の順に見られた。このことから、「～yn」「～yn～」 「～y～n」の三つの中で「～yn」の「OOyn型」の語彙数をもっとも多いことがわかった。

次に「～yn(～y～n)」形式のそれぞれの例を挙げると以下の通りである。

#### 1) 「～yn」形式

- ①OOyn型(19)：がしゃん、がじゃん、かちゃん、がちゃん、くしゃん、ぐしゃん、くしゅん、ばしゃん、ばしゅん、ばちゃん、ばしゅん、びしゃん、びちゃん、ふにゃん、ぺちゃん、ぼしゃん、ぼしゅん、ぼちゃん、ぼしゅん
- ②Oyn型(14)：きゃん、ぎゃん、きゅん、ぎゅん、しゃん、じゃん、しゅん、ちゃん、ちょん、にゃん、ひゅん、びゅん、ぴゅん、ぴょん
- ③Oyn反復型(14)：きゃんきゃん、ぎゃんぎゃん、ぎゅんぎゅん、しゃんしゃん、じゃんじゃん、しゅんしゅん、ちゅんちゅん、ちょんちょん、にゃんにゃん、ひゅんひゅん、びゅんびゅん、ぴゅんぴゅん、ひょんひょん、ぴょんぴょん
- ④OtOyn型(3)：かっちゃん、がっちゃん、ぼっちゃん
- ⑤OnOyn型(2)：どんちゃん、ぴんしゃん
- ⑥OOOyn型(1)：はくしゅん
- ⑦OOOOyn型(1)：きりりしゃん
- ⑧OOOOOyn型(1)：きりきりしゃん
- ⑨OOyn反復型(1)：けちょんけちょん
- ⑩OtOOyn型(1)：へつくしゅん
- ⑪OOOnOyn型(1)：ころりんしゃん
- ⑫OnOnOyn型(1)：ちんとんしゃん

#### 2) 「～yn～」形式

- ①OOynO型(2)：へしゃんこ、ぺちゃんこ
- ②OynOr型(1)：しゅんぼり
- ③OynOr反復型(1)：しゅんぼりしゅんぼり

④OynOyO型(1)：ちゅんちゅく

⑤OtOynO型(1)：ぺっちゃんこ

### 3) 「～y～n」形式

①OyOn型(12)：きよとん、きよろん、ぎよろん、ぎやふん、じゃぼん、しょぼん、ちゃぶん、ちゃぼん、ちゃりん、ちょこん、ひよこん、ぴよこん

②Oy-n型(7)：きゅーん、ぎゅーん、しゅーん、ひゅーん、びゅーん、ぴゅーん、ぴょーん

③OyOn反復型(3)：じゃらんじゃらん、ひよこんひよこん、ぴよこんぴよこん

④OyO-n型(2)：じゃぼーん、ちゃりーん

⑤Oy-n反復型(1)：びゅーんびゅーん

⑥OyOOOn型(1)：ちょこなん

⑦OyOO-n型(1)：ひゅるるーん

## 5. まとめ

以上、拗音(や/ゆ/よ)を伴っている367語のオノマトペを中心に、「ゃ」「ゅ」「ょ」のそれぞれが現れているオノマトペの語彙数及び現れ方と、367語(71形式)を基にして分類した「～y(～y～)」「～yt(～y～t)」「～yr(～y～r)」「～yn(～y～n)」の四つの形式について考察を行った。その結果をまとめると以下ようになる。

第一に、「ゃ」「ゅ」「ょ」のそれぞれの語彙数については、「ゃ」が186語(50.6%)、「ょ」が105語(28.61%)、「ゅ」が76語(20.71%)で、「ゃ」を伴っているオノマトペがもっとも多い。

第二に、「ゃ」「ゅ」「ょ」の現れ方については、「ゃ」「ゅ」「ょ」の三つの中で「ちゃ」(67例)の例がもっとも多く、次に「しゃ」(60例)、その次に「ちょ」35例、「じゃ」(22例)、「ひよ」が19例、「にゃ」(16例)・・・の順に現れている。

第三に、四つの形式と各形式が占める割合については、「～y(～y～)」は25形式で35.21%、「～yt(～y～t)」は15形式で21.13%、「～yr(～y～r)」は7形式で9.86%、「～yn(～y～n)」は24形式で33.80%で、「～y(～y～)」形式の例がもっとも多く見られた。

また、形式別には、71形式の中で「～y～y」の「OOy反復型」が50例(33.11%)でもっとも多く、次に「～y～y～」の「OyO反復型」が39例(25.83%)、その次に「～y～t」の「OyOt型」が20例(24.39%)、「～yn」の「OOyn型」が19例(20.65%)、「～yr」の「OOyr型」が18例(42.86%)・・・の順に現れている。

## 【参考文献】

- 秋元美晴(2007)「日本語教育におけるオノマトペの位置づけ」『日本語学』26(7) 明治書院
- 有賀千佳子(2007)「オノマトペを通して、語彙の学習・教育について考える」『日本語学』26(7) 明治書院
- 李仁淳(2005)「漢語ににおけるオノマトペ-暁語を中心に-」『日語日文学研究』55輯 韓国日語日本学会
- 伊東真美(2007)「日本語と韓国語のオノマトペの音韻的・形態的比較-その動詞化形の比較を中心に-」『東アジア日本語教育・日本文化研究』10 東アジア日本語教育・日本文化研究学会
- 石黒圭(2008)「オノマトペとは」『国文学』第53巻 14号
- 葛西明香(2007)「日本語教育における「擬音語・擬態語」に関する授業の実践報告」『拓殖大学日本語紀要』17
- 角岡賢一(2007)『日本語オノマトペ語彙における形態的・音韻的体系性について』くろしお出版
- 金昌男(2011)「日本語の促音(っ)と撥音(ん)を伴うオノマトペの形態」『日本文化学報』第49輯 韓国日本文化学会
- 康順正(1999)「日韓両語におけるオノマトペの対照考察-形態の対立に伴う語感と意味分野を中心に-」『言語と交流』2 言語と交流研究会
- 崔聖坤(2005)「日本語オノマトペと助詞との関係性について」『日語日文学研究』第56輯 韓国日語日本学会
- 那須昭夫(2008)「新しく生まれるオノマトペ-新造語の音韻特徴-」『国文学:解釈と教材の研究』第53巻 14号
- 田守育啓(2008)「オノマトペの体系性」『国文学』第53巻 14号
- 中里理子(2008)「漢語系オノマトペをどう考えるか」『国文学』第53巻 14号
- 松本隆(2006)「日本語と韓国語の類似したオノマトペ-音と意味の有縁性と恣意性をめぐって-」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』29
- 三上京子(2007)「日本語教材とオノマトペ」『日本語学』26(7) 明治書院
- 峯正志(2007)「オノマトペの様態副詞における助詞の有無」『金沢大学留学生センター紀要』10
- 守山恵子(2006)「日本語中級レベルの教科書に見られるオノマトペ」『長崎大学留学生センター紀要』14
- 山口仲美(2003)『暮らしのことは擬音・擬態語辞典』講談社

## 要 旨

本稿では、山口(2003)『暮らしのことは擬音・擬態語辞典』に載せられている2,033語の中から拗音(ゃ/ゅ/ょ)を伴っている367語を71形式に分類して考察を行った。なお、考察においては71形式をさらに「 $\sim y(\sim y\sim)$ 」「 $\sim yt(\sim y\sim t)$ 」「 $\sim yr(\sim y\sim r)$ 」「 $\sim yn(\sim y\sim n)$ 」の四つのグループに分けて考察した。その結果、以下のことが明らかにされた。

第一に、「ゃ」「ゅ」「ょ」の語彙数については、「ゃ」が186語(50.68%)、「ょ」が105語(28.61%)、「ゅ」が76語(20.71%)で、「ゃ」を伴っているものもっとも多い。

第二に、「ゃ」「ゅ」「ょ」の現れ方については、「ゃ」「ゅ」「ょ」の三つの中で「ちゃ」(67例)の例がもっとも多く、次に「しゃ」(60例)、その次に「ちょ」35例、「じゃ」(22例)、「ひょ」が19例、「にゃ」(16例)……の順に現れている。

第三に、「 $\sim y(\sim y\sim)$ 」「 $\sim yt(\sim y\sim t)$ 」「 $\sim yr(\sim y\sim r)$ 」「 $\sim yn(\sim y\sim n)$ 」の四つの各形式が占める割合については、「 $\sim y(\sim y\sim)$ 」は25形式で35.21%、「 $\sim yt(\sim y\sim t)$ 」は15形式で21.13%、「 $\sim yr(\sim y\sim r)$ 」は7形式で9.86%、「 $\sim yn(\sim y\sim n)$ 」は24形式で33.80%で、「 $\sim y(\sim y\sim)$ 」形式がもっとも多く現れている。

さらに、形式別にみると、71形式の中で「 $\sim y\sim y$ 」の「OOy反復型」が50例(33.11%)でもっとも多く、次に「 $\sim y\sim y\sim$ 」の「OyO反復型」が39例(25.83%)、その次に「 $\sim y\sim t$ 」の「OyOt型」が20例(24.39%)、「 $\sim yn$ 」の「OOyn型」が19例(20.65%)、「 $\sim yr$ 」の「OOyr型」が18例(42.86%)……の順に現れている。

上記の結果から、拗音「ゃ」「ゅ」「ょ」の中で「ゃ」の例がもっとも多く、また形式別には「 $\sim y\sim y$ 」の「OOy反復型」の例がもっとも多いことがわかった。

以上、今回は現代日本語のオノマトペの形態的な特徴について考察したが、今後はオノマトペの時代別の変遷について考察を行いたい。なお、研究範囲も長音(ー)を伴うもの、仮名「り」を伴うもの、反復型のものに広げていきたい。

キーワード：拗音、形式、語彙数、促音、撥音、清音、濁音、反復型

투 고 : 2011. 8. 31  
1차 심사 : 2011. 9. 10  
2차 심사 : 2011. 10. 1

# 副詞「結局」の定着と意味用法について

—雑誌『太陽』を中心に—

趙英姫\*

(e-mail: yhee0410@ggu.ac.kr)

---

## 目次

---

1. はじめに
  2. 明治期における副詞「結局」の使用状況
    - 2.1 明治期の国語辞書類の「結局」の記述
    - 2.2 明治期の作品における「結局」の使用状況
  3. 『太陽コーパス』を中心にみた副詞「結局」の定着
  4. 副詞「結局」の意味用法
    - 4.1 「最終局面提示」の用法
    - 4.2 「結論的な判断提示」の用法
  5. まとめ
- 

## 1. はじめに

副詞「結局」は、次の例にみるように現代日本語において新聞の文章のような書き言葉はもちろん、日常の会話文にもよく使われる、使用頻度の高い漢語副詞である。

[01] 政府の各種の補助金の中には、効果が薄く結局無駄遣いに終わるもののがかなりある。政府のカネをばらまくことによって、自民党の票田培養の役には立つが、地方自治を阻害する性格のものも多い。  
(『朝日新聞』、社説 1985.2.27)

[02] 仕事が忙しいときには、単調な毎日の繰り返しが苦痛だった。何のための人生 だろうと、仕事を呪わしく思ったこともあった。だが、昨今、仕事が途切れるようになって、いつでも行きたいところへ行けると思うと、逆にどこへも出掛けたくない気持だ。結局、不精な質なのだと思う。最近では、案外、これが自分に一番向いた天職なのだと思うようになっている。  
(泡坂妻夫『折鶴』、1987、p.208)

---

\* 金剛大学校 助教授 日本語学

[03] 昭夫「この前、悪かったな。あの人と壊れてないんだろ。……あの程度のこ とで壊れる関係じゃないよな」静香「……今日、五代さんに怒られちゃった。あの人が間を取ってるのに、私、プロンプしっちゃって、……なんか、プロンプしたかったのよ……役に立ちたいっていうか……でも、助けなんか要らない人なのよね」昭夫「……好きなんだよな、結局」 (シナリオ『Wの悲劇』、1984、p.276)

『日本国語大辞典』には、「結局」の語誌について次のことが記されている。もとは「囲碁を一番打ち終える」の意味であったが、江戸時代末期に「はて、結末」の意味に転用された。副詞の用法はやや遅れて成立し、それ以前は詩歌の用語から転用した「結句」が使用されていた。

(『日本国語大辞典第二版』第四巻、2001、p.1374)

本来中国語である漢語は、最初は体言として日本語の中で使用され始め、多様な品詞性を持つようにいたったものが多いが、副詞「結局」も最初は体言の囲碁の用語として使われていたものが、副詞に用法が転用された経緯がうかがえる。『日本国語大辞典』の記述によると、「結局」の意味が「はて、結末」に転用されたのは江戸時代末期で、「結局」の副詞用法が定着したのは日本語に漢語が大流行した明治期である可能性が高い。

本稿では、漢語副詞「結局」を取り上げ、体言から転用された副詞用法が定着していく過程及び副詞「結局」の意味用法について考察することを目的とする。資料は、明治期の国語辞書類のほか、明治の言文一致期以降明治末期までの小説をはじめとするいくつかのジャンルの作品を対象とする。特に、「結局」の副詞用法の定着及び意味用法の分析の際は、ほかのジャンルに比べて副詞「結局」の使用例が多くみられる雑誌『太陽』を中心に調査した。

## 2. 明治期における副詞「結局」の使用状況

### 2.1 明治期の国語辞書類の「結局」の記述

明治期における「結局」の使用状況をみるために、当時の主な国語辞書類で「結局」を引いてみた。参考として、『日本国語大辞典』の「結局」の語誌のところに言及されている「結句」もいっしょに引いてみた。

- 『和英語林集成初版』(慶応3年(1867))  
「結局」：見出し語なし  
「結句」：KEKKU,ケツク, 結句, conj.On the contrary, rather, better.  
The last word of a sentence or stanza of poetry.
- 『和英語林集成再版』(明治5年(1872))  
「結局」：見出し語なし



「結句」：KEKKU,ケツク, 結句, conj.On the contrary, rather, better; also the last word of a sentence or stanza of poetry. —yoroshii.

- 『和英語林集成第三版』(明治19年(1886))

「結局」：KEKKYOKU ケツキヨク 結局(tsumari) In the end:—ron, eschatology.

「結句」：KEKKU ケツク 結句 conj. On the contrary, rather, better. The last word of a sentence or stanza of poetry. :—yoroshii.

- 『漢英対照いろは辞典』(明治21年(1888))

「結局」：けつきよく(名) 結局, をはり, つまり Conclusion, final issue.

「結句」：けつく 結句, をはりのく; [俗] (副) いつそ, あげくのはて

The conclusive line:col. in the end, finally, after all.

- 『日本辞書言海』(明治22~24年(1889~1891))

「結局」：けつ-きよく(名) 結局 ヨサマリ。ヨハリ。ハテ。

「結句」：けつ-く(名) 結句 詩、歌ノ末ノ句。(起句ノ條、見合ハスベシ)

- 『日本大辞書』(明治25~26年(1892~1893))

「結局」：けつ・きよく ((……)) (全平) 名。{ (結局) } 漢語。ヲハリ。＝ヲサマリ。⇒ドノツマリ。⇒ハテ。

「結句」：けつ・く((……))(……)名。{ (結句) } 漢語。終リノ句 (主ニ詩歌ニイフ)。

限られた調査ではあるが、上にあげた6種の国語辞書類を調べた結果、次のことがわかる。調べた辞書類で「結局」の見出し語がはじめてみられるのは、明治19年の『和英語林集成第三版』で、それ以降の国語辞書には全部見出し語として載っている。ただし、調べた国語辞書類に記述されている「結局」の意味は「終わり、はて」の体言の意味であり、副詞用法を明記しているものはみられない。もっとも、『漢英対照いろは辞典』には、「結局」に相当する英語訳として「conclusion, final issue」があげられているが、これは体言としての「結局」の意味の記述である可能性が高い。実際、和英の部に「結局」が見出し語として載っている『和英語林集成第三版』の場合、英和の部をみると、次に示すように、「In the end, Finally, At last」の英語副詞の訳語に「結局」は当てられていない<sup>1)</sup>。

- 『和英語林集成第三版』(明治19年(1886))

END, n. (省略) In the —, tsui ni, shosen.

FINALLY, adv. Tsui ni, ageku ni, hate ni, owari ni, shimai ni, tōtō.

LAST, a. (省略) At last, tsui ni, tōtō, yōyaku, yōyō, yatto, shosen. (省略)

1) 語釈中の「省略」は筆者によるもの。

すなわち、明治期の国語辞書類の調査を通じて「結局」は少なくとも明治20年前後には使われていたと考えられるが、それは主に体言としてであり、副詞用法は一般的には定着していなかったとみられる。

一方の「結句」は、『和英語林集成』初版と再版、第三版では、「いっそ」の意味として記述されており、「結句」の意味を「結局」と同じ意味で記述したのは、調べた国語辞書類では『漢英対照いろは辞典』（明治21年(1888)）が初めてである。『漢英対照いろは辞典』には、「結句」は主に俗語として使われていたと記述されている。ところが、その後の『日本辞書言海』（明治22～24年(1889～1891)）と『日本大辞書』（明治25～26年(1892～1893)）の「結句」の記述では副詞用法の記述はない。すなわち、「結句」は一時俗語的に副詞として使われていたものの、広くは定着しなかったと推測される。

## 2.2 明治期の作品における「結局」の使用状況

次に、明治期の国語辞書類に続いて副詞「結局」の実際の使われ方をみるために、明治の言文一致期以降明治末期までの小説と雑誌、啓蒙書、教科書、小新聞から副詞「結局」の用例を採集した<sup>2)</sup>。その結果を次のページの表1にまとめる。調べた作品の詳細は論文の末尾に示す。参考として、「結局」と意味が似ている漢語副詞「とうとう」も一緒に調べて集計した。ちなみに、「結句」は小説2例、雑誌1例、啓蒙書1例、合計4例が採集されたが、いずれも「かえって、むしろ」の意味で使われており、「結局」と同じ意味で使われた例はみられなかった。

表1によると、「結局」は「とうとう」と比較すると使用例が少なく、当時は「結局」よりは「とうとう」が好まれて使われていたことがわかる。次のページの例 [14] [15] は、小説の「結局」の例である。

表1 言文一致期以降明治末期までの作品にみられる「結局」と「とうとう」の用例の集計

	小説	雑誌『太陽』	啓蒙書	教科書	小新聞	計
結局 (は)	2	5(1)	1	0	0	8
とうとう	51	3	0	20	16	90

(括弧内の数字は「結局は」の用例数である)

2) 調べた各ジャンルのテキストの分量は均等ではなく、小説作品の分量がもっとも多い。小説は延べ語数(漢語副詞と漢語の形容動詞の連用形の延べ語数をいう、以下同様)約4000語、小新聞約1400語、雑誌『太陽』約1700語、教科書約600語、啓蒙書約700語を目安に採集したものである。雑誌『太陽』は明治の言文一致期から明治末期までの中間に当たると考えられる1901年(1号から12号)の小説を除いた口語体の記事だけを対象とした。したがって、表1と表2では雑誌『太陽』の調査範囲が異なるため、集計結果に違いがある。啓蒙書と小新聞は、明治初期に盛んだったジャンルであるため、年代上言文一致期以前のものも含まれている。

- [04] 「ところへ閑人が物珍しそうにぼつぼつ集ってくる。仕舞には東風と独逸人を四方から取り巻いて見物する。東風は顔を赤くしてへどもどする。初めの勢に引き易えて先生大弱りの体さ」「結局どうなったんだい」

(夏目漱石『吾輩は猫である』上編、1905、p.136)

- [05] 必竟 [つまり] 結局 [けっきょく] はヂックがジエークの方を付けて、一手に客をとる様になり、其上新しい刷毛 [はけ] や非常に目にたつ看板と服が出来たことでした。

(若松賤子『小公子』、1890-1891、p.106)

さらに、表1からは「結局」は平易な文章で書かれた教科書や、話し言葉に近い談話体で書かれた小新聞の使用例はなく、雑誌『太陽』のような硬い論説調の文章によく使用される、という文体的な特徴が指摘される。逆に、一方の「とうとう」は小説や教科書、小新聞の使用例に比べると、雑誌『太陽』の使用例が少なく、「結局」と「とうとう」は対照的である。次は、教科書と小新聞の「とうとう」の使用例である。

- [06] ソノ ヒ ノ ユフガタ、カゼ ガ、タイソー、ツヨク、フキダシマシタ。タケハ、オトナシク、カゼ ノ フク トホリ ニ ナッテキマシタ。カシ ノ キハ、ゴージョーニ、カゼ ニ ムイテ、イバッテキマシタ。スルト、カゼ ガ オコッテ、ヒドイ オト ヲ サセテ、トートー、カシ ノ キ ヲ ヲッテシマヒマシタ。

(『国定読本』第一期卷三、p.25)

- [07] 今月十日の夜る西の久保八幡町のさくら湯へ三十ばかりの男が入湯に参り一ト風呂はいると直に息が止っていろいろ手当を致したれど養生が叶わずとうとう死んでしまいました。迷惑なのは湯やでござります。(『読売新聞』、1875.7.13)

「とうとう」は、全体の使用例90例のうち、漢字表記の「到頭」で表記された例は5例で、ほかは平仮名または片仮名表記の例である。このことは、当時の人にとって「とうとう」は漢語という意識が薄く、和語副詞同様に認識されるぐらい日常語化していたことを物語っている。以下に、「とうとう」の平仮名表記の使用例と漢字表記の使用例を示す。

- [08] 忪えに、忪えに、忪えて見たが、とうとう忪え切れなくなって、「して見ると、同じように苦しんでいるかしらん」、はッと云っても追付かず、こう思うと、急におそろしく気の毒になって来て、文三は狼狽てて後悔をしてしまった。

(二葉亭四迷『浮雲』第三編、1889、p.5)

- [09] それから藍色の牡丹くづしの糯珍[しゅっちゃん]を描いて裾へ赤く稲妻を染め出した白縮緬の長襦袢一つになり、折角めかし込んできた衣装を一枚一枚剥がされて、到頭裸にされてしまいました。

(谷崎潤一郎『帮間』、1910、p.48)

以上、明治の言文一致期以降明治末期までの「結局」と「とうとう」の比較を通じて、副詞「結局」の使用頻度が類義語である副詞「とうとう」と比べて高くなかったこと、さらに「結局」は調べた調査の範囲でいうと、主に雑誌『太陽』のような硬い文体に使われる傾向がみられることを確認した。

### 3. 『太陽コーパス』を中心にみた副詞「結局」の定着

ここでは、ほかのジャンルより副詞「結局」の使用例が多くみられる雑誌『太陽』を中心に、「結局」が体言から副詞へと用法が転用され、定着していく過程をみることにする。雑誌『太陽』（博文館）は、1895（明治28）年1月1日から1928（昭和3）年2月1日まで刊行された総合雑誌である。雑誌『太陽』は当時他誌に比べて桁違いの部数で発行され、刊行期間も19世紀から20世紀にわたり一世代以上に及び、まさに時代を代表する雑誌であった<sup>3)</sup>。多様なジャンルの記事で構成され、幅広い読者層を持っていたことから、当時の日本語の実態をうつしだした資料としての価値が認められる。雑誌『太陽』の記事は、歴史、技術工学・工業、社会科学、産業、文学、自然科学、哲学、芸術の多様な分野の著者が書いたもので、ほとんどが論説調のものである。

本稿の調査は、国立国語研究所編『太陽コーパス—雑誌『太陽』日本語データベース』（博文館新社、2005）（以下、『太陽コーパス』と呼ぶ）を使用した。以下に、『太陽コーパス』で対象とした雑誌『太陽』の分量と年次別記事数と文字数を引用する。年によって記事数と文字数に多少の差があるが、全体的に均等である傾向がみられる。

年	記事数	文字数
1895年	729	3335367
1901年	635	3154563
1909年	652	2860352
1917年	503	2647455
1925年	889	2453905
計	3408	14451642

1895年	12冊	第1巻1号～12号
1901年	12冊	第7巻1号～14号（臨時増刊2冊を除く）
1909年	12冊	第15巻1号～16号（臨時増刊4冊を除く）
1917年	12冊	第23巻1号～14号（臨時増刊2冊を除く）
1925年	12冊	第31巻1号～14号（臨時増刊2冊を除く）

（国立国語研究所編(2005b)、p.5）

『太陽コーパス』から採集した副詞「結局」の集計を次の表2とグラフ1で示す。表2の括弧内の数字は文語の用例数を意味する。グラフ1では、表2の集計を口語の例と文語の例を分けてグラフで示した。なお、表2の集計は「結局」が副詞以外のほかの品詞で

3) 上野隆生(2007、p.252)を参考にした。

使われた例は除き、副詞の例だけを集計したものである。

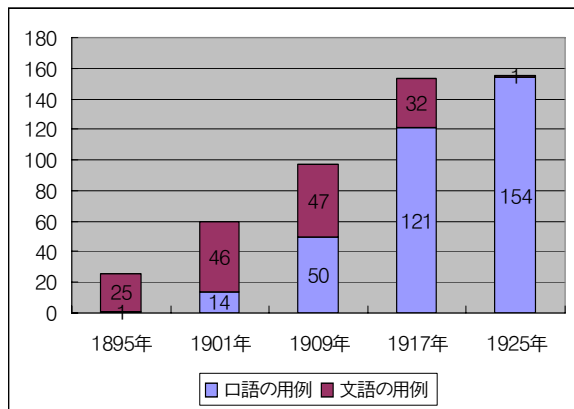
表2とグラフ1からは、時代が現代に近づくほど副詞「結局」の使用例が増加する傾向が見て取れる。さらに詳しくは、1895年と1925年の間の用例数の単純比較で言うと、30年の間に副詞「結局」の用例数は約6倍増えた結果となる。また、文語と口語では、文語の例が減少し、口語の例が増加しているが、これは雑誌『太陽』の記事が文語文中心から年次を追うごとに口語文中心に移行していくので、自然な結果といえる<sup>4)</sup>。

表2 『太陽コーパス』の副詞「結局」の用例数

年	用例数
1895年	26(25)
1901年	60(46)
1909年	97(47)
1917年	153(32)
1925年	155( 1)
計	491(151)

(括弧内の数字は文語の用例数)

グラフ1 『太陽コーパス』の副詞「結局」の用例数の推移



次のページの表3は、「結局」が文中で副詞以外の品詞、すなわち体言または和語の「一スル」がついたサ変動詞などで使われた使用例を集計したものである。表3には、「結局」の副詞以外の品詞の使用例が年次を追うごとに徐々に減少していく傾向が表れている<sup>5)</sup>。すなわち、表2とグラフ1、表3から、『太陽コーパス』を通じて「結局」の副詞用法が定着していく一方で、副詞以外の品詞の用法は衰退していくことが確認できる。「結局」の副詞以外の品詞の例は体言の例、サ変動詞の例、「その他」に分類される。

表3 『太陽コーパス』の「結局」の副詞以外の品詞の用例数

年度 (用例数)	品詞
1895年(25)	体言 (15)
	用言 ( 3)
	その他 ( 7) : その結局、—した (する) 結局 (は)

4) 国立国語研究所編(2005, p.5)によると、1895年には口語記事率が5.3%で、文語記事率が94.5%だったが1925年には口語記事率が93.9%、文語記事率が5.8%に逆転している。

5) 特に1895年の記事に「結局」の体言の用例が多いのは、1895年の記事に日清戦争関連の記事が多く、「征清の結局」「戦争の結局」などの表現が繰り返し使用されているからである。

1901年( 9)	体言 ( 8)
	用言 ( 1)
1901年( 1)	体言 ( 1)
1917年( 3)	体言 ( 2)
	その他 ( 1) : 結局するところは( 1)
1925年( 4)	体言 ( 1)
	その他 ( 3) : 結局するに、結局するところ、結局して

例 [10] と例 [11] は、「終わり、はて」の意味の体言の例である。例 [12] の「結局ス」は「終結する」の意味、例 [13] は「ある結果に行き着く」の意味で使われている。

[10] 朝鮮及び台湾に関する談判も、亦先生の予期の如き結局を見たり。

(著者未詳「副島蒼海先生」、『太陽』第7巻13号、901.11)

[11] 今や日清両国の戦争は將に其結局を告げんとし、茲に第四回内国勲業博覧会を開設して全国の物産を一堂の中に陳列し、

(金子堅太郎「博覧会の沿革及其効能」、『太陽』第1巻5号、1895.5)

[12] 日本と露、独、仏三国との間に於て、此の条件を内定し、同時に三国は永久遼東半島に手を下さざる事、日本は台湾を他に割譲せざる事の保障を為したり、故に清国との談判は円滑に結局すべし

(著者未詳「時事」、『太陽』第1巻11号、1895.11)

[13] 木偶の委員の減少は適當なる委員の増加にして従て万国會議に我委員の臨む毎に我国光の幾分を海外に発輝するを得て日本全体の利益に結局す之を万国會議を我国に開きて得る利益の一とす

(松波仁一郎「万国會議」、『太陽』第7巻3号、1901.3)

表3の「その他」にあげられている「その結局」「—した(する)結局(は)」「結局するところは」「結局するに」などは、形態上は体言またはサ変動詞の用言と分類されるが、実際の文中での意味は、例 [10] から [13] にあげた体言や用言の意味とは異なる。これらは、全体が一つのまとまった表現として、前後する事態をつなぐはたらきをしているので、体言または用言と分類せず「その他」として分類した。要するに、これらの言い方は形は体言または用言の形をしているが、実際は一つのまとまった表現単位として文中で副詞「結局」に近い役割をしている。これらは、「結局」の副詞用法が定着する過程にみられる過渡期的な言い方と考えるべきであろう。

[14] 尤も偶然に冶金法に適して利益を占めて居る人もありますから、鉱山事業は危険を冒してやる一攫万金と云ふ様な事業として、此業に従事するものを危険者乃ち山師などと称してその結局鉱山事業を軽蔑する様になつたでありませうが、

(若山由五郎「冶金法の選定に就て」、『太陽』第1巻8号、1895.8)

[15] 要するに戦争は外観国家の権力の増進であるが結局する所は民主的内容の拡大

である。此事實は日本の如き国状に於ても到底之を免るゝことが出来ない。

(浅田江村「時局の印象」、『太陽』第23巻9号、1917.8)

- [16] 彼が、三島子に反抗する動機は、左程不純なものではないと、弁解する一派の人もゐる。或は、さうかもしれない。しかし、怪物の正体は結局するに、怪である。いづれとも、当人の意図を確めざる限り、いや、確かめた処で、政界の表裏は、秘密の鍵に握られてゐる今日、しかと見届ける訳にはいくまい。誰か、烏の雌雄を知らんや。

(無腸公子「貴族院の覆面冠者水野直子」、『太陽』第31巻7号、1925.6)

## 4. 副詞「結局」の意味用法

### 4.1 「最終局面提示」の用法

副詞「結局」は、文中でののはたらきによって、その意味用法を二つに分けて考えることができる<sup>6)</sup>。ここでは、そのうち「最終局面提示」の用法について述べることにする。例

[17] と例 [18] では波線部分にある事態が展開され、その事態が最終的に到達した最後の局面が「結局」によって示される。このように、ある事態が最終的に到達する局面を提示する用法を副詞「結局」の「最終局面提示」の用法とする。

- [17] 元來著作者の許諾なくして翻譯を為すと云ふことは、著作者に何等の報酬を与ふることを要しないからして、公衆並に出版者は、大に利益を得るが如く見えるが、實際は決してさうでないのである、翻譯自由の主義を認めるときは、何人も随意に他人の著書を翻譯することが出来るからして、競争が起つて、同一の著書に就て数種の翻譯書が出て、結局出版者は十分利益を受くること能はざるに至る、

(水野鍊太郎「伯林に於ける著作権保護万国會議の状況」、  
『太陽』第15巻6号、1909.5)

- [18] 是れ固より聯合國相互の義務である。併しながら如何に義務なればとて之が為めに無際限の犠牲を払つて疲弊の極に陥り、共倒れとなり、聯合各国とも結局一物も得る所なくして終はる如きは愚の極である。

(浅田江村「講和乎 恒久戦乎」、『太陽』第23巻1号、1917.1)

6) 「結局」の先行研究には森本順子(1994)がある。森本は池谷清美(1986)の「結局」の研究をまとめて紹介している(森本順子(1994)の本文には池谷清美(1986)からの引用と記されているが、末尾の引用参考文献には池谷清美(1983)しかなく、本稿の参考文献でも池谷清美(1983)で示した)。それによると、「結局」の用法は命題を指向する「命題指向」の用法とディスコースを指向する「ディスコース指向」の用法に分けられている。「命題指向」の用法は、ディスコースの終りで何が起こったかを示すが、「ディスコース指向」の用法では、話し手が結論的な発言をすると述べられている。「命題指向」と「ディスコース指向」の用法と本稿で示した「最終局面提示」と「結論的な判断提示」の用法とは、似ている点があるが、森本順子(1994)の「結局」についての記述が簡略で本格的な比較はできない。また、森本順子(1994)では「結局」がSSA(a speaker's subjective attitude)副詞のグループの一つとして取り上げられているが、この点は本稿の立場とは異なる。

ある事態が展開され最終的な局面に至る際、その展開は必然的に時間の流れにしたがって順次的に起ることになる。「結局」の「最終局面提示」の用法の文が、「て(に)終わる」「ことに(と)なる」「に至る」「に帰する」「に帰結する」などの文末表現で終わることが多いのも、これらの文末表現に時間軸による事態の進行の意味が内包されているからであろう。

- [19] 第一児玉氏が経済上大なる矛盾に陥つて居られると私の思ふ点は、貿易の均衡を得る手段として自給自足を唱へらるゝことである。自給自足を実にせんには国内の産業を極度に保護せねばならぬ。その結果は輸出を衰退せしめ結局自給自損に終ることは明白である。

(武藤山治「正金銀行児玉頭取に望む」、『太陽』第31巻3号、1925.3)

- [20] しかしね株と云ふ奴、当れば大きいやうだけれども永い目で見ると中々うまくは行かないもんだ、千載一遇の好材料かなんかのあつた時に一年に一度とか、二年に一度とか、ばかり大山を張つて当つたら当りつばなしにしてみればいゝが、一度手を染めると慢性になつて、たうとう始終やることになる、結局最後の勘定は損になつてしまふものだ。

(白雨楼「財界抜裏物語(一)」、『太陽』第31巻5号、1925.5)

- [21] ピットが此の計畫を立てた始めは、基金として毎年百万磅を一般歳入より繰入れられる計畫であつたが、後には之のみに満足しないで、之を百二十万磅に増加したから、償還基金の非常な巨額に達したと共に、他の一方では国債現在高も、また頗る膨脹するに至り、結局失敗に歸したのである。

(浩東生「当面の財政問題(誤られんとする国債政策)」、『太陽』第23巻2号、1917.2)

「結局」の「最終局面提示」の例には、例 [19] から [21] のように、「最終局面」にいたるまでの事態の展開の様子が時間軸にしたがって示される場合もあるが、次の例 [22] と [23] のように、事態展開の様子が省略され、事態が最終的にいたった最終局面だけが示される場合もある。例 [22] と [23] では、最終局面に至るまでの細かい経緯は省かれ、最後に至った局面だけが提示される。

- [22] 伊太利では此事を痛切に感じて、各地の移民の代表者が集つて、移民会議を開いて、如何にすれば移民をして伊太利本国に対する愛国心を維持せしむるを得べきかといふ問題を講究したことがあつたが、結局学校を設けて教育の力で以てやる、それには伊太利政府から補助をするといふことに決したがね。

(亀山松次郎(談)「名士の伊太利観伊太利の現状」、『太陽』第15巻12号、1909.9)

- [23] 最も注意すべきは酌婦の問題で、彼等は多く親に売られ又は誘惑されて、千葉埼玉茨城方面の銘酒屋料理店等に行くのであるが、何分辛い勤めに耐へ兼ねて諸所を転転して遂に親元に逃げ戻つて来る。併し料理屋等から談判されて、訴へるのどうのと脅されても、もともと金は出来ぬので相談に来る。私の方では、売られたも



のを逃げて来るのだから詐欺のやうであるかも知れぬが、結局再び料理屋へも戻らず、金も出さず済むやう警察や役場を煩はして奔走してやる。

(新田生「本所深川どん底生活記」、『太陽』第31巻11号、1925.9)

「最終局面提示」の用法は、文法的なふるまいは異なるものの、「はて、終り」を表す「結局」の体言の意味が濃厚に残っているといえる。

## 4.2 「結論的な判断提示」の用法

例 [24] と [25] の「結局」は、先に叙述された内容を受け、それによって導き出される話者の判断を結論的に提示する機能をする。このような「結局」の用法を以下では、「結論的な判断提示」の用法と呼ぶことにする。例 [24] の波線部分には、木材の表面に処理をしても、火災による木材の燃焼を防ぐことはできないという内容が述べられ、そのあと下線部分に話者の判断が結論として導き出されている。

[24] 木骨の上に鉄網を張り、その上にコンクリートを塗る方法は軽便耐火策とせられるが、これは火の粉を防ぐに足る程度のもので、猛火に包まれた場合には矢張り抵抗力を失ふのである。要するに木材の外被に何等かの処理を試みてもその外被が烈火の為に毀損され又は高熱が外被を透して木材を襲ふ場合には、到底救はれる望がない。結局木材その物を耐火性にするより外に方法が無いことになる。

(伊東忠太「耐火耐震問題と木造建築の運命」、『太陽』第31巻1号、1925.1)

[25] 米国防戦の目的は、帝王政治を破り民主政治を興隆せしめんとするに存し、独逸の軍国主義、専制政治を根柢より打破するにあらざれば、米国防は決して戈を収めないであらうと思ふ。而して帝政なきホーヘンツォルレン家は零である。されば結局独逸の帝王政治は破滅の外ないであらう。独逸自身に於ても既に憲法改正の議があるのである。独逸の帝王政治が破滅すれば、奥地利匈牙利も是れに次いで同様の運命を免かれな

(記者(文責)；菅原通敬「米国防戦と戦後の変動」、  
『太陽』第23巻2号、1917.2)

「結論的な判断提示」の「結局」の前後する叙述内容は、「最終局面提示」の「結局」とは違って、時間軸による展開とは関係がない。「結論的な判断提示」の「結局」の前には、話者の結論的な判断にいたるまでの経緯、すなわち判断の背景や根拠などが叙述され、最終的な話者の判断はそれに基づいて導きだされる。そのため、「結論的な判断提示」の「結局」は、抽象的な思考内容の叙述に向いており、特に雑誌『太陽』のような論説調の記事では、例 [26] と例 [27] の波線部分のような当為性を表す文末表現を伴い、話者の主張しようとするものが「結論的な判断提示」の「結局」によって結論的に述べられることが多い。

[26] 併し又、清国政府は何処までも法庫門鐵道を更らに北方に延長したいと思つて居るに違ひない。若し延長しない積りならば、何故、去年の二月、日本から提出した第二の選択案を承認しなかつたか、其理由が分らぬ。之を承認しなかつたと云ふことは、法庫門までの延長線は唯だ準備に過ぎないので、其目的は結局齊々吟爾まで延長したいと云ふ意味を含んで居なければならぬ。

(著者未詳「外人の日本観」、『太陽』第15卷11号、1909.8)

[27] 以上各項に亘り余は、鉄材の種類、製鉄の原料、世界の産額量、日本の製鉄等の問題に就いて其の大略を話したが、結局日本製鉄事業は、成る可く急速に発達せしむる必要ありとして、其の原料即ち鉄鉱と石炭との供給を如何にして豊富ならしむるか差向き大に研究す可き問題である。

(齋藤大吉「鉄」、『太陽』第23卷12号、1917.10)

「最終局面提示」の「結局」が時間軸による事態の展開が最終的にいたった最後の局面を表すとすれば、「結論的な判断提示」の「結局」は叙述の論理の流れが最終的にいたった帰着点を表すものといえる。要するに、「はて、終わり」を表す「結局」の体言の意味は、「結論的な判断提示」の「結局」では論理の流れが最後に落ち着く「はて、終わり」の意味へと変化したものとみることができる。

副詞「結局」の「最終局面提示」と「結論的な判断提示」の意味用法が、「結局」の体言の意味から変化したことを指摘したが、当然「最終局面提示」と「結論的な判断提示」の意味用法もお互い関連性があることが予想される。

[28] よし教科書と違つて居ても、教師に何か信念があるならば、それが必ず或機会で露れ出るに相違ないが、それもないから、結局修身教授は極めて平板なものとなるより外に道はない。(兆水漁史「教育時言」、『太陽』第23卷12号、1917.10)

[29] 真面目な人は誰しも第一に感じたことであらうが、議案の研究はもつと慎重にやらねばならぬ。これは何等か完全な方法を立て、平生より夫れ〜研究して置くことにしたい。今のところでは政党に立派な研究がないから、結局政府案が一番よいといふことになるやうだ。

(気賀勘重「有害無益の戦争」、『太陽』第23卷10号、1917.9)

例 [28] と [29] では、波線部分の原因・理由の条件のもとで最終的に行き着く結果の状態が叙述されている。上記の例は、時間軸による事態の展開はみられないが、最終的に行き着く結果が示されている点では、「最終局面提示」の意味用法に似ている。一方、ある原因・理由とそれによって行き着く結果の状態という論理の流れが叙述されていること、最終的に行き着いた結果の状態が話者の判断としても受け取られる点では「結論的な判断提示」の意味用法にも近い。上記の例は、「最終局面提示」と「結論的な判断提示」の中間的な性格のものといえる。副詞「結局」の二つの意味用法は、本来の体言の「結局」の意味と関連性があり、両者の間の中間的な性格の例も存在することをことわっておく。

## 5. まとめ

本稿では、明治の言文一致期以降明治末期までの国語辞書類及び小説、教科書、啓蒙書、小新聞、雑誌『太陽』の調査を通じて、当時における漢語副詞「結局」の使用状況及び「結局」が使われる文の文体的特徴を概観した。そして、『太陽コーパス』の調査を通じて、1895年から1925年の間、副詞「結局」の使用頻度が高くなり、「結局」の副詞用法が定着していく傾向がみられることを確認した。さらに、漢語副詞「結局」の意味用法を「最終局面提示」と「結論的な判断提示」の二つに分け、それぞれの意味用法の特徴について考察した。今後、副詞「結局」と意味用法が似ている和語副詞「とうとう」「つまり」との関係について考察していきたい。

### 《言文一致期以降明治末期までの資料の作品目録》

- 【小説】伊藤左千夫『野菊の墓』（1906）、尾崎紅葉『金色夜叉』前編、中編、後編（1897-1900、会話文だけを対象）、国木田独步『武蔵野』のうち『河霧』『鹿狩』『まぼろし』『武蔵野』『忘れぬ人々』の5作品（1901）、谷崎潤一郎『刺青』のうち『麒麟』『刺青』『少年』『秘密』『幫間』の5作品（1910）、夏目漱石『坊つちやん』（1906）、夏目漱石『吾輩は猫である』上編（1905）、二葉亭四迷『浮雲』第一編（1887）、第二編（1888）、第三編（1889）、山田美妙『夏木立』のうち『籠の俘囚』『玉屋の塵』『花の茨、茨の花』『柿山伏』『仇を恩』『武蔵野』の全作品（1888）、若松賤子訳『小公子』（1890-91）\* 以上の内、『浮雲』第三篇は早稲田大学図書館所蔵のマイクロフィッシュを使用し、ほかは近代文学館の復刻版を使用。
- 【教科書】文部省『尋常小学読本（イエスシ読本）』第一期（1904年より使用）  
文部省『尋常小学読本（ハタタコ読本）』第二期（1910年より使用）  
国立国語研究所国語辞典編集資料『国定読本用語総覧』1-3（1985、1987、1988）による。
- 【啓蒙書】加藤弘蔵『交易問答』（1869）早稲田大学中央図書館蔵、加藤弘之『真政大意』（1870）早稲田大学中央図書館蔵、福沢諭吉『学問ノス、メ』（1872-76）、進藤咲子編『学問ノス、メ本文と索引』（1992、笠間書院）による。福沢諭吉『訓蒙窮理図解』（1868）『福沢全集第二巻』（1926、時事新報社）による。
- 【小新聞】『読売新聞〔東京〕』（1874年11月から1875年7月までの分）  
国立国会図書館所蔵のマイクロフィルムを使用。欠落した日付や読み取り不可能な日付の分は除く。
- 【雑誌『太陽』】国立国語研究所編『太陽コーパス—雑誌『太陽』日本語データベース』（博文館新社、2005）のうち、1901年度1号から12号の記事のうち、小説を除いた口語体の記事

## 【参考文献】

### 《辞書類》

- 『和英語林集成初版』(1867), J.C.ヘボン  
『和英語林集成再販』(1872), J.C.ヘボン  
『和英語林集成第三版』(1886), J.C.ヘボン  
『漢英対照いろは辞典』(1888), 高橋五郎  
『日本辞書言海』(1889~1891), 大槻文彦  
『日本大辞書』(1892~1893), 山田美妙

### 《単行本・論文類》

- 池谷清美(1983)「やはり、なるほど、あいかわらぬの意味」『Sophia Linguistica』11, pp.156-164  
上野隆生(2007)「雑誌『太陽』の一側面について」, 和光大学総合文化研究所年報『東西南北』2007, p.252  
国立国語研究所編(2005a)『雑誌『太陽』による確立期現代語の研究—『太陽コーパス』研究論文集—』, 博文館新社, p.28  
国立国語研究所編(2005b)『『太陽コーパス』雑誌『太陽』日本語データベース CD-ROM用解説書』, 博文館新社, p.5  
野村雅昭(1998)「現代漢語の品詞性」, 『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』, 汲古書院, pp.136-137  
森元順子(1994)『話し手の主観を表す副詞について』, くろしお出版, pp.135-137  
山田孝雄(1936)『国語の中に於ける漢語の研究』, 宝文館, pp.205-276  
渡辺 実編(1983)『副用語の研究』, 明治書院, pp.1-69

## 要 旨

本稿は、現代日本語において使用頻度の高い漢語副詞「結局」の副詞用法の定着及び意味用法について考察した。明治期の国語辞書類の調査では、明治20年前後には主に体言として使われていたことが確認できるが、副詞用法はそれほど定着していなかったとみられる。言文一致期以降明治末期までの作品の調査を通じて、副詞「結局」は意味が似ている和語副詞「とうとう」ほど頻繁に使われていなかったことと主に論説調の硬い文体に使われる傾向が確認された。

『太陽コーパス』を使って年次を追って調査した結果、1895年以降1925年の間、「結局」の副詞以外の品詞の使用例は減少し、副詞としての使用例は増加する傾向がみられた。

副詞「結局」の意味用法は、文中でのはたらきによって二つに分けて考えることができる。ある事態が最終的に帰着する局面を提示する「最終局面提示」の用法と、先に叙述された内容を受け、それによって導き出される話者の判断を結論的に提示する「結論的な判断提示」の用法である。「最終局面提示」の用法の「結局」の前後の事態は時間的に前後する関係にある。一方の「結論的な判断提示」の用法の「結局」の前後の叙述内容は論理の流れの前後関係にある。両方の「結局」の意味用法は、ともに「結局」の体言の意味である「はて、終り」の意味と通じるところがあるといえる。

キーワード：漢語、副詞、雑誌『太陽』、「とうとう」、「最終局面提示」、  
「結論的な判断提示」

투 고 : 2011. 8. 31  
1차 심사 : 2011. 9. 10  
2차 심사 : 2011. 10. 1



# 振動器と身体リズム運動による発音指導

－特殊音素の促音を中心に－

姜蓮華\*

(e-mail: Juksu1809@hotmail.com)

---

## 目次

---

1. はじめに	5. 結果
2. 研究目的	6. 考察
3. 先行研究	7. 結論
4. 実験	8. 今後の課題

---

## 1. はじめに

日本語は韓国語と文法構造が似ており、韓国人にとってほかの外国語に比べて習得しやすい言語だと言われている。一方、韓国人日本語学習者(non-native speaker、以下NNSと略記)が、日本語の知覚と生成に困難を感じることもよく知られている。<sup>1)</sup>

韓国の日本語教育では、日本語の学習初期段階で韓国語と日本語の文法の類似性に重点を置いているため、体系的な音声指導を受けていない学習者の<sup>2)</sup>数は多く、上級レベルに至ってからも困難を感じる学習者が多い。しかし、円滑なコミュニケーションが成り立つために音声は重要な役割を果たしており、微妙な発音の違いでコミュニケーションが取れなくなってしまい、相手の誤解を招く危険性がある。

韓国人日本語学習者の日本語の発音に現れる問題点は、以前から数多く指摘されてきた。特に、特殊音素の「促音」の知覚と生成に現れる問題点と誤用の傾向に関する研

---

\* 大田大学校 時間講師、言語教育学

1) 清音と濁音の弁別、特殊拍(促音、長音、撥音)、アクセント、イントネーションなど。

2) 予備調査として日本(東京)滞在中の留学生(日本語学校生、大学生、大学院生)200人を対象に発音に関するアンケートをとった結果、200人中177人は発音指導を受けたことがないと答えた。

究は多く、福井(1978)、関(1993、2000、2000d)、戸田(2003、2007)らの報告がある。しかし、実際に現場で活用できる指導法に関する研究は少ない。

本研究は、この問題状況を基点として、特殊拍の促音における誤りの傾向及び発音矯正のための音声指導法に注目し、考察を行う。

まず、第一段階として韓国ではあまり知られていないが、言調聴覚論(Verbo-Tonal System: 以下VTS)<sup>3)</sup>に基づいた音声指導法である、ヴェルボトナル法(Verbo-Tonal Method: 以下VT法)<sup>4)</sup>を用いて指導と練習を行い、効果を明らかにする。

次の段階として金・尾崎(1999)『韓国人のための発音クリニック』では韓国人学習者が困難とする発音を項目別に分けて指導法を提示しているが、促音の指導法を用いて実験を行い、最終的には両指導法の効果を比較検証する。この結果により、日本語教育現場で活用しうるさらに効果的な指導法を探り出すことを目的とする。

## 2. 先行研究

### 2.1 促音

日本語の促音に関して鹿島(2002)は、促音は後続子音によって五つの異なった音価[p, t, k, s, ʃ]として実現されるが、音声的には子音の後続部に相当するものであると述べている

李(1996)は、初級の韓国人日本語学習者を対象にした調査の結果、促音語に誤りが多く、その理由は促音の一拍分の長さを持続しないからであると報告している。

関(2000)では、韓国人学習者の促音挿入の誤りは、先行母音が狭母音の場合、語中の無声破裂音に頻繁に起こり、韓国人学習者は、日本語の語中無声破裂音の有声化を避けるため、語中の無声破裂を強く発音することに原因があると指摘している。

関(2000 d)では、朗読資料を用いて実験を行った結果、先行母音が前舌狭母音の場合、全体の72%を示し、先行子音が[e]、後続子音が無声歯茎破裂音/t/である場合に促音の挿入が多いと報告している。

姜(2005)では、初級と上級の韓国人日本語学習者を対象に調査を行った結果、初級・上級共に促音脱落の誤りより促音挿入の誤りが多く、初級と上級の学習レベルによる

3) 言調聴覚論(Verbo-Tonal System)は人間の脳が音声言語をどのように聴き取り、生成するのか、聴覚の機能とその原理、またそこに存在する法則性は何か、などについて述べた言語理論で、1950年代にザグレブの大学より提唱された。小坪博子外(2002)『VTS入門』p17。

4) ヴェルボトナル法(Verbo-Tonal Method)は、言調聴覚論の応用分野で、VT法、ヴェルボ・メソッドとも呼ばれる。クロアチアのベタル・グベリナによって研究開発された聴覚・言語障害者及び外国語学習者の発音指導・矯正・そして補聴器のフィッティングなどに応用される。小坪博子外(2002)『VTS入門』p17。



差は大きいと述べている。

酒井(2006)は、上級の韓国人日本語学習者15名を対象に調査を行った結果、促音の脱落の誤りが9%で、促音挿入の誤りが38%であり、後続子音が[p][t][k]の場合、多く見られたと報告している。

以上のように、先行母音と後続子音、特に持続時間の長さが促音の知覚と生成に大きな影響を与えることが分かる。それゆえ、本研究はNNSにおける発音指導前後の後続子音別の持続時間の変化に重点をおいて考察を行う。

## 2.2 VT法

VTSは二つの応用分野があり、一つは聴覚言語障害者と外国語学習者の発音指導・矯正に応用するVT法と外国語教授法に応用する全体構造視聴覚教授法(Structuro-Global Audio-Visual Methodology : SGAV)に分けられる。

本調査で用いるVT法に関して木村(2001)は、音声は身体の筋肉の緊張と弛緩に密接に関係しており、その点でVT法が効果的だと述べている。

小坪(2002)によると、身体リズム運動は、音声的特徴と身体の動きの要素を関連づけて作り出され、音声リズムや発音を習得するための重要な指導法であると述べている。

振動器による指導に関して町田外(1994)では、音声言語の基礎はリズムやイントネーションであり、主に低周波数帯が伝え、低周波数帯域の周波数は低くなるに従って振動と共存する度合いが強くなるという。振動感覚を利用して指導することにより、リズムやイントネーション、音声言語の弁別能力を向上させることができると述べている。

木村(2000)によると、無声音と有声音の弁別に困難を感じている韓国語母語話者と中国語母語話者を対象にして振動器を用いた実験を行った結果、振動感覚による無声音と有声音の弁別度は非常に高いと報告している。

VT法による音声指導には上で述べた身体リズム運動と振動器の他にわらべうたリズム<sup>5)</sup>、スヴァグ機器<sup>6)</sup>による聴取指導などがあるが、先行研究から分かるように身体全体(広義の発音器官)をコントロールすることで発音器官(狭義の発音器官)をコントロールする、つまり、学習者の意識をコントロールしづらい調音器官ではなく、コントロールしやすい身体を動きに向けさせる身体リズム運動を用いる。

また、音声を機械的に振動に変換する振動器は促音の特徴を学習者が感じ取りやすく、促音の発音指導に効果的だと思われる。実際に促音は無音区間であり、学習者は無音区間がある促音と無音区間がない非促音の区別を振動感覚によってより明確に判断でき

5) わらべうたリズムは外国語教育と聴覚障害者の発音矯正のために用いられる言調聴覚論独自の手段で、音楽的刺激と呼ばれている。わらべうたリズムは話しことばのリズムとイントネーションなどの知覚と生成に役立っているもので、伝承わらべうたと創作わらべうたがある。

6) VTSの原理に基づいて製作された音声聴取訓練機器。

ると考え、本実験で用いることにした。

最後にVT法は緊張<sup>7)</sup>という概念が重要な鍵となるが、クロード・ロベルジュ(1982)では、調音に必要な口の開きの程度によって各音素の緊張性がきまり、緊張性は、破裂音・破擦音・摩擦音の順であると述べている。また、木村(2001)は、VT法による発音指導の際には、調音運動に関与する調音器官と身体の筋肉の緊張や弛緩が重要であり、それゆえ、緊張過多、緊張不足など不適切な緊張は、言葉の習得上大きな障害になると指摘している。

以上のような先行研究を踏まえ、本研究ではVT法を利用した指導と練習を行った場合、促音の生成においてどのような効果が現れるかを検証する。

### 3. 実験

#### 3.1 実験の概要

実験は2009年9月から10月にわたって、来日している韓国人NNS20人を調査協力者とし、2種類のテスト(発音テスト1、発音テスト2)を行った。

まず、促音を含む・含まないで共に有意味語・または無意味語となる日本語の単語30対(60単語)を選び、表1の順で「発音テスト」の原稿を作成する。さらに発音テスト1と発音テスト2の順で、韓国人初級学習者(Korean Low-Level Learner、以下KLLと略記)10人、韓国人中級学習者(Korean Middle-Level Learner、以下KMLと略記)10人に2つの実験を行った。

#### 3.2 仮説

同じくNNSと言っても初級者と上級者とは外国語である日本語-ここでは促音-に関して、その生成に際して誤用の傾向は異なるし、音声指導による効果も相違すると推測される。そこで次の仮説を設定した。

##### 【仮説1】 促音の生成

NNSの場合、促音・非促音の生成の際、NSの持続時間と相違するし、学習暦によってその傾向もちがうのではないか。

7) 緊張(Tension)は、ユギ・ゴスポドネッチ(Jugi Gospodentic)により提案された概念で、調音活動に伴う調音器官の筋肉の緊張、即ち主筋肉と拮抗筋との合成運動により作り出される音声的緊張を意味する。またそれは、健全な話者のサーボ・メカニズム(運動感覚、聴覚、触覚、自己受容性)を媒介に相互反応し合う条件反射の一要因として定義付けられている。

小坏博子外(2002)『VTS入門』p27.

【仮説2】 指導法の効果

VT法を用いた指導と練習により促音の持続時間を正しく持つことができるのではないか。

【仮説3】 緊張度と持続時間

子音環境による緊張度と持続時間は相関関係があるのではないのか。

### 3.3 調査協力者

来日中の韓国人NNS<sup>8)</sup>、初級(KLL)20名、中級(KML)20名。初級はいずれも日本語学校生で、日本語学習暦2～9ヶ月(平均6ヶ月)中級は日本語学校生と専門学校の学生(日本語学習暦1年3ヶ月～2年6ヶ月；平均1年8ヶ月)、日本語母語話者(NS)10名(東京出身)である。

### 3.4 方法

#### 3.4.1 音声資料(テスト材料)の作成

アクセント型が、平板型・頭高型で後続子音が破裂音の/p//t//k/、破摩音の/ts//tʃ/、摩擦音/s/となる促音語と非促音語(意味語と無意味語)のミニマル・ペア30対を選び、60単語をランダムに並べて発音テストの原稿を作成する。

【表1】 促音の知覚と生成を調べるテストの使用単語

1	かって	16	せき	31	せち	46	いて
2	りか	17	こっち	32	すっぱい	47	ひし
3	さっち	18	むつり	33	かて	48	かこ
4	いつう	19	こっし	34	しち	49	てっぴ
5	てび	20	いけん	35	いっつう	50	せっき
6	かっこ	21	しっち	36	しと	51	おと
7	せつつく	22	そば	37	いっけん	52	りっち
8	ふし	23	しと	38	さち	53	せつく
9	かっぱ	24	いそ	39	こっつ	54	すばい
10	りち	25	かぼ	40	さし	55	こき
11	さっし	26	こち	41	そっぱ	56	せっち
12	いび	27	さっつ	42	りっか	57	ぶっし
13	せっと	28	ひし	43	むっつり	58	おっと
14	こつ	29	せと	44	さつ	59	こし
15	いっそ	30	こっき	45	てっぴ	60	いって

8) レベル分けは日本語能力試験認定基準により、初級(日本語能力試験4級：日本語を150時間程度学習、日本語能力試験3級：日本語を300時間程度学習)と中級(日本語能力試験2級：日本語を600時間程度学習)にした。

### 3.4.2 テストの実施方法

- 1) 発音テスト 1 : KLLと10人とKML10人に何の情報も与えずに音声資料を配布して一回ずつ読んでもらい録音した。
- 2) 発音テスト2 : VT法(振動器と身体リズム運動)を用いた指導と練習(20分)を行った後、発音テスト1と同じく、音声資料を配布して一回ずつ読んでもらい、録音した。
- 3) 最後に、Native Speaker NSとNon-Native Speaker NNSにおける促音の持続時間の相違を比較するために東京出身のNS10人に同じ発音テストの原稿を配布して録音してもらった。録音は(SONY-TCM)テープレコーダと単一方向性マイク(SONY ECM-MS907)を使用した。

### 3.4.3 指導内容

発音テスト 2 は、振動器と身体リズム運動を利用したVT法による指導と練習を行った場合、どのような効果がみられるかを検証するために行った。

指導と練習は、『VTS入門』(グベリナ記念ヴェルボトナル普及協会、2002)に従ってVT法を用いて行う。まず、振動器を利用して促音語と非促音語の相違点を感じさせてから、VT法の「促音の身振り」と「非促音の身振り」の図を見せて指導と練習を各10分行った後、発音テスト 2 を(発音テスト 1 と同じ内容で順番が異なる)を初級と中級各10人に配布して1回ずつ発音してもらい、録音する。指導内容の詳細は次の通りである。

#### 《振動器と身体リズム運動を利用した指導と練習》

#### ①【振動器<sup>9)</sup>を利用した指導】

- ・まず、振動器の上に学習者の手をのせ、促音語と非促音語の違いを感じさせた。
- ・最初は筆者が促音語と非促音語を読んで練習させ、次、学習者自身が原稿を読みながら練習した。(10分)



< 図1 > 振動器

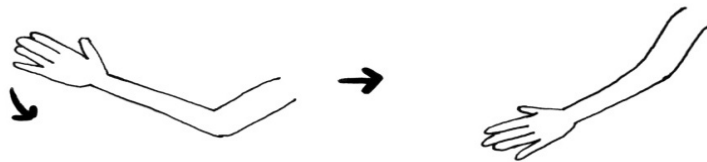
9) 振動器は、音声は振動としても知覚されるという考え方に基づいて、音声を機械的な振動に変換し、聴取、生成できるように考案されたものが振動子(オシレータ)及び振動器である。通常は手に持って振動を感じ取り、それをフィードバックさせ音声訓練に役立つ。振動器にはクッションタイプのものがあり、ハンディクッションと椅子用クッション、アンプで構成されている。アンプにはフィルタが内蔵されていて、指導内容に応じてダイレクト音とローパスフィルタ音と切り替えることができる。小 坏博子外(2002)『VTS入門』pp 36~37.

②【身体リズム運動<sup>10)</sup>を利用した指導】

「促音の身振り」と「非促音の身振り」の図を見せて発音しながら説明と練習(10分)を行った。



<図2> 促音の身振り



<図3> 非促音の身振り

次に順序を挙げる。「 」は実際に指示した表現である。

1. 資料を配布する。
2. 「次の絵をよく見てください。」
3. 「手を使って促音の練習をしましょう。促音のところで何かをつかむように手をすばやくすばめる動作をしながら練習しましょう。」
4. 「非促音語の場合、手を縦にして上から下に軽く下ろしながら発音してください。」
5. 「私が一回読んでみますので、よく見ながら聞いてください。」
6. 筆者が促音語と非促音語の原稿を身体リズム運動を見せながら一回読む。
7. 学習者に練習させる。(10分)
8. 促音語と非促音語の原稿を見せて練習させる。(10分)

### 3.4.4 分析方法

発音テストデータの分析は、NSとNNSの発音資料を音声ソフトSUGI Speech Analyzer にかき、持続時間を測った。

持続時間は、学習者によって発話の速度が違うため長さの絶対値では比較出来ないの

<sup>10)</sup> 身体リズム運動(Body Movements)は、言語の生理的発生に基づいて組織されたものである。音声言語を正しく聴き取り、構音できるように、音声的特徴と身体の動きの要素を関連づけて創り出されたこの運動は、音声リズムや発音を習得するための重要な指導法である。  
小坏博子外(2002)『VTS入門』p67.

で、単語の全体持続時間における無音区間の持続時間の割合で示した。

日本語母語話者(NNS)との比較によって指導前後の効果を検証するため、有意性検定は独立標本 t 検定を用いた。

## 4. 結果

### 4.1 発音テスト 1

【表2】 発話者と後続子音別にみた持続時間の割合 (単位：%)

後続子音	[p]	[t]	[k]	[ts]	[tɕ]	[s]
NS	47	46	45	41	39	46
初級	45	43	42	35	43	38
中級	43	44	43	35	42	38

【表2】は、初級KLLと中級KMLの子音環境別における持続時間の割合を示したものである。子音環境別のNSの持続時間の割合は、[p]47%、[t]46%、[s]46%、[k]45%、[ts]41%、[tɕ]39%で、後続子音が破裂音[p]の場合に一番長く、破擦音[tɕ]の場合が一番短かった。

初級では[p]45%、[t]43%、[tɕ]43%、[k]42%、[s]38%、[ts]35%で、後続子音が破裂音[p]の場合に一番長く、破擦音[ts]の場合、一番短かった。

初級の場合、後続子音環境[tɕ]の場合はNSより長く、その他の後続子音[p][t][k][ts][s]における持続時間の割合はNSより短いのが分かる。

中級では、[t]44%、[p]43%、[k]43%、[tɕ]42%、[s]38%、[ts]35%となり、後続子音が破裂音[t]の場合に一番長く、破擦音[ts] の場合が一番短かった。

中級の場合、後続子音[ts]のとき、持続時間割合はNSより長く、後続子音が[p][t][k][tɕ][s]のとき持続時間割合はNSより短いことが分かった。

### 4.2 発音テスト 2

【表3】 発話者と後続子音別にみた持続時間の割合 (単位：%)

子音環境	[p]	[t]	[k]	[ts]	[tɕ]	[s]
NS	47	46	45	41	39	46
初級	47	46	45	40	38	44
中級	46	46	46	41	39	41

【表3】は、発音テスト2の初級KLLと中級KMLの子音環境別にみた持続時間の割合（以下持続時間と略記）を示したものである。

後続子音別にみたNSの持続時間は、[p]47%、[t]46%、[s]46%、[k]45%、[ts]41%、[tɕ]39%で、後続子音が破裂音[p]の場合一番長く、破擦音[tɕ]の場合、一番短かった。

初級では[p]47%、[t]46%、[k]45%、[s]44%、[ts]40%、[tɕ]38%であり、後続子音が破裂音[p]の場合一番長く、破擦音[tɕ]の場合、一番短かった。

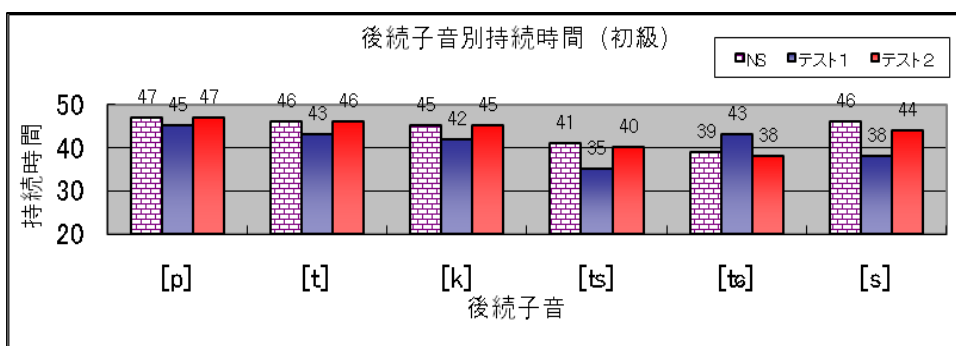
初級では、後続子音が[p][t][k]のとき持続時間はNSと同じであり、後続子音が[ts][tɕ][s]のときで持続時間はNSより短いことが分かった。

中級では[p]46%、[t]46%、[k]46%、[ts]41%、[s]41%、[tɕ]39%となり、後続子音が破裂音[p]の場合一番長く、破擦音[tɕ]の場合、一番短かった。

中級の場合、後続子音が[t][ts][tɕ]のとき、持続時間の割合がNSと同じであり、後続子音が[k]の場合は長い、後続子音[p][s]における持続時間の割合はNSより短いことが分かった。

### 4.3 指導前後（発音テスト1と2）の比較

振動器と身体リズム運動を利用するVT法を利用して指導と練習を行った初級学習者（KLL）と中級学習者（KML）の発音テスト1と発音テスト2を日本語母語話者（NS）と比較した結果を以下に述べる。



＜図4＞ 初級学習者の発音テスト1と2の後続子音別持続時間

＜図4＞は初級学習者（KLL）の発音テスト1と2における後続子音別の持続時間割合を比較したものである。

初級は後続子音が[p]の場合、NSの平均持続時間47%に対し、発音テスト1の45%→発音テスト2の47%（NSとの差2%→0%）、後続子音[t]の場合、NSの46%に対して43%→46%（3→0）、後続子音[k]の場合、NSの45%に対して42%→45%（3→0）、後続子音[ts]の場合、NSの41%に対して35%→40%（6→1）、後続子音[tɕ]の場合、NS39%

に対して43%→38%(4→1)、後続子音[s]の場合、NSの46%に対して38%→44%(6→2)であった。

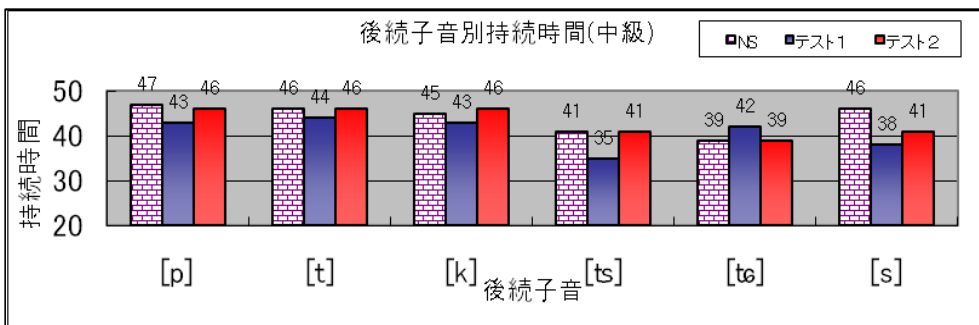
初級の場合、指導前は平均持続時間のバラつきは大きかったが、指導後は、後続子音[p][t][ts][tɕ][s]の全てにおいて平均持続時間がNSに近づいていることが分かった。

【表3】 NSと NNS初級学習者の発音テスト1と2の統計的有意性検定結果 (p\* $<$ 0.05)

発音	テスト 1		テスト 2	
	t値	p値	t値	p値
[p]	0.762	0.459	0.047	0.963
[t]	0.949	0.360	0.074	0.942
[k]	2.232	0.360	0.251	0.806
[ts]	1.208	0.249	0.265	0.795
[tɕ]	1.363	0.196	0.389	0.704
[s]	2.745	0.017*	0.499	0.626

【表3】は、初級学習者の指導前後の結果を日本語母語話者(NS)と比較した統計的有意性の検定結果である。指導前は、後続子音環境[[s]がNSの発音と統計的に有意差があり(p\* $<$ 0.05)、他の子音環境ではNSとの有意差はなかった(p\* $>$ 0.05)。

一方、指導後には全ての子音環境でNSとの有意差はなく(p\* $>$ 0.05)、指導前の有意差がなかった子音環境[p][t][ts][tɕ]の結果もp値が大きくなったことから効果が確認出来た。したがって初級学習者の場合、指導と練習の効果があったと言えるだろう。



<図5> 中級学習者の発音テスト1と2の後続子音別持続時間

<図5>にみるように、中級学習者(KML)は後続子音[p]の場合、NSの平均持続時間47%に対し、発音テスト1の43%→発音テスト2の46%で (NSとの差4%→1%)、後続子音[t]の場合、NSの46%に対して44%→46%(2%→0%)、後続子音[k]の場合、NSの45%に対して43%→46%(2%→1%)、後続子音[ts]の場合、NSの41%に対して35%→



41%(6%→0%)、後続子音[**tc**]の場合、NS39%に対して42%→39%(3%→0%)、後続子音[s]の場合、NS46%に対して38%→41%(8%→5%)であった。

中級の場合、指導と練習を行った後、後続子音[p][t][k][ts][**tc**][s]の全てにおいて平均持続時間がNSの平均持続時間に近づいたことが分かった。

【表4】 NSと NNS中級学習者の発音テスト1と2の統計的有意性検定結果 (p<0.05)

発音	テスト 1		テスト 2	
	t値	p値	t値	p値
[p]	2.952	0.011*	0.893	0.388
[t]	0.790	0.444	0.167	0.870
[k]	0.564	0.582	0.491	0.632
[ts]	2.240	0.043*	0.183	0.857
[ <b>tc</b> ]	0.781	0.449	0.055	0.957
[s]	1.975	0.070	1.213	0.247

【表4】は、中級学習者の指導前後の結果を日本語母語話者(NS)と比較した統計的有意性検定の結果である。指導前は、後続子音環境[p]と[ts]がNSの発音と統計的に有意差があり(p<0.05)、他の子音環境ではNSとの有意差はなかった(p>0.05)。

指導後には全ての子音環境でNSとの有意差はなく(p>0.05)、指導前の有意差がなかった子音環境[t][k][**tc**][s]の結果もp値が大きくなったことからNSの持続時間に近接したことが確認できた。したがって、中級学習者の場合も初級と同じく、指導と練習の効果が検証された。

## 5. 考察

### 5.1 発音テスト1

発音テスト1は、日本語の音韻体系に対して体系的な学習経験のない学習者が、促音語と非促音語を生成する際の音声的特徴と誤りの傾向を調べるために行ったものである。

後続子音別にみたNSの持続時間は、[p]47%、[t]46%、[s]46%、[k]45%、[ts]41%、[**tc**]39%であって、後続子音が破裂音[p]の場合に長く、破擦音[**tc**]の場合、一番短かった。

初級では後続子音が破裂音[p]45%、[k]45%のとき長く、破擦音[ts]35%では短かった。他の子音はNSより短いことが分かった。また、NSとの持続時間の差が大きかった子音環境は[ts]と[s](6%)であった。

中級の場合、後続子音[t]で長く、[ts]で短かった。後続子音が[**tc**]のときはNSの持続

時間より長く、他の子音環境においてはNSより短かった。NSとの持続時間の差が大きかったのは初級と同じく、後続子音[tʃ]と[s](6%)の場合であった。

以上のように、NSの場合、子音環境[s]以外は緊張度が高い音は持続時間が長く・緊張度が低い音は持続時間が短いのにに対してNNSの場合は持続時間と緊張度との相関関係は表われなかった。

## 5.2 発音テスト2

発音テスト2は、VT法による振動器と身体リズム運動を用いて指導と練習を行った後、どのような効果が現れるかを調べるために行ったものである。

子音環境別にみたNSの持続時間は、[p]47%、[t]46%、[s]46%、[k]45%、[tʃ]41%、[tʃ]39%で後続子音が破裂音[p]のときに長く、破擦音[tʃ]のとき一番短かった。

初級では後続子音が破裂音[p][t][k]のときNSと同じく、[tʃ][tʃ][s]の場合短かった。

発音テスト1においてNSとの持続時間の差が大きかったのは子音環境[tʃ]と[s]の場合であり、[tʃ]は6%から1%、[s]は6%から2%へと、NSの持続時間に近づいた。その他の子音環境においてNSの持続時間に近づいていることが分かった。

中級の場合、発音テスト1でNSとの持続時間の差が大きかった子音環境は[tʃ]の場合、6%から0%へとNSの持続時間と同じになった。その他の子音環境においてもNSの持続時間に近づいている。また、初級の場合、NSと同じく、後続子音別において緊張度が高い音は持続時間が長く、緊張度が低い音は持続時間が短くなり、持続時間と緊張度との相関関係が確認できた。

以上、指導と練習を行った後のNNSの持続時間はNSの持続時間より短い傾向は残っているものの、指導前よりNSの持続時間に近づいていることが確認できた。

## 5.3 指導法の効果

VT法による指導法の効果を明らかにするため、発音テスト1と2の結果を比較して以下のことが分かった。

初級・中級共に、指導の前の発音テスト1では、NNSの持続時間がNSの持続時間より短い傾向が強く見られたが、指導と練習を行った後、子音環境によって多少の違いはあるが、NSとの持続時間に近接していること、t検定による有意性検証の結果からVT法による指導と練習が効果的であることは明らかであろう。

## 6. 結論

本研究は、特殊拍の中でも誤りが多発する日本語の特殊音素の促音の生成に見られる誤用の特徴と傾向を明らかにすると共に指導法の効果を検証することを目的として、VT法を利用した指導と練習を行い、以下のことが明らかとなった。

## 6.1 促音の生成

発音テスト1では仮説1の検証をめざした結果、次のことが分かった。

### 【仮説1】 促音の生成

促音・非促音の生成において、初級学習者(KLL)と中級学習者(KML)のレベルの差により持続時間の長さは相違するし、韓国入学者(NNS)の促音の持続時間は日本語母語話者(NS)より短く後続子音別によってその差は違うのではないかと考えられる。

発音テスト1における後続子音別のNSの持続時間は、[p]47、[t]46、[s]46、[k]45、[ʈ]41、[t͡ɕ]39であり、後続子音が破裂音[p]の場合、一番長く、破裂音[t͡ɕ]の場合に短かった。NSの場合、後続子音が[s]以外はC.ロベルジュ(1982)で提示している各音素の緊張度の順に比例して持続時間も長いことから相関関係が認められた。

初級では、[p]45、[t]43、[t͡ɕ]43、[k]42、[s]38、[ʈ]35で、後続子音が破裂音[p]の場合一番長く、破裂音[ʈ]の場合に短かった。

初級の場合、[t͡ɕ]のときNSより長く、その他の後続子音[p][t][k][ʈ][s]における持続時間割はNSより短いのが分かった。

中級では、[t]44、[p]43、[k]43、[t͡ɕ]42、[s]38、[ʈ]35であり、後続子音が破裂音[t]の場合に長く、破裂音[ʈ]の場合に短かった。

中級の場合、後続子音[ʈ]のとき持続時間がNSより長く、後続子音 [p][t][k][t͡ɕ][s]における持続時間はNSより短いのが分かった。

初級では、後続子音別による持続時間の差があり、[ʈ]以外は後続子音が緊張度の高い破裂音の場合に持続時間が長く、破裂音、摩擦音の順で持続時間が短いのが分かった。

中級の場合も、初級と同じく、[ʈ]以外は後続子音が緊張度の高い破裂音の場合に持続時間が長く、破裂音、摩擦音で持続時間が短いのが分かった。また、初級・中級共に後続子音別の全体においてNSより持続時間が短い傾向が強かった。

このように同じ言語の背景を持っていてもレベルによって生成する方が多少違う(子音環境別の持続時間の長短)のは学習者が持っている知識、母語干渉、中間言語的な要因が働いているからであろう。

Major(1987)<sup>11)</sup>が発達過程の初級段階では母語の干渉が優勢で、徐々に少なくなっていくと説明しているが、これを裏付けるものと考えられる。

11) Major(1987)は、学習者の中間言語の発達過程を、母語干渉と発達上のプロセス (developmental processes) からの影響力の変化から説明している。このモデルによると習得の初期段階では母語転移が優勢するが、時間が経つにつれて発達プロセスが優勢になると述べている。Major(1987 : 103)

## 6.2 指導法の効果

発音テスト 2 では、仮説 2 の検証をめざした。

### 【仮説2】 VT法の効果

VT法を用いた指導と練習により促音の持続時間を正しく持つことができるのではないか。

すなわち、振動器と身体リズム運動による指導は、初級・中級両方とも促音の生成に効果はあるが、その効果に相違点が現れるのではないかという仮説を検証し、以下のことが分かった。

VT法による指導と練習の後の発音テストの結果は、学習者により多少違いはあるが、NNSの持続時間がNSの持続時間に近接しており、効果が確認できた。また t 検定による有意性検証からも明らかである。

VT法の長所は身体全体で覚えることで、練習の際、学習者が自己フィードバック出来るため発音矯正に大きく作用する。特に、実験の結果からも分かるように、初級学習者の場合、矯正にかなりの効果があることが分かった。

この結果は初級段階での発音指導が重要であることを示唆するものである。

発音において、ことばのリズムが重要であるが、振動器を通してことばのリズムを感じさせること、体でことばのリズムを覚えることがVT法の長所であると考えられる。

短所としては、身体リズム運動の場合、学習者の個性によって積極的に参加しないケースがあること、また、学習者個人が感じる緊張と弛緩は必ず一致しないので、学習者の発音の問題点により適合した指導法が求められる。学習者が積極的に発音矯正に参加できるように授業の雰囲気を作ること、様々な学習者に対応できる指導法を工夫することが教師の大きな課題であると思われる。

## 6.3 緊張度と持続時間の相関関係

### 【仮説3】 後続子音別の持続時間

子音環境による緊張度と持続時間は相関関係があるのではないのか。

NSの場合、子音環境[s]以外は緊張度が高い音は持続時間が長く、緊張度が低い音は持続時間が短いのにに対してNNSの場合は持続時間と緊張度との相関関係は表れなかった。また、後続子音別の全体においてNSより持続時間が短い傾向が強かった。

VT法による指導と練習を行った後、KLLの場合はNSと同じく、子音環境[s]以外は緊張度が高い音の場合に持続時間が長く、緊張度が低い音は持続時間が短くなり、持続時間と緊張度との相関関係が確認できた。

## 7. 今後の課題

VT法では、緊張の概念が重要な鍵となるが、緊張性の明瞭性を客観的に証明することは難しく、本調査では(C.ロベルジュ1982)に従って分析を行った。緊張性の明瞭性をより確実にするための研究を続けていきたい。

本調査では主に横断研究の方法を用いたが、今後、更にVT法を用いて持続的な指導と練習を行った場合、どのような効果が現れるかをみるため、縦断研究を取り入れて研究を進めたい。

木村(2001)は、言語習得はプロソディ、特にリズム・イントネーションの獲得から始まり、リズム・イントネーションは、音声全体を一つにまとめる役割を担っているため単音の調音法を学習しても「～語らしさ」は習得できなく、リズム・イントネーションの習得を優先すれば、単音の指導・矯正も容易になると述べている。今回の実験は単語レベルに限って行ったが文レベルの実験を行い、リズムの習得が発音矯正に与える効果を明らかにしたい。

学習者によって、緊張と弛緩を感じる程度には差がある。本調査で用いた身体運動リズム運動、振動器の他に、韓国語日本語学習者が困難を感じている長音、清音と濁音、ザ行、アクセント、イントネーションなどの音声項目に関して多様でかつ適合した身体運動リズム運動と創作わらべうたを工夫して日本語教育現場に活用していきたい。

## 【参考文献】

- 李明姫(1996)「韓国における日本語初級過程学生の聴音能力と発音能力の実態調査」『国語学研究』26、東北大学文学部、pp.38-48
- 姜蓮華(2004)「韓国人日本語学習者の日本語音声の知覚に関する一考察－特殊音素の促音を中心に－」『早稲田大学日本語教育研究』第5号 pp.45-59
- \_\_\_\_\_ (2005)「韓国人日本語学習者の日本語音声の生成に関する一考察－特殊音素の促音を中心に－」『拓殖大学言語教育研究』第6号 pp.183-194
- 木村政康(1990)『日本語の発音指導－VT法の理論と実際－』凡人社
- \_\_\_\_\_ (1997)「VT法を使った発音指導の実際」アルク『月刊日本語』2 pp.24-32
- \_\_\_\_\_ (1997)「促音の一指導法－わらべうたリズムの活用」拓殖大学留学生別科『日本語紀要』第7号 pp.49-69
- \_\_\_\_\_ (2000)「振動感覚による音声認識」拓殖大学言語文化研究所『語学研究』第88号 pp.211-262

- \_\_\_\_\_ (2001) 「音声教育法－VT法の理論を応用して－」 拓殖大学 言語文化研究所  
『言語とコミュニケーション』 pp. 45-64
- 金照雄・尾崎達治(1999) 『韓国人のための発音クリニック』 時事日本語社
- 小坏博子・木村正康・川口義一・安富雄平(2002) 『聴覚・言語障害教育および外国語教育のためのVTS入門』 特定非営利活動法人グベリナ記念ヴェルボトナル普及協会
- 酒井真弓(2006) 「韓国人学習者の日本語音声に関する研究－誤用調査と音声分析を中心として」 韓国外国語大学博士学位論文、韓国外国語大学大学院日語日文学科
- SLA研究所(1990) 『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』 大修館書店
- 戸田貴子(2003) 「外国人学習者の日本語特殊拍の習得」 『音声研究』 第7巻 第2号 第33号 pp.65-82
- \_\_\_\_\_ (2007) 「日本語教育における促音の問題」 第11巻第1号 pp.35-46
- 松田章一外(1994) 『言調聴覚論輪郭』 上智大学聴覚言語障害研究センター
- 関光準(1987) 「韓国人の日本語の促音の知覚について」 『日本語教育』 62号pp.179-193
- \_\_\_\_\_ (2000b) 「日本語音声教育研究の現状と問題」 『日本語学シリーズ1日本語の現状と問題』 宝庫社 pp.7-48
- \_\_\_\_\_ (2000d) 「韓国人学習者の日本語発音に見られる促音挿入の現象」 『日本文化研究』 9、韓国日本文化学会 pp.63-80
- \_\_\_\_\_ (2007) 「韓国人日本語学習者の発音に見られる促音挿入の生起要因」 『音声研究』 第11巻第1号 pp.58-70
- Major, R.C.(1987) A model for interlanguage phonology.In Ioup, G.and Weinberger, S.H.(eds.), pp.101-124
- ロベルジュ,C. (1979) 発音矯正と語学教育－ザグレブ言語教育の理論と実際 大修館書店
- \_\_\_\_\_ (1982) 「言調聴覚論による調音時の緊張性－その紹介と考察－」 上智大学聴覚言語障害研究センター 『言調聴覚研究シリーズ』 第5巻
- \_\_\_\_\_ (1989) 「低周波数における転移」 上智大学聴覚言語障害研究センター 『言調聴覚研究シリーズ』 第13巻
- \_\_\_\_\_ (1994) 『ヴェルボトナル法入門－ことばへのアプローチ』 ヴェルボトナル法実践シリーズ 第1巻 第三書房
- \_\_\_\_\_ (1995) 『話しことばの指導の技法－リズムと身体の発見』 ヴェルボトナル法実践シリーズ 第2巻 第三書房
- ロベルジュ,C.・木村正康(1996) 『日本語の発音指導－VT法の理論と実際』 凡人社

## 要 旨

韓国人日本語学習者の特殊拍の知覚と生成に現れる問題点は以前から数多く指摘されてきたが、実際に現場で活用できる指導法に関する研究は少ない。

本研究はこの問題状況を基点とし、韓国人日本語学習者の初級と中級各10名を対象として促音の生成に見られる特徴と誤りの傾向を調べた。さらに、音声指導法の効果を検証することを目的として、VT法（振動器と身体リズム運動）を利用した指導と練習の効果を検討するために実験を行い、以下のことが明らかとなった。

促音の持続時間の長さを初級・中級学習者と日本語母語話者を比べると、前の二者は日本語母語話者より短く、後続子音別の緊張度による影響も異なっている。

日本語母語話者の場合、後続子音の緊張度が下がる([p]→[t]→[s]→[k]→[ts]→[tɕ])につれて促音の持続時間も短くなって緊張度の違いもはっきりと現れているが、初級では ([p]≒[t]、[s]≒[k]) 同一時間になるなど、同じ反応を示している。

中級では日本語母語話者の持続時間により近づいているが、この同一反応の傾向は残存([p]≒[t])している。また、初級・中級共に後続子音別の全体において日本語母語話者より持続時間が短い傾向が強かった。

VT法による指導と練習の後の発音テストの結果は、学習者により多少違いはあるが、初級・中級両方とも促音の持続時間が日本語母語話者の持続時間に接近しており、効果が確認できた。また、初級では緊張度が高い音の場合に持続時間が長く、緊張度が低い音は持続時間短くなり、持続時間と緊張度との相関関係も確認できた。

以上のように、VTは身体全体で覚えることで、練習の際、学習者が自己フィードバック出来るため、発音矯正に大きく作用したと思われる。

今後の実験では、本調査で用いた振動器と身体リズム運動の他に韓国人日本語学習者が困難を感じている音声項目に関して多様でかつ適合した身体リズム運動と創作わらべうたを工夫して日本語教育現場に活用していきたい。

キーワード：促音、生成、持続時間、子音環境、緊張、振動器、身体リズム運動

투 고 : 2011. 8. 31  
1차 심사 : 2011. 9. 10  
2차 심사 : 2011. 10. 1





# 韓国人学習者と中国人学習者の聞き取りにおける外来語の認知傾向

田中節子\*

(e-mail: tanakasettsuko0303@yahoo.co.jp)

---

## 目次

---

1. はじめに	4.2. 調査対象者
2. 先行研究と本稿の立場	4.3. 調査期間
3. 日本、中国、韓国での外来語の受容の特徴	4.4. 聞き取りテストと認知アンケートの実施方法
3.1. 日本の外来語受容の特徴	4.5. 聞き取りテストの内容
3.2. 中国の受容のあり方	5. 調査の結果
3.3. 韓国の受容のあり方	5.1. 中国人学習者の結果
3.4. 日中韓の外来語受容の比較	5.2. 韓国人学習者の結果
4. 調査の目的と方法	6. 両者の聞き取りと認知の傾向
4.1. 調査の目的	7. 今後の課題

---

## 1. はじめに

日本語の語彙は和語、漢語、外来語の3種類に分けられる。その中の外来語は外国から入ってきた借用語であるが、日本では主として欧米から入ってきた言葉を指すようになった。近年はそうした欧米語の中でも英語起源とする言葉がたくさん流入してきている。インターネット関係の言葉はほとんど英語起源の外来語と言ってもいいぐらいである。世界的なグローバル化の中で英語は突出した地位をしめるに至っている。韓国でも中国でも日本でも第1外国語として中学や高校で習う外国語はほとんど英語である。

---

\* 中央大学校日語日文学科助教授

中国と韓国の日本語学習者が日本語の外来語を聞いてその意味に達する時に英語の力によるのか、自国の中の外来語の力によるのか、日本語でそのまま理解しているのかということに興味深いテーマである。ここではこのテーマを取り上げてみたい。

## 2. 先行研究と本稿の立場

こうした外来語を聞いて意味に達する方法を研究した先行研究は探し出すことができなかった。ただ、三か国における外来語受容の現状については先行研究があるので、ここでは3か国の現状を踏まえて比較を試み、日本語の外来語を聞くときの母語からの干渉といった問題点を明らかにしたい。

本稿ではどのように聞いて意味を理解したかを明らかにするものであるが、意味を理解することを認知という言葉で表現する。認知の定義については大辞泉という辞書の定義を採用する。以下はその定義である。

≪cognition≫心理学で、知識を得る働き、すなわち知覚・記憶・推論・問題解決などの知的活動を総称する。

## 3. 日本、中国、韓国での外来語の受容の特徴

### 3.1 日本の外来語受容の特徴

日本語の中に外国語を受容するときの特徴は漢語を日本語の中に取り込んだ時と基本的には同じである。日本語は音節構造が(C)Vという開音節である。Cの子音で終わる閉音節の外国語が入ってきたときに、Cの子音にVの母音が挿入され開音節にかわる。また日本語にはない音、音素が入ってくる。あるいは元々の音素が日本語で近似だと考えられた音素に変わる。そして意味的には原語と全く同じではなく、ずれて使用されるようになる。さらに和製西欧語が作られるようになる。

現在、外来語といえば英語起源の言葉が圧倒的に多い。英語は基本音節が(C)(C)(C)V(C)(C)という子音で終わる構造をもつ言語である。日本語化するにあたっての一定の規則がある。『日本語はつおん英語版<sup>1)</sup>』からいくつかの例をまとめて下記に示す。ただし下記の例は一部でもっと多くの規則があり、規則から外れる例外もあることを明記しておく。

---

1) 国際交流基金 (1978) 『日本語はつおん英語版』凡人社

a. CVCVのように子音の後に母音が続く場合：日本語の音節どおりに発音する。

例：Camera → カメラ

b. -CC-のように子音が並んでいる場合：

子音の後に適当な母音を添えて発音される。

①子音[t],[d]の場合は母音[o]を添える。語末に[te],[de]である場合も[t],[d]と同じである。語末に[te],[de]である場合も同様である。

例：hint → hinto ヒント

②子音[c],[b],[f],[g],[k],[l],[m],[p],[s]の場合は母音[u]を添える。語末にこれらの子音に[e]がついても[u]を添えた形になる。

例：mask → masuku マスク

c. 長音化する場合：下線の部分が長音化する。

例： car → カー                      speed → スピード                      road → ロード  
      room → ルーム                      copy → コピー                      trade → トレード  
      inflation → インフレーション                      culture → カルチャー

d. 促音化する場合：下線の部分が促音化する。

例： back → バック                      tax → タックス                      match → マッチ  
      apple → アップル                      mat → マット                      ship → シップ

e. 日本語にない音素 (th) を日本語の音韻体系の中に入れる場合：

① th → サ、シ、ス、セ、ソで表す。またはザ、ジ、ズ、ゼ、ゾで表す。

例：thank you → サンキュー                      the → ザ

次に原語とずれた意味につかわれるようになった外来語は多数ある。1例をあげれば「クレーム」と言う言葉は英語では当然の権利、要求で使われるが、日本語では苦情の意味で使われる。

品詞が変わった言葉もある。原語では動詞だった言葉が日本語に入って「する」をつけて動詞になり、「する」をとって名詞になったりする。「propose → プロポーズ」などがそうである。

和製英語も多数あるが、代表例をあげると野球の死球を「dead ball→デッドボール」と造語したものがある。

また日本国内では外来語を抑制しようという動きはない。現在外来語辞典に載っている外来語の数は5万語を上回る勢いである。どんどん新しく入ってくるが廃れるのも速い。

さらに付け加えるならば日本語の基本母音は5つであり、子音は有声音と無声音に弁別される。長母音と短母音の区別がある<sup>2)</sup>。

2) 小川芳夫他(1982)『日本語教育事典』大修館書店p56

### 3.2 中国の受容のあり方

中国語の基本音節は (C) V (C) であるが、語末の子音は鼻音である。さらに基本母音は 3 つで、その異音が 12 ある。単母音と二重母音、三重母音がある。子音には有気音と無気音の弁別機能があり、有声音と無声音の弁別機能はない<sup>3)</sup>。

中国では外国の事物や概念を表現する場合に、3 つの方法がある。第 1 はその意味を漢字の意味で表現する。第 2 は漢字の音を利用して外国語をそのまま取り入れる。第 3 は音を表す漢字に意味を表す漢字を 1 字付け加えて複合語にする。

「中国的外来語受容法<sup>4)</sup>」からいくつか例を引用して下記に示す。

第 1 の例：

電視机 (dianshiji <sup>5)</sup> ) テレビ	复印 (fuyin) コピー
軟件 (ruanjian) ソフトウェア	鼠標 (shubiao) マウス (パソコン)

コンピューター関係の用語はほとんどここに分類される。

第 2 の例：

伊拉克 (yilake) イラク	紐約 (niuyue) ニューヨーク
哆啦A夢 (duolaime) ドラエモン	可口可樂 (kekoukele) コカコーラ

外国の地名や人名、商品名やブランド名などである。

第 3 の例：

比薩餅 (bisabing) ピザ[pizza+餅]	芭蕾舞 (baleiwu) バレエ[ballet+舞]
愛滋病 (aizibing) エイズ[AIDS病]	啤酒 (pijiu) ビール[beer+酒]

### 3.3 韓国の受容のあり方

韓国語の基本音節構造は(C)(S)V(V)(C)であり、閉音節の構造である。母音は 8 つで、長母音と短母音の区別がある。子音は有気音（激音）と無気音（平音）、無気音（濃音）で弁別される。有声音と無声音の弁別はない。無気音（平音）は語頭では無声音[p][t][k][tʃ]だが、語中で有声音化する<sup>6)</sup>。

韓国では 3 通りの受け入れ方がある。第 1 は欧米外来語。欧米の外国語から直接取り入れたもの。第 2 は日本を経由したもの。第 3 は韓国製外来語である。

以下は「韓国における外来語<sup>7)</sup>」によってその事情をまとめたものである。

第 1 の欧米外来語は英語学習がブームとなっていて、それに伴った英語起源の外来語

3) 小川芳夫他(1982)『日本語教育事典』大修館書店p.57

4) 井上優 (2003) 「中国的外来語受容法」『日本語学2003.7Vol.22』明治書院

5) ピンイン表記

6) 小川芳夫他(1982)『日本語教育事典』大修館書店p.57

梅田博之 (1985) 『NHKハングル入門』日本放送出版協会pp.20 21

7) 曹喜澈 (2003) 「韓国における外来語」『日本語学2003.7Vol.22』明治書院

の流入は大きな流れになっていて、コンピューター関係の用語はほとんど外来語である。

第1の例： internet → 인터넷

第2の外来語は、日本を経由して入ってきたので日本語の訛りがあったり、変形したりしたまま使用される場合もあった。しかし近年は語彙だけ取り入れて、発音は韓国の外来語表記に従って使う場合が多い。

第2の例：puncture →펑크 バンク（和製英語）

第3の韓国製外来語は2002年の日韓ワールドカップを契機に多数造語された。

一方増加の兆しを見せる外来語に対して、韓国政府が抑制政策を打ち出している。2003年に発表された「国語基本法（案）」では韓国語の使用と淳化を謳い、「国家は不要な漢字語、外来語、新しく入ってきた外国語に対してわかりやすい韓国語に淳化するなど、正しい国語使用を確立するための対策を講じなければならない」として、外来語の増加は常に問題視され、固有語や漢字語に言い換えられることもある。

### 3.4 日中韓の外来語受容の比較

外来語の流入に制限があるかどうかという基準でみれば、韓国と中国は制限があり、それに対して日本は制限がない。従って外国語を自国語に言い換えることを積極的に行っているのも中国と韓国である。日本は明治時代とは違って現在は積極的な言い換えは行っていない。

中国と韓国を比べると政策的な制限があっても韓国国内では英語学習熱の高まりから英語、あるいは英語もどきもの、つまり外来語が発生する比率は非常に高くなっていると見られる。また韓国の中には日本式の発音の外来語や和製英語なども馴染む環境がいくらか残っていると見られる。

中国では中国製外来語とも呼ぶべき複合語の音の部分から原語を再生し、類推することが原語の学習者、ここでは英語学習者には可能だと見られる。中国でも複合語を含めれば外来語は相当数入っていると考えることができるのではないだろうか。

外来語を聞いて認知する場合、母音で終わる開音節の言葉の場合、認知しやすいと想像される。このことは中国人学習者にも韓国人学習者にも当てはまるであろう。この点は母語からの正の干渉と言えるであろう。

問題は閉音節を含む言葉である。日本語は子音に母音をつけて開音節化する。中国語の外来語の作り方は母音をつけて開音節化する場合と、音節末の子音を削除して母音を残すかさらに削除した子音の代わりに母音を付け加える場合が見受けられる。さらに中国語の基本母音と多くの異音、二重母音、三重母音の存在は同じ英語の言葉でも母音すら日本語の外来語とは異なって聞こえていることを暗示するものである。

韓国語では閉音節の音節末の子音を、そのまま子音として受け入れる場合と母音を付

け加える場合とがある。母音を付け加えた場合は日本語の外来語と似た響きに聞こえる。これは母語からの正の干渉と言えるだろう。

子音のままの例： book → 북 ブック

母音を付け加えた例： toast → 토스트 トースト

韓国語でも基本母音が日本語より多いので、母音空間<sup>8)</sup>の中での一つの母音の縄張りが日本語より細かく分割されている。さらに日本語にない二重母音の存在があり、母音の音は日本語の外来語とは異なって聞こえているであろう。

さらに日本語にある有声音と無声音の弁別機能が中国語にも韓国語にもないので、聞き間違いの可能性は高いと言えるだろう。

これらの点は母語からの負の干渉といえることができるであろう。

こうした英語とも母国の外来語とも違う日本語の外来語をどのように認知していくのを見たい。

## 4. 調査の目的と方法

### 4.1 調査の目的

こうした母語の特質と外来語の受容の違いを踏まえて、韓国人学習者と中国人学習者が外来語の認知方法として英語の知識を活用するのか、母語の外来語の知識を活用するのか、それとも日本語の知識を活用するのかを明らかにし、韓国人学習者と中国人学習者の特徴と相違点を明らかにしたい。

### 4.2 調査対象者

中国の大連理工大学の学生10名と韓国の中央大学の学生10名である。大連理工大学の学生のうち5名(ch6～ch10)が日能試1級合格者で、残り5名(ch1～ch5)が日能試2級合格者であり、韓国の中央大学の学生10名は日能試1級合格者である。英語の学習歴は両大学の学生ともに第一外国語として大学入学以前から学んでいたが、具体的なレベルは確認していない。

### 4.3 調査期日

大連理工大学の調査は2010年3月2日である。

中央大学の調査は2010年3月31日である。

8) 「母音空間とは、母音が作り出されるときに口の中で舌がどのような位置にあるかを示したもので、・・・この母音空間はすべての人間に共通したものであり、この空間をどのように分割するかによって特定言語の母音体系が決まってくる。」窪蘭晴夫(1999)『日本語の音声』(岩波書店) p.26

#### 4.4 聞き取りテストと認知アンケートの実施方法

作業手順1：文脈ありテスト20問と文脈なしテスト20問を用意する。

作業手順2：日本人の東京語話者が3回ほど読み上げる。調査対象者がそれを聞いて、聞き取った外来語をカタカナで記入する。

作業手順3：外来語を英語で書く。意味を母語で書く。

作業手順4：認知アンケートに答える。認知方法が日本語か母語か英語か文脈かを答える。

#### 4.5 聞き取りテストの内容

語彙の選定にあたっては日本語の外来語として既習でよく耳に馴染んでいるものは少なく、英語でよく聞くものを多くした。既習でよく知っているものは日本語で認知したという答えが多くなると想定したからである。それでリーディングチュウ太の級外の語が多くなった。調査時期はバンクーバーオリンピック開催と時期が重なったので、オリンピックでよく使われている言葉を選んだ。また同時期にアメリカでトヨタ自動車の大規模なリコール問題が起き、連日報道されていた。それでそこからも言葉を選んだ。

全体としてテレビや新聞でよく使われている外来語を選んだものである。

リーディングチュウ太の語彙レベル（日能試の級）数は以下のとおり。

文脈なしテスト（外来語1）語彙レベル：級外17語・1級2語・2級1語

文脈ありテスト（外来語2）語彙レベル：級外16語・1級1語・2級3語

表1 外来語1（文脈なしテスト）

1. ショック	[1級]	11. ショートトラック	[級外]
2. クロスカントリー	[級外]	12. フロアマット	[級外]
3. サークス	[級外]	13. キャッシュ	[級外]
4. リコール	[級外]	14. マクドナルド	[級外]
5. フルタイム	[級外]	15. アイスシアター	[級外]
6. センター	[2級]	16. アウトレット	[級外]
7. ファン	[1級]	17. トークイベント	[級外]
8. テロップ	[級外]	18. ホットショット	[級外]
9. ノルディックスキー	[級外]	19. コンセプト	[級外]
10. リラックス	[級外]	20. プレーヤー	[級外]

表 2 外来語 2 (文脈ありテスト)

ホテルの (1 ロビー) で待ちます。 [2 級]
私は別の (2 ルート) で行きます。 [級外]
彼は (3 トップ) (4 アスリート) [2 級] [級外]
として世界 (5 チャンピオン) の [級外]
(6 タイトル) を取った。 [1 級]
選手は大きな (7 プレッシャー) をかかえていた。 [級外]
(8 インストラクター) の指示にしたがって踊った。 [級外]
政府は最低限の生活ができるように (9 セーフティーネット) を作らなければならない。 [級外]
今年は新型 (10 インフルエンザ) の (11 パンデミック) は起こらなかった。
[級外] [級外]
彼は (12 マジック) が上手で、だれもその (13 トリック) がわからない。
[級外] [級外]
その (14 エッセー) を読むと、もう春の中にいるように感じる。 [級外]
体の不自由な老人を手伝うために (15 ホームヘルパー) が週 3 回来る。 [級外]
入学試験に合格した私は (16 ラッキー) だ。 [級外]
(17 ピーターラビット) の出てくる童話は楽しい。 [級外]
毎朝 (18 コーヒーショップ) に寄る。 [2 級]
今年の新型車は (19 ハイブリッド) 車に (20 モデルチェンジ) した。
[級外] [級外]

表 3 外来語 1、外来語 2 と対応する英語と、中国語の漢字と発音 (ピンイン) の表

	日本語	英語	中国語ピンイン	中国語漢字
	外来語 1			
1	ショック	shock	chongji	冲击
2	クロスカントリー	cross country	yueye saipao	越野赛跑
3	サーカス	circus	zaji	杂技
4	リコール	recall	bamian	罢免
5	フルタイム	fulltime	quanban	全班
6	センター	center	zhongxin	中心
7	ファン	fan	mi	迷
8	テロップ	telop	zimu	字幕



9	ノルディックスキー	nordic ski	julisai	距离赛
10	リラックス	relax	fangsong	放松
11	ショートトラック	short track	duandao su hua	短道速滑
12	フロアマット	floor mat	dianzi diban	垫子 地板
13	キャッシュ	cash	xianjin	现金
14	マクドナルド	macdonald	maiketangna	麦克唐纳 ※
15	アイスシアター	ice theater	bingshang juyuan	冰上剧院
16	アウトレット	outlet	lianjiapin	廉价品
17	トークイベント	talk event	jianghua jihui	讲话 集会
18	ホットショット	hot shot	you caineng	有才能
19	コンセプト	concept	guannian	观念
20	プレーヤー	player	xuanshou	选手
	外来語 2			
1	ロビー	lobby	qianting	前厅
2	ルート	route	路線	路线
3	トップ	top	zuigaoji	最高级
4	アスリート	athlete	yundongyuan	运动员
5	チャンピオン	champion	guanjun	冠军
6	タイトル	title	jinbiao	锦标
7	プレッシャー	pressure	yali	压力
8	インストラクター	instructor	jiaolian	教练
9	セーフティネット	safty net	anquanwang	安全网
10	インフルエンザ	influenza	liuxingxing ganmao	流行性感冒
11	パンデミック	pandemic	manyang	蔓延
12	マジック	magic	moshu	魔术

13	トリック	trick	xifa	戏法
14	エッセー	essay	suibi	随笔
15	ホームヘルパー	home helper	jiating fuwuyuan	家庭服务员
16	ラッキー	lucky	xingyun	幸运
17	ピーターラビット	peter rabbit	bide	彼得 ※
18	コーヒーショップ	coffee shop	kafeidian	咖啡店 ※
19	ハイブリッド	hybrid	hunhewu	混合物
20	モデルチェンジ	model change	xinghao gaibian	型号改变

注) ※の言葉は英語の音を漢字音で表現した外来語と、音の漢字と意味の漢字を組み合わせた複合語である。3語だけでそれ以外は全部中国語固有語である。

表 4 外来語 1、外来語 2 が対応する英語と、韓国語のハングルと IPA 発音の表

	日本語	英語	ハングル	韓国語IPA
	外来語 1			
1	ショック	shock	쇼크	ʃok <sup>h</sup> u ※
2	クロスカントリー	cross country	크로스컨트리	k <sup>h</sup> urosɯ k <sup>h</sup> ɔnt <sup>h</sup> uri ※
3	サーカス	circus	서커스	sɔ:k <sup>h</sup> ɔsɯ ※
4	リコール	recall	리콜	rik <sup>h</sup> o:l
5	フルタイム	fulltime	풀타임	p <sup>h</sup> ult <sup>h</sup> aim
6	センター	center	센터	sent <sup>h</sup> ɔ
7	ファン	fan	팬	p <sup>h</sup> ɛn
8	テロップ	telop	텔롭	t <sup>h</sup> ellop
9	ノルディックスキー	nordic ski	노르딕스키	norɯdik suk <sup>h</sup> i ※
10	リラックス	relax	릴랙스	rilleks <sup>ʷ</sup> u ※
11	ショートトラック	short track	쇼트트랙	ʃot <sup>h</sup> u t <sup>h</sup> urek ※
12	フロアマット	floor mat	플로어매트	p <sup>h</sup> ulloɔ met <sup>h</sup> u ※
13	キャッシュ	cash	캐시	k <sup>h</sup> ɛʃi ※

14	マクドナルド	macdonald	맥도날드	mɛkdonaldw ※
15	アイスシアター	ice theater	아이스시어터	aisw siotʰɔ ※
16	アウトレット	outlet	아웃렛	aut ret
17	トークイベント	talk event	토크이벤트	tʰokʰw ibentʰw ※
18	ホットショット	hot shot	핫샷	hat ʃʷot
19	コンセプト	concept	컨셉트	kʰɔnseptʰw ※
20	プレーヤー	player	플레이어	pʰulleio ※
	外来語 2			
1	ロビー	lobby	로비	robi
2	ルート	rout	루트	rutʰw ※
3	トップ	top	톱	tʰop
4	アスリート	athlete	에트리트	ɛʰuritʰw ※
5	チャンピオン	champion	챔피언	tʰɛmpʰiɔn
6	タイトル	title	타이틀	tʰaitʰwl ※
7	プレッシャー	pressure	프레셔	pʰureʃɔ ※
8	インストラクター	instructor	인스트럭터	insutʰurɔktʰɔ ※
9	セーフティネット	safty net	세이프티네트	seipʰutʰi netʰw ※
10	インフルエンザ	influenza	인플루엔자	inʰulluendza ※
11	パンデミック	pandemic	판데믹	pʰandemitkʰu ※
12	マジック	magic	매직	mɛdʒik
13	トリック	trick	트릭	tʰurik ※
14	エッセー	essay	에세이	esei
15	ホームヘルパー	home helper	홈헬퍼	hom helpʰɔ
16	ラッキー	lucky	러키	rɔkʰi
17	ピーターラビット	peter rabbit	피터래빗	pʰitʰɔ rɛbit
18	コーヒーショップ	coffee shop	커피숍	kʰɔpʰi ʃop

19	ハイブリッド	hybrid	하이브리드	haiburidu ※
20	モデルチェンジ	model change	모델체인지	model tʰeindʒi

注) 韓国語の外来語はすべて英語の音に基づいている。※は語中や語尾で母音が続かない子音に母音を添加しているもの。全部で23語ある。

## 5. 調査の結果

### 5.1 中国人学習者の結果

表 5 聞き取り正答数と認知（意味到達）数の相関（外来語 1）

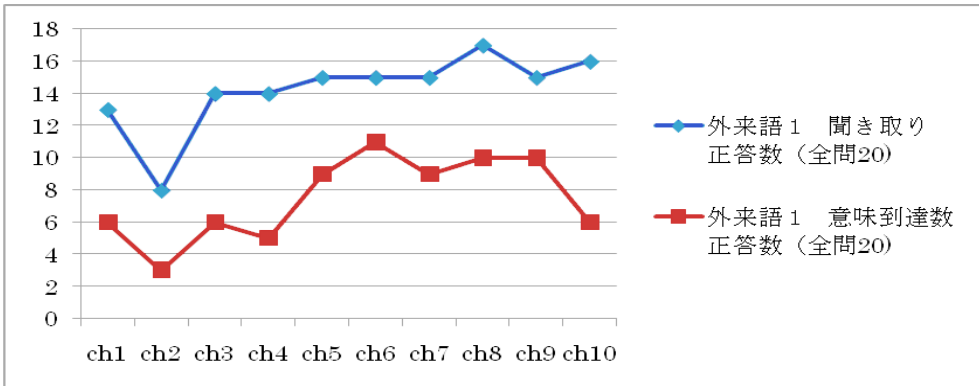


表 6 聞き取りの正答数と認知（意味到達）数の相関（外来語 2）

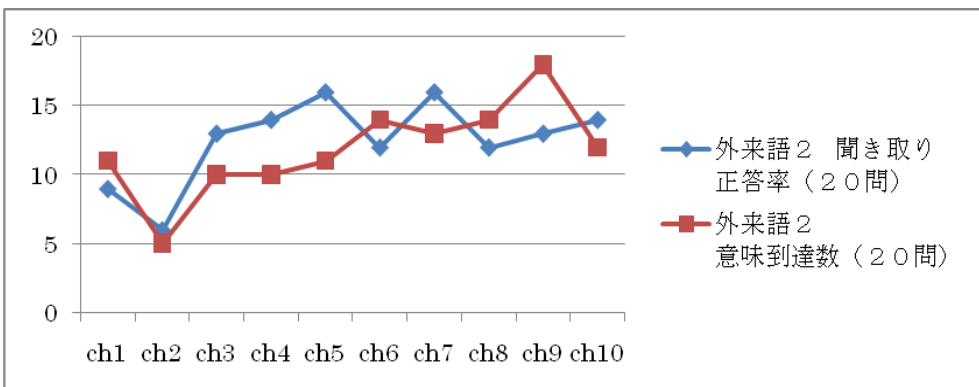


表7 英語、日本語、中国語による認知率（外来語1）

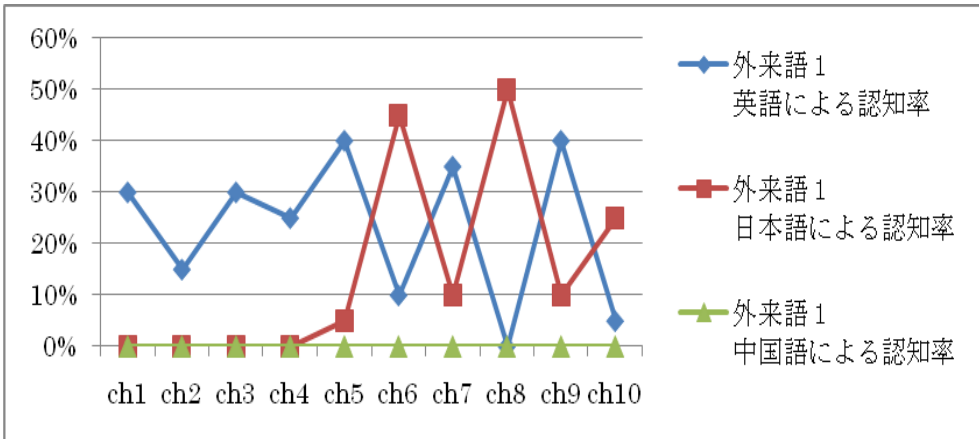


表8 英語、日本語、文脈、中国語による認知率（外来語2）

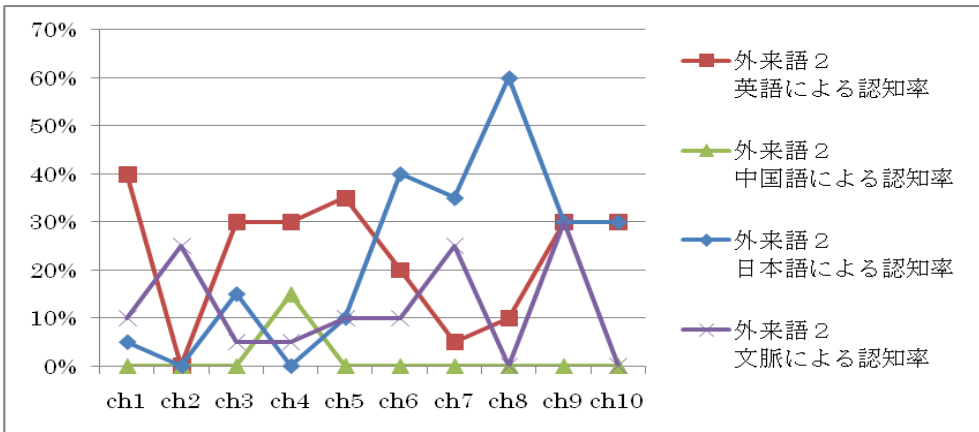


表3にあるように、外来語1、外来語2の中で、英語の音に基づく外来語は3語しかなかった。

「マクドナルド」、「ピーター（ラビットは対応する言葉を見つけることができなかった）」が漢字音を英語の音に対応させた外来語と考えられる。もう一つは「コーヒーショップ」であるが、「コーヒー」に対応する漢字音と「ショップ」の意味に対応する漢字で作られた複合語である。この3つは中国語の中から意味に達する可能性をもった言葉である。

それ以外の言葉は英語の助けを借りるか日本語の助けを借りるか、外来語2の場合は文脈の助けも借りて認知（意味に到達）せざるをえない。

表5の外来語1を見てみると、ほとんどの人が半分以下しか認知できていない。表6の外来語2を見てみると、ほとんどの人が半分以上認知できている。外来語1と比べてはるかに

認知できた回答数が増加している。これは文脈の助けが大きいのではないかと考えられる。

どのようにして認知したかを表 7、表 8 からみてみよう。

表 7 の外来語 1 では日本語のみで認知した人は 1 人で、英語のみで認知した人は 4 人、中国語のみで認知した人はゼロであったが、日本語と英語の両方を使って認知した人は 5 人で、最も割合が高かった。両方を使って認知した人のうち、日本語より英語が上回っている人が 3 人で、英語より日本語が上回っている人が 2 人であった。

表 8 の外来語 2 では日本語のみ、英語のみ、中国語のみで認知した人はそれぞれゼロであった。しかし文脈のみで認知した人が 1 人いた。

つぎにどのような組み合わせで認知したかを見てみよう。もっとも多い組み合わせが英語と日本語と文脈の 3 つを使って認知したグループで 6 人、英語と日本語を使って認知したグループは 2 人、最後のグループは英語と中国語と文脈の組み合わせで 1 人だった。

外来語 1 も外来語 2 も英語の助けを借りて意味に到達する割合が高いが、日本語による認知率も高く、文脈を合せた日本語による認知率は外来語 2 においては英語による認知率とほぼ互角である。

特に ch6 から ch10 までの 1 級合格者において日本語の活用が顕著である。一方、外来語 1 の場合、ch1 から ch5 までの 2 級合格者は英語の認知率が高い。外来語 2 のような文中の単語であれば、2 級合格者の日本語による認知も増えてくる。

中国語による認知は 1 人だけである。外来語 2 の「ロビー」「チャンピオン」「インフルエンザ」を中国語の助けを借りて認知している。これらは中国語の中で対応する外来語がない言葉である。正式に外来語として認められなくても使用されているのかもしれない。

また、中国語の外来語として認められている「マクドナルド」は 6 人が認知できたが、英語による認知が 1 人で日本語による認知が 5 人であった。中国語によって認知した人は 1 人もいなかった。中国語では「maiketangna」(ピンイン)と発音するので日本語の発音とはかなり異なった印象をうけるからかもしれない。

「ピーター」は文脈で認知できた人が 1 人だけで、知名度が低くむずかしかったと思われる。

「コーヒーショップ」は 10 人全員が認知できたが、英語による認知が 4 人で、日本語による認知が 5 人、文脈による認知が 1 人であった。中国語で認知した人は 1 人もいなかった。

日本語で認知した単語の中で 8 人が「インフルエンザ」を挙げている。さらに 7 人が「ロビー」を挙げ、5 人が「マクドナルド」を挙げている。

文脈を活用して認知に至った言葉は 14 種類あるが、回数が最も多いのは「ルート」であり、「エッセー」「ホームヘルパー」「アスリート」「セーフティネット」など複数回の文脈活用が見られる。

表 5 と表 6 の「聞き取りの正答数と認知数の相関」をみると、表 5 の外来語 1 では 10 人全員の聞き取りの正答数が認知数を上回っている。ここでは聞き取りはできるが意味はわ

からないという傾向が見られる。一方、表 6 の外来語 2 では 4 人の認知数が聞き取りの正答数を上回っている。ここでは正確に聞き取れなくても認知できる人が出てきているのだ。

聞き取りの目立った誤謬は、有声・無声音の混同や長音の欠落、長音と撥音、促音の混同が見られた。ア音をワ音で聞くというような単母音と二重母音の誤りもあった。

中国語と日本語の特性の相違から生まれる誤謬である。

## 5.2 韓国人学習者の結果

表 9 聞き取り正答数と認知（意味到達）数の相関（外来語 1）

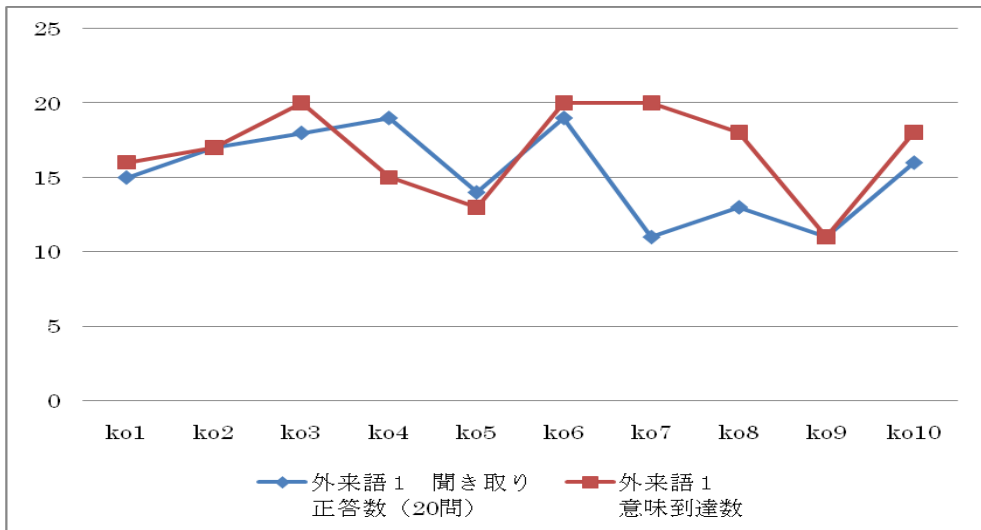


表10 聞き取りの正答数と認知（意味到達）数の相関（外来語 2）

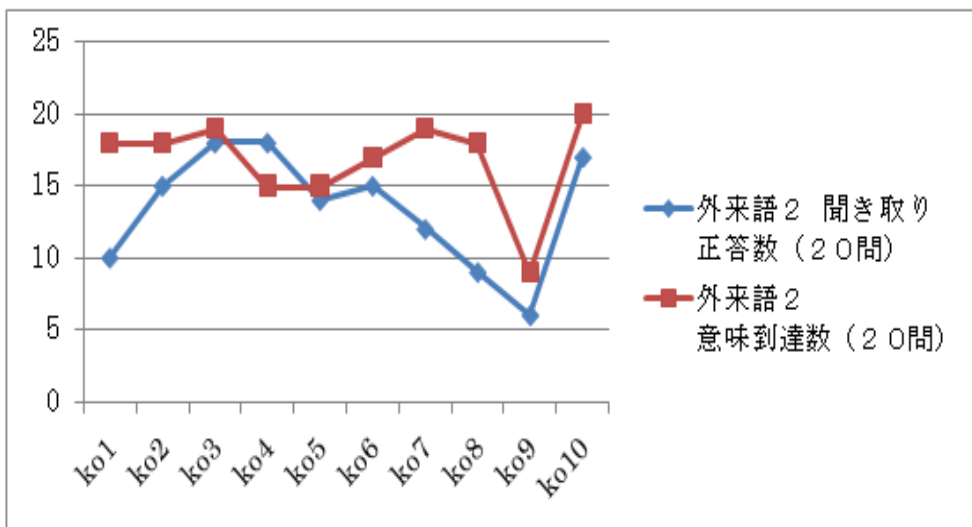


表11 英語、日本語、韓国語による認知率（外来語 1）

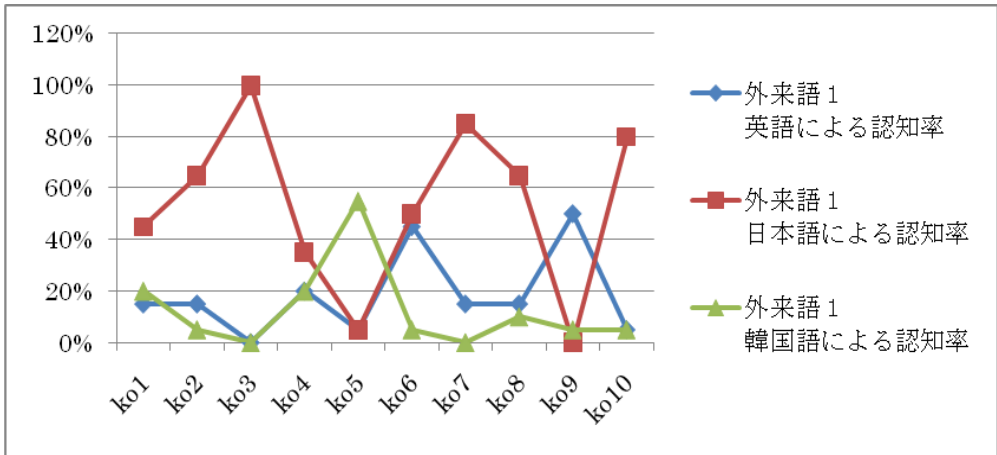


表12 英語、日本語、文脈、韓国語による認知率（外来語 2）

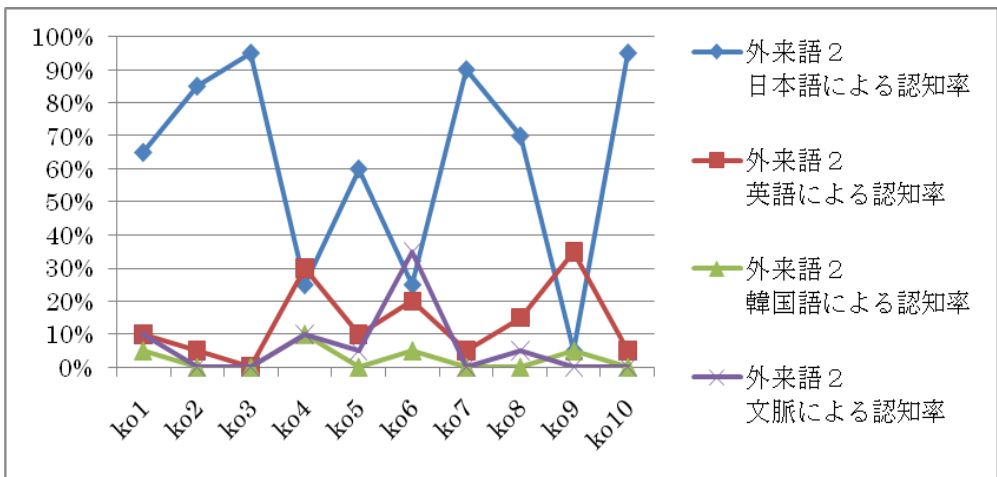


表 4 にあるように、ここで取り上げた韓国語の外来語は英語の音に基づいているものである。さらに40語のうち23語が英語の子音連続の箇所や語末の子音に母音を添加している。開音節化しているのである。日本語の外来語も同じように開音節化しているので、日本語の外来語と発音の印象が似てくると思われる。

実際の調査の結果では、表 9、表10にあるように、どちらにも共通しているのは聞き取りの正答数より認知（意味到達）数のほうが高い数字を示していることである。正確に聞き取れなくても意味の類推が可能だということである。

次に共通しているのは表11、表12にあるように英語よりも韓国語よりも日本語によって認知



に至っているということである。ただし表11の1人が韓国語による認知率が60%に達している。表12にあるように外来語2では認知の手段として文脈も付け加えたが、文脈の認知への寄与は大きくない。

全体として外来語の特殊性ということよりも日本語として聞いて理解しているということである。背景には韓国語の開音節化した外来語の存在があると考えられる。近似した発音として聞こえるので、日本語で認知できたとしても韓国語の中の外来語の力も大きいと考えざるをえない。

聞き取りの誤謬では母音の聞き間違いはなかった。語末での単母音と長母音の混同が多く見受けられ、また有声音・無声音の混同や、撥音・促音・長音の混同や混入などが多かった。

韓国語と日本語の特性の相違から生まれる誤謬である。

## 6. 両者の聞き取りと認知の傾向

両者の顕著な相違点は、中国人学習者の聞き取りの正答数が認知数より高いのに対して、韓国人学習者の認知数が聞き取り正答数より高いことである。つまり、聞き取りを誤っても意味はわかるということである。もちろん例外もあるが、全体の傾向はこのように言えるであろう。

次の相違点は認知手段に関するものである。中国人学習者は全体的に英語と日本語の助けが半々ぐらいの比率である。それに対して韓国人学習者はほとんど日本語の助けによって認知、つまり意味に到達しているのである。

中国人学習者が中国語の助けをほとんど受けないのに対して、韓国人学習者は韓国語によって認知している割合が英語には及ばないとしても少なからずあるのである。

中国人学習者は文脈のある単語の理解率が高く、文脈の助けで認知している割合が高い。それに対して、韓国人学習者は文脈に依存する割合が非常に低い。

これは、中国語の中に外国語がそのままの形で入ってきていないために、中国語の中で類似のものを探せないためであると考えられる。それに対して、韓国語の中にはそのままの外国語が外来語として入ってきているので、類似の言葉を探しやすいのだと考えられる。しかも日本語の外来語と同じように開音節化した外来語が多いので、それが英語ではなく、日本語によって認知したという比率が高くなる理由だと考えられる。

## 7. 今後の課題

外来語の認知の問題としてはやっとならに就いたばかりである。今回は外来語として未習のものと既習のものを混ぜて聞き取りテストを作成したが、未習と既習を分けて別々の聞き取り

テストを実施した場合はもっと違った結果が出た可能性がある。また中国人学習者や韓国人学習者の英語レベルをもっと細かく判定したほうがよかったかもしれない。早い人では小学生の時から、遅い人でも中学生の時から英語を第一外国語として勉強してきているので、十分英語の単語には慣れてっていると想定していたが、調査をすればまた違った結果が出た可能性がある。また、調査の過程で正確な聞き取りはできなくても認知できた例がかなりあったので、その理由を深める必要があったが、本稿では十分に検討することができなかった。こうした点を今後の課題としたい。

今後の課題としては、今回の調査研究で明らかになった日中韓の外来語の特性や規模、定着度などを更に調査し、外国語と接触した場合のそれぞれの言語に与える影響を明らかにすることとしたい。また、ピジン語とかクレオール語といった言語接触の視点から外来語を再構築したい。

認知の面からも日中韓3か国の外来語による共通性と異質性を明らかに日本語教育に役立てたい。

## 【参考文献】

- 石綿敏雄(1991)「外来語の歴史」『講座日本語と日本語教育第10巻日本語の歴史』(明治書院)
- 井上優(2003)「中国的外来語受容法」『日本語学2003.7Vol.22』(明治書院)
- 梅田博之(1985)『NHKハングル入門』(日本放送出版協会) pp.20-21
- 小川芳夫他(1982)『日本語教育事典』(大修館書店)pp.56-57
- 窪園晴夫(1999)『日本語の音声』(岩波書店) p.26
- 陣内正敬(2003)「外来語の課題と将来像」『日本語学2003.7Vol.22』(明治書院)
- 関根健一(2003)「新聞記事の中のカタカナ語」『日本語学2003.7Vol.22』(明治書院)
- 曹喜澈(2003)「韓国における外来語」『日本語学2003.7Vol.22』(明治書院)
- 松本洸司(1982)「外来語の歴史」『講座日本語学4語彙史』(明治書院)
- 水谷修(2003)「日本語の国際化と外来語」『日本語学2003.7Vol.22』(明治書院)
- 国際交流基金(1978)『日本語はつおん英語版』(凡人社)

## 要 旨

外来語は外国から入ってきた借用語であるが、日本では主として欧米から入ってきた言葉を指すようになってきている。近年は世界的なグローバル化の中で英語は突出した地位をしめるに至っている。韓国でも中国でも日本でも第1外国語として中学や高校で習う外国語はほとんど英語である。

日本ではそうした英語起源の言葉が日本語として定着していく過程で、日本風の音に変化していく。また、韓国や中国での英語の語彙の受容の違いもある。中国と韓国の日本語学習者が日本語の外来語を聞いてその意味に達する時に英語の力によるのか、自国の中の外来語の力によるのか、日本語でそのまま理解しているのかということを調査の目的とした。調査の結果として、中国人学習者の聞き取りの正答率が意味到達率より高いのに対して、韓国人学習者の意味到達率が聞き取り正答率より高いことがわかった。つまり、聞き取りを誤っても意味はわかるということである。もちろん例外もあるが、全体の傾向はこのように言えるであろう。

次の相違点は認知手段に関するものである。中国人学習者は全体的に英語と日本語の助けが半々ぐらいの比率である。それに対して韓国人学習者はほとんど日本語の助けによって認知しているのである。

キーワード：外来語、英語起源、グローバル化、母語、認知、類推、正答

투 고 : 2011. 8. 31  
1차 심사 : 2011. 9. 10  
2차 심사 : 2011. 10. 1



# 일본현대시를 이용한 비블리오테라피 수업\*

남 이 숙\*\*

(e-mail: ysnam@kunsan.ac.kr)

---

## 目 次

---

1. 비블리오테라피 - 정의와 목적
  2. 시 치료의 역사적 배경
  3. 비블리오테라피의 종류와 과정
  4. 시를 이용한 문학치유 수업의 실제
  5. 끝머리에
- 
- 

## 1. 비블리오테라피 - 정의와 목적

문학작품을 이용하여 마음의 상처를 치유하는 방법을 전문용어로 비블리오테라피(Biblio Therapy)라고 한다. 비블리오테라피는 특별히 준비된 독서를 통해서 열악한 조건 속에 있는 인간의 육체적, 정신적 건강을 보존하고 강화하는 과학, 메커니즘, 방법들의 총체를 일컫는다. 비블리오테라피라는 말의 어원은 Biblio(책, 문학)와 Therapeia(도움이 되다, 의학적으로 돕다. 병을 고쳐주다)라는 두 단어에서 유래하였다.

여기서 주목할 점은 Therapeia가 약물이나 수술 같은 물리적 치료방법을 사용하지 않고 인간의 정신적, 육체적 질병을 치유하는 심리적 방법이라는 것이다. 즉, Therapeia는 인간의 심리세계에 어떤 작용을 가해 육체와 정신의 불안정한 상태를 호전시키는 방법을 말한다.

생물체는 외부와 내부의 환경변화 속에서 생리적으로 안정된 상태를 유지하

---

\* 이 논문은 2011년도 군산대학교 대학자체 학술공모과제 연구비 지원에 의하여 연구되었음

\*\* 군산대학교 인문대학 일어일문학과 교수

는 기능을 가지고 있다. 이것을 생물학적 용어로 항상성(homeostasis)라고 하는데, 예를 들면 체온이 정상적인 한계를 초월해 상승할 경우 땀이 발생하여 체온이 조절되는 신체적 기능이 이에 해당된다. 인간에게 있어서 이러한 항상성이 생리적 메커니즘에만 작동되는 것은 아니다. 인간의 정신 또한 불안정한 상태에 빠졌을 때 자율적으로 안정된 상태를 유지하려는 경향이 있다.<sup>1)</sup>

비블리오테라피는 이런 과정을 효과적으로 도와 훼손된 신체와 정신의 건강을 돌보는데, 우리말로 ‘독서치료’라고 번역한다. 사용하는 자료들은 동화·동시·이야기(설화·전설)·소설·희곡·시와 같은 문학작품이다.

최근 심한 경쟁 속에서 취업난이 심각하고 빠르고 복잡하게 돌아가는 일상 속에서 우리 학생들은 심한 압박감에 시달리고 있다. 마음의 질병과는 달리 마음의 병은 원인을 파악하기도 어려우며 그에 적합한 조언을 하는 일도 쉬운 것은 아니다. 이런 마음을 방치하면 부정적인 에너지가 되어 우리의 마음을 우울하게 하고 삶을 황폐하게 만들기 때문에 이를 적절히 치유하고 건강한 삶을 되찾는 일은 매우 중요하다고 생각된다.

이와 같은 문제의 중요성을 고려하여 본고에서는 대학 3학년 과정의 <일본현대시 이해> 수업을 담당하고 있는 필자의 경험을 토대로 문학 장르 중에서도 시를 이용한 비블리오테라피에 관해 생각해보고자 한다.

## 2. 시 치료의 역사적 배경

우리는 책을 읽으면서 기뻐하기도 하고 한숨짓기도 하고 가슴 아파하기도 하는데, 이것이 바로 독서치료의 출발점이라고 생각한다. 문학은 인간의 심층에 있는 표현이기 때문이다. 이런 표현양식을 통해 예로부터 우리의 선조들은 여러 가지 감정을 표출하며 억압된 감정을 진정시키고 해소해 왔다.

아리스토텔레스가 『시학(Poetics)』에서 시의 ‘카타르시스’ 역할에 대해 논했다는 얘기는 유명한데 ‘카타르시스’란 다름 아닌 독서를 할 때 느끼는 감동을 일컫는다. 그의 스승 플라톤은 문학이 쓸데없이 인간의 감정을 건드려 이성적 생활을 방해한다고 생각했다. 그래서 그는 될 수 있는 대로 감정을 억제하고 평정한 이성을 회복하는 것이 ‘이데아의 세계’를 실현하는데 도움이 된다고 생각하였다. 하지만 제자인 아리스토텔레스는 이성적 생활의 혼란을 제거하기 위해서는 오히려 감정을 적절히 표출하고 배설해야 한다고 보았다.<sup>2)</sup> 즉 시

1) 변학수(2006), 『통합적 문학치료』, 학지사 p.111

2) 앞의 책 p.111 참조

와 예술의 역할을 일찍이 인식한 것이다.

문학치료의 가장 기초적인 방법은 이와 같은 문학의 카타르시스 기능에 있다. 고대 그리스인들이 언어와 감정의 중요성을 직관적으로 깨달아 시를 이용한 치료에 힘썼다는 기록이 남아 있고,<sup>3)</sup> 일본 최초로 시가효용론을 논한 ‘힘들 이지 않고 천지 신들의 마음을 움직이며 위엄 있는 사무라이의 마음까지도 부드럽게 하고 눈에 보이지 않는 영혼까지도 감동시킨다’는 <sup>4)</sup>는 일본 『古今和歌集(고킨와카슈)』에서도 이와 같은 문학의 카타르시스적 효과를 쉽게 찾아볼 수 있다. 우리 옛 가요 중에 「공무도하가」나 향가인 「제망매가」도 그런 부류의 작품이라 할 수 있다.

우리에게 그림동화의 작가로 잘 알려져 있는 야콥 그림(Jacob Grimm)은 다음과 같은 시사적인 발언을 하고 있다.

풀이나 돌에 있는 힘보다 더 강한 힘이 말에 있다. 어떤 민족이든지 그 말에서 축복과 저주를 받지 않는 경우는 없다. 그러나 그 말이 효능을 가지려면 어떤 형식, 즉 장중한 노래와 시의 형식을 갖추어야 한다. 그래서 성직자나 의사, 마술사가 갖고 있는 모든 힘은 문학의 형식과 결부되어 있다.<sup>5)</sup>

시가 시인의 감정을 말의 마법과 힘을 가지고 형상화하여 참여자의 깊이 숨겨진 체험을 이끌어 내거나 활성화할 수 있다는 것이다. 좋은 시는 우리에게 울림을 선사하는데 우리는 이를 감동이라고 한다. 참여자가 가진 상처는 시인의 시를 통해 드러나게 되는데, 이것은 참여자가 시적 환기를 통해 자신의 과거와 만나기 때문이다.

현대에 들어서는 1960년에 블랜튼(Smilely Blanton)이 『시의 치료적인 힘(The Healing Power of Poetry)』이란 책에서 시의 치료적 가치를 논했고 영감을 주는 시들을 사용하는 처방적인 접근을 소개하였다. 그 중심에서 리디(Jack J. Leedy)와 그라이퍼(Elfi Griefner)는 함께 브룩클린에 있는 병원에서 정신질환을 치유하는데 문학을 이용하였다. <sup>6)</sup> 1969년에 리디(Jack J. Leedy)의 유명한 저서 『시 치료(Poetry Therapy)』가 출판되었는데, 이를 계기로 문학치료협회가 만들어졌다.

현대적인 의미에서 문학치료 임상을 제일 먼저 시도한 사람은 리디(Jack J.

3) 앞의 책 p.22 참조

환자의 병을 치료할 때도 처방하는 약초를 사용하였는데 약초보다는 약초에 거는 주문이 치료행위에 필수적이었음을 확인할 수 있다.

4) 小島憲之 校注(1989), 『古今和歌集』新日本古典文学大系5 岩波書店 p.4

5) Jacob Grimm(1878), Deutsche Mythologie, BerlinAufI., p.1023

6) 1)의 책 pp.22-pp.23

Leedy)인데, 그는 문학치료를 자신감 상실·불면증·실연·공격성·불안·연령에 따른 문제 등을 해결하기 위한 개인치료에 사용하였다<sup>7)</sup> 문학의 무의식적인 힘이 의식의 표면에 문학적 예술 형식으로 그 모습을 드러내어 개인이 그 무의식을 이해하고 수용하도록 도와준다는 이론에 근거한 것이다. 그리하여 참여자가 억압을 극복하고 억압된 것을 의식의 표면에 드러낼 수 있다고 믿었던 것이다.

### 3. 비블리오테라피의 종류와 과정

#### ① 비블리오테라피의 종류

루빈에 의하면 문학치료의 과정은 일반적으로 세 가지로 구분하는데<sup>8)</sup> 첫 번째는 시설에서의 문학치료다. 시설이란 일반병원·노인 병원·중독자 요양병원·소년원 등을 말하는데, 이런 시설에서는 주로 의사를 중심으로 치료가 이루어지고 있다.

두 번째는 임상에서의 문학치료인데, 이는 정서장애나 행동장애·신경증을 치료하는 보조수단으로 이용되며, 흔히 의사와 문학치료가 공존하는 형태다. 치료 장소는 병·의원이나 학교 상담실 같은 곳이다.

세 번째는 발달적 차원의 문학치료로, 이는 약한 행동장애나 정서장애를 극복하고 나아가 자기발전을 도모하기 위한 문학치료다.

이상을 참고로 하여 우리 대학생들이 안고 있는 자신감 상실·실연·취업불안 등에 따른 문제를 해결하려면 세 번째 형태의 문학치료 형태가 가장 이상적이라고 생각한다. 이 유형이야말로 개인의 성장과 발전에 유익하고 그것을 통해 개인적 감정을 조절하고 자기 인식을 향상시키며 자존심을 높이는 자기개발적인 것을 담아낼 수 있기 때문이다.

#### ② 비블리오테라피의 과정

비블리오테라피는 대체로 참여자가 어떤 인식적, 행동적 변화를 경험하는지를 아래의 단계를 중시하며 살피며 어드바이스하는데, 이는 다음과 같은 과정을 거친다. <sup>9)</sup>

7) Blanton, The use of poetry in individual psychotherapy, In:

Jack J. Leedy (1980) 『Poetry Theraphy』 Lippincott Philadelphia, p.171.

8) 3)의 책 P.16

9) 이에 관해서는 여러 가지 설이 있는데, 원동연·유혜숙·유동준 지음(2005) 『5차원 독서치료』 김영사 116~118P를 참조하면 <동일화·카타르시스·표출·통찰·적용>의 5단계 설을 바탕으로 다른 이론을 참고로 하여 나름대로 정리하였다.



- 자기 동일시 : 자기 동일시는 시 속에 등장하는 인물 사건 상황 등에서 자신의 모습을 발견하고 자신의 처지와 동일하다는 것을 느끼는 단계를 말한다.
- 카타르시스와 표출 : 시의 작자나 주인공을 통해서 자신의 감정을 발산하고 토로해 놓는 단계를 말한다. 시의 내용에 관해 발산된 감정을 가다듬고 몇 가지 핵심적인 내용들에 대해 질문을 던지고 그 질문에 답하는 형식을 사용한다.
- 통찰 내지는 비교하기 : 통찰은 시를 통해서 나 자신의 문제를 객관적으로 인식하고 정리하는 단계를 말한다.
- 적용·타인에게 말 걸기 : 동일화, 카타르시스 표출, 통찰의 단계에 이르면서 도출된 결론을 적용하는 단계이다. 예를 들면 지금까지 어떤 콤플렉스 때문에 꼭 그것에만 집착을 한 사람이 그런 집착을 버리고 새로운 방향을 설정하고 자신의 적성과 취미에 맞는 일을 한다면 어떻게 할 것인가를 모색하는 단계라고 할 수 있다. 변학수는 이를 새 방향 설정단계라 명명<sup>10)</sup>하고 있다.

그렇지만 대학에서 실시하는 시수업의 경우 이 모든 단계를 그대로 적용할 수는 없다고 본다. 발표자나 선정 작품에 대한 분위기를 보아가며 적당히 대응해야 할 것이라고 생각한다.

#### 4. 시를 이용한 문학치유 수업의 실제

대부분의 문학작품이 그렇듯이 시 역시 그 시를 읽는 독자의 아픔이나 문제점을 대놓고 지적하지는 않는다. 작품이라는 매개체를 중심으로 자신의 아픔을 이야기할 수 있기 때문에 독자는 자신의 내면이나 비밀이 노출될까 걱정하지 않게 된다. 작품에 의해 얘기를 하는 것에 의해 독자는 무장해제를 하고 정서적인 안정감을 얻고 정서적 안정감은 학생들을 긴장에서 해방시켜 자신의 문제점을 자유롭게 드러내게 된다. 즉 시라는 보호막을 갖고 자신의 문제를 드러내게 되는 것이다.

---

10) 9)의 책 ?p

따라서 시를 이용한 문학치유 수업은 작품을 매개로 하지 않는 상담과는 달리 학생과 동료사이, 내지는 학생과 교사 사이의 관계를 원활하게 해줄 수 있다고 생각된다.

● 제1단계

- ① 먼저 학생들에게 시의 효용에 관해 설명하고 지금 자신의 처지에 도움이 되는 일본시를 선택하여 발표하게 한다.
- ② 반의 구성원의 일부가 일본어 능력시험 1급 취득인 점을 고려하여 발표 요지문 내지 파워포인트 자료는 가능한 경우 일본어로 작성하도록 권유한다.
- ③ 시의 선택은 개인의 성장과 발전에 유익한 자기계발적인 것을 대상으로 한다.
- ④ 자신의 정신 상태를 잘 진단해 자신의 정서적·정신적 결함을 메워줄 수 있는 일본시를 고르도록 유도한다.
- ⑤ 다양한 분위기의 시가 있음을 알려 주고 활용 가능한 시집과, 그 외에도 인터넷 오디오 자료 등 여러 가지 방법이 있음을 소개하고 자유롭게 선정하게 한다.

※ 시를 선택하게 할 때 주의해야 할 점이 있다. 그 시가 도덕적이나 심미적인 판단 혹은 논리적으로 읽히거나 감상될 수 있는 것을 대상으로 해서 안 된다는 점이다. 자유로운 분위기가 치유효과를 증대시키기 때문에 자기 자신의 자유로운 판단에 의해 작품을 선택하도록 해야 한다.

그래서 다음과 같은 기준에 의해 시를 선택하도록 유도한다.

- ▶ 자기와 동일한 문제를 안고 있는 내용을 담고 있는 시는 없는지?  
(자신이 부딪친 좌절을 성공적으로 극복한 예를 소개하도록 유도)
- ▶ 자신의 느낌이나 문제를 체계적으로 설명할 수 없었는데 그러한 문제점을 느끼고 상상하고 사고하게 하는 시가 있는지?
- ▶ 자신의 억압된 생각이나 감정을 풀어주는 시는 없는지?  
(감춰진 기억과 억압된 내면의 아픔을 달래주는 시를 선택하도록 유도)
- ▶ 타인의 삶의 목표를 담아낸 시를 읽은 적은 있는지?  
나의 삶의 목표와는 어떻게 다른지 ?
- ▶ 사회에 적응하지 못한 나, 인관관계에 서툰 나에게 다른 사람과 일상적인 관계를 유지할 수 있도록 도와주는 시는 없었는지?

그 때 시의 느낌 내지는 가치에 관해 생각해 보게 하고, 선택한 시가 자신에게 어떤 의미가 있는지, 어떤 점에서 감동을 받았는지 등을 중심으로 선택할 수 있도록 한다. 그리하여 목록을 만들어 한 학기 동안에 행할 수업의 순서를 정한다.

표1.

문제	일본 시 제목	한국어 제목	발표자
절망과 극복	生きる	살다	박○○
	会社の人事	회사의 인사	최○○
	鈴鳴りの道	방물이 울리는 길	허○○
인류애	雨にも負けず	비에도 지지 않고	천○○
새로운 삶	無精三昧	게으름 삼매경	김○○
내적 갈등과 해결	私が一番きれいだった時	내가 가장 아름다웠을 때	모델 수업
	はしくれ	나부랭이(찌질이)	길○○
	今が苦しいなら	지금이 괴롭다면	한○○
	自分の感受性くらい道程	자신의 감수성 정도는	이○○
미래에 대한 비전	道程	도정	이○○
모성애	レモンの哀歌	레몬의 애가	양○○
	母性讃歌	모성찬가	고○○
	歌	노래	정○○
우정·유대감	六月	유월	박○○
	秋の夜の会話	가을 날 밤의 회화	엄○
자유·해방감	私を束ねないで	나를 묶지 마	정○○

● 제2단계

- ① 2주 동안의 여유 시간을 주어 마음에 와 닿는 시를 찾아오게 한다.
- ② 발표 순서를 정한다.
- ③ 그 동안 대학생들에게 와 닿는 난이도가 높은 일본시를 선정해 2주에 걸쳐 함께 감상해 가는 시간을 갖는다. 이때 과목이 <일본현대시이해>인 점을 감안하여 일본 근·현대시나 일본문학사와 결부시켜 시의 흐름을

이해할 수 있도록 유도한다. 시문학사상 의미 있는 시에 관해서도 소개하고 특별한 시상을 지닌 시의 해석법에 관해서도 토론하고 의견을 나눌 수 있도록 한다.

● 제3단계 : 학생들이 전개·선정한 시에 관해 발표한다.

① 먼저, 시인의 약력 및 시세계를 소개한다.

발표자들의 대부분이 연보를 작성해 그 순서대로 읽는 경우가 많은데, 사진으로 시인을 소개하고, 시를 쓴 배경에 대해서도 소개하고 시인에 대한 동영상물이 있으면 소개한다.

다음 단계로, 난이도가 높은 단어와 어휘설명을 하고 특히 번역이 어려웠던 표현등을 둘러싸고, 번역의 고충을 함께 토론하게 한다.

활용이 가능한 동사나 형용동사의 경우 단문을 만들어 단어나 어휘에 대한 이해를 높인다.

② 낭송되는 시를 학생들에게 들려준다.

동영상 등이 실린 오디오 매체를 이용한 낭송시가 있으면 시를 들려주고, 이를 통해 시의 전체적인 분위기를 파악하게 한다.

③ 모두 시를 낭독하게 한다.

시에 운율이나 리듬감이 있을 경우 그것을 살려 연마다 끊어 낭송하게 하고 따라 읽게 한다. 이때도 ②에서와 같이 시의 분위기에 맞는 배경음악을 선택하고 낭송하게 한다. 음악은 수업을 듣는 다른 이들에게 분위기를 환기시킬 수 있는 수단이므로 음악과 함께 시낭송을 하게 되면 시를 감상하는데 큰 효과를 불러일으킬 것이다.

④ 시의 의미파악

일본어로 된 시이기 때문에 일단 시의 의미를 이해하고 해석하는 단계를 거쳐야 할 것이다. 난이도가 높은 단어의 뜻을 풀이하고 연마다 떠오르는 느낌을 중심으로 해설하도록 유도하는 게 좋을 것이다.

- 시를 중심으로 발표자가 어떤 문제인식을 갖고 있는지, 자아이해를 하고 있는지 그의 반응을 알기 위해 넌지시 아래와 같은 질문을 준비해 던진다.

● 예로 제시된 시

辻仁成(つじひとなり)作의 ‘はしくれ(하시쿠레:찌질이)’ 11)  
-はしくれ(찌질이)-

生きているだけで  
 面倒をかけてしまう  
 何も言わなければ  
 他人が傷つき  
 何か言えば  
 自分が傷ついてしまう  
 僕ははしくれ  
 まだほんのすこし  
 かじっただけ  
 れもんは酸っぱく  
 めろんは甘い  
 余計なことをまたいった  
 口がすべりやがった  
 角が立ち  
 誰かと気まずい  
 もう御免だ  
 これ以上  
 誰かにきらわれるのは  
 これからさきも  
 この繰り返し  
 僕ははしくれ  
 まだほんのすこし  
 しゃぶっただけ  
 また誰かに傷つけられる  
 容赦なく  
 唾を吐く  
 ああ痛い  
 ほんとうに痛い

살아있다는 것만으로  
 남에게 폐를 끼치고 만다.  
 아무 말도 하지 않으면  
 누군가 상처받고  
 무슨 말이라도 하면  
 내 자신이 상처받고 만다  
 나는 짜질이  
 아직 아주 조금  
 값아본 것 뿐  
 레몬은 시고  
 메론은 달다고  
 쓸데없는 말을 또 했다.  
 헛말이 나오고 말았다  
 모가 나고  
 누구와도 맞지 않는  
 이제 나도 모르겠다  
 이 이상  
 누군가에게 미움 받는 것은  
 이제 앞으로도  
 또 이렇게 되는  
 나는 짜질이  
 아직 아주 조금  
 조금 맛본 것만으로  
 또 누구에겐가 상처 받는다  
 가차 없이  
 침을 뱉는다  
 아아 아프다  
 정말 아프다

· 함께 공부할 단어

はしくれ	かじる	余計だ
酸っぱい	すべる	しゃぶる
容赦なく	唾を吐く	繰り返し

11) 辻 仁成 (つじ ひとなり:쓰지 히토나리) 1.1959年-現在, 동경에서 출생. 2.音樂家·詩人·作家·映画監. 3.平成元年「ピアノシモ」로 「스바루 문학상 수상」. 4.平成6年「母なる風と父なる時化」로 芥川賞 후보에 오름. 5.平成7年「アンチノイズ」로 三島賞후보 에 오름. 6.平成9年「海峡の光」로 芥川賞수상. 7시집으로 『屋上で遊ぶ子どもち』, 『希望回復作戦』, 『応答願イマス』, 『辻仁成詩集』 이외에 エッセイ集·童話·絵本등 많은 저서가 있음.

## 1. 이 시를 선택한 이유는 무엇인가.

- 자신이 아직 어리석고 성숙해 있지 않았다는 생각이 들었다. 하지만 아무리 노력해도 부족하지 않은가 하는 불안이 엄습할 때도 있다.

- 「はしくれ」란 시 속에 우리들의 모습이 투영되어 있다고 생각한다.

지금 우리 대학생들이 가지고 있는 고민거리리는 크게 장래에 대한 걱정, 현재 처해져 있는 경제적 상황, 그리고 학생들 간의 인간관계에서 오는 것들이다. 겉보기에는 잘 차려 입고 티 없는 웃음을 웃고 있는 것 같이 보이지만 속내를 들여다보면 고뇌들로 가득 차 있다.

다른 발표를 참고한 학생들의 얘기를 참고하면 다음과 같은 예도 있다.

- A학생: “저는 요즘 잠을 못자고 있습니다. 오히려 밤이 두렵습니다. 잠을 자면 반드시 악몽을 꾸기 때문입니다. 꿈에서는 항상 어딘가를 찾아가는데, 찾아가면 나오는 것은 무서운 사람들뿐입니다. 아버지가 회초리를 들고 서 있거나 누군가 돈을 갚으라고 소리 지르는 꿈입니다. 물론 제가 항상 다음 학기 등록금을 걱정하는 것은 사실입니다. 그래서 매일 같이 아르바이트를 하고 있습니다. 방학 중에 다른 아이들은 학원도 다니고 취미활동도 하고 학기 중에 쌓인 피로를 재충전해야 하는데, 저는 방학 중에는 다음 학기 등록금을 벌기 위해 하루 종일 커피전문점에서 일해야 합니다. 남들같이 어학연수도 가고 싶은데 부모님의 도움을 받을 수 없는 처지여서…….”

- B학생: 저는 삶이 힘들더라도 항상 긍정적으로 살려고 노력하고 있지만 제 주위의 졸업하고도 노는 선배들을 보면 미래가 두렵습니다. 집안에 대학생이 셋이 있어 아르바이트도 해야 합니다. 공부에만 전념해야 한다는 강박감에 아르바이트도 줄였습니다만, 취업을 위해 해야 할 일이 너무 많습니다. 부모님은 항상 좋은 직장 잡으라고 말씀하시지만 돈은 주시지 않습니다. 이번에도 장학금을 받지 못해 학자금 대출을 받았습니다. 얼마 전에는 제 인생이 너무 두려워 저만 바라보고 있던 여자친구와 헤어지고 흐느끼는 그녀의 얼굴을 보며 돌아서야 했습니다. 도대체 성공적인 인생을 살려면 얼마나 어떻게 노력을 해야 할까요?

## 2. 이 시가 당신의 삶속에서 일어나고 있는 일과 어떤 관련이 있는가.

- 저는 삶이 힘들더라도 항상 긍정적으로 살려고 노력하고 있지만 제 주위

의 졸업하고도 노는 선배들을 보면 미래가 두렵습니다. 집안에 대학생이 셋이 있어 아르바이트는 최대한 줄이고 공부에만 전념해도 할 것이 너무 많습니다.

- 「はしくれ:찌질이」 에 비추어진 나의 삶은 어떠한가? 가능하면 일본어로 작성해봅시다.

どこまで努力したら成功だといえるだろう。私たち若者は成功が見えない不安な時代に生きている。

入學當初教職を目指していたから、その課目を履修するようになったらよいと思った。しかし、現在の状況を考えると教職課目を履修してもそれというほどのメリットはない。なぜかというと、日本語教師採用試験が非常に難しいからである。

仕事場が探せないかもしれないという不安で、就職のための様々な準備に追われているが、際限のない課題だけが山積していて既にくたびれてしまったような気がする。どこに中心を置くべきか、先の見えない社会の中で自分のことをはしくれだと感じているのは私だけではないと思われる。

さて、わたしたちの到達点はどこだろう。

- 자기 동일시: ‘찌질이’는 우리가 예전에 읽던 그런 아름다운 내용의 시는 아니다. 이 시는 언뜻 보아 무슨 내용인지 이해가 안 될 수도 있고, 이 시가 주는 어두운 이미지 때문에 이 시를 두 번 다시 바라보지 않으려는 사람도 있을 것이다. 사람들은 특히 인생의 굴곡이 없어 좋고 아름다움만을 추구해온 사람들에게는 더욱더 이 시가 마음에 들지 않을 것이다. 그러나 상처가 무엇이고 고통이 무엇인지 뻗속까지 아는 사람들에게는 이 시가 점점 내 자신의 이야기처럼 친숙하게 느껴질 것이다.
- 문제의식: 아직도 모가 나고 누군가에게 상처받기 쉽고 상처 주기도 하는 자신이 마음에 안 든다.
- 「はしくれ」의 주제와 나의 인생은 얼마나 비슷한가.

僕ははしくれ まだほんのすこしかじっただけ

僕ははしくれ まだほんのすこししゃぶっただけ

「はしくれ」가 무엇인지 조금씩 알아간 학생들은 누구에게도 누구와도 어울리지 못할 것 같은 내 자신이 이 세상에 단 혼자뿐이 있는 것이 아니라는 것을 조금씩 알게 된다. 아직 조금 인생을 산 것 뿐인데 남에게 피해를 주는 내 자신이 싫은 것은 나뿐만이 아니라는 것을 알게 된다.

밤에 악몽을 꾸고 입맛도 없고 모든 사람이 싫고 특히 내 자신이 싫었는데, 그러한 사람이 나 혼자만이 아니라는 것을 알게 되었을 때, 시인에게 동정을 하기 시작한다. 자기 자신을 '찌질이'에 투영하는 순간 '찌질이'는 불쌍해지고 어루만져 주고 싶다.

또한 그런 '찌질이'가 자기 자신이라는 것을 생각하니 이제는 눈물이 난다. 그러나 수업시간에는 눈물을 흘릴 수 없다. 그저 마음속으로만 흘린다.

4. 당신에게 특별히 의미 있는 구절이나 시상이 있는가, 그리고 이러한 구절이나 시상은 자신이 안고 있는 어떤 문제와 관련이 있다고 생각하는가.

- 문제의식: 친구와 또는 이성친구와 얘기를 나눌 때 무척 예민하게 반응하는 자신이 싫다. 자신의 좋지 않은 부분이 폭로될까 두려울 때도 있다.

何も言わなければ  
 他人が傷つき  
 何か言えば  
 自分が傷ついてしまう  
 僕ははしくれ

※유의점: 옛날과는 다르게 요즘 학생들은 그룹을 형성하여 생활한다. 마음에 맞는 친구 두셋이 모여서 공부부터 식사 그리고 이야기까지 마치 가족 처럼 지내는 것 같다. 외부자의 시선으로 보면 폐쇄적으로 보이지만 이들의 이야기를 들어보면, 누군가에게 말하면 상처주고 내가 상처받을까 봐 선뜻 다른 사람을 받아들이지 못한다고 한다. 맞벌이 부부를 부모로 둔 지금 우리의 대학생들은 어릴 적부터 대부분의 시간을 홀로 지내야 했고 게임이나 TV등의 의사소통이 없는 매체와 친숙해져 있기에 마음이 통하는 의사소통에 능하지 못한 점을 이해하고 그들의 이야기에 귀를 기울이고 어드바이스를 해야 할 것 같다.

5. 이 시에서 바꾸고 싶은 부분은 없는가.

容赦なく  
 唾を吐く



ああ痛い  
ほんとうに痛い

- 학생의 변; 얼마나 많이 자신이 싫으면 아플까. 그 느낌을 알기에 ‘痛い’라는 단어의 느낌이 가슴 깊숙이 와 닿는다. 하지만 그 ‘痛い’라는 단어를 계속 지니고 살기에는 너무 두렵고 버거울 따름이다. 옆에 있는 다른 학생들도 마찬가지이다. 커피 전문점 컵을 들고 앰피3음악을 들으며 친구들과 웃어 봐도 가슴 한 구석은 어딘가 시리고 아프다. 탈출구를 찾아보려고 해도 뾰족한 수가 없다. 정신병원에서 상담도 받아보고 싶고, 종교도 가져보고 싶다. 그러나 그렇게 하려 해도 그것은 아닌 것 같다. 마음의 병을 드러내고 싶어도 드러낼 수가 없다. 나의 마음의 병을 가족들에게 이야기해 보지만 가족들은 별로 관심이 없다. 누구도 관심이 없어도 이제는 그 지긋지긋한 병을 스스로 치료하고 싶다. 지금상태의 나를 쓰레기통에 버리고 싶다. 이러한 정신 상태를 극복하여 좀 더 긍정적이며 적극적으로 친구들과 부딪혀가는 자신의 모습을 상상하며 다음과 같이 노래하고 싶다.

だけど  
くじかない  
ぶつかってみたい  
前向きで 進みたい

시구 하나하나가 낯설지만 반복해서 보고 들을수록 마음속 응어리진 곳에 파고 든다. 나와 같은 아픔을 지닌 사람이 쓴 시를 보고 죽을 만큼 아픈 마음의 병이 나 혼자만의 병이 아니라는 것임을 조금씩 느껴가는 순간 옆 친구들을 보니 친구들도 그렇게 느끼는 것 같다. “세상에 ‘찌질이’는 나 혼자만이 아니다”라고 느껴질 때 조금씩 세상에 대한 부끄러움과 수치심이 없어지고 머릿속에 가슴속에 맺혔던 응어리도 뺩하고 툭리는 것 같다. 그래서 이제는 ‘ぶつかってみたい’ 내가 왜 이렇게 힘들게 살아야만 하는지 부딪혀 보고 싶다는 마음이 응어리진 가슴속 한구석에서 솟아나기 시작한다. 다른 학생들도 마찬가지인 것 같다.

7. 이러한 자신의 상태를 극복하기 위하여 시 이외에 어떤 노래나 수필 또는 영화가 있다고 생각하는지 함께 생각을 해 본다.

◆ 『둔감력』이란 책을 추천;

예민함이 있어야 하고 중요하다고 믿는 사람들이 많다. 하지만 너무 예민하다 보면 피곤한 삶을 살게 되는 경우가 많다. 『둔감력』이란 책은 이런 사람들에게 약이 되는 책자이다. 성공한 사람들을 보면 공통점이 있는데, 그가 갖고 있는 재능의 바탕에는 반드시 좋은 의미의 둔감력(鈍感力)이 있다는 것이다. 인간관계나 세상에 대해 약방의 감초처럼 발휘되는 그의 둔감함은 대체로 자신의 본래 재능을 더 크게 키워주고 자신의 능력과 힘을 발휘하게 해 준다는 내용을 담고 있다.

- ◆ 영화 <샤인> 추천; 극심한 신경쇠약에 걸린 천재예술가가 상처받은 자신을 어떻게 자신을 치유해 가는지에 관한 내용을 다룬 영화임.

런던의 왕립 음악 대학에서 데이빗(David Helfgott: 노아 테일러 분)은 전설적인 외팔이 교수 세실 파크스(Cecil Parkes: 존 길거드 분)의 지도를 받는다. 그 역시 데이빗 못지 않게 기괴한 인간이었다. 파크스 교수는 데이빗에게서 소위 천재의 광기를 발견한다. 그러나 눈부신 재능에도 불구하고 데이빗은 가족과의 단절을 감당해내지 못한다. 자신만을 위해 가족을 버리고 왔다는 죄책감과 성공에의 압박감을 견뎌내지 못한 그는 영육이 산산히 부서져 버린다. 비록 메이저 콘서트에서 악마의 교향곡이라는 라흐마니노프 3번을 완벽하게 연주해내 음악적인 승리를 쟁취하지만, 극심한 신경쇠약에 시달린 끝에 고향 호주로 돌아와 정신병원에서 10년이란 혼돈과 격리의 세월을 보낸다. 중년의 점성술사인 길리언(Gillian Helfgott: 린 레드 그레이브 분)과의 우연한 만남이 뜻하지 않은 로맨스로 발전해 두 사람은 결혼을 한다. 길리언의 헌신적인 사랑으로 카오스와 같던 정신세계의 안정을 회복한 데이빗이 그녀가 마련해준 콘서트를 감동적인 연주로 장식하게 되고, 아버지의 무덤을 찾은 데이빗은 마침내, 평생에 걸쳐 자신을 짓눌러 왔던 영혼의 상처로부터 해방된다.<sup>12)</sup>

#### ● 제4단계

- ① 발표자가 몇 개의 항목의 질문을 준비해 의견을 교환한다.
  - 시 내용을 이해하게 하고, 이를 자신의 인생 경험에 빗대어 보게 한다.
  - 학생들에게 무기명 쪽지에 시를 읽고 느낌을 쓰고 쪽지의 내용에 관해 서로 이야기 해 보게 한다.
- ② 과제를 제시한다.
  - 시 수업에 관한 소감을 적게 한다. 토론에 참가하지 않은 학생들의

12) <http://movie.naver.com/movie/bi/mi/basic.nhn?code=17970> 2011.8.20 참조

반응을 알기 위해 시에 관한 느낌을 간단히 적고 같은 주제로 일본어 작문(장르는 자유로이)을 해오게 한다. 아니면 쓰고 싶은 누구에겐가 편지를 쓰게 한다.

## 5. 끝머리에

시에는 시인의 감동과 정서가 드러나 있다. 감동이 아닌 경우에는 자신의 무의식을 일깨워주고, 의기소침하게 가라앉은 자신을 발견하게 해 주는 요소가 있다. 뿐만 아니라 시는 인간의 모습을 다른 것에 비유해 보다 리얼하게 진실되게 드러내 주기도 한다. 이러한 개념들을 잘 읽어 내면 우리는 자신의 내면을 치유하고 소통할 수 있으며 정서적인 인간이 될 수 있다. 적응력을 높이고 자발성을 기르고 긍정적인 자아상을 기르는데 어느 정도 이바지 할 수 있으리라 믿는다.

학생들이 발표하는 여러 시를 취급하면서 이번 수업을 통해 다음과 같은 효과도 거둘 수 있었다고 생각한다.

- 수치심 죄악감 때문에 자유롭게 얘기 못한 대화도 열린 마음으로 토론할 수 있다.
- 긍정적 자아상의 형성을 돕는다.
- 진정으로 자기 평가하는 능력을 계발시킨다.
- 문제해결을 위해 보다 건설적이며 적극적인 행동계획을 수립한다.
- 여러 가지 욕구나 흥미의 범위를 풍부하게 하는 상상력을 촉진시킨다.

일본이나 한국에서 비블리오테라피는 아직 신생학문이다. 그렇기 때문에 치료과정에 대한 묘사만 있을 뿐 문학치료에 대한 명확한 기준을 세우고 그 효능을 검증하고 있지는 못하고 있는 것으로 알고 있다. 최근 심리학 방법을 원용하여 측정과 통계를 통해 문학치료의 효능을 검증하려는 움직임이 있지만 아직 제대로 수량화된 데이터는 접해 본 적이 없다고 들었다. 비록 수량화가 가능하다 할지라도, 시에는 측정 불가능한 감동·이미지·정서·울림 등 스트레스에 지친 현대인이 필요로 하는 창조적 예술로서의 가치가 가득하다. 우리의 여러 가지 욕구나 흥미의 범위를 풍부하게 하는 상상력을 촉진시키는 요소도 무궁무진하다. 논문을 집필하면서 새삼스럽게 여러 가지 관점에서 시를 활용하고 이 효과를 교육현장에 소개하는 작업이 필요하다고 느꼈다.

## 【参考文献】

변학수(2006), 『통합적 문학치료』, 학지사

원동연 · 유혜숙 · 유동준 지음(2005), 『5차원 독서치료』 김영사

小島憲之 校注(1989), 『古今和歌集』新日本古典文学大系5 岩波書店

渡辺純一 (2007), 『鈍感力』, 集英社

Jack J. Leedy (1980) 『Poetry Theraphy』 Lippincott Philadelphia

Jacob Grimm(1878), Deutsche Mythologie, BerlinAufI,

<http://movie.naver.com/movie/bi/mi/basic.nhn?code=17970> 2011.8.20

## 要 旨

詩には詩人の感動と感情が表れている。感動がない場合には、自分の潜在意識を目覚めさせ、意気消沈した自分を発見させてくれる要素がある。それだけでなく、詩は人間の姿を他のものなどにたとえて、よりリアルに真実を現わしたりもする。これらの概念をよくお読み出せば、我々は自分の内面のトラウマを克服し、情緒的な人間になることができる。適応力を高め、自発性を養い、肯定的な自己像を育てることもできると思われる。

こうした詩の側面を活用して詩による治療の授業を試みた結果、学生たちの発表から次のような効果が確かめられた。

- ・羞恥心のために自由に話づらい話も心を開いて論議することができる。
- ・肯定的な自我の形成を助ける。
- ・真の自己評価をする能力を啓発させる。
- ・問題解決のために、より建設的かつ積極的な行動計画を立てられる。
- ・様々な欲求や興味の範囲を豊かにする想像力を促進させる。

日本や韓国では文学による治療はまだ新生学問である。このため、治療過程を説明するのに留まり、文学による治療のための明確な基準を立て、その効果を検証しているものはないと聞いている。最近、社会科学の一分野である心理学の方法を援用して、すでに統計が出されている文学による治療の有効性を検証しようとする動きがあると聞いているが、まだまともに数量化されたデータを目にしたことがない。ただし、数量化が可能だとしても、詩には測定不可能な感動・イメージ・情緒・響きなどの創造的な芸術としての固有の価値がとても高い。また我々の様々な欲求や興味の範囲を豊かにする想像力を促進させる要素も無限大である。今後、新しい角度から詩を楽しみ、この効果を教育現場に導入する作業が必要だと考えられる。

キーワード：文学治療(Biblio Therapy)・情緒・詩・適応力・肯定的 自我

투 고 : 2011. 8. 31  
1차 심사 : 2011. 9. 10  
2차 심사 : 2011. 10. 1



# 視聴覚資料を用いたシャドーイング練習\*

—上級レベルの学習者を対象に—

崔真姫\*\*

(e-mail: pumpkin98@hanmail.net)

---

## 目次

---

1. はじめに
  2. シャドーイングとは
  3. 日本語教育におけるシャドーイング研究
  4. 調査の概要
  5. 分析と考察
  6. まとめと今後の課題
- 

## 1. はじめに

日本語教育の現場において、シャドーイング指導法について外国語能力の向上に有効であるという研究結果が報告されている。シャドーイングは、「聞こえてくる音声を遅れないように、できるだけ即座に声に出して再生する口頭練習」であり、多量のインプットとアウトプットを必要とする方法である。かなり以前から同時通訳の訓練法として用いられており、シャドーイングは日本語の習得にも役立つと予想できる。また、個人レベルだけの訓練法ではなく、教育機関での導入の可能性もある。

シャドーイングの実践で効果が認められた点はリスニング力、復唱力、発音速度である。従来の日本語教育におけるシャドーイング研究では主に発音、音声、アクセント、音読の早さなどを分析している。また、ほとんどの研究では映像を使わずにシャドーイング練習をさせている。本研究ではシャドーイングが口頭運用能力をどのくらい高めるのかに注目し

---

\* 本研究は科研費(21402007)の助成を受けたものである。

\*\* 白石文化大学日本語学部専任講師

ている。また、日本語学習者の学習への興味や動機づけを高めるために、アニメーションやテレビドラマといった視聴覚資料を用いてシャドーイング練習の実践を試みた。

## 2. シャドーイングとは

シャドーイングという名称は、shadowという動詞に由来し、そのことからわかるように相手の発する音声を正確にまねることを基本にしている。シャドーイングは聞こえてきた音声言語をもとに、音読は目で見た文字言語をもとに、ともに頭の中で内的な符号化を行い、どのような発音であるか認識し、その後それを声に出して発声するタスクである。

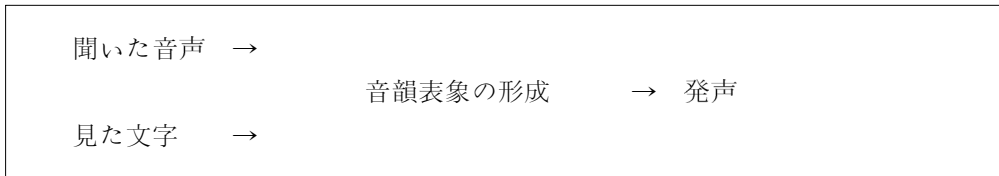


図 シャドーイングとは？音読とは

門田(2010,p.26)

門田(2007)は、シャドーイングは耳からの音声インプットをもとに、その言語インプットの音韻表象(phonological representation)をたやすく頭の中に作り上げることができ、他方で学習者のL2の発話速度を向上させるとともに、音韻ループ<sup>1)</sup>内のサブボーカルリハーサル(subvocal rehearsal)の高速化が達成できると述べている。つまり、シャドーイングは目標言語の音声データベースをつくることができるのみならず、文法の内在化にまで役立つと考えられる。文法の内在化(Internalization)とは文法を知識で終らせず、具体的に口頭で話せるようになることである。言語の文法を意識しないで使えるレベルに達した状態、言語習得において望ましい状態であるといえる。

シャドーイングには音韻ループがかかっている。音韻ループでは聞いた音声情報を何もしないと消滅してしまいが、内語<sup>2)</sup>によって反復が続く限り記憶が保持される。耳にした音声情報をいったん音韻ループに蓄えてそれを反復しているのである。シャドーイングは新しく聞いた音声情報を内語としてではなく口に出して反復するわけで、この口頭反復が音声情報を消滅させずに音声ループに蓄えて、頭の中に音そのまま残ることになり、それだけ意

1)音韻ループ(phonological loop)は言語理論や推論を行うための音韻情報を保存するシステムで、内的言語を反復することにより情報を保持する。音韻ループは聞いた音声情報をそのまま保存する受動的音韻短期貯蓄と、音声情報を活発に繰り返す内語反復からなり立っている(門田・玉井,2004)。

2)内語(inner voice)は相手の言ったことを心の中で繰り返す声である(門田・玉井,2004)。



味理解がしやすくなるというわけである。聞こえてくる音声を同時的に、あるいは少し遅れて繰り返すというシャドーイングという行為は新しい情報を意識的に顕在化してボーカルリハーサル(内語発声復唱)を行っているといえる。

迫田(2010)はシャドーイングをコミュニケーションタスクではないが、短時間に多くのインプットとアウトプットを保証する方法として有効であると評価している。また、授業で取り入れた場合、三つの効果をあげている。自然な速度のインプットであること、自然で標準的な日本語を与えられること、練習形態を学習者がコントロールできることである。

### 3. 日本語教育におけるシャドーイング研究

#### 3.1 日本におけるシャドーイングの効果に関する研究

日本語教育におけるシャドーイング研究としてシャドーイングの効果を検証したものがある。

迫田・松見(2005)では、韓国の大学生約30名を対象に1ヶ月の集中研修において、授業の最初の時間に、半数を音読中心、半数をシャドーイング中心で指導した結果、シャドーイング群のほうが音読群より複数のテストにおいて、より効果が高かった。

迫田(2006)では、同様に韓国の大学生30名を対象に、授業の前に書写を導入する書写群とシャドーイングを導入するシャドーイング群において調査を行った結果、書写よりもシャドーイングの方がより効果が高かった。これらのことからシャドーイングが音読や書写よりも効果が高いことが検証され、シャドーイングの有効性が認められた。

また、迫田他(2007)では韓国の大学生の1ヶ月の集中研修で、レベルの違いによるシャドーイングの有効性を検証し、レベル低群の方がレベル高群よりも効果が出やすい結果が出た。これらの研究から日本語教育においても、シャドーイングの練習が日本語の習得に有効であることが示唆された。

門田・玉井(2004)は、シャドーイングに用いる教材について、「背伸びをしないことが大事」として、現在のレベルよりも少し優しい「i-1」(アイマイナスワン)の教材を勧めている。そこで、迫田・古本(2008)は韓国の大学生の1ヶ月の集中研究において、シャドーイングの教材の難易度がどの程度、効果に影響を及ぼすかについて調査した。その結果、「i-1」だけではなく、現在のレベルより少し難しい「i+1」でも成績が向上することを明らかにしている。

シャドーイングの導入に対する学習者のアンケートでは、望月(2006)の研究もある、日本の大学に在籍する日本語学習者を対象として、17回のシャドーイングを実施し、その感想についてアンケート調査をした結果、多くの学生が肯定的に評価していることがわかった。これらの結果から、シャドーイングが個人レベルだけの訓練法ではなく、教育機関で

の導入の可能性が検討できたといえる。しかし、どのように導入すればより効果が出るのかに関しては十分な研究がなされていない。

### 3.2 海外におけるシャドーイングの効果に関する研究

張・倉持(2008)は韓国の初・中級の大学生を対象にシャドーイングの練習を実施した。発音誤用の減少を報告し、発音指導の方法としてシャドーイングの練習の可能性を評価している。崔(2010)はリスニング群とシャドーイング群に分けて調査した結果、リスニング力と理解力に大きな差はなかったが、音読テストではシャドーイング群のほうが音読時間が速く、リスニング力の向上につながる可能性を示唆している。

邱(2011)は台湾の大学生を対象に敬語の口頭運用能力を高める実践を試みた。学習済みの敬語の文法項目がシャドーイング練習によって内在化されるのかを調査した結果、口頭運用力、特に敬語使用の正確性の向上に有効であることが明らかになった。

フォード(2011)は学生の動機と学習意欲を高めるために学生になじみの深いアニメやドラマなどを用いたシャドーイングの実践研究を行った。シャドーイングの効果が有効であり、敬語の語彙に関して聞き取りテストの伸びが顕著であるという結果が見られた。

近藤(2010)は教材の難易度に注目し、少人数グループによる課外授業での実践を試みた。その結果、易しい内容の教材は難しい内容の教材以上の効果が期待できるとし、易しい内容の教材は初心者日本語運用能力を伸ばす効果があるのに対し、難しい教材は既習者により有効であり、シャドーイングは意味の処理を要求する文法・読解能力の促進に最も効果があると報告している。

この他、シャドーイングの有効性を報告した実践研究として、古本・近藤(2011)、松見・タサニー(2011)、迫田・フェルナー(2011)、リード(2011)などがある。

このように、シャドーイング練習は日本語学習者のレベルに関係なく導入でき、発音においても、文法においても効果が期待できるであろう。

## 4. 調査の概要

### 4.1 調査参加者

2010年度後期(11月18日～12月9日)までの間、ハンバット大学日本語科の3年生を対象にシャドーイング練習法について説明し、志願者を募集した。取り出し授業で上級レベルの学習者(日本語能力試験2級以上<sup>3)</sup>)3名を対象にシャドーイング練習を行った。日本語学習者のレベルを正確に判定するために、SPOTテスト<sup>4)</sup>を用いた。調査参加者は週に

3)3人は教職科目の受講者であり、優秀である。3人のうち、1人は日本語能力試験1級を取得している。

一度集まって、新しい資料を使ってシャドーイング練習を行った。そして、次の週まで各自シャドーイング練習を続けてもらった。

## 4.2 シャドーイングの練習の内容と実施方法

シャドーイング練習は1ヶ月間行った。授業では30分～40分ぐらいシャドーイング練習をしている。シャドーイング練習は「映像を見ながらリスニング→映像を見ながらマンブリング→プロソディ・シャドーイング→意味の確認・文法説明(スクリプトの提示)→音読→コンテンツ・シャドーイング」の流れである。

「映像を見ながらリスニング」はスクリプトを見ないで、まず、シャドーイングの内容を聞き、話されている内容、話し方の特徴をつかむ。「映像を見ながらマンブリング」はスクリプトを見ないで、音声を聞きながらぶつぶつとつぶやくように発音する。発音よりも聞こえてくるように注意をする練習である。「プロソディ・シャドーイング」はリズム、イントネーション、ポーズ、発音などに注意しながら、テキストなしで音声を再現する練習である。

次に、内容を確認する。内容を確認する際、スクリプトは学習者に提示しているが、内容を理解してから、一度音読した後、回収した。自宅で個人的に練習する時は、スクリプトを持っていなかった。

最後に、「コンテンツ・シャドーイング」はスクリプトを見ずに聞こえてくる内容に焦点を当てながら、シャドーイングを行う練習である。

シャドーイング練習の後、学習者にチェックシートを配り、6日間毎日練習して、シャドーイング練習についての評価、間違ったところ、反省点などを記録するように指示した。調査参加者は毎日大体3～5回ぐらい練習をしていた。つまり、一週間に18回～30回ぐらいシャドーイング練習していることになる。また、最初と最後のシャドーイング練習は録音して提出してもらった<sup>5)</sup>。

本研究で用いた視聴覚資料の詳細は以下のとおりである。

表1 視聴覚資料

週	タイトル	特徴
1週目	CHANGE-チェンジ 1話	長さ：2分、話題：政治 登場人物：2人(男性1人、女性1人)
2週目	おもひでぼろぼろ	長さ：2分35秒、話題：成績/夏休み、 登場人物：6人(男性1人、女性5人)

4) SPOT(Simple Performance Oriented Test)は自然な発話速度で次々と読み上げられる文を聞きながら、解答用紙の同じ文中の空欄にひらがな1文字を書き取るというテストである。今回は小林典子から提供されたSPOT(A.ver,65点)を使用した。

5) 自宅でシャドーイング練習するときは授業での練習の順に従うことはない。プロソディ・シャドーイングとコンテンツ・シャドーイングをやってもらった。

3週目	ホテルノヒカリ2 1話	長さ：2分、話題：人事/企画会議、 登場人物：7人(男性4人、女性3人)
4週目	正義の味方 1話	長さ：1分16秒、話題：勤務態度 登場人物：2人(男性1人、女性1人)

「おもひでぼろぼろ」のみアニメーションであり、他は日本のテレビドラマである。テレビドラマのほうはよく知られており、調査参加者は何回か視聴した経験もある。

シャドーイング練習に用いたドラマの内容の一部を紹介しておく。チェンジ1話を表2に示す。

表2 「チェンジ1話」のSCRIPT

(人事部) ほ：ふたつきさん、おひさしぶりです。 ふ：えらいね。今日、着いたばかりなのに はい、これ、新しい社員証。 ほ：ありがとうございます。 ふ：君がいない間ね、ずいぶんと体制変わったんだよね。
--

### 4.3 分析の方法

シャドーイング練習の効果を検討するために、発話テストと語彙テストを実施した。発話テストは4コマ漫画を用いた再生テストと、ロールプレイを用いた。4コマ漫画のテストは決まった内容が韓国語で書いてあり、その内容を再生するテストである。事前テストは「미국으로 유학을 간대요.(アメリカに留学するんですって)」という内容であり、事後テストは「컴퓨터 수리 할 수 있어?(コンピューター、修理できる?)」という内容である<sup>6)</sup>。テストに出てくる文法項目を表3に示す。

表3 4コマ漫画のテスト

事前テスト	事後テスト
～という、～そうだ、～のだ/んだ	ことができる、可能動詞

ロールプレイは、事前テストは「断り」で、事後テストは「頼み」である。詳しい内容は以下のとおりである。

6) 『New 다락원일본어3』の4コマ漫画を用いた。2課は「미국으로 유학을 간대요」、13課は「컴퓨터 수리할 수 있어?」である。

表4 ロールプレイ

事前テスト 学生：断る側	Aさんに自分が持っている日本の本やビデオなどを説明してください。 Aさんが貸してくれと頼んでも何か理由をあげて、断ってください。
事後テスト 学生：頼む側	あなたに母から電話がかかってくる。母は今日外出するので、夕食を準備しておいたと言う。あなたは母が用意した料理ではなく、他のものを作ってくれるよう頼んでください。

シャドーイング練習を通じて、どのぐらい語彙が覚えられるかを調べるために、語彙テストを行った。語彙テストは3週目に、「チェンジ1話」と「おもひでぼろぼろ」の語彙から選び、テストを実施した。語彙テストは調査参加者に事前に知らせていなかった。

また、最初と最後のシャドーイング練習を比較し、分析した。

## 5. 分析と考察

### 5.1 事前テストと事後テストの比較

調査参加者の発話の誤用数<sup>7)</sup>を事前と事後で比べた結果、事前テストと事後テストの間に有意な差はなかった。SPOTテスト、再生テスト、ロールプレイの結果を表5に示す。

表5 事前テストと事後テストの結果

テスト 調査参加者	SPOTテスト		再生テスト		ロールプレイ	
	事前	事後	事前	事後	事前	事後
KJL1	63点	63点	誤用(1) 文節数(32)	誤用(1) 文節数(26)	誤用(0)/ 文節数(132)	誤用(0)/ 文節数(26)
KJL2	48点	52点	誤用(3) 文節数(34)	誤用(5) 文節数(29)	誤用(4)/ 文節数(86)	誤用(1)/ 文節数(32)
KJL3	46点	53点	誤用(4) 文節数(37)	誤用(2) 文節数(26)	誤用(5)/ 文節数(52)	誤用(2)/ 文節数(17)

SPOTテストにおいて、事前と事後でKJL1は全然変化がなく、KJL2とKJL3<sup>8)</sup>は若干点数が上がっている。SPOTテストは非常に発話スピードが速いため、発話スピードが速い内容を選択し、シャドーイング練習を行ったが、大きな変化は見られなかった。

7)本調査では言い間違い、言い直しを除いて、文法的に間違った表現を「誤用」とみなす。

8)KJL3はシャドーイング練習で聞き取りに自信が持てるようになったとコメントしている。

再生テストにおいても事前と事後で大きな差は見られなかった。文節数は事前より事後のほうが少ない<sup>9)</sup>。KJL1は事前(3.1%)と、事後(3.8%)で誤用率に変化がなく、KJL2は事前(8.8%)より事後(17.2%)の誤用率が高い。KJL3は事前(10.8%)より事後(7.6%)のほうが低い。

誤用パターンをみると、文法的正確さに関わる誤用より語彙レベルの誤用が多かった。上級レベルの学習者の場合、文法の間違いはほとんど見られず、語彙力が誤用数に影響していると思われる。学習者の誤用例を紹介する。まず、最もレベルが高いKJL1はすべて語彙の誤りである。次に例をあげる。

### (1)KJL1

#### ①事前

초등학교 다니는 제 조카 알죠?

\*小学生に通ってる私の甥、知ってるでしょ?

(→小学校)

#### ②事後

며칠 전부터 상태가 이상했는데 완전히 멈춰버렸어.

\*何日からちょっとおかしくなっちゃって、すっかりとま、とまちゃった。

(→何日か前から調子がおかしかったんだけど、)

KJL2、KJL3は語彙の誤用の他に「でしょ」と「わけではない」のモダリティに関わる誤用が見られた。

### (2)KJL2

#### ①事前

小学校に通っている私の\*マイ、\*知ってる?

(→めい) (→知ってるでしょ)

#### ②事後

그런 돈 없어. 살 수 있을 리 없어.

そんなお金はない。\*買うことができないよ。

(→買えるわけじゃない)

### (3)KJL3

#### ①事前

아, 항상 귀엽다고 자랑하던 조카 말이죠?

9)原本に当たる韓国語の文節数も事前より事後のほうが少ないため、再生テストで事前と事後の文節数の差は当然あるはずである。

あ、いつもかわいいいそう、かわいいだと、かわいいと \* 言ってためいこでしょ。

(→自慢してた)

②事後

お金がないの。買う、 \* 買うことができるはずがない。

(→買えるわけじゃない)

ロールプレイにおいても、KJL1は誤用例がなかった。KJL2は事前(4.6%)より事後(3.1%)の誤用率が低い。KJL3は事前(9.6%)より事後(11.1%)のほうが誤用率が高い。ロールプレイの場合、事前より事後の内容が簡単だったために、全体の会話の長さが短かったようである<sup>10)</sup>。

(4)KJL2

①事前

A:それはどんな内容ですか。

B:動物と人のこうかん、(A:共感) \* ストリですけど、

(→ストーリー)

A:どんな動物が出ますか。

B: \* いろいろの動物が出てます。出ています。犬、犬と猫と、 \* いろいろ動物。

(→いろいろな)

(→いろいろな)

②事後

A:今日、ママね、約束があって出かけるの。

B:あ、そうか、私、私、すぐ家に \* 帰ってるんですよ。

(→帰るね)

(5)KJL3

①事前

A:どんな内容ですか。

B:変人ガリレオという科学者がいるんですけど、刑事が難しいと、解けない事件があったら、この \* 科学者助けをもらって、事件を解決します。

(→科学者の助け)

②事後

A:夕食はコロッケ、作っておいたんだけど、

B:私、 \* コロケのよりうどんが \* 食べたいんですけど、

10)事前テストのロールプレイではドラマや本の内容を説明することがあり、事後テストの夕食のメニューの話題に比べ、事前テストの難易度が高かったと思われる。今後、話題設定の際、話題のレベルの難易度に注意する必要がある。

(→コロッケより)

(→食べたいんですけど)

語彙テストの結果、24点満点中、KJL1は22点、KJL2は23点、KJL3は22点であった。

KJL1は立候補を「りっこうほう」、候補者を「こうほうしゃ」と間違っている。KJL2は「信州」を覚えていなかった。KJL3は信州を「しんじゅう」と、政治を「せいち」と間違っている。上級レベルの学習者も長音に注意するように指導する必要がある。迫田・フェルナー(2011)はオーストリア人日本語学習者を対象にシャドーイング練習を実施した結果、長音より促音が早く習得できたと報告している。本研究の韓国人上級レベルの学習者にも長音の間違いが多く、習得しにくいと考えられる。

## 5.2 シャドーイング練習に対する内省

シャドーイングの練習を記録したシートを紹介する。最も細かく記録したKJL2の例をあげる。KJL2は最初は音声だけ聞いてシャドーイング練習を行ったが、政治に関わる内容が難しかったため、映像をみながら、シャドーイング練習を行っている。また、内容の長さに負担を感じたため、1分ずつ分けてシャドーイング練習をするなど工夫している。

새도영 연습 체크시트 1주 체인지		이름( KJL2 )
기간: 11월18일~11월24일		
매일 연습하고 본인이 능숙하지 못한 발음이나 자꾸 틀리는 표현, 반성점 등을 메모한다.		
날짜	연습횟수	반성 노트
11월18일	4회	<ul style="list-style-type: none"> <li>·1회 여자배우의 대사의 스피드가 빨라서 따라가기 어렵다. <u>핵심어휘는 들리나 세세한 발음까지 따라하기가 쉽지 않다</u>(음성만 들음)</li> <li>·2회~4회 <u>영상을 보면서</u> 연습. 음성만 듣고 연습할 때보다 배우의 표정이나 몸짓을 보고 전체적인 흐름을 알 수 있었다.</li> <li>여배우의 대사를 따라하는 것이 부담스럽다.</li> </ul>
11월19일	3회	<ul style="list-style-type: none"> <li>·1회 어제와 마찬가지로 영상을 보면서 연습 정치관련의 긴 명사부분이 빠르게 지나가 새도영할 수 없었다.</li> <li>·2회 <u>내용이 길어서 1분정도씩 나누어 연습했다.</u> <u>새도영하는 것이 조금 수월해졌다.</u></li> <li>·3회 여자대사의 처음 긴 부분(36초)부터 새도영</li> </ul>



		하기 어려움. 남자 대사는 새도읽하기 수월하다(음성만 들음)
		. . . . .
11월23일	4회	계속 따라 읽다보니 어느정도 머리 속에 익히는 표현도 상당히 있다. 내용과약은 충분히 되었음. 그러나 자꾸 못하는 부분이 있고, 정확한 발음으로 새도읽하는 것은 아직 무리인 것 같다.
11월24일	3회	연습의 효과인지 처음보다는 문장이나 어휘를 새도읽하기가 훨씬 수월해짐. 그러나, <u>스피드나 정확성에 있어서는 많이 부족함. 명사보다 동사부분이 새도읽이 잘 처리되지 못한 것 같다.</u>

### 5.2.1 「チェンジ」

「チェンジ」は登場人物「美山」のせりふが長くて速いため、調査参加者は困っていたようである。特に、一人で早口で25秒ぐらい話す部分が難しかったという。しかし、徐々にシャドーイング練習を重ねていくにつれて、間違う部分が少なくなっている。最も間違った部分を以下に示す。美山が朝倉啓太について調査したのを話す場面である。

美山：朝倉啓太、1973年3月5日生まれ、5才の時にお父様が福岡県議会議員に当選し、その3年後、衆議院議員に、お兄様の昌也さんは早くからお父様の後継者として育てられたけど、あなたは政治とは無縁な生活を送り、中学、高校と、天文クラブに所属。福岡からわざわざ信州大学に進学した理由は、星のきれいなところで暮らしたかったから。

上の部分のシャドーイングでは、KJL1は最初の練習では10個所、最後の練習では1個所だけできなかった。KJL1は最初の練習では「お父様の後継者として育てられたけど」はシャドーイングができなかったが、最後の練習ではほとんどシャドーイングできて、「育てられた」だけできなかった。KJL1は内容はもちろん、発音、イントネーションなども上手にできている。KJL1の場合、4日目は自然に覚えられたようで、テープより自分が先に発話してしまうこともあったとコメントしている。

KJL2は録音していなかったので、コメントだけをまとめると「お父様の後継者として育てられたけど」の部分ができなかったという。そして、「育てられたけど」の部分が最後までうまくできず、名詞より動詞のほうがシャドーイングがしにくいと感じている。

KJL3は最初の練習では「福岡県議会議員に当選し」「お父様の後継者として育てられたけど」「天文クラブに所属」などがシャドーイングできなかったが、最後の練習ではか

なり改善され、単語レベルの「福岡県議会」「育てられたけど」「所属」の間違いなどが見られた<sup>11)</sup>。KJL3の内省によると、二日目の練習で内容はほとんど理解できたが、一人の長い台詞はシャドーイング練習がしにくかったという。また、内容は理解できても、普段使わない政治用語などは最後の練習においてもシャドーイングするのが難しかったという。例えば、県議会議員、衆議院などである。

### 5.2.2 「おもひでぼろぼろ」

「おもひでぼろぼろ」は登場人物が多かったが、ほとんど女の人であったため、参加者は上手にシャドーイングしている。KJL1は最初の練習では6個所、最後の練習では4個所シャドーイングができなかった。KJL1はドラマをよく見るが、アニメーションをあまり見ないせいかアニメーションのほうがシャドーイングがしにくかったと述べている。特に、母の台詞が最後の練習でもうまくできなかったという。

(6)母：もう死んじゃったでしょ。うちは田舎がないの。

ないものねだりしないでちょうだい。

S(×)<sup>12)</sup>

KJL2は内容は易しいが、会話の縮約形が難しく、母とお祖母さんの台詞が聞き取れなかったと述べている。

KJL3は最初の練習では8個所シャドーイングできなかったが、最後の練習では3個所のみであり、助詞「の」は省略し、おばあちゃん家、文末の「のね」を「よね」と間違っシャドーイングをしている。

(7)女の子2：おうち帰ったら、すぐ田舎のおばあちゃん家に行っちゃうんだもん。

S(×)                  S(×)

母：やっぱり算数だめだったのね。

S (よね)

KJL3は、最初の練習では「ないものねだりしないでちょうだい」の理解が十分ではなかったため、シャドーイングができなかったが、最後の練習ではできている。最後の練習では発音とイントネーションも上手にできている。

11) 「福岡県議会」「育てられたけど」の部分はKJL3がシャドーイングしなかった部分であり、「所属」は間違って、「しゅしょく」とシャドーイングしてしまった部分である。

12) 「S×」はシャドーイングできなかった部分を表す。

### 5.2.3 「ホテルノヒカリ2」

「ホテルノヒカリ2」は台詞が短い、会議の場面の内容が難しかったと感じている。政治用語と同様、ビジネス用語に慣れなかったと思われる。また、登場人物の発話速度と会話のやりとりが速いため、シャドーイングが困難だったようである。特に、3人とも男性の発話が難しかったという。

KJL1は最初の練習では5箇所、最後の練習では2箇所シャドーイングができなかった。内容は理解できているが、会議の場面で会話のやりとりが速かったため、ついていけなかったようである。

(8)いぎき：えへ～、いまから変更なんて冗談じゃないですよ。

部長：いぎき！クライアントの意向に従わなければならない。

山田：早急に予算の修正と発注関係の訂正をお願いします。

S(×)

最後の日に録音した、ほかの練習の録音を聞いてみると、「意向に従わなければならない」の部分はシャドーイングができていることもある。一方、山田の発言は部長の話が終わってすぐ始まっており、はじめの部分「早急に予算」はシャドーイングができなかった。

KJL2は最初の練習では4箇所、最後の練習では2箇所シャドーイングができなかった。

(9)ほたる：雨宮です。香港から戻ってきたんです。

せの：香港？

ほたる：香港の商業ビルをリニューアルするプロジェクトで3年間

S(リニューアル)

KJL2は「リニューアル」が聞き取れなかった。しかし、最後の練習ではシャドーイングしているのだが、長音を守っていない。業務指示の部分は最後までできなかった。

(10)山田：早急に予算の修正と発注関係の訂正をお願いします。

S(×)

また、KJL2は全体的にイントネーションが不自然だったが、最後の練習ではよくなっている。聞き取り能力が低いKJL3は最初は9箇所、最後の練習では5箇所シャドーイングができなかった。最初の練習では簡単な間違いが見られるが、最後の練習では改善された。

(11)以上です。みなさん、急ぎをお願いします。S（急いで）

KJL3は最初「いそいで」とシャドーイングしたが、最後の練習では「急ぎで」とシャドーイングができています。また、最後の練習では難しい語彙などもある程度シャドーイングができるようになった。しかし、一人で長く話す台詞は内省によると聞こえていると書いているが、シャドーイングはあまり改善されなかった。

(12)山田：オープンを間近にひかえたガールズバー屋形船ですが、

S(×)

和風の外観にステンドバーという意外性は好評でした。

S(×)

#### 5.2.4 「正義の味方」

「正義の味方」に対して、調査参加者は台詞の発話速度も速いほうだが、ほかのスキriptに比べて易しかったとコメントしている<sup>13)</sup>。

KJL1は最初の練習も最後の練習も1箇所だけシャドーイングができなかった。

(13)課長：(前略)勤務時間に爪の手入れはいかなものか。僕たち、国民の大切な血税で仕事をさせてもらってる以上、身を粉にして働く責任があるというからね。

S(×)

KJL1は「正義の味方」の演劇に参加していたためなのか、課長の台詞が長いにもかかわらず、上手にできている。「血税」だけシャドーイングができなかった。

KJL2は最初の練習では4箇所、最後の練習では2箇所シャドーイングができなかった。

(14)課長：え、あ、それは

まきこ：課長の喫煙4分に比べ、私のネイルケアは15分

S(×)

(14)のように、最後の練習において話し相手の発話が終わって、始まろうとするところがシャドーイングできなかった。KJL3は欠席しており、録音の課題を提出しなかった。

シャドーイング練習の結果をまとめると、学習者の発音スピードが速くなっているといえる。三宅(2007)はシャドーイングが学習者の長音スピードを速くし、この高速化が語彙チャンク (lexical chunks) の定着に寄与すると報告している。また、門田(2010)はシャドーイングが復唱能力(アウトプットに関わる調音プロセス)の発達につながると述べている。日本語習得

13) 「正義の味方」は個人的に視聴していることに加え、大学の学園祭においても演劇で観覧したことがあり、内容をよく理解していたと思われる。

においてシャドーイングはインプットとアウトプットをつなぐ役割をする有効な練習法であると考えられる。

### 5.3 シャドーイング練習の注意点

本研究でシャドーイング練習に用いたドラマやアニメーションはシャドーイングの長さは2分程度だった。上級レベルの学習者であるが、2分の長さはかなり難しいと述べており、1分程度の長さが好ましい。まず、1分程度のもので慣れてから、徐々に長いものをシャドーイングするほうがよいと思われる。

そして、資料の選定において、登場人物の数と発話者の発話速度も考慮する必要がある。登場人物が多くて、会話のやりとりが複雑な場合、相手の話が終わってすぐ、別の発話者が会話を始める部分でシャドーイングができなかった。登場人物も最初は少人数から、次第に大人数へと導入していくのがよいだろう。

登場人物の数とともに、大事な要素は発話速度である。シャドーイング練習は発話速度が速くなるという効果が期待されるが、本研究の発話速度は非常に速かった。日本人母語話者の発話速度に比べ、登場人物の発話速度が非常に早口だった。日本語母語話者もシャドーイングがしにくい程度だったと思われる。今後、資料を選択する際、発話速度も考慮すべきである。

門田・玉井(2004)は「背伸びをしないことが大事」として、現在のレベルよりも少し易しい「 $i-1$ 」の教材を勧めている。一方、迫田・古本(2008)は「 $i-1$ 」の教材だけではなく、現在のレベルより難しい「 $i+1$ 」でも成績が向上すると述べている。本研究では「 $i+1$ 」に当たる内容をシャドーイング練習をしてもらった。シャドーイング練習のとき、一回しか内容を確認していなかったため、新しい単語、難しい専門用語などがわからないまま、正しく聞き取れない状態で、シャドーイングしてしまうことがあった。スクリプトを全部回収しており、調査参加者は一週間自力でシャドーイングするしかなかったので、心理的な負担がかかったと思われる。練習の間、内容がはっきりわからない場合、調査参加者の要請があればスクリプトを提示したほうがよいと考えられる。

## 6. まとめと今後の課題

本研究では、韓国の大学における上級レベルの大学生を対象に、視聴覚資料を用いたシャドーイング練習の実践を試みた。取り出し授業でシャドーイング練習を行った結果、SPOTでは事前より事後のほうが得点が若干高くなっている。

再生テストとロールプレイの結果を事前と事後で比較してみると、口頭運用能力に関して

は明確な効果が認められなかった。しかし、調査参加者の内省ノートと録音ファイルを分析した結果、シャドーイングによって復唱能力が伸びていると推測できる。日本語習得においてシャドーイングはインプットとアウトプットをつなぐ役割をする有効な練習法であると考えられる。

本研究では特定の文法項目を設定していなかったため、口頭運用能力を分析し、具体的に効果を明らかにすることが十分ではなかったと考えられる。今後、学習者が習得しにくいとされる文法項目を設定し、シャドーイング練習の効果を検討する必要がある。

また、長期的にシャドーイング練習を続けると、より効果があると思われる。今回の調査参加者はシャドーイング練習を肯定的に評価しており、自律学習法としても十分活用できると期待される。

本研究ではテストの難易度に問題があり、教師のフィードバックの欠如が日本語学習の効果に影響している可能性がある。今後、テストの適切性と教師のフィードバックなどを考慮に入れて検討すべきである。さらに、シャドーイングに使う資料の難易度、長さ、登場人物の数なども検討し、シャドーイング練習の効果を追究したい。

## 【参考文献】

- 門田修平・玉井健(2004)『決定版 英語シャドーイング』コスモピア
- 門田修平(2007)『シャドーイングと音読の科学』東京コスモピア
- 門田修平(2010)「なぜシャドーイングは第二言語習得に効果があるのか?」日本語教師のためのシャドーイング・セミナー第1回シャドーイングを日本語指導へ～理論と実践を学ぶ～  
広島大学教育学研究科
- 邱學瑾(2011)「シャドーイング練習は敬語の口頭運用能力」2011年度日本語教育学会実践研究フォーラムポスター発表
- 近藤令子(2010)「国内外の日本語学習者に対する指導法としてのシャドーイング シャドーイングの教材に関する研究 - 難易度の観点から -」2010年世界日本語教育大会
- 迫田久美子(2006)「「わかる」から「できる」への運用力養成のためのシャドーイング研究」第6回日本語教育国際研究大会
- 迫田久美子(2010)「「わかる」から「できる」への運用能力を育てるために - 第二言語習得研究の成果を生かす -」2010年国立台中技術学院応用日語科学術大会 shadowingの第二言語学習への応用

- 迫田久美子・古本裕美(2008)「第二言語習得研究におけるアウトプット強化の試み—シャドーイングの教材レベルは*i+1*か、*i-1*か—」第7回日本語教育国際研究大会招待発表
- 迫田久美子・フェルナー眞理子(2011)「シャドーイングによってどの音声的特徴が習得しやすく、どの音声的特徴が習得しにくいのか」2011年度53回日本教育心理学会ポスター発表
- 迫田久美子・松見法男(2005)「日本語指導におけるシャドーイングの基礎的研究(2)—音読練習との比較調査からわかること」日本語教育学会秋季大会ポスター発表 pp.241-242
- 松見法男・タサニーメーターピスィット(2011)「シャドーイング練習が日本語学習者の文章口頭再生に及ぼす影響—音読時間と発音の正確性を指標として—」2011年度53回日本教育心理学会ポスター発表
- 崔眞姫(2010)「初級レベル学習者におけるシャドーイングとリスニングの実践研究」『日本語教育研究』第19輯 韓国日語教育学会 pp.113-124
- 張恵貞・倉持香(2008)「シャドーイングを取り入れた日本語学習の効果について—韓国の初・中級レベルの大学生を対象として—」『*Foreign Languages Education*』 pp.345-358
- 古本裕美・近藤令子(2011)「シャドーイング時のスクリプト提示の有無が学習者の日本語能力向上に及ぼす効果」2011年度53回日本教育心理学会ポスター発表
- フォード史子(2011)「中・上級クラスでもシャドーイングは効果があるか—ポップカルチャーの日本語クラスからの報告—」2011年度日本語教育学会実践研究フォーラムポスター発表
- 三宅滋(2007)「フレーズシャドーイングと繰り返し効果」ことばの科学研究会口頭発表
- 望月通子(2006)「シャドーイング法の日本語教育への応用を探る—学習者の日本語能力とシャドーイングの効果に対する学習者評価との関連性を中心に—」
- リード真澄(2011)「ビジュアルを用いたシャドーイングによるアクセント・発音向上への効果—米国高校生を対象として—」2011年度日本語教育学会実践研究フォーラムポスター発表

## 要 旨

本研究では韓国の大学における上級レベルの大学生を対象に、視聴覚資料を用いたシャドーイング練習の実践を試みた。シャドーイングは、「聞こえてくる音声を遅れないように、できるだけ即座に声に出して再生する口頭練習」であり、多量のインプットとアウトプットを必要とする方法である。調査参加者は週に一度集まって、シャドーイング練習を行った。そして、次の週まで各自シャドーイング練習を続ける。調査参加者にチェックシートを配り、シャドーイング練習についての評価、間違ったところ、反省点などを記録するように指示した。また、最初と最後のシャドーイング練習は録音して提出してもらった。

シャドーイング練習の効果を検討するために、SPOTテスト、再生テスト、ロールプレイ、語彙テストを行った。取り出し授業でシャドーイング練習を行った結果、SPOTでは事前より事後のほうが得点が若干高くなっている。

語彙テストでは90%正解している。語彙を覚えるのにシャドーイング練習が効果があると予想される。再生テストとロールプレイの結果を事前と事後で比較してみると、口頭運用能力に関しては明確な効果が認められなかった。

すべてのテストにおいて、文法的正確さに関わる誤用より語彙の誤用が多かった。語彙力が誤用率と関係していると考えられる。特に、長音の誤用が目立っており、シャドーイング練習の時も間違っていた。上級レベルの学習者にも長音の指導に注意すべきである。

調査参加者の内省ノートと録音ファイルを分析した結果、シャドーイングの間違いの回数が減ってきている。これは発音スピードが速くなっており、シャドーイングによって復唱能力が伸びていると推測できる。日本語習得においてシャドーイングはインプットとアウトプットをつなぐ役割をする有効な練習法であると考えられる。

キーワード：シャドーイング、上級レベル、視聴覚資料、復唱能力、  
発話速度、難易度

투 고 : 2011. 8. 31  
1차 심사 : 2011. 9. 10  
2차 심사 : 2011. 10. 1



# 가게키요 관련 일화 고찰

- 「측근의 배신」 일화를 중심으로 -

김 미 옥\*

(e-mail: mokim07@hanmail.net)

---

## 目 次

---

1. 서론
  2. 가타리혼 계(語り本系) 『헤이케 모노가타리』를 중심으로
  3. 요미혼 계(読み本系) 『헤이케 모노가타리』를 중심으로
  4. 『아즈마 가가미(吾妻鏡)』를 중심으로
  5. 결론
- 
- 

## 1. 서론(序論)

가게키요(景清)는 『헤이케 모노가타리(平家物語)』에서 헤이케 일개 무사로 기술되고 있지만, 이후 중세 극예술인 고와카마이교쿠(幸若舞曲) 『가게키요』를 통해서 헤이케 잔당(平家殘党)의 집약체로서 등장하게 된다).

가게키요가 헤이케 잔당의 집약 인물로 등장하는 것에 대한 의문은, 이후 「가게키요」에 대한 많은 연구로 이어지게 되는데, 이에 대한 일본에서의 연구는 민속학적 방법을 통한 연구와 『헤이케 모노가타리』를 통한 연구로 분류할 수 있다<sup>2)</sup>. 그 중 『헤이케 모노가타리』를 통해서 가게키요가 헤이케 잔당의

\* 고려대학교 중일어문학과 강사, 일본고전문학 전공.

- 1) 向井芳樹 「幸若舞曲『景清』の論」 『近松の方法』(桜楓社, 1976) pp.195~216, 徳江元正 「乞丐景清—幸若舞曲と題目立—」 『文学46卷』(岩波書店, 1978.4) p.62~75, 砂川博 「幸若舞曲景清の前段階—南部の景清語りの可能性—」 『幸若舞曲研究第三卷』(三弥井書店, 1975) p.66~87, 麻原美子 「舞の本『景清』考」 『幸若舞曲研究第九卷』(三弥井書店, 1996) pp.3~30, 北川忠彦 「景清像の成立」 『軍記物論考』(三弥井選書, 1989) pp.28~55, 星野貴志 「景清論—平家物語諸本が形成する景清像の考察—」 『成城国文学18号』(成城国文学会, 2002) pp.15~30 등이 있다.
- 2) 참고 「가게키요에 대한 일고찰-『헤이케 모노가타리』를 중심으로-」 『일본연구 제 30집』(중앙대학교 일본학연구소, 2011.2) p.233

집약인물이다라고 주장하는 연구자 중 한 사람인 기타가와 다다히코(北川忠彦)는 다음과 같이 말하고 있다. 그는 ‘가쿠이치 본(覺一本) 『헤이케 모노가타리』에 나타난 일정한 무사 나열은 가게키요가 헤이케 잔당의 집약 인물로서 등장하기 위한 것이다<sup>3)</sup>.’라고 주장했다. 그 외에도 호시노 다카유키(星野貴志)는 ‘『헤이케 모노가타리』에 등장하는 헤이케의 잔당 이야기가 가게키요라고 혼동되는 일이 많은데, 이는 고정화되지 않은 헤이케 잔당의 이야기가 가게키요로 이어진 것이다<sup>4)</sup>.’라고 결론을 맺고 있다. 하지만, 이들 연구는 『헤이케 모노가타리』 전본(伝本) 중 「당도계(当道係)」인 가타리혼 계(語)物系<sup>5)</sup>만 고찰하거나, 「당도계」인 가타리혼 계와 「비당도계(非当道係)」인 요미혼 계(読み本系)에서 보이는 일화를 통해서 가게키요로 혼동되었을 가능성에 대해서만 제시하고 있을 뿐이다. 하지만, 줄자는 『헤이케 모노가타리』만을 통해서 가게키요를 헤이케 잔당의 집약체로서 상정하는 것은 다소 무리가 있다고 생각하고, 이를 위해서 가게키요가 헤이케 잔당의 집약체로 등장하게 되는 고와카마이 『가게키요』에 나타난 가게키요 관련 중심 일화들이 『헤이케 모노가타리』에서는 어떠한 양상을 보이는지 살펴보고자 한다.

우선, 고와카마이 『가게키요』에 나타난 구체적 일화를 살펴보면, 헤이케의 복수를 위한 미나모토노 요리토모(源頼朝, 이하 ‘요리토모’) 암살 시도, 측근 및 정인(情人)의 배신, 감옥 탈출(牢破<sup>6)</sup>), 관음부처님 이생담<sup>6)</sup>(觀音の身代<sup>7)</sup>), 요리토모의 사면(源頼朝の赦免), 가게키요의 실명(景清の両眼抉<sup>8)</sup>) 등이 있다. 이러한 일화들 중 요리토모의 암살 시도에 관한 일화에 대해서는 이미 줄고 「『헤이케 모노가타리』에 나타난 가게키요 관련 일화 고찰 -미나모토노 요리토모 암살 시도 일화를 중심으로-」<sup>7)</sup>를 통해서 살펴보았다.

이에 본고에서는 가게키요와 관련된 다른 일화인 「측근 및 정인의 배신 일화<sup>8)</sup>」를 중심으로 『헤이케 모노가타리』 전본(伝本)에서 헤이케 잔당의 후일담

3) 北川忠彦 「景清像の成立」 『軍記物論考』(三弥井選書, 1989) pp.28~55

4) 星野貴志 「景清論—平家物語諸本が形成する景清像の考察—」 『成城国文学18号』(成城国文学会, 2002) pp.15~30

5) 가타리 혼계(語)本系는 비파 범사(琵琶法師)가 헤이교쿠(平曲)를 이야기하기 위해서 사용한 텍스트로 가쿠이치 본(覺一本)과 루후 본(流布本)이 대표적이라 할 수 있으며, 요미혼 계(読み本系)와 분류하여 사용하고 있다.

6) ‘觀音の身代<sup>7)</sup>’를 직역하면 ‘관음부처님 몸바꿈’이지만, 고와카마이교쿠(幸若舞曲) 『가게키요』에서 보면 위기에 처한 가게키요를 관음부처님이 몸을 바꿔 구하게 되는데, 본고에서는 이처럼 관음부처님이 몸을 바꿔 중생(衆生)을 구한다는 의미에서 觀音の身代<sup>7)</sup>를 ‘관음 이생담’으로 번역한다.

7) 줄고 「『헤이케 모노가타리』에 나타난 가게키요 관련 일화 고찰 -미나모토노 요리토모 암살 시도 일화를 중심으로-」 『일본학보 제 87집』(한국일본학회, 2011.5) pp.181~194

8) 가게키요는 고와카마이 『가게키요』, 조루리(浄瑠璃) 『가게키요』에서 정인(情人)인 아코오(あこお)의 밑고로, 신조루리 『출세 가게키요(出世景清)』에서는 정인 아코야(阿古屋)에 의해서 미나모토 가문(源氏)의 군사들에게 붙잡힌다. 이러한 내용은 가게키요를 주인공으로 하는 가게키요 모노(景清

에 대해서 살펴보고자 한다. 또한, 본고에서는 이러한 내용을 통틀어 「측근의 배신<sup>9)</sup>」이라 칭하고자 한다. 이를 위해 본고에서는 『헤이케 모노가타리<sup>10)</sup>』를 가타리혼 계와 요미혼 계로 분류하여 살펴보고, 다음은 가마쿠라 시대(鎌倉時代) 역사서인 『아즈마 가가미(吾妻鑑)<sup>11)</sup>』를 중심으로 측근의 배신 일화 내용이 일치하는 부분을 찾아 고찰해 보고자 한다. 이러한 연구는 가게키요가 헤이케 잔당의 집약체로서 등장하게 된 배경에 실마리를 제공할 것이라 생각하며, 더 나아가 인물 가게키요에 대한 일면을 파악할 수 있는 계기가 되리라 생각한다.

## 2. 가타리혼 계 『헤이케 모노가타리』를 중심으로

『헤이케 모노가타리』 「당도계 전본」인 가타리혼 계 중에서 측근의 배신 일화를 담고 있는 『헤이케 모노가타리』는 이치가타 류(一方流)인 가쿠이치 본(覺一本)<sup>12)</sup>, 요네자와 본(米沢本)<sup>13)</sup>과 야사카 류(八坂流)인 야사카 본(八坂本)<sup>14)</sup>, 하쿠니쥬쿠 혼(百二十句本)<sup>15)</sup>에서 볼 수 있다. 그 중 먼저 가쿠이치 본을 살펴보

物)의 중심내용이다.

- 9) 「측근의 배신」이란 용어는 졸자에 의한 것으로, ‘측근(側近)의 의미는 곁에서 가까이 모시는 사람과 어떤 사람과 가까운 관계에 있는 사람의 의미’가 있는데, 본고에서는 후자에 의미를 두고 용어를 사용하였다.
- 10) 『헤이케 모노가타리』 전본 중 조사 범위는 「당도계 전본」인 가타리혼 계 중 이치가타 류(一方流)인 『가쿠이치 본 헤이케 모노가타리』, 『요네자와 본(糶本) 헤이케 모노가타리』, 『루후 본 헤이케 모노가타리』와 야사카 류(八坂流)인 『야사카 본(八坂本) 헤이케 모노가타리』, 『하쿠니쥬쿠 혼(百二十句本) 헤이케 모노가타리』이고, 「비당도계 전본」인 요미혼 계에서는 『엔교 본(延慶本) 헤이케 모노가타리』와 『나가토 본(長門本) 헤이케 모노가타리』, 『시부갓센조 본(四部讖狀本) 헤이케 모노가타리』, 『겐페이 조수이키(源平盛衰記)』, 『겐페이 토조로쿠(源平闘諍録)』이다.
- 11) 『아즈마 가가미』는 가마쿠라 시대(鎌倉時代) 가마쿠라 막부 가신(家臣)에 의해서 편찬(編纂)된 역사서로서 가마쿠라 시대(鎌倉時代)를 연구하는 데 있어 기본 사료(史料)이다. 호조본(北条本) 총 52권으로, 그 중 45권은 결락(欠落)되어 있다. 1180년(治承4) 미나모토노 요리마사(源頼政)의 거병부터, 1266년(文永3)까지 87년간을 변체한문(變体漢文) 일기체로 기록하고 있다. 『아즈마 가가미』는 『吾妻鏡』와 『東鑑』로 쓰이는데, 무로마치 시대(室町時代) 사본(寫本)에는 『吾妻鏡』, 에도 시대(江戸時代) 고활자본(古活字版) 표지에서 유래하여 『東鑑』라 표기에 기인한 것이다.
- 12) 수많은 전본을 지니고 있는 『헤이케 모노가타리』 중에서 가장 일반적으로 읽혀지고 있다. 구성적인 면에서도, 문학적면에서도 높게 평가되고 있는 작품이다. 남북조 시대(南北朝時代) 비파법사(琵琶法師)의 조합(組合)이라 할 수 있는 「당도좌(当道座)」를 정비·확립한 아카시 가쿠이치(明石覺一)에 의해 1371년(応安四年) 만들어진 정본(正本)이다.
- 13) 무로마치 중기(室町中期) 사본으로 「葉子十行本」라고도 불린다. 가쿠이치 본과 류후 본(流布本)에 이르는 과도기적인 성격을 지닌다.
- 14) 야사카 류(八坂流)는 헤이교루(平曲) 유파(流派)의 하나로 가마쿠라 시대(鎌倉時代) 말기 교토(京都) 야사카(八坂)에 살고 있었던 비파법사(琵琶法師) 야사카 겐교(八坂檢校, 城玄)가 창시하였다. 이 시기는 야사카 류와 이치가타 류(一方流)로 세력이 양분되어 있다.
- 15) 야시로 본(屋代本)과 같은 계통으로 「단절 헤이케(断絶平家)」형으로 12권의 각권을 10장으로 나누는 것에서 하쿠니쥬쿠 혼이라고 부른다.

기로 한다. 가쿠이치 본 12권 「로쿠다이의 최후(六代被斬)」은 다른 가타리혼계 전본들과 비교해서 헤이케 잔당의 일화 중 측근의 배신 일화를 가장 자세히 묘사하고 있는데, 다음과 같다.

다이라 가문의 무사 옛추노지로보에 모리쓰기는 다지마 국(但馬国, 현재 효고현)으로 몸을 피해 그곳에서 게히 미치히로(氣比道弘)의 사위로 살았다. 미치히로는 사위가 다이라 가문의 옛추노지로보에 모리쓰기라는 것을 알지 못했다. 그러나 주머니 속에 든 송곳은 빠져나오는 법, 밤만 되면 장인의 말을 끌어내 타고 돌아다니고, 바다 속을 14~5정, 20정(1.5~2미터 정도)이나 잠수하며 돌아다니고 하였기에 지방수령(地頭守護)들이 이를 수상히 여기고 있었는데, 그 때 가마쿠라에서 어떻게 알았는지 가마쿠라 전하(미나모토노 요리토모)의 교서(敎書)가 내려졌다. “다지마의 아사쿠라 다카키요여, 다이라 가문의 무사 옛추노지로보에 모리쓰기가 그곳에 머물고 있다고 하니 잡아들이도록 하라”하였다. 게히노 미치히로의 사위인 아사쿠라노 다카키요는 가마쿠라 전하의 명을 받들어 장인과 상의를 하는데 “(모리쓰기를) 어떻게 잡아들여야 할까요?”라고 하자, “모리쓰기가 욕탕에 들어갔을 때 잡는 것이 좋을 것이요.”라고 한다. 모리쓰기가 목욕을 하러 들어가게 하고 힘센 장정 대여섯이 한꺼번에 들어가서 모리쓰기를 붙잡으려고 했으나 붙잡으려 하면 넘어트리고, 던지고 일어나면 넘어뜨렸다. 아무래도 젖은 몸이라 붙잡기가 쉽지 않았다. 그러나 여러 사람의 힘을 한 사람이 당할 수는 없는 법, 2~30명이 한꺼번에 몰려들어 칼등과 장도의 자루로 내려쳐 붙잡아 생포된 모리쓰기는 그 즉시 간토(가마쿠라)로 보내졌다. 모리쓰기는 가마쿠라 전하(요리토모) 앞에 붙잡혀 심문을 받았다. “그런데, 너는 헤이케 무사 중에서도 다이라 가문의 친인척이라 들었는데 어찌 자결하지 않았느냐?”라고 요리토모가 말하니, 모리쓰기는 “그것은 다이라 가문이 너무나도 어이없게 무너져버려, 가마쿠라 전하의 목숨을 노릴 기회를 엿보고 있었던 것이요. 잘 드는 대도와 예리한 화살도 가마쿠라 전하를 노리기 위해 기회를 엿보고 있었으나, 이렇게 운이 다하고 말았으니 아무 쓸모가 없소.”라고 하였다. 요리토모 이를 듣고 “그 기개가 가상하구나. 이 요리토모를 섬길 의향이 있다면 죽이지 않고 가신으로 써주겠다. 어떤가?”라고 하니 모리쓰기는 “용사는 두 주인을 섬기지 않는다 하니, 나 같은 사람에게 마음을 주었다가는 틀림없이 후회하실 것입니다. 하니 은혜를 베푸시어 어서 목을 치십시오.”라고 말하였다. 요리토모가 “그렇다면 목을 베도록 하라”라고 명하자, (요리토모 부하들은) 모리쓰기를 유이노하마로 끌고 가서 목을 베었다. 이를 지켜본 사람치고 모리쓰기를 칭찬하지 않는 이가 없었다.<sup>16)</sup>

16) 續家 役 ‘平家の侍越中次郎兵衛盛嗣は但馬国へ落ち行きて、氣比四郎道弘が智になつてぞゐたりける。道弘越中次郎兵衛とは知らざりけり。されども錐袋にたまらぬ風情にて、夜になればしうが馬引き出いて馳せ引きしたり。海の底十四五町二十町潜りなどしければ、地頭守護怪しみけるほどに、なにしてか漏れ聞えたりけん、

다만, 가쿠이치 본과 같은 이치가타 류인 요네자와 본(峯本) 12권17)에서도 헤이케 잔당 후일담인 측근의 배신 일화를 볼 수 있는데, 가쿠이치 본과 구성면과 내용면, 그리고 표현에 있어서 거의 일치하므로 원문만 실어 둔다. 내용을 살펴보면, 옛추노지로보에노조 모리쓰기(越中次郎兵衛尉盛嗣, 이하 ‘모리쓰기’)18)가 미나모토노 요리토모(源頼朝, 이하 ‘요리토모’)를 암살하려는 치밀한 계획을 세우지만, 가마쿠라 막부의 교서를 받은 모리쓰기의 장인인 게히노 미치히

鎌倉殿御教書を下されけり。「但馬国住人朝倉太郎大夫高清。平家の侍越中次郎兵衛盛嗣、当国に居住の由きこしめす。めし進らせよ」と仰せ下さる。氣比四郎は朝倉の大夫が婿なりければ、呼び寄せて、「いかがして搦めんず」と儀するに、「湯屋にてからむべし」とて、湯に入れて、したたかなる者五六人おろし合はせてからめんとするに、取つつけば投げ倒され、起き上れば蹴倒さる。たがひに身は濡れたり、取りもためず。されども衆力に強力かなはぬ事なれば、二三十人ばつと寄つて、太刀のみね長刀の柄にてうち悩まして搦め捕り、やがて関東へ参らせたりければ、御前に引つすゑさせて、事の子細を召し問はる。「いかに汝は同じ平家の侍といひながら、故親にてあんなるに、なにとて死なざりけるぞ」。「それはあまりに平家の脆く滅びてましまし候間、もしやとねらひ参らせ候ひつるなり。太刀の身のよきをも、征矢の尻の鉄よきをも、鎌倉殿の御ためとこそ拵へ持つて候ひつれども、これほどに運命尽きはて候ぬる上は、とかう申すにおよび候はず」。「志のほどはゆゆしかりけり。頼朝をたのまば助けて使はんは、いかに」と仰せければ、「勇士二主に仕へず。盛嗣ほどの者に御心許し給ひては、かならず御後悔候べし。ただ御恩にはとくとく頸を召され候へ」と申ければ、「さらば斬れ」とて、由井の浜に引き出して、斬つてげり。ほめぬ者こそなかりけれ。」佐々木八郎『平家物語評講(下)』(明治書院, 1963) pp.157 5・1576

17) ‘平家の侍越中次郎兵衛盛嗣は但馬国へ落ち行きて、氣比四郎道弘が婿になつてぞみたりける。道弘、越中次郎兵衛とは知らざりけり。されども、鎌袋にたまらぬ風情にて、夜になればしうが馬引き出だいて馳せ引きしたり。海の底十四五町、二十町ぐりなどしければ、地頭、守護怪しみけるほどに、何とてか漏れ聞こえたりけん、鎌倉殿御教書を下されけり。「但馬国の住人朝倉太郎大夫高清、平家の侍越中次郎兵衛盛嗣当国に居住の由聞こし召す。召し進ぜよ」と仰せ下さる。氣比四郎は朝倉大夫が婿なりければ、呼び寄せて、「いかがしてからめめんず」と儀するに、「湯屋にてからむべし」とて、湯に入れて、したたかなる者五六人おろし合はせてからめんとするに、取つつけば投げ倒され、起き上ければ蹴倒さる。互ひに身は濡れたり、取りもためず。されども衆力に強力かなはぬ事なれば、二三十人ばつと寄つて、太刀の峰長刀の柄で打ちなやしてからめ取り、やがて関東へ参らせたりければ、御前に引つ拵えさせて、事の子細を召し問はる。「いかに汝は同じ平家の侍といひながら、故親にてあんなるに死なざりけるぞ」。「それは余りに平家の脆く滅びてましまし候ふ間、もしやと狙ひ参らせ候ひつるなり。太刀のみのよきをも、征矢の尻の鉄よきをも、鎌倉殿の御ためとこそ拵へ持つて候ひつれども、これほど運命尽き果て候ひぬる上は、とかう申すに及び候はず」。「志のほどはゆゆしかりけり。頼朝をたのまば助けて使はんは、いかに」。「勇士二主に仕へず。盛嗣ほどの者に御心許し給ひては、必ず御後悔候ふべし。ただ御恩にはとくとく首を召され候へ」と申しければ、さらば斬れとて、由井の浜に引き出だいて斬つてんげり。ほめぬ者こそなかりけれ。」富倉徳次郎 校『平家物語全注釈 下巻』(角川書店, 1966) pp.3207・3208

18) 다이라 모리쓰구(平盛嗣, 생년미상~1194年)는 헤이안 말기 헤이케 무장으로 『헤이케 모노가타리』에서는 「옛추노지로보에노조 모리쓰기(越中次郎兵衛盛嗣)」라 불린다. 미나모토 씨(源氏)와의 여러 전투에 참전하고, 야시마 전투(屋島の戦い)에서는 미나모토노 요시쓰네(源義経)의 가신(郎党)인 이세 요시모리(伊勢義盛)와의 일화가 남아있다. 모리쓰기는 『하쿠니쥬쿠 혼(百二十本) 헤이케 모노가타리』에서는 모리쓰구(盛嗣), 『가쿠이치 본(本) 헤이케 모노가타리』에서는 「盛継」, 「盛嗣」, 「盛次」로 표기되며, 읽는 방법도 「모리쓰기」와 「모리쓰구」로 읽힌다. 『후후 본(流布本) 헤이케 모노가타리』는 「모리쓰기(もりつぎ)」로 읽히며, 『아즈마 가가미』에서는 「盛継」, 「盛次」로 표기되어 있다. 安田元久 編『鎌倉・室町人名事典』(新人物往来社, 2004) p.364, 佐藤和彦, 樋口州男, 錦昭江, 松井吉昭, 桜井彦, 鈴木彰 編『日本中世内乱史人名事典(上巻)』(新人物往来社, 2007) p.129

로(氣比道弘, 이하 ‘미치히로’)<sup>19)</sup>의 계약으로 붙잡히게 된다. 붙잡힌 모리쓰기는 요리토모와 대면하게 되고 미나모토 가문의 무사로 있어주기를 권유하는 요리토모 앞에서 다이라 가문의 무사로서 당당히 죽음을 택하게 된다.

요리토모가 모리쓰기에게 미나모토 가문의 무사로 있기를 제안하고, 이 제안을 거절한 모리쓰기가 스스로 죽음을 택하는 이 부분은 가계키요모노(景清物)<sup>20)</sup> 중 고와카마이교쿠(幸若舞曲), 『가계키요』, 고조루리(古浄瑠璃) 『가계키요(かけきよ)』, 신조루리(新浄瑠璃) 지카마쓰 문자에몬(近松門左衛門) 『출세 가계키요(出世景清)』 등에서 극 중심이 되는 내용으로 가계키요를 극적인 인물로 만드는 상당히 중요한 장면이라 할 수 있다. 그런데, 가쿠이치 본 『헤이케 모노가타리』에서 측근의 배신 일화의 중심에 모리쓰기가 있는 것이다. 이처럼 가쿠이치 본 『헤이케 모노가타리』에서만 밀고에 의해서 붙잡혀 참형을 당하는 인물이 모리쓰기라고 한다면 호시노 다카유키<sup>1)</sup>가 주장한 것과 같이 모리쓰기와 가계키요가 혼동되었을 가능성도 배제할 수는 없다. 하지만, 이미 말한 바와 같이 가쿠이치 본 외에도 다른 『헤이케 모노가타리』 전본에서 「측근의 배신」 일화를 찾아볼 수 있으므로, 이에 대해서 살펴보고 난 후 결론을 내리는 것이 좋을 듯하다.

계속해서, 가타리혼 계의 다른 한 줄기인 야사카 류(八坂流)인 야사카 본(八坂本)에 대해서 살펴보고자 한다. 야사카 본은 12권 「훗쇼지 전투(法性寺合戦)」에 헤이케 잔당 후일담인 측근의 배신 일화를 담고 있는데, 다음과 같다.

옛추노지로보에 모리쓰기는 다지마 국으로 가서 그곳에서 게히노 곤노가미의 사위가 되어 살았다. 다지마의 슈고(守護)인 아다치노 산로자에몬 도모토가 이를 듣고 많은 사람들을 몰고 갔다. 모리쓰기는 이들을 맞아 홀로 싸웠다. 많은 사람들에게 의해서 이윽고 게히노 곤노가미와 모리쓰기는 붙잡혀 가마쿠라로 보내졌다. (중략) 그 후 모리쓰기는 가마쿠라 전하(요리토모) 앞에 붙잡혀 심문을 받았다. “그런데, 너는 어찌 붙잡히지 않았느냐?” 하니 모리쓰기가 말하기를 “네 목숨을 노릴 기회를 엿보고 있었지만, 이렇게 운이 다하여 붙잡히고 말았으니 아무 쓸모가 없소. 하니

19) ‘氣比道弘 生没年未詳 但馬国城の崎郡氣比庄(兵庫県豊岡市)の住人。氣比權守道弘(道広)と記される。氣比は津井山湾に面した要地であり、氣比氏は水軍と考えてよいであろう。越中二郎兵衛盛嗣を匿って娘婿とするが、盛嗣が京都にいたなじみの女性に所在を漏らしたことから、建久五年(一一九四)にこの事が露見した。源頼朝から盛嗣の捕縛を命じられた道弘は、娘婿の朝倉高清を領地に派遣し、盛嗣を源頼朝の墓に送り届けた。’ 福田豊彦, 関幸彦 編 『源平合戦事典』 (吉川弘文館, 2006) p.71

20) 가계키요를 주인공으로 하는 작품을 가계키요모노(景清物)라 하며, 노(能) 『가계키요』 『다이부쓰쿠요(大仏供養)』 『로가계키요(籠景清)』, 고와카마이교쿠(幸若舞曲), 『가계키요』, 고조루리(古浄瑠璃) 『가계키요(かけきよ)』, 신조루리(新浄瑠璃) 지카마쓰 문자에몬(近松門左衛門) 『출세 가계키요(出世景清)』 등이 여기에 속한다.

21) 본고 각주 4번 참고

은혜를 베풀어 어서 목을 치시오”라고 말하니”라고 하였다. 그리고나서 유이노하마로 끌고 가서 목을 베었다<sup>22)</sup>

내용을 보면 가쿠이치 본의 중심 내용인 모리쓰기가 다지마 국 게히노 곤노가미의 사위가 되어 살았으며, 이후 다지마 국의 슈고(守護)인 아다치노 산로자에몬 도모토에게 붙잡혀 가마쿠라로 보내졌다는 것이다. 이 부분은 가쿠이치 본과 일치한다. 하지만, 야사카 본은 같은 가타리 혼계인 가쿠이치 본 및 요네자와 본과 다르게 모리쓰기를 배신했던 장인 게히노 곤노가미가 모리쓰기와 함께 죄인의 신분으로 가마쿠라로 보내진다. 이처럼 게히노 곤노가미가 모리쓰기와 함께 죄인의 입장이 되는 것은 『헤이케 모노가타리』 전본 중 야사카 본이 유일하다<sup>23)</sup>.

다음은 야사카 류 다른 전본인 하쿠니주쿠 본(百二十句本)에 관한 것이다. 하쿠니주쿠 본(百二十句本) 12권 「제120구 단절 헤이케(断絶平家)<sup>24)</sup>」를 보면, 측근의 배신에 의한 헤이케 잔당의 후일담 내용이 있다. 우선, 내용에 있어서 모리쓰기가 다지마 국에서 출발하여 가마쿠라에 들어섰을 때는 이미 죽은 상태였으며, 다른 전본과 다르게 모리쓰기가 가마쿠라로 온 시기도 명확하게 1197년(겐큐 8) 11월7일로 적고 있다. 하지만, 모리쓰기가 은신처로 삼은 다지마 국이라는 장소는 다른 가타리혼 계와 일치하고 있다. 하쿠니주쿠 본은 모리쓰기의 암살 시도 및 암살을 시도하려고 했던 모리쓰기의 행적은 기술하고 있지는 않은 유일한 가타리혼 계 전본이다.

22) 雫자 역 ‘魚つちうのじらうびやうゑもりつきは・たじまに・くだり・けひのごんのかみが・むこに・なつてぞ・ゐたりける・たじまのしゆご・あだちの三らうぎゑもんとほもと・このよしをきいて・たいぜいにて・おしよせたり・じらうびやうゑも・一ばうけとつて・たたかひけるが・いかがはしたりけん・たいぜいのなかに・とりこめられて・いけどりにこそ・せられけれ・や가て・けひのごんのかみをも・じらうびやうゑに・そへて・かまくらへこそ・くだしけれ・(中略)・そのち・魚つちうのじらうびやうゑを・おつぼのうちに・めしいだし・かまくらどの・など・なんぢほどのもの・いたづらに・いけどられぬるぞと・のたまへば・さんさふらふ・いかにもして・みを・まつたうし・きみを・うちたてまつらんと・ねらひまをささふらひしに・いまは・うんつきて・いたづらに・いけどられ・さふらひぬるうへは・ちからおよびさふらはず・ただごおんには・いそぎかうべを・はねさせたまへと・まをしたりければ・さらばとて・ゆるのはまにてぞ・きられる・’ 古谷知新 校訂 『平家物語 附承久記』(国民文庫刊行会, 1911) pp.591・592

23) 모리쓰기의 장인인 게히노곤노가미가 야사카 본 『헤이케 모노가타리』에서만 배신자로 등장하지 않는 것에 대해서는 본 고 주제인 가게키요가 헤이케 잔당 집약체로서 상징된 이유와 직접적인 관련이 없으므로 본고에서는 논하지 않도록 하겠다. 다만, 게히노 곤노가미가 왜 모리쓰기와 함께 죄인의 신분으로 가마쿠라로 보내졌는지에 대한 상황을 야사카 본에 적힌 내용만을 갖고 판단할 수는 없지만, 신조루리 『출세 가게키요』에서는 장인인 다이구지(大宮司)가 가게키요에 대해서 토설을 하지 않아 옥사에 관하는 신세가 되는 것에 소재를 제공했을 가능성은 있을 것이라 생각된다.

24) ‘建久八年十一月七日、但馬の国の住人、比氣の権守、越中次郎兵衛が首持ちて鎌倉へ参りたり。是年来盛嗣とも知らずして、権守を頼みて仕はれける程に、骸骨柄、立居振舞、ことにふれ抜群に見えける間、哀是は下臘と覚えぬもの哉と思ひ、是をあやしめ尋ね聞く程に、盛嗣にて有りけるなれば、討ちたりけるとかや。’ 高橋貞一校訂 『百二十句本 平家物語』(思文閣, 1973) p.646

이상과 같이 측근의 배신 일화를 기술하고 있는 『헤이케 모노가타리』 「당도계 전본」인 가타리혼 계를 살펴본 결과, 하쿠니주쿠 본을 제외한 가쿠이치 본, 요네자와 본, 야사카 본은 배신당하는 인물, 배신자, 모리쓰기가 몸을 피한 장소, 그리고 요리토모의 사면, 모리쓰기의 참형장소 등이 거의 일치함을 알 수 있다. 이처럼 가타리혼 계 『헤이케 모노가타리』에서 측근의 배신 일화는 일정한 흐름을 갖고 있다. 하지만, 이러한 흐름이 요미혼 계 『헤이케 모노가타리』에서도 일정한지에 대해서는 계속해서 살펴보기로 하겠다.

### 3. 요미혼 계 『헤이케 모노가타리』를 중심으로

『헤이케 모노가타리』 「비당도계 전본」인 요미혼 계에서는 헤이케 잔당의 후일담인 측근의 배신 일화를 엔교 본(延慶本)<sup>25</sup>과 나가토 본(長門本)<sup>26</sup> 등에서 살펴보고자 한다. 우선, 엔교 본(延慶本) 제 6권 말(第六末) 「옛추지로보에 모리쓰기 주살된 일(越中次郎兵衛盛次被誅事)」을 보면, 모리쓰기가 측근의 배신에 의해서 모리쓰기가 붙잡히게 되는 부분이 있는데, 다음과 같다.

다이라 가문의 무사 옛추노 지로보에 모리쓰기는 교토에서는 안심할 수 없어, 다지마 국(但馬国)으로 도망가서 게히곤노가미 미치히로氣比權守道弘, 이하 ‘미치히로’)의 허락 하에 숨어살게 되었다. 하지만, 미치히로는 다이라 가문의 옛추노 지로보에 모리쓰기를 알지 못했다. 미치히로에게는 딸이 있었는데 모리쓰기와 몰래 정을 통하였다. 이 몰래 정을 통한다고 하지만, 자루 속의 송곳과 같은 것이어서 관계가 들통 나게 되었다. 모리쓰기는 몰래 교토로 가서 알고 있었던 여인과 정을 통하였다. 그러던 어느 날 밤 여인이 “그런데 어느 곳에 계시는지요? 제게 정이 있으시긴 한 건가요? 말씀하지 않으시는 것은 의가 없는 것입니다”라고 하니 모리쓰기 정답게 말하는데 “나는 다지마 국 게히 미치히로라고 하는 자의 허락 하에 있다. 미안하지만, 다른 이들에게는 밝히지 말거라”라고 말했다. 그러는 사이 가마쿠라 전하(미나모토노 요리토모)는 “다이라 가문의 무사 옛추노 지로보에 모리쓰기를 붙잡거나 죽이는 자에게는 보상할 것이다”라는 교서(敎書)를 내렸다. (교토)에 사는 여인은 모리쓰기가 아

25) 「엔교본(延慶本)」에서 「엔교(延慶)」는 1303~08년 경의 연호(年号)이며, 「えんきょう」「えんけい」라고 읽는다. 현존하는 『헤이케 모노가타리』 저본 중에서 가장 오래된 형태로 인정하며, 오쿠가키(奥書)에 1309~10년(延慶2, 3年)으로 기록하고 있다.

26) 안토쿠 천황(安徳天皇)의 위패가 있는 아마구치 현 아마다 절(阿弥陀寺)에 전하는 책으로, 서사(書寫) 연대는 불분명하다. 총 20권이며, 내용상 엔교 본과 거의 비슷하지만, 연구자에 따라 나가토 본을 「원 엔교본(原延慶本)」이라 보기도 한다.



닌 다른 이와 정을 통하고 있었다. 그 남자는 한밤중에 깨어서는 “모리쓰기를 붙잡거나 죽이는 자에게 보상이 있다고 하니, 가마쿠라 전하에게 고하자. 안쓰럽지만, 어딘가에 있을 것이니 붙잡아 보상을 받자”라고 하자 사람의 마음은 참 무정한 것이어서 마음이야 변할 수 있는 것이니, 이 여인이 말하길 “나는 알고 있어요.”라고 하자, 남자는 크게 기뻐하며, 여러 가지 답례품을 주니, 잘난 체하며 여인은 있는 그대로 말하였다. 즉시 가마쿠라 전하에게 이 이야기를 말 씀드리니, 가마쿠라 전하는 미치히로에게 모리쓰기를 붙잡아 들이라 명하였다. 때는 1197년(겐큐 8), 미치히로는 교토를 지키기 위해서 있었는데, 미치히로는 자신이 모리쓰기를 잡을 수 없었기에 사위인 아사쿠라 다유에게 잡아들이라 했다. 붙잡힌 모리쓰기는 “이제 운이 다해서 이렇게 잡히는 것이니 힘을 낼 수 없을 것이다. 어서 죽이시오.”라고 한다. 니이 전하는 붙잡힌 모리쓰기를 보며 “안쓰럽구나. 이들을 도와주고 싶구나.”라고 생각했지만, “헤이케 무사는 한 둘 이 아니니, 호랑이를 키우는 것이다.”라고 하고는 결국 모리쓰기를 죽여 버렸다.<sup>27)</sup>

다만, 가타리혼 계에서는 가마쿠라 막부에게 모리쓰기에 대한 정보가 전해지는 과정이 생략되고, 다지마 국 미치히로에게 가마쿠라 막부 교서가 내려지고 붙잡히게 된다. 하지만, 요미혼 계에서는 교토(京都)에서 살고 있는 모리쓰기의 정인(情人)인 여인<sup>28)</sup>의 밀고에 의해서 모리쓰기의 행적이 밝혀지고 가마쿠라 막부에서 교서가 내려지는 과정이 상세히 나와 있다. 여기서 주목해야 할 부분은 엔교 본에서 처음 등장하는 모리쓰기의 정인인 여인의 등장이다. 이 여인은 이름조차 없는 ‘교토에 살고 있는 여인’으로 모리쓰기와 깊은 관계에 있지만,

27) 줄자 역 ‘廿九 越中次郎兵衛盛次ハ、都ニモ不安堵シテ、但馬国ニ落行テ、氣比權守道弘ガ許ニ隱居タリケリ、人是ヲ不知。道弘ガ娘ノ有ケルニ、盛次、忍テ通ケリ。サレドモ、針袋ヲト(ヲ)ス風情ニテ、隱ナカリケリ。盛次、忍テ京へ上テ、年来知リタリケル女ノ許へゾ通ケリ。或夜、彼女、「サテモイヅクニオワスルゾ。カヤウニ情ヲカケ給へバ、露オロカノ儀ナシ」ト、ネムゴロニ云ケレバ、「我ハ但馬国氣比權守道弘ト云者ガ許ニ有也。穴賢人ニ披露スナ」トゾ語リケル。サル程ニ、鎌倉殿ヨリ、「越中次郎兵衛盛次、搦テモ誅テモ進セタラム者ニハ、勸賞有ベシ」ト披露有ケリ。彼女ニハ又年来ノ寢夫アリケリ。此夫、有夜ノネザメニ、「盛次ヲ搦テモ誅テモ進セタラム者ニハ、勸賞行ワルベキヨシ、鎌倉殿ヨリ披露アリ。哀、イヅクニカ有ラム。搦テ勸賞ヲ蒙バヤ」ト云ケレバ、人ノ心ノウタテサハ、マ男ニヤ移リケム、此女、「ワラワコソ知タレ」ト申ケレバ、男悅テ、様々ノ引出物ヲシテ、スカシ問ケレバ、女、有ノママニ語リタリケリ。即、鎌倉殿ニ此由ヲ申タリケレバ、ヤガテ道弘ニ仰テ、搦め獻ルベキヨシ被仰。折節、建久八年比、道弘、大番ノ為ニ在京シテ有ケルガ、我身ハ不下シテ、道弘ガ姉賀、朝倉大夫、持テ候シガ、「今ハ運ヅキテ、カヤウニ搦メ召レ候上ハ、力及候ハズ。トクトク首ヲメセ」トゾ申ケル。二位殿、打ウナヅキ、哀、是等ヲ助置テ召仕バヤト思給ケレドモ、平家ノ侍ノ中ニハ一ノ者也、虎ヲ養フ愁有トテ、終ニ盛次ハ伐レニケリ。’麻原美子 外編 『平家物語長門本延慶本対照本文』(勉誠出版, 2011) pp.1491・1492

28) 정인을 밀고하는 여인은 고와카마이 『가게키요』, 고조루리 『가게키요』에서는 아코(阿古)로, 그리고 신조루리 『출세 가게키요』에서는 아코야(阿古屋)로 등장하여 가게키요를 밀고하는 인물로 그려진다.

모리쓰기가 아닌 다른 남자와도 내연의 관계를 맺고 있었다. 헤이케 무사였던 모리쓰기의 존재를 알고 있었던 내연의 관계인 남자는 여인에게 가마쿠라 막부에 모리쓰기에 대해서 밀고하도록 한다. 결국, 여인은 남자의 적극적인 권유와 물욕(物慾)으로 인해 남자에게 모리쓰기에 관해서 말하게 되고, 정보를 전해들은 남자는 가마쿠라 막부에 가서 모리쓰기를 밀고한다.

엔교 본에서 처음 등장하는 교토에 사는 여인과 내연의 관계인 남자는 가타리 혼계에서는 보이지 않던 인물이다. 그렇다면, 교토에 사는 여인과 남자의 등장은 엔교 본만이 갖는 특징일까? 이를 알아보기 위해서 같은 요미혼 계인 나가토 본을 살펴보기로 하겠다. 측근의 배신 일화 내용은 나가토 본 20권 「옛추지로보에 모리쓰기에 관한 일(越中次郎兵衛盛次事)」에 있는데, 다음과 같다.

다이랴 가문의 무사 옛추노 지로보에 모리쓰기는 교토에서는 안심할 수 없어, 다지마 국(但馬國)으로 도망가서 게히곤노가미 미치히로(氣比權守道弘, 이하 ‘미치히로’)의 허락 하에 숨어살게 되었다. 하지만, 미치히로는 다이랴 가문의 옛추노 지로보에 모리쓰기를 알지 못했다. 미치히로에게는 딸이 있었는데 모리쓰기와 몰래 정을 통하였다. 이 몰래 정을 통한다고 하지만, 자루 속의 송곳과 같은 것이어서 관계가 들통 나게 되었다. 모리쓰기는 몰래 교토로 가서 알고 있었던 여인과 정을 통하였다. 그러던 어느 날 밤 여인이 “그런데 어느 곳에 계시는지요? 제게 정이 있으시긴 한 건가요? 말씀하시지 않으시는 것은 의(義)가 없는 것입니다”라고 하니 모리쓰기 정답게 말하는데 “나는 다지마 국 게히 미치히로라고 하는 자의 허락 하에 있다. 미안하지만, 다른 이들에게는 밝히지 말거라”라고 말했다. 그러는 사이 가마쿠라 전하(미나모토노 요리토모)는 “다이랴 가문의 무사 옛추노 지로보에 모리쓰기를 붙잡거나 죽이는 자에게는 보상할 것이다”라는 교서(敎書)를 내렸다. (교토)에 사는 여인은 모리쓰기가 아닌 다른 이와 정을 통하고 있었다. 그 남자는 한밤중에 깨어서는 “모리쓰기를 붙잡거나 죽이는 자에게 보상이 있다고 하니, 가마쿠라 전하에게 고하자. 안스럽지만, 어딘가에 있을 것이니 붙잡아 보상을 받자”라고 하자 사람의 마음은 참 무정한 것이어서 마음이야 변할 수 있는 것이니, 이 여인이 말하길 “나는 알고 있어요.”라고 하자, 남자는 크게 기뻐하며, 여러 가지 답례품을 주며 잘난 체하며 말하는 여인은 있는 그대로 말하였다. 즉시 가마쿠라 전하에게 이 이야기를 말씀드리니, 가마쿠라 전하는 미치히로에게 모리쓰기를 잡아들이라고 명하였다. 때는 1197년(겐큐 8), 미치히로는 교토를 지키기 위해서 있었는데, 미치히로는 자신이 모리쓰기를 잡을 수 없었기에 사위인 아사쿠라 다유에게 잡아들이라 했다. 붙잡힌 모리쓰기는 “이제 운이 다해서 이렇게 잡히는 것이니 힘을 낼 수 없을 것이다. 어서 죽이시오.”라고 한다. 니이 전하는 붙잡힌 모리쓰기를 보며 “안스럽구나. 이들을 도와주고 싶구나.”라고 생각했지만, “헤이케 무사는 한 둘이 아니니, 호랑이를 키우는 것이다.”라고 하고, 결국 모리쓰기를 죽여 버렸다<sup>29)</sup>

내용을 살펴보면, 나가토 본은 가타리혼 계와 같이 모리쓰기가 다지마 국에서 몸을 숨기고 후일을 도모하지만, 가마쿠라 막부에서 교서가 내려지고 장인인 미치히로가 모리쓰기를 붙잡는 과정과 엔교 본에서 여인의 배신으로 인해 모리쓰기의 행방이 알려지고 붙잡히는 내용이 통합되어 있다. 이에 대해서 정리하면 다음과 같다.

먼저, 엔교 본과 나가토 본의 공통점은 첫째, 모리쓰기의 장인으로 기술된 미치히로의 표기이다. 게히노곤노가미 미치히로(氣比權守道弘)라는 한자표기는 엔교 본과 나가토 본에서만 보이는 특징이며, 두 전본의 공통점이라 할 수 있다. 둘째, 모리쓰기를 배신하는 측근의 인물 중, 모리쓰기의 정인(情人)인 여인이 등장하며, 이 여인은 모리쓰기 외에 다른 남자와 정을 통하고 있었다. 셋째, 모리쓰기를 밀고하는 인물인 모리쓰기의 여인은 금전적인 이유로 모리쓰기를 밀고한다. 넷째, 모리쓰기의 정인인 여인이 밀고를 하는데 적극적으로 권유하는 인물로 여인과 정을 통하는 남자가 등장하고 있다.

29) 줄자 역 ‘越中の次郎兵衛盛次は、都にも安堵しがたくて、但馬国に落行て、氣比の權守道広かもとに隠れ居たりけり、人これを知らず、始めは厩につかはれて馬をぞ飼ける、馬をもよく飼けり、馬洗に出つ、馬に乗てはせたり、あがかせたり、物射るまねしたりなどしけり、後には、道広が娘のありける方へ遣して、今参のよくつかはるるぞ、とのゝなどさせよとてつかはしける、次第にありつる程に、如何したりけん、彼娘に近付て、よなよな忍びかよひけり、鎌倉殿より越中次郎兵衛盛次にてありと知てけり、盛次忍び度々京へ上りて、年比しりたりける女のもとへぞかよひける、或夜彼女、さてもいくつにおはするぞ、か様に昔のよみを忘れ給はで、情をかけ給へば、露おろかに思ひ奉らずと、ねんごろに申ければ、我は但馬国氣比の權守道広といふもの許にあり、あなかしこ、人に披露すなどぞ語りける、鎌倉殿より越中次郎兵衛盛次を、からめても打てもまいらせたらん者には、勸賞を行はるべき由、鎌倉殿より披露あり、いつくにか隠居たらん、からめて勸賞を蒙らばやとぞ申ける、盛次がさばかり披露すなど、打とけて語りたるに、女のうたてざは、わらはこそ次郎兵衛が所は知りたれと申たりければ、男悦て女によくよく尋とひて、鎌倉殿に此由を申す、頓て氣比の權守道広に仰て、からめてまいらすべきよし、建久五年の比仰られにけり、道広境節大番にて在京したりけり、我身は下らず、妹婿朝倉大夫高清ならびに家人等に、越中次郎兵衛盛次をからめて参らせよ、相構へて逃すなどぞ申たりけり、たやすくも討べくもなかりければ、温室にてからむべしとて、温室におろして、したたか者七八人用意したり、盛次温室におりけるに、腰刀に帯をまきて、温室のうちのなげしにぞ置ける、これ用心のためなり、盛次温室におりたり、此七八人の者からめんとす、盛次さしたるとて、おのれらには一度もからめらるまじきぞといひて、温室の内を走出たり、にげも隠れもしつるものならば、權守が大事になるべし、又からめられずしてあらば、おぼつかなくも恐しくも、汝等おもはんずれば、まくし繩にてはしばらるまじと云て、帯を以て心としばられけり、氣比權守、盛次を鎌倉殿へ参らせたければ、盛次を召出て、いかに汝は平家の侍ながら、平家の一門にてあんなるに、西海の浪の上にて、平家の人々と一所にて、打死をもなどせざりけるぞと仰られければ、平家の君達、させるし出したる事もなくて亡び給ひぬ、よき主を執候かとてこそ、残り留て候へとぞ申ける、抑汝は、九郎につかはれるなど仰られければ、さる事候き、若や伺奉り候とて、近付奉り候しかども、判官殿意得たりげにて、心ゆるしも候はず、よるは御ふしども、人しられずしておはし候しかば、恐しくおのづから走向には、見参に入とも候しかども、御目をはたと見合せて、おはし候しかば、少しも透間候はで、組参らせんと思ふ心も候はず、都を落させ給て後は、御心を置せ給はねばこそ候しか、其後は腰刀のかねよきも、征矢の尻のかねよき候も、鎌倉殿の御ためとこそをしみ持て候つれども、今は運尽て、かく召とられ候ぬる上は、力及ばずとこそ申ける、鎌倉殿打うなづきて、是等生てめしつかはばやとおはしめしけれども、平家の侍の中には、これら一二のものなり、虎をやしなふれひありとて、終に盛次されにけり、大名小名惜まぬ人もなかりけり、’黒川真道 校註『長門本 平家物語』(国書刊行会, 1906) pp.742~744

이처럼 엔교 본과 나가토 본은 공통점을 지니고도 있지만, 차이점도 있는데 이를 정리하면 다음과 같다.

첫째, 엔교 본은 모리쓰기가 요리토모를 만나는 장면과 참형되는 장소에 대해서 언급하고 있지 않는 반면, 나가토 본은 가타리혼 계와 같이 배신당하는 인물, 배신자, 모리쓰기가 몸을 피한 장소, 그리고 요리토모의 사면, 모리쓰기의 참형장소에 대해서도 언급하고 있다. 둘째, 엔교 본에는 생략된 가타리혼 계 중 가쿠이치 본과 요네자와 본 내용을 나가토 본에서는 볼 수 있다.

이상과 같이 측근의 배신 일화를 기술하고 있는 『헤이케 모노가타리』 「비당도계 전본」인 요미혼 계 중 엔교 본과 나가토 본은 각각의 특징을 갖고 있었다. 하지만, 가타리 혼계와 마찬가지로 요미혼 계 『헤이케 모노가타리』에서도 측근의 배신 일화는 일정한 흐름을 갖고 있었다. 또한 가타리혼 계와 요미혼 계라는 것과 관계없이 내용과 구성에 있어서 일정한 흐름을 지니고 있음도 알게 되었다. 그렇다면 다음은 구체적으로 가타리혼 계와 나가토 본의 공통점을 살펴보고자 한다.

우선, 미치히로가 모리쓰기를 잡기 위해 작당하는 부분, 둘째, 모리쓰기가 미치히로와 그 가신들에 의해서 잡히는 부분, 셋째, 모리쓰기가 참형되는 장소 등이 일치한다. 살펴 본 바와 같이 모리쓰기 측근 배신 일화에 있어서 나가토 본은 엔교 본과 가타리혼 계의 내용을 통합하고 있다.

이처럼 측근의 배신 일화를 기술하고 있는 『헤이케 모노가타리』 「비당도계 전본」인 요미혼 계는 가타리혼 계에서 생략된 부분을 기술하면서도 내용상의 조금씩 차이를 보이고 있다. 하지만, 이러한 이유로 『헤이케 모노가타리』에 기술된 모리쓰기를 가계키요로 혼동할 가능성은 미비하다고 할 수 있다. 왜냐하면, 헤이케 잔당 후일담 중 측근의 배신 일화를 기술하고 있는 『헤이케 모노가타리』 전본에서 측근의 배신으로 붙잡힌 인물은 일관되게 모리쓰기를 지목하고 있으며, 그 외에도 배신하는 인물, 몸을 피하는 장소 등 여러 항목에서 일치함을 볼 수 있기 때문이다. 다음은 이러한 내용을 표로 정리한 것이다

[표 1] 『헤이케 모노가타리』에서 기술하고 있는 측근 배신 일화

	배신당하는 인물	배신자 및 체포하는 인물	몸을 피한 장소	요리토모 사면	참형 장소
엔교본 (延慶本)	옛추노지로보에 모리쓰기 (越中次郎兵衛盛嗣), 계히 미치히로(氣比道弘)	교도에 사는 여인 (京への女)	다지마 국 (但馬国)		
나가토본 (長門本)	옛추노지로보에 모리쓰기 (越中次郎兵衛盛嗣)	계히 미치히로 (氣比道弘), 교도에 사는 여인 (京への女)	다지마 국 (但馬国)		유이노하마 (由井の浜)

가쿠이치 본 (覚一本)	옛추노지로보에 모리쓰기 (越中次郎兵衛盛次)	게히 미치히로 (氣比道弘)	다지마 국 (但馬国)	사면	유이노하마 (由井の浜)
야사카본 (八坂本)	옛추노지로보에 모리쓰기 (越つちうの二らうびやうゑもりつぎ), 게히 미치히로(氣比道弘)	아다치노 산로자에몬 도모토 (たじまのしゆご・あだちの 三らうざゑもんとほもと)	다지마 국 (但馬国)	사면	유이노하마 (由井の浜)
요네자와 본(米沢本)	옛추노지로보에 모리쓰기 (越中次郎兵衛盛嗣)	게히 미치히로 (氣比道弘)	다지마 국 (但馬国)	사면	유이노하마 (由井の浜)
하쿠니주쿠 본(百二十句本)	옛추노지로보에 모리쓰기 (越つちうの二らうびやうゑもりつぎ)				

\* 위 표는 줄자에 의함

살펴본 바와 같이, 『헤이케 모노가타리』 전본에서 「측근의 배신」 일화는 배신당하는 인물, 배신자, 몸을 피한 장소, 요리토모 사면, 참형 장소 등 여러 면에서 일치함을 보이고 있다. 때문에 『헤이케 모노가타리』에 등장하는 헤이케 잔당 이야기가 가게키요로 혼동되었을 가능성은 낮다고 할 수 있다. 하지만, 『헤이케 모노가타리』에서 가게키요가 모리쓰기보다 더 높은 신분의 위치였거나 『헤이케 모노가타리』에서 더 많이 등장했다면, 가게키요가 헤이케 잔당 집약인물이 될 수 있었던 여지는 있을 것이다. 그렇다면, 모리쓰기는 헤이케 잔당의 후일담인 「측근의 배신」 일화에서 기술되기 이전 『헤이케 모노가타리』에서 어떻게 기술되고 있었을까? 이에 대해서는 줄고 「가게키요에 대한 일고찰- 『헤이케 모노가타리』를 중심으로-30)」을 통해서 가타리혼 계와 요미혼 계 『헤이케 모노가타리』를 분류하여 살펴보았으며, 그 결과 가게키요와 모리쓰기는 신분에 있어서도 등장하는 부분에 있어서도 어느 한쪽이 우위를 보이고 있지 않음을 알 수 있었다. 때문에, 『헤이케 모노가타리』 전본에서 「측근의 배신」 일화의 중심에 있는 모리쓰기를 어떠한 이유를 갖고 가게키요로 바꾸어 헤이케 잔당의 집약 인물로 정했을 가능성이 높다고 할 수 있을 것이다.

다음은 가마쿠라·무로마치 시대 서적에서 「측근의 배신」 일화에 대해서 어떻게 기술되고 있는지 살펴보기로 하겠다.

#### 4. 『아즈마 가가미』를 중심으로

위에서 살펴 본 바와 같이 『헤이케 모노가타리』 전본에서 측근의 배신으로

30) 줄고 「가게키요에 대한 일고찰- 『헤이케 모노가타리』를 중심으로-」 『일본연구 제 30집』 (중앙대학교 일본학연구소, 2011.2) pp.235~237

요리토모에게 잡히는 무사는 모리쓰기로 일치하고 있다. 그렇다면, 이러한 측근의 배신 일화가 『헤이케 모노가타리』에서만 모리쓰기로 일치하는 것일까? 이를 위해 측근의 배신에 의해서 붙잡힌 모리쓰기를 중심으로 중세 서적에서는 어떻게 기술하고 있는지에 대해서 살펴보고자 한다. 조사 범위는 모리쓰기에 관한 생물이 정확하지 않기 때문에 『아즈마 가가미』 12권에서 모리쓰기 후일담 기술을 하고 있는 1192년부터 가타리 혼계 야사카 류인 하쿠니주쿠 본(百二十句本) 『헤이케 모노가타리』 12권과 요미혼 계인 엔교 본 『헤이케 모노가타리』 6권에서 헤이케 잔당 후일담 중 모리쓰기가 죽었다고 하는 1197년까지로 정하고, 이 시기를 기록하고 있는 일기와 역사서를 중심으로 조사해 보았다. 그 중 가마쿠라 막부(鎌倉幕府) 가신(家臣)에 의해서 편찬(編纂)된 역사서인 『아즈마 가가미』에서만 모리쓰기에 관한 내용을 싣고 있으므로 본고에서는 이를 중심으로 살펴보겠다.

『헤이케 모노가타리』에서 측근의 배신 일화에서 공통적으로 등장했던 모리쓰기의 후일담은 『아즈마 가가미』 12권 1192년(建久三) 1월 24일자에서 볼 수 있다. 내용을 보면, 가즈사고로보에 다다미쓰(上総五郎兵衛忠光, 이하 ‘다다미쓰’)31)가 참형을 당하기 전, 미나모토 군이 다다미쓰에게 같은 다이라 씨(平氏) 무사들의 행방에 대해서 심문하게 되는데, 그 내용은 다음과 같다.

무사시 국(武蔵国) 해변에서 죄인 가즈사고로보에조 다이라노 다다미쓰(平忠光)는 효수되었다. 와다 요시모리(和田義盛)가 명을 받들어 집행했다. 다이라노 다다미쓰는 효수되기 며칠 전부터 물도 마시지 않았다고 한다. 그리고 심문 내용은 다음과 같다. “더 이상 다른 헤이케 무사들은 없습니다. 다만, 옛추노지로보에 모리쓰기(越中次郎兵衛盛継)는 작년 즈음 다지마 국에 숨어있었습니다. 그도 나와 같이 복수하려는 마음이 있을 겁니다. 하지만, 현재 그가 어디에 있는지 알 수 없습니다. 또한 한 곳에 오래 머물지는 않는 듯합니다.”라고 했다32)

살펴 본 바와 같이, 모리쓰기가 다지마 국에 숨어서 후일을 도모했을 것이라고 하는 부분은 『헤이케 모노가타리』와도 일치하는 부분이다. 다만, 다다미쓰의 이러한 언급이 밀고인지 여부는 확실히 알 수 없다. 하지만, 미나모토 군에

31) 다이라노 다다미치(平忠光)는 헤이안 중기 무사이며, 다이라노 요시부미(平良文)의 아들이다. 헤이안 말기(平安時代末期)에 성립된 『니쥬레키(二中歴)』에 의하면 다이라노 다다요리(平忠頼, 930~1019년)의 형제라고 한다.

32) ‘建久三年(1192)二月小廿四日丁卯。於武蔵国六連海邊。囚人上総五郎兵衛尉忠光梟首。義盛奉之。日来漸漿水云々。推問之間。申云。更無同類。但越中次郎兵衛尉盛継。去年之比隱居丹波国。彼同存會稽之志歟。於當時者難知在所。曾不定一所云々。’ 黑板勝美 編『吾妻鏡(国史大系第32卷)』(林譲, 1932) p.460

게 모리쓰기의 행방을 알리는 정보로 작용했을 가능성을 배제할 수는 없다.

이 외에도 헤이케 멸망 후 기록된 모리쓰기에 관한 후일담은 『아즈마 가가미』 13권 1193년(建久四) 3월 16일자에서도 볼 수 있는데, 모리쓰기를 잡아들이는 과정으로 다음과 같다.

헤이케 잔당인 옛추노지로보에 모리쓰기를 비롯한 무사들이 교토 근처에서 숨어있다고 하는 소문이 흘러 들어왔다. 서둘러 잔당들을 잡아오라고 고토 모토키요(後藤基清)에게 명하셨다.<sup>33)</sup>

『아즈마 가가미』의 내용과 가타리혼 계와 요미혼 계 『헤이케 모노가타리』와 내용이 완전히 일치한다고 볼 수는 없지만, ‘소문이 흘러 들어왔다’라는 것은 누군가에 의해서 밀고가 들어왔다는 것을 알 수 있다. 이는 『아즈마 가가미』와 『헤이케 모노가타리』의 내용이나 서술이 완전히 일치하지는 않는다고 하더라도 요미혼 계 중 엔교 본과 나가토 본 『헤이케 모노가타리』에서 모리쓰기의 정인인 여인이 교토 근처에 있었고, 그 여인의 밀고로 모리쓰기가 붙잡히게 된 것과 앞뒤가 들어맞는 상황이라 할 수 있다. 이처럼 정황상 일치하는 것 외에도 『아즈마 가가미』에서 모리쓰기를 잡으라는 요리토모의 교서가 내려졌다고 하는 부분은 『헤이케 모노가타리<sup>34)</sup>』 후일담과도 일치하고 있는 부분이다. 이를 보았을 때, 이 시기 미나모토 군에게 토벌해야 할 헤이케 잔당의 대표 인물은 가게키요가 아닌 모리쓰기가 인식되었을 가능성이 크다고 할 수 있다.

살펴 본 바와 같이, 모리쓰기에 대해서 기술하고 있는 가마쿠라·무로마치 서적은 『아즈마 가가미』 뿐이며, 헤이케 잔당의 후일담으로 그려진 모리쓰기의 행적은 두 건뿐이다. 하지만, 『아즈마 가가미』에서도 이미 살펴본 『헤이케 모노가타리』에서와 같이 모리쓰기가 몸을 숨긴 장소는 다지마 국으로 일치하고 있으며, 모리쓰기가 교토에 연고가 있음을 확인할 수 있다. 이처럼 『아즈마 가가미』에 기록된 모리쓰기의 행적은 이미 살펴본 『헤이케 모노가타리』와 많은 점 일치하고 있다.

그렇다면, 『아즈마 가가미』에 가게키요에 대한 기록은 어떻게 되어있을까? 이에 대해서는 줄고 「가게키요에 대한 일고찰(다이니치 노닌(大日能忍)과의 관계를 통해서)<sup>35)</sup>」를 통해서 살펴 본 바 있다. 간단히 말하면, 가게키요에 대한 후일담에 대한 기록은 없다. 다만, 헤이케가 멸망하기 전의 기록으로 『아즈마

33) ‘建久四年(1193)三月小十六日癸未。平家与党越中二郎兵衛尉盛繼已下隱居近国之由有風聞。早可追討之由。被仰兵衛尉基清云々。’ 전개서(주32번) p.486

34) 『헤이케 모노가타리』 「당도계 전본」인 가타리혼 계 중 가쿠이치 본(寛一本) 12권, 요네자와 본(米沢本) 12권과 「비당도계 전본」인 요미혼 계 중 엔교 본(延慶本) 제 6권 말(第六末), 나가토 본(長門本) 20권에서도 미나모토노 요리토모(源頼朝)의 교서가 내려졌음을 기술하고 있다.

35) 줄고 「가게키요에 대한 일고찰(다이니치 노닌(大日能忍)과의 관계를 통해서)」 『일본어문학 제 48집』 (일본어문학회, 2011.3) pp.99~119

가가미』 전권을 통틀어 아쿠시지보에 가게키요라는 명칭으로 2번 등장하는데, 1184년(壽永三年) 2월 7일자와 단노우라 전투(壇浦の戦い)<sup>36)</sup>가 있었던 해인 1185년 3월 2일자 기록이다. 이 중 1185년 3월 2일자를 보면 가게키요는 교토 조정의 공령(公領)으로 야마시로 국(山城国, 지금의 교토)의 정진회(精進会) 비용을 어렵게 모아 장원의 해마다 마치는 공물을 가로채려 한 인물로 등장하는 것뿐이다<sup>37)</sup>. 다시 말해서, 가게키요가 헤이케 잔당으로 남아있었는지 여부는 『아즈마 가가미』를 통해서도 확실히 알 수 없다. 하지만, 모리쓰기의 경우는 『아즈마 가가미』와 『헤이케 모노가타리』를 통해서, 그가 헤이케 멸망 후에 헤이케 잔당으로 미나모토 군에게 존재감이 있는 인물로 인식되었을 가능성을 부인할 수 없다.

## 5. 결론

이상으로 가게키요 모노(景清物)에 소재를 제공한 『헤이케 모노가타리』 전본에서 보이는 측근의 배신 일화에 대해서 고찰해 보았으며, 다음과 같은 결론을 내릴 수 있다.

우선, 『헤이케 모노가타리』 각 전본을 가타리혼 계와 요미혼 계로 분류하고, 측근의 배신 일화를 살펴보았다. 부분적인 차이점을 지니고 있었지만, 가타리혼 계 『헤이케 모노가타리』와 요미혼 계 『헤이케 모노가타리』에서 배신당하는 인물은 모리쓰기로 일치하고 있으며, 이 외에도 모리쓰기를 배신하는 자, 모리쓰기가 몸을 피한 장소, 요리토모가 모리쓰기를 사면하는지 여부, 모리쓰기 참형 장소 등에서도 거의 대부분 일치하고 있다.

두 번째로는 『헤이케 모노가타리』에서 측근의 배신 일화의 일치점이라 할 수 있는 모리쓰기의 후일담을 기술하고 있는 가마쿠라 시대 역사서인 『아즈마 가가미』를 살펴보았다. 내용을 보면 『헤이케 모노가타리』 전본에서 기술된 배신당한 인물, 배신자, 요리토모의 사면여부, 참형 장소 등과 일치하는 부분은 없다. 하지만, 다다미쓰를 심문하는 과정에서 모리쓰기가 몸을 숨긴 장소가 언급되는데 이 장소는 『헤이케 모노가타리』 각 전본에서 모리쓰기의 은신처였던 다지마 국으로 일치하고 있음을 알 수 있다.

이처럼 『헤이케 모노가타리』 각 전본과 각 작품의 성립시기와 장르가 다름에도 불구하고 측근의 배신 일화는 모리쓰기라는 인물로 일치를 보고 있으며, 내

36) 단노우라 전투(壇浦の戦い)는 헤이안 시대 말기 1185년 4월 25일에 나가토노쿠니 아카마가세키(赤間関) 단노우라(壇ノ浦, 지금의 야마구치 현 시모노세키 시)에서 벌어진 전투로 헤이케(平家)가 멸망에 이른 지쇼-주에이의 난(治承・壽永の乱)의 최후의 전투이다.

37) ‘元暦二年(1185)三月大二日乙酉。去夜飛脚者渋谷庄司重国之使也。去正月參州自周防国被渡豊後国之時。最前渡海。討種直之由申之。」今日。内藏寮領山城国精進御園事。止給人景清妨。可令刑部丞信親領掌之旨。武衛直令下知給云々。’ 国書刊行会 『吾妻鏡』(国書刊行会、1906) p.736



용에 있어서도 일정한 흐름을 갖고 있다. 때문에 『헤이케 모노가타리』 만을 통해서 모리쓰기를 가게키요로 혼동할 가능성은 희박하다고 할 수 있다. 다시 말해서, 『헤이케 모노가타리』에 기술된 가게키요를 통해서 헤이케 잔당의 집약인물로 가게키요를 보려고 하는 시각은 무리가 있다고 할 수 있다. 또한, 이는 굳이 가게키요라는 인물을 헤이케 잔당의 집약 인물로 상정한 것은 가게키요와 모리쓰기라는 인물을 혼동에 의해서가 아닌 인위적 이유가 있을 것이라는 증거이기도 하다. 이에 대해서는 다음 연구 과제로 삼고 계속해서 연구해 나가도록 하겠다.

## 【参考文献】

### (텍스트)

- 吉沢義則 校註(1935). (応永書写延慶本)平家物語. 東京: 改造社 pp.3652~3654  
麻原美子 外編(2011). 平家物語長門本延慶本対照本文. 東京: 勉誠出版 pp.1491・1492  
黒川真道 校註(1906). 長門本 平家物語. 東京: 国書刊行会 pp.742~744  
黒板勝美 編(1932). 吾妻鏡(国史大系第32卷). 東京: 林譲 p.460, p.486  
古谷知新 校訂(1910). 平家物語附承久記. 東京: 国民文庫刊行会 pp.591・592  
佐々木八郎 校註(1963). 平家物語評講(上・下). 東京: 明治書院 pp.1575・1576  
高橋貞一 校注(1973). 百二十句本 平家物語. 東京: 思文閣 p.646  
富倉徳次郎 校(1966). 平家物語全注釈(下). 東京: 角川書店 pp.3207・3208

### (논문)

- 줄고 「가게키요에 대한 일고찰- 『헤이케 모노가타리』를 중심으로-」 『일본연구 제 30집』 (중앙대학교 일본학연구소, 2011.2) pp.233~252  
줄고 「『헤이케 모노가타리』에 나타난 가게키요 관련 일화 고찰 -미나모토노 요리토모 암살시도 일화를 중심으로-」 『일본학보 제 87집』 (한국일본학회, 2011.5) p.181~194  
줄고 「가게키요에 대한 일고찰(다이니치 노닌(大日能忍)과의 관계를 통해서)」 『일본어문학 제 48집』 (일본어문학회, 2011.3) pp.99~119  
北川忠彦 「景清像の成立」 『軍記物論考』 (三弥井選書, 1989) pp.28~55  
向井芳樹 「幸若舞曲『景清』の論」 『近松の方法』 (桜楓社, 1976) pp.195~216  
徳江元正 「乞丐景清-幸若舞曲と題目立-」 『文学46卷』 (岩波書店, 1978.4) p.62~75  
星野貴志 「景清論-平家物語諸本が形成する景清像の考察-」 『成城国文学18号』 (成城国文学会, 2002) pp.15~30  
砂川博 「幸若舞曲景清の前段階-南部の景清語りの可能性-」 『幸若舞曲研究第三卷』 (三弥井書店, 1975) p.66~87  
麻原美子 「舞の本『景清』考」 『幸若舞曲研究第九卷』 (三弥井書店, 1996) pp.3~30

## 要旨

本稿で取り上げる「景清」は、『平家物語』で平家の侍の一人として登場するが、以後多くの作品で主人公として登場し、幸若舞曲『景清』においては、平家残党の集約体として登場している。これらは後に「景清物」と呼ばれ、日本全国に景清に関する伝説も残されている。このように、平家の一人の侍に始まり、後に平家残党の集約体を象徴する人物として登場するという、景清の描かれ方の変化が、なぜ生まれたのかという疑問は、景清に関する多くの研究を生み出した。これに関する日本での研究は、大きく二つの流れに分けることができるが、それは民俗学的方法を通じた景清の研究と『平家物語』に現れる景清の研究である。また、このような流れとは関係なく、中国の忠臣らの名前が論じられることもある。その中で『平家物語』を通じた研究中北川忠彦は覚一本『平家物語』に現れた一定の侍の羅列が景清が平家残党の集約人物として登場するためだと主張した。その他にも星野貴志は『平家物語』に登場する平家残党の話が景清と混同されることが多いが、これは固定化されなかった平家残党の話が景清につないたものと結論を結んでいる。だが、これら研究は『平家物語』伝本の中で「当道係」である語り物系だけを考察したり、「当道係」である語り物系と「非当道係」である読み本系で見えるエピソードが景清に混同された可能性を示唆して平家残党の集約人物で景清を相定して具体的に写実的な論証を避けている。これに本稿では『平家物語』だけを通じては景清を平家残党の集約体として想定するのは多少無理があると考えて、景清が平家残党の集約体に描かれている幸若舞曲『景清』に現れたエピソードらを通じてこれを証明しようとする。すなわち平家の復讐・源頼朝の暗殺試み、側近および情人の裏切り、牢破り、観音の身代り、源頼朝の赦免、景清の両眼抉り等に関する史料を考察する必要性があると考えた。このようなエピソードの中で「平家の復讐・源頼朝の暗殺試み」に関するエピソードに関しては拙稿を通じて『平家物語』だけを通じて景清を平家残党の集約体として見るのは多少無理があると記述した。このような流れの中で『平家物語』の景清と平家残党関連のエピソードである、側近および情人の裏切り、観音の身代りの中で「側近および情人の裏切り」についての史料を調査することで次のような結論を出すに至った。このように『平家物語』に現れる伝本の成立時期とジャンルが違いにもかかわらず、「側近および情人の裏切り」のエピソードは越中次郎兵衛尉盛嗣という人物で一致を見ていたし、一定の内容の流れも持っている。このような流れの中で記述された『平家物語』の伝本は部分的に差異点もあったが、盛嗣を景清で混同するほどの相違点ではないということである。言い換えれば、『平家物語』と記述された景清を平家残党の集約体として想定することは無理があるというもう一つの反証といえる。また、景清を平家残党の集約人物で想定されたことは他の理由があるという証拠でもある。これについては次の研究課題として引き続き研究していくようにする。

キーワード：景清、覚一本、八坂本、延慶本、長門本、平家物語

투 고 : 2011. 8. 31  
1차 심사 : 2011. 9. 10  
2차 심사 : 2011. 10. 1



# 『扶桑略記』에서 본 불상 도래에 관한 인식

松本真輔\*

(e-mail: nosmoke@khu.ac.kr)

---

## 目次

---

1. 들어가며
  2. 불상이라는 관점
  3. 『부상약기』 불교 전래 기사
  4. 『부상약기』 젠코지 연기와 司馬達等の 신앙
  5. 맺음말
- 

## 1. 들어가며

이 논문은 헤이안 시대 말기에 편찬된 『扶桑略記(부상약기)』를 소재로 일본 불교 전래에 관한 인식을 불상 도래와 관련지어 파악하는 것을 목적으로 한다. 일본 불교 전래라고 하는 것은 백제로부터 일본으로 불교가 전달된 사건을 가리키는데, 이것에 대해서는 이미 많은 문제점이 지적되어 왔다. 특히 문제가 되는 부분은 538년 전래설과 552년 전래설인데, 자료상으로 문제가 있기 때문에 아직 확정적인 결론까지 도달하지 못한 상황이다. 이것에 대해서는 이미 정리한 적이 있는데, 연대적인 문제는 있지만 백제로부터 불교가 전달되었다는 부분은 모든 자료가 공통적으로 주장하는 내용이다<sup>2)</sup>. 또한 전달된 불교의 내실에 관해서도 불상 전래라는 부분을 강조하는 자료가 많은 것도 확인 할 수 있다<sup>3)</sup>.

---

\* 慶熙大学校教授 (古典文学)

1) 이 문제에 대해서는 松本真輔(2011) 『四天王寺와 善光寺의 縁起에서 본 백제 인식--불교 전래설을 중심으로--』 (『일어일문학연구』 77-2) 가 자세히 논하고 있다.

2) 동 주(1)

3) 동 주(1)

그런데 이러한 불교 전래에 대한 인식은 시간이 지남에 따라 어떤 변화가 있었고 어떤 부분이 계승되었을까. 이 논문에서는 11세기 말경에 편찬된 불교적 요소가 강한 역사서인 『부상약기』 불교 전래 기사를 소재로 이 문제를 고찰하고자 한다.

『부상약기』는 比叡山(히에산) 延曆寺(엔랴쿠지)에 소속하는 승려인 皇円(코엔)이 편찬했다고 하는데, 이 사람에 대한 자세한 자료는 남아 있지 않다. 따라서 『부상약기』가 만들어진 배경에 대해서도 분명하지 않은 점이 많다. 神武(진무) 천황부터 堀河(호리카와) 천황의 시대인 1094년(寛治8)까지 기사가 있는데 일부는 상실되어서 남아 있지 않다. 초록 형식이기 때문에 역사 연구에서 이 책 자체가 일차자료로 이용되는 일은 거의 없다. 한편 이 책에는 현존하지 않은 자료들(소위 말하는 산일 문헌)이 인용되어 있기 때문에 사사연기이나 승전자료로 주목되는 경우가 많았다. 이 논문에서는 『부상약기』에 보이는 불교사에 관한 인식을 중심으로 그 내용을 분석하고자 한다. 헤이안 시대에 쓰인 문헌 중 일본 불교사를 체계적으로 기술한 문헌인 만큼 이 책에 대한 분석은 큰 의미를 가질 것이다.

한편, 이 헤이안 시대에 널리 알려졌던 삼국의식 또한 이 논문에서 문제를 제기하고자 한다. 삼국의식이란 불교가 인도를 시작으로 중국을 경유해서 일본으로 건너왔다는 역사관을 가리킨다. 삼국의식에 대해서도 이미 자세한 연구가 있는데, 헤이안 시대에 쓰인 『今昔物語集(곤자쿠 이야기 집)』, 가마쿠라 시대에 쓰인 『三國伝灯記(삼국전등기)』나 『三國仏法伝通縁起(삼국불법전통연기)』, 무로마치 시대에 쓰인 『三國伝記(삼국전기)』 등, 삼국의식을 전제로 일본 불교사를 기술한 문헌이 적지 않다. 이 문헌들에는 고대문헌과 달리 백제에 대한 언급이 없다는 큰 문제를 내포하고 있다.

이러한 삼국의식이 대두하기 시작했던 헤이안 시대 말기에 편찬된 『부상약기』는 백

- 
- 4) 선행연구로는 다음과 같은 논문이 있는데, 전체적으로 자료론적 성격이 강하다. 平田俊春(1956) 「扶桑略記逸文」(『防衛大学校紀要 人文・社会科学編』1)、小西徹竜(1983) 「『扶桑略記』逸文再考」(永島福太郎先生退職記念会編 『日本歴史の構造と展開』山川出版社)、原田 行造・竹村 信治(1982、1983) 「説話資料収集ノ一ト扶桑略記』逸文資料編」(『金沢大学教育学部紀要 人文科学・社会科学編』32、32) 등은 잃어버린 『부상약기』 본문에 관한 논고이고, 堀越光信(1986) 「『扶桑略記』所引『日本三代実録』逸文考(上・下)」(『皇学館論叢』19-2、19-3)、達日出典(1987) 「大学頭明衡筆『清水寺縁起』と『扶桑略記』所引清水寺縁起」(『日本仏教史学』22)、宇佐美正利(1989) 「『扶桑略記』の引用--『日本往生極楽記』の場合」(『駿台史学』75)、宇佐美正利(2001) 「『扶桑略記』の史料引用--『日本霊異記』の場合」(『明治大学人文科学研究所紀要 別冊』12) 등은 다른 자료에 나타난 『부상약기』에 관한 고찰이다.
- 5) 高木豊(1982) 『鎌倉仏教史研究』岩波書店、前田雅之(1999) 『今昔物語の世界構想』笠間書院、市川浩史(2005) 『日本中世の歴史意識——三國・末法・日本』法蔵館 등의 연구가 있다.
- 6) 이것에 대해서는 주(1)에서 논한 적이 있는데, 많은 고찰을 할 필요가 있다. 물론 『三國仏法伝通縁起』처럼 백제로부터의 전래에 언급이 있는 문헌도 있지만 『今昔物語集』 등은 긴메 천황 시대에 전래했다고 하는 『日本書紀』 등의 기술을 채용하지 않고 사실상 성덕태자를 일본 불교의 개시점으로 정했다. 이러한 인식은 근대 이후 전개한 불교사인식에도 영향을 주었다.

제로부터 불교가 전래되었다는 사실을 전제로 기술되어 있다는 점에서 상기한 문헌들과는 다른 성격을 가지는 문헌이라고 평가할 수 있을 것이다. 이러한 의미에서 『부상약기』는 『일본서기』 등 고대문헌과 같은 맥락으로 편찬된 역사서라고 할 수 있다.

그렇다면 『부상약기』가 제시한 불교 전래에 관한 인식은 무엇으로부터 시작한 것일까. 여기서 주목할 것은 불상 도래라는 문제이다. 본문에서 자세히 언급하겠지만, 『일본서기』를 비롯하여 불교 전래를 서술하는 고대문헌들은 불상 도래에 초점을 맞추어서 일본 불교의 시작을 설명하는데, 『부상약기』도 역시 이러한 흐름을 계승하고 있다.

따라서 이 논문에서는 欽明(긴메이) 천황 13년의 기사(불교 전래)와 이 기사와 함께 인용되는 『善光寺緣起(젠코지 연기)』 등의 자료에서 알 수 있듯이, 『부상약기』가 제시하는 불교 전래에 대해 불상 도래라는 점에서 논하고자 한다. 『부상약기』 불교 전래 기사가 불상 도래에 초점을 맞추어서 편찬되어 있는데, 그것은 당연히 백제로부터의 불교 전래를 강조하는 내용이기 때문이다. 이것은 헤이안 시대 말기부터 가마쿠라 무로마치 시대에 유포되었던 일본 불교사에 대한 이해, 즉 삼국의식과는 상당히 다른 것이었다. 그러한 의미에서는 『부상약기』는 또 하나의 불교 사관을 제시하고 있다고도 할 수 있을 것이다.

## 2. 불상이라는 관점

『부상약기』 불교 전래 기사를 검토하는데, 불상이 문제가 되는 이유는 무엇일까. 우선 여기서 생각해야 하는 것은 불교란 무엇인가 하는 상당히 기본적인 문제이다. 불교를 나타내는 말로 「三宝(삼보)」가 있다. 『일본서기』에 인용된 유명한 十條憲法(17조헌법)에는 「둘째 독실하게 삼보를 존경해야 한다. 삼보란 불·법·승이다<sup>7)</sup>」라고 하는 조문이 있다. 여기에 보이는 불이란 일반적으로 석가를 가르키며, 법은 불교의 가르침이고, 승은 승려(승가)이다. 감히 말하자면 불교 신앙이란 삼보에 대한歸依(귀의)를 의미한다.

이러한 불교에 대한 기본 인식은 불교 전래 기사에서도 찾아볼 수 있다. 중국이나 한국에서는 불교 전래라고 하면 기본적으로 승려나 경전이 들어오는 것을 지표로 하고, 그와 함께 사원 건축에 대해서도 언급한다.

예를 들어서 중국의 불교 도래설로 유명한 明帝感夢伝法説(명제감몽전법설)에서는 꿈에 나타난 金人(금인)을 찾아서 서쪽(서역)으로 사자를 파견하여 『四十二章經(사십이장

7) 二に曰はく、篤く三宝を敬へ。三宝とは、仏・法・僧なり(日本古典文学大系『日本書紀(下)』p181)

경』이나 승려가 왔다는 내용이 널리 알려져 있다. 또한, 한국의 『삼국사기』, 『삼국유사』, 『해동고승전』을 보면, 고구려에서는 순도가, 백제에서는 마라난타가, 신라에서는 목호자 혹은 아도가 각각 불교를 전달했다는 이야기가 전해지고 있다.

이처럼 중국이나 한국에서는 기본적으로 승려 도래를 지표로 불교 전래를 말하는 경우가 많다. 물론 불상에 대해서 언급하는 경우도 없진 않지만, 기본적으로는 승려가 불교를 전달했다는 내용이다.

이들과 대조적으로 잘 알려져 있는 일본의 불교 전래설, 즉 『上宮聖德法王帝説(상궁성덕법왕제설)』, 『元興寺伽藍縁起并流記資財帳(간고지 가람연기 및 유기자재장)』, 『일본서기』 등에서는 기사와 초점이 불상 도래로 되어있다. 예를 들어서 『간고지 가람연기 및 유기자재장』은 다음과 같다.

大倭国(대왜국)의 불법은 斯歸嶋宮(시키시마노 미야)에 도읍을 둔 긴메이 천황의 시대, 즉 蘇我(소가)대신 稻目宿弥(이나메 스쿠네)가 모셨을 때, 이것이 바로 천황의 치세 7년인데, 간지는 무오에 해당하는 해의 12월에 건너왔을 때부터 [불교가] 시작되었다. 백제국 성명왕의 시대 태자의 불상 및 관불의 글 하나, 그리고 불법을 해설하는 책자 한 권을 가지고 오고 「우리가 들은 바로는 불법은 확실히 세간무상의 법이기 때문에 그 나라도 수행해야 합니다」라고 말했다<sup>8)</sup>.

이것은 538년 도래설을 나타내는 자료인데, 본문에 나오는 무오년은 宣化(센카)천황 시대에 해당하기 때문에 기사에 있는 긴메이 천황과 모순이 된다. 이 자료에서는 백제로부터 불상과 불구, 경전이 전달되었다고 하는데, 승려에 관한 기술이 없다.

또한 같은 책에 다른 부분에도 유사한 기사가 있는데,

장륙불의 광명에 의하면, 広庭(히로니와) 천황은 시키시마 미야에 계셨을 때 백제 명왕(명성왕)이 「신이 들은바로는, 소위 말하는 불법은 이미 세간무상의 법입니다. 천황께서도 수행해야합니다」라고 말했다. 불상, 경교, 법시를 바쳤다<sup>9)</sup>.

라고 쓰여 있다. 불상 뒤쪽에 있는 광배에 쓰인 문장 (금석문) 이기 때문에 당연히 불상의 유래가 기재된 것인데, 역시 긴메이 천황 시대에 불상이 전달되었다는 내용이다.

8) 大倭国の仏法は斯歸嶋宮に天の下治しめし天國案春岐広庭天皇の御世、蘇我大臣稻目宿弥が仕える時、天の下治しめす七年、歳は戊午に次る十二月、度り来るより始まり。百済国聖明王の時、太子の像並びに灌仏の器一具、及び仏法を説ける書卷一筐を度して言さく「当に聞く、仏法はこれ世間無上の法、その国も修行すべきなり」と。(日本思想大系『寺社縁起』岩波書店、1975년 p8)

9) 丈六の光銘に曰はく、天皇、名は広庭、斯歸斯麻の宮に在し時、百済の明王上啓さく、「臣聞く、謂はゆる仏法は既にこれ世間無上の法なり。天皇も亦修行すべし」と。仏像、經教、法師を擎げ奉りき。(동 주(8), p20)



그러나 여기서는 한 가지 큰 차이를 지적할 필요가 있을 것이다. 그것은 밑줄 부분에 보이듯이 승려가 건너왔다는 문구이다. 실은 이 부분은 자료에 따라서 차이가 있다. 앞에서 언급했지만 『간고지 가람연기 및 유기자재장』에서도 승려에 관한 기술이 있는 기사와 없는 기사가 있다.

다음으로 聖德太子(성덕태자)의 생애를 쓴 전기이며, 불교 전래에 대해서 언급이 있는 『상궁성덕법왕제설』을 확인해 보고자 한다. 이 문헌은 法隆寺(호류지)에서 전해온 자료를 중심으로 구성되어 헤이안 시대까지 단계적으로 계속 편찬되어 왔다고 생각된다. 성덕태자전에 관해서는 四天王寺(시텐노우지) 혹은 그 주변에서 편찬된 『聖德太子伝暦(성덕태자전력)』이 잘 알려져 있었는데 근대까지 『상궁성덕법왕제설』은 주목되지 않았던 문헌이었다. 그러나 『간고지 가람연기 및 유기자재장』과 마찬가지로 538년 불교 전래설을 전하고 있다. 짧은 문장이지만, 그것을 확인하고자 한다.

간메이 천황 시대인 무오년 10월12일에 백제국 성명왕은 처음으로 불상과 불경 및 승려들을 보냈다<sup>10)</sup>.

앞에서 인용한 『간고지 가람연기 및 유기자재장』의 기사와 마찬가지로 시대(천황)가 맞지 않은 점이 문제이지만 자료상으로 이 부분을 소급하는 것은 어렵다. 이 점에 대해서는 이미 논한 바이다<sup>11)</sup>. 여기서는 역시 승려가 왔다는 기술이 있다.

그런데 『일본서기』에는 승려에 관한 부분이 없다. 『간고지 가람연기 및 유기자재장』과 『상궁성덕법왕제설』과 달리 552년 불교 전래설을 주장하는 『일본서기』는 「석가불 금동상 일체·幡蓋(번개) 약간·경론 약간을 드리다<sup>12)</sup>」라고 할 뿐 승려에 대한 언급이 없다.

이상과 같이 각각 문헌에 연대 차이가 있지만 일본 불교 전래설은 기본적으로 불상·불구·경전이 건너온 사건이며, 승려가 없는 경우도 있다.

사실 이러한 점은 불교 전래에 있어서, 중국이나 한국의 문헌에서 보여지는 승려에 대한 시각과는 다른 시각이 있다는 느낌을 주기도 한다(이러한 자료만으로 승려 도래에 관한 「史実(사실)」을 확정하는 것은 상당히 어렵다).

그러나 삼보 중 승려가 없는 상태로 불교가 전해왔다는 『일본서기』의 기사 내용은 『부상약기』에도 계승되어 있었다.

10) 支笏嶋天皇の御世、戊午年十月十二日委に百濟國聖明王は始めて仏像經並びに僧等を度し奉る。(『大日本仏教全書(一一二)』p12)

11) 동 주(2)

12) 釈迦仏の金銅像一軀・幡蓋若干・經論若干卷を獻る。(동 주(7)p100)

### 3. 『부상약기』 불교 전래 기사

『부상약기』 긴메이 천황 13년의 기사에는 5가지의 불교 전래설이 실려 있다. 간략히 내용을 정리하면 다음과 같다.

1. 『일본서기』에 의거한 기사. 불교가 전달된 이후에 발생한 불교 배척운동에 대해서도 언급한다.
2. 「一云(한 문헌에서 다음과 같이 말하고 있다)」라고 쓰인 문장이 있는데, 전해온 불상을 높이 一尺五寸(1척5촌)의 아미타상과 높이 1척의 관음과 세지 보살상이라고 한다. 켄코지에 있는 도래불과 같은 형식의 불상이다.
3. 「或記云(어떤 시록에서 다음과 같이 말하고 있다)」라고 쓰인 문장이 있는데, 『켄코지 연기』를 짧게 요약한 내용이다. 推古(스이코) 천황 시대 이 불상이 信濃(시나노)로 보내졌다고 한다.
4. 「善光寺緣起云(켄코지 연기에서 다음과 같이 말하고 있다)」라고 하면서 시작한 기사이다. 나중에 크게 전개된 『켄코지 연기』의 기본적인 내용을 가지고 있다.
5. 「日吉山藥恒法師法華驗記云(히에산 약코 법사가 쓴 범화엄기에서 다음과 같이 말하고 있다)」라고 해서 인용된 『延曆寺僧禪岑記(엔라쿠지 승 켄신기)』이라는 문헌에는 繼體(게이타이) 천황 시대 司馬達(시바닷토)등이 불상을 안치했다는 坂田寺(사카타 대라)의 연기.

이하 이들에 대해서 자세하게 검토해 보고자 한다. 우선 『일본서기』에도 기록된 불교 전래 기사를 보고자 한다. 내용은 백제로부터 불교가 전달되고 천황이 그것에 대해서 긍정적인 의견을 말하는 장면과, 이 기사에 이어서 신하들이 의견을 말하는 장면으로 나눌 수 있다. 전반부는 다음과 같다. 번역이 없는 문헌이기 때문에 여기서 자세하게 검토해 보고자 한다.

긴메이 천황 13년 임신 겨울 10월13일 신유에 백제국 성명왕(성왕)이 처음으로 금동 석가여래상역가상 일체, 그리고 경론이나 번개 등을 같이 헌상했다. 그 상표문에는 다음과 같이 쓰여 있었다. 「이 가르침은 여러 법 중에서도 가장 우수한 것입니다. 그 내용은 수준이 높아서 이해하기 어렵습니다. 周公(주공)이나 孔子(공자)라고 해도 좀처럼 이해할 수 없었습니다. 이러한 불교이지만 無量無辺(무량무변)의 福德果報(복덕과보)이 있고, 무상의 보제를 이룹니다. 예를 들어서 사람이 隨意宝珠(수의보주: 일이 마음대로 가는 보주)를 안으면 무엇이든지 마음대로 가는 것과 같은 것입니다. 멀리 천축(인도)에서 三韓(삼한)에 이르기까지 [부처님의] 가르침을 존경하고 있습니다. 이것을 미카도의 나라로 전달하여 도읍에서 유통시킨다면, 불교 경전에 쓰인 것과 마찬가지로 불법동류가 이루어졌다고 말할 수 있을 것입니다.」. 천황은 이것을 듣고 춤추듯이 기뻐하여 백제에서 온 사자에 대해서 다음과 같이 말했다. 「짐은 여태까지 이러한 훌륭한 가르침을 들었던 적

이 없다. 그러나 혼자서는 결정할 수 없다」라고 말했다. 그리고 여러 신하들에게 널리 의견을 구하고 「서쪽 번국이 불상을 헌상해 왔다. 그 얼굴은 상당히 엄숙한 분위기로 지금까지 본 적이 없다. 이것을 예배해야 할 것일까」라고 물었다<sup>13)</sup>.

여기까지가 전반부이며, 『일본서기』에 의거한 내용이다. 가장 큰 차이는 백제에서 온 사자에 대한 자세한 내용이 『일본서기』에 있지만 『부상약기』에는 그것이 없다는 점이다. 다른 부분은 약간 간략화 되어 있지만 기본적으로 공통된다.

그리고 이 부분에 이어서 불교 수용에 대해서 신하들이 의론하는 장면이 쓰인다.

소가 대신 稻目宿祢(이나메 수쿠네)는 「서쪽 나라들은 모두 이것을 예배한다. 일본만 이것을 하지 않을 수 없다」라고 말했다. 物部大連尾輿(모노노베 오오무라지 오시)는 「우리 나라 왕은 항상 천지에 계시는 180이나 되는 신들을 모시고 있다. 춘하추동 이것을 예배해 왔다. 그럼에도 불구하고 이제 와서 이것을 변경하고 다른 나라의 신을 예배한다면 신은 화를 내실 것이다」라고 말했다. 천황은 「원하는 것을 받아들여서 소가 대신 맥에서 예배하는 것을 허용하고 인정한다」라고 말했다. 소가 대신은 그것을 기뻐하여 小治田(오와리다)에 있는 자신의 집에 불상을 안치했다. 그리고 出世間(출세간)의 법(불교)을 열심히 믿고 다음으로 向原(무쿠하라)에 있는 집을 절로 했다. 이 때 병이 유행했다. 모노노베노 오코시들은 천황에 대해서 「우리들의 의견을 들어주시지 않았기 때문에 이렇게 병사한 사람들이 나타난 것이다」라고 하면서 절을 다 태웠다. 이 때 바람도 구름도 없는데, 왕궁이 타 버렸다<sup>14)</sup>.

이것도 『일본서기』에서 찾아볼 수 없는 내용이다. 주목해야 할 것은 기사가 불교 배척 부분으로 끝난 점이다. 그 이유를 추측하면 이 문장에 이어서 쓰인 내용과 관련

13) (欽明天皇)十三年(壬申)冬十月十三日辛酉。百濟國聖明王始獻金銅釋迦像體。并經論幡蓋等。其表云。是法於諸法中取為殊勝。難解難入。周公孔子尚不能知。此法能生無量無邊福德果報。乃至成弁無上菩提。如人懷隨意寶。所須依占情。此妙法寶亦然。祈願隨情元所乏少。遠自天竺裳泊三韓。【新羅。高麗。百濟。謂三韓也。】依教奉待。無不尊敬。渡伝帝國。流通畿內。果仏之所記我法東流。天皇聞已。激喜踊躍。詔使者云。朕從昔來。未曾得聞如是微妙之法。然朕不能自決。歷問群臣曰。西蕃獻此法。能生無量無邊福德果報。乃至成弁無上菩提。如人懷隨意寶。所須依情。此妙法寶亦然。祈願隨情元所乏少。遠自天竺裳泊三韓。【新羅。高麗。百濟。謂三韓也。】依教奉待。無不尊敬。渡伝帝國。流通畿內。果仏之所記我法東流。天皇聞已。激喜踊躍。詔使者云。朕從昔來。未曾得聞如是微妙之法。然朕不能自決。歷問群臣曰。西蕃獻仏。相貌端巖。全未曾看。可禮以不。(『新訂增補國史大系(一二)』p28)

14) 蘇我大臣稻目宿祢奏曰。西蕃諸國皆禮之。幽豆秋日本山豆獨背哉。物部大連尾輿。中臣鎌子等奏曰。我國家之王天下者。恒以天地社稷百八十神。春夏秋冬。祭拜為事。然而方今改拜番神。恐致國神之怒。天皇曰。宜隨情願付稻目宿祢試令中禮拜。大臣悅受。安置小治田家。勤修出世之業。次捨向原家為寺。【榴木原家。牟久木也。】是時。疾疫盛興。物部尾輿大蓮等奏曰。不頂臣等之計致此病死經火播寺。干時無風雲而火災大殿。(동 주 (13)p28)

이 있을 것이다. 즉 불교 배척 운동을 극복했다는 내용을 가진 젠코지 여래에 관한 기사가 있기 때문이다.

그리고 『부상약기』 불교 전래설에서는 앞부분에 『일본서기』에 의거한 내용이 있는데, 이것은 역시 정사로서의 권위성이 증시되었기 때문이라고 생각된다. 『일본서기』 불교 전래 기사는 후대에도 큰 영향력을 가졌던 것이다.

그런데 앞에서 본 공식적 불교 전래설에 이어서 『부상약기』에서는 별전이라고 할 수 있는 여러 불교 전래설을 소개하고 있다. 둘째로 등장하는 것이 다음으로 보는 짧은 기사이다. 이것은 『일본서기』에 없는 내용이다.

같은 해 오오무라지 모노노베 오코시가 죽었다. 어떤 기록에는 「같은 해 임신 10월에 백제 명왕(성왕)이 아미타상(높이는 1척5촌)과 관음·세지보살상(높이 1척)을 헌상했다. 상표문에는 「많은 가르침들 중 불교는 가장 우수합니다. 세상의 도리에서도 불교는 최상위에 위치합니다. 천황께서도 불교를 수행해야 합니다. 그것을 하기 위해서 불교 경전과 법사를 사자와 함께 보내드립니다. 불교를 믿어서 수행해 주십시오」라고 쓰여 있다. 어떤 기록에는 「시나노 젠코지에 있는 아미타여래상이 바로 이 불상이다. 스이코 천황 시대인 임술년 4월8일 秦巨勢大夫(하타노 코세 다이후)에게 명령하여 니나노로 보냈다」라고 쓰여 있다<sup>5)</sup>.

원문에는 「일운」이라고 기재되었을 뿐 출전을 명기하고 있지 않다. 따라서 여기에 이 문장이 기재된 경위는 분명하기 않다. 그러나 내용적으로 봤을 때 이 문장 다음으로 등장하는 「어떤 기록(혹기)」부터 젠코지 연기와 관련이 있는 것을 알 수 있다. 나중에 설명하겠지만 젠코지 연기는 백제로부터 「一光三尊(일광삼존)」, 즉 아미타불을 중심으로 관음과 세지보살이 좌우로 배치된 불상이 보내왔다는 내용이기 때문이다. 이 문제에 대해서는 다음 절에서 다시 검토하겠지만 여기서는 기사 내용이 불상과 관련한다는 점을 확인해 두고 싶다.

#### 4. 『부상약기』 젠코지 연기와 司馬達等の 신앙

『부상약기』 불교 전래 기사에서 주목되는 것은 젠코지 연기를 인용한 부분이다. 이것은 「젠코지 연기에서 다음과 같이 말하고 있다(善光寺縁起云)」로 시작하는 내용이

15) 同年。大連物部尾輿薨。一云。同年壬申十月。百濟明王獻阿彌陀仏像。(長一尺五寸) 觀音勢至像(長一尺)。表云。臣聞。万法之中。仏法最善。世間之道。仏法最上。天皇陛下亦應修行。故敬捧仏像經教師。附使貢獻。宜信行者。或記云。信濃國善光寺阿彌陀仏像。則此仏也。少治田天皇御時。壬戌年四月八日。令秦巨勢大夫奉占請送信乃國云々。(동 주 (13)p28)

다. 『부상약기』는 먼저 존재했던 문헌에서 인용했다고 볼 수 있는데, 유감스럽게도 현재 이 문헌은 존재하지 않다. 현시점에서 확인할 수 있는 가장 오래된 첸코지 연기는 『부상약기』에 등장하는 이 인용문이다.

다음으로 그 내용을 확인하고자 하는데, 여기서는 전문을 5 문단으로 나누어서 검토하고자 한다. 이하 각각의 문단 번호는 편의상 쓰는 것이다.

- (1) 긴메이 천황 13년 임신 10월13일 아미타상이 백제국에서 바다를 건너서 일본으로 왔다. 그리고 일본 撰津(셋쓰) 難波(나니와)항에 표착했다. 그 후 37년이 경과해서 처음으로 불교가 있는 것을 알게 되었다.
- (2) 따라서 이 3체는 최초의 불상이다. 따라서 세상 사람들은 이것들을 本師如來(본사여래)라고 부르고 있었다.
- (3) 스이코 천황 10년 임술 4월8일 신이 내린 말이 있어서 천황은 즉시 명령하여 이 불상을 시나노 水内(마즈우치)군으로 이동시켰다. 최초의 불상이기 때문에 여러 가지로 영험들이 있었다.
- (4) 이 불상은 원래 석존이 아직 살았을 때 천축 毘舍離國(비사리국)에 살고 있던 月蓋長者(월개장자)가 석존의 가르침에 따라 서방을 향해서 예배하여 열심히 미타여래·관음·세지보살을 빌었는데, 이 삼존불이 나타나 월개장자 맥의 문에 살게 되었다. 월개장자는 이 불상을 보고 금동으로 그 모습을 모사하고 주조한 것이 이 불상이다.
- 5) 월개장자가 죽은 후 이 불상은 하늘을 날아 백제국에 도착했다. 그 후 1000년이 지나고 바다를 건너서 일본으로 왔다. 현재 첸코지에 있는 삼존이 바로 이 불상이며。

내용적으로는 무로마치 시대 이후 지속적으로 편찬되어 온 첸코지 연기와 유사하지만 분량으로는 상당히 짧다. 아마도 선행하는 짧은 연기가 있고 그것이 나중에 증폭되었다고 생각하면 무난할 것이다.

그런데, 여기서는 밑줄 친 부분을 주목하고 싶다. 과연 「처음으로」가 『부상약기』(혹은 첸코지 연기)의 인식을 나타낸 것인지, 기사의 문맥에서 「당시 사람들이 그렇게 생각했다」(실제로는 긴메이 천황에게 보내 준 불상이라고 생각된다)라고 주장한 것인지 애매하지만, 이야기 자체가 이 불상을 중심으로 전개되어 있는 것은 확실하다. 나중에 많은 繪卷(두루마리)가 제작되는데, 그림으로 「금동불」이 더욱 강조되어 빛나는 불상으로서 그려지게 된다.

16) 善光寺縁記云、1) 天国排開広庭天皇治十三年壬申十月十三日、從百濟國、阿彌陀三尊浮浪來。着日本國撰津國難波津。其後經計卅七箇年、始知有佛法。2) 仍以此三體、為佛像之最初。故俗人号之、悉曰本師如來。3) 小墾田推古天皇十年壬戌四月八日、依仏之託宣、忽下論言。奉移信乃國水内郡。佛像最初、靈驗揭焉。4) 件佛像者、元是釈尊在世之時、天竺毘舍離國月蓋長者、隨積尊教、正向西方。遙致禮拜。一心持念彌陀如來・觀音・勢至。爾時三尊促身於操手半、現住月蓋門。長者面見一仏二菩薩。忽以金銅、所奉鑄寫之仏菩薩像也。5) 月蓋長者遷化之後、佛像騰空、飛到百濟國。已經一千余年、其後浮來本朝。今善光寺三尊、是其佛像也。(동 주 (13)p28-9)

게다가 이것은 『일본서기』와 다른 내용을 가지고 있다. 즉 『일본서기』에서는 백제왕이 일본으로 보냈다고 기술되었던 불상이 『부상약기』젠코지 연기에서는 바다를 건너서 일본에 도착했다고 쓰여 있다. 불상이 초점이 되고 자주적으로 백제에서 건너온 것처럼 묘사되는 반면 백제왕의 역할이 후퇴되어 있다고 볼 수도 있다. 또한 『일본서기』에서는 불상 이외에 경전이나 불구 등도 전해왔다고 쓰여 있었는데, 『부상약기』젠코지 연기에서는 불상이 불교 전래의 상징이 되어 있는 점도 주목할 필요가 있다.

그리고 이 문장에 이어서 『부상약기』는 불상 안치에 관한 흥미로운 설화를 인용한다. 이것도 현존하지 않은 문헌에서 인용한 내용으로 『부상약기』에서만 확인할 수 있다.

히에산 약코 법사 법화협기에는 엔라쿠지 승 젠신기에 「제27대 繼體(게타이)천황이 즉위 16년에 당나라 漢人(한인)이며 案部(안베)마을의 주인인 시바 닷토가 그 해 봄 2월 일본으로 건너오고 바로 大和國(아미토국) 高市郡(다케치군) 坂田原(사카타바라)에 초당을 만들었다. 본존을 안치해서 그 불상을 귀의 예배했다. 세상 사람들은 그것은 당나라의 신이라고 소문냈다」라고 쓰여 있다. 연기에 나온 문장이다. 은자가 이 문장을 봤는데, 긴메이 천황 시대 이전에 당나라 사람이 불상을 가지고 왔는데, 유포하지 않았다고 한다<sup>7)</sup>.

공식적인 것이 아닌 사적전래로 이 기사를 근거로 「(역사적)사실」이 논의되는 경우가 있는데, 기사 자체는 『부상약기』에 처음으로 인용된 逸文(일문)인 사카타데라의 「연기」라는 점을 염두에 둘 필요가 있다. 이 사카타데라 연기는 『일본서기』用明(요메이) 천황 2년(586)의 기사에도 보이는데,

천황이 고생하는 중기 병은 더욱 심각해졌다. 이미 임종으로 알려져 있었을 때에, 鞍部多須奈(구라노쓰쿠리 다수나: 시바닷토의 아들)가 천황 가까이 가서 「저는 천황을 위해서 출가하여 불교 수행을 하고자 합니다. 또한 장륙 불상 및 절을 세우고자 합니다」라고 말했다. 천황은 이것을 듣자 슬퍼해 큰 소리로 울었다. 이것이 현재 南淵(미나미부치) 사카타데라에 있는 목제 장륙 불상과 挾侍(협시) 보살이다<sup>8)</sup>

라고 한다. 『부상약기』와는 내용이 다르지만 불상을 중심으로 이야기가 전개한 부분

17) 日吉山藥恒法師法華驗記云。延曆寺僧禪岑記云。第廿七代繼體天皇即位十六年壬寅。大唐漢人案部村主司馬達止。此年春二月入朝。即結草堂於大和國高市郡坂田原。安置本尊。婦依礼拝。举世皆云。是大唐神之。出緣起。隱者見此文。欽明天皇以前。唐人持來佛像。然而非流布也。(동 주 (13)p29)

18) 天皇之瘡轉盛。將欲終時、鞍部多須奈(司馬達等子也)。進而奏曰、臣、奉爲天皇、出家修道。又奉造丈六佛像及寺。天皇爲之悲慟。今南淵坂田寺木丈六佛像・挾侍菩薩是也。(日本古典文学大系 『日本書紀(下)』 p160)

은 공통된다. 병의 치유라는 현세이익을 추구한 내용은 고대적인 불교신앙의 일각을 보여주지만, 이 이야기도 언제 만들어진 것인지는 분명하지 않다. 그러나 이 기사에서도 알 수 있듯이 『부상약기』는 『日本書紀』를 기점으로 불상 도래라는 관점에서 여러 자료를 수집하고 전체 기사를 구성하고 있다. 즉 찾아낸 기사를 그대로 실은 것이 아니라, 한 주제(불상 도래)에 맞는 기사를 골라서 불교 전래의 역사를 서술한 것이다.

물론 이러한 관점은 『부상약기』에만 보이는 것이 아니다. 불상 도래에 관한 이야기는 나라를 중심으로 한 사찰에서도 찾아볼 수 있다. 헤이안 시대 말기 大江親通(오오에 노 미치치카)가 南都(남도: 나라를 말한다) 7대사들을 순례했을 때 기록한 『七大寺日記(칠대사일기)』(1106년)에 興福寺(코후쿠지)에 관한 기사가 있는데, 금당에 안치된 약사여래 대해서 다음과 같이 설명하고 있다.

불상 뒤에 동쪽을 향해서 금동 석가삼존상이 있다. 중앙은 3척 정도의 불상이다. 연꽃 무늬와 垂裳(수상)이 있다. 2체의 보살 입상도 상당히 신묘한 모습이다. 일본 제30대 긴메이 천황 시대 백제국으로부터 처음으로 전달되었다. 일본 최초의 불상이다<sup>19)</sup>.

과연 이 설이 언제부터 있었는지 확실하지 않지만, 헤이안 시대 말기에도 실제로 안치되어 있는 불상에 대해 그 유래가 긴메이 천황 시대였다는 전래설이 전해져 있던 것을 알 수 있다. 물론 긴메이 천황 시대라는 설명은 『간고지 가람연기 및 유기자재장』이나 『일본서기』에서 확인 할 수 있을 것이다.

이러한 자료들은 삼국의식과는 다른 불교사가 확실히 계승되었다는 사례라고 할 수 있을 것이다.

## 5. 맺음말

이 논문에서는 『부상약기』 불교 전래설을 불상이라는 관점에서 검토해 보았다. 이 책은 『일본서기』뿐만 아니라 다른 문헌도 인용하여 일본 불교 전래설을 검토하고 있는데, 그것을 위해서 제시된 자료는 모두 불상 도래가 초점이 되어 있었다. 이러한 문헌들이 전하는 내용이 「사실」 인지는 분명하지 않지만, 적어도 불상 도래가 불교 도래를 상징한다는 사고방식에 근거한 서술이라고 할 수 있을 것이다.

그리고 이 논문에서 다룬 『부상약기』 불교 전래설은 같은 시대, 즉 헤이안 시대 말기쯤부터 서서히 유포되기 시작했던 삼국의식과는 다른 것이다. 삼국의식을 바탕으로

19) 仏後ニ東向ニ金銅ノ釈迦三尊像アリ。中尊三尺許居仏。蓮華ニ垂裳アリ。二菩薩像立、尤神妙云々。本朝第卅代欽明天皇御世ニ 從百濟國始奉渡、本朝最初ノ像也。(『校刊美術史料(上)』p23)

한 역사관에서는 불교가 인도 (천축) →중국 (진단) →일본 (본조) 로 전해왔다고 생각한다. 앞에서 언급했는데, 『곤자쿠 이야기 집』이나 『삼국불법전통연기』 등 이 틀을 전제로 일본불교사를 서술한 문헌은 적지 않다.

그리고 이러한 역사관을 전제로 하면 일본 불교의 시발점이 긴메이 천황이 아니라 성덕태자로 설정된다. 예를 들어 『곤자쿠 이야기 집』을 생각해 보고자 한다. 이 책의 제11권은 일본 불교사를 서술한 것인데, 불교에 관한 인물과 사찰의 역사가 설화 형식으로 정리되어 있다. 그리고 일본 불교사의 시발점이 되는 사람은 성덕태자이다. 이것이 무엇을 의미할까. 긴메이 천황 시대의 불상 전래를 기점으로 하지 않고 그 후에 탄생한 성덕태자를 일본 불교의 기점으로 하는 역사관이다. 성덕태자는 중국 천태종을 시작한 南岳慧思(남악혜사)가 다시 태어난 인물이라고도 하고, 이것을 전제로 한다면 백제→일본이라는 경로와 다른 불교 전래설이 있는 것을 알 수 있다.

그러나 성덕태자전 중 가장 근본이 되는 『聖德太子伝暦(성덕태자전력)』 (10세기 쯤) 에는 명확한 삼국의식이 보이지 않고 긴메이 천황 시대에 관한 기사도 있다. 삼국의식이 확실히 보이는 문헌이 『곤자투쿠 이야기 집』인데, 시기적으로 말하자면 『부상약기』와 거의 동일한 시기(12세기초)이다. 『부상약기』가 전시대의 사관 (혹은 문헌의 기사 내용) 을 계승하면서 불교사를 구축했다고 한다면, 『곤자쿠 이야기 집』은 그것과 다른 발상, 즉 후발적인 사관을 바탕으로 한 불교사의 틀을 지지했다고 할 수 있다.

## 【参考文献】

高木豊(1982) 『鎌倉仏教史研究』 岩波書店

前田雅之(1999) 『今昔物語の世界構想』 笠間書院

市川浩史(2005) 『日本中世の歴史意識——三国・末法・日本』 法蔵館

松本眞輔(2011) 『四天王寺와 善光寺의 縁起에서 본 백제 인식--불교 전래설을 중심으로--』

(『일어일문학연구』 77-2)



## 要 旨

本論文は、『扶桑略記』を素材として、平安時代末期の日本仏教伝来に関する認識を仏像という側面から考えようという試みである。日本仏教伝来説については、古代文献において、百済から仏教が渡来したという内容が伝えられていた。これらには年代の問題もあるが、内容上は百済から渡来した仏像焦点があてられていた。

『扶桑略記』は一一世紀末頃に比叡山の僧である皇円が編纂したとされる史書である。同書は『日本書紀』や善光寺縁起を利用しつつ仏教伝来に関する歴史を叙述しており、その内容は、やはり仏像を中心とした百済からの仏教伝来説であった。

一方、日本には平安時代から三国意識に基づいた仏教史観が広まっていた。これは、仏教がインドから中国を経て日本に伝わってきたという歴史観を指す。『扶桑略記』と同時代の『今昔物語集』や鎌倉時代の『三国伝灯記』や『三国仏法伝通縁起』、室町時代に編纂された『三国伝記』など、三国史観を前提に日本仏教史を記述した文献が少なくない。ここには百済の欠落という大きな問題が内包されており、古代文献とは大きな差異が見られる。

『扶桑略記』はこうした歴史観とは異なる内容を持った書と評価できるだろう。

キーワード：扶桑略記(Fnsoryakki)、善光寺 (Zenkouzi temple) 、  
仏教伝来 (Introduction to Buddhism) 、 『日本書紀』 (Nihonshoki)、  
寺刹縁起(Origine of temple)

투 고 : 2011. 8. 31

1차 심사 : 2011. 9. 10

2차 심사 : 2011. 10. 1



# パトロンとしての藤原道長

— 『紫式部日記』を主軸にして—

鄭 順 粉\*

(e-mail: sunbun@pcu.ac.kr)

---

## 目 次

---

1. はじめに
  2. 道長と文芸
  3. 紫式部抜擢と『紫式部日記』執筆要請
  4. 文芸サロンのリーダー
  5. 演出するパトロン
  6. おわりに
- 

## 1. はじめに

西洋芸術の歴史を概観してみると、それを構成するものとして、芸術作品と、作品を創り出す芸術家(作家)、そして作品や作家を享受する主体が存在することがわかる。ギリシャ・ローマ時代の裕福な市民階級やローマ皇帝にはじまり、中世はローマ教会や教皇などの権力者、そしてルネッサンス時代にはイタリアのメディチ家などの大商人がそれにあたる。単なる職工が偉大な芸術家となりえたのは、こうした享受者が、作品もしくは作家に対して、それらが含有する美と価値を理解し、それらに対して何らかの対価(財貨や名誉など)を払ったためである。芸術は人間の衣食住生活に必要な不可欠な基本要素ではないからである。

芸術の享受者たちは、好きな作品を手に入れるため、普通作家を身边に置いて創作をさせるようなかたちを取った。享受者たちは、いわば作家をまる抱えし芸術を享受していたわけであり、作家の持つ独自の技量やそこから生まれる芸術作品に対する理解と評価が可能なる存在であった。つまりパトロンとは、単に芸術作品の経済的・物質的担い手というこ

---

\* 培材大学校 日本学科 副教授 日本古典文学

とだけでなく、芸術家を理解し、作品を評価して、芸術家に支援を与える人々のことである。単に「芸術創作における経済的な面を引き受ける人々」というよりは、それらの産物(作品)を享受する者であることからむしろ「支援を与える享受者」と定義した方がより適切であろう。パトロンが芸術の愛好者であり理解者であるということは、場合によっては、制作を鼓舞するアイデアやインスピレーションを与える存在であることも意味する。十七世紀のフランスではポンパドール婦人をはじめとする王侯貴族がその役割を果たし、彼らの肖像画は当時の作家の代表作となっている。

芸術創造の長い歴史の上で芸術の保護者であるパトロンたちが果たした役割は決して小さいものではない。富と権力を誇るルネッサンスの王侯貴族や教会、新興の近代市民階級、コレクターや画商、そして現代の政府・企業などは、芸術のあり方に多大な影響を与えてきたのである<sup>1)</sup>。

日本にもパトロン<sup>2)</sup>によって文学が隆盛した時代がある。平安時代の摂関政治では、貴族たちが競って娘を天皇に嫁がせ、生まれた皇子を天皇に即位させて外戚関係を築き、権力を握ろうとした。周辺に集められた女房たちは、知性を磨き合い、高め合って女房文学が花開いたのである。摂関体制がそのパトロンの役割を果たしたと言えるが、中でも平安中期の一条天皇の時代はその絶頂期だったと見られる。

一条天皇期は、道隆・道長兄弟のもとで藤原氏の権勢が最盛に達した時であり、皇后(中宮の時代もある)定子のサロンや中宮彰子のサロン、大斎院選子内親王のサロンなどが並立し、教養ある女性たちが宮中にひしめき、機知に富んだ会話や和歌のやり取り、雅びな宴、洗練された文化が栄えた。道隆の娘である定子のサロンには、才女清少納言がいて、自然をめぐる風雅な世界やウイットのある歌説話の世界、そして帝と中宮定子、女房たちの知性が作り上げた華やかな世界などを『枕草子』を通して描き出した。それに対敵するように、道長は、長女彰子のサロンに、紫式部をはじめ、和泉式部、赤染衛門、伊勢大輔など、後世に名を残している才女たちを多く集めていた。その彰子サロンの中心にはパトロン道長がいて、当時の女房文学を主導したのである。もちろん道長は自分の権力維持や家の栄華を目的にしていたのであろう。しかし、平安女房文学があれほど栄えたのはやはり道長に負うところが大きいと言える。しかも、道長は単なる文芸の後援者に止まらず、より積極的なかたちで文学創作に関わろうとした。そのような道長の文芸後援については、すでに明らかにされた面もあるが、本稿では、『紫式部日記』を主軸にして、より深

1) 西洋の芸術の歴史をパトロンによって解くものとして、高陸秀爾(1997)『芸術のパトロンたち』(岩波新書)があり、本稿もそれに多くの示唆を受けている。pp.1-232

2) 日本語ではパトロンと言えば、芸術家を支援する後援者の意味のほか、女性に月々のお手当てを渡したり開業資金を提供したりする男性のことをさす場合もあるが、本稿においては当然ながら前者の意味に限って用いている。

化したところまで探してみたいと思う。すなわち、道長のパトロンとしてのありかただけでなく、彼が一般のパトロンとは異なって如何に新しいものを開拓したかのところまで究明する。

## 2. 道長と文芸

道長は、摂関政治が絶頂期に達した時、位人臣を極め、その子女十三人<sup>3)</sup>の中から、三后(彰子、妍子、威子)、二女御(嬉子、寛子、盛子)を入れると三女御)、二関白(頼通、教通)、孫に三帝(後一条、後朱雀、後冷泉)と、十世紀から十一世紀にかけて、権力を一手に掌握していた人物である。

道長の父にあたる藤原兼家は、藤原氏の権勢体制を築いた基経から五代目で、師輔の三男であったが、長兄伊尹や次兄兼通が早くも薨去し、兼家が摂政になったのは寛和二年(九八六)で、道長二十一歳の時であった。道長は、翌年源雅信の女倫子と結婚する<sup>4)</sup>が、父が摂政になったこともあり、翌年権中納言、四年後の正暦二年(九九一)には権大納言になった。正暦元年(九九〇)五月八日、父が病気で職を辞したので、長兄道隆が同日関白、同二十六日に摂政に就任する。しかし、道隆は、世を保つことわずか五年で、長徳元年(九九五)四月に薨去する。この年は、中関白道隆だけでなく、閑院大納言朝光、小一条左大将濟時、六条左大臣重信、栗田右大臣道兼、桃園中納言保光、山井大納言道頼などの高位の人々が一挙に薨去した。やがって天運が五男である道長に回ってきたわけで、姉の東三条院詮子(一条天皇の母)の支援もあり、甥の伊周(長兄道隆の長男で中宮定子の兄)を蹴落としてから長徳元年五月十一日に内覧の宣旨を受ける。道長は、同年六月十九日右大臣となり、いよいよ氏の長者となって天下を掌中にしたのである<sup>5)</sup>。

子供の頃道長がどのような教育を受けたかは、それを伝える文献や資料が残っておらずはっきりしたことは分からないが、一般の貴族教育を受けていたと考えて差し支えないであらう

3) 『尊卑分脈』には、「三条院女御盛子及び女子、都合十五人」とある。

4) 道長は、源雅信の女である倫子と結婚するが、源雅信は宇多天皇の皇子である敦実親王の男で、賜姓源氏となり、左大臣にいたった人物である。『栄花物語』巻第三によれば、道長が仲人を介して倫子との結婚を申し入れると、雅信は后がねとして愛育していた女を青二才に与えられるものと拒否したとあるが、倫子の母穆子が、普通の女性とは異なり人物を見抜く洞察力を持っていたため、道長の将来性を買い、夫の反対を押しきって道長と倫子の結婚を進めている。また、道長は『栄花物語』巻第八によると、子息頼通の結婚に際して「男は妻がらなり」と言ったとあるように、道長にとって結婚はとりわけ自家の繁栄を左右する重大な関心事であったことが分かる。

5) 道長が権力を握るまでの経緯については、従来多くの論が発表されており、例えば清水好子(1967)「藤原道長」(『中古文学』1)や山中裕(1995)「摂関政治史—藤原道長を中心として」(『調布日本文化』5)などに詳しく述べられている。pp.13-22、pp.19-38

う。平安時代の貴族男性は、文章の書き始めが七歳から十歳頃にかけてあった。普通は、書き始めは『孝経』が、読み始めには『貞観故要』がそれぞれ用いられ、道長もそうしたものから入って、漢学を基礎としながら、和歌、音楽、書画、詩文へと進んだものと見られる。『源氏物語』で、光源氏がわが子夕霧に対して厳しい教育を施したことが参考になる。

道長の文芸に対する興味や素養については、『紫式部日記』をはじめ、『御堂関白記』『小右記』などの漢文日記の記事によって垣間見られるが、大体、作文と和歌、文献収集、三つの分野で文学的な造詣を発揮していたと思われる。作文に関する記事は、『御堂関白記』や『小右記』に多く見られ、特に寛弘元年(一〇〇四)、二年(一〇〇五)に集中している。道長三十九才、四十才の時に、身分も安定し、長女の彰子は押しも押されぬ中宮として時めき、男たちも未来の関白をめざして成長している時であった。すなわち、道長が政治家としても家庭人としても最も安定していた時期であった<sup>6)</sup>。和歌の素養については、『紫式部日記』において女房たちに行事と和歌を促す様子や道長自ら和歌を詠む場面などに表わされており、漢文日記にも道長が和歌会を催したことが記されている<sup>7)</sup>。また、道長は、文献収集にも力を注いでおり、直接種々の文献収集もさることながら、二千巻に及ぶ書籍を贈った頼明や、家の蔵書三千五百巻を贈った陳政などの逸話を見合わせると、道長の文芸好きは相当なものであったと言える<sup>8)</sup>。この三部門を通じて活躍したのは、行成、匡衡、公任、斉信、俊賢といった当時の代表的な学者たちであるが、道長も彼らに負けない文芸愛好家だったことが明らかになる。

道長の文芸好きは、単に文芸の享受者に止まるものではなかった。道長は世界最古の長編小説『源氏物語』の作者紫式部、奔放な情熱歌人の和泉式部、赤染衛門、伊勢大輔など、後宮女房達が醸し出した華麗な女房文学を高めた最大の文芸後援者であったことを見逃してはならないであろう。それは長女彰子の「后がね」の子女教育に関わるもので、『枕草子』二一段に見える、宣耀殿の女御の父、藤原師尹の「一には、御手を習ひたまへ。次には、琴の御琴を、人より異に弾きまさむとおぼせ。さては、古今の歌二十巻を皆うかべさせたまふを、御学問にはせさせたまへ」の言辞に見られる如く、娘の教養を高めるために有名な女房たちを彰子後宮へ集めたのである。特に道長は、定子の中宮時代に中宮大夫であったので、清少納言を始めとする定子サロンを実際に眺めてきてお

6) 酒井みさを(1977)「藤原道長と文学」(『平安朝文学の諸問題』笠間書院)によれば、『御堂関白記』『小右記』の中に六十六例が見られる。pp.248-252

7) 道長の和歌活動については、片山剛(2001)「藤原道長の和歌活動(上)—その前半生を中心に」(『史聚』34)、同(2001)「藤原道長の和歌活動—三条朝まで」(『金欄短期大学研究誌』32)、同(2002)「藤原道長の和歌活動(下)—晩年の活動その他」(『金蘭国文』6)に詳しい。pp.33-52、pp.13-21、pp.29-47

8) 道長が漢籍輸入に熱心で、それが寛弘期の日本の文壇を如何に変化させたかについては、岡部明日香(2001)「藤原道長の漢籍輸入と寛弘期日本文学への影響」(『奈良・平安期の日中文化交流』(農山漁村文化協会))に述べられている。pp.302-316

り、長女の彰子のもとには、有名な女流文学者を多く仕えさせようとした。中でも文学者の家系の人で物語の作家としても有名であった紫式部を、道長夫妻ともに遠いながらも血縁関係にあった関係から、執拗に要請し、ついに寛弘二年(一〇〇五)十二月二十九日(年に異説あり)、中宮彰子のもとに出仕させるに成功する。紫式部の才能や抜擢過程については次節でまた詳述するが、仮名文学だけでなく、父も驚くほどの漢文学にも通じていたため、紫式部は、中宮に「楽府」を進講したり、世話をしたりしつつ、『源氏物語』を書き継いでいったものと考えられる。『紫式部日記』を見ると、若宮の御五十日の祝いの日(寛弘五年十一月一日)に、喜びに酩酊している道長に辟易して宰相の君と一緒に隠れていたところを、道長が几帳を取り払って、二人の袖をとらえて、お祝いの歌を詠んだら放してやると言われ、「いかにいかがぞへやるべき八十歳のあまり久しき君が御代をば」と詠むと、道長はしきりに感心し、「あしたづのよはひしあらば君が代の千歳の数もかぞへとりてむ」と、ひどい酔いの中でもちゃんと返歌を詠んだり、御冊子作りの段では、式部が里から持ってきて隠しておいた物語の原本を、中宮の御前に出ている留守に、道長がこっそり入って探し出し、内侍の督の殿(妍子)にあげた話、次いで「渡殿に寝たる夜、戸をたく人ありと聞けど、おそろしさに、音もせて明かしたるつとめて」の、道長との贈答歌などから見て、式部は、中宮サロンの重要人物の一人であり、道長はそういった面からも式部のよきパトロンであり、『源氏物語』完成のかげの功労者であったと言える9)。

同じく感性の鋭さや身の苦しみなどを巧みに利用して、和泉式部を彰子に仕えさせたのも道長である。和泉式部は、家集の正・続集約一五〇〇首もさることながら、『拾遺集』以下の勅撰集に収められた歌が二四六首であり、死後初の勅撰集である『後拾遺集』の最多入集歌人という名誉をも得ている。赤染衛門は、文章博士大江匡衡の妻で、倫子に仕え、彰子入内とともに従った女房である。『栄花物語』作者に目され、和歌でも家集があり、勅撰集に収められた歌も九三首にいたる。和泉式部が情熱的な歌風だったのに対して、赤染衛門は和やかで典雅な歌風と評される。伊勢大輔も、彰子に仕えた女流歌人で、三十六仙の一人である。奈良の僧から献じた八重桜を、「今年を取り入れ人は今参りぞ」と紫式部に促されて詠んだ一首「いにしへの奈良の都の八重桜けふ九重に匂ひぬるかな」(『詞花集』春29)は「定家卿詞花集秀逸十首の内也」の評があり、『拾遺集』以下の勅撰集にも五一首の歌が収められている10)。以後上東門院彰子の側近として、長元五年(一〇三六)上東門院の菊合わせには左の頭を務めている(『後拾遺集』)。

以上、中宮彰子の文芸サロンの隆盛について述べてきたが、道長は、文芸好きの一

9) 山中裕(1996)「紫式部と藤原道長—源氏物語の背景」(『古代学研究所紀要』6)には、『源氏物語』の執筆をめぐる道長と紫式部の関係が詳細に述べられている。pp.9-14

10) 『袋草紙』にも「万人感歎、宮中鼓動云々、又彼人第一歌也」と讃えられている。

条帝<sup>11)</sup>をいただきながら、時の権力者らしく、人(特に女房たち)を巧みに用い、その長所をよく伸ばし、古今御曾有の平安文学を作り出したと言える。

### 3. 紫式部拔擢と『紫式部日記』執筆要請

道長の最も優れた文芸業績と言え、紫式部を拔擢して、『源氏物語』の創作と普及、『紫式部日記』の執筆に関わり、後援したことになる。

紫式部は、越後守藤原為時の娘で母は摂津守藤原為信女であるが、幼少期に母を亡くしたとされる。同母の兄弟に藤原惟規がいるほか、姉の存在も知られる。式部は、道長と同じ藤原氏の北家生まれで、曾祖父の代に溯れば名家の家柄である。父方の曾祖父である藤原定方と藤原兼輔はそれぞれ右大臣と中納言、母方の曾祖父藤原文範も中納言の職にまで達した人物である。しかし、祖父の代以後は受領に下ってしまい家柄が保てなかった。父為時は三十代に東宮の読書役を始めとして東宮が花山天皇になると蔵人、式部大丞と出世したが、花山天皇が出家すると失職し、十年後一条天皇に詩を奉じてやっと越前国の受領となった後、越後守にも任じられている<sup>12)</sup>。

文学の血という目で見ると、曾祖父藤原兼輔は『古今集』の撰者紀貫之などとも親交があり(『貫之集』)、自らも私家集『中納言兼輔集』を遺すほどの歌人だった人物である。中でも和歌「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな(『後撰集』巻十五 雑 1102)」は有名で、『源氏物語』にも何度も引用されている。その息子で式部には祖父に当たる雅正も、さらに息子で式部の伯父にあたる為頼も歌人である。また父の為時は、歌人でありながら漢詩や漢文に通じ、漢学で身を立てようとした人であった。母方の曾祖父の文範もまた漢学を修めている。式部の中に和漢の教養が二つながら流れ込んでいるのには、代々を重ねた血族たちの歴史があったからである。『紫式部日記』には、一条天皇が『源氏物語』を読んで「この人は日本紀をこそ読みたるべけれ。まことに才があるべし」と歴史と漢文への深い教養に感心し、宮中に「日本紀の御局」というあだ名ができた逸話が記されているが、その後自分の漢文の素養について次のように語っている。

この式部の丞といふ人の、童にて書読みはべりし時、聞きならひつつ、かの人はおそう読みとり、忘るるところをも、あやしきまでぞさとくはべりしかば、書に心入れたる親は、「口惜し

11) 一条天皇は、文芸に深い関心を示し、『本朝文粹』などに詩文を残しており、音楽にも堪能で、特に笛を能くしたという。また、人柄は温和で好学だったといい、多くの人に慕われた。

12) 紫式部の出身については、古典的なものとして今井源衛(1967)『紫式部』(『国文学』12-1)、与謝野晶子(1969)「紫式部新考」(『日本文学研究資料叢書源氏物語1』有精堂)などがある。pp.9-14、pp.1-16



う、男子にて持たらぬこそ幸ひなかりけれ」とぞ、つねに嘆かれはべりし。

それを、「をのこだに才がりぬる人は、いかにぞや、はなやかならずのみはべるめるよ」とやうやう人のいふも聞きとめて後、一といふ文字をだに書きわたしはべらず、いとてづつに、あさましくはべり。  
(『紫式部日記』)13)

紫式部の父為時は息子(式部の弟である惟規)に幼学ながらしっかりした基礎を教えており、式部は、それをそばで聞き習っていて自然に漢文が身につけてしまった。父の思いとして紫式部のことを「女であることが残念」と書かれており、当時の貴族男性の学問そのものを学んだものの、女性だからその学問の素養は意識して隠してきたというのである。

紫式部は、一条朝の著名な漢学者である人(為時)の娘として生まれたが、物心つかぬうちに生母に死に別れ惟規とともに母なき家庭に育ち、家庭のぬくもりには、恵まれなかった。それゆえ、漢学者の父に直接育てられたことは、平安朝の平均的受領階級の子女とは違った幼少時体験を持ったと推せられる。父親の書物を読んで育ち、十一世紀にその才能が開いた。父は男と対等な人格に育て、彼女自身も父の意に添い、精神的に独立の自覚のある女性に育ったと思われる。さらに、歌人でもあった紫式部は、中古三十六歌仙の一人でもあり、『小倉百人一首』にも「めぐりあひて見しやそれともわかぬまに雲がくれにし夜半の月かな」歌で入選している。

紫式部は、父為時のもとで弟惟規とともに養育されていたことが分かるが、為時一家の所在した場所は、『河海抄』の「料簡」に、「旧跡は正親町以南、京極西類、今東北院向也」と記されていて、現在の廬山寺のあたりである式部の曾祖父兼輔の邸の堤邸だったと推定される。堤邸は、『拾芥抄』に、「土御門南、京極西、南北二町、其南一町被入之道長公家、或大入道長上東門院是也」とある京極殿と、東京極大路をはさんで東北方の筋向にある。京極殿(土御門第)は、もともと道長の北の方倫子が父源雅信より伝領した鷹司殿で、のちに道長が大江匡衡の所有していた南一町を購入して拡張したものである。従って、紫式部が堤邸に住んでいたとすれば、倫子は紫式部を幼いころから知っていた可能性がきわめて高いことになる。また、倫子と式部とは定方の曾孫で、二人は再従姉妹の間柄になるから、面識以上の親しい交際があったであろう。

道長は、その多彩な才能の紫式部を長女彰子の家庭教師にと望んだ。しかし、真面目で内省的な紫式部には宮廷の雰囲気合わなく、早々と実家(弟邸)に帰ってしまう。道長は再三の迎えを送り、やっと紫式部を彰子の女房に出仕させることに成功している。

紫式部が彰子サロンに出仕し、『源氏物語』がある程度完成し手直しの段階に入ったころ、中宮彰子が懐妊するという一大事件が起こる。道長は中宮御産をめぐる出来事を書き記すようにと式部にひそかに要請したものと見られる<sup>14)</sup>。

13) 『紫式部日記』の本文引用は、新編日本古典文学全集本(中野幸一 小学館 1994)による。以下同様。  
p.209

『紫式部日記』には、『枕草子』のような跋文が付されておらず、執筆の経緯や契機についてはよく分からないが、少なくとも道長の要請は公的なものではなかったであろう。しかし、紫式部自身が私的な創作意欲に駆けられて書いたものでもないと思われる。彰子後宮には、すでに成立していた『枕草子』に対抗するような後宮の記録が求められていたし、その適任者が紫式部のほかにいないという雰囲気は何となく出来ていた。それをいつどのように書くかのことだけが残っていた状況で、寛弘五年(一〇〇八)の秋にいよいよ執筆に値する出来事が起きたのである。道長一族が待ちに待った皇子の誕生である。中宮彰子の妊娠と出産は、政権獲得のための準備を着々としてきた道長にとって、栄華を決定的なものにできる一大事であった。この慶事を迎えて、『枕草子』のような「さばかりさかしだち、真名書きちらしてはべる」<sup>15)</sup>かたちではなく、中宮彰子後宮の文学を成立させる状況が整ったのである。

『紫式部日記』は、執筆の段階から記録性を強く保持することで出発しているが、しかし、道長が紫式部に期待したのは、女房日記の行事描写をそのまま受け継ぎ、また漢文日記を和文に直訳したような事実の羅列に終わるような記録ではなかったであろう。清水好子氏が「中宮御産、皇子誕生といった大事件は朝廷や道長の日記にまず公式には書き込まれるので、紫式部の仮名日記は記録として第一に必要なものではなかった」<sup>16)</sup>と述べるように、美しい和文でもって個性的に生き生きと読者にせまるかたちで道長家の繁栄ぶりを歌い上げるべきだったのである。道長は、紫式部の日記執筆において、基本的には記録文の型を堅持しながらも、前例のない新しい作品を開拓するようにと暗暗裏に望んだのであり、結果的には紫式部が道長の要請に旨く応じて個性的で独自の日記の世界を創り出したと見られる。

#### 4. 文芸サロンのリーダー

『紫式部日記』によれば、道長は内省的な彰子の代わりに実質的な文芸サロンのリーダーとなり、さまざまな文芸活動を支援していた。

14) 道長が『紫式部日記』の執筆を要請したかどうかの問題は、従来論点になってきたが、渡辺久寿(1978)「紫式部日記考(一)—道長執筆要請説の妥当性について」(『日本文芸論集』5)は、強い記録性から道長の要請説は穏当であるとし、「式部が、記事の内容その他に関して必要以上の制約を受けずそれどころか却って、堅苦しくなく書いてくれと道長の要望を受けたかの感さえ与える」とする。pp.30-49

15) 『紫式部日記』消息文的な部分における清少納言批判については、従来も多く注目されてきたところで、例えば、山本淳子(2001)「『紫式部日記』清少納言批評の背景」(『古代文化』53-9)にも述べられている。pp.24-33

16) 清水好子(1966)『源氏物語論』(塙書房) p.167

例えば、彰子が一条天皇の中宮として敦成親王(のちの後一条天皇)を道長の土御門第で産み、その五十日の儀も無事了った寛弘五年(一〇〇八)十一月十七日、里内裏一条院に帰還することを語る場面がある。道長の日記『御堂関白記』によれば、中宮は輿、若宮は金造の車に乗り、別当以下を従えて一条院に到着し盛大な宴があった。供奉の一同が退出した後、天皇の仰せによって若宮が祖父道長に抱かれて御前に参上し、父子の初対面があった。その一条院還御の直後、道長は心をこめた贈り物を彰子に与えている。

よべの御おくりもの、けさぞこまかに御覧ずる。御櫛の篋のうちの具ども、いひつくし見やらむかたもなし。手篋一よろひ、かたつかたには、白き色紙つくりたる御冊子ども、古今、後撰集、拾遺抄、その部どもは五帖につくりつつ、侍従の中納言、延幹と、おのおの冊子ひとつに四巻をあてつつ、書かせたまへり。表紙は羅、紐おなじ唐の組、かけごの上に入れたり。下には能宣、元輔やうの、いにしへいまの歌よみどもの家々の集書きたり。延幹と近澄の君と書きたるは、さるものにて、これはただ、け近うもてつかはせたまふべき、見知らぬものどもにしなさせたまへる、いまめかしうさまことなり。(『紫式部日記』)17

すなわち、御櫛の篋のほかにも手篋一双を贈っているが、その手篋の上段には、当代の能書行成と延幹が分担執筆した新写の三勅撰集の、四巻ずつを一帖に製本した豪華な書籍を、また下段には能宣や元輔の歌集を当時能書家で著名であった延幹と近澄に書かせたものを収めている<sup>18)</sup>。道長は、これから一条天皇と一緒に暮す彰子が和歌の教養に励むようにと気を配ったのである。

道長が彰子サロンの文芸活動を後援したのは、仮名の和歌集だけではなかった。漢籍を贈る場合もあった。

宮の、御前にて、文集のところどころ読ませたまひなどして、さるさまのこと知ろしめさまほしげにおぼいたりしかば、いとしのびて、人のさぶらはぬものひまひまに、をとしの夏ごろより、楽府といふ書二巻をぞ、しどけながら教へたてきこえさせてはべる、隠しはべり。宮ものびさせたまひしかど、殿もうちもけしきを知らせたまひて、御書どもをめでたう書かせたまひてぞ、殿はたてまつらせたまふ。(『紫式部日記』)19

17) 前掲書 p.174

18) 目崎徳衛(1994)「道長をめぐる能書」(『水荃』16)には、道長がすこぶる書跡愛好家で、名筆をよく集めよく散じており、そのことが書跡の芸術的価値を高め、ひいては能書の社会的地位も定めたと述べられている。pp.11-15

19) 前掲書 pp.209-210

道長が式部の中宮への楽府進講のことを知り、漢籍を美しく書かせて中宮に贈っている。当時漢学は女性の教養の中に含まれていなかったが、天皇や男性貴族との交流のために必要だった。これは、道長が中宮の父というにとどまらず、中宮の後宮文化の後援者、推進者としての側面を持つと言えよう。

道長が彰子後宮の文芸後援において、最も気を使ったのは紫式部の『源氏物語』執筆や完成であろう。『紫式部日記』はその様子を詳しく記しているが、まず次の場面を見てみよう。

局に、物語の本どもとりにやりて隠しおきたるを、やをらおはしまして、あさらせたまひて、みな内侍の督の殿に、奉りたまひてけり。よろしう書きかへたりしは、みなひきうしなひて、心もとなき名をぞとりはべりけむかし。  
(『紫式部日記』<sup>20)</sup>)

道長は紫式部が中宮の御前に伺候している間、局に潜入し、隠し置いていた「物語の本ども」を次女の内侍の督の殿である妍子に与えたとある。ここで「物語の本ども」というのは、草稿本に手を入れて清書した『源氏物語』であり、道長が作者の執筆を援助しなくてはこういうことまではさすがに主人であるとしてもできなかったであろう<sup>21)</sup>。

また、物語の御冊子作りにおいても、中宮彰子の指示のもとで行われてはいるものの、実質的な援助は道長が行っていた。

入らせたまふべきことも近うなりぬれど、人々はうちつぎつつ心のどかならぬに、御前には、御冊子づくりいとなませたまふとて、明けたてば、まづむかひさぶらひて、いろいろの紙選りとのへて、物語の本どもそへつつ、どころどころにふみ書きくばる。かつは綴ちあつめしたたむるを役にて、明かし暮らす。「なぞの子もちか、つめたきに、かかるわざはせさせたまふ」と、聞こえたまふものから、よき薄様ども、筆、墨など、持てまゐりたまひつつ、御硯をさへ持てまゐりたまへれば、とらせたまへるを、惜しみののしりて、「もののくにて、むかひさぶらひて、かかるわざし出づ」とさいなむ。されど、よきつぎ、墨、筆などたまはせたり。  
(『紫式部日記』<sup>22)</sup>)

彰子は内裏への還御にあたって、行事がいろいろ引き続き多忙であるにもかかわらず、物語の冊子を作るのに夢中で、紫式部も書写を依頼する手紙を書いたりして奔走してい

20) 前掲書 p.168

21) 福家俊幸(2006)「『紫式部日記』道長描写の方法」(『早稲田大学教育学部学術研究(国語・国文学)』54)には、道長の行動は「『源氏物語』が格好の贈り物たりえるだけの評判を得ていたことの何よりの証左であり、また「道長が作者の執筆を後見していたこと」を暗示しているとする。p.5

22) 前掲書 pp.167-168

る。道長は、彰子の産後の冷えを案じつつも、筆や墨、硯などを献じており、冊子作りの作業を全面的に支援する。紫式部は、そういう道長の行動を主家の繁栄を彩る文化の一つとして小まめに書き記している<sup>23)</sup>。

道長と『源氏物語』との深い関わりを窺わせるもう一つの場面がある。

源氏の物語、御前にあるを、殿のご覧じて、例のすずろごとども出できたるついでに、梅のしたに敷かれたる紙にかかせたまへる。

すきものと名にし立てれば見る人の折らで過ぐるはあらじと思ふ  
たまはせたまへば、

人にまだ折られぬものをたれかこのすきものぞとは口ならしけむ  
めざましう」聞こゆ。

(『紫式部日記』)<sup>24)</sup>

この記事は、その位置から、寛弘六年(一〇〇九)のことと考えられ、彰子の御前にある『源氏物語』も御冊子作りで作られた写本になろう。ここにはその『源氏物語』をめぐる道長との歌の贈答が記されており、道長の『源氏物語』への関心を如実に示している。

『源氏物語』は当時相当評判になっていたらしく、道長その人までも無関心ではいられず、積極的に和歌でもって言及していると見られるが、これもまた彰子後宮の文芸の上昇ぶりを語るものとして見てよからう。

中宮彰子に比べて父道長は、より積極的に文芸後援に乗り出し、文化指導者としての面貌を見せていると言えるが<sup>25)</sup>、次の場面を見てみよう。

おそろしかるべき夜の御酔ひなめりと見て、ことはつままに、宰相の君にいひあはせて、隠れなむとするに、東面に、殿の君達、宰相の中將など入りて、さわがしければ、二人御帳のうしろに居かくれたるを、とりはらはせたまひて、二人ながらとらへ据ゑさせたまへり。

「和歌ひとつづつ仕うまつれ。さらば許さむ」とのたまはす。いとほしくおそろしければ聞こゆ。

いかにいかがかぞへやるべき八千歳のあまり久しき君が御代をば

「あはれ、仕うまつれるかな」と、ふたたびばかり誦せさせたまひて、いと疾うのたまはせたる、

あしたづのよはひしあらば君が代の千歳の数もかぞへとりてむ

23) このように、道長が『源氏物語』の完成の援助に乗り出したのは、当時『源氏物語』が宮中で人気を博していたため、紫式部は当時の第一の権力者の後援を書き記しているのは、それによって『源氏物語』の権威を高めようとしたものと見られる。福家俊幸(2006)の前掲論文に論じられている。pp.1-12

24) 前掲書 p.214

25) 例えば、池田尚隆(1989)の「藤原道長—文学愛好者・文壇後援者」(『国文学』34-10)によれば、道長は書籍収集や作文に関する活動をし、和歌についても造詣が深かったことが確認できる。pp.68-72

さばかり酔ひたまへる御心地にも、おぼしけることのさまなれば、いとあはれに、ことわりなり。げにかくもてはやしきこえたまふにこそは、よろづのかざりもまさらせたまふめれ。千代もあくまき御行末の、数ならぬ心地にだに、思ひつづけらる。(『紫式部日記』)<sup>26)</sup>

寛弘五年(一〇〇八)十一月一日の敦成親王の五十日の祝いの時の出来事であるが、この日の宴は子の刻に終わり(『小右記』)、紫式部は宰相の君と相談して身を隠していた。宴席の乱れに辟易したからである。しかし、二人は道長にすぐ見つかってしまい、賀歌を詠むようにと要求される。紫式部は、ひどく酔っている道長を「いとあはれに、ことわりなり」としており、主人の酒気を帯びた様子といつもながらにこういう時に歌を詠まされることへの不満があったようであるが、その後、道長の「あしたづの」歌を「いとあはれに、ことわりなり」と記し、「まったく道長ほどの権力ある方が外祖父として、このように若宮を大切にとりもたれ、後ろ盾をなさるからこそ万事万端の儀式の装飾も箔がついて立派に見えるのだろう」<sup>27)</sup>と、讚美一方の言葉で結ぶ。ここでは、道長がめでたい行事において女房達に賀歌を詠ませた後、自らもそれに唱和し、めでたい場を盛り上げようとしたことが確認される。

また、寛弘七年(一〇一〇)正月二日の臨時客の夜には、酔った道長を煩わしく思って隠れた式部を見つけて、道長が退出した父為時のことで式部を責め、初子の日の歌を強要する場面が出てくる。この時、紫式部は「うち出でむに、いとかたはならむ」として歌は記さない。道長に要請されてこのような時に歌を詠むことが紫式部に期待される役割だったことに変わりはない。

前述したように、中宮彰子は積極性に欠け、才女紫式部に活躍の場を与えるだけの才には欠けていたらしい。清少納言をうまく泳がせて機知の才を発揮させ、自身の後宮文化の顕彰の役割を果たさせた定子とは異なったのである。その消極的な彰子にかわってその役割を果たしたのが父の道長だったと思われる。そもそも、紫式部自身も、清少納言のように軽妙な応答で宮中の評判となることはできない。暗く非社交的な性格の持ち主で、同僚女房の眼をはばかりところもある。その内気で社交に不器用であった紫式部の才を発揮させたのは、他ならぬ道長だったのである。紫式部はその日記においてそのような道長とのやり取りの様子を記すことによって彰子後宮の栄華を描こうとしたものと見られる。

## 5. 演出するパトロン

『紫式部日記』には、秋色に染まり行く土御門第の美景と中宮彰子の立派な様子を讚

26) 前掲書 pp.165-166

27) 前掲書の頭注 p.166

える冒頭部の後に、風流な道長の姿が次のように描き出される。

渡殿の戸口の局に見いだせば、ほのうちきりたるあしたの露もまだ落ちぬに、殿ありかせたまひて、御隨身召して、遣水はらはせたまふ。橋の南なるをみなへしのいみじうさかりなるを一枝折らせたまひて、几帳の上よりさしのぞかせたまへる御さまの、いと恥づかしげなるに、わが朝がほの思ひしらるれば、「これ、おそくてはわろからむ」とのたまはするにことつけて、硯のもとによりぬ。

をみなへしさかりの色を見るからに露のわきける身こそ知らるれ  
「あな疾」とほほゑみて、硯召いづ。

白露はわきてもおかしをみなへしころからにや色の染むらむ (『紫式部日記』)28)

朝霧の中に散歩していたこの家の主道長は、女郎花を折り取ってそのまま渡殿にある紫式部の局を訪れ、歌を求める。紫式部は、朝顔を恥じながらも、「をみなへし」の歌を詠み、女郎花の盛りの色に事寄せて主人の栄華を讃美する。道長はそれに満足し、「白露は」の歌をもって唱和し、風流な贈答を完成させる<sup>29)</sup>。

この場合、道長の女郎花を折って紫式部に差し出した行為は、伝統的な和歌の詠法からすれば、紫式部を恋い慕う女性とし、自分をその恋の成就を求める男に擬すものである。和歌の世界では、女郎花は女性を喩えるもので、それを手折る行為は、花を折る意味のほか、相手の女性を自分のものにする意味をも持している。つまり、道長の行為は、和歌の歌語のイメージを利用して、まるで恋愛中の男女の間にありそうな場面を演出し、それに対する式部の反応や対処を見ようとしたのである。紫式部は、そのような道長の意図に気づき、道長の恋歌的な意味性を保持しながらも機知を発揮し、美しくもないわが身を露に差別された身と謙退し、恋の相手を恨んで見せる和歌を詠む。この紫式部の歌は、相手の文脈に反発しながら自分の無実さを訴える典型的な女歌のかたちになっている。

従来、この贈答の場面を道長と紫式部の交情を語るものとして見る立場もあったが<sup>30)</sup>、二人の仲がどういう関係であったかよりは、なぜこの場面が『紫式部日記』の中に織り込まれたかがより重要なポイントになろう。すなわち、当該の場面は、道長と紫式部が恋仲を装い擬似的な恋の贈答を交わしたことを語ろうとするものであり、それは道長の望むところでもあるのである。

28) 前掲書 p.125

29) この「をみなへし」をめぐる贈答については、拙稿(2011)「『紫式部日記』の解釈と受容問題—女郎花をめぐる和歌贈答場面を中心に」(『日本学研究』33)において論じたので、ここでは道長の演出という視点にしばって述べている。pp.117-136

30) 萩谷朴(1970)「紫式部と道長との交情—『前紫式部日記』の存在を仮説して」(『中古文学』6) pp.27-37

また、『源氏物語』をめぐる道長との贈答に続く、次の場面を見てみよう。

渡殿に寝たる夜、戸をたたく人ありと聞けど、おそろしさに、音もせで明かしたるつとめて、

夜もすがら水鶏よりけになくなくぞまきの戸ぐちにたたきわびつるかへし、

ただならじとばかりたたく水鶏ゆゑあけてはいかにくやしからまし

(『紫式部日記<sup>31)</sup>)

この段は年次が不分明であるが、紫式部が土御門第の渡殿にいた頃なので、敦良親王出産のために、彰子が土御門第に里下りした寛弘六年(一〇〇九)六月十九日以降のものとするべきであろう。この場面についても、古来、道長と紫式部の交情を表わすものなのか否かが主な論点となってきた。『尊卑文脈』に紫式部を「道長妾」とするのと結び合わせて、二人の交情を認めようとする立場と、『尊卑文脈』の記述にもかかわらず、これらの贈答を社交や戯れと見て、二人の交情を否定しようとする立場とが対立してきたのである。「道長妾」とする『尊卑文脈』の記事については、今井源衛氏の「仮に一説として記しておくが、その内容の真否は保証しないといった程度のも」<sup>32)</sup>という意見もあるように、今日は、中世の学者が俗説として考えられたと見るのが通説となっているが、ここで問題としたいのは、むしろその曖昧な性格である。

当該の場面では、渡殿にある紫式部の局の戸を叩く人があると聞いたけれど、恐ろしさに答えもしないで夜を明かした翌朝に歌を贈ってきた男と交した贈答を記している。ここで男というのは、『新勅撰集』に歌の作者を「法成寺入道前摂政太政大臣」としているように、道長であろう。紫式部が渡殿にいたとあるから、舞台は道長の私邸の土御門第であろうが、土御門第の主道長が娘のために雇い入れた自慢の女房に本気で言い寄ったりすることはまずないのではなからうか。また、言い寄って門が閉ざされたといってそのまま退散するというのも可笑しいのである。紫式部が道長であることに気付いていないのは、道長の行為としてはあまりにも不自然だからである。道長の局の戸を叩くという行為と「水鶏」の歌は、この記事の前の「すきもの」の贈答を踏まえたもので、「人にまだ折られぬものを」と詠んだ式部を本当にそうかと試す体で戯れをしかけたものと見てよからう。つまり、道長は恋に落ちた色男を演じてみたのである。そうとは知らない紫式部は、恐ろしさに戸を固く閉ざして一夜を過ごし、翌朝贈られてきた歌で前夜の事件の真相を知らされることになる。紫式部は道長の遊戯的な挑みに対して愉快的気持はなかったかも知れないが、機知に富んだ返歌をすることが式部に課せられた役割であることをよく知っていた。また、そうしたやり取りを書き記

31) 前掲書 pp.214-215

32) 今井源衛(1985)『人物叢書 紫式部』(吉川弘文館) p.188



すことによって彰子後宮の雅びな様子を讃美することが式部の職掌でもあったのである。実に周到に用意された道長家栄華の記録であると言えるが、ここでもう一度想起すべきことは、紫式部の主人でありパトロンであった道長の存在である。

## 6. おわりに

このように見てくると、まさしく一代の権力者にして文化指導者たりえた道長の全貌が明らかになってくるが、道長が紫式部に『源氏物語』のほかにも日記を書かせたのには、ある意図があったのではないかと思われる。道長は、自ら日記文学の主人公となりたかったのではないだろうか。その主人公というのは、行事を主宰したり女房たちに和歌を要求したりする平凡なパトロン—今までの研究で指摘されたこと—としての人物ではなく、紫式部を恋慕の女性としその女性を恋い慕う男性としての人物である。すなわち、道長は周辺の貴顕たちが、物語的歌集や歌物語の主人公となることを一つのステイタスと考えるふしがあり、例えば道長の父兼家には第二夫人の道綱母が書いた『蜻蛉日記』があり、ほかにも伊尹には『一条摂政御集』が、兼通には『本院侍従集』が、高光には『多武峰少将物語』がそれぞれ主人公として恋愛談を作り上げている。道長は自らも日記の中で女性に恋を求める風流男になりたかったものと見られるが、『紫式部日記』によって単なる後援者ではなく宮廷女性達にもてはやされる日記文学の主人公になりえたと言える。

政治家として一級の実力者たらんとする者は、文芸の世界にも関わり名をとどめようとする。平安時代の道長は、四十代にして、『源氏物語』という大長編物語製作のパトロンとなるとともに、日記文学『紫式部日記』と漢文日記『御堂関白記』の主人公的な存在として首尾よく文学史にその名を残し得たのである。

## 【参考文献】

- ・ 中野幸一(1994)『紫式部日記』(新編日本古典文学全集 小学館) p.125、pp.165-166、pp.167-168、p.174、p.209、p.210、pp.214-215
- ・ 高階秀爾(1997)『芸術のバロンたち』(岩波新書) pp.1-232
- ・ 清水好子(1967)「藤原道長」(『中古文学』1) pp.13-22
- ・ 山中裕(1995)「撰関政治史—藤原道長を中心として」(『調布日本文化』5) pp.19-38
- ・ 酒井みさを(1977)「藤原道長と文学」(『平安朝文学の諸問題』笠間書院) pp.245-260
- ・ 片山剛(2001)「藤原道長の和歌活動(上)—その前半生を中心に」(『史聚』34) pp.33-52
- ・ \_\_\_\_\_(2001)「藤原道長の和歌活動—三条朝まで」(『金襴短期大学研究誌』32) pp.13-21
- ・ \_\_\_\_\_(2002)「藤原道長の和歌活動(下)—晩年の活動その他」(『金蘭国文』6) pp.29-47
- ・ 岡部明日香(2001)「藤原道長の漢籍輸入と寛弘期日本文学への影響」(『奈良・平安期の日中文化交流』(農山漁村文化協会) pp.302-316
- ・ 山中裕(1996)「紫式部と藤原道長—源氏物語の背景」(『古代学研究所紀要』6) pp.1-14
- ・ 今井源衛(1967)『紫式部』(『国文学』12-1) pp.9-14
- ・ 与謝野晶子(1969)「紫式部新考」(『日本文学研究資料叢書源氏物語1』有精堂) pp.1-16
- ・ 渡辺久寿(1978)「紫式部日記考(一)—道長執筆要請説の妥当性について」(『日本文芸論集』5) pp.30-49
- ・ 清水好子(1966)『源氏物語論』(塙書房) p.167
- ・ 福家俊幸(2006)「『紫式部日記』道長描写の方法」(『早稲田大学教育学部学術研究(国語・国文学)』54) p.5
- ・ 池田尚隆(1989)の「藤原道長—文学愛好者・文壇後援者」(『国文学』34-10) pp.68-72
- ・ 拙稿(2011)「『紫式部日記』の解釈と受容問題—女郎花をめぐる和歌贈答場面を中心に」(『日本学研究』33) pp.117-136
- ・ 妹尾好信(2008)「『紫式部日記』と寛弘記の道長(『むらさき』45) pp. 38-41
- ・ 目崎徳衛(1994)「道長をめぐる能書」(『水荃』16) pp.11-15
- ・ 岡田潔(1999)「道隆の結婚と道長の結婚—『栄花物語』を主軸として」(『緑聖文芸』30) pp.5-11
- ・ 大野順一(2002)「一条天皇と道長—源氏物語の好色性(上)」(『文芸研究(明治大学)』87) pp.21-52
- ・ 友田健次(1994)「『紫式部日記』と『御堂関白記』—歴史の記録としての両者の差異と補完について」(『四条畷学園女子短期大学研究論集』28) pp.1-17

## 要 旨

芸術創造の長い歴史の上で芸術の保護者であるパトロンたちが果たした役割はかなり大きく、富と権力を誇るルネッサンスの王侯貴族や教会、新興の近代市民階級、コレクターや画商、そして現代の政府・企業などは、芸術のあり方に多大な影響を与えてきた。

日本にもパトロンによって文学が隆盛した時代がある。平安時代の摂関政治では、貴族たちが競って娘を天皇に嫁がせ、生まれた皇子を天皇に即位させて外戚関係を築き、権力を握もうとした。周辺に集められた女房たちは、知性を磨き合い、高め合って女房文学が花開いたのである。摂関体制がそのパトロンの役割を果たしたと言えるが、中でも一条天皇の中宮彰子サロンには、錚々たる才女が集められており、紫式部を始め、和泉式部、赤染衛門、伊勢大輔など、後世に名を残した人ばかりである。その彰子サロンの中心にはパトロン藤原道長がいて当時の女房文学を主導していた。もちろん道長は自分の権力維持や家の栄華を目的にしていたものの、平安女房文学があれほど栄えたのはやはり道長に負うところが大きいと言える。しかも、道長は単なる文芸の後援者にとどまらず、より積極的なかたちで文学創作に関ろうとした。

道長は、行事を主宰したり女房たちに和歌を要求したりする、平凡なパトロンとしての人物ではなく、紫式部を恋慕の女性としその女性を恋慕う男性として演出したのである。当時は貴顕たちが物語的歌集や歌物語の主人公となることを一つのステイタスと考えているふしがあり、道長も自ら女性に恋を求める風流男になろうとしたと見られる。政治家の中には文芸の世界にも関わり名をとどめようとする人がいるが、平安時代の道長は、『源氏物語』という大長編物語製作のパトロンとなるとともに、日記文学『紫式部日記』と漢文日記『御堂閔白記』における主人公的な存在として文学史にその名を残し得ている。

キーワード：『紫式部日記』、パトロン、道長、文芸サロン、平安文学、女房文学、後援者、和歌

투 고 : 2011. 8. 31  
1차 심사 : 2011. 9. 10  
2차 심사 : 2011. 10. 1



# 『풀 베개(草枕)』론

— 中庸의 美를 중심으로 —

姜 賢 模\*

(e-mail : asahii@hanmail.net)

---

## 目 次

---

- |                      |                       |
|----------------------|-----------------------|
| 1. 서론                | 4. 漱石의 中庸과 逆說의 세계     |
| 2. 『풀 베개』에 表출된 兩非論   | 5. 모과나무 꽃에 형상화된 中庸의 美 |
| 3. 共存하는 두 세계와 那美의 憐れ | 6. 결론                 |
- 

## 1. 서론

이 작품은 일반적인 소설과는 달리 ‘플롯도 없거니와 사건의 전개도 없다’고 나쓰메 소세키(夏目漱石 : 이하 소세키)는 「나의 『풀 베개』(余が『草枕』)」에서 정의하고 있다. 또한 소세키는 ‘다만 하나의 감정—아름다운 감정이 독자의 뇌리에 남기만 하면 그것으로 좋다<sup>1)</sup>’고 말한다. 따라서 『풀 베개』는 아름다움을 그리고 있는 미학의 소설이라 할 수 있다.

『풀 베개』는 화공(画工)인 ‘나(余)’가 세속적인 일상에서 벗어나 ‘잠시 동안이라도 비인정의 천지를 소요하고 싶은 소망’(11)<sup>2)</sup>을 품고 여행에 나서는 것으로 시작되고 있으며, 비인정의 세계를 소요하는 여행은 결국 화공이 가슴에 품고 있던 ‘홍중의 그림’을 성취하는 것으로 끝을 맺고 있다. 화공이 홍중의 그림을 성취하는 순간은 여주인공 나미(那美)의 얼굴에 지금까지 본 적이 없는 ‘아

---

\* 충남대학교 박사과정 일본근대문학

1) 夏目漱石(1980) 『漱石全集第34卷』 岩波書店 p.109. 본 논문에 인용된 일본어의 한국어 번역은 모두 필자에 의한다.

2) 본 논문은 夏目漱石(1979) 『漱石全集第4卷』 岩波書店을 텍스트로 삼았다. 괄호( )안의 숫자는 해당 쪽수를 나타낸다. 이하 같다.

와레(憐れ)가 얼굴 가득히 떠오른 바로 그 순간이었다.

『풀 베개』의 서두에서 소세키는 화공의 입을 통하여 ‘아무튼 인간세상은 살기 어렵다’라는 말로 시작하고 있다. 이것은 어찌 보면 염세주의적인 인생관을 말하고 있는 듯하지만, 곧 이어서 ‘살기 어려운 곳을 어느 정도는 편하게 만들어서 짧은 생을 잠깐만이라도 살기 좋게 만들지 않으면 안 된다’(5)라고 서술하고 있는 것으로 보아 소세키는 수동적인 운명론자가 아니라 그것을 딛고 일어나 삶을 개척해 나가려는 능동적 인생관의 소유자임을 알 수 있다.

그런 의미에서 이 작품은 살기 좋고 아름다운 세상을 만들기 위한 낙관적이고 능동적인 소세키의 염원이 담겨 있는 작품이라 할 수 있을 것이다. 그렇다면 소세키가 추구하고 있는 인간의 마음을 풍성하게 하는 아름다움이란 무엇인가.

소세키는 『풀 베개』에서 두 개의 대립적인 세계를 그리고 있다. 人情과 非人情의 세계가 그것으로, 이 두 세계의 관계는 동양과 서양, 밤과 낮, 靜과 動, 산과 물 등과 같이 서로 상대화 되어 있다. 이 작품은 일견 비인정의 소설인 것 같지만 인정소설이다. 또한 서양의 예술을 비평하고 있지만 동양예술 역시 비평을 가하고 있다. 이처럼 이항대립적인 두 세계가 동시에 부정되는 모순이 『풀 베개』에서 그려지고 있는 것이다.

이러한 모순에 대하여 시미즈 다카요시(清水孝純)는 「『풀베개』의 문제」라는 논문에서 ‘『풀베개』는 원래 서로 대항하여 화해하기 어려운 다양한 면을 일종의 독특한 조화 속에 담아 넣은 작품으로서, 근본적인 모순을 안고 있는 작품’이라며 ‘이만큼 이율배반을 작품형성의 중핵으로 감추고 있는 것은 없다’<sup>3)</sup>고 말한다.

그리고 그는 ‘『풀 베개』의 세계에서 그러한 모순을 지적한다면 한이 없을 것이다. 전적으로 주인공인 화공 자체에 모순이 내재하고 있기 때문’인 것으로, ‘소세키는 자신의 속에 쌓여있는 각가지의 경향을 각각 평등한 형태로 화공에게 투영시킨 것이다’<sup>4)</sup>라고 주장하고 있다.

야마모토 가쓰마사(山本勝正) 역시 ‘『풀 베개』는 작가 소세키가 의식적으로는 현실에서 도피적으로 비인정을 지향하면서 내실은 작가의 인정과 현실세계로 관여해 가려하는 적극적 자세가 점차로 명확하게 되어가는, 어떤 의미에서는 아이로니컬한 작품이라고 할 것이다’<sup>5)</sup>라고 『풀 베개』에 있어서의 모순을 논하고 있다.

『풀 베개』의 선행연구는 지금까지도 ‘비인정’에 대하여 비교적 일관되게 논해지고 있는 경향을 보이고 있다. 그러나 필자는 이항대립적인 두 세계가 동시에

3) 片岡 豊, 小林陽一 編(1990) 『漱石作品論集成 第2卷』 桜楓社, p.212

4) 전계주 3) 『漱石作品論集成 第2卷』 p.214

5) 山本勝正(1989) 「『풀 베개』론」 『夏目漱石文芸の研究』 桜楓社, p.51

부정되는 이러한 모순들에 대하여 逆說과 兩非論의 관점에서 접근하고자 한다.

따라서 본 논문에서는 작품 속에 표출된 이항대립적인 두 세계의 모습을 분석하여 양비론과 그것이 의미하는 것은 무엇인가를 고찰하고자 한다. 그럼으로써 소세키가 『풀 베개』를 통해서 추구하고 있는 아름다움은 무엇인가, 그리고 나미의 얼굴 가득한 ‘아와레’는 무엇을 의미하는가를 규명할 수 있을 것이다. 궁극적으로는 소세키의 삶의 철학은 무엇인지를 도출해내기 위한 것이 본 논문의 목적이라 하겠다.

## 2. 『풀 베개』에 표출된 兩非論

양비론은 대립하는 양쪽 모두를 비판하는 것으로, 그 비판자는 중간자적인 위치에서 바라보고 있음을 의미한다. 혹자는 기회주의적인 속성이라고 비판하지만, 흑백논리나 이분법적 사고로 대립과 갈등을 해결할 수는 없는 것이기 때문에 대립하는 양쪽 모두를 공평하고 균형 감각을 가진 시각으로 바라 볼 수 있는 중간자적인 입장은 필요한 것이다. 본 논문에서는 이런 관점에서 『풀 베개』에 표출되어 있는 소세키의 양비론적 시각에 주목하고자 한다.

소세키는 『풀 베개』에서 인정의 세계를 비평하면서 비인정의 세계 또한 비평을 가하고 있다. 서양예술에 대하여 부정적 시각을 갖고 있는 것 같지만 동양예술 역시 긍정적인 시각만은 아니다. 먼저 소세키는 동서양의 詩를 양비론적 관점에서 비평하고 있다. 다음은 셸리<sup>6)</sup>의 「종달새에게」라는 시의 일부 구절이다.

앞을 보고 뒤를 보고  
갖고 싶다고 갈망 하는가 그대들이여  
마음속에서의 웃음일지라도  
거기에 괴로움 있음이여  
한없이 아름다운 노래에 끝없는 슬픔 담겨있음이여(9)

화공인 ‘나’는 산길을 걸으며 쉼 새 없이 지저귀는 종달새 소리를 듣는다. ‘화창한 봄날을 하루 종일 울며 지새우고 또 울며 지새우지 않으면 마음이 홀가분하지 않은 것처럼’(7) 종달새는 끊임없이 울어댄다. 그런 종달새의 지저귀는 소리를 화공은 입으로 우는 것이 아니라 혼 전체가 운다고 느낀다.

6) Percy Bysshe Shelley(1792-1822) : 영국의 낭만파 시인이다.

화공은 혼의 활동이 소리로 나타난 것 중에서 그렇게까지 활기에 찬 것은 없다면서 유쾌하고 또 유쾌한 기분이 된다. 기분이 유쾌하니까 유채꽃을 보아도 민들레를 보아도 가슴이 고동친다. 종달새 소리에 유쾌해진 화공은 이렇게 ‘유쾌해지는 것이 시’라며 셸리의 「종달새에게」라는 시를 떠올리고 있는 것이다.

셸리는 종달새의 지저귀에서 인간의 욕망과 괴로움, 그리고 끝없는 슬픔을 연상하고 있다. 웃음 속에서 괴로움을 드러내고 있으며 한없는 아름다움에서 끝없는 슬픔을 느낀다. 그러나 화공은 ‘아무리 시인이 행복하다해도 저 종달새처럼 마음껏, 오로지 자신의 기쁨을 노래할 수는 없을 것’(8)이라며 종달새 소리를 환희의 노래로 듣고 있다.

화공에게는 ‘티끌만한 괴로움’도 없는 종달새의 지저귀는 소리가 셸리에게는 ‘끝없는 괴로움’을 안겨주고 있는 것이다. 셸리는 웃음을 웃음 그대로 받아들이지 못하고 아름다움을 아름다움 그대로 바라보지 않고 있다.

사랑은 아름다울 것이며, 효도도 아름다울 것이고, 충군애국도 훌륭할 것이다. 그러나 자기 자신이 그 처지가 된다면 이해관계에 휘감겨 아름다운 일에도 훌륭한 일에도 눈이 가려지게 된다. 따라서 어디에 시가 있는지 자기 자신도 알 수 없다.(9)

셸리가 있는 그대로 바라볼 수 없었던 것은 이해관계에 마음을 빼앗겼기 때문이며, 제삼자적인 위치에서 바라볼 수 있는 마음의 여유가 없었기 때문이었다. 제삼자적 위치란 ‘초연하게 멀리에서 구경하는 마음으로, 人情의 電氣가 함부로 쌍방에 일어나지 않는’(12) 그런 위치를 말한다.

인정의 전기가 쌍방에 일어나지 않는 ‘석자간격’의 위치는 곧 객관화 된 위치를 말하는 것으로, 그 석자의 간격이 인정과 비인정을 구획하고 있는 것이다. 그것은 또한 노(能)<sup>7)</sup>의 구성이나 노에 나오는 배우들의 연기, 그리고 그림 속에 있는 인물을 보듯이 전혀 인정을 개입시키지 않고 사물을 他者化 시키는 것이다.

동쪽 울밑에서 국화를 꺾어들고, 유연히 남산을 바라본다.(10)

인간세상의 번뇌를 벗어난 심경과 자연에 대한 찬미를 노래한 도연명의 시에서는 세속적인 인정으로부터 해탈한 무심함을 느낄 수 있다.

이 시에서 도연명은 자신까지도 타자화 시키고 있다. 사물을 관조하는 것은

7) 노(能) : 일본의 가면 오락극을 말한다.



일정한 거리를 유지하는 제삼자적 위치에서 이해관계나 인정을 배제한, 객관적 시각으로 바라보는 것이라고 한다. 바로 비인정의 세계인 것이다.

화공은 서양의 시는 인간사가 근본이기 때문에 아무리 순수한 시라할지라도 그 경지를 해탈할 줄 모른다면 ‘셀리가 종달새 소리를 듣고 탄식한 것도 무리는 아니다’라고 서양의 시를 비평하고 있다. 그와는 대조적으로 ‘고맙게도 동양의 시歌에는 그것을 해탈한 것이 있다’(10)며 도연명과 왕유의 시를 극찬한다.

소세키는 셀리의 시를 도연명, 왕유의 시와 상대화시킴으로써 화공이 추구하고 있는 미는 일견 서양적인 인정에 속박된 미가 아닌 동양적인 미, 즉 비인정의 세계에 존재하는 미라는 것을 말하고 있는 듯하다. 그러나 다음의 서술에서 볼 수 있듯이 소세키는 비인정의 세계도 부정하고 있다.

물론 인간의 한 분자이기 때문에 아무리 좋다 해도 비인정이 그렇게 오래 계속될 수는 없다. 도연명이라 해서 일 년 내내 남산을 바라다보고 있었던 것은 아닐 것이며, 왕유 역시 일부러 대나무 숲 속에 모기장도 치지 않고 잔 것은 아닐 것이다. (중략) 이렇게 말하는 나도 마찬가지다. 아무리 종달새와 유채꽃이 마음에 든다 해도 산속에서 노숙할 정도로 비인정이 격한 것은 아니다.(11)

이것은 사람들이 더불어 살아가는 인정의 세계에 있어서 비인정의 한계를 말하고 있는 것으로 인정과 비인정, 동양과 서양예술에 대한 양비론적인 소세키의 인식을 드러내고 있는 것이라 하겠다.

이와 같은 양비론적인 인식은 동서양의 그림에 대한 비평에서도 엿볼 수 있다. 소세키는 그림의 경지를 3단계로 구분하고 있는데, 제1의 그림은 보통의 그림으로 느낌은 없고 물체만 있는 그림이며, 제2의 그림은 물체와 느낌이 모두 존재하는 것이라고 한다. 제3의 경지에 이르러서는 존재하는 것은 오로지 마음뿐으로, 그림이 되게 하려면 이 마음에 알맞은 대상을 선택하지 않으면 안 된다고 서술하고 있다. 그러나 이 대상은 쉽게 나타나지 않으며 나타난다 하더라도 쉽게 정리되지 않는 것으로, 제3의 그림은 至難한 경지라는 것이다.

소세키는 어느 정도까지 이 경지에 이른 화가로 문여가(文与可)<sup>8)</sup>의 대나무 그림과 운고쿠(雲谷)<sup>9)</sup> 문하생의 산수화, 다이가도(大雅堂)<sup>10)</sup>의 풍경화, 부촌(蕪村)<sup>11)</sup>의 인물화를 꼽고 있다. 그러나 ‘서양의 화가들에 있어서는 대부분이 눈을 구상세계로 돌려서 신묘하고 고상한 운치에 접근하지 않는 자가 대다수를

8) 문여가(1018-1079) : 중국 북송시대의 문인, 화가로 시문과 글씨, 특히 죽화(竹畵)에 뛰어났다.

9) 운고쿠(雲谷) : 16-17세기경의 일본 화가로 운고쿠파의 시조다.

10) 다이가도(大雅堂) : 18세기경의 일본 화가이다.

11) 부촌(蕪村) : 18세기경에 활동한 일본 화가이자 하이쿠 작가이다.

점하고 있기 때문’(58-59)에 그 경지에 이른 화가가 몇 명이나 되는지는 알 수 없다고 한다.

소세키의 이러한 비평은 일견 일본의 화가들이 제3의 경지에 이른 것 같이 들리지만 ‘그들이 애써 그려낸 고상한 운치는 너무나 단순하고 또한 너무 변화가 부족하다’(59)라며 일본의 화가들 역시 비평하고 있다.

이처럼 소세키의 양비론은 양 쪽 모두 완벽하지 못하다는 점을 지적하는 것으로, 그것은 두 세계가 상호 보완적인 관계임을 말하는 것이라 하겠다. 소세키가 『풀 베개』에서 추구하고 있는 미는 서양의 예술도 아니거니와 동양의 미도 아니다. 또한 인정이나 비인정, 어느 한 쪽의 세계에만 존재하는 것이 아님을 알 수 있다.

기쁨이 깊을 때 슬픔은 더욱 더 깊고 즐거움이 큰 만큼 괴로움도 크다. 이것을 따로 분리하려 하면 처신할 수 없다.(6)

이러한 역설적인 관점에서 볼 때 셸리의 종달새가 끝없는 슬픔을 노래하고 있는 것은 한편으로 한없는 기쁨을 노래하고 있는 것이 된다. 도연명과 왕유가 인정을 해탈한 비인정의 세계를 노래하고 있지만 그것은 곧 지극한 인정의 세계를 노래하고 있는 것과 다름 아니다.

이처럼 상반된 두 세계는 함께 공존하고 있는 것으로, 소세키의 양비론은 양 쪽 모두를 배제하는 것이 아니라 다 같이 포용하고 있는 양시론적인 관점이라 할 수 있다. 그것은 피비우스의 띠처럼 안과 밖, 是와 非, 東과 西가 공존, 순환하는 패러독스의 세계인 것이며, 이 역설의 세계야말로 소세키가 『풀 베개』에서 표출하고 있는 양비론의 요체라 할 수 있을 것이다.

### 3. 共存하는 두 세계와 那美의 아와레(憐れ)

『풀 베개』에서는 서양과 동양, 인정과 비인정, 生과 死, 雅와 俗, 靜과 動, 밤과 낮, 과거와 현재, 꿈과 현실 등과 같이 상반되는 두 세계가 묘사되고 있다. 또한 소세키는 동백꽃과 목련, 연못과 절, 산길과 물길 등처럼 두 개의 이미지를 상대화시킴으로써 서로를 대척점에 세우고 있다. 본 장에서는 『풀 베개』에서 묘사되고 있는 대립되는 두 세계의 모습과 나미(那美)의 얼굴 가득한 ‘아와레’가 의미하는 것은 무엇인지를 분석하고자 한다.

이 작품의 무대인 나코이(那古井)는 바다에 면한 산촌마을로써 그 지세와 온

천장 건물 역시 나미와 더불어 이러한 상반된 두 세계를 상징하고 있다. 다음은 나코이의 지세를 묘사한 문장이다.

산이 다하면 언덕이 되고 언덕이 다하면 폭 삼백 미터 가량의 평지가 되고, 그 평지가 다하자 바다 속으로 기어 들어갔다가 백칠십 리 저편에 가서, 다시 불쑥 솟아난 주위 육십 리의 마야(魔耶)섬이 된다. 이것이 나코이(那古井)의 지세다.(35)

산은 바다가 되고 바다는 다시 섬으로 된다. 산과 바다가 대립하는 것이 아니라 서로를 포용하며 공존하고 있다. 온천장의 모습도 마찬가지이다. 벼랑 쪽 언덕 기슭에 위치한 온천장은 험준한 산 경관을 반쯤 정원 안에 들여놓은 구조이기 때문에 전면은 이층이지만 뒤로는 단층이 된다. 온천장은 화공 외에는 손님이 거의 없어 대부분의 객실들은 닫혀있다. ‘닫혀있는 방은 낮에도 덧문을 열지 않고, 열어놓은 방은 밤에도 문을 닫지 않는다’ 나코이의 온천장은 ‘비인정의 여행으로는 나무랄 데 없는 안성맞춤의 장소(36)’라고 화공은 말한다.

아름다운 풍광의 나코이가 바다와 육지를 공유하고 있듯이 온천장 역시 열린 문과 닫힌 문이 공존하며 일층과 이층이 공유되고 있다. 즉 상반된 두 세계가 동거하며 공존하고 있는 것이다. 이처럼 대립되는 두 세계의 공존은 온천장 주인의 딸인 아름다운 나미의 모습에서도 엿볼 수 있다.

나코이 여관에 도착한 날 밤, 화공이 나가라(長良) 처녀의 노랫소리에 이끌리어 장지문을 열어젖히자 해당화나무 그늘에 달빛을 피하고 서있는 여인의 모습이 보인다. 화공은 나미의 그 황홀한 자태를 보고 잠을 이루지 못한다. 노랫소리는 꿈속의 노래가 세상으로 빠져나온 것인지, 아니면 이 세상의 노래가 아득한 꿈나라로 가물가물 말려들어간 것인지 분간할 수 없었다.

그것은 꿈도 아니고 현실도 아닌 비몽사몽의 상태로, 마치 온천장의 건물이 이리 보면 일층이고 저리 보면 이층이듯이 꿈이면서도 현실이고 현실이면서도 꿈인 것이다. 그러나 다음 날 아침, 목욕탕에서 나오던 화공에게 유카타를 걸쳐주고 호호호 웃는 나미의 모습에서는 화공을 잠 못 이루게 했던 지난밤의 모습은 찾아볼 수 없었다.

이러한 이중적인 나미의 모습은 다음날에도 계속된다. 화공이 점심상을 물리고 시중들던 여자아이가 장지문을 열자 나미의 모습이 보였다. 나미는 안마당 정원수를 사이에 두고 이층 난간에서 다소곳한 모습으로 아래를 내려다보고 있었던 것이다.

그녀가 기대고 있는 난간 밑에서는 나비가 영키었다 떨어지고 떨어졌다가 영키는 지극히 한가로운 봄 풍경이 꿈처럼 연출되고 있었다. 화공은 시흥에 취해 꿈

속에서 시상을 떠올리며 그녀와의 가느다란 인연을 상상해 보지만 그것도 잠시, 갑자기 문을 열고 호호호 웃어대는 나미에 의하여 현실세계로 돌아오게 된다.

꿈과 현실이라는 두 세계를 연출하고 있는 나미는 두 개의 의식세계를 갖고 있다. 나가라의 노래를 부르고 이초가에서(銀杏返し)<sup>12)</sup>의 머리를 한 나미는 그녀의 과거모습이며, 호호호 웃어대는 나미는 그녀의 현재모습이다. 나미에게는 과거와 현재가 동시에 존재하고 있는 것이다.

원래는 정(靜)해야 할 대지의 일각에 함몰이 일어나 전체가 무의식에 움직였지만 움직이는 것은 본래의 성품에 반함을 깨닫고 애써 옛 모습으로 돌아가려고 하는 것을, 평형을 잃은 기세에 제지되어 마음과 다르게 계속해서 움직였던, 지금은 자포자기로 무리해서라도 움직여 보이려하는 모습이—그런 모습이 만약 있다고 한다면 바로 이 여자를 형용할 수 있다.(33)

움직이지 않으려 하나 계속해서 움직일 수밖에 없다. 움직이자니 본래의 성품과 배치됨을 깨닫는다. 다시 원래의 모습으로 돌아가려하지만 돌아갈 수가 없다. 모순과 혼란으로 범벅이 된 그녀의 모습이다. 그것은 靜과 動, 과거와 현재가 공존하고 있는 카오스의 세계와 다름 아니다. 나미에게는 이항대립적인 두 세계가 공존하고 있는 것이다.

소세키는 『풀 베개』의 마지막 장면에서도 현대문명의 상징인 기차의 안과 밖이라는 이항대립적인 두 개의 세계를 그리고 있다. 사촌동생 규이치(久一)와 나미의 전 남편을 전송하며 서있는 플랫폼은 기차에 의하여 떠나는 자와 보내는 자, 떠나는 자가 향하는 ‘먼 세계’와 보내는 자가 서있는 ‘현재의 세계’로 나누어진다. 기차의 출발로 인하여 마침내는 떠나는 자와 남는 자를 연결하고 있던 因果의 끈은 끊어져버려 두 세계는 단절되려하고 있다.

이 단절되려는 순간 나미의 얼굴에는 ‘아와레’가 가득히 떠오른다. 바로 화공의 흉중의 그림이 성취되는 순간이다. 사촌동생 규이치와 전 남편을 싣고 떠나는 기차를 바라보며 얼굴 가득히 ‘아와레’를 띄우고 서있는 나미. 그들을 싣고 기차는 떠나갔지만 나미는 그들을 보내지 않았다. 얼굴 가득한 ‘아와레’는 떠나는 그들이 나미의 가슴속에 그대로 자리하고 있었기 때문에 드러난 그녀의 마음이다. 이러한 나미의 ‘아와레’는 친정으로 돌아와 단절된 전 남편과의 인과를, 기차에 의하여 끊어지려하는 인과를 다시 이어주고 있다.

소세키는 『나는 고양이로소이다(吾輩は猫である)』에서 ‘속편하게 보이는 사람들도 마음속을 두드려 보면 어딘가에서 서글픈 소리가 난다(呑氣と見える人々

12) 이초가에서(銀杏返し) : 여자의 머리는 모양의 하나로 정수리에서 모은 머리를 좌우로 갈라 반원형(은행나무 잎 모양)으로 틀어 맨 머리를 말한다.

も、心の底を叩いて見ると、どこか悲しい音がする)’<sup>13)</sup>고 말한다. 서로를 대립과 갈등의 상대가 아닌 화합과 조화의 상대로서 또한 동반자로서, 서로가 서로를 보듬으며 함께 하는 것이 바람직한 인간관계임을 말하고 있는 것이다.<sup>14)</sup> 이것은 상대방의 마음속 어딘가에 있는 서글픈 소리를 들을 수 있을 때만이 진정한 인간관계가 성립될 수 있음을 의미하는 것이기도 하다.

사촌동생 규이치는 지원병으로 만주의 전쟁터로 떠나고 부유했던 전 남편은 다니던 은행이 파산한 뒤 돈을 벌기위해서 만주로 떠나간다. 사촌동생에게는 살아서 돌아오면 체면이 서지 않으니까 ‘죽는 것이 좋다’(121)하고 전 남편에게는 ‘돈을 주우러 가는 것인지 죽으러 가는 것인지 알 수 없다’(118)며 무관심한 듯 내뱉는 나미의 말속에는 역설적인 그녀의 마음이 짙게 묻어난다. 나미는 생사를 알 수 없는 ‘먼 세계’로 떠나가는 그들의 가슴속에 자리한 ‘서글픈 소리(悲しい音)’를 듣고 있었던 것이다.

‘신도 모르는 정서이면서 가장 신에게 가까운 인간의 정’(93), 즉 신과 인간의 경계에 위치한 ‘아와레’는 ‘서글픈 소리’와 반응하여 울리는 나미의 마음의 소리라 할 수 있다. 그 마음의 소리는 현대문명으로 인하여 끊어진 인과를 회복시켜주는 것으로, 아와레는 너와 나의 인간관계를 유지시켜주는 ‘인과의 가느다란 실’(39)이다.

세속의 인정세계는 일방적인 자기중심의 세계인 반면, 속세를 초월한 비인정의 세계는 모든 사물을 객관화, 타자화시켜 관조하는 脱自我의 세계, 곧 신의 세계라 할 수 있다. 따라서 아와레는 자아와 탈 자아, 신과 인간의 그 중간에 자리하고 있는 지극한 ‘인간의 정’인 것이다.

이상에서 살펴보았듯이 나코이의 지세와 온천장 건물, 그리고 나미의 모습에서 대립하는 두 세계가 공존하고 있음을 알 수 있었다. 또한 화공의 흉중의 그림을 성취시킨 나미의 아와레 역시 자아와 탈 자아 사이에 있는 지극한 인간의 정이라는 것을 확인할 수 있었다.

피비우스의 띠에는 안과 밖이 존재하지 않는다. 안은 밖이 되고 밖은 안이 되는 반전의 세계이며, 이항 대립적 세계가 아니라 공존과 순환의 세계로 곧 패러독스의 세계이다. 피비우스의 띠 위에서는 슬픔과 기쁨, 사랑과 미움도 교차하며 공존한다. 따라서 나미의 아와레는 단절된 인과를 이어주고 이항 대립적 세계를 공존과 순환의 패러독스 세계로 만들어주는 피비우스의 띠라 할 수 있을 것이다.

13) 夏目漱石(1978) 『漱石全集第2巻』 岩波書店 p.228

14) 강현모(2009) 「『나는 고양이로소이다』론」 충남대학교 p.58-59

#### 4. 소세키의 中庸과 逆說의 세계

『풀 베개』는 다음과 같은 문장으로 소설이 시작된다. 소세키는 이 첫 구절을 통하여 『풀 베개』의 작품성격과 자신의 삶에 대한 철학, 즉 자신의 인생관을 피력하고 있다. 그것은 바로 소세키의 양비론적 중용사상인 것이다.

산길을 올라가면서 이렇게 생각했다.

지(智)에 치우치면 모가 난다. 정(情)에 편승하면 뒤처지게 된다. 고집(意地)을 피우면 웅색해진다. 아무튼 인간세상은 살기 어렵다.(5)

첩은 논리적이고 이성적인 것이며 情은 감각적이고 감성적인 것을 말한다. 인간은 어느 한 쪽으로 치우치기 쉽기 때문에 지나치게 논리적이거나 감성적인 것은 세상살이를 어렵게 만든다. 인간세상은 自와 他的 관계로부터 시작되는 것으로, 바람직한 인간관계를 위해서는 智와 情의 균형을 필요로 하기 때문이다.

공자는 논어(論語)의 ‘옹야(雍也)’편에서 ‘어진 사람은 산을 좋아하고 지혜로운 사람은 물을 좋아한다. 지자는 동이고 인자는 정(仁者樂山 智者樂水 智者動仁者靜)’<sup>15)</sup>이라고 했다. 『풀 베개』에서 인정의 세계는 智와 動的 세계로, 비인정의 세계는 情과 靜의 세계로 자리매김 되고 있는 것도 이러한 관점에서인 것이며 소세키가 『풀 베개』의 첫 구절에서 智와 情을 논하고 있는 것 역시 이와 같은 맥락에서라 할 수 있다.

『풀 베개』에서는 화공이 산길을 따라 인정의 세계에서 비인정의 세계로 들어가지만, 다시 인정의 세계로 돌아오는 길은 강물을 따라 배를 이용하고 있다. 산길로 고개를 넘어 온 해변의 나코이 온천장에서 내륙에 위치한 요시다(吉田)로 나가는 길이 강을 따라서 내려가도록 설정되어 있는 것은 모순이라고 제자들이 지적했다고 한다.

그것은 요시다가 내륙에 위치해 있다면 해안에서 강을 거슬러 올라가야 하는 것이며, 만약 같은 해안에 위치해 있다면 강이 아니라 바닷길로 가는 것이 타당했기 때문이었다. 그러나 제자들의 이러한 모순에 대한 지적에도 불구하고 소세키는 고집을 꺾지 않았으며 그 모순을 수정하지 않았다.<sup>16)</sup>

사사키 미치루(佐々木充) 역시 논문 「풀 베개」에서 ‘아무래도 작품의 끝에서 강이 나오는 것은 무리한 설정인 것은 아닐까?’<sup>17)</sup>라는 의문을 제기하면서, 그것은 결국 나코이가 ‘신성한 땅(聖なる地)’<sup>18)</sup>이기 때문이라고 서술하고 있다.

15) 이기석, 한백우 역(2008) 『논어』 홍신문화사 p.120

16) 전계주 1) 『漱石作品論集成 第2卷』 p.243

17) 전계주 1) 『漱石作品論集成 第2卷』 p.242

힘든 산길을 통하여 성지에 들어온 보답으로 돌아가는 길은 편안한 뱃길을 택한 것이고, 그것은 ‘순례자의 공덕’<sup>19)</sup>이라고 논하고 있다. 하지만 필자는 나코이를 성지로, 화공을 순례자로 간주하고 있는 사사키의 논리와는 다른 관점에서 접근하고자 한다.

그렇다면 소세키는 왜 그 모순을 알면서도 시정을 하지 않았을까. 소세키는 무엇 때문에 굳이 산길로 들어가서 산길로 나오는 직선왕복이 아니라 산길로 들어가서 물길로 돌아 나오는 순환의 고리를 만들고 있는 것인가.

그 순환고리야말로 산길과 물길, 비인정과 인정의 세계가 반전하며 순환되는 뫼비우스의 띠를 상징하고 있는 것으로, 그것은 곧 소세키가 『풀 베개』를 통해서 추구하고 있는 패러독스의 세계를 의미하고 있기 때문일 것이다. 기쁨과憂愁가 공존하고 즐거움과 괴로움을 따로 분리하여 생각할 수 없는 것처럼 산길과 물길, 인정과 비인정의 세계는 뫼비우스 띠의 線上에서처럼 공존하며 반전하고 있는 것이다.

이와 함께 나코이 온천장의 나미의 모습 또한 이항대립적인 두 세계가 공존하고 있으며, 밤과 낮의 중간에 서있는 나미의 자태 역시 지극한 궁극(窮極)의미를 보여주고 있다. 그것은 해질녘이었다. 움직이지 않고 있지만 ‘다만 그냥 움직이는’ 무아지경 속에서, 가만히 앉아있는 화공의 ‘평상시보다는 담담한 마음의 현 상태’(57)를 여지없이 깨뜨리는 장지문에 비친 한 폭의 그림이 있었다. 그것은 처음부터 말도 없고 겉눈질도 하지 않는 후리소테(振袖) 차림의 나미였다. 그녀는 마루를 스치는 옷자락소리도 자신의 귀에조차 들리지 않을 정도로 조용히 거닐고 있었다.

시흥에 취하여 시가 짓기에 몰두하던 화공은 그런 나미의 모습을 보자 자기도 모르게 연필까지 떨어뜨리며 들이마시던 숨조차 내쉴 수 없을 정도로 충격을 받고 ‘나는 시를 버리고 입구를 지켜본다’(62)는 말을 내뱉는다. 화공은 나미의 幻影에 마음을 빼앗기고 말았던 것이다.

허리에서 아래로 눈에 번쩍 띄는 옷자락 무늬는 무슨 빛깔로 염색한 것인지 멀리에서는 알 수 없다. 다만 무지와 무늬를 이은 자리가 자연스럽게 빛깔이 바래져서 밤과 낮의 경계와 같은 느낌이다. 여인은 물론 밤과 낮의 경계를 거닐고 있다.(62)

나미는 밤과 낮의 중간에 서있다. 그것은 어둠과 밝음, 靜과 動, 과거와 현재, 인정과 비인정의 경계에 서있음을 의미하는 것이다. 나미는 어둠을 끌어안

18) 전계주 1) 『漱石作品論集成 第2卷』 p.245

19) 전계주 1) 『漱石作品論集成 第2卷』 p.249

고 있는 동시에 밝음을 배제하지 않고 있다. 움직이고 있으면서도 움직이지 않고 있다.

그녀의 옷치장이 ‘싫어하는 기색도 없고 다투는 기미도 보이지 않는’ 것처럼 밝음을 싫어하거나 어두움을 다투지도 않는다. 그것은 ‘잠시 동안의 환영을 본디 그대로의 어둠 속에 거두어들이고 있는’ 것같이 어둠이 밝음을 끌어들이고 본래의 靜이 動을 거두어들이고 있는 모습이다.

밤과 낮의 중간에 서서 ‘有와 無의 경계를 거닐고 있는’(63) 나미는 그 각각을 배제하지 않고 있으며 그 각각의 하나만을 끌어들이지도 않는다. 그녀는 바다와 육지를 함께 포용하며 아우르고 있는 나코이 온천장 건물처럼 경계에 서서 양쪽의 세계를 공유하고 있다. 화공이 연필을 집어던지며 시를 버리고 숨조차 멎어버릴 정도의 지극한 아름다움에 넋을 놓고 있었던 것은 밤과 낮의 중간에 서있는 나미의 경계의 美, 즉 中庸의 美를 보았기 때문일 것이다. 이러한 중용의 미는 나미의 후리소데 모습에서만 아니라 나체의 모습에서도 잘 드러나고 있다.

실내를 가득 메운 김은 짝 찬 뒤에도 끊임없이 솟아오른다. 봄밤의 등불을 반투명하게 흘뜨려 펼치고 방 안에 가득히 깔린 무지개의 세계가 질게 흔들리는 속에, 희미하게 검은 듯한 머리를 흐릿하게 하여 새하얀 모습이 구름 속에서 서서히 떠오른다. 그 윤곽을 보라. (중략) 세상에 이처럼 착잡한 배합은 없다. 이만큼 통일된 배합도 없다. 이처럼 자연스럽고, 이처럼 부드럽고, 이처럼 저항이 적으며, 이만큼 무난한 윤곽은 결코 찾아보기 어렵다.(70)

온천탕의 자욱한 수증기속에 서있는 나미의 나체모습은 아름다움의 극치라 할 수 있다. ‘육체를 감싸면 아름다운 것이 감추어진다. 감추지 않으면 천해진다’(69)라는 화공의 美에 대한 인식처럼 나미는 실오라기 하나 걸치지 않은 알몸이지만 수증기의 얇은 막에 가리어져 있다. 매달린 등불에 비춰진 그녀의 모습은 반투명의 실루엣으로 완전히 알몸이지만 그렇다고 노골적으로 전부를 드러내고 있지 않다.

『풀 배개』에서 소세키는 ‘아름다운 것을 더욱더 아름답게 하려고 초조해할 때, 아름다운 것은 도리어 그 정도가 감해지는 것’이라며 현대예술의 폐단은 ‘구구하게 모든 곳에서 악착같이 집착하는 점’(69)이라고 화공의 입을 통하여 아름다움에 대한 논리를 펼치고 있다. 소세키의 이러한 美學論은 지나침을 경계하는 절제의 미를 말하는 것으로, 그것은 감춘 듯 감추지 않으며 드러난 듯 드러나지 않는 경계의 미, 중용의 미를 의미하고 있는 것이라 하겠다. 소세키는 일상에서도 극단적인 것에 가치를 부여하지 않고 있다.



인도의 사라사라든가 페르시아의 벽걸이라고 하는 것들은 좀 어설플 데에 가치가 있듯이 이 꽃 모단도 자질구레하지 않은 점에 아취가 있다. 꽃 모단만이 아니다. 모든 중국의 가구는 다 어설플다.(71-72)

지나치게 정교한 일본 제품이나 세속적 집착에서 벗어나지 못하고 있는 서양의 가구보다 ‘어설플 데(一寸間が抜けている所)’가 있는 인도나 페르시아의 것에 더 가치가 있다는 것이다. 어설플품의 가치가 있는 인도와 페르시아는 지정학적으로 동서양의 중간에 위치해 있으며 그 완충지대라 할 수 있다. 그것은 바다와 육지가 만나는 해변, ‘먼 세계’와 ‘우리들 세계’를 공유하고 있는 플랫폼, 인정과 비인정이 공존하는 나코이의 온천장과 같이 동양과 서양이 공존하고 있는 곳이다.

소세키는 『나는 고양이로소이다』에서도 메이테이(迷亭)의 입을 통하여 ‘그 나무랄 데가 있는 것이 친밀감이 있다(其申し分のある所に愛嬌がございます)’고 말한다. 나무랄 데가 있다는 것은 인간미가 있다는 것으로 이러한 인간미는 허물 없는 인간관계를 유지시켜 주는 촉매제가 된다.<sup>20)</sup>

화공은 노인이 사랑삼아 내보이는 벼루의 뚜껑을 보고 ‘어차피 자신이 만드는 것이라면 좀 더 서툴게(不器用に) 만들 듯도 한데’(78)라면서 번들번들하게 잘 다듬어진 소나무 껍질로 만든 벼루 뚜껑을 저속하다고 말한다. 관해사 주지도 번들거리는 벼루 뚜껑이 싸구려 같다고 동조하고 있다.

소세키는 어설플 데가 있는 것, 나무랄 데가 있는 것, 서툰 것에 가치를 부여하고 있음을 알 수 있다. 그것은 극단적인 것이 아니라 ‘양단을 잡고 그 중간을 취하는(執其兩端 用其中)’<sup>21)</sup> 중용지도(中庸之道)로 곧, 소세키의 삶의 철학을 드러내고 있는 것이라 하겠다.

단숙(端肅)은 ‘인간의 활력이 움직이려 하면서도 아직 움직이지 않는 자태’로 그 ‘함축된 멋진 백세의 후세에 전해진다’며, 소세키는 ‘그리스 조각의 이상은 단숙이라는 두 글자로 귀착 된다’(32)고 했다. 지극의 미를 일컫고 있는 단숙 역시 動과 靜의 중간에 위치하고 있으며 동과 정을 공존시키고 있다.

과거의 나미는 ‘아무래도 표정에 일치가 없으며’, ‘얼굴에 통일된 느낌이 없었던’(33) 모습이었지만 밤과 낮의 중간을 거닐고 있는 현재의 나미는 최상의 통일과 배합을 갖추게 된 궁극의 미를 부여받고 있다.

이와 같이 소세키가 『풀 베개』에서 추구하고 있는 아름다움은 有와 無, 靜과 動, 밤과 낮의 중간에 위치해 있는 것으로, 그것은 바로 경계의 美이며 중용의 美, 조화의 美라 할 수 있다. 조화(調和)는 ‘상대화(相對化) 그 자체를 뛰

20) 전계주 7) 「『나는 고양이로소이다』론」 p.58

21) 이기동 역(2010) 『대학중용강설』 성균관대학교 p.129

어넘는 것'이며 '『풀 베개』에 있어서의 근본적인 지향점'<sup>22)</sup>이라고 시미즈 다카요시는 말한다.

중용이라 함은 단순히 대립하는 양단의 중간을 말하는 것이 아니라 상호 조화를 이루며 최적의 어울림이 있을 때 비로소 성립되는 것이다. 중용의 세계는 이항대립적인 세계가 서로를 배척하거나 배제하지 않고 퇴비우스의 띠 선상에서처럼 반전하며 공존하는 세계이다. 중용과 조화는 바로 소세키의 삶의 철학인 동시에 『풀 베개』에서 추구하고 있는 최상의 가치라 할 수 있다.

## 5. 모과나무 꽃에 형상화된 中庸의 美

『풀 베개』는 화공이 산길을 따라 비인정의 세계에 들어가는 것을 시작으로 하여 물길을 따라 다시 인정의 세계에 나오는 것으로 끝을 맺고 있다. 산길과 물길은 비인정과 인정의 세계를 의미하고 있는 것이며, 가가미가 연못(鏡が池)과 관해사(觀海寺)의 모습 또한 각각 인정과 비인정의 세계를 상징하고 있는 것이다.

소세키는 밝은 대낮의 연못가에 피어있는 동백꽃과 달밤의 관해사에 피어있는 목련을 상대화시킴으로써 인정과 비인정의 세계를 명확히 대비시키고 있다. 본 장에서는 이처럼 상대화된 이미지들이 의미하고 있는 것은 무엇인지를 고찰하고자한다.

우선 가가미가 연못의 모습을 보면 매우 혼잡스럽고 통일성이 없어 마치 처음의 나미의 모습을 연상시킨다. 몹시 불규칙하게 생겼으며 여기저기 바위가 자연 그대로의 형태로 놓여있다. 못의 형태도 기묘하게 물결치며 가장자리의 높이도 불규칙하다. 물속에는 부평초가 움직이려 하지만 움직이지도 못하고 그렇다고 죽을 수도 없이 끝없는 세월을 보내고 있다. 이 연못가에는 '녹색이 너무 짙어서 낮에 보아도 햇빛에 보아도 경쾌한 느낌이 없는'(91) 잎을 무성하게 하고 있는 동백꽃이 피어있다.

저것만큼 사람을 속이는 꽃은 없다. 나는 심산의 동백을 볼 때마다 언제나 요녀의 모습을 연상한다. 검은 눈으로 사람을 낚아 들이고 모르는 사이에 요염한 독기를 혈관에 불어넣는다. (중략) 동백이 가라앉는 것은 전혀 다르다. 거무스름한 독기와 공포감을 지닌 모습이다.(91)

화공의 눈에 비친 동백꽃의 이미지는 매우 부정적이다. 아름다운 동백꽃의

22) 전계주 1) 『漱石作品論集成 第2卷』 p.219

붉은색조차도 ‘저절로 사람의 마음을 불쾌하게 하는 이상야릇한 빨강’이라며 부정적인 시각으로 바라본다. 화공은 꽃 송이채 툇 떨어지는 모습도 ‘어쩐지 독살스럽다’(92)고 느끼고 있는 것이다.

동백은 꽃잎이 한 장, 한 장 떨어지는 것이 아니라 꽃 송이채 ‘미련 없이’ 한꺼번에 툇 툇 떨어진다. 동백꽃이 떨어지는 모습은 절망과 고통 속에서 실성해 버린 오필리아가 강물에 몸을 던져 미련 없이 떠나가는 모습을 연상시킨다. 그것은 또한 두 남자의 사이에서 괴로워했던 나가라(長良)의 처녀와 이루지 못한 사랑 때문에 연못에 몸을 던진 시호다(志保田)아가씨의 모습이기도하다. 이러한 동백꽃의 부정적 시각은 지나치게 인정에 얽매어 강물에 몸을 던진 그녀들에 대한 소세키의 부정적인 인식을 드러내고 있는 것이라 할 수 있다.

이에 반하여 관해사에서 의 이미지는 연못과는 사뭇 다른 모습이다. 어스름한 달빛을 따라 관해사를 향하는 화공의 마음은 기뻐지기 시작했으며 돌계단을 오르자 유쾌한 기분이 든다. 그리고 불규칙했던 가가미가 연못과는 달리 일렬로 늘어선 선인장은 반듯하게 정렬되어 경내는 고요하고 밝은 달빛아래 티 없이 맑은 느낌을 준다.

화공이 옛날 가마쿠라에 놀러가서 원각사에 올라갈 때 ‘어디가세요’라는 스님의 날카로운 질문에 그냥 절 구경 왔다고 대답하자 스님은 ‘아무것도 없습시다(98)’라는 한마디만 남기고 냉큼 내려갔고 한다. 원각사 산문에 들어서자 참으로 스님이 말한 것처럼 넓은 절의 부역도 본당도 텅 비어서 사람의 모습은 찾아볼 수 없었다는 것이다. 이것은 관해사가 원각사처럼 ‘아무것도 없는’ 텅 빈 無의 세계, 즉 비인정의 세계임을 의미하는 것으로 인정의 세계인 가가미가 연못과 상대화 되고 있는 것이라 하겠다.

있는 하나도 달리 지 않고 꽃만 가지위에 매달려있는 관해사의 목련나무 역시 비인정의 세계를 상징하고 있다. 목련나무는 가지가 아무리 얽혀도 가지사이가 비어있어서 밝은 달빛의 하늘을 훤히 우러러 볼 수 있는 것으로 그 또한 텅 비어있는 무의 세계임을 알 수 있다.

꽃 색깔은 물론 순백이 아니다. 부질없이 흰 것은 너무 차갑다. 오로지 흰 것에는 유난히 사람의 눈을 뺏는 기교가 보인다. 목련의 빛깔은 그렇지 않다. 극도의 백색을 일부러 피하여 따사로운 느낌이 있는 옅은 황색으로 그윽하고 고상하게도 스스로를 낮추고 있다.(101-102)

순백을 더욱 회계 하는 극도의 기교가 아니라 오히려 극도의 백색을 일부러 옅은 황색으로 자신을 낮추고 있는 목련꽃은, ‘눈부실 만큼의 화려함 속에 차마 말할 수 없는 침울함’(91)을 갖고 있는 동백과는 상반되는 모습을 보이고

있다. 목련꽃은 자신을 낮추면서도 밝고 맑은 느낌을 주는 꽃이다. 그러나 ‘눈에 보이는 것은 꽃뿐이다. 잎은 한 장도 없다.(102)’라고 화공은 말한다. 이것은 잎을 배제시킨 채 꽃만 달려있는 목련나무에 대한 소세키의 부정적인 시각을 의미하고 있다.

화가 중에도 박사가 있다고 알고 있으며 비둘기가 밤에도 볼 수 있다고 생각하는 관해사의 주지는 세상물정을 모르는 너무 현실과 동떨어진 인물이다. 소세키는 극도로 脫俗적인 주지와 이과리 하나 달지 않고 꽃만 피어있는 목련의 모습을 묘사함으로써 지나치게 비인정의 세계만을 추구하는 것 역시 바람직하지 않다는 것을 명백히 하고 있는 것이다.

그러나 소세키는 이러한 동백꽃과 목련꽃에 대한 부정적인 시각에 반하여 모과나무 꽃에 대해서는 최고의 찬사를 아끼지 않고 있다.

모과는 재미있는 꽃이다. 가지는 완고하여 일찍이 구부러진 적이 없다. 그렇다고 꺾 곧은가 하면 결코 그렇지도 않다. 다만 곧고 짧은 가지에 곧고 짧은 가지가 여러 각도로 맞부딪치고 비스듬하게 자세를 취하면서 전체를 이루고 있다. 거기에 붉은색인지 흰색인지 알 수 없는 꽃이 한가롭게 핀다. 부드러운 잎사귀도 나풀나풀 달려있다.

평가하자면 모과는 꽃 중에서도 어리석으면서 깨달음을 얻은 꽃일 것이다. 세상에는 순수한 삶을 사는 사람이 있다. 이런 사람이 내세에 다시 태어나면 분명 모과나무가 된다. 나도 모과나무가 되고 싶다.(113-114)

소세키는 인용문에서 보듯이 모과나무 꽃을 완벽한 중용의 미를 갖고 있는 꽃으로 묘사하고 있다. 세상에서 순수한 삶을 산 사람이 내세에 다시 태어난다면 모과나무가 될 것이 틀림없다며 자신도 ‘모과나무가 되고 싶다’고 말한다. 그것은 소세키 자신, 이 세상을 순수하게 살고자하는 의지를 내보이고 있는 것이라 하겠다.

그가 어렸을 때 책상위에 걸어놓았던 모과나무가 하룻밤 사이에 꽃은 시들고 잎이 말랐던 것처럼, 세파에 시달리며 지나온 세월은 자신의 순수함을 빼앗아 가버린 것을 한탄하고 있는지도 모른다. 소세키는 하이쿠에서도 ‘모과나무 꽃 피어남이여, 소세키 그 순수함을 간직하리라’<sup>23)</sup>라든가, ‘스님이든 속인이든 암자에 들어가면 모과나무 꽃, 그 어리석음 견줄 수 없는 모과나무 꽃’<sup>24)</sup>이라고 읊고 있다. 소세키에게 있어서 모과나무 꽃은 삶의 理想과 꿈을 상징적으로 드러내고 있는 꽃이다.

23) 전계주 12) 『漱石全集第23卷』 p.138

24) 전계주 12) 『漱石全集第23卷』 p.158

소세키는 수필집인 『유리문 안』에서 ‘나는 태어나서부터 지금까지, 다른 사람 앞에서 웃고 싶지도 않은데 웃어보였던 경험이 몇 번 있었다.’<sup>25)</sup>고 서술하고 있다. 보통 사람들은 하루에도 몇 번인가는 마음에도 없는 웃음을 지으며 살아가고 있는 것이 일반적인 삶이라 할 수 있지만, 소세키는 평생을 걸쳐서 표리부동한 헛웃음을 몇 번밖에 짓지 않았다고 솔회하고 있는 것이다. 그가 얼마나 진지하고 순수한 삶을 살고자 했던지는 짐작하기 어렵지 않다.

이상에서 살펴본바와 같이 소세키는 극단으로 치우치거나 또는 어느 한 쪽으로 기울어지는 것을 부정하고 있으며, 상반된 두 세계가 평형을 이루고 그 경계에 위치할 때 가장 이상적이라는 인식을 갖고 있음을 알 수 있다. 따라서 모과나무 꽃을 통하여 형상화시키고 있는 中庸의 美야말로 소세키가 『풀 베개』를 통하여 추구하고 있는 窮極의 美라 할 수 있다.

모과나무 꽃은 소세키의 이상과 염원이 담겨있는 꽃이다. 소세키는 모과나무 꽃처럼 순수하고 그러면서도 고고함을 잃지 않은 삶을 살아가고자 염원했던 것이다.

## 6. 결 론

본 논문의 목적은 역설과 양비론적인 관점에서 작품을 분석하여 소세키가 『풀 베개』를 통해서 추구하고 있는 아름다움은 무엇이며, 나미의 얼굴에 나타난 아와레(憐れ)는 무엇을 의미하는가를 규명하는 것이었다. 그럼으로써 궁극적으로는 소세키가 지향하고 있는 삶의 철학은 무엇인지를 도출해 내고자 하였다.

본론에서 고찰한 바와 같이 소세키의 양비론은 극단으로 치우치거나 또는 어느 한 쪽으로 기울어지는 것을 부정하고 있음을 알 수 있다. 소세키는 서양 예술을 비평하는 동시에 동양예술 또한 비평을 가하고 있다. 소세키는 『풀 베개』를 통해서 비인정의 세계를 추구하고 있지만 ‘인간세상이 살기 어렵다 하여 옮겨갈 나라는 없을 것’(5)이라며, 인정의 세계를 떠나서는 존재할 수 없는 인간의 한계도 분명히 하고 있다.

소세키의 양비론은 대립되는 두 세계의 그 어느 쪽도 배제하지 않고 공존시키는 양시론과 다름 아닌 것으로, 그것은 뫼비우스의 띠처럼 안과 밖이 반전하며 공존하는 패러독스의 세계이다. 화공인 ‘나’의 여행은 산길을 따라 인정의 세계에서 비인정의 세계로 들어가지만, 다시 인정의 세계로 돌아오는 길은 강

25) 전계주 12) 『漱石全集第17卷』 p.126

물을 따라 배를 이용하고 있다. 이처럼 산길로 들어가서 산길로 나오는 직선왕복이 아니라 산길로 들어가서 물길로 돌아 나오는 순환의 고리를 만들고 있는 화공의 여정은 피비우스의 띠를 상징한다.

中庸의 사전적 의미는 지나치거나 모자라지도 않으며 어느 한 쪽으로 치우치지 않는 것이라고 한다. 中은 어느 한 쪽으로 치우치지 않는 것이고 庸은 정상적이고 불변적인 것을 의미하는 것으로, 대립하는 두 세계의 중간자적 위치에 있는 것, 그리고 두 세계를 공존시키며 포용하고 있는 것이 곧 중용이라 할 수 있다. 그것은 단순히 대립하는 양단의 중간을 말하는 것이 아니라, 상호 조화를 이루며 최적의 어울림이 있을 때 비로소 성립되는 것이다.

바다와 육지의 경계는 해변이며 밤과 낮의 경계는 해질녘과 새벽녘이다. 경계는 상반된 두 세계가 대립하는 장소이기도 하지만 만남과 화합, 그리고 공존의 장소이기도 하다. 육지는 바다를 받아들이고 바다는 육지를 포용할 때 대립과 갈등의 장은 화합의 장으로 바뀔 것이다. 그것이 해변과 새벽녘 그리고 해질녘이 갖고 있는 경계의 의미인 동시에 중용이 추구하고 있는 정신이다.

소세키는 바다와 육지가 공존하는 해변에 위치해 있는 나코이를 『풀 베개』의 무대로 설정하고 있으며, 해질녘인 낮과 밤의 경계를 거닐고 있는 나미의 모습에 至極의 美를 부여하고 있다. 화공의 그림이 성취되는 장소 역시 만남과 헤어짐, 먼 세계와 현재의 세계가 공존하는 플랫폼으로 설정하고 있다. 이러한 것들은 중용사상을 상징적으로 묘사하기 위한 소세키의 의도적 설정이라 할 수 있다.

소세키는 有와 無의 경계를 거닐고 있는 나미의 후리소데 모습, 반투명의 실루엣으로 완전히 알몸이지만 그렇다고 노골적으로 전부를 드러내고 있지 않은 나미의 나체모습에 至極의 美를 부여함으로써, 『풀 베개』에서 추구되고 있는 궁극의 美는 이항대립적인 두 세계의 중간적 위치에서 양쪽을 함께 아우르는 中庸의 美라는 것을 명백히 드러내고 있다.

소세키는 가가미가 연못과 관해사, 동백꽃과 목련꽃을 상대화시킴으로써 비인정의 상징인 관해사와 목련꽃에 더 가치를 두는 듯 보이지만, 결국은 양비론에 의해 어느 한 쪽으로 치우치는 것을 거부한다. 그리하여 소세키는 가장 중용적인 모습의 모과나무 꽃에 최상의 가치를 부여하고 있는 것이다. 모과나무꽃뿐만이 아니라 일상의 것에서도 약간 어설픈 데가 있는 것, 나무랄 데가 있는 것, 서툰 것에 그 가치를 부여하고 있으며 그것은 소세키의 중용적인 삶의 철학에 기인하고 있는 것이라 할 수 있다.

『풀 베개』의 서두에서 그 유명한 지(智)와 정(情)과 아집(意地)에 대하여 논하고 있는 것 역시 이러한 소세키의 중용적인 관점을 형상화한 것이라 하겠다. 이성적 사고에 치우치는 것도, 감정적인 사고에 편승하는 것도, 또는 자신

만을 고집하는 것도 바람직한 삶이 아니라는 중용사상을 소세키는 강렬하면서도 詩的인 문장으로 소설의 첫 머리에서 서술하고 있는 것이다.

소세키는 『풀 베개』의 마지막 장면을 ‘가장 神에게 가까운 인간의 정’인 ‘아와레’로 끝을 맺고 있다. ‘아와레’는 ‘먼 세계’로 떠나가는 나미의 사촌동생과 전 남편의 가슴속에 자리한 ‘서글픈 소리(悲しい音)’와 반응하여 울리는 나미의 마음의 소리이며, 전 남편에 대한 미움과 원망이 그녀의 마음속에서 반전하는 순간의 낫빛이다.

떠나가는 기차를 바라보며 얼굴 가득히 ‘아와레’를 띠우고 있는 나미의 그 낫빛은 피비우스의 띠처럼 단절된 인과를 이어주고 이항대립적인 세계를 공존과 순환으로 융합시키는 패러독스의 세계이다. 이처럼 소세키의 중용사상은 그 어느 쪽도 배제하지 않고 함께 아우르는 양시론적인 융합의 세계로, 『풀 베개』는 그의 인생철학과 염원을 담고 있는 美学小説이며 思想小説이라 할 수 있을 것이다.

## 【参考文献】

- 텍스트 : 夏目漱石(1979) 『漱石全集第4卷』 岩波書店.  
강현모(2009) 「『나는 고양이로소이다』론」 충남대학교 석사학위논문. p.58-59  
이기동 역(2010) 『대학중용강설』 성균관대학교. p.129  
이기석, 한백우 역(2008) 『논어』 홍신문화사. p.120  
장남호(2011) 『일본 근·현대의 이해』 충남대학교출판부.  
片岡 豊, 小林陽一 編(1990) 『漱石作品論集成 第2卷』 桜楓社. p.212, 214, 219, 242, 243, 245, 249  
夏目漱石(1978) 『漱石全集第2卷』 岩波書店. p.228  
夏目漱石(1979) 『漱石全集第17卷』 岩波書店. p.126  
夏目漱石(1979) 『漱石全集第23卷』 岩波書店. p.138, 158  
夏目漱石(1980) 『漱石全集第34卷』 岩波書店. p.109  
山本勝正(1989) 『夏目漱石文芸の研究』 桜楓社. p.51

## 要 旨

本論文の目的は逆説と兩非論的な観点から作品を分析して、作者漱石が『草枕』を通じて追求している美しさはなんと言うものか、那美さんの顔の一面に浮いている憐れは何を意味しているものか、それを糾明することである。そうすることによって窮極的には漱石が指向している人生の哲学はどんなものなのかを導き出そうと努めた。

本論から考察したように漱石の兩非論は極端的に傾けること、あるいは或一方に片寄ることを否定していると察知することができた。画工である「余」の旅立ちは山道を上って人情の世界から非人情の世界へ入って行きましたが改めて人情の世界への帰り道は川を沿って水路を利用している。山道から始めて山道で終わる直線往復がなくて、山道で入って水路に遠回りする循環の輪を作っている画工の旅程はまさにメビウスの環を象徴している。

海と陸の共存する海辺に位置している那古井が『草枕』の舞台として設定している。また画工の胸中の画面が成就した場所もやはり出会いと別れ、遠い世界と現在の世界が共存するプラットフォームを設定している。これは中庸思想を象徴的に描写する方法として、漱石の意図的な設定だと考えられる。

漱石は『草枕』を通じて追求されている窮極の美は二項対立的な二つの世界の間置きの位置から両方を共に合わせる中庸の美とすることを明確に現しているのである。そして漱石は最も中庸的なイメージの木瓜の花に最上の値を与えている。従ってそれは漱石の中庸的な人生の哲学から起因していることだと言える。

遠ざかって行く汽車を茫然として見送りながら顔一面に浮いている那美さんの憐れな顔色はメビウスの環のようにもう既に切りかかっている因果を繋げて呉れながら二項対立的な世界を共存と循環として融合させるパラドックスの世界であるのだ。この様に漱石の中庸思想はそのどちらも排除しない兩是論的な融合の世界であり、『草枕』は漱石の人生哲学と念願が盛り込んでいる美学小説であり、思想小説だと言えるだろう。

キーワード：夏目漱石、草枕、非人情、中庸、兩非論、兩是論、木瓜、憐れ、メビウスの環、共存

투 고 : 2011. 8. 31  
1차 심사 : 2011. 9. 10  
2차 심사 : 2011. 10. 1



# 『히카루의 바둑』 과 일본의 바둑 문화\*

김 청 균\*\*

(e-mail : kgsiga321@hanmail.net)

---

## 目 次

---

1. 서론
  2. 혼인보와 일본의 바둑 전통
  3. 후지와라노 사이의 조형의 의미
  4. '신의 한 수'와 바둑의 국제화
  5. 결론
- 

## 1. 서론

홋타 유미(ほったゆみ) 원작, 오바타 다케시(小畑健) 그림, 우메자와 유카리(梅沢由香里) 감수의 『히카루의 바둑(ヒカルの碁)』은 일본의 『주간 소년 점프(週刊少年ジャンプ)』에 1998년 12월부터 2003년 4월까지 연재되어 크게 히트한 만화이다. 단행본으로는 1999년 4월부터 2003년 9월에 걸쳐 슈에이샤(集英社)에서 점프 코믹스판(ジャンプ・コミックス版)이 전23권으로 간행되었으며, 2009년 2월부터 2010년 4월에 걸쳐서는 슈에이샤에서 완전판 전20권이 간행되었다. 『히카루의 바둑』은 애니메이션으로도 제작되어 일본의 TV도쿄(テレビ東京) 계열에서 2001년 10월부터 2003년 3월까지 절찬리에 방영된 바 있다. 그리고 이 만화와 애니메이션은 한국어, 영어, 중국어를 비롯한 여러 언어로 번역, 소개되

---

\* 이 논문은 2011년 정부(교육과학기술부)의 재원으로 한국연구재단의 지원을 받아 수행된 연구임 (KRF-2007-362-A00019)

\*\* 고려대학교 일본연구센터 HK연구교수

1) 만화 『히카루의 바둑(ヒカルの碁)』은 점프 코믹스판의 한국어 번역본이 『고스트 바둑왕』이라는 제목으로 2003년 3월부터 2003년 9월에 걸쳐 전23권으로 서울문화사에서 출판되었다. 그리고 2011년 4월에는 완전판 전20권 중 제1권의 한국어 번역본이 『히카루의 바둑』 완전판 제1권으로 각각

어 인기를 끌었다. 그런데, 이 작품은 단순히 대중적인 인기를 모으기만 한 것이 아니라, 일본 바둑의 여러 측면을 담고 있다. 그러므로, 이 작품에 대하여 바둑관을 비롯한 바둑 문화 등을 시야에 넣은 깊이 있는 고찰이 필요하다고 생각된다.

『히카루의 바둑』에 관한 서적으로는 히카바둑연구회(ヒカ碁研究会)의 『『히카루의 바둑』의 비밀(『ヒカルの碁』の秘密)』, 이시쿠라 노보루(石倉昇)의 『히카루의 바둑 승리학(ヒカルの碁勝利学)』, 요시다 나오키(吉田直樹)의 『아이를 키우는 바둑학력-『히카루의 바둑』으로 시작하는 교육술-(子供を育てる碁学力-『ヒカルの碁』から始める教育術-)』 등이 있다. 히카바둑연구회의 『『히카루의 바둑』의 비밀』은 히카루(ヒカル), 사이(佐為), 아키라(アキラ) 등, 『히카루의 바둑』에 등장하는 인물의 캐릭터에 대한 의견을 제시하고 있으며<sup>2)</sup>, 이시쿠라 노보루의 『히카루의 바둑 승리학』은 『히카루의 바둑』의 내용 소개와 함께 바둑이 강해지는 방법에 대해 말하고 있다<sup>3)</sup> 그리고 요시다 나오키의 『아이를 키우는 바둑학력-『히카루의 바둑』으로 시작하는 교육술-』은 바둑의 교육적 효용을 설명하고 있는데, 이 책의 권말(卷末)에는 『히카루의 바둑』의 원작자 홋타 유미와 감수자 우메자와 유카리의 특별 대답이 마련되어 두 사람이 『히카루의 바둑』을 비롯한 바둑에 대한 의견을 나누고 있다<sup>4)</sup> 그 외에 미즈구치 후지오(水口藤雄)는 일본 바둑사의 여러 사실을 소개하고 있는 『바둑의 문화지(囲碁の文化誌)』에서 『히카루의 바둑』으로 시작된 바둑 붐에 대해 언급하여 “지금이야말로 붐에 도취되어 있을 것이 아니라 확실한 뒷받침이 중요하다”<sup>5)</sup>라고 지적하고 있다. 한국의 정수현은 『바둑학개론』에서 『히카루의 바둑』이 영상화된 대본을 바둑 희곡의 예로 들어 바둑문학의 장(章)에서 소개하였다<sup>6)</sup>

이상, 『히카루의 바둑』에 관한 관련 서적을 개관하였으나, 이들 서적은 바둑 전반에 대한 이해를 도울 목적으로 저술된 것이 대부분으로 『히카루의 바둑』이란 작품에 관한 본격적인 연구는 그다지 행해지지 않은 실정이다.

본고에서는 이러한 현상에 문제의식을 가지고 『히카루의 바둑』을 일본의

---

서울문화사에서 간행됨으로써 완전판 또한 한국어로 번역, 출판되기 시작하였다. 완전판의 한국어 번역본은 2011년 8월 현재, 제8권까지 서울문화사에서 간행된 상태이다.

그리고, 애니메이션 『히카루의 바둑(ヒカルの碁)』의 한국어판은 『고스트 바둑왕』이라는 타이틀로 2004년 6월부터 12월까지 KBS 제2TV에서 방영된 바 있다.

2) 히카바둑연구회 『『ヒカルの碁』の秘密』データハウス, 2002, pp.1-217

3) 石倉昇 『ヒカルの碁勝利学』集英社インターナショナル, 2002, pp.1-207

4) ほったゆみ・梅沢由香里 「特別対談：子どもたちに伝えたい〈碁〉の魅力」, 吉田直樹 『子供を育てる碁学力-『ヒカルの碁』から始める教育術-』集英社, 2009, pp.165-180

5) 水口藤雄 『囲碁の文化誌』日本棋院, 2002, p.199

6) 정수현 『바둑학개론』에듀컨텐츠, 2011, p.89

바둑 문화와 관련시켜 고찰하고자 한다. 고찰을 통하여 이 작품은 일본 바둑의 전통을 찬미하고 바둑을 도(道)의 추구라는 관점에서 파악하고 있음을 입증하고자 한다. 또한 바둑의 국제화에 대해 이 작품이 취하고 있는 입장에 대해서도 분석하고자 한다. 아울러 본고에서 『히카루의 바둑』의 텍스트로서는 슈에이샤 간행 『히카루의 바둑』 완전판 전20권7)을 사용하였음과, 일본어 문헌으로부터의 인용 시 한국어역은 모두 본고의 필자에 의함을 밝혀 둔다.

## 2. 혼인보와 일본의 바둑 전통

『히카루의 바둑』에는 여러 인물이 등장한다. 이 작품은 신도 히카루(進藤ヒカル)가 프로 기사(棋士)로 성장해 가는 과정을 중심으로 이야기가 전개되고는 있지만, 작품 내에는 히카루 이외에도 여러 기사들이 등장하고 있다. 본 장에서는 작품 해석을 위해서 구와바라 혼인보(桑原本因坊)의 조형의 의미를 중심으로 일본의 바둑 전통에 대하여 고찰하고자 한다.

그 고찰의 시작으로 우선 이 작품의 등장인물의 모델에 대하여 살펴보고자 한다. 『히카루의 바둑』의 등장인물 중 시라카와 7단, 구라타 7단의 모델에 관하여는 이시쿠라 노보루가 그 모델을 추정한 바 있다. 이시쿠라에 의하면 시라카와 7단의 모델은 이시쿠라 노보루 자신이며<sup>8)</sup>, 구라타 7단의 모델은 요다 노리모토(依田紀基)라고 한다<sup>9)</sup> 작중 인물 시라카와 7단과 실제 인물 이시쿠라는 그 용모가 유사할 뿐만 아니라, 바둑 보급에도 힘을 쏟고 있는 중견 기사라는 공통점을 가지므로 시라카와 7단의 모델이 이시쿠라 자신이라는 견해는 수긍이 간다. 그리고, 이시쿠라가 구라타 7단의 모델이 요다 노리모토라는 근거로 들고 있는 것은 “풍채 좋은 풍모”<sup>10)</sup>와 “천진난만한 성격”<sup>11)</sup>인데 이 또한 수긍할 만하다.<sup>12)</sup>

7) ほったゆみ 原作・小畑健 画 『ヒカルの碁』 完全版 全20巻, 集英社, 2009-2010

(이하, 본고에서 텍스트로부터의 인용 시 텍스트의 권수와 출판년도, 페이지수를 본문 중 괄호 안에 표기하기로 한다.)

8) 石倉昇 『ヒカルの碁勝利学』, p.6

9) 石倉昇 『ヒカルの碁勝利学』, pp.73-74

10) 石倉昇 『ヒカルの碁勝利学』, p.73

11) 石倉昇 『ヒカルの碁勝利学』, p.73

12) 요다 노리모토는 1966년 일본 홋카이도(北海道) 출생으로 1980년에 프로 기사가 되었다. 1996년에는 세계 기전(棋戦)인 삼성화재배 제1회 대회에서 우승하였고, 2000년에 일본의 3대 기전 중 하나인 명인(名人) 타이틀을 차지하고 이후 4연패(連覇)하는 등 일본의 정상급 기사로 군림한 바 있다. 신인 시절에는 이창호의 라이벌 기사로 간주되어 한국의 바둑 팬들에게도 널리 알려진 기사이다.

그런데, 이 작품에서 시라카와(白川) 7단, 구라타(倉田) 7단 이외에 모델을 추정할 수 있는 등장인물로 구와바라 혼인보(桑原本因坊)를 들 수 있다. 그는 후지사와 히데유키(藤沢秀行)<sup>13)</sup>를 연상시키는 인물이라고 생각된다. 『히카루의 바둑』의 구와바라 혼인보와 일본 바둑계의 실존 인물인 후지사와 히데유키는 고령(高齡)에도 빅 타이틀을 청년 및 중년 기사들로부터 방어하는 괴력의 소유자라는 점에서 공통되기 때문이다. 이 점을 설명하기 위하여 일본 바둑계의 타이틀에 대해 살펴 볼 필요가 있다.

현재, 일본 바둑계에는 여러 타이틀이 있는데, 그 중에서도 신문사가 주최하는 7개의 바둑 타이틀전을 통상 7대 기전(棋戰)이라 한다. 7대 기전은 우승 상금 순으로 기성전(棋聖戰), 명인전(名人戰), 혼인보전(本因坊戰), 십단전(十段戰), 천원전(天元戰), 왕좌전(王座戰), 기성전(碁聖戰)<sup>14)</sup>이며, 이 7대 기전의 타이틀 보유자는 각각 기성(棋聖), 명인, 혼인보, 십단, 천원, 왕좌, 기성(碁聖)으로 불린다. 이 7대 기전 중에서도 특히 우승 상금이 여타 기전에 비해 월등히 큰 기성전(碁聖戰), 명인전, 혼인보전은 3대 기전이라 일컬어진다. 이 3대 기전의 도전기(挑戰棋)는 일본의 여타 기전의 도전기와는 달리 7번 승부로 결정되며, 도전기의 매 대국(對局)은 이틀에 걸쳐 두어진다. 이 3대 기전에는 상금 면으로나, 타이틀전의 격식 면으로나 최대의 권위가 부여되고 있으므로 그 타이틀 보유자가 되는 것은 일본의 프로 기사에게는 최고로 영예로운 일이라 할 수 있다.

그리고, 3대 기전 중 기성전은 최고의 우승 상금에 빛나는 랭킹 1위 타이틀로 평가되는데, 1977년 제1기 기성에 오른 이가 바로 후지사와 히데유키로 그는 이후 1982년까지 기성전 6연패(連覇)를 달성하였다.<sup>15)</sup> 후지사와는 1925년생인 바, 그의 나이 52세에서 57세에 이르는 시기에 기성의 자리에 있었던 것이 된다. 특이한 점은, 후지사와는 기성에 올라 있던 시기에 여타 기전에서 이렇다 할 타이틀을 획득하지 못하였다는 점인데, 그럼에도 불구하고 기성전 도전기에 있어서만큼은 괴력을 발휘하여 무려 6연패를 달성하였던 것이다.

이렇게 52세에서 57세에 이르는 고령의 시기에 달성한 기성전 6연패라는 기록 외에도 후지사와는 놀라운 기록을 가지고 있다. 그것은 1991년에서 1992년

13) 후지사와 히데유키는 1925년 일본 요코하마시(横浜市)에서 출생하였고, 1940년에 프로로 입단하였다. 1960년대에는 사카다 에이오(坂田栄男)와 함께 일본 바둑계를 대표하는 기사로 평가되었으며, 1977년에 일본 바둑계의 최대 타이틀 기성(碁聖)을 차지하고 이후 6연패(連覇)를 달성하였다. 1991년에는 왕좌 타이틀을 획득하여 1992년까지 2연패하기도 하였다. 2009년 별세하였다.

14) 일본의 기전(棋戰) 순위는 상금 순으로 평가된다. 일본의 랭킹 1위 타이틀전인 기성전(碁聖戰)과 랭킹 7위 타이틀전인 기성전(碁聖戰)은 한국어 발음으로는 같고, 한자(漢字)만 다르나, 한국의 바둑계에서는 두 기전 공히 기성전이라 불리고 한자만으로 구분되어 왔으므로 이에 맞추어 표기하였다.

15) 주13) 참조.

까지 왕좌 타이틀을 2연패한 기록<sup>16)</sup>인데, 후지사와는 67세에 일본의 7대 기전 중 하나인 왕좌 타이틀을 보유하고 있었던 것으로 이는 일본에서 최고령 타이틀 보유 기록이다.

『히카루의 바둑』에 등장하는 구와바라 혼인보는 오가타(緒方) 9단, 구라다 7단 등 떠오르는 젊은 기사를 연속해서 도전자로 맞아 혼인보 타이틀을 방어한다. 고령에도 불구하고 빅 타이틀을 방어한다는 점에서, 50대 시절에 기성전 6연패를 달성하였고, 67세에도 왕좌 타이틀을 보유하고 있었던 후지사와를 떠올리게 한다.

『히카루의 바둑』 완전판 제18권에서 구와바라 혼인보는 미즈누마(水沼)라는 기사와의 대국에서 패한 후, “지금 나는 체력을 비축하고 있네. 한 달 뒤에 시작될 혼인보 도전기를 위해서”, “혼인보전 7번 승부에 전심전력을 다하고 있는 거야. 나는”(『ヒカルの碁』完全版 第18卷, 2010, p.199)이라고 말하는데 이는 후지사와가 기성에 올라 있던 시절 혼신의 힘을 다해 기성 타이틀을 방어해 내곤 하였던 것을 연상시킨다.

이제 이러한 점을 염두에 두면서 구와바라 혼인보의 조형의 의미에 대하여 생각해 보기로 하자.

구와바라 혼인보는 고령에도 불구하고 빅 타이틀을 방어한다는 점에서 후지사와를 연상시키는 인물이지만, 『히카루의 바둑』의 구와바라 혼인보와 실제 인물 후지사와 간에는 결코 간과할 수 없는 큰 차이점이 존재한다. 그것은 실제 인물 후지사와가 사력을 다해 방어해 내는 타이틀이 랭킹 1위 타이틀인 기성인데 대하여 구와바라 혼인보가 사력을 다해 방어해 내는 타이틀은 랭킹 3위 타이틀인 혼인보라는 것이다. 실제 인물 후지사와가 랭킹 1위 타이틀의 방어에 절대적인 집념을 보였던 것은 쉽게 납득할 수 있는 일이다. 그런데, 이에 대하여 구와바라 혼인보가 랭킹 3위인 혼인보 타이틀을 혼신의 힘을 다하여 방어해 낸다는 작중 설정이 가지는 의미는 어떤 것일까?

그 의미에 있어 고찰의 실마리를 던져 주는 대목을 『히카루의 바둑』 완전판 제7권에서 찾을 수 있다. 히카루가 일본기원(日本棋院)의 원생(院生)<sup>17)</sup>이던 시절 히카루를 포함한 여러 원생들이 일본기원 건물 안의 엘리베이터 앞에서 구와바라 혼인보와 우연히 마주친다. 원생들은 구와바라 혼인보에게 인사를 하지만, 히카루는 구와바라 혼인보가 어떤 사람인지도, 혼인보라는 명칭의 의미

16) 주13) 참조.

17) 일본기원(日本棋院)에서는 프로 기사를 지망하는 소년, 소녀를 ‘원생(院生)’으로 받아 바둑에 정진하게 하고 있다. 원생끼리의 연간 대국(対局) 성적이 상위에 오른 이들은 프로 입단 시험을 치를 자격이 주어진다. 일본기원의 원생 제도와 유사한 제도로 한국기원(韓國棋院)에는 연구생 제도가 있다.

도 모르므로 구와바라 혼인보를 그냥 지나친다. 이 때 원생 중 한명인 나세(奈瀬)가 히카루에게 “혼인보라는 것은 아주 옛날부터 바둑이 센 사람이 이어 받은 이름이야. 그것이 쇼와(昭和)시대가 되고나서 혼인보전이라는 것이 만들어져서 말이지. 우승한 사람을 혼인보라 칭하게 된 거야. 지금은 기성전(棋聖戰), 명인전……. 여러 타이틀이 있지만, 혼인보전이 가장 역사가 오랜 거야.”(『ヒカルの碁』完全版 第7卷, 2009, p.53) 라고 혼인보에 대하여 설명해 준다.

나세는 혼인보라는 명칭이 가지는 의미를 간단하게 잘 설명하고 있다. 다만, 나세의 설명을 명확히 이해하기 위해서는 혼인보라는 호칭의 유래를 좀 더 상세히 살펴볼 필요가 있다.

혼인보라는 명칭의 유래는 16세기로 거슬러 올라간다. 16세기에서 17세기로 이어지던 시기에 닛카이(日海)라는 바둑 고수가 있었다. 닛카이는 오다 노부나가(織田信長), 도요토미 히데요시(豊臣秀吉), 도쿠가와 이에야스(徳川家康)로 이어지는 패자(覇者)들의 바둑 고문격이었던 인물로 혼인보가(本因坊家)를 창설하게 되며 자신은 혼인보 산사(算砂)라 이름한다. 혼인보의 출현에 대하여는 저명한 일본 바둑사 연구자인 마스가와 고이치(益川宏一)의 견해가 참고가 된다. 마스가와는 교토(京都)의 바둑인들에 관한 기록을 많이 남겼던 야마시나 도키쓰네(山科言経)의 일기인 『도키쓰네경기(言経卿記)』의 기술(記述)을 검토하여 혼인보의 출현은 1594년부터라고 하고 있다!<sup>18)</sup>

에도시대(江戸時代)에 도쿠가와막부(徳川幕府)는 명인기소(名人碁所)<sup>19)</sup>를 설치하는 등, 적극적으로 바둑을 보호, 육성하였다. 이러한 여건 속에 혼인보가를 비롯한 여러 바둑 가문들이 경쟁하며 일본의 바둑은 크게 발전하였다. 혼인보가는 그 발전의 중심에 있는 최고의 명문이었으며 혼인보는 제1세 혼인보 산사 이래 제21세 혼인보 슈사이(秀哉)에 이르기까지 세습되었다. 그리고 혼인보 슈사이의 은퇴 1년 후인 1939년, 신문기전으로 혼인보전이 창설되는 것이다.

혼인보전은 오늘날 일본의 랭킹 3위 기전으로 간주된다. 이는 우승 상금의 순위에 따른 것이다. 그러나, 전통을 생각하면 기성전도, 명인전도 이에 크게 못 미친다. 혼인보전이 1939년에 창설된 데 대하여 기성전과 명인전은 각각 1977년과 1976년에 창설되었다. 뿐만 아니라 혼인보전의 우승자에게 부여되는 혼인보라는 호칭은 바둑 명문 혼인보가를 승계한 인물에게 부여된 호칭이기도 하므로, 그 호칭에는 그야말로 에도시대 이래 일본의 바둑 강자의 승계자라는 의미가 담겨있다 할 수 있다.

이러한 점을 고려하면, 실제 인물 후지사와 히데유키가 기성위를 방어하는

18) 益川宏一 『ものと人間の文化史59 碁』法政大学出版局, 1987, pp.120-123 참조.

19) 명인기소(名人碁所)란 에도시대에 바둑의 실력자에게 부여되었던 직위로, 명인기소는 바둑계를 실질적으로 관할할 수 있었다.

데 전력한 것과 『히카루의 바둑』의 구와바라 혼인보가 혼인보위를 방어하는데 전력한 것은 그 의미가 상당히 대조적이라 할 수 있다. 후지사와 히데유키는 어디까지나 기성위가 당대의 랭킹 1위 타이틀이므로 기성위 방어에 전력을 다하였다고 할 수 있는 데 대하여, 구와바라 혼인보는 혼인보위가 당대의 랭킹 3위 타이틀이기는 하나, 혼인보가 에도시대로까지 거슬러 올라가는 오랜 전통을 자랑하는 호칭이므로 혼인보위 방어에 전력을 다하였다고 할 수 있다.

이상에서 살펴 본 바와 같이 『히카루의 바둑』에서 구와바라 혼인보는 일본의 바둑 전통을 부각시키는 역할을 하고 있다. 즉, 구와바라 혼인보는 일본의 바둑 전통을 표상하는 인물로 조형된 것으로 생각되며, 이러한 점에서 『히카루의 바둑』이 일본의 바둑 전통을 중시하는 입장에서 있음을 파악할 수 있다.

### 3. 후지와라노 사이의 조형의 의미

『히카루의 바둑』의 등장인물 중 가장 이색적인 인물은 후지와라노 사이(藤原佐為)라 할 수 있다. 사이(佐為)는 다른 등장인물과는 달리 히카루에게 빙의한 유령이기 때문이다.

『히카루의 바둑』은 히카루가 할아버지의 다락방에서 오래된 바둑판을 발견하는 것으로 시작된다. 할아버지의 바둑판에 깃들어 있던 유령 사이가 히카루에게 빙의한다. 사이는 헤이안시대(平安時代)에 천황의 바둑사범이었던 인물로 바둑을 두며 행복한 나날을 보내고 있었다. 그러나, 사이는 천황의 또 한 사람의 바둑사범과 대국하게 되고 그 바둑사범의 비열한 행위에 마음이 동요되어 대국에서 지고 오명마저 뒤집어 쓴 채 자살해 버린다. 그리고 오랜 세월이 지나 사이는 에도시대에 슈사쿠(秀策<sup>20</sup>)에게 빙의하고, 다시 현대에는 히카루에게 빙의한다. 히카루를 기사의 길로 인도하는 역할을 하는 것도 사이이므로 사이의 조형의 의미는 작품 이해의 중요한 관건이 된다고 생각된다.

후지와라노 사이는 실제 인물을 모델로 한 것은 아니다. 사이와 유사한 삶을 산 인물을 찾을 수 없기 때문이다. 다만, 사이가 역사적으로 어느 시기의 인물로 볼 수 있는지에 대하여는 연구가 되어 있다. 즉, 사이가 세이쇼나곤(清少納言)과 무라사키시키키부(紫式部)도 바둑을 즐기고 있었다고 궁중에서의 일을 회상하고 있는 것을 근거로 사이가 섬기고 있던 천황이 이치조천황(一條天皇, 재위 986-1011)이라고 히카바둑연구회가 추정 한 바 있다<sup>21)</sup> 히카바둑연구회의 이 분석은 타당하다고 생각된다. 사이는 세이쇼나곤과 무라사키시키키부가 활약하던

20) 슈사쿠에 대하여는 본장에서 소개하기로 한다.

21) 히카바둑研究会 『『ヒカルの碁』の秘密』 p.54

이치조천황 시기, 부연하면, 일본에 귀족문화가 꽃피었던 시기의 인물로 생각된다. 여기에는 분명히 귀족문화를 구성하는 요소의 하나로 바둑이 설정되어 있음을 알 수 있다.

그런데, 작중 인물 사이는 귀족문화가 변영을 구가하던 시기의 인물이기는 하되, 천수(天壽)를 누린 인물은 아니다. 그는 오명 속에 억울하게 죽음을 택한 인물인 것이며, 오랜 세월을 지나 19세기에 슈사쿠에게 빙의한다. 『히카루의 바둑』을 독해하는 데 있어 매우 중요한 포인트가 되는 것이, 왜 사이가 슈사쿠에게 빙의하고 다시 히카루에게 빙의하는가이다.

그 분석을 위하여 우선 실제 인물 슈사쿠는 도대체 어떤 인물인지 잠시 살펴보기로 하자.

슈사쿠는 에도시대 후기의 바둑기사로 1829년 지금의 히로시마현(広島県) 인노시마시(因島市)에서 출생하였다. 아명(兒名)은 구와바라 도라지로(桑原虎次郎)였고, 나중에 이름을 야스다 에이사이(安田榮齋)로 개명하였다가 혼인보가에 입문하여 슈사쿠라는 이름을 부여받았다. 혼인보가에서 그 바둑 실력을 인정받아 혼인보 후계자로 임명되었다. 슈사쿠류 포석(秀作流布石)을 창시하고 어성기(御城碁)<sup>22)</sup> 19연승을 거두는 등 바둑사에 길이 남을 업적을 남겼으나, 1862년 콜레라로 요절하였다.

슈사쿠는 어성기 19연승으로 당대 최고의 기사임을 입증하였고, 이적(耳赤)의 한 수<sup>23)</sup>라는 가히 전설적인 묘수를 남기기도 하였다. 나아가 슈사쿠는 바둑의 역사에 손꼽히는 정상급 실력의 기사로 여겨지고 있다.

물론 역사상의 바둑 최강자가 누구인지 평가하는 것은 결코 용이한 일이 아니다. 기사들에 의해 끊임없이 신수(新手)가 시도되고, 또 기사들이 남긴 기보(棋譜)가 검토, 분석되면서 기사들의 실력이 갈수록 향상되고 있음은 주지의 사실이다. 분명 기사들의 실력은 현대로 올수록 전반적으로 강해졌다고 할 수 있다. 그럼에도 불구하고 과거의 기사들이 남긴 기보를 검토하면 그 실력은 대체로 파악이 가능하다.

그렇다면, 지금의 기사들은 어느 기사가 역사상 최강이라고 보고 있는가? 이에 대하여는 의견이 완전히 일치하지 않는다. 예컨대, 이시쿠라 노보루는 슈사쿠를 역사상 최강의 기사로 꼽으면서 혼인보 도사쿠(道策)<sup>24)</sup>, 그리고 우칭

22) 에도성(江戸城) 안에서 쇼군(將軍)의 임석 하에 두어진 바둑을 가리킨다.

23) 1848년 7월 슈사쿠와 이노우에 인세키(井上因碩)의 대국 시에 두어진 슈사쿠의 묘수. 이 수가 놓이자 이노우에 인세키의 귀가 빨개졌다고 한다.

24) 혼인보 도사쿠는 1645년 지금의 시마네현(島根県) 오다시(太田市)의 야마자키가(山崎家) 출신으로 14세에 제2세 혼인보 산에쓰(算悦)의 문하에 들어갔다. 제3세 혼인보 도에쓰(道悦)에 이어 제4세 혼인보가 되었다. 수 나누기 이론 등 현대에도 통용될 수 있는 바둑 이론을 제시하였고, 단위제(段位制)를 확립하였다. 역대 최강의 기사 중 한 명으로 흔히 평가된다. 1702년 별세하였다.



위안(吳淸源)<sup>25)</sup>을 바둑의 격조를 높인 공로자라 하고 있다<sup>26)</sup> 이에 대하여 조치훈(趙治勳)은 “옛 바둑에 정통한 기사들에게 양케이트를 한다면 우선 역사상 넘버원은 도사쿠일 것”<sup>27)</sup> 이라고 하면서도 한편으로 “옛날의 역대 명인보다 현대의 챔피언 쪽이 분명히 강하다”<sup>28)</sup>고 한다. 한편, 문용직은 바둑의 패러다임을 바꾼 이로 17세기의 도사쿠, 그리고 20세기 초의 우칭위안과 기타니 미노루(木谷実)<sup>29)</sup>를 들며, 도사쿠는 바둑에 구조주의 패러다임을 제시하였고, 우칭위안과 기타니 미노루는 중앙을 중심으로 하는 구조를 재발견하였다고 한다<sup>30)</sup>

이와 같이 역사상 최강의 기사를 한 명만 꼽으라면 흔히 도사쿠, 슈사쿠, 우칭위안 등이 거명되며, 현대의 기사 쪽이 세다는 견해도 있는 실정이다. 그렇기는 하되 슈사쿠의 바둑 실력이 역사상 정상급에 속한다는 점에는 이견의 여지가 없는 것으로 보인다.

이와 관련하여 『히카루의 바둑』에는 주목되는 장면이 있다. 노년의 바둑교실 수강생에게 “바둑의 역사상 가장 센 사람은 누구입니까”(『ヒカルの碁』完全版 第1巻, 2009, p.52) 라는 질문을 받은 시라가와 7단이 ‘어느 기사가 그런 질문을 기자에게 받은 적이 있다’고 하며 “질문을 받은 기사는 곧 바로 이렇게 답했습니다. 에도시대의 ‘혼인보 슈사쿠’라고요”(『ヒカルの碁』完全版 第1巻, 2009, p.53) 라고 답하는 장면이다. 『히카루의 바둑』은 슈사쿠를 역사상 최강의 기사로 보는 입장에서 이야기가 전개된다 할 수 있다.

그런데, 『히카루의 바둑』에는 사이가 슈사쿠에게 빙의한 것과 관련하여 결코 간과할 수 없는 설정이 존재한다. 사이는 히카루에게 빙의하여 “아이는 기사를 목표로 하고 있었기 때문에 기꺼이 나를 받아들였습니다. 그리고 나는 나 자신이 원하는 대로 바둑을 둘 수 있었습니다. 어성기를 두는 제1인자가 된 그는 불행하게도 전염병에 걸려……. 그의 이름은 혼인보 슈사쿠”(『ヒカルの碁』完全版 第1巻, 2009, p.53) 라고 자신이 슈사쿠에게 빙의하였던 시절을 회상하

25) 우칭위안은 1914년 중국 푸젠성(福建省) 출신으로 1928년 도일(渡日)하였다. 1933년에 기타니 미노루와 함께 ‘신포석’을 창시하였다. 1933-34년에 기타니 미노루와의 10번 승부에서 승리한 것을 시작으로 이후 1956년에 이르기까지 당대의 대표적인 기사들과의 10번 승부에서 승리함으로써 당대 최고의 기사로 군림하였다.

26) 石倉昇 『ヒカルの碁勝利学』, p.98

27) 趙治勳 『地と模様を越えるもの-趙治勳の囲碁世界-』 河出書房新社, 1999, p.123

28) 趙治勳 『地と模様を越えるもの-趙治勳の囲碁世界-』, p.127

29) 기타니 미노루는 1909년 일본 고베시(神戸市) 출생으로 1924년에 프로 기사가 되었다. 1933년에 우칭위안과 함께 ‘신포석’을 창시하였다. 1957-58년에 최고위 우승 등의 우승 경력이 있다. 기타니 도장을 운영하며 그 제자로 오타케 히데오(大竹英雄), 다케미야 마사키(武宮正樹), 고바야시 고이치(小林光一), 조치훈 등 일본 바둑계의 정상에 올랐던 기사들과 한국 바둑의 대표적 기사인 조남철(趙南哲), 김인(金寅) 등을 양성한 공로도 크다. 1975년 별세하였다.

30) 문용직 『바둑의 발견』 도서출판 부키, 1998, p.34

여 말하고 있는데, 이는 사이가 슈사쿠에 빙의하여 원하는 대로 마음껏 바둑을 둘 수 있었다는 것으로 사실상 슈사쿠가 둔 바둑은 사이가 둔 바둑과 다름없다는 것이다. 즉, 슈사쿠의 바둑 실력은 실은 사이의 바둑 실력이라고 말하고 있는 것이다.

물론 이는 어디까지나 『히카루의 바둑』에서의 설정이며 슈사쿠에게 유명이 빙의하는 따위의 일은 존재하지 않았다. 슈사쿠의 바둑실력은 어디까지나 슈사쿠 본인의 바둑 실력인 것이다. 그런데도 이 만화에서 사이가 슈사쿠에 빙의하여 바둑을 두었다고 설정되어 있는 것은 사이라는 인물의 바둑 실력이 바둑 역사상 정상급임을 말하기 위한 것으로 볼 수 있다.

여기서 사이가 히카루에게 빙의한다는, 이 작품의 또 하나의 설정에 대하여 살펴보기로 하자. 사이가 히카루에 빙의한 동기에 대하여는 『히카루의 바둑』의 초반부에 사이가 그 이유를 명확히 밝히고 있다. 즉, “나에게 빙의한 것은 아직 바둑을 두고 싶어서야?”(『ヒカルの碁』完全版 第1卷, 2009, p.22) 라고 그 이유를 묻는 히카루에게 사이는 “왜냐하면 나는 아직……신(神)의 한 수를 체득하지 못했으니까”(『ヒカルの碁』完全版 第1卷, 2009, pp.22-23)라고 대답하는 것이다. 신의 한 수를 체득하기 위하여 사이는 히카루에게 빙의하였다는 것이다.

슈사쿠는 역사상 최강의 기사인 한 명으로 이적(耳赤)의 한 수와 같은 경이로운 수를 구사할 수 있는 인물, 신의 한 수에 가장 가까운 한 수를 구사한 인물이라고 볼 수 있다. 그러나, 그의 수가 신의 한 수의 수준에 이르렀다고는 말할 수 없다. 이 작품에서는 사이가 슈사쿠에 빙의하여 신의 한 수에 근접한 수를 구사한 것으로 해석된다. 그러나, 그 수가 신의 수준의 수이지는 못한 때문에 사이는 그 수를 추구하고자 슈사쿠에 이어 히카루에 빙의하게 되는 것이다. 이는 사이가 신의 한 수를 추구하는 도정(道程)에 있는 인물임을 나타내고 있다. 그리고 사이가 이렇게 신의 한수를 추구하는 도정에 있는 인물임을 효과적으로 표현하기 위하여 이 작품에는 역사상 최강의 기사인 한 명이라 할 수 있는 슈사쿠에게 사이가 빙의한다는 설정이 행해진 것으로 생각된다.

#### 4. ‘신의 한 수’와 바둑의 국제화

전장(前章)에서는 사이가 신의 한 수를 추구하는 인물임을 파악하였고, 사이가 슈사쿠에게 빙의하고 다시 히카루에게 빙의하는 것은 바로 그 신의 한수를 추구하기 위함임을 파악하였다.

그런데, 신의 한 수를 추구하는 것은 사이만이 아니다. 이시쿠라 노보루가

지적이고 있는 바와 같이 이 작품에는 신의 한 수를 추구하는 인물이 여럿 등장한다.<sup>31)</sup> 그러나 이시쿠라는 이러한 지적은 하면서도 이러한 인물들이 등장하는 의미에 대한 분석은 시도하고 있지 않다. 본장에서는 이들 인물들의 등장이 의미하는 바에 대해 분석하고, 나아가 국제화시대의 바둑이 어떻게 그려지고 있는지에 대하여 고찰하고자 한다.

이 작품에서 사이와 더불어 신의 한 수를 추구하는 대표적인 인물로는 도야 명인(塔矢名人)을 들 수 있다. 이 만화의 초반부에는 히카루와 함께 바둑교실에 다니는 어느 아주머니가 텔레비전의 천원전 중계를 시청하며 대국자 중 한 사람인 도야 명인에 대하여 “도야 명인, 이 사람 ‘신의 한 수에 가장 가까운 사람’이라고들 해요”(『ヒカルの碁』完全版 第1卷, 2009, p.57)라고 히카루에게 말하는 장면이 있다. 이 말을 들은 사이는 도야 명인에 대하여 “나와 마찬가지로 신의 한 수를 체득하려는 이”(『ヒカルの碁』完全版 第1卷, 2009, p.58)라고 생각한다. 도야 명인은 바둑 팬들에게 신의 한 수를 추구하는 사람으로 인식되고 있을 뿐 아니라 사이에게는 신의 한 수를 추구하는 이라는 동류의식을 가지게 하는 인물이다. 또한, 도야 명인은 사이와의 인터넷 대국에서 패한 후에 사이와의 재대국을 염원하게 되는데, 이는 사이가 구사하는 수가 신의 한 수에 가깝다고 느꼈기 때문이라고 여겨진다. 이 작품에서 도야 명인은 사이의 라이벌적 위치를 점하면서 신의 한 수를 추구하는 인물로 그려져 있다.

또한 신의 한 수를 추구하는 인물로는 히카루와 그의 동갑내기 라이벌 아키라(アキラ)를 들 수 있다. 아키라는 사이가 히카루에 빙의하여 아키라 자신과 둔 대국을 잊지 못한다. 그 바둑 내용에 압도된 아키라는 후일 “신도 히카루, 내가 목표로 하는 신의 한 수는 너를 추격하는 그 앞쪽에 있다”(『ヒカルの碁』完全版 第2卷, 2009, p.117)고 되된다. 한편, 히카루는 차츰 바둑에 정진해 프로기사가 되고, 그 모습을 지켜보는 사이는 “히카루가 신의 한 수에 이어지는 길을 내딛는다.”(『ヒカルの碁』完全版 第13卷, 2009, p.70)고 느낀다. 그리고 프로기사가 된 히카루는 아키라에게 “신의 한 수는 내가 체득하겠다.”(『ヒカルの碁』完全版 第17卷, 2010, p.77)라고 선언하기까지 한다. 히카루와 아키라는 동갑내기 라이벌로 서로를 의식하며 성장해 가는데, 이 두 인물에게는 신의 한 수를 체득하겠다는 공통의 목표가 있다.

그런데, 위에서 살펴 본 사이, 도야 명인, 히카루, 아키라 등의 등장인물들이 신의 한 수를 추구하는 것은 어떠한 사고(思考)가 바탕이 되어 있는 것일까? 그 사고방식을 단적으로 보여주는 부분이 이 작품 내에 존재한다. 다음을 보기로 하자.

31) 石倉昇 『ヒカルの碁勝利学』, p.16

바둑판에는 9개의 성점(星点)이 있지? 여기는 우주야. 거기에 돌을 하나하나 놓는 거야. 별을 하나하나 늘리는 것처럼. 우주를 만들어 가는 거야. 마치 신과 같지. 나는 신이 되는 거야. 이 바둑판 위에서.

(『ヒカルの碁』完全版 第2卷, 2009, p.31)

상기 인용은 히카루가 가가 데쓰오(加賀鉄男)라는 인물에게 하는 말이다. 이 인용에서 히카루가 말하듯이 바둑판에는 9개의 성점이 있다. 바둑판은 가로 19줄, 세로 19줄로 그어져 각 줄의 교차점이 되는 361개의 점이 존재하며, 바둑에서 착수할 수 있는 곳은 이들 361개의 점인데, 그 중 9개의 점은 성점이라 한다. 특히 이들 9개의 점 중에서도 바둑판의 정중앙(正中央)에 위치하는 점은 천원(天元)이라 한다. 성점이라는 용어는 바둑판에 돌이 놓이는 9개의 점을 별에 비유한 것이며, 천원은 글자 그대로 하늘의 중심이라는 뜻으로 이들 용어로부터 바둑판 자체가 우주에 비유되고 있음을 알 수 있다. 여기에서 중요한 것은 이러한 바둑 용어를 근거로 전개되는 히카루의 논리이다. 히카루는 바둑을 두는 행위 자체가 우주를 만들어 가는 행위라는 것이며, 바둑의 세계는 우주의 질서와 연결되는 바가 있다는 논리를 펼치는 것이다.

이러한 히카루의 논리는 신의 한 수를 추구하는 이들의 논리에 잇닿아 있다고 생각된다. 바둑에는 우주의 섭리가 담겨 있으며, 최고의 바둑은 신의 영역에 속한다는 것이다. 바둑에서 최선의 한 수, 한 수를 두어나가는 것은 결국 우주의 궁극의 진리를 추구하는 것과 다를 바 없으며, 여기에는 바둑의 세계가 궁극의 도(道)에 통하는 바가 있다는 사고가 내포되어 있다. 요컨대 『히카루의 바둑』에서 바둑에의 정진은 곧 도의 추구를 의미하는 것이다.

이 만화에는 일본의 바둑 문화가 분명하게 반영되어 있다. 이 작품에서 후지와라노 사이라고 하는 헤이안시대의 기사는 주인공 히카루에게 빙의하여 그를 기사의 길로 이끈다. 또, 후지와라노 사이는 에도시대의 천재 기사, 슈사쿠에도 빙의한 것으로 그려져 있다. 이 작품에서는 사이라고 하는 인물에 의해 일본 바둑의 현재와 과거가 연결된다. 헤이안시대에 사이가 즐긴 바둑은 에도시대에 발전을 계속하여 슈사쿠와 같은 대기사가 나타났다. 또, 바둑은 현재 히카루와 같이 당대의 많은 사람들이 즐기고 있다. 바둑은 헤이안시대에도, 에도시대에도, 그리고 현재에도 많은 사람이 즐기고 있음이 이 작품 내에는 묘사되어 있으며, 여기에 표현된 것은 일본의 바둑 전통이다. 일본은 오랜 바둑 전통을 가진 나라이며, 특히 에도시대 이후, 일본은 독특한 바둑 문화를 낳았고 현대의 일본 바둑은 그 발전의 토양 위에서 성립되었다는 것이다. 그리고 그 연속성 상에서 일본의 바둑은 발전해 갈 것이라는 것이다.

이렇게 일본의 바둑이 발전해 왔고, 또 앞으로도 발전해 가리라는 사실은 다음에 압축적으로 나타나 있다.

나는 히카루를 위하여 존재했다. 그렇다면, 히카루도 또한 누군가를 위하여 존재할 것이다. 그 누군가도 또한 다른 누군가를 위하여……. 천 년이, 이천 년이 그렇게 해서 쌓여 간다. 신의 한 수에 이어지는 먼 도정. 나의 역할은 끝났다.(『ヒカルの碁』完全版 第13巻, 2009, pp.137-139)

히카루에게 빙의하였던 후지와라노 사이는 히카루를 떠나 내세로 향하면서 상기 인용과 같이 속으로 생각한다.

헤이안시대의 사이가 슈사쿠에 빙의한 시기를 거쳐 현대에 히카루에게 빙의하기까지는 어언 천 년의 세월이 흘렀다. 천 년 전의 인물 사이는 히카루에 빙의하여 히카루로 하여금 신의 한 수를 추구하게끔 하였다. 그리고 히카루가 축적한 바둑의 한 수, 한 수는 누군가에게 계승되고, 그 누군가의 수는 또 다른 누군가에게 계승되어 갈 것이다. 이러한 과정을 거듭하여 바둑의 수는 신의 영역에 점점 더 근접해 갈 것이다. 사이는 이러한 일종의 깨달음을 얻고 내세로 돌아가게 되는 것이다. 여기에는 신의 한 수에 도달하는 것은 일조일석에 가능한 것도 아니며, 어느 한 명의 특출한 천재에 의해 가능한 것도 아니라는 인식이 담겨 있다.

그런데, 여기서 주의해야 할 것은 상기 인용의 ‘누군가’는 일본인만을 지칭하는 것이 아니라는 점이다. 그 ‘누군가’는 일본인만이 아니라, 한국인, 중국인을 포함하여 바둑을 즐기는 세계 여러 나라 사람을 가리키는 것으로 볼 수 있다.

사이, 히카루, 아키라, 도야 명인 이외에도, 이 작품에는 최선의 한 수를 추구하는 사람들이 여러 명 등장하고 있다. 히카루처럼 프로기사를 목표로 하는 일본의 원생들, 또 한국과 중국과 일본의 신예 기사의 단체전인 북두배(北斗杯)에 출장하는 한중일 3국의 기사들도 모두 최선의 한 수를 추구하는 바, 이들 또한 신의 한 수를 추구하는 인물에 포함되어 있다. 이러한 작품의 전개는, 바둑에 정진하는 것은 일본인뿐만 아니라 한국인, 중국인도 마찬가지라고 하는 점을 보여주는 것이다. 『히카루의 바둑』은 바둑의 추구를 곧 도의 추구로 보는 관점의 작품이며, 이러한 관점은 일본인에게 한정된 것이 아니라 국경을 넘어 많은 사람들이 공유하는 것임을 말하고 있는 것이다.

이 작품은 한중일 3국의 신예 기사의 단체전인 북두배의 이야기로 끝난다. 이것은 1980년대 후반 이후에 국제기전(國際棋戰)이 생겨나 바둑이 국제화시대를 맞이한 것을 반영하는 것이다. 국제기전이 생기기 이전, 일본은 세계 최강의 바둑 강국으로 여겨졌다. 그러나, 국제기전이 창설된 후, 한국과 중국의 프로 기사들은 더욱 더 강해져, 1990년대 중반부터는 한국 기사들이 국제기전의 대부분을 석권하였고, 현재는 한국과 중국의 기사들이 국제기전의 우승을 다투는 형세가 되었다.<sup>32)</sup> 이와 같이 국제기전에서 일본의 기사들이 저조한 성적을 보이고 있는 실정이 반영되어 이 작품에는 한국과 중국의 기사를 이기기

위해서 노력하는 일본의 신예 기사들의 모습이 그려져 있다.

그렇기는 하지만, 『히카루의 바둑』에서 강조되어 표현되고 있는 것은 한중일 3국의 기사들의 바둑에 대한 구도자적 자세이다. 이 작품은 북두배에 출전한 한국의 고영하(高永夏), 일본의 히카루라는 두 기사의 인상적인 대사로 끝맺는다. 다음은 각각 작품 말미 고영하와 히카루의 대사이다.

먼 과거와 먼 미래를 잇기 위해 네가 있다? 우리는 모두 그렇잖아.(『ヒカルの碁』完全版 第20卷, 2010, p.158)

먼 과거와 먼 미래를 잇기 위하여, 그걸 위해 있는 거다. 나는, 우리는, 누구라도.(『ヒカルの碁』完全版 第20卷, 2010, pp.164-165)

북두배의 한일전에서 고영하와 히카루는 주장으로 승부를 겨룬다. 고영하는 접전 끝에 승리한 이후, 바둑을 두는 이유에 대해 히카루가 대국 전에 말하려 했던 것을 상기시키며 그 대답을 구한다. 이에 대해 히카루는 ‘먼 과거와 먼 미래를 잇기 위하여.’ (『ヒカルの碁』完全版 第20卷, 2010, p.155)라고 답한다. 그리고 이 히카루의 대답에 대하여 고영하가 말한 것이 상기 인용의 윗부분의 문장이다. 한편, 상기 인용의 아랫부분의 문장은 히카루가 대국장을 나서면서 마음 속으로 되뇌이는 생각이다. 히카루의 이 생각은 히카루와 원생시절을 함께한 일본의 기사들, 북두배에 출전한 중국의 기사들, 그리고 아키라, 북두배에 출전한 한국기사들, 도야 명인의 모습과 오버랩되면서 떠올려진다.

히카루가 보여주는, 과거와 미래를 연결하기 위하여 바둑을 둔다는 자세는 그야말로 신의 한 수를 추구하는 자세이며, 이는 구도자적 정신을 가지고 바둑을 추구하는 자세이다. 그리고, 이러한 자세는 히카루 뿐만 아니라, 위에서 열거한 모든 기사들에게 공통되는 자세이다. 이 인물들이 바둑을 구도자적 정신으로 대하고 있음이 오버랩 기법을 통하여 제시되고 있는 것이다.

32) 현존하는 국제기전 중 대표적인 기전으로는 비씨카드배 월드바둑챔피언십, LG배 세계기왕전, 삼성화재배 월드바둑마스터즈, 춘란배(春蘭杯) 세계바둑선수권, 세계바둑선수권 후지쓰배(富士通杯), 응씨배(應氏杯) 세계선수권 등을 들 수 있다. 이 중 가장 역사가 오랜 기전으로는 1988년에 창설된 후지쓰배와 1989년 창설된 응씨배를 들 수 있다. 그런 점에서 이들 두 기전에서의 우승자를 살펴보면 세계 최강의 바둑 강국의 흐름을 쉽게 파악할 수 있다. 그런데, 후지쓰배에서는 조치훈을 포함하여 일본에서 활약하는 기사가 우승하는 흐름이 1988년 기전이 출범한 이후 1992년까지 계속되었으나, 1993년 이후는 1997년에 고바야시 고이치가 우승했을 뿐이다. 또, 1989년 출범 이후 4년에 한 번 씩 개최되는 응씨배에서는 일본에서 활약하는 기사들의 우승 경력이 전무하다. 이들 대회에서는 한국 기사들이 가장 많이 우승하였으나, 최근 몇 년 간은 한국 기사들과 중국 기사들이 백중세를 보이고 있다.

## 5. 결론

『히카루의 바둑』에 나오는 가장 중요한 말은 ‘신의 한 수’ 라는 말일 것이다. 이 말에는 바둑의 궁극의 수는 곧 신의 영역에 속한다는 생각이 담겨 있다. 그런데, 이 작품에는 신의 한 수를 즐기차게 추구하는 인물들이 여러 명 등장한다. 후지와라노 사이, 도야 명인, 히카루, 아키라, 히카루와 원생시절을 함께한 일본의 기사들, 북두배에 출전한 한중일 3국의 기사들은 모두 신의 한 수를 추구하는 인물들이다. 이 인물들은 구도자적 정신을 가지고 바둑에 정진하고 있으며, 여기에는 바둑이 궁극적으로는 ‘도’를 추구하는 것과 통한다고 하는 사고가 드러나 있다. 이와 같이 이 작품은 바둑에의 정진은 도의 추구하고 상통하는 바 있다는 바둑관이 그 기저에 자리하고 있다.

또한, 이 작품에는 일본의 바둑의 전통에 대한 긍지와 찬미가 드러난다. 현대 일본의 바둑은 일본의 오랜 전통에 의한 것임을 구와바라 혼인보, 후지와라노 사이와 같은 인물들의 조형을 통하여 그려내고 있다.

나아가, 이 작품은 국제화시대를 맞이한 현대의 바둑을 긍정적으로 그리고 있다. 북두배라는 국제기전에 등장하는 한중일 3국의 신예 기사들의 모습을 통하여 바둑은 이제 국경을 뛰어넘어 수많은 사람들이 공유하고 있고, 후대에도 계속하여 이어질 문화 자산임을 표현하고 있는 것이다.

## 【참고문헌】

- 히카기研究会 『『ヒカルの碁』の秘密』データハウス, 2002  
石倉昇 『ヒカルの碁勝利学』集英社インターナショナル, 2002  
ほったゆみ 原作・小畑健 画 『ヒカルの碁』完全版 全20巻, 集英社, 2009-2010  
水口藤雄 『囲碁の文化誌』日本棋院, 2002  
정수현 『바둑학개론』에듀컨텐츠, 2011  
문용직 『바둑의 발견』도서출판 부키, 1998  
趙治勲 『地と模様を越えるもの-趙治勲の囲碁世界-』河出書房新社, 1999  
ほったゆみ・梅沢由香里 「特別対談：子どもたちに伝えたい〈碁〉の魅力」, 吉田直樹 『子供を育てる碁学力-『ヒカルの碁』から始める教育術-』集英社, 2009  
益川宏一 『ものと人間の文化史59 碁』法政大学出版局, 1987

## 要 旨

ほったゆみ原作、小畑健画、梅沢由香里監修の漫画『ヒカルの碁』はアニメーションとしても製作され、話題になった。ところで、この作品には日本の囲碁文化の様々な側面が描かれている。したがって、この作品は囲碁観をはじめとした囲碁文化などを視野に入れ、考察する必要がある。本稿ではこのような観点から『ヒカルの碁』を日本の囲碁文化と関連させ分析した。

『ヒカルの碁』には〈神の一手〉を追求する人々が登場している。藤原佐為、塔矢名人、ヒカル、アキラ、ヒカルと院生時代をいっしょに過ごした日本の棋士たち、国際棋戦北斗杯に参加した韓国と日本と中国の棋士たちは神の一手を追求する人々である。この人々はまるで求道者のように囲碁に精進している。ここには、囲碁が究極的には〈道〉を追求することと一脈通じるという思考があらわれている。この作品の基底には囲碁への精進は道の追求と一脈通じるという囲碁観がある。

また、この作品には日本の囲碁の伝統への誇りと賛美があらわれている。現代日本の囲碁は日本の長い囲碁伝統によるということが桑原本因坊、藤原佐為のような人物の造型をとおしてよく描かれている。

さらに、この作品は国際時代を迎えた現代の囲碁を肯定的に捉えている。韓国と中国と日本の若手棋士たちをとおして囲碁は、国境を越えて多くの人々に共有され、これから後の世代にも伝えられる文化であることを表現しているのである。

キーワード：『囲碁文化、神の一手、本因坊、道、日本の囲碁の伝統、国際化時代の囲碁

투 고 : 2011. 8. 31  
1차 심사 : 2011. 9. 10  
2차 심사 : 2011. 10. 1



# 시마자키 도손 연구\*

—한국에서 시마자키 도손 연구 성과와 과제 조명Ⅱ—

김희중\*\* · 임성규\*\*\*

(e-mail: josepk04@hanmail.net\*\* · imsung@bu.ac.kr\*\*\*)

---

## 目次

---

1. 서론
  2. 도손의 연구현황
    - 2.1. 단행본·번역본
    - 2.2. 학술논문
    - 2.3. 학위논문
  3. 결론
- 

## 1. 서론

논자는 2005년 『21세기 일본문학연구』에서 「한국에서 도손(藤村) 문학 연구 성과와 과제 조명」이라는 논문을 통해, 한국에서 시마자키 도손의 연구 성과를 조명해보았다.

한국에서 도손의 작품이 소개되고 읽히기 시작한 것은 1970년경부터로 추정된다. 1970년대부터 90년대 초기까지는 『과계』를 중심으로 한 자연주의 문학으로서의 소개로부터 출발했음을 알 수 있다. 90년대 이후 『藤村詩集』 『春』 『家』 등이 텍스트로 읽히면서 번역본으로 출간된다. 단행본의 출간은 1992년 노영희의 『아버지란 무엇인가』를 시작으로 해서, 연구서로서 대학에서 텍스트로 읽혀지는 것이 대부분을 차지하고 있다. 위에서 알 수 있듯이 한국에서

---

\* 본 연구는 2011년도 동남보건대학 연구비 지원에 의하여 수행된 것임

\*\* 동남보건대학 관광영어과 부교수, 일본근·현대문학

\*\*\* 백석대학교 어문학부 일본어학전공 부교수, 일본근·현대문학

일본문학연구는 일본어교육의 일환으로 이루어졌다는 사실이다. 대학에서의 일본어교육은 일본문학 연구보다는 일본어를 수단으로 하여 사회의 요구에 부응하고자하는데 목적이 있었다. 따라서 일본문학은 일본어교육의 교재로서 상당한 진전은 있었지만 순수한 일본문학의 연구자체는 역사가 그리 길다고 할 수는 없다. 그 후 5년이 지난 2010년의 시점에서, 도손 연구 성과를 조사하여, 어떤 방식으로 도손연구가 진행되어, 어떤 문제점을 나타내고 있는가를 데이터를 통해서 정성평가하려는 것이 이 논문의 목적이다. 데이터는 1990년 이후의 도손 연구의 성과를 대상으로 평가하였고, 주로 단행본 번역본 학술논문 학위논문을 대상으로 하였다.

이한섭의 『韓国日本文學關係研究文獻一覽』<sup>1)</sup>은 한국인 연구자들과 한국의 일본인 연구자들의 일본연구 문헌목록을 정리 편집하고 있다. 그는 계속하여서 한국일어일문학연구문헌 검색이라는 데이터베이스를 구축하여 현재에 이르고 있다. 문헌의 수록 대상은 단행본과 학술논문이 주로서, 발표지역은 원칙적으로 한국에서 발표한 것을 대상으로 하고, 한국인이 일본에서 발표한 것도 대상에 포함시켰으며, 일본인이 한국 대학이나 학회지에서 발표한 것도 포함시켰다.

또한 논자는, 1990년 1월 1일부터 2010년 12월 31일 이전의 7(등재후보학회지 이상)개 학회지에 발표된 도손의 논문 편수를 조사했다. 일본학보, 일어일문학연구, 한국일본어문학회, 일본어문학, 일본문화학보, 일어일문학, 동아시아일본학회(일본문화연구)이다. 이상과 같은, 데이터를 참고로 하여 도손의 저서 및 역서의 간행사정, 학술논문 학위논문을 중심으로 한 연구현황 및 성과, 그 문제점 및 과제를 조명하려고 한다.

## 2. 도손의 연구 현황

### 2.1. 단행본 · 번역본

노영희는, 그의 2편의 단행본을 통해 도손의 작품세계를 그의 문학적 주제인 고향과 아버지의 사상으로 가탁하여, 도손 자신의 세계관을 날카롭게 파헤치고 있다. 그리고 도손의 말년의 작품 『순례』 『동방의 문』에서 도손의 도래인의 관심에 주목, 그 중에서도 고구려와 백제 문화, 또한 그곳에서 이주한 도래인에게 깊은 관심을 보였음을 밝혔다. 임성규의 『島崎藤村研究』는, 초기 도손시는 기독교의 영향에서 시작되고, 말년의 미완성 『동방의 문』은 동서양 종교의 습합에 이르기까지 과정을 작가론 작품론 적으로 논하고 있다.

1) 고려대학교출판부, 2000.5

번역본은 도손 초기의 시와 몇 편의 단편집, 그리고 자연주의의 완성이라고 일컬어지는 『과계』 『봄』 정도에 불과하다. 이는 일본자연주의 속에서 도손 작품의 특색이라 할 수 있는 자전적요소가, 집요할 정도로 고백에 몰두하는 도손적 정서가 한국의 독자층에게는 그다지 매력을 불러일으키지 못했다고 할 수 있다. 『동틀 무렵(夜明け前)』 『동방의 문(東方の門)』 등의 서사적인 작품은 소설이전에 일본의 근대를 접근할 수 있는 문화사적 자료로서도 충분한 가치를 지니고 있어서, 번역본도 빨리 나왔으면 하는 마음이다.

### 단행본

- 노영희 『아버지란 무엇인가』 시마자키도송의 문학세계 時事日本語社 서울 1992
- 노영희 『시마자키 도송』 고향과 아버지의 문학적 형상화 건국대출판부 서울 1995
- 임성규 『島崎藤村研究』 도서출판 冠岳社 서울 1996
- 『나쓰메 소세키에서 무라카미 하루키까지』 글로세움, 2003
- 장남호 『일본 근현대문학 입문』 충남대학교 출판부, 2007

### 번역본

- 『집』 노영희 민문고, 1990
- 『일본 名詩選』 종로서적, 1993
- 『폭풍우외 7편』 노영희 도서출판소화, 1996
- 『일본근대대표시선』 「첫사랑」 「여우의 짓」 「치쿠마강 여정의 노래」 유정편역 창작과 비평, 1997
- 『명문으로 읽는 일본문학 일본문화』 「과계」 노영희 외 박이정, 1998
- 『봄』 노영희 도서출판소화, 2000
- 『과계』 노영희 제이앤씨, 2004
- 『과계』 시마자키 도손 장편소설 노영희 문학동네, 2010

## 2.2. 학술논문

학술논문 총계는 115편이 발표되었다. 『도손시집』 9편, 『선잠(うたたね)』 2편, 『旧主人』 5편, 『수채화가』 2편, 『폭풍우(嵐)』 6편, 『과계』 20편, 『春』 5편, 『家』 8편, 『버찌 열매 익을 무렵(桜の実の熟する時)』 6편, 『新生』 14편, 『海へ』 1편, 『동트기 전(夜明け前)』 10편, 『순례』 3편, 『동방의 문(東方の門)』 4편, 문학일반 47편 등이다.

한국에서 도손의 학술논문은, 『과계』 20편, 『春』 5편, 『家』 8편, 『桜の実の熟する時』 6편, 『신생』 14편 등 자연주의 작품연구가 반 정도를 차지하고 있다. 1975년부터 매년 자연주의 관련 논문이 꾸준히 발표되고 있다. 일본에서

자연주의 문학 중 도손이 차지하는 중요성을 생각하면 당연한 결과라고 생각된다. 「과계」에서의 중요 테마는, 출신의 비밀에 대한 우시마츠의 고뇌를 중심으로 한 작가의 의도와 고백의 당위성을 파헤치는 논문이 많다. 또한 크리스티교 사상을 중심으로 「과계」의 종교성의 유무에 논점이 맞추어져있고, 우시마츠의 고뇌에 찬 고백과 한국 작품과의 비교연구도 활발하게 진행되고 있다.

필자는 「과계」가, 고백소설인가 사회소설인가의 문제에서 고찰한 작품자체의 고백구조를 분석하고 있다. 또한, 일본인의 ‘그리스도교를 받아드리는 특수성, 을 지적, 피차별 부락과 크리스찬을 동일시한, ‘蓮太郎의 죽음은, 신념으로 순교한 예수, 베드로 및 바울 등의 죽음과 닮았고, 그의 죽음이 우유부단한 우시마츠에게 고백을 결심하게 하는 계기가 됐다’라고 했다. 야마다(山田ひろし)는 마태복음과의 대조를 재인식하고, 텍사스 행에 대해서는 종교적 결단에 의한 것으로 보고, ‘텍사스는 모세에 인도되어서 모든 고난과 신앙의 갈등을 겪고 목표로 했던 토지, 여호와의 신이 약속한 희망의 땅이라는 가나안의 땅을 상징하고 있다. 이 기본 구조는 기독교의 죽음과 부활의 구체적 의미를 내포하고 있다’<sup>2)</sup>라고 한다.

「春」와 「家」에서는, 근대화의 물결이 급물살을 이루면서 밀려오는 명치 일본에서, 근대 사상과의 갈등에서 상처 입는 젊은 군상과 그것을 잘 이겨내어 현실과 조화를 이루는 군상을 다룬 논문이 주종을 이룬다. 「家」는, 자유에의 갈망, 변동기 사회와 전통가족의 몰락, 「家」에서 아버지의 형상을 파헤치려고 하는 경향이 나타난다. 물론 일본의 <家>와 한국의 <家>와의 대조연구도 관심을 두고 있다.

「桜の実の熟する時」는 이 작품의 집필동기와, 종교소설인가 아닌가에 논점이 집중되어있다.

조카 코마코와 근친상관을 다룬 「新生」은, 작가의 모멸을 둘러싼 죄의식과 죄의식으로부터의 구원, 작가의 예고이즘과 위선의 문제, 「新生」의 고백에 있어서 크리스티교신의 유무, 과연 <신생>하였는가라는 점에 포인트를 둔 논문이 많다.

도손이 완성한 마지막 장편 대하소설 「夜明け前」은, 작품 속에 나타난 근대성 고찰과 국학의 의미, 역사와의 재조명, 모토오리노리나가 죽은 19세기부터를 광의의 근대로 인정하여야 하는가하는 역사의 재편, 한조의 꿈과 환영, 「동트기 전(夜明け前)」의 성립과정과 「동방의 문」으로 연결고리를 발견하는데 논점이 모아지고 있다. 「있는 데로(ありのまま)」와 「솔가지(松が枝)」를 통한 「동트기 전(夜明け前)」검증도 행하여지고 있다. 또한 문학자의 눈에 비

2) 『島崎藤村』Ⅱ 『日本文学研究資料叢書』有精堂、昭和五八年六月刊 p212

친 명치유신의 서술과 연구에도 일익을 담당하고 있다고 하겠다.

도손은, 「순례」 「도손문고」 「잡기장」을 거쳐 미완의 작품 「동방의 문」을 집필, 서장의 부분에서 미완성인 채 인생을 마감한다. 「순례」의 집필과정에서 보인 내셔널리즘에의 경도, 오카쿠라 텐심(岡倉天心)의 일, 요시에 타카마츠(吉江高松)의 일 등 근대의 사상, 철학, 음악, 미술, 문학자를 총동원, 사상의 분열이라고도 말할 수 있는 일본 경도의 경향이 눈에 띈다. 도손의 年譜를 읽어보면 「동방의 문」의 의도를 엿볼 수 있다. 연보를 통한 「동방의 문」에의 접근방식이 시도되고, <동방의 문> 읽기를 통해서 도손문학에 나타난 일본적인 세계를 재조명하려는 작업도 활발하고, 동방에서부터 일본에의 이주자를 통해서 동양에의 비전을 재인식하는 작업도 진행되고 있다.

### 『藤村詩集』

- 최순욱 『藤村詩集』도손의 시연구 日本學報 제74호 1권 2008.2, 201-216
- 최순욱 도손의 詩集 『若菜集』에 나타난 自然觀 ; 「가을바람의 노래」 「과도소리」를 중심으로 日本研究. 제20집 2005, pp.195-209
- 김남경 시마자키 토오송(도기등촌)의 시 「첫 사랑(초련)」의 의미 일본근대문학산책. 제6호 2005, pp.29-33
- 최순욱 島崎藤村의 근대시연구 : 위즈위스의 서정성수용을 중심으로 日語日文學研究. 제55집 2권 2005.1, pp.199-218
- 김용안 시마자키토오송(島崎藤村)의 『새싹집(若菜集)』考; 작품에 나타난 寓意的 구조를 중심으로 근대일본문학산책 4 한국외대일본근대문학회 1997.3 15-28
- 박영준 聖書가 藤村詩에 끼친 影響; 藤村詩集를 中心으로 日本學報 第36輯 韓國日本學會 1996.5, pp.183-204
- 崔海秀 시마자키토오송(島崎藤村)의 시 정신 탐구 日教展望 3 韓國外大教育大学院 1996.4, pp.127-143
- 김현령 日・韓浪漫主義詩の小考; 島崎藤村の「初恋」と金素月の「つつじの花」を中心に 昭和女子大学大学院日本文学紀要7 昭和女子大学大学院 1996.03
- 김용안 島崎藤村の『若菜集』考; 作家가 試圖한 것을 中心으로 漢陽女子專門大學論文集 19 漢陽女子專門大學 1996.2, pp.55-80
- 『うたたね』: 명치30년 2월 5일 「신소설」 제2년 제12호에 발표
- 김정혜 「うたたね」의 近代性 日本語文学 第15輯 日本語文学會 2001.8, pp.9-28
- 김정혜 「うたたね」의 創作背景 比較文化研究12 釜山外國語大學校比較文化研究所 2001.2 ,pp.69-90

『旧主人』: 명치 35년

임태균 시마자키 도손(島崎藤村)의 「옛 주인(旧主人)」론 日本學報 제81호 2009.11, pp.165-178

시마자키 도손의 「옛 주인(旧主人)」 「짚신(藁草履)」에 나타난 여성상 연구 日本學報 제78호 2009.2, pp.145-160

채영임 島崎藤村の初期作品に見る家族の様相 ; 『旧主人』と『藁草履』の天皇描写と関連して 日本文化研究. 제18집 2006.4, pp.359-373

김용안 島崎藤村의 初期 短篇小説 考察 ; 『옛 주인(旧主人)』에 나타난 작가의 실험성을 중심으로 論文集 제21집 漢陽女子專門大學 1998.2, pp.21-52

김정혜 「旧主人」の自然主義的性格とその意味 부산외대문화연구6 1995.2, pp.289-309

『水彩画家』: 명치 37년 1월 1일 「신소설」

김남경 시마자키 도손(島崎藤村)의 「수채화가(水彩画家)」론 ; 장르 의식의 변화를 중심으로 日語日文学研究. 제75집 2권, 2010.11, pp.63-86

김현령 藤村と『水彩画家』 昭和女子大大学院日本文学紀要5 昭和女子大大学院 1994.3

『破戒』: 명치 39년 3월 25일 자비출판 「綠陰叢書」 제1편

姜宇源庸 日露戦後社会における『破戒』と『蒲団』 일본어문학. 제35집 2007.12, pp.395-412

임태균 『과계(破戒)』론 ; 감각표현을 중심으로 日本學報. 제73집 2007.11, pp.211-225

고영란 「部落」表象と総力戦 ; 島崎藤村 『破戒』の受容について 日本學論集. 제20집 2005.12, pp.16-33

최순욱 토오송의 『破戒』 소론 ; 부락민에 관한 차별표현을 중심으로 日本學研究. 제17집 2005. 10, pp.287-308

김용안 시마자키 도송의 자아정체성 찾기 문학 고찰 ; 『과계(破戒)』를 중심으로 日本文化研究. 제15집 2005. 7, pp.59-80

김용안 시마자키 토오송(島崎 藤村) 『과계(破戒)』考察 ; 작가의 作意와 작품 관계를 중심으로 論文集24 漢陽女子大學 2001.2, pp.77-140

안인형; 한유선 『破戒』의 社会性과 作家 藤村의 部落觀 論文集 제30집, 우송정보대학 2001, pp.17-27

김한수 『破戒』에 나타난 ‘家’ 제도 一考 ; 父子關係를 中心으로 日本語文学 第6輯 韓国日本語文学會 1999.3, pp.321- 349

이지형 시마자키 토오송(島崎藤村)의 『破戒』의 주제론 ; 주인공의 내부의식의 대립과 자각을 중심으로 소설의 주제 도출법 博而精 1997.11, pp.103-122

오황선 시마자키도손(島崎藤村)의 「破戒」論 明知專門大學論文集20 明知專門大學 1996.11 pp.93-104

김희중 『破戒』研究 ; 출신의 秘密에 대한 丑松의 高뇌를 中心으로 東南保專論文集13 東南保健專門大學 1996.1, pp.41-56

- 安部和美 藤村の『破戒』の主題について；西欧文学の影響と丑松の意味 日本研究 10 韓国外大日本文化研究所 1995.12, pp.163-192
- 이지형 시마자키 토오송(島崎藤村)의 『破戒』론；사건의 전환점과 근대인의 자각을 중심으로 근대일본문학산책3 한국외대일본근대문학회 1995.5, pp.170-179
- 이종덕 島崎藤村私論；破戒』におけるキリスト教思想を中心に 磁界4 現代文学を読む会 1994.1, pp.21-36
- 박종채 「破戒」小考 古岩黄聖圭博士華甲記念論文集 古岩黄聖圭博士華甲記念論文集刊行委員会 1993.6, pp.279- 303
- 노근숙 『破戒』における魂の苦悩 日本研究8 中央大日本研究所 1993.2, pp.271-285
- 박종채 島崎藤村의 破戒 研究；主人公의 意識構造를 中心으로 教育論叢10 中央大教育大学院 1993.2, pp.189- 204
- 임성규 島崎藤村とキリスト教—『破戒』において基督教の影響— 国学院大学大学院紀要 24 国学院大学大学院 1992.03, pp.251-272
- 한유선 『破戒』論 瑞松李栄九博士華甲記念論叢 瑞松李栄九博士華甲記念論叢刊行委員会 1991.11, pp.569-590
- 이종덕 島崎藤村の『破戒』小考；その宗教的Motivationを中心に 世宗大論文集16 世宗大学校 1990.4, pp.109- 136
- 
- 『春』：명치 41년 4월 7일~8월 19일 「東京朝日新聞」에 연재
- 임태균 시마자키 도손의 『봄』(春)론；'연애'라는 광기의 이야기 日本言語文化. 제8집 2006.4, pp.203-220
- 임태균 島崎藤村『春』と廉想涉「標本室の青蛙」 日本学報 第49輯 韓国日本学会 2001. 12 pp.435-452
- 임태균 『春』における近代自我の精神；夢と運命の二律背反；大学院論集6 日本大学大学院国際関係研究科 1996. 10, pp.103-120
- 오덕경 『春』における『人生の春』 文学研究76 大東文化大学日本文学研究会 1992.12
- 김용안 島崎藤村『春』と李文烈 『젊은날의 肖像』(『若き日の肖像』)との対比考察 日語日文学研究 第18輯 韓国日語日文学会 1991.7, pp.197-214
- 
- 『家』 상권은 명치 43년 1월 1일~5월 4일 「読売新聞」에 연재, 하권은 「中央公論」에 연재.
- 한유선 島崎藤村의 『家』 研究 논문집. 제12집 우송대학교 2007.1, pp.520-532
- 임태균 시마자키 도손의 『집(家)』 연구；소리의 기능을 중심으로 日本学報. 제65집 2권 2005.11, pp.517-530
- 이현옥 시마자키 도손의 『집(家)』 고찰；기본 구조적 측면에서 살펴본 속박과 자유 日本学報 第43輯 韓国日本学会 1999.12, pp.399-410

- 박동석 日本 近代文学에 나타난 「家」; 藤村의 『家』 日本語文学 第6輯 日本語文学会 1998.12, pp.355-374
- 이현옥 시마자키 도오손(島崎藤村)의 『家』에 나타난 자유에의 갈망 高大日語教育研究 1 高麗大日語教育研究会 1997.9, pp.154-187
- 김정혜 변동기사회와 전통가족의 몰락; 「집」과 「삼대」를 중심으로 島崎藤村研究 25 島崎藤村学会 1997.09 pp.51-60
- 김정혜 「家」의空間 日本語文学 第2輯 啓明大日本語文学会 1996.12, pp.125-146
- 박동석 自然主義文学と「家」; 島崎藤村の 『家』 の研究ノート 社会学雑誌 14 神戸大学社会学研究会 1996.1, pp.135-144

『桜の実の熟する時』:대정 2년 1월 「文章世界」

- 임태균 『버찌가 익을 무렵』 (桜の実の熟する時)론 ; '동정'의 고뇌를 중심으로 日本学報. 제67집 2006. 5, pp.241-252
- 황수연 시마자키 토오송의 『버찌가 익을 무렵』론 ; '스테키치'의 우울 일본근대문학산책. 제6호 2005, pp.159-172
- 임태균 시마자키 도손의 『버찌가 익을 무렵』론 일본문학 속의 기독교 ; 한국일본기독교문학연구총서 no.2 2004.9, pp.27-51
- 이지형 <버찌 익을 무렵>에 있어서의<모성>의 양태-다이쇼 시대로부터 돌아켜본 메이지 20년대의 일 단면-<모성> 島崎藤村研究 30 島崎藤村研究 2002.09, pp.69-78
- 노영희 <桜の実の熟する時>における神と父 日語日文学研究 第12輯 韓国日語日文学会 1988.2, pp.27-51
- 임성규 『桜の実の熟する時』小論 ; 信仰の変遷をめぐって 진리논단 제2호 천안대학교 1998.2, pp.223-242

『新生』

- 김승철 시마자키 토오손과 "新生"에의 회귀; 기독교사상. 통권604호 2009.4, pp.206-219
- 임태균 『신생(新生)』에 나타난 감각표현 연구 日本学報. 제69집 2006.11, pp.383-395
- 김용안 시마자키 토오송(島崎藤村)의 사랑관 고찰 ; 『신생(新生)』을 중심으로 日本言語文化. 제7집 2005.10, pp.193-214
- 임태균 시마자키 도손의 『신생』론 일본문학 속의 기독교 ; 한국일본기독교문학연구총서 no.1 2003.9, pp.85-112
- 이현옥 『新生』론 ; <집>의 모멸을 둘러싼 죄의식과 구원 日語日文学研究 第45輯 韓国日語日文学会 2003.05, pp.109-130
- 임태균 『신생』(新生)에 있어서의 문제<부성> 日本文化研究 第6輯 韓国日本学協会 2002.05, pp.143-162



- 이지형 もうひとつの告白；島崎藤村『新生』における＜母性＞＜人間改造＞論 文学研究  
論集 19 筑波大学比較理論文学会 2001.03, pp.72-51
- 임태균 島崎藤村『新生』論 解釈 46-7,8 解釈学会 2000.08, pp.54-60
- 김용안 시마자키 토오송(島崎藤村)의 『신생(新生)』 고찰；주인공의 인식과 행동  
양상의 변이를 중심으로 일본근대문학산책 5 한국외국어대학교대학원일본  
근대문학회 1998.12 ,pp.15-33
- 이지형 島崎藤村の『新生』論；＜愛＞という名のエゴイズム 繻 10 早稲田大学文学研  
究科「繻」の会 1998.03
- 조선진 島崎藤村の『新生』論；岸本の偽善について 国学院大学大学院紀要 29 国学  
院大学大学院 1997.03, pp.191-210
- 김용안 시마자키 토오송(島崎藤村)의 『신생』(新生) 考察 漢陽女子專門大論文集20  
漢陽女子專門大学 1997.2, pp.135-165
- 임성규 『新生』論；告白と再生(回生と新生) 国学院大学大学院紀要 26 国学院大学  
大学院 1995.03, pp.189-210
- 김희중 島崎藤村의 「新生」 研究 東南保健專門大論文集 10 東南保健專門大学  
1993.2 ,pp.525-538

『嵐』：대정 15년 9월 1일 「개조」

- 임태균 『嵐』 試論；父性の行方を中心に 日語日文学研究 第41輯 韓国日語日文学会  
2002.5 ,pp.155-171
- 김용안 시마자키 토오송(島崎藤村)의 『폭풍』론；주인공의 회상과 화해 일본근  
대문학-연구와비평 제1호 한국일본근대문학회 2002.5, pp.257-282
- 김희중 島崎藤村의 후기단편작품에 관한 일 고찰；「伸び支度」・「嵐」・「分配」  
인문사회연구 제2호 동남보건대학 인문사회과학연구소 2001.8, pp.81-94
- 김희중 「嵐」에 나타난 <私>와 아이들과의 관계；<私>의 사고방식을 중심으로  
인문사회연구 제1호 동남보건대학 인문사회과학연구소 2000.7, pp.49-62
- 김용안 시마자키 토오송(島崎藤村)의 - 『모진 바람(嵐)』 考察；주인공의 회상  
속에 나타난 현실과의 화해 양상을 중심으로 論文集；人文·社会篇. 제23집  
漢陽女子大学,2000. 2, pp.123-153
- 김정혜 「嵐」의 私小説的性格 釜山外国語大論叢9(人文·社会科学) 釜山外国語大学  
校 1991.2, pp.301-314

『海へ』

- 임태균 시마자키 도손의 『바다로』 고찰 日本學報 제76호 2008.8, pp. 241-256

『夜明け前』

- 권영기 『夜明け前』 시마자키도손 一考察 人文学研究. 제9집 2005. 2, pp.107-126

- 이현옥 『(夜明け前)』에 나타난 근대성 고찰 日本學報 第54輯 韓國日本學會 2003.3, pp. 395-410
- 임성규 『夜明け前』와 国学 日本文化學報 第15輯 韓國日本文化學會 2002.11
- 임성규 島崎藤村の国学精神 芸術至上主義文芸26 芸術至上主義文芸學會2000.11.
- 고영자 歴史小説の間テキスト性; 島崎藤村の『夜明け前』との関連において 待兼山論叢 32 大阪大學文學部 1998.12, pp.1-22
- 임성규 『夜明け前』論; 그 성립과 사상을 둘러싸고 日本文化學報 第5輯 韓國日本文化學會 1998.8, pp.287-323
- 임태균 『夜明け前』考—夢と狂気の空間—大学院論集7 日本大學大学院國際關係研究科 1997.1, pp.113-128
- 김정혜 金貞惠 『夜明け前』と近代 釜山外大論叢 15 釜山外國語大學校 1996.8, pp. 141-159
- 김두호 시마자키토오송(島崎藤村)의 동트기전(夜明け前) 研究 瑞松李榮九博士華甲記念論叢 瑞松李榮九博士華甲記念論叢刊行委員會 1991.1, pp.273-304

### 『巡礼』

- 김정혜 『巡礼』試論 外大論叢 제26집 釜山外國語大學校 2003.2, pp.181-193
- 김정혜 『巡礼』のナショナリズム的解釈の可能性 島崎藤村研究31 島崎藤村學會 2003.09, pp.2-12

### 『東方の門』

- 임성규 島崎藤村의 『年譜』論 日本語文學 第3輯 日本語文學會 1997.08, pp. 133-151
- 노영희 도송문학에 나타난 '일본적인 세계'; 을 중심으로<東方의 門> MODERN PRAXIS 13 다섯수레 1994.7, pp.116-126
- 노영희 巡礼の旅から『東方の門』へ 東京大比較文學會 1994.3, pp.447-462
- 노영희 晩年の藤村文學に見える東洋へのヴィジョン 比較文化研究所 紀要 53 東京女子大學比較文化研究所 1992.01, pp.85-98

### 문학일반

- 이지형 근대일본문학과 서양음악의 조우 ; 파리의 시마자키 도손(島崎藤村)과 드뷔시 日本研究제30집 中央大學校日本研究所, 2011.2, pp.315-336
- 임태균 시마자키 도손의 『에트랑제(エトランゼエ)』론 ; 자기발견의 여행 日本學報. 제85집, 2010.11, pp.95-107
- 김남경 시마자키 도손(島崎藤村)의 인생철학 ; 『복숭아 물방울(桃の雫)』의 아포리즘을 중심으로 日本學研究. 제28집2009.9, pp.271-292
- 용석인 김동인(金東仁)과 시마자키 도송(島崎藤村)의 자연주의 소설연구 人文學研究. 제13집, 관동대학교 인문과학연구소, 2009.2, pp.155-188

- 遠藤純 山本有三編『日本少国民文庫』と島崎藤村編『新日本少年少女文庫』に関する一考察 동화와 번역 건국대학교동화와번역연구소, 제16집 2008. 12, pp.391-413
- 박승주 島崎藤村における都市と群衆の発見 日本語文学. 제38집 2007.8, pp.267-290
- 채영임 島崎藤村の初期小説に見る「家族」の様相 ; 『爺』 『老嬢』 『水彩画家』を中心に 日本学研究. 제22집 2007.9, pp.269-285
- 박승주 島崎藤村における女性観 ; 「男女交際」思想を中心に 日本語文学. 제39집 2007. 11, pp.317-346
- 이지형 문학가의 경제의식 ; 시마자키 도손(島崎藤村)과 1920년대의 일본을 배경으로 日本言語文化. 제11집 2007.10, pp.287-303
- 김남경 시마자키 도손(島崎藤村)의 「7일간의 한담(七曜のすさび)」 고찰 : 수필 쓰기 모색을 위한 산문지 日本研究. 제34호 2007. 12, pp.149-166
- 임태균 『녹엽집(緑葉集)』에 나타난 여성에 대한 시선 日本学報. 제72집 2007.8, pp.209-224
- 김남경 시마자키 토오송(島崎藤村)의 「첫사랑(初恋)」 고찰 ; '성(性)'의 눈뜸과 고뇌를 중심으로 일본근대문학 ; 연구와비평. 제5호 2006. 12, pp.167-176
- 채영님 시마자키 토오송(島崎藤村)과 염상섭의 시대인식과 '가족' ; 입센의 『인형의 집』의 수용양상을 통하여 일본근대문학 ; 연구와비평. 제4호 2005, pp.333-348
- 이지형 관동대지진과 시마자키 도손(島崎藤村) ; 『아들에게 보내는 편지』(子に送る手紙)를 중심으로 日本文化研究. 제13집 2005. 1, pp.91-114
- 임성규 시마자키 도손(島崎藤村) 文学 研究 ; 韓國人の 研究 現況 및 成果와 課題에 대하여 日本学報 第62輯 2005.2, pp.463-479
- 김희중 김동인과 시마자키 도손 成均語文研究. 제39집 2004. 12, pp.35-62
- 김남경 시마자키 도손의 「구름(雲)」론 日本学報. 제61집 2004.11, pp.395-410
- 이지형 시마자키도손 (島崎藤村)과 다이쇼(大正)시대의 여성운동 ; 여성문예잡지 『처녀지』(処女地)를 중심으로 日本文化学報 第23輯 2004.11, pp.127-146
- 下山嬢子 日本文学とキリスト教 ; 島崎藤村と遠藤周作を視座として 日本文化研究. 제10집 2004.4, pp.7-22
- 최연 일본 근대소설에 나타난 여성상 ; 시마자키 도손(島崎藤村)의 『春』, 나쓰메 소세키(夏目漱石)의 『三四郎』, 다자이 오사무(太宰治)의 『斜陽』을 중심으로 日本語文学. 제24집 2004.2, pp.285-314
- 임태균 일본근대문학 속에 나타난 '광기'의 언설 ; 시마자키 도손의 「어떤 여자의 생애」를 중심으로 日本語文学. 제25집 2004. 5, pp.337-356
- 용석인 시마자키 도손의 자연주의 소설 한민족문화연구. 제13집 2003. 12, pp.157-180
- 김남경 도송(藤村)문학에 나타난 노동 ; 『지쿠마가와(千曲川)의 스케치』와 감상집을 중심으로 日本学報. 제54집 2003. 3, pp.273-284

- 이지형 출판계의 지각변동에 직면한 문학자들의 군상; (円本) 붐과 시미자키 도손의 분배 日本文化研究 第8輯 동아시아일본학회 2003.04, pp.281-297
- 이지형 円本ブーム金融恐慌・文学者; 島崎藤村『分配』から見えてくる昭和二年の風景 文学研究論集21 筑波大学比較理論文学会 2003.03 pp.176-154
- 이현옥 붐을 기다리며에 나타난 19세기 고찰 同日語文研究 제18집 동일어문학회 2003.02, pp.115-128
- 이지형 女性文芸雑誌と島崎藤村; 大正時代の女性雑誌及び女性運動における位置づけ <処女地> 日本語と日本文学36 筑波大学国語国文学会 2003.02, pp.1-18
- 임태균 藤村のフランス体験 ; シャヴァンヌの絵画との出会いを中心に 論文集 제31권 聖潔大学校 2002.12, pp.399-409
- 이지형 島崎藤村『子に送る手紙』における〈内〉と〈外〉; ジャンル区分の曖昧性に見え隠れするもの 日本語と日本文学35 筑波大学国語国文学会 2002.08, pp.50-66
- 이지형 関東大震災と〈震災小説〉; 大震災後の報道環境と島崎藤村『子に送る手紙』を中心に 文学研究論集20 筑波大学比較理論文学会 2002.03, pp.166-149
- 이현옥 『프랑스 소식』 고찰: 도시를 중심으로 日本學報. 제50집 2002.3, pp.341-354
- 임태균 島崎藤村文学における生命主義 論文集 제30권 聖潔大学校 2001.12, pp.353-367
- 이지형 島崎藤村の童話における〈母性性〉; 〈母性保護論争〉との交渉という発想法から 明治から大正へ 筑波大学近代文学研究会 2001.11, pp.316-332
- 조동일 동아시아 소설이 보여준 가부장(家父長)의 종말 국제지역연구. 제10권 제2호 2001, pp.81-102
- 김정혜 韓国における島崎藤村研究 島崎藤村研究 29 島崎藤村学会 2001.09, pp.32-39
- 김정혜 韓日伝統家族の小説的形象と意味の比較 清泉女子大学人文科学研究所紀要 22 清泉女子大学人文科学研究所 2001.03, pp.205-229
- 김정혜 日本の近代と藤村 比較文化研究 10 釜山外大比較文化研究所 1999.2, pp.81-95
- 김정혜 「老嬢」試論 外大論叢 18-I 釜山外国語大学校 1998.2, pp.649-659
- 김희중 島崎藤村의 생애와 작품 김봉택교수정년기념 日本學論叢 博而精 1999.3, pp.485-508
- 松崎浩 島崎藤村の作品にみられる 「奉公人」 に関する考察; 1911(明治44)年から1913(大正2)を中心に 日本語文学 第5輯 日本語文学会 1998.8, pp.229-255
- 김희중 島崎藤村의 생애와 작품 東南保專論文集 15-1 東南保健專門大学 1997.12, pp.271-286
- 임태균 藤村文学における父子関係の一断面; 「捨子」 意識をめぐって 待兼山論叢31(文学篇) 大阪大文学部 1997.12, pp.47-59
- 임성규 파리時代の藤村; 宗教的な変遷をめぐって 日本文学論究54 国学院大学国語国文学会 1995.3, pp.59-74

- 김희중 작품에 나타난 島崎藤村의 고향관 東南保專論文集 12 東南保健專門大學 1995.1, pp.681-693
- 노영희 韓·日 家族史小説의 아버지像; 島崎藤村과 廉想燮의 比較를 中心으로 日本學11 東國大學校 日本學研究所 1992.8, pp.131-150
- 임성규 藤村と同時代者·琴童 國學院大學大學院文學研究科論集18 國學院大學大學院文學研究科 1991.03, pp.37-42
- 김정혜 金貞惠 島崎藤村の生涯とその作品世界 文化연구 3 釜山外國語大學校 1991.2, pp.131-151
- 노영희 藤村의 作品에 나타난<日本的인 것>에 關한考察 同大論叢20 同德女子大學校 1990.3 pp.,135-161

### 2.3. 학위 논문

학위 논문은 석사학위 논문이 46편, 박사학위 논문이 12편이다. 석사 논문 중 「과계」가 23편, 「春」가 2편, 「家」가 7편, 「신생」이 4편, 그 밖의 작품이 10편이다. 석사학위 논문의 비율을 보면, 「과계」를 비롯한 자연주의 문학의 작품 분석이 78% 정도를 차지하고 있다. 이는 도손 연구에 있어서 자연주의가 차지하는 중요성을 강조해도 지나치지 않는다는 증거이다. 또한 한국대학교의 학부에서 문학교육의 비중이 점점 소원해지는 과정에서, 처음으로 대학원에서 자연주의 문학의 연구 중, 도손 작품 분석을 통한 첫 입문이 도손의 「과계」인 것은 당연한 순서라고 말할 수 있다.

「과계」의 분석은, 부락민이란 사실을 인지했을 때의 주인공의 갈등, 부자 관계를 중심으로 한 갈등 극복 과정, 사회 소설적 고찰, 「과계」 발표 당시 명치 시대 신교육계와의 마찰, 「과계」의 크리스트교적 요소 등이다. 「春」은 자연주의 문학과 관련 사항, 「家」에서는 <집>으로부터의 숙박과 붕괴의 과정을 논한 논문이 눈에 띈다.

박사학위 논문을 살펴보면, 이지형 「島崎藤村과 대정기의 문화조류」는, 도손의 대정기의 작품군과 문화적 콘텍스트와의 관련 제상을 명백히 하려고 시도한 논문이다. 이현옥 「시마자키 도손의 근대성」은, 일본의 근대화와 행보를 같이 한 일본의 대표적인 근대작가 시마자키 도손의 문학에 나타난 근대성의 실체를 파악하고 그 추이 과정을 규명하는데 목적이 있다. 임태균 「한일 근대문학에 있어서 부자관계의 비교연구 -시마자키 도송과 염상섭을 중심으로」에서는, <부자관계> 라는 주제 연구에 시점을 고정시켜, 양 작가의 작품에 엮어 보이는 <집>의 내실을 파악하고, 그 속에 나타나는 가부장제도와 근대적 자아의 보편성과 독창성에 대하여 고찰했다. 임성규 「島崎藤村研究」는, 초기 『도손시집』에서부터 말기의 『동방의 문』에서 도손의 사상의 확립과정과 성장,

분열을 거쳐 재정립되어 가는 과정을 묘사한 도손 작품론의 총 점검이다. 노영희 「島崎藤村에 있어서 아버지」는, 가족사속에서 아버지와 의 갈등을 통해서, 아버지를 이상화에 노력한 과정과, 또한 아버지의 이상화가 일본의 전통에 대한 자각과 일본문화의 재발견으로 이어지는 과정을 논문 속에서 구체적으로 서술하고 있다. 이외에 김정혜의 「島崎藤村文学における近代性」과 고영자의 「現代文芸学からみたヘイデン・ホワイトの物語理論への展望」 등의 박사학위 논문이 있다.

### 「破戒」

- 문지영 島崎藤村의 『과계』 고찰 ; 텍사스행과 일본촌의 의미 동국대 교육대학원, 2008  
 차지숙 島崎藤村의 『과계』 연구 경남대 교육대학원, 2007  
 서지연 시마자키 토손(島崎藤村) 『破戒』에 나타난 주인공의 자아인식 영남대 교육대학원, 2007  
 정명주 島崎藤村의 『과계』 고찰 ; 우시마쓰의 심리적 갈등을 중심으로 전북대 교육대학원, 2005  
 천선미 島崎藤村 연구 ; 『과계』를 중심으로 관동대 교육대학원, 2004  
 김순덕 島崎藤村의 『과계』 연구; 신분차별의 갈등을 중심으로 제주대교육대학원, 2003.8  
 김경미 島崎藤村의 「과계」 고 ; 사회상과 근대성을 중심으로 인천대교육대학원, 2002  
 최윤숙 시마자키 토오송의 『과계』 연구 부락인상을 중심으로 중앙대, 2000  
 허금란 島崎藤村의 「과계」에 있어서 이중성 조선대 교육대학원, 2000  
 崔順育 시마자키 토오송(島崎藤村)의 '破戒' 研究 ; 部落民像을 중심으로, 중앙대학교대학원, 일문학전공, 1999  
 김남경 시마자키 도손(島崎藤村)의 『과계(破戒)』 고찰; 우시마츠(丑松)의 갈등을 중심으로; 한국외대교육대학원, 일어교육전공, 1998.2  
 韓亨淑 島崎藤村の『破戒』研究 ; 心理的葛藤過程を中心に 경상대 교육대학원, 1997  
 權倫慶 島崎藤村の『破戒』研究;その主題を中心に ; 상명여대대학원, 일어일문학과, 1997  
 尹惠楨 사마자키 도손(島崎藤村)의 『과계(破戒)』考; 부자관계를 중심으로 한 갈등 극복과정; 한국외대대학원, 일본어과, 1997  
 李志炯 시마자키 도손(島崎藤村)의 『破戒』론; 주인공의 의식 내부의 대립과 자각을 중심으로; 고려대대학원, 일어일문학과, 1996  
 朴承珉 島崎藤村의 「破戒」研究; 社会小説的 側面의 考察; 건국대교육대학원, 일어교육전공, 1996  
 高榮蘭 '破戒'に関する考察; 登場人物の教育観についての分析; 경희대대학원, 일어일문학과, 1994  
 金漢洙 藤村의 '破戒' 研究, 중앙대교육대학원, 일어교육전공, 1994

朴鍾彩 島崎藤村의 「破戒」研究; 主人公의 意識構造를 중심으로; 중앙대교육대학원, 일본어교육전공, 1993

金光沃 『破戒』 評価史に関する考察, 성신여대대학원, 일어일문학과, 1992

俞明載 島崎藤村의 研究; 「破戒」를 中心으로; 조선대교육대학원, 일어교육전공, 1992

金美智江 金史良의 「光の中に」考; 藤村의 「破戒」と対比してみた疏外の一様相; 한국외대대학원, 일본어과, 1990

金貞順 破戒에 있어서의 部落民 問題와 그 動機, 계명대교육대학원, 일어교육전공, 1990

### 「春」

김계숙 島崎藤村의 『春』에 나타난 여성인물에 관한 고찰 영남대교육대학원, 2000

李賢貞 日本 自然主義 文学과 島崎藤村 研究; 「春」와 「家」를 중심으로; 중앙대교육대학원, 일본어교육전공, 1996

### 「家」

김은영 島崎藤村의 『家』 연구 : 등장인물들의 성격비교를 중심으로 영남대 교육대학원, 2006

咸宗敏 시마자키 토손(島崎藤村)의 『집』(家) 연구; 「病」을 중심으로 학위논문 <碩> 계명대학교 교육대학원 일본교육전공, 2003

한수정 島崎藤村 『家』 研究 ; 三吉의 新家建設失敗의 原因分析을 中心에 성신여대대학원, 2000

이현옥 시마자키 도손(島崎藤村)의 「집(家)」 고찰 ; 속박 그리고 자유사이에서; 고려대교육대학원, 日語教育專攻, 1997

李賢貞 日本 自然主義 文学과 島崎藤村 研究 ; 「春」와 「家」를 중심으로; 중앙대교육대학원, 일어교육전공, 1996

洪英愛 島崎藤村의 作品에 現われた 女性像 研究 ; 「家」의 お種と 「ある女の生涯」의 おげん을 中心에; 성신여대대학원, 일어일문학과, 1993

### 「新生」

강혁 시마자키 도손(島崎藤村)의 『신생』 고찰 ; 기시모토(岸本)의 갈등양상을 중심으로 동국대 교육대학원, 2004

박승수 島崎藤村의 『신생』 연구 ; 자전성을 중심으로 동국대대학원, 2001.8

강진희 「新生」論, 한양대대학원, 일어일문학과, 1998

李英淑 『新生』에 나타난 非倫理性과 自我具顯, 계명대대학원, 일어일문학과, 1990

## 그 밖의 작품

- 차동엽 島崎藤村과 국제교류 : 『순례』를 중심으로 ; 부산외국어대 대학원, 2009
- 천선미 시마자키 도손 문학연구 ; 프랑스체류이후를 중심으로 동덕여대 대학원, 2009
- 黃脩娟 시마자키 토오송(島崎藤村)의 『버찌가 익을 무렵』론 ; ‘스테키치(捨吉)’의 우울를 중심으로. 한국외국어대학교대학원, 2004
- 이경민 島崎藤村における女性像 ; 「守」る女を中心に = 島崎藤村에 있어서의 여성상 : 「守」る女를 중심으로 경북대대학원, 2002
- 奉容美 島崎藤村의 『폭풍(嵐)』論 ; 노년의 이중성 극복을 중심으로. 한국외국어대학교 대학원, 2001
- 이진견 일본의 국학사상 ; 島崎藤村의 『夜月ヶ前』에 나타난 국학사상을 중심으로 천안대국제경영행정대학원, 2000
- 任苔均 島崎藤村文学における父子関係の考察, 일본대대학원, 국제관계연구과, 1997
- 徳永裕亨 島崎藤村論; 자유를 위한 苦闘; 건국대대학원, 일어일문학과, 1996
- 尹美蘭 『夜月ヶ前』論, 神戸大大学院, 문학연구과, 1992
- 朴濟洪 젊은 時節 島崎藤村의 苦惱 ; 初期 作品을 中心으로; 조선대교육대학원, 일어교육전공, 1992

## 박사학위논문

- 蔡永姪(2005) 『島崎藤村と廉想渉の比較研究』 広島大学
- 천선미(2008)시마자키 도손 문학연구 ;프랑스체류이후를 중심으로 동덕여대
- 최순옥(2006) 시마자키 도손(島崎藤村)의 근대시 연구 중앙대
- 김남경(2005) 시마자키 토오송(島崎藤村)의 수필 연구 ;그 전개 양상을 중심으로 한국외국어대
- 김용안(2004)시마자키 토오송 연구 한국외대
- 이지형(2003) 島崎藤村と大正期の文化潮流 筑波大学
- 이현옥(2002) 시마자키 도손의 근대성 ; 시마자키 도손[島崎藤村]의 근대성: 『집(家)』에서 『동방의 문(東方の門)』으로 동덕여대
- 任苔均(2000) 日韓近代文学における父子関係の比較研究 - 島崎藤村と廉想渉を中心に 大阪大学
- 김정혜(2000) 島崎藤村文学における近代性 한양대
- 고영자(1998) 現代文芸学からみたヘイデン・ホワイトの物語理論への展望 : 島崎藤村の「破戒」・「夜明け前」との関連において 大阪大学
- 임성규(1996) 『島崎藤村研究』 国学院大学
- 盧英姪(1991) 島崎藤村文学における父 ; 異文化体験との関連から 東京大学



### 3. 결론

본 논문을 통하여, 도손의 저서 및 역서의 간행사정, 학술논문 학위논문을 중심으로 한 연구현황 및 성과, 그 문제점 및 과제를 조명하였다. 2005년 「한국에서 도손(藤村) 문학 연구 성과와 과제 조명」이라는 논문을 통해 필자는, ‘도손 문학을 연구하는데 필요한 기초문헌인 한국어 번역서가 극히 적다. 또한 국내의 동양학 번역에 있어서 실력을 갖춘 인재가 양성되지 않았으며, 번역인구의 저변확대가 안되었다’<sup>3)</sup>라고 지적하였다. 5년이 지난 지금 상황이 많이 좋아진 것은 아니다. 그러나 학계에서도 번역을 인정하고 수용하려는 자세가 진지하게 논의되고 있고, 한국연구재단에서의 동서양 학술명저 지원 사업을 통한 사업도 번역서의 활성화에 많은 힘을 실어줄 것이다. 도손관련 한국인 논문을 살펴보면, 한국 연구자가 일본논문이나 일본자료를 ‘참고문헌’과 ‘주’로 인용하고 있다. 한국인이 도손관련 문헌을 인용할 때, 한국인에 의하여 쓰여진 단행본을 비롯하여 논문의 인용은 그 편수가 극히 적었다. 도손의 경우 일본에서 연구 역사도 길고, 다른 작가에 비해 연구 층도 두꺼워서 다양한 각도에서 연구가 이루어지고 있다. 일본의 근현대문학 학계에서 작품론 연구물에 대한 객관성 문제로 종종 비판되고 있는 현실에서, 한국의 도손 연구자들은 선행연구실적의 연구를 통한 실증적 연구의 자세가 요구되고, 일본연구자와는 다른 관점에서의 도손연구의 접근이 필요하겠다. 이러한 관점에서 도손의 학술논문의 연구 성과는 일본학보가 발간된 75년을 기점으로 할 때, 그다지 활발한 활동을 보여주지 못했다. 그러나, 최근에 일본에서 노영희, 임태균, 이지형, 고영자, 채영임, 필자 등이 도손관련 논문으로 학위취득, 국내에서도 여러 도손연구자들이 학위를 취득하여, 논문을 단행본으로 출판하려는 움직임이 나타난다. 학술연구도 이들 젊은 연구자와 후학들을 중심으로 활발하게 토론 연구 발표되는 시점이다.

3) 「일본학보」 제62집 p465

## 【参考文献】

- ・瀬沼茂樹『評伝島崎藤村』 実業之日本社 昭和三四年七月刊
- ・笹淵友一 「『文学界』とその時代」 明治書院 昭和三五年一月刊
- ・吉田精一『吉田精一著作集』六 桜楓社 昭和五六年七月刊
- ・『島崎藤村』Ⅱ『日本文学研究資料叢書』 有精堂 昭和五八年六月刊
- ・「国文学解釈と教材の研究〈特集透谷と藤村〉」 昭和三九年六月刊
- ・「解釈と鑑賞」別冊 『現代のエスプリ島崎藤村』 昭和四一年五月刊
- ・「解釈と鑑賞」〈自然主義と反自然主義〉」 昭和四三年九月刊
- ・「国文学解釈と教材の研究〈島崎藤村と日本の近代〉」 昭和四六年四月刊
- ・「解釈〈特集・島崎藤村研究〉」 昭和四九年七月刊
- ・「信州白樺〈特集藤村〉」 昭和五十年四月刊
- ・「解釈と鑑賞〈島崎藤村の再検討〉」 平成二年四月刊
- ・노영희『아버지란 무엇인가』 시마자키도송의 문학세계 時事日本語社 1992
- ・노영희『시마자키 도송』 고향과 아버지의 문학적 형상화 건국대출판부 1995
- ・임성규『島崎藤村研究』 도서출판 冠岳社 서울 1996
- ・『나쓰메 소세키에서 무라카미 하루키까지』 글로세움, 2003
- ・장남호『일본 근현대문학 입문』 충남대학교 출판부, 2007

## 要 旨

藤村の著書及び訳書の刊行事情、学術論文、学位論文を中心にする研究現況及び成果、その問題点及び課題を照明した。2005年、「韓国で藤村の文学の研究成果と課題の照明」という論文を通じて筆者は、‘藤村の文学を研究するのに必要な基礎文献である韓国語の翻訳書がすくない。又、国内の東洋学の翻訳で実力のある人才が養成できなくて、翻訳人口の底邊拡大ができなかった’と指摘した。5年が過ぎた今、状況がよくなっているとはいえない。しかし、学界でも翻訳を認定し、受容する姿勢が真摯に論議されていて、韓国研究財団での東西洋の学術名著の支援事業を通じる事業も翻訳書の活性化に役に立つだろう。

藤村関連の韓国人の論文を調べてみると、韓国の研究者が日本論文や日本資料を‘参考文献’と‘注’に引用している。韓国人が藤村関連の文献を引用する時、単行本をはじめとして論文の引用はその数がすくない。日本の近現代文学の学界で作品論の研究物に対する客観性の問題としてしばしば批判されている現実で、韓国の藤村の研究者は先行研究実績の研究を通じる実証的の 研究の姿勢が要求されている。

キーワード：藤村、修士学位、博士学位、近代精神、翻訳、キリスト教の受容

투 고 : 2011. 8. 31  
1차 심사 : 2011. 9. 10  
2차 심사 : 2011. 10. 1



# 村上春樹 『スプートニクの恋人』 論

徐 忍 宇\*

(e-mail: seoiw@hotmail.com)

---

## 目 次

---

1. はじめに
  2. ユートピアという思想
  3. 〈ユートピア〉 文学者としての村上春樹
  4. 観覧車と歴史
  5. 「汚れ」とイニシエーション
  6. 高い塔と分裂
  7. おわりに
- 

## 1. はじめに

『スプートニクの恋人』（1999、講談社、書下ろし）は長編小説としては、村上春樹における「デタッチメント」から「コミットメント」への転換と言われる『ねじまき鳥クロニクル』（第1、2部1994、第3部1995、新潮社）に続く作品であり、「コミットメント」の実践として目された『アンダーグラウンド』（1997、講談社）、『約束された場所で』（1998、文芸春秋）という二つのノンフィクションの出版後、はじめて出された創作としても重要な意義を持つ作品である。しかし、一連のシリアスな作品の流れのなかでの「a weird love story」<sup>1)</sup>の発行は、多くの論者を当惑させた<sup>2)</sup>。また恋愛小説としての完成度という側面においてもけっして良い評価を得たとは言い難い。村上春樹の作品のなかでもとりわけ『スプートニクの恋人』に対する評価が低いことは、村上春樹関連論文を作品別にまとめた「村上春樹スタディーズ」シリーズにおいても、『スプートニクの恋人』が収録された『村上春樹スタディーズ05』<sup>3)</sup>には他の「作家論・その他」とともにただ一本の論

---

\* 九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程日本社会文化専攻

1) 単行本の帯に記されたキャッチフレーズ

2) その内容については後述する。

文だけが載っていることから裏付けられる。

本論の目的は、小説のなかに潜在する現実世界の断片—北朝鮮・オウム真理教・満州—を綿密に拾い上げることによって、『スポーツニクの恋人』が創作における「コミットメント」の実践として評価される前後の作品（『ねじまき鳥クロニクル』と『神の子どもたちはみな踊る』）とは断絶した、初期作品への回帰的な作品ではなく、両作品と緊密につながる作品として位置づけることである。本論では小説に表れる現実世界の断片をひとつにまとめ、さらにその意義を明らかにするために〈ユートピア〉という概念を援用した。第2節において〈ユートピア〉という概念について念入りに説明を行ったのは、〈ユートピア〉の本質を問うことが、つまるところ「デタッチメント」または「コミットメント」とは何かという問いに対するひとつの答えになり得るからである。それでは、まず〈ユートピア〉とは何かを問うことから論を始めた。

## 2. 〈ユートピア〉という思想

理想郷を意味する言葉として、ヨーロッパにおける〈ユートピア〉、アジアにおける〈桃源郷〉などの語があるが、両者がそれぞれ内包する意味は一致するどころか、むしろ対立している。前者の〈ユートピア〉が人工的な理想国家を意味するのに対し、後者の〈桃源郷〉は、字義通りに桃の花が咲き乱れる自然の空間（＝楽園）を表す。これ自体、近代以前におけるヨーロッパとアジアの世界観の違いを端的に象徴すると言えるが、ある意味〈近代〉そのものがヨーロッパの〈ユートピア〉像をなぞる形でつくられたと言っても過言ではない。

〈ユートピアutopia〉はギリシャ語のou（ない）とtopos（場所）の組み合わせ（outopos＝どこにもない場所）からなるトーマス・モアの造語である。トーマス・モアの『ユートピア』に描かれた世界像は、「どこにもない場所」という語義とは対照的に、部分的には今の福祉国家で実現されたものもあれば（勤労時間、整備された都市など）、すでに崩壊した共産主義国家に似ているものもある（私有財産の放棄、市民同士の監視体制）。現在の視点から見ると、トーマス・モアの理想郷はあまりにも現世的であり、ある意味〈反ユートピア〉（＝ディストピア）の趣さえある。

人間の憧れの場所として理想国家、または理想都市を思い描くのは、トーマス・モア独自のものではなく、その2千年前のプラトンの『国家』にまで遡るひとつの文学的伝統である。巖谷国土は〈ユートピア〉文学の代表例として、ルネサンス期における、トンマーゾ・カンパネッラの『太陽の都』、17世紀にはフランソワ・ド・フェヌロンの『テレマックの

3) 栗坪良樹・柘植光彦編（1999）『村上春樹スタディーズ05』若草書房

冒険』、18世紀におけるスウィフトの『ガリヴァー旅行記』、19世紀のウィリアム・モリスの『無可有郷だより』、そして20世紀におけるH・G・ウェルズのSF小説やジョージ・オーウェルの『一九八四年』、オルダス・ハクスリーの『すばらしい新世界』などをあげている4)。巖谷によれば、これらの〈ユートピア〉文学における理想国家の姿は、プラトンの『国家』から現代のSF小説にいたるまで驚くほど変わりがなく、以下のような共通点が見出されるという。

- ① 周囲から隔絶された島国であり、たいていの場合、固い城壁で防御されている。
- ② 町の構造が直交線や円環などの幾何学的な形で整頓されている。
- ③ 川や森などの自然は橋やトンネルなどの土木工事で矯正される。
- ④ 理想の社会ができあがっているので、それ以上の変化・生成の余地がなく、したがって歴史（時間）も消滅する。
- ⑤ その反面、そこに属する人間は時計のように規則正しく、時間割にそって合理的で画一的な生活を営む。
- ⑥ また、人間は機能・職能に還元され、交換可能な存在となる。つまり個性が存在しない。
- ⑦ 黴菌などがなく、衛生観念が行き届いた清潔な社会である。

巖谷があげた代表的な〈ユートピア〉文学のリストを見ると少し困惑せざるを得ない。彼は、日本では一般的に〈ディストピア〉文学として分類されているもの—ほとんどの20世紀の〈ユートピア〉文学—をあえて〈ユートピア〉文学の範疇に入れているのである。巖谷は、そもそも英語の〈utopia〉という言葉自体が、日本で使われているような「理想的」な、「楽園」のような場所という意味より、「ばかげた妄想的な話」や「実現不可能な計画」などの否定的な意味で使われていると言う。念のために辞書を調べると、「理想郷」という意味のほかにも、「空想的な政治体制」、「空想的社会改良計画」、あるいは「最果ての地」などの意味も含まれている5)。他には、「an imaginary place or situation in which everything in society is perfect（社会のすべてが完璧である空想的空間、もしくは状況）」6)とある。元々は「あり得ない」（＝空想的な）場所を意味する言葉が、日本では「そうあるべき」（＝理想的な）場所の意味で使われるようになったようである。つまり、巖谷にとって〈ユートピア〉は元来否定的なニュアンスの言葉であり、〈ディストピア〉文学とは単に「陰鬱な」〈ユートピア〉文学に過ぎず、あえて両者を区別する必要がないと考えているのである。彼によるとサドの作品ですらきわめて「ユート

4) 巖谷国土（2002）『シュルレアリスムとは何か』ちくま学芸文庫、pp.199～203、なお、巖谷の論は基本的に巖谷本人が共同訳したジル・ラビュージュ（1988）『ユートピアと文明 輝く都市・虚無の都市』（紀伊国屋書店）に負うところが大きく、厳密に言えば巖谷独自の論とは言い難いが、本論では彼の簡潔なまとめとユートピアと反ユートピアを区別しないという手法を借りることにした。

5) 『リーダーズ英和辞典』第2版、研究社、pp.2713～2714

6) 『MACMILLAN ENGLISH DICTIONARY』Bloomsbury Publishing Plc 2002,p.1999

ピア的」であり、「ユートピアというものを完璧に構築した場合、そこは地獄に近くなるということ立証」するものであると言う。日本においてこのような言葉の誤用が発生した理由は、おそらくアジアにおける理想郷とは必然的に「桃源郷」のような〈自然〉を含意するものであるからであろう。ちなみに韓国においても〈ユートピア〉という語は「理想郷」あるいは「楽園」など、ほとんど「パラダイス」と同義で使われており、言葉の誤用はアジア共通のものであるといっても差し支えない。巖谷はそもそも〈ユートピア〉が「アジア的なもの」・「自然そのままのもの」を締め出そうとする願望から生まれたものであると述べ、次のように指摘している。

ギリシアはヨーロッパ的なものの防波堤となって、ダリウスを追いはらわなければならなかった。そこでいろんな同盟を結んで、ギリシア都市同士が協力しあって、ペルシア帝国の進出を阻止したわけです。(中略) そのころにプラトンが登場したんですね。そして、彼には守るべきものがあつたわけです。それはギリシアがすでに高度に推しすすめていた理性というものです。知的生命体のあかし、それを象徴する幾何学的に構成された都市。城壁外からの攻撃にそなえる堅固な空間。(中略) 単にアジアの軍隊ではない、広い意味でアジア的なものです。それはまず不定形であり、自然に近く、無限にそして旺盛に増殖し繁茂するものです。絶対的な王がいて、その神権に服従している世界ですが、一方で規則性、反復性がない。血みどろであり豪華でありエキゾチックであり金銀財宝に飾られている。要するに得体の知れない魅力的なもので、それによって最終的には侵されてゆく運命にあつたにせよ、そういうものからいつまでも身を守るための防壁としてつくられたのが、どうもユートピアという思想だつたのではないか<sup>7)</sup>。

もちろん、ここで言う「アジア的なもの」、「不定形で自然に近い」ものとは、実体としての古代ペルシアを表すわけではない。自然を制御できる力＝合理性なしに古代ペルシアのような帝国は成り立たないし、実際、古代ペルシアの首都であつたスーサやペルセポリスの遺跡を見ると、ギリシアの緒ポリスに負けず劣らずの幾何学的な形の都市であつたことがわかる。むしろ「アジア的なもの」とは、〈ユートピア〉を思い描く者自身の中に秘められたもの、つまりヨーロッパに内在するものでありながら、みずから受け容れがたく思うもの、排除したいと思うものを表す言葉に近い。

すなわち「アジア的なもの」とはヨーロッパの〈影〉の部分なのである。前にあげた様々な〈ユートピア〉に共通する特徴を見ても、そのような排除の原理を確認することができる。①における隔絶した場所、城壁に囲まれた場所、また⑦の「黴菌がない」、「衛生的」な場所という側面からも〈ユートピア〉の排他性は明らかである。これは、文化そのものがその社会に内在する自然的な要素(混沌)を周縁に締め出すことによって成立するとい

7) 同前『シュルレアリスムとは何か』pp.250~252



う、山口昌男の「中心と周縁」論を想起させるものである。

そういう意味では、〈ユートピア〉はすべての文明社会あるいは近代国家の鏡像として捉えることも可能であるが、その中でもとりわけ排他性の強い社会—全体主義国家、社会主義国家、独裁国家、排他的宗教団体など—の鏡像として、より厳密に位置づけることができる。たとえば、かつて「<sup>ユートピア</sup>地上の楽園」というプロパガンダを使っていた北朝鮮は、冷戦が終結して20年余経った今では、実在するもっとも〈ユートピア〉に近い国家であると言っても過言ではない。

抗日独立運動家出身の「<sup>ビッグ・ブラザー</sup>偉大な首領」（金日成）を民族の英雄として今もなお祭り上げている北朝鮮は、北側は鴨緑江という中国との国境線によって囲まれ、南側は軍事境界線（DMZ）によって韓国と隔てられた、事実上の島国であり（そういう意味ではもちろん韓国も島国である）、ある意味世界でもっとも隔絶された国である。貧しい封建国家から日本帝国による植民地時代を経て、外部の力による突然の独立を迎えた朝鮮半島では、北朝鮮側も韓国側も一定期間の独裁体制はやむを得ないことだったのかもしれない。外部の影響力を余儀なくされる、資本主義という体制を持つ韓国に比べて、比較的自立的な体制が可能だった北朝鮮においては、朝鮮半島の分断はあくまでも日本帝国の身代わりになされた理不尽な出来事にほかならず、それをもたらしたすべての外部の力は受け容れがたい、排除しなければならない対象となったのである。

「<sup>ビッグ・ブラザー</sup>偉大な首領」の指導の下で共産主義が持つ外部性は徹底的に取り除かれ、主体思想という完璧な指導理念が生まれる。完全無欠の指導者と理念が実現された北朝鮮において歴史の発展はすでに成就されたのであり、多様な意見や思想のせめぎ合いなど不必要となる。個々人の行動や思想の自由は完璧な体制に混沌をもたらす危険な要因として捉えられる。体制をそのまま維持することが人間の存在理由であり、個人は体制の歯車として忠実にそれぞれの役割をはたすべく、互いを監視し合わなければならない。このように、北朝鮮の言い分は、民族主義という観点からすると韓国より筋が通っていると言えなくもない。むしろ、北朝鮮の悲劇は、独立後間もなく誕生した共産主義体制が、その住民たちには植民地時代に比べてあまりにも魅力的で理想的なものに映ったことに起因するのかもしれない。

国家規模の〈ユートピア〉は北朝鮮が代表的であるが、小規模の類似した共同体は世界各地に散在している。日本におけるオウム真理教もその一つであろう。オウム真理教はある意味、1960・70年代に流行したカウンター・カルチャーの落し子のようなものである。オウム真理教はヨーガや瞑想などのインドの宗教と雑多な都市伝説や陰謀論の寄せ集めをその宗教的原理にしている集団であるが、インドの宗教が世界中に流行した原因となったのは、言うまでもなく、アメリカのヒッピー文化の影響である。林郁夫の『オウムと私』

(文芸春秋、1998) や村上春樹の『約束された場所で』を読むと、オウム真理教の信者たちがどれほど純粋な動機を持ってそこに集まったのかがわかる。多くの理想主義的な出家者(サマナ)たちは現世の社会的地位や財産を捨て、「サティアン」と呼ばれる隔絶された人工都市に入った。そこでは、ちょうど『ユートピア』の中の国と同じように、全員が「白い」服を着用し、決められた時間割にそってそれぞれの仕事に従事する。余暇の時間は飲酒やテレビなどに費やされることなく、悟りを得るための修行に当てられる。美味を抑えた質素なものを食べ、私有財産を持たない。現世での名前は捨てられ、なお信者同士の性行為も禁止される。修行の段階によって厳格に階級化されるが、その最上部にはもちろぬ<sup>ビッグ・ブラザー</sup>である麻原彰晃が位置する。オウム真理教の危険性は、その宗教性の欠如にあるのではなく、むしろ世俗化を過度に禁止してしまったことに起因するかもしれない。

でも実を言えば私たちが林医師に向かって語るべきことは、本来はとても簡単なことであるはずなのだ。それは「現実というのは、もともとが混乱や矛盾を含んで成立しているものであるのだし、混乱や矛盾を排除してしまえば、それはもはや現実ではないのです」ということだ。「そして一見整合的に見える言葉や論理に従って、うまく現実の一部を排除できたと思っても、その排除された現実は、必ずどこかで待ち伏せしてあなたに復讐することでしょう」と8)。(傍点引用者)

村上春樹が述べているように、現実世界の混乱や矛盾は、現実世界そのものが不完全な人間によって作り上げられたものである以上避けがたいものである。〈ユートピア〉は、混乱や矛盾の原因を外部の力にもとめ、それを排除して自らは完璧たらんとするがゆえに、大きい危険性ははらんでいると言えよう。

### 3. 〈ユートピア〉文学者としての村上春樹

これまでの議論を踏まえて考えると、村上春樹の小説が持つ〈ユートピア〉性というものが浮かび上がってくる。最新作の『1 Q 8 4』がジョージ・オーウェルの『一九八四年』を下敷きにしていることは言うまでもないが、『ねじまき鳥クロニクル』が1984年を舞台にしているのも、オーウェルの『一九八四年』を念頭においてのことであつたと作家本人が語っている9)。「アフターダーク」でも、東京をほうふつさせる都会の深夜風景が、代表的な〈ユートピア〉映画の「アルファヴィル」(ジャン＝リュック・ゴダール、1965年作)に喩えられ、描かれている。

8) 村上春樹『約束された場所で』「文芸春秋」、1994年4月号～11月号に掲載、単行本は1998年11月に同社で発行、p.329

9) 「特集 村上春樹ロングインタビュー」『考える人』、2010年夏号、p.58

さらに、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』における「世界の終り」と「ハードボイルド・ワンダーランド」という二つの世界は、前者がトーマス・モアの『ユートピア』的な世界というなら、後者は『一九八四年』的な反〈ユートピア〉<sup>10)</sup>であり、二つの対照的な〈ユートピア〉像になっている。とりわけ、「世界の終り」の部分は、小説に添付されている村上春樹本人作成の地図からして、『ユートピア』の1518年版の挿画に酷似している。「世界の終り」は「ユートピア」のような島国ではないが、周りが高い壁に囲まれた事実上の島であり、その他にも個性を持たない、職能などに記号化された住民や彼らの規則的な生活、農業中心の仕事など、多くの共通点を持つ。

注目に値するものは、「デタッチメント」から「コミットメント」への転換として位置づけられた『ねじまき鳥クロニクル』を前後にして、作品に描かれている〈ユートピア〉像のあり方にあきらかな断層が存在するということである。たとえば、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』の「僕」が「世界の終り」に留まるという結末からも分かるように、「コミットメント」への転換以前の村上春樹は現実世界の矛盾と混沌を〈排除〉した〈ユートピア〉的な世界に同情的な立場をとっていた。一方、それ以降の小説における〈ユートピア〉は明らかに否定的な意味での〈ユートピア〉、いわゆる〈ディストピア〉としての〈ユートピア〉になっていることが分かる。

より広義に言えば、村上春樹の小説における「あちら側」が、巖谷が提示した〈ユートピア〉文学の特徴と重なりあう部分が多く、村上春樹の作品の大半が〈ユートピア〉文学であるといっても過言ではない。あるインタビューの中で、村上春樹は「僕はweird story (奇妙な物語) を好んで書きます。どうしてかわからないけれど、そういうweirdnessにとっても惹かれるんです」<sup>11)</sup>と語っているが、「weird story」と言えば、『スプートニクの恋人』の発行当時、帯に印刷されたキャッチフレーズ、「a weird love story」が連想される。なぜ「奇妙な物語」、「奇妙なラブ・ストーリー」という表現の代わりに、英語の「weird」にこだわっているのか。もちろん「weird」が持つニュアンスを重視するためであろうが、辞書を確認してみると、「この世のものとも思えない」<sup>12)</sup>という意味が目につく。作家が特にこの意味を念頭においていることは本文中の「物語というのはある意味では、この世のものではないんだ。本当の物語にはこっち側とあっち側を結びつけるための、呪術的な洗礼が必要とされる」(傍点引用者)という台詞からも裏付けられる。つまり、「weird」=「あちら側の」なのである。なお、「weird」=「この世のものとも思えない」という

10) この論では巖谷にならい、基本的には〈ユートピア〉と〈ディストピア〉(=反ユートピア)を区別しないが、この場合は両者の対照性を強調するためにあえて区別した。

11) 「アウトサイダー」『夢を見るために毎朝僕は目覚めるのです』〈文芸春秋、2010〉に収録。なお、原文のインタビューは[http://www.salon.com/books/int/1997/12/cov\\_si\\_l6int.html](http://www.salon.com/books/int/1997/12/cov_si_l6int.html)参照。

12) 同前『リーダーズ英和辞典』p.2789、(村上春樹は色んなエッセイの中で同辞書への愛着を語っている)

語が〈ユートピア〉の語源的意味である「どこにもない場所」とも符合しているのも見逃してはならない。

『スポーツニクの恋人』は、新しいミレニアムを迎えた世紀末の年、1999年4月に発行された。前作はノンフィクションの『約束された場所で』であるが、「書き上げてから一年以上かけて、何十回か書き直してる」<sup>13)</sup>と述べていることからすると、ほぼ同時期に書かれたものと考えて差し支えない。小説としては短編集『レキシントンの幽霊』（1996）の次の作品となるが、この短編集には1990年代前半から半ばまで書かれたものをまとめたものなので、事実上『ねじまき鳥クロニクル』が前作となる。地下鉄サリン事件の被害者たちをインタビューした『アンダーグラウンド』、そして同事件の加害者側であるオウム真理教の信者たちをインタビューした『約束された場所で』というシリアスなノンフィクション作品の後で発表されたこともあって、『スポーツニクの恋人』に対する評価は決して良いものではなかった。

渾身の力を振り絞ったような長編のあと、胃にもたれた料理のあとのデザートのように、あるいは次の皿の前の軽い口直しのように、ステレオタイプな装いを凝らした物語を読者へのサービスとして提供する。そんな余裕のスタンスが感じられる作品なのだが、その口当たりが良いはずのステレオタイプが、洗練からひどくズレた苦さを湛えている。何か痛ましくグロテスクなまでに、陳腐なのだ。素材が朽ちている<sup>14)</sup>。

『スポーツニクの恋人』は社会的に大きな事件を題材とするのでも歴史性を意識するのでもなく、かつての村上春樹を思わせるような、狭く限定された世界・人間関係を扱う作品だった。（中略）アメリカから帰国後、あれほど頻繁に語られたコミットメントはどこへ行ってしまったのだろうか。『アンダーグラウンド』と『約束された場所で』は村上のそのような意図の実現だった。そこでは、成功だったのか失敗だったのかは別にして、明らかな社会への架橋が試みられたのだった。ところが、そんなデタッチメントからコミットメントへの移行はどようになったかと訝しく思うほど『スポーツニクの恋人』は孤独の陰影が濃くなってきている<sup>15)</sup>。

前者の清水は、『ノルウェイの森』と『国境の南、太陽の西』の流れを汲む恋愛小説としてこの作品を批判しており、後者の吉田は、それまでの作家の軌跡にそぐわない、「コミットメント」の欠如を問題にしている。すなわち、大衆性と社会性の両方において『スポーツニクの恋人』は批判を受けたのである。とりわけ、清水の「何か痛ましくグロテスクなまでに、陳腐なのだ」という批判はいくぶん納得できるところがある。まず前作『ねじまき鳥クロニクル』ではほとんど見当たらなくなっていた固有名の転倒—登場人物の名前は記号化され、その代わりにブランド名や大衆文化などにおける固有名が頻出する—が再び回帰しており、小説の内容においても『ノルウェイの森』におけるレズビアンのエピソードや従来の短

13) 「ロングインタビュー 物語はいつも自発的でなければならない」『広告批評』、1999年10月号、p.69

14) 清水良典「作者の〈闇=病み〉の深さ 村上春樹『スポーツニクの恋人』」「すばる」、1999年7月号

15) 吉田春生（2001）『村上春樹とアメリカ』彩流社、pp.199～200

編「人食い猫」、「野球場」、「鏡」などにおける様々なモチーフが反復されている。

しかしここまでならただ「陳腐」なだけであって「グロテスク」な印象を与えたりはしない。この小説が読者に好感を与えないもっとも大きな原因は、おそらく斬新なストーリーの欠如にある。従来の村上春樹の小説においても、整合性の欠如はしばしば批判の的になっていた。小説には必ず謎が提示され、それが読者側には丁寧に説明されることなく、主人公だけに突然その答えが与えられる。これは村上春樹の小説の定型ともいえるものであるが、綿密に練られたメタファーと奇抜なエピソードなどによってそれが補われていたのである。しかし、この小説で問題になるのは、ただの整合性の欠如ではなく、プロットの決定的な部分がそっくり抜け落ちている部分である。すなわち、小説の起承転結の「転」にあたる箇所がなく、「結」となる部分も非常にあいまいな形で描かれていて、それが読者側に消化不良感を与えているのである。

小説は「22歳の春にすみれは生まれて初めて恋に落ちた。広大な平原をまっすぐ突き進む竜巻のような激しい恋だった。これは行く手のかたちあるものを残らずなぎ倒し、片端から空に巻き上げ、理不尽に引きちぎり、完膚なきまでに叩きつぶした。そして勢いをひとつまみもゆるめることなく大洋を吹きわたり、アンコールワットを無慈悲に崩し、インドの森を気の毒な一群の虎ごと熱で焼きつくし、ペルシャの砂漠の砂嵐となってどこかのエキゾチックな城塞都市をまるごとひとつ砂に埋もれさせてしまった」<sup>16)</sup>という仰々しい文章で始まる。これほどの出だしであれば、マーガレット・ミッチェルの『風と共に去りぬ』並みの波乱万丈な展開が期待されるが、もちろん南北戦争に相当する話は現れず、その代わりにすみれの恋の相手として南北に分断された国、韓国の国籍を持つ、在日の女性ミュウが登場するのみである。大学を自主退学して作家修行に専念していたすみれは、17歳年上のミュウと出会い、恋に落ちる。ミュウはある不思議な体験によってピアノを弾く能力と性欲を失った女性である。ミュウとともに働くようになって以来、すみれは女性らしい姿に変貌するが、文章がいついっさい書けなくなる。二人は仕事でヨーロッパを回る途中、ギリシャのある島で休暇を過ごすようになる。そこですみれは自分の胸を打ち明け、ミュウに性的な接近を試みるが、観覧車の出来事で性欲を失ったミュウはそれを受け入れることが出来ない。その翌日の朝、ミュウはすみれが「煙のように」いなくなってしまったことに気づく。小説はすみれに思いを寄せている小学校の教師「ぼく」によって語られる。ミュウからすみれの失踪を知らされた「ぼく」は、島に渡り搜索を開始するが、手がかりはいっさい見つからない。2日目の夜、「ぼく」は音楽の音で目が覚め、それに導かれて山を登る。そして突然、すみれが「あちら側」に行ってしまったことに気付くのである。

16) 村上春樹 (1999) 『スプートニクの恋人』講談社、P.7、なお、テキストとしては講談社文庫版 (2001) を使用した。

以上のあらすじを見ればわかるように、『スプートニクの恋人』には慣習的な恋愛小説—前作『ノルウェイの森』や『国境の南、太陽の西』のような小説—で見るような斬新なストーリーが欠けている。小説の主人公はその恋の相手に出会って間もなく、小説の中から姿を消してしまうのである。しいて言えば、すみれの失踪そのものが小説のクライマックスになろうが、彼女がどのような方法で姿を消したのか、またどこに行ってしまったのかは説明されておらず、迷宮入りのままで小説が終わってしまうのである。村上春樹自身も『スプートニクの恋人』は「ストーリーで考えていくと、これはどこにも行かない小説」<sup>17)</sup>であると認めている。しかし、構成上の破綻が意図されたものである以上『スプートニクの恋人』の読解においては表層的な内容から一旦離れ、作品のなかに散在する手がかりを一つひとつ丁寧に拾いあげてみなければならない。

#### 4. 観覧車と歴史

『スプートニクの恋人』における最大の謎は、いうまでもなく、すみれの失踪である。なぜすみれは姿を消し、どこに行ってしまったのか。その失踪は結果的にすみれに良いことであったか、それとも悲劇的な出来事であったか。「ぼく」が言う「あちら側」は具体的にどういう場所なのか。もちろん小説にまったく説明がないわけではない。「ぼく」の仮説という形で次のような説明が用意されている。

ぼくは思い切ってひとつの仮説をたててみる。

すみれはあちら側に行ったのだ。

それでいろんなことの説明がつく。鏡を抜けて、すみれはあちら側に行ってしまったのだ。おそらくあちら側のミュウに会いに行ったのだ。こちら側のミュウが彼女を受け入れることができない以上、それはむしろ当然の成りゆきではないか？

彼女は書いている—ぼくは記憶をたどってみる。「それでは衝突を避けるためには、わたしたちはどうすればいいのだろうか？論理的に言えば、それは簡単だ。夢を見ることだ。夢を見つづけること。夢の世界に入って出てこないこと。そこで永遠に生きていくこと」（傍点原文）<sup>18)</sup>

すみれが姿を消した直接的なきっかけが、ミュウに性的な接触を拒まれたことであった以上、「あちら側のミュウに会いに行ったのだ」という上の説明は当然すぎる感がある。前述したように、ミュウは「あちら側」に性欲を残してきた人物なのである。問題は、もう一人の

17) 同前「ロングインタビュー 物語はいつも自発的でなければならない」、p.59

18) 同前『スプートニクの恋人』p.251

ミュウがいる「あちら側」とはどのような場所なのかが説明されていないところである。ミュウがすみれを受け入れることができなかったのは、観覧車の中で起きた奇妙な体験が原因となっている。ミュウはフランスの音楽院に留学中、父親にある商談をまとめるように頼まれて、フランス国境近くのスイスのある町でひと時を過ごす。そんなある日、偶然遊園地の観覧車に乗ったまま、置き去りにされる事件が起こる。そのとき双眼鏡で自分のマンションの部屋を眺めるが、そこで自分を付きまとっていたフェルディナンドという男と淫らな性交を行っているもう一人の自分を目撃することになる。その光景に大きいショックを受けたミュウは、「あちら側」と「こちら側」とに引き裂かれた半分だけの存在となり、その印として髪の毛が全部真っ白になる。また二度と性欲を感じることも、ピアノを弾くことも出来なくなる。

拙論「分裂と統合—『ねじまき鳥クロニクル』論」<sup>19)</sup>では、分裂というテーマを、主に皮剥ぎのモチーフとラカンがいう〈去勢〉の〈排除〉という概念を用いて分析を行った。

『スポーツニクの恋人』においても、ミュウの場合のように、分裂が重要なテーマとなっている。この作品における分裂が『ねじまき鳥クロニクル』における分裂と連続性を持つということは、ミュウの観覧車事件においてもひそかに暗示されている。つまり、ミュウが観覧車に閉じ込められていることを誰かに知らせるために、財布を地上に落とす場面があるが、そのときミュウの所持品としてあげられた「果物の皮を剥くためのアーミーナイフ」(p.230、傍点引用者)がそれである。アーミーナイフは、「夕食をとる」(p.223)のために「3ブロックしか離れて」(p.231)いないレストランに行くときに、ミュウのような淑女が所持するものとしてはいささか違和感がある。現にミュウは寒さをしのぐためのカーディガンすら忘れて出かけたのである。やはりアーミーナイフは『ねじまき鳥クロニクル』との連続性、すなわち〈排除〉と〈分裂〉の相関関係を暗示するための機構として捉えたほうがいい。しかし、『スポーツニクの恋人』における〈排除〉は、精神分析理論における〈排除〉—〈去勢〉の〈排除〉よりは、前に述べた〈ユートピア〉における「排除」(=排他性)、または前傾の引用文で村上春樹が述べた「混乱と矛盾」の「排除」に近い。端的に言えば、「汚れ」の〈排除〉なのである。ミュウが自分の部屋を覗いて髪の毛が真っ白になるほどショックを受けたのは、自分のドッベルゲンゲルを目撃したからでも、またフェルディナンドとの性行為を目撃したからでもない。それがショックだったのは「それはわたしを汚すことだけを目的として行われている意味もなく淫らな行為」だったこと、つまりそれが外部(フェルディナンド)による「汚れ」を象徴する場面であったからである。観覧車事件と〈ユートピア〉との関連は、『アフターダーク』で語られる、〈ユートピア〉映画「アルファヴィル」についての言及からも裏付けられる。

19) 徐忍宇(2011)「統合と分裂—『ねじまき鳥クロニクル』論」『日本文学論集』第37号、日本近代文学会九州支部、参照

「アルファヴィルでは、人は深い感情というものをもってはいかないから。だからそこには情愛みたいなものはありません。矛盾もアイロニーもありません。ものごとはみんな数式を使って集中的に処理されちゃうんです」

カオルは眉を寄せる。「アイロニーって？」

「人が自らを、または自らに属するものを客観視して、あるいは逆の方向から眺めて、そこにおかしみを見いだすこと」<sup>20)</sup>

ここで村上春樹は浅井マリの口を借りて、「アルファヴィル」という〈ユートピア〉の特徴が「矛盾もアイロニー」もない場所であること、また「アイロニー」とは「人が自らを、または自らに属するものを客観視して、あるいは逆の方向から眺めて、そこにおかしみを見いだすこと」であると語っている。とりわけこのアイロニーの定義は、大学一年生による一般的な定義というよりは、むしろミュウの観覧車事件についての簡略な説明に相応しく思われる。ミュウが観覧車に乗ろうと思った理由は、最初から「観覧車の中から私のアパートメントを眺めてみよう—いつもとは逆に」（傍点引用者）と思ったからである。すなわち、ミュウが観覧車に乗ったのは「人（ミュウ）が自ら（もう一人のミュウ）を、または自らに属するもの（ミュウのアパートメント）を客観視して、あるいは逆の方向から眺める」ためであったのである。

しかし、ミュウはそのような「アイロニー」、あるいは「汚れ」を直視することに耐え切れず、「あちら側」の自分を〈排除〉してしまう。つまり、「あちら側」の「混乱と矛盾」、あるいは「矛盾とアイロニー」を切り捨てた〈ユートピア〉の住人になるのである。⑥でもあげたように、〈ユートピア〉の人間は機能・職能などに還元され、交換可能な記号となると述べたが、ミュウに固有名が与えられず、ギリシャ語の $\mu$ （ミュウ）のような記号性を強調した愛称が与えられたのも、彼女が〈ユートピア〉の住人であることを裏付ける。彼女はすみれに仕事を勧誘した理由を聞かれ「わたしは昔から人を顔で判断することにしているの」と答えるが、これもやはり人間の深層における「混乱と矛盾」を排除し、表層＝記号に還元していく〈ユートピア〉的な一面を表しているといえる。また、ミュウの真っ白な髪の毛は、そのような「汚れ」や「混乱と矛盾」を排除した潔白な状態を象徴する。このように考えると、既婚者であり同性愛どころか性欲そのものを持たないミュウが、なぜ十七歳年下のすみれに惹かれたのかが説明できる。すみれは「汚れ」を経験したことがない処女、つまり純潔と潔白を象徴する存在だったのである。冒頭で述べたように、〈ユートピア〉においては歴史の発展が頂点に達しているのも、それ以上の変化・生成、つまり歴史は存在しない。逆にいえば、歴史とは常に変化・生成する、「矛盾とアイロニー」に満ちたものである。ミュウの観覧車での出来事が象徴するのもそのような「矛盾とアイロニー」に満ちた「歴史」なのかもしれない。たとえば、次のように脈絡もなく現れる「彼ら」という語は、それを裏

20) 村上春樹（2004）『アフターダーク』講談社、p.89、なお引用は講談社文庫版（2006）から



付ける手がかりとなっている。

どんなことにだって語るべきときがあるのよ、とわたしはミュウを説得する。そうしないと人はいつまでもその秘密に心を縛られ続けることになる。

わたしがそう言うと、ミュウは遠くにある風景を眺めるように、わたしを見る。彼女の瞳のなかで何かか浮かび上がり、ゆっくりと沈んでいく。彼女は言う、「ねえ、わたしの側には清算するべきものなんてもう何もないのよ。清算するのは彼らであって、わたしじゃない」(p.218)

ミュウはその異様な情景から目をそらせることができなかった。ひどく気分が悪かった。喉がからからに渴き、唾を呑み込むこともできない。そして吐き気がした。なにもかかが中世のある種の寓意画のようにグロテスクに誇張され、悪意に満ちて感じられた。ミュウは思った。彼らはわたしにそれをわざと見せているのだ。彼らは私が見ていることをちゃんと知っているのだ。でもミュウは目をそらせることができなかった。(p.235、傍点引用者)。

## 5. 「汚れ」とイニシエーション

『スポーツニクの恋人』の中には、観覧車、人工衛星、すみれの父の鼻のDNA、ブーメラン、竜巻、すみれの夢のなかの螺旋の階段など、円環や螺旋のイメージが遍在している。円環・螺旋のモチーフは主に死と再生の象徴として用いられる場合が多い<sup>21)</sup>。死と再生の永劫運動は、一見無限に繰り返される反復運動をイメージしがちであるが、すみれが「帰ってきたブーメランは、投げられたブーメランと同じものではない」(p.214)と語っているように、それは同一状態の反復ではなく常に新しい誕生を意味する。そういう意味で、あらゆる死と再生のイニシエーション(通過儀礼)は歴史の鏡像(入れ子)として存在するのかもしれない。すみれもミュウが属する「あちら側」=〈ユートピア〉を1回通過して再び「こちら側」に帰還する。つまり、村上春樹のほとんどの小説がそうであるように、『スポーツニクの恋人』もすみれにおけるイニシエーションの物語なのである。それはすみれが「あちら側」に行く前に残した「文書1」における次のような独白からも確認することができる。

わたしはミュウを抱き、彼女に抱かれたいと思う。わたしは既にあまりに多くの大事なものを明け渡してきた。わたしはこれ以上、彼らに何も与えたくない。今からでもまだ遅くはない。そのためにはわたしはミュウと交わらなくてはならない。彼女の身体の内側にまで入ってしまわなくてはならないのだ。彼女にわたしの身体の内側にまで入ってもらいたいのだ。貪欲なぬめぬめとした二匹の蛇のように。(p.213)

21) アト・ド・フリース(1984)『イメージ・シンボル事典』大修館書店

すみれはミュウとの交わりを2匹の蛇が互いの内側に入る様子に喩えているが、これが連想させるのは、いうまでもなく、みずからの尻尾をくわえた蛇、ウロボロスである。2匹の蛇が互いの内側に入るには互いの尻尾を飲み込むのが唯一の方法なのである。蛇そのものが脱皮を繰り返して成長していく死と再生の象徴であるように、ウロボロスもやはり死と再生、無限性などを象徴する。

注意すべきことは、上の文章においても指示対象を持たない「彼ら」が再び現れているところである。すみれが言う「彼ら」はいったい誰のことなのか、それはミュウにおける「彼ら」と同一の対象を指示しているのか。これについては後述することにして、まずすみれにおける死と再生のイニシエーションの問題に立ちかえることにする。従来の村上春樹の小説におけるイニシエーションのモチーフは、主にエディプス・コンプレックスや〈去勢〉などの精神分析理論の概念を想起させるものであったが<sup>22)</sup>、それは小説の主人公たちがほとんどの場合、男性であったことと深く関係している。男性の性的な成長は成長以前と以降の断絶を裏付ける肉体的な印がほとんど存在しない。したがって、肉体的な印の不在の代わりに隠喩的なイニシエーションによって男性の成長は根拠付けられる。

それに対して、女性の成長は、子供から受胎可能な女の子へ成長する際の月経、また女の子から大人の女性に変貌する処女の喪失など、より即物的であり、肉体的な印に根拠付けられたものである。なお、この二つのイニシエーションの共通点は、両方とも「血が流されなくてはならない」という点、すなわち、両方とも「汚れ」として捉えられるという点にある。『スポーツニクの恋人』にはすみれの月経についての記述はないが、処女の喪失については、小説の前半で作家としての成熟に関する会話の中で暗示的に表れている。

(前略) 門が出来上がると、彼らは生きている犬を何匹か連れてきて、その喉を短剣で切った。そしてそのまだ温かい血を門にかけた。ひからびた骨と新しい血が混じりあい、そこではじめて古い魂は呪術的な力を身につけることになる。そう考えたんだ。(p.26)

「ぼく」は小説を完成する行為を「門」に血をかける儀式に喩えている。この比喩にすみれの処女の喪失が含意されていることはいうまでもない。犬の喉を短剣で切る場面は、むしろ少年における〈去勢〉を想起させる側面もあるが、女性における「汚れ」は、男性の〈去勢〉にあたるものであると捉えると違和感はない。また、このあとに続く、「わたしには性欲だってないのよ」というすみれの台詞から、小説家としての成熟と女性としての成熟(汚れ＝処女の喪失)が相同的に結びついて語られていることがわかる。すみれの成長物語はそのまま一種の物語論として解釈可能になっているのである。そもそもなぜすみれは22歳という年齢になるまで処女を守っていたのか(あるいはなぜ性欲を持たなかったのか)。そ

22) 同前「統合と分裂—『ねじまき鳥クロニクル』論」参照

れに対する答えもやはり小説に関する内容と重なっている。小説の冒頭には、すみれがもっとも好んでいた作家としてジャック・ケルアックの話が出てくる。すみれはケルアックの「小説の登場人物みたいにワイルドでクールで過剰になれる」ために真剣に思い悩んでいたと語られ、次のような『ロンサム・トラヴェラー』<sup>23)</sup>中の「山上の孤独」の一節が引用されている。

人はその人生のうちで一度は荒野の中に入り、健康的で、幾分は退屈でさえある孤独を経験するべきだ。自分がまったくの己れ一人の身に依存していることを発見し、しかるのちに自らの真実の、隠されていた力を知るのだ。(p.10)

すみれはこのような孤独で現実世界と隔離された世界に閉じこもって「毎日山の頂上に立って、ぐるっと360度まわりを」見まわして、あとは「好きなだけ本を読み、小説を書く」生活が「まさにわたしの求めている人生」であると語る<sup>24)</sup>。これは端的にいうと、現実世界の「混乱や矛盾」が排除された一種の文学的〈ユートピア〉であり、作家の村上春樹に還元して言えば、「デタッチメント」の世界である。前に引用した吉田の批判—「『スプートニクの恋人』は社会的に大きな事件を題材とするのでも歴史性を意識するのでもなく、かつての村上春樹を思わせるような、狭く限定された世界・人間関係を扱う作品だった。

(中略)ところが、そんなデタッチメントからコミットメントへの移行はどうなったかと訝しく思うほど『スプートニクの恋人』は孤独の陰影が濃くなってきている—は、おそらくこのようなすみれの願望が小説全体を貫いているという判断からのものであろう。しかし、すみれの孤独癖、言い換えれば、文学的〈ユートピア〉志向はあくまでも物語の出発点として設定されている。

孤独癖あるいは人間嫌いの傾向を英語でmisanthropyというが、男嫌いを意味する「ミサンドリー (misandry)」は本来この孤独癖 (misanthropy) という語と同義である。この語源的な事実からもわかるように、現実世界の「混乱や矛盾」を排除しようとする孤独癖と「汚れ」 (= 処女の喪失) を恐れる傾向は同一の根を持つのである。したがって、すみれが「血が流されなくてはならない」という教訓を実行するためにミュウを選んだのは、ある意味自然な成り行きではあるが、その目的とは矛盾する場違いな選択だったのである。すみれの〈ユートピア〉志向を裏付けるもう一つの手がかりは、ほかでもない、「すみれ」という名前である。

「すみれ」という花の学名はmanshurica、すなわち「満州」である。様々な作品の中で満州を題材にし、しかも前作『ねじまき鳥クロニクル』ではもっとも重要な題材として満州

23) 日本語版は中上哲夫 (1996) 『孤独な旅人』新宿書房、なお、引用文の中上訳は「何人も一度も健康を体験することなくして人生を渡っていくべきではない、荒野での退屈な孤独さえも意味がある、自分自身を発見したばかり自分自身を頼りその結果真のそして隠れた力を学ぶのだ」

24) 同前『スプートニクの恋人』p.10

国を用いた村上春樹が、「満州」という学名に気づかずに偶然「すみれ」という名前をつける可能性はほとんどゼロに近い。満州国が五族協和の王道楽土を理念とする理想国家＝〈ユートピア〉を目指し、現に満州国に移住した日本や朝鮮の人々が夢見ていたのはそのような〈ユートピア〉であった<sup>25)</sup>ことは周知の通りであるが、注目すべきことは、村上春樹がオウム真理教と満州国の間に次のように共通点を見出していることである。

唐突なたとえだけれど、現代におけるオウム真理教団という存在は、戦前の「満州国」の存在に似ているかもしれない。一九三二年に満州国が建国されたときにも、ちょうど同じように若手の新進気鋭のテクノクラートや専門技術者、学者たちが日本での約束された地位を捨て、新しい可能性の大地を求めて大陸に渡った。彼らの多くは若く、新しい野心的なビジョンを持ち、高い学歴と優れた才能を持っていた。しかし日本という強圧的な構造を持つ国家の内側にいるかぎり、そのエネルギーを有効に放出することは不可能であるように思えた。だからこそ彼らは世間のルールからいったんはずれても、もっと融通のきく、実験的な新天地を求めたのだ。そういう意味では—それ自体だけをとってみれば—彼らの意志は純粹であり、理想主義的でもあった。おまけにそこには立派な「大義」も含まれていた。「自分たちは正しい道を進んでいるのだ」という確信を抱くこともできた。<sup>26)</sup>

『スポーツニクの恋人』がオウム真理教の信者たちをインタビューした『約束された場所で』とほぼ同時期に書かれた作品であることは前にも述べた。村上春樹がオウム真理教の信者たちとの会話で得られた省察を『スポーツニクの恋人』にも反映していることは、すみれという名前からも明らかになるのである。満州国やオウム真理教という〈ユートピア〉に駆けつけた純粋な意志も持つ多くの若者と、〈ユートピア〉の住人であるミュウに惹きつけられたすみれとを重ね合わせることは、それほど難しいことではない。前にも述べたように、〈ユートピア〉の住人の特徴は交換可能性・記号性にある。村上春樹の小説においては、このような記号性＝交換可能性は「トニー滝谷」の場合のように、しばしば他人の洋服を譲り受けるエピソードとして表れる。人間が身体の数値という数値に還元されるのである。ミュウと共に働くようになったすみれは、ミュウの友達が着ていた洋服を譲ってもらう。そして、彼女が本来そなえていた個性を失い、急速に記号化していく。わずか三週間ぶりに彼女と再会した「ぼく」が、「彼女はほとんどありのままの姿を世界にさらしていた。でもどういいうわけか、すみれの姿が最初うまく見分けられなかった」とつぶやくほどである。すみれ自身にも「ミュウと寄り添うためには、わたしは極端に身軽になる必要がある。思考するという基本的な行為すら、わたしにはけっこう重荷になってしまう」と自覚する。前に引用した「わたしは既にあまりに多くの大事なものを明け渡してきた。わたしはこれ以上、彼らに何も与えたく

25) 山室信一(1993)『キメラ 満州国の肖像』中公新書、など参照

26) 同前『約束された場所で』p.326

ない」というすみれの台詞は、〈ユートピア〉に自我を譲り渡し、自らは思考することすら止めてしまったことへの抵抗を表し、「彼ら」とは〈ユートピア〉的状況そのものとそこに属している人々を表す総称であろう。

そう考えると、すみれはミュウと恋に落ちた時点ですでに本来いるべき場所（こちら側）から離れ、「あちら側」に渡ったことになる。2人が休暇を過ごしたギリシャの島は、それ自体日本から遠く離れた「あちら側」であり、外部世界を排除した2人だけの〈ユートピア〉なのである。しかし、〈ユートピア〉の中で急速に記号化されつつも、すみれは「これ以上、彼らに何も与えたくない」と抵抗をつづけ、「人が撃たれたら血は流れるものだ」と現実世界の混乱や矛盾＝汚れをありのまま受け入れようと努める。「そのためにはわたしはミュウと交わらなくてはならない」と決意するのは、ミュウとの性的交渉を試みることによって「汚れ」の受容を実行に移すためのものである。そして、ミュウに性的交渉＝「汚れ」を拒まれたことを機に、すみれはその島（あちら側）から姿を消し、さらなる「あちら側」に移ってしまったのである。「あちら側」のさらなる「あちら側」とはいったいどこなのか。もちろんその「あちら側」の世界は、トルコ軍＝「アジア的もの」によって串刺しにされ血を流し、銅像になってからもかめめの糞をかけられるギリシャの島の英雄のように、現実世界の「混乱や矛盾」による「汚れ」を経験する場所である。逆説的な話であるが、後者の「あちら側」が示している場所は、ほかでもない「こちら側」なのである。すみれの失踪が意味するのは本来の意味での失踪ではなく、「あちら側」からの帰還であり、「文書1」の最後の文章が意味するのもそれである。

この文章は自分自身にあてたメッセージだ。それはブーメランに似ている。それは投げられ、遠くの闇を切り裂き、気の毒なカンガルーの小さな魂を冷やし、やがてわたしの手の中に戻ってくる。帰ってきたブーメランは、投げられたブーメランと同じものではない。わたしにはそれがわかる。ブーメラン、ブーメラン。（p.214）

冒頭でも少し触れたが、〈ユートピア〉の起源はトーマス・モアの『ユートピア』ではなく、プラトンの『国家』である。トーマス・モアはルネサンス期におけるギリシャ文化への探求の中でそれを再発見しただけである。そして『国家』における〈ユートピア〉像は、ペルシア戦争を背景に古代ペルシアが象徴する「アジア的なもの」に対抗してギリシャの「合理的なもの」を守ろうとする願望から生まれたものであると前にも述べた。そういう意味で、すみれとミュウが滞在したトルコ国境に近いギリシャの島は、〈ユートピア〉の起源とも言える場所であり、〈ユートピア〉そのものなのである。そして、それと国境を接しているトルコは、「アジア的なもの」、あるいは「混乱と矛盾」、「変化・生成」、「歴史」を象徴する場所なのである。つまり、すみれが向かった「あちら側」は、ギリシャの島の「あちら側」としての「トルコ」を示しているとも言い換えられる。すみれはあたかもブーメランのよう

に、ミュウと出会ったことによって一回「あちら側」＝ギリシャの島＝〈ユートピア〉にわり、またそのさらなる「あちら側」としての「こちら側」＝「トルコ」＝「アジア的なもの」＝「歴史」に帰還したのである。

## 6. 高い塔と分裂

以上の議論を踏まえて考えると、小説に挿入された「人食い猫」のエピソードが含意するものが明らかとなる。飼い主が心臓発作で突然死んでしまい、閉ざされたマンションの中に残された猫たちは、飢えに耐えず飼い主の死体を貪るようになる。ここで閉ざされたマンションは外部の「汚れ」を排除した隔絶された〈ユートピア〉を表し、猫たちはその〈ユートピア〉が掲げた理想なり理念なりである。そして死んだ飼い主はその〈ユートピア〉を成立させた英雄または生命力を意味する。金日成も麻原彰晃も最初は人を惹きつける何かを持っていたのである。しかしその何かがひとたび消滅し、外部との疎通を持たなくなった〈ユートピア〉の理想や理念は、かえって人間に危険をもたらす「人食い猫」になるのである。

すみれが残した「文書 1」のなかに〈すみれの夢〉の話が出てくる。すみれは死んだ母に会うために螺旋階段を上って「高い塔のてっぺん」に到達する。しかし、そこに着いた瞬間、「母親の姿は穴の奥に引きこまれて」消えてしまう。すみれは母親と引き裂かれたまま、高い塔の頂上に 1 人で取り残されてしまうのである。この螺旋形の高い塔が連想させるのは、いうまでもなく、「創世記」におけるバベルの塔の話である。バベルの塔の話は、前掲「分裂と統合—ねじまき鳥クロニクル」でも言及したギリシャ神話のマルシュアス物語と同一のメタファーを持つ物語である。すなわち、両方とも神の全能性に挑戦した者は、必ず〈分裂〉という神の復讐をうけるというメッセージが含意されているのである。マルシュアスは皮を剥ぎ取られたが、バベルの塔を建てた民たちは言葉で分裂させられ、「全地にちらされる」のである。ミュウが観覧車の出来事以来韓国語を勉強することになったこと、また、すみれがミュウと共に働くようになってから最初にさせられたのは、イタリア語の勉強だったことを思い出せば、作家がバベルの塔の話を意識していたことが明らかとなる。さらに、同じく「分裂と統合—ねじまき鳥クロニクル」でも述べたように、母胎回帰願望とは、母との自他未分化状態における全能性への回帰願望でもある。すみれの孤独癖＝文学的〈ユートピア〉志向も、ミュウと恋に落ちたのも、すみれの母胎回帰願望の延長として捉えることができる。つまり、〈すみれの夢〉が含意しているのは、幼児的な全能性に留まろうとした者にもたらされる分裂という、『ねじまき鳥クロニクル』とまったく同一のテーマなのである。注目したいのは、塔に残されたすみれが「匿名的な、長くて白いガウンを着ていた」こと、そしてしまいには、それを脱ぎ捨てて裸になる場面である。前にも述べたように、白は

「潔白」、または「汚れの排除」を象徴する色であり、トーマス・モアの『ユートピア』の住民たちが白い服を着ていたように、〈ユートピア〉を代表する色である。またオウム真理教の信者たちが着ていた服もやはり「長くて白いガウン」であったことはいうまでもない。その白い服を脱ぎ捨てる場面は、〈ユートピア〉の孤立状態から抜け出そうとするすみれの意志を表すのである。このような『ねじまき鳥クロニクル』との連続性は、小説の最後の「にんじん」のエピソードにも暗示されている。「にんじん」少年はスーパーマーケットで3回にわたって万引を行う。万引した品は、最初はシャープ・ペンシル、2回目はコンパス、そして最後がホッチキスである。シャープ・ペンシルはフロイトの理論における父親のペニスへの恐怖、つまり〈去勢〉を想起させる。次のコンパスは、英語でいうと羅針盤の意味がある。羅針盤は針の両端が南北に反対方向を指すものであり、〈分裂〉の象徴として機能する。そして最後のホッチキスはいうまでもなく、その分裂をつなぎとめるもの、すなわち〈統合〉の象徴なのである。「ぼく」は「にんじん」とのやりとりの中で、彼の母親との関係に何か欠けていることに気がつき、彼女との関係を清算する。また、すみれが愛好する作家ジャック・ケルアックは1960年代のアメリカのカウンターカルチャーの代表者であり、ヒッピー文化の旗手でもあった。前にも触れたが、1980年代のニューエイジ・ブームはヒッピー文化の二番煎じのようなものであり、オウム真理教もその流れの中で生まれたものである。しかし、ヒッピー文化にあって、オウム真理教に欠けていた何かがあった。その何かとはいったい何なのか。「ぼく」は「理想的な夏休み」を過ごしたある日、リュック・ベッソンの映画を見たと言っている。時代から換算すれば、「フィフス・エレメント」（1997年）であることがわかる。「フィフス・エレメント」、つまり第5元素とは、プラトンの『ティマイオス』における4元素説が下敷きになったものである。付言すれば、『ティマイオス』にはプラトンが『国家』で説いた理想国家と対立する敵対国家として、アトランティス伝説が登場する。巖谷によれば、アトランティスはプラトンの理想国家が象徴する人工性・合理性に対して、自然的なもの・アジア的なものを象徴する国であったという。話を戻せば、第5元素とは、火、水、土、空気の4元素を〈統合〉するものとしての〈愛〉を表す。ヒッピーを含む1960年代の若者たちのスローガンは「戦争より愛を」であったことは有名である。「ぼく」がすみれには抱いて「にんじん」の母親には抱いていなかったもの、それもやはり「愛」である。『スプートニクの恋人』は「風変わりweird」ではあるが、やはり「愛の物語love story」であったことには間違いない。

## 7. おわりに

文学的〈ユートピア〉から離れ現実世界の経験を積むこと、また男嫌いを克服する（＝処

女を捨てる) ことという二つの課題を果たすためにすみれが選んだ相手は、皮肉にも同じく〈ユートピア〉の住人であり、また同じく女性であるミュウであった。小説の最大のアイロニーはこの矛盾する設定にある。ミュウはすみれが汚れを経験したことがない処女であるために彼女に惹かれ、すみれは汚れを経験するためにミュウを選択するというアイロニー。このアイロニーを通過することなしにはすみれが「あちら側」にたどり着くこともできなかったはずである。『スプートニクの恋人』がもしすみれと「ぼく」とのラブストーリーであったならば、小説はすみれの通過儀礼の物語としてより整合性のとれたものになっていたであろう。しかしそのような物語世界こそ現実世界の矛盾や混沌を〈排除〉した文学的〈ユートピア〉に他ならない。文学的〈ユートピア〉から抜け出すためにミュウというもうひとつの〈ユートピア〉を選ぶというすみれのアイロニーは、小説に埋め込まれた現実世界のアイロニーの紋中紋なのである。

以上で見てきたように、『スプートニクの恋人』に見出される〈ユートピア〉は、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』における〈ユートピア〉のように、現実世界と距離を置こうとする作家の心的状況を反映した、空想的空間ではない。作家は現実世界における〈ユートピア〉—北朝鮮・オウム真理教・満州—を小説のなかに刻み込むことによって、〈ユートピア〉志向がもたらす危険性について警告を発している。『スプートニクの恋人』以降の小説においても〈ユートピア〉は繰り返し表れる。しかしそれは、「世界の終り」のような想像上の空間でも、北朝鮮のような日本とかけ離れた空間でもない。それは『アフターダーク』『1Q84』などの例が示しているように、今の日本をそのままかたどったような、現実の鏡像としての〈ユートピア〉である。村上春樹小説における〈ユートピア〉は今の進化を続けているのである。



## 【参考文献】

- 五百旗頭真（2005）『日米戦争と戦後日本』講談社学術文庫  
井口正俊・岩尾龍太郎編（2001）『異世界・ユートピア・物語』九州大学出版会  
巖谷國士（2002）『シュルレアリスムとは何か』ちくま学芸文庫  
オーウェル・ジョージ（2009）『一九八四年』早川書房  
ケルアック・ジャック（2004）『孤独な旅人』河出文庫  
清水良典（1999）「作者の〈闇＝病み〉の深さ 村上春樹『スプートニクの恋人』」  
「すばる」、1999年7月号  
ジル・ラビュージュ（1988）『ユートピアと文明 輝く都市・虚無の都市』紀伊国屋  
書店  
ハクスリー・オルダス（1974）『すばらしい新世界』講談社文庫  
林郁夫（1998）『オウムと私』文藝春秋  
プラトン（1979）『国家』岩波文庫  
フリース・アト・ド（1984）『イメージ・シンボル事典』大修館書店  
波平恵美子（2009）『ケガレ』講談社学術文庫  
山室信一（1993）『キメラ 満州国の肖像』中公新書  
吉田春生（2001）『村上春樹とアメリカ』彩流社  
村上春樹（1998）『約束された場所で』文藝春秋  
村上春樹「特集 村上春樹ロングインタビュー」「考える人」、2010年夏号  
村上春樹（2010）「アウトサイダー」『夢を見るために毎朝僕は目覚めるのです』  
文藝春秋  
村上春樹「ロングインタビュー 物語はいつも自発的でなければならない」「広告批  
評」、1999年10月号  
モア・トーマス（1957）『ユートピア』岩波文庫

## 要 旨

本論は、村上春樹の小説のなかでもっとも評価が低く、先行研究の数も圧倒的に少ない『スポーツニクの恋人』をとりあげる。『スポーツニクの恋人』は、〈コミットメント〉の実践として一定の評価を得た『アンダーグラウンド』と『約束された場所で』のふたつのノンフィクションの後に発表された最初の長編小説として注目をあつめたが、恋愛小説というジャンルに対する先入見と謎めいた内容によって、小説が内包する〈コミットメント〉の側面は等閑視されてきた。そこで本論では、〈コミットメント〉への転換以前と以後の作品に共通して表れる〈ユートピア〉のモチーフに着目する。〈ユートピア〉とは外部の混沌や汚れを〈排除〉した隔絶された世界のことであるが、たとえば前期の『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』における〈ユートピア〉と後期の『アフターダーク』で見出される〈ユートピア〉は類似するどころか、むしろ対立的するものとして描かれている。それは現実世界の混沌や汚れの〈排除〉に対する作家の態度の変化と深く関わっている。そこで、小説のもっとも謎めいた場面であるミュウの観覧車体験とすみの夢の話のメタファーを綿密に分析することによって、それらが北朝鮮やオウム真理教などの現実世界の〈ユートピア〉とどのように結びついていくのかを明らかにする。

キーワード：村上春樹、『スポーツニクの恋人』、ユートピア、  
イニシエーション、コミットメント、デタッチメント、北朝鮮

투 고 : 2011. 8. 31  
1차 심사 : 2011. 9. 10  
2차 심사 : 2011. 10. 1

# 정비석의 『자유부인』 과 다니자키준이치로의 『열쇠』

- 오선영, 이쿠코를 중심으로 한 비교연구 -

吳秉禹\*

(e-mail: hl5bhe@hanmail.net)

---

## 目次

---

- 一 序論
  - 二 本論
  - 三 結論
- 

### 一 序論

1954년1월1일 부터 8월6일까지 「서울신문」에連載된 鄭飛石<sup>1)</sup>의 베스트셀러 作品 『자유부인』<sup>2)</sup>은 韓國文學歷史上 典例가 없는 社会的인 反響을 불러일으켜서 猥褻 시비에 올랐던 点이 1956년 1월 「中央公論」에 掲載되었다가 大胆하고 露骨的인 男女性의描写가 社会的, 道德的 物議를 일으켜 3개월간 中止된 다니자키준이치로(谷崎潤一郎)의 作品 『열쇠(鍵)』와 첫 번째 共通分母를 이루고 있고 또한 두 作品의 구성이나 주제 등에 있어서 몇 가지 뚜렷한 공통점을 찾을 수 있다.

『자유부인』은 한글에 관한 일이라면 四足を 못 쓰는 소장파 한글학자 張泰淵교수(42세)의 부인 吳善英여사(35세)가 家庭에서 脱出하여 自由를 滿喫하다 脱線의 길로 빠진다는 内容을 담고 있는데 이는 當時로서는 破格的인 設定

---

\* 대구예술대학교 일본어학과 교수. 일본근현대문학 전공.

1) 정비석(1911.5.21~1991.10.19)의 본명은 瑞竹이다. ‘飛石’은 스승이었던 김동인이 지어준 이름으로 1911년 평안북도 의주에서 出生하여 1932년 日本大學 문과를 중퇴하고 한국으로 帰国하여 「매일신보」에서 記者로 勤務했다.

2) 長篇小說 『자유부인』은 當時 大衆의 爆発的인 人氣를 받은 作家 정비석의 代表作이다.

으로 다니자키준이치로<sup>3)</sup>의 작품 『열쇠(鍵)』<sup>4)</sup>에 등장하는 56세인 대학교수 남편<sup>5)</sup>과 45세의 아내인 이쿠코(郁子)의 人物形成過程과 남자주인공들의 직업이 대학교수라는 두 번째 共通分母를 이루고 있는 것이 特徵이라 하겠다.

『자유부인』은 煽情的인 주제로 대중의 人氣洗禮를 받고 猥褻是非에 오르는 등 破格的인 行動을 敢行한 작품인 탓에 保守的인 主제의식에서 脱皮한 것처럼 생각되지만 作家가 傳達하고자 하는 주제는 오히려 보수적인 價值觀을 擁護하는 것인 반면 『열쇠』는 고루하고 도덕적인 집안에서 성장한 아내가 대학교수인 남편에 의해 性的으로 墮落해가는 과정을 그린 작품이다. 『자유부인』과 『열쇠』의 두 작품이 연재소설로 출발한 한, 일 양국의 대중소설이라는 점에 있어 세 번째 共通分母의 성격을 띠고 있다.

『자유부인』은 오선영의 生活를 통해 6.25전쟁 이후의 混亂한 社會實態를 보여주며 이를 批判하고 있는 작품으로 한국 社會가 經驗한 1950년대는 極甚한 混亂期로 전쟁과 함께 밀려온 西歐의 발달된 都市文明과 封建社會의 倫理觀이 衝突하고 傳統的인 共同体가 瓦解되고 資本主義를 基盤으로 한 도시가 형성되기 시작한 시기다. 또 미국 자본주의에 대한 憧憬으로 社會全般에 自由主義思想이 유행하면서 전통적인 倫理觀에 의해 抑壓되어 온 개인의 慾望이 표출되기 시작한 시기다. 작가 정비석은 극심해진 여러 계층의 不正腐敗에 대해 社會지도층 인사들을 작품의 中心人物로 設定해 批判함으로써 事態의 深刻을 주장하려 했다.<sup>6)</sup> 그런데 이러한 작가의 社會 비판 意識은 封建社會의 家父長

- 3) 1886년 東京에서 出生 하여 東京帝國大學 國文科에 입학하여 1910년 「문신(刺青)」이라는 處女作을 발표하면서 当代의 自然주의 潮流를 拒逆, 새로운 浪漫主義 가치를 내걸며 처음부터 耽美的인 傾向으로 문단에 등단하고 세상을 떠날 때까지 오직 耽美主義로 初志一貫했으며 수많은 力作들을 발표하고 말년에는 노인의 性을 赤裸裸하게 드러내어 文壇을 놀라게 하였다. 『열쇠(鍵)』역시 老人의 性을 다룬 작품으로 분류된다.
- 4) 『열쇠(鍵)』 첫 회분이 雜誌에 發表되었을 때부터 日本國會에서까지 問題提起를 삼아 작가는 執筆 도중에 들려오는 與論에 휘말려 심한 苦草를 겪었지만 작가는 露骨的인 性的 描寫를 文題로 삼기에는 이 작품은 사실성이 欠如된 抽象的인 소설일 뿐이라고 말했다. 그 후 제2회는 「中央公論」 5월호에 제1회분을 다시 掲載하면서 12월호까지 한 번도 빠지지 않고 제9회로 작품을 完成시킨다. 1954년 1월 1일부터 8월 6일까지 「서울신문」에 連載한 長篇小說 『자유부인』은 1956년 1월 「中央公論」에 掲載된 『열쇠』보다 2년이나 앞서 발표되어 두 작품의 상호 영향성에 있어 『열쇠』가 『자유부인』에게 영향을 주었다고는 할 수 없을 것이다.
- 5) 작품에서는 대학교수의 이름을 알 수 없고 또한 대학교수라는 品位에 걸 맞는 연구행위는 전혀 찾을 수 없는 반면에 『자유부인』의 교수는 한글학자의 연구자적인 資質과 모습은 여실히 보여주고 있는 것이 특징이다.
- 6) 작가는 倫理的인 인물로 대표되는 대학교수조차 잘못된 價值觀을 가지고 있음을 批判하고 이러한 작가의 態度는 당시 대학교수들을 唐惶하게 만들었다. 서울대 황산덕교수가 서울대에서 發行하는 「대학신문」에 작가가 대학교수를 嘲弄하고 있다는 내용의 寄稿를 실어 論爭을 일으키나 작가 정비석은 이러한 교수의 脫線을 가볍게 處理하고 넘어간다.

的 價值觀으로 인해 屈折되어 있다. 그로 인해 사회 지도층의 非倫理的인 行為에 대해 批判하면서 그 비판의 基準을 남성과 여성에게 다르게 適用한다. 즉 비윤리적인 여성은 封建社會의 家父長的 價值觀에 違背되는 인물이다. 비윤리적인 남성은 사기꾼 백광진<sup>7)</sup>, 부정부패한 정치인 오병헌<sup>8)</sup>, 점수를 돈으로 사거나 춤에만 빠져 있는 학생 원효삼<sup>9)</sup>, 신춘호<sup>10)</sup> 등이지만, 비윤리적인 여성은 직업을 가지거나 다른 남자와 파티에 참석한 오선영, 사기꾼의 뺨에 빠져 이혼한 최윤주<sup>11)</sup>, 화교회(花交會)의 여성회원들은 가정을 돌보지 않고 모임만 쫓아다니고 있다.

『열쇠』에는 네 사람의 남녀가 登場하고 主人公 나(대학교수<sup>12)</sup>)와 기무라<sup>13)</sup>는 교토(京都)에 居住하는 人物로 師弟之間이면서도 교육자적인 言行과는 거리가 먼 行動을 스스로없이 하는데 그것은 勿論 작가의 意圖된 계산속에서 描写되었고 대학교수의 아내인 여주인공 이쿠코(郁子)와 고명딸 도시코<sup>4)</sup>(敏子)도 마찬가지로 道德的 行為와는 거리가 먼 인물로 형상화 되어가는 母女關係로 구성되어있다. 네 사람 모두 陰險한 성격의 所有者로 描写되고 있듯 그들이 마음의 움직임은 보인 것은 단순한 性에 대한 欲求 때문이다. 그리고 그것을 虐待하기 위해 다른 모든 感情과 지성도 除去해 버렸다. 이 作品의 형식상 구조적 特徵으로 56세인 대학교수 남편과 45세 아내의 日記가 교대로 叙述되었으며 그것은 표면적으로는 비밀을 간직한 日記로 隱匿場所 때문에 夫婦는 서로 苦悶하지만 그것이 相처에게 隱秘할 것을 처음부터 考慮하고 있고 게다가 읽어보았다는 것을 조금도 표내지 않으려고 애쓴다. 그리고 일기를 써가는 동안에 상대방이 읽어 주기를 내심 希求하면서 자신의 性的慾望을 의식적으로

- 
- 7) 백광진이 사기꾼으로 서술되고 이십 만환짜리 수표를 부도내고 애인을 임신 시키는 沒廉恥의 극을 달리는 인물형성과정을 거친다.
  - 8) 不正腐敗를 일삼던 오선영의 오빠는 국회의원 선거에 落選해서 債權者를 피해 逃走하고 작품은 부정적인 가치관을 가진 人物들이 破滅하거나 悔改하는 것으로 결말을 짓는다.
  - 9) 미군부대 타이피스트인 박은미하고 결혼하는 원효삼은 국어학사 성적 삼십 점을 팔십 점으로 정정 받기 위해 과자 상자에 삼만 환짜리 보증수표를 賂物로 넣어 장태연교수를 위선자로 轉落시킨다.
  - 10) 오선영이 옆집에 하숙하고 있는 영문과 대학생으로 밤낮 춤만 추러 다니고 학교에는 별로 나가지 않고 오선영의 친정 조카 오명옥하고 결혼하여 미국유학을 떠난다.
  - 11) 오선영의 대학 동기동창생이고 남편이 무슨 국장이고 이혼하여 사기꾼 백광진의 뺨에 빠져 妊娠까지 하고 종로 삼가에 있는 영생의원 中환자실에 입원하는 인생말로의 길을 걷는 인물로 형상화 됨.
  - 12) 대학교수는 慎重한 사람으로 인물이 형상화 되고 아내를 단순한 必需品으로 밖에 생각 않고 그의 纖細하고 알루미늄과 같이 흰 피부가 아내를 소름끼치도록 만든다.
  - 13) 기무라는 술을 잘 못하고 제임스 스튜어트를 닮았고 피부가 매우 희고 直感이 뛰어난 인물로 형상화 되었다.
  - 14) 동지사대학에서 불어를 배운 프랑스인 노부인 집에서 자취를 하고 어머니가 아버지에게 殺害당할 것이라는 念慮에 아버지를 미워하고 어머니보다 20년이나 젊은데도 容貌나 몸매가 어머니보다 못하다는 콤플렉스가 있으며 그녀는 기무라를 은밀히 사랑하고 있다.

傳達되기를 희망하고 상대의 欲求를 자기가 바라는 意圖대로 自覺하기 위한 手段으로 사용한다. 게다가 그것은 상대를 欺滿하기 위한 手段이 되어 상대를 破滅시키는 陰謀가 이 일기 안에 묘사되고 있다.

일반적으로 일기형식을 띠게 되면 告白의 성격의 문장이 되기 쉬워 주인공인 대학교수는 서술자로 되고 아내 역시 일기형식을 빌려서 告白하는 文体로 叙述한다. 이러한 형식을 登場하는 인물의 私人的 体験을 眞率하게 表現하는 데에는 큰 長點을 지니고 주인공인 대학교수의 性的 体験을 率直淡泊하게 상세히 叙述하는 場面은 사회적 윤리, 도덕상으로 도저히 容納될 수 없는 事態를 불러일으키고 만다. 즉 등장인물의 閨房 体験과 절실한 심정 등을 사실적으로 보여 주는데 일기형식이 肯定的으로 寄与했다고 볼 수 있다. 하지만 너무 주관적 서술형식으로 진행된 점과 사건 전개의 폭이 좁아질 수밖에 없다는 점은 일기형식의 限界라 할 수 있다.

어리석은 또는 陰險한 權謀術數들이 이 일기를 통하여 진행되는데 그것은 그들의 생각에 의한 것이 아니고 표피적인 성적 욕구에 따른 것이다. 그들은 자신의 감정도 사상도 그것에 관련되어 있는 모든 생활도 모두 작가에게 완전히 맡겨 그 抽象化된 성분능을 主軸으로 하여 움직인다. 완전히 성분능의 捕虜가 되어 버린다는 抽象的인 役割만이 그들에게 주어지고 있다.

본 연구의 목적은 두 작품에 등장하는 인물들의 형성과정을 중심으로 서술하며 특히 등장인물(오선영, 이쿠코)의 성격을 중심으로 비교, 분석하는 데에 있다. 아직까지 두 작품을 비교 연구한 선행논문이 없다는 것에 커다란 연구의의를 두고 한, 일 양국의 근, 현대문학 비교연구의 관례를 보면 일본에서 먼저 발표된 작품이 시기적으로 뒤에 발표한 한국 작품에 영향을 주었다는 일방적 연구가 거의 주종을 이루고 있으나 이 두 작품만은 그 반대로 한국 작품이 일본의 작품에 영향을 주었다는데 본 고찰의 의의를 두고자한다.<sup>15)</sup>

## 二 本論

『자유부인』은 오선영과 장태연교수라는 두 주인공을 각각의 軸으로 삼고 있지만 전체적인 서사를 主導하는 인물은 오선영이고 『자유부인』이라는 제목에서도 暗示를 알 수 있듯이 이 작품은 오선영이라는 登場人物의 逸脫과 轉落, 悔改의 과정을 主軸으로 하고 있다.<sup>16)</sup>

15) 이는 한국 문학이 일본 문학의 영향을 받았다고 하는 일련의 주장(오병우 「『我の歪んだ英雄』と『小さな王国』」 『일본학연구』 제33집 단국대학교 일본학연구소 2011년5월 간행)과는 달리 발표 연대로 보아 알 수 있듯이 한국 문학이 일본 문학에 영향을 끼친 작품에 대한 연구라는 점에서 그 의의를 찾고자 한다.

오선영의 나이는 남편 장태연교수보다 일곱 살 아래인 서른다섯 이지만 얼굴 형태는 가름한데다가 살결이 흰 바탕이어서 얼른 보기에는 서른 정도밖에 보이지 않고 바른편 입술에서 조금 떨어진 곳에 참새 눈꼴만 한 검은 사마귀가 유난히 귀엽고 玲瓏한 눈이 꽤 聰明하면서도 정열적인 인상으로 R여자 전문대학 재학당시에 장 교수에게 한글을 배우는 동안에 그의 학자적 人格에 감동을 받아 졸업 후에 자진해서 그와 결혼한 것도 그런 정열의 証拠였다.

한편 『열쇠』의 주인공인 나는 금년 1월1일부터 日記를 쓰는 것을躊躇하고 있던 일들을 감히 써 두기로 하고 지금까지 나는 나의 性生活에 관한 것 나와 아내와의 관계에 대해서는 너무 詳細히 쓰지 않으려고 노력해 왔다는 서두에서 알 수 있듯이 『열쇠』는 일기형식을 띤 소설이라 하겠다.

「一月一日。僕ハ今年カラ、今日マデ日記ニ記スコトヲ躊躇シテキタヤウナ事柄ヲモ  
敢テ書キ留メルコトニシタ。僕ハ自分ノ性生活ニ関スルコト、自分ト妻トノ關係ニツイテ  
ハ、アマリ詳細ナコトハ書カナイヨウニシテ来タ。」 (『鍵』 p3)17)

「1월1일. 금년부터 나는 오늘까지 일기를 쓰는 것을 주저하고 있던 일들을 감히 써 두기로 했다. 지금까지 나는 나의 성생활에 관한 것 나와 아내와의 관계에 대해서는 너무 자세히 쓰지 않으려고 가능한 노력해 왔다.」

夫婦사이의 性的滿足을 위해 쓰기 시작한 일기는 남편을 죽음으로 몬 아내가 魔女의 성격을 띤 인물로 뜻하지 않는 방향으로의 結果를 招來한다. 『열쇠』를 대학교수 중심으로 스토리로 읽어 가면 「嫉妬→興奮→発作→죽음」이라는 과정으로 작품분석이 가능하다.

교토에 있는 고루한 집안에서 태어나 封建的인 분위기 속에서 성장한 이쿠코는 오늘날까지도 시대에 뒤떨어진 윤리관을 尊重하며 그것을 자랑으로 여기는 경우도 있고 태어날 때부터 陰性的이고 秘密을 좋아하는 버릇이 있다

「古風ナ京都ノ旧家ニ生レ封建的ナ空氣ノ中ニ育ツタ彼女ハ、今日モナホ時代  
オクレナ旧道德ヲ重ンズル一面ガアリ、或ル場合ニソレヲ誇リトスル傾向モ  
アルノデ、マサカ夫人ノ日記帳ヲ盜ミ讀ムヤウナコトハシサウモナイケレド  
モ、シカシ必ズシモサウトハ限ラナイ理由モアル。(省略)彼女ハ生レツキ陰性  
デ、秘密ヲ好ム癖ガアルノダ。彼女ハ知ツテキルコトデモ知ラナイ風ヲ装ヒ、  
心ニアルコトヲ容易ニ口ニ出サナイノガ常デアルガ、悪イコトニハソレヲ女ノ  
嗜ミデアルトモ思ツテキル。」 (『鍵』 p3)

16) 작품이 獲得한 대중적 인기나 그 화제성에도 不拘하고 『자유부인』은 지금까지 한국 문학 연구에서 그다지 주목받지 못한 것이 사실이다.

17) 인용문은 谷崎潤一郎(昭和三十三年十二月)「谷崎潤一郎全集第二十八卷」 『鍵』를 이용하고 번역은 필자가 함.

「교토의 고루한 집안에서 태어나 봉건적인 분위기 속에서 자라난 그녀는 오늘날까지도 시대에 뒤떨어진 윤리관을 존중하는 부분이 있다. 어떤 경우에는 그것을 자랑으로 여기는 경우도 있으므로 설마 남편의 일기장을 훑쳐보는 짓은 할 것 같지 않지만, 그러나 꼭 그렇다고만 할 수는 없다. 그녀는 본래 음험하게 태어나 비밀을 좋아하는 버릇이 있다. 그녀는 알고 있어도 모르는 척 가장하고 마음에 둔 것을 좀처럼 입 밖에 내놓지 않는 것이 예사인데 좋지 않게도 그것을 여자의 행실이라고도 생각하고 있다.」

이쿠코가 고풍스런 교토에서 태어나 封建的 분위기 속에서 자라났고 부모에게 順從하고 남편을 사랑할 수밖에 없는 처지를 받아들이고 시대에 뒤떨어진 道徳을 소중히 여기는 일면이 있다.

「古風ナ京都ノ旧家ニ生レ封建的ナ空氣ノ中ニ育ツタ」私は、「父母の命ずるままに漫然とこの家に嫁ぎ、夫婦とはかう云ふものと思」はされて來たのであるから、」 (『鍵』 p 115)

「나는 고풍스런 교토의 옛 집에서 태어나 봉건적 공기를 마시며 자라났다. 나는 「부모님이 시키는 대로 순순히 이 집안에 시집와서 부부란 이런 것이라고 생각하게」 되어 온 것이니까」

대학교수인 나는 올해 56살이고 아내는 45살이 되었을 것이고 精力이 아직 그렇게 衰頹해질 나이가 아닌 데도 어찌 된 일인지 나는 부부관계 때는 쉽게 지쳐 버린다. 그런데 아내는 心臟이 약한데도 불구하고 性的으로는 매우 강하다.

「僕ハ今年五十六歳(彼女ハ四十五ニナツタ筈ダ)ダカラマダソナ衰ヘル年デハナイノダガ、ドウ云フ譯カ僕ハアノコトニハ疲レ易クナツテキテキル。(省略)トコロガ彼女ハ(コンナコトヲ露骨ニ書イタリ話シ足りスルコトヲ彼女ハ最モ忌ムノデアル)腺病質デ而モ心臟ガ弱イニモ拘ハラズ、アノ方ハ病的ニ強イ。」 (『鍵』 p 5)

「나는 올해 56살(집사람은 45살이 되는 셈이다)이므로 정력이 아직 그렇게 쇠퇴해질 나이가 아닌 데도 어찌 된 일인지 나는 부부관계는 쉽게 지쳐 버린다. 솔직히 말해 지금 나는 일주일에 두 번 정도 차라리 열흘에 한 번 정도가 적당한 것이다. 그런데 아내는 (이런 것을 노골적으로 쓰거나 말하는 것을 너무나 꺼린다) 腺病質이고 심장이 약한데도 불구하고 性的으로는 병적으로 강하다.」

원래 체질적으로 性的인 欲求가 강했던 아내가 남편 하나 만으로는 満足하지 못하고 남편의 체력이 貧弱함을 責望하기보다는 오히려 자신의 지나친 性的欲求를 그녀는 부끄러워하는 쪽이다. 이처럼 『열쇠』는 노인의 性を 중심으로 일어난 일상생활을 그린 작품이라 할 수 있겠다.



「なぜかと云ふのに、生まれつき體質的に淫蕩であつた私は、どうでもかうでもさうするより外に生き方はなかつたからである。当時の私が、夫に対して何かの不満を持つてゐたとすれば、それは夫が私の旺盛な欲求に十分な満足を与へてくれないと云ふ点にあつたが、それでも私は、彼の体力の乏しさを咎めるよりは、自分の過度な淫慾を恥ぢる気持の方が強かつた。」 (『鍵』 p115)

「왜냐하면 태어났을 때부터 체질적으로 성적 욕구가 강했던 나는 무슨 일이 있어도 그렇게 할 수밖에 없는 살아갈 도리가 없었기 때문이다. 그 당시 내가 남편에 대해서 어떤 불만을 갖고 있었다고 하면 그것은 남편이 나의 왕성한 성적 욕구에 충분히 만족을 주지 못했다는 점이다. 그래도 나는 그의 부실한 체력을 나무라기보다는 나의 지나친 성적 욕구를 부끄러워하는 쪽으로 몰입하게 되었다.」

아내가 隱密히 기무라를 좋아하고 그녀의 타고난 虚弱한 體質 때문에 과도한 性交는 견디지 못하고 남편의 강요에 의해 마지못한 부부관계를 한다. 딸은 어머니의 건강을 걱정하고 이상 성욕자인 아버지를 증오하고 아버지가 죽어가는 과정을 방관하는 역할을 하기도 한다.<sup>18)</sup> 아버지는 색다른 것을 좋아하여 성적 욕구를 불리일으키는 목적으로 아버지의 제자를 刺戟劑로 삼아 아내에게 접근시킨다.

肉体美로 보나 社交術로 보나 사업 手腕으로 보나 오선영이 누구에게든 지 뒤지지 않을 자신감으로 넘쳤고 이쿠코는 心臟이 허약함에도 불구하고 性的으로 매우 강한 인물로 형상화 되고 있다.

대학교수의 아내이며 장경수, 장인수라는 두 아이의 어머니이자 平凡한 가정주부인 오선영이 脱線의 길에 빠지게 되는 이유는 R여자 전문대학 동창생끼리 한 달에 한 번씩 모이는 화교회(花文會)에 참석한 것이 계기가 된다. 오선영이 맑게 갠 어느 일요일 아침 화교회에 나가기 위해化粧한 모습을 본 남편은 깜짝 놀란다.

「장 교수는 아내를 거들떠보다가 깜짝 놀랐다. 화장을 깨끗이 하고 검정 베르베르 치마에 양색양단 저고리를 입은 아내는, 열 살은 확실히 젊어 보였기 때문이었다. 그렇게 차리고 나서는 열 살짜리와 여덟 살짜리 두 아이의 어머니라 기보다도, 이십 사오 세의 처녀로 밖에 보이지 않았다.」 (『자유부인』 p.279)

18) 大島佳代子は 등장인물들의 범죄행위에 의한 작품분석을 통하여 「범죄소설」로 단정 짓고 있다. 「<犯罪小説>としての『鍵』」 『相模国文』第23号(平成八年) p.57-66

19) 원문은 『자유부인』 정비석 저 「지식을 만드는 지식사」(2010.3.15)에서 간행한 것을 인용하고 잘못된 철자법은 수정하여 사용함.

검정 베르베르 치마에 양색양단 저고리를 입은 오선영이 열 살 정도 젊어 보이며 이쿠코는 기모노보다는 洋裝이 훨씬 더 잘 어울려 妖艷한 姿態를 뽐어 내고 있다.

「近頃ハ和服ヲ洋服ノヤウニ着コナスコトガ流行ヤルヤウダガ、妻ハ反对ニ、洋服ヲ和服ノヤウニ着テキル。洋服ノ下カラ、和服向キニ出来テキル体ツキガ透イテ見エル。肩ガアマリニモ撫デ肩デ、殊ニガニ股ノ脚ガイケナイ。細クテスツキリシテキルノダケレドモ、膝ノ下カラ踝ニ至ル線ガ外側ヘ曲ツキテキテ、靴ヲ穿イタ足首ト脛トノ接合点ガ妙ニ脹レボツタク膨ランデキル。(省略)シカシ僕ニハ又、ソノナヨナヨシテ締マリノナイ体ツキ、不細工ニ歪ンデキル脚ノ曲線ガ変ニナマメカシク感ジラレタコトモ事实デアル。カウ云フ不思議ナナマメカシサハ、彼女ガ和服ヲ着テキタノデハナイ。」 (『鍵』 p81)

「최근에 기모노를 양장처럼 입는 것이 유행이지만 아내는 반대로 양장을 기모노처럼 입는다. 양장 밑으로 기모노에 잘 어울리는 체형이 엿보인다. 둥그스름하게 처진 어깨에 특히 안짱다리는 더욱 보기 싫고 가늘고 날씬하게 뻗어있긴 하지만 무릎 밑에서 복사뼈에 이르는 선이 바깥쪽으로 굽어 있어 구두를 신은 발목과 종아리와의 접합점이 묘하게 부은 듯이 부풀어져 있다. 그러나 나에게는 다시 그 연약하고 어색한 몸짓, 안으로 굽은 다리의 곡선이 이상하리만치 요염하게 느껴지는 것도 사실이다. 이런 이상한 요염함은 그녀가 기모노를 입고 있을 때는 나타나지 않는다.」

이쿠코의 軟弱하고 어색한 몸짓과 안으로 굽은 다리의 曲線이 이상하리만치 妖艷하게 느껴지고 기모노를 입었을 때는 그러한 모습이 잘 나타나지 않는다.

문제의 그날, 오선영이 오랜만에 가정에서 벗어나 거리를 활보하고 自由를 滿喫하면서 길 가던 도중에 만난 옆집 하숙생 신춘호가 무슨 대학 영문과 학생이라지만 학교는 별로 나가지 아니하고 밤낮 춤만 추러 다닌다는 소문이 자자하다. 신춘호가 오선영의 外貌를 稱讚하며 한껏 부풀어 오른 오선영의 마음을 刺戟한다.

「아닌 게 아니라, 오늘 보니까 아주머니는 아직도 미인이신데요, 연애할 자격이 충분하신데요!» (중략) 뭐라고 할까, 실례의 표현일지 모르지만, 시들어가는 장미꽃 - 이라는 정도로 생각했었죠! “시들어가는 장미꽃? - ” 오선영여사가 무심코 한숨을 쉬었다. (『자유부인』 p.32)

化粧을 깨끗이 하고 검정 베르베르 치마에 양색양단 저고리를 입은 오선영이 열 살은 확실히 젊어 보이고 아직도 장미꽃과 같은 美人이라고 稱讚하는 신춘호의 말과 귀가 透明하고 하얀 異國的인 아름다움을 뵈 이쿠코와 比較할 수 있다.

「妻ノ耳ノ肉モ裏側カラ見ルト冴エ冴エト白クテ美シイ。アタリノ空氣マデガ清冽ニ徹ツテキルヤウニ見エル。ソシテ、眞珠ノ玉ト耳朶トガ互ニ効果ヲ助ケ合ツテキルノデアルガアノ耳ニアノ眞珠ヲ下ゲルコトヲ考ヘツイタノハ彼女自身ノ智慧デハアルマイ。サウ思フト僕ハ例ニ依リ嫉妬ト感謝トノ相半バサル氣持ヲ味ハハサレタ。妻ニカウ云フエキゾチツクノ美ガアルコトヲ、彼女ノ夫タルモノガ発見スルコトガ出来ナイデ、他人ニ見ツケ出サレタノハ口惜シイケレドモ、夫ト云フモノハ見馴レタ妻ノ見馴レタ姿ヲミ見タガルモノデ、却テ他人ヨリモ迂濶ナノカモ知レナイ。」 (『鍵』 p71)

「아내의 귀도 뒤에서 보니 투명한 듯 하얗고 아름답고 주변 공기마저 맑고 투명한 것처럼 보인다. 진주와 귓불이 서로 잘 어울려져 있지만 저 귀에 진주를 늘어뜨리는 일을 생각해 낸 것은 아내의 지혜가 아닐 것이다. 나는 어느 때처럼 질투와 感謝가 상반되는 감정을 맛보고 있었다. 아내에게 이렇게 이국적인 아름다움이 있다는 것을 그녀의 남편이 발견하지 못하고 다른 사람이 발견하였다는 것은 참으로 안타까운 일이다.」

아내가 이렇게 이국적인 아름다움이 있다는 것을 그녀의 남편이 発見하지 못하고 다른 사람이 발견하였다는 것은 哀惜한 일이다.

오선영하고 신춘호의 관계는 댄스를 매개로 이루어졌고 두 인물의 愛情葛藤은 서사 진행상 중요하지 않고 오선영의 조카(오명옥)에게 표출하는 그녀의 嫉妬는 심정적인 차원에 머물 뿐 그녀로 하여금 어떤 행동을 誘發하도록 만들지는 않는다. 이에 비해 기무라는 아내와 남편인 대학교수 사이에서 嫉妬를 誘發시켜 성적인 刺戟劑와 興奮劑 역할을 한다. 대체로 아내는 손님에게는 무뚝뚝하고 특히 남자 손님은 피하지만 제자(기무라)에게는 親近하게 대하는 것이다. 기무라는 제임스 스튜어트를 닮았고 이쿠코가 제임스 스튜어트를 좋아하고 제임스 스튜어트가 출연한 영화라면 빼놓지 않고 보러 가는 모양이다.

華麗한 모임인 화교회가 월수입 십만 환에 불과한 대학교수 남편을 둔 오선영의 삶을 더욱 초라하게 만든다.

「생각할수록 남편의 무능이 원망스러웠다. 남들은 그만 못하면서도 감투를 쓰고 돈을 벌고 해서 부인조차 흥청거리는데, 자기 남편만은 예나 지금이나 천편일률로 교단에서 홀소리 당소리 강의만 하고 있으니 실로 딱하기 그지없었다. 해방 전에는 대학교수라면 그래도 생활이 유지되었을 뿐만 아니라, 사회의 존경도 받아왔었다. 그러나 이즈음의 대학교수는 생활은 생활대로 엉망이면서 밑바닥 공무원보다도 천덕꾸러기 노릇을 하지 않던가.」 (『자유부인』 p.50)

어느 날 장태연교수가 講義를 끝마치고 교무처에 들러 박은미(朴恩美)로부터 전화 왔다 하여 기분에 들떠 오직 그녀 생각뿐이었다. 옆집 처녀에게 戀情의 마음을 품고 은방울 굴러가는 그녀의 목소리는 장태연교수를 興奮시키기에

는 充分하고 백옥같이 희고 아름다운 박은미의 하얀 종아리는 이쿠코의 아름다운 다리와 선명하게 비교되기도 한다.

「彼女ハ又僕ガ足ノfetishisデアルクトヲ知ツテキナガラ、且彼女ハ自分ガ異常ニ形ノ美シイ足(ソレハ四十五歳ノ女ノ足ノヤウニハ思ヘナイ)ノ所有者デアルクトヲ知ツテキナガラ、イヤ知ツテキルガ故ニ、メツタニソノ足ヲ僕ニ見セヨウトシナイ。」(『鍵』p6)

「그녀는 또 내가 발을 숭배한 것을 알고 있으면서 그녀 또한 자기가 매력적인 아름다운 발(그녀의 발은 45살 먹은 여자의 발이라고는 도저히 느껴지지 않는다)의 소유자인 것을 알고 있으면서 아니 알고 있기 때문에 좀처럼 그녀의 발을 내게 보이려 하지 않는다.」

「백옥같이 희고 아름다운 하얀 종아리! 미군 부대의 영문 타이피스트로 있으면서 한글 철자법 강의를 받겠다고 하던, 그의 고운 마음씨, 장 교수는 물론 박은미가 그리워서 못 견딜 지경은 아니었지만, 은연중에 그를 그리워한 것만은 사실이였다. (『자유부인』p.55)

장태연이 온갖 精誠을 다하여 사랑했던 박은미가 원효삼과 결혼한다는 소식을 접하자 긴 한숨을 내뿜으며 눈에 눈물이 어리어 온다. 장태연교수가 상대자인 박은미도 모르게 戀情의 마음을 품었던 것이다. 그것도 아내인 오선영이 가정을 소홀히 하는 것에 대한 반발심 때문에 생긴 마음이다. 장태연교수가 박은미하고 원효삼<sup>20)</sup>이가 결혼한다는 사실을 접하자 그녀에 대한 마음을 접어버린다.

장태연교수가 아내인 오선영이 사회 지도층 인사 부인들의 契모임에 活潑히 다니고 사교춤을 배우며 애인을 만드는 등 자유로운 생활을 즐기고 있다는 것을 알게 된다. 그들에 대한 憧憬은 그들의 삶에 대한 윤리적인 판단을 내릴 수 없게 한다. 오선영이 남편의 拘束에서 탈출하여 경제적인 窮乏으로부터 자유를 얻기 위해 직업 갖기를 원한다.

「오선영여사가 그러한 혁명 사상조차 품어보았다. 일부종사(一兵從事)란, 가소로운 봉건사상일 뿐. 어리석은 남편을 섬기면서 한평생을 고생꾸러기로 살아간다는 것은, 개화된 이십 세기에 있어서는, 여성의 체면상 용납할 수 없는 일 같았다. (중략) 이걸 이도 아니요 저도 아닌데다가 살림은 살림대로 풀리면서 밤낮 한다는 것이 돈도 명예도 안 되는 홀소리 당소리 연구뿐이니 아

20) 원효삼은 成績을 잘 받기 위해 돈과 膳物을 들고 장태연교수를 찾아갔던 학생으로 독자들은 박은미가 보낸 請牒狀에 적힌 원효삼이라는 이름을 보면서 학생의 부도덕함을 꾸짖던 장태연교수를 떠올리게 된다. 그리고 그러한 독자의 기대에 부응하듯 彷徨을 끝낸 교수는 다시 학생을 啓導하고 연구에 邁進해 사회적인 尊敬을 받는 모범적인 교수로 되 돌아온다. 뿐만 아니라 작가는 교수가정을 守護하기 위해 脫線한 아내를 기꺼이 용서하는 包容力 있는 인물로 美化한다.

나는 누구를 믿고 무슨 재미로 살아가란 말인가. 그야말로 노예가 아니고 무엇인가. 노라라는 여성은 ‘인형의 집’에서조차 나와 버렸는데, 하물며 ‘노예의 집’을 나가는 것이 무엇이 나쁘단 말인가. ‘차라리 죽어주거나 했으면’ 이것도 거짓 없는 순간적인 감정이었다. 모든 남편들이 어찌다 한 번씩 아내에게 그렇게 흉악한 생각을 당해보듯이, 오선영여사도 그 순간에는 그런 생각조차 해보았다. ‘아아, 자유! 자유가 그림구나!’ (『자유부인』 p.104,105)

자유를 渴望하는 오선영이 작품 『자유부인』의 由来를 상기 문장에서 찾아볼 수가 있고 육체적 孤独을 느끼는 오선영이 정신적 尊敬만으로는 만족할 수 없는 부부생활을 恨歎하는 반면 이쿠코는 신체적으로 아주 특이한 것을 소유하여 못 남성들을 사로잡는 妖婦이다.

「彼女が多クノ女性ノ中デモ極メテ稀ニシカナイ器具ノ所有者デアルコトヲ知ツテキル。彼女ガモシ昔ノ島原ノヤウナ妓楼ニ売ラレテキタシタラ、必ズヤ世間ノ評判ニナリ、無数ノ嫖客ガ競ツテ彼女ノ周圍ニ集マリ、天下ノ男子ハ悉ク彼女ニ惱殺サレタカモ知レナイ。」 (『鍵』 p6)

「그러나 한창 젊었을 때에 방탕하게 논 일이 있는 나는 그녀가 많은 여성들 가운데서 극히 보기 드문 훌륭한 기구의 소유자임을 알았다. 그녀가 만일 옛날 시마바라와 같은 기생집에 팔려갔다면 반드시 세간의 인기를 한 몸에 받고 많은 오입쟁이들이 다투어 그녀 주위에 몰려들고 천하의 모든 남자는 저마다 그녀에게 뇌쇄되었을지도 모른다.」

그녀는 많은 여성 중에서도 아주 흔치 않은 기구의 소유자라는 것을 처음으로 알게 되어 만일 遊廓으로 흘러갔다면 인기를 한 몸에 받고 무수한 오입쟁이들이 그녀를 서로 차지하려고 다투었을 것이다.

「自分が「多クノ女性ノ中デモ極メテ稀ニシカナイ器具ノ所有者デアルコト」を、は始めて教へられたのであつた。私が「モシ昔ノヤウナ妓楼ニ売ラレ」た女であつたとしたら、「必ズヤ世間ノ評判ニナリ、無数ノ嫖客ガ競ツテ」「周圍ニ集マ」つたであらうことを、私は始めて知つたのであつた。」 (『鍵』 p116)

「어쨌든 나는 「많은 여성 가운데서도 아주 흔치 않은 기구의 소유자라는 것」을 처음으로 알게 된 것이다. 내가 「만일 옛날 유곽에 팔린」 여자였다면, 반드시 세상의 평판을 받게 되어 무수한 오입쟁이들이 다투어 주위에 모였으리라는 것을 나는 비로소 알게 된 것이다.」

그녀의 몸에는 淫蕩한 피가 흐르고 남편을 죽음에까지 이르게 하는 결말부분에서 작품은 妖婦의 姿態를 지닌 범죄소설<sup>21)</sup>로도 해석하는 견해도 있다.

「それにしても、私の体質に淫蕩の血が流れてゐたことは否み得ないとして、夫の死をさへたくらむやうな心が潜んでゐたとは、どうした訳であろう。」 (『鍵』 p115)

「나의 몸에 음탕한 피가 흐르고 있다는 것은 부정할 수 없지만 남편을 죽음에까지 이르게 하려는 마음이 잠재해 있다는 것은 어떻게 된 일일까.」

장태연교수가 아내에게는 性的으로는 무관심하고 육체적 孤独을 느끼게 하여 집 밖으로 나가게 한 요인을 제공하였고 56살의 初老에 접어든 대학교수의 性的 減退는 장태연교수의 무관심과도 흡사하게 잘 대비가 된다. 오선영이 애인을 두고 싶은 욕망에 사로잡혀 성적으로 매우 활발한 시기인 반면 이쿠코는 남편의 시든 정력에 너무나 사무적이고 기계적인 부부관계만 할뿐 소위 아내로서의 의무만 할 따름이다.

「その冷静と云ふ意味は、彼の言葉に従えば私は「精力絶倫」で、その方面では病的に強いけれども、私のやり方は、余りにも「事務的」で、「ありきたり」で、「第一公式」で、変化がないと云ふのである。」 (『鍵』 p9)

「그가 말하는 냉정함이란 그의 말에 따르면 나는 ‘精力絶倫’이고 그 방면에서는 병적으로 강하지만 부부관계는 너무나도 ‘사무적’이고 흔해 빠졌으며 공식적이고 변화가 없다는 것이다.」

오선영이 남편의 허락을 받고 이월선이가 주인인 파리양행이라는 양품점을 대리 경영하게 되고 오선영이 파리양행에 취직을 하자마자 사업 手腕을 發揮한답시고 손님들에게 과도한 친절을 베풀고 남자 손님들에게 追播를 던진다. 작가의 시각에서 보았을 때에는 여성이 취직해 외간 남자와 接觸하는 것부터가 墮落의 시작이고 게다가 파리양행의 주인인 이월선이 기생 출신으로 設定되어 있다. 雪上加霜 파리양행에 드나드는 남성들은 오선영의 출근 첫날부터 誘惑한다. 이러한 방식으로 나타나는 직업을 가진 여성에 대한 卑下는 당시 사회의 지배적인 風潮이자 작가의 가치관인 가부장적 가치관에 의한 것이다. 이러한 작가의 시각은 장태연교수를 서사화하는데 있어 鮮明하게 나타나고 춤바람이 난 오선영을 誘惑하는 대학생 신춘호, 전남편이 국장인 이혼녀 최윤주, 當選을 위해서라면 비도덕적인 행위도 마다하지 않는 오선영의 친정 오빠 오병헌의원, 사기꾼 백광진 등이 주변 인물들과 鮮明히 對比된다.

오선영이 洗練된 여성으로 변신하기 위해 신춘호로부터 사교춤을 배우고 그에

21) 다니자키 작품에서는 범죄 그 자체를 사실적으로 묘사한 것이 아니라 독자에게 범인을 찾게 하는 가운데 등장인물을 형상화 하면서 그 심리를 서술하였다. 「범죄소설」이란 작품에서 사건이나 사고를 서술하고 실제로 법에 접촉하는지 어떤지는 관계없이 등장인물의 죄의식만 서술하고 있다. 따라서 남편의 죽음에 대해 일말의 양심가책과 딸인 토시고의 아버지에 대한 죄의식의 서술에서 『열쇠』를 「범죄소설」이라고 주장한 것이 大島佳代子 「<犯罪小説>としての『鍵』」 『相模国文』第23号 p.58 (平成八年)이다.

게 戀情을 품고 慈善을 하듯 그에게 입술마저도 許諾하는 墮落의 길로 墜落한다.

「그럼, 당신 책 보시는 동안에, 나 옆집에 잠깐 다녀오겠어요.”

“밤늦게 옆집엔 뭘 하러?” “아까 순이 할머니가 나를 좀 만났으면 좋겠다고 아이를 보냈더라나요. (중략) 오선영여사가 그렇게 말했으니 실상은 새빨간 거짓말이었다. 옆집에서 레코드 소리가 들려오는 바람에 댄스 생각이 간절했던 것이다. (중략) 댄스를 전연 몰랐을 때에는 레코드 소리를 무심히 들었지만, 춤을 배우기 시작하면서부터는 음악 소리만 들리면 혼자서도 스텝을 밟아 보는 버릇이 생겼다. 그런 판에 신춘호의 집에서 레코드 소리가 들려왔으니 못 견딜 노릇이었던 것이다.» (『자유부인』 p.79,80)

춤바람이 난 오선영이 입술을 許諾하고 외간남자에게 몸을 맡기는 墮落한 인물로 서사된 반면 이쿠코는 딸의 평가에 의해 貞淑한 여인으로 描写되고 있어 오선영과 이쿠코의 인물형상화는 정반대의 對比를 이루고 있다.

「敏子に云はせれば「ママは貞女の龜鑑」なのださうで、取りやうに依つてはさうも云へなくはないと思ふ。」 (『鍵』 p 74)

「도시코로부터 ‘엄마는 정숙한 여자의 귀감’이라는 말을 듣기도 하는데 경우에 따라서는 그것도 당연하다고 생각한다.」

부처님처럼 연구에만 몰두하는 장태연교수와는 달리 오선영의 육체적 孤獨이 온 전신에 掩襲하여 오선영이 정신적인 尊敬만으로는 만족할 수 없게 된다.

「오선영여사가 문득 고독이 전신을 엄습해 오는 듯하였다. 육체적 고독이었다. 남편은 눈앞에 앉아 있으면서도 아내에게 대해 부처님처럼 범연하지 않은가. 정신적으로는 남편의 학구적 정열을 존경할 수 있지만, 중년의 부인의 육체는 정신적인 존경만으로는 만족할 수 없었다. 부부간에 있어서는 육체적 교섭도 필요 불가결의 진실이라는 것을 부인할 수 없었던 것이다. 그러나 남편은 그것을 이해하지 못한다. 그러니까 육체적 고독은 뼈에 사무치는 것이었다.» (『자유부인』 p.107)

장태연교수와 오선영의 性的 不一致는 초로의 대학교수와 아내의 성적기호 불일치와 네 번째 공통분모를 이루고 있다고 하겠다.

「私と彼とは、性的嗜好が反撥し合つてゐる点が、余りにも多い。(省略)今から考へると、私は自分に最も性の合はない人を選んだらしい。これが定められた夫であると思ふから仕方なくこらえてゐるものの、私は時々彼に面と向つて見て、何と云ふ理由もなしに胸がムカムカして來ることがある。」 (『鍵』 p 10)

「나와 남편은 성적 기호 면에서 전혀 맞지 않는다. (중략) 지금 생각하면

나는 나에게 가장 어울리지 않은 사람을 선택한 것 같다. 이 사람이 정해진 남편이라고 생각하니까 하는 수 없이 참고 있지만 때때로 나는 남편 얼굴을 마주보면 아무런 이유도 없이 속이 메스거리진다.」

오선영이 파리양행 오픈을 위해 이월선의 남편 한태석이 이십만 환 이라는巨금을 선뜻 빌려준 好意에 만나고 싶어 할뿐만 아니라 양품점을 드나드는 손님들의 은근한 視線도 즐긴다. 두 사람의 관계는 오로지 돈으로 연결되고 그것을 통해 奢侈를 누리는 것에 목적이 있다고 볼 수 있다. 즉 오선영의 욕망은 진정한 사랑이 아니라 댄스와 돈으로 形象化되고 있다.

「파리양행에 취직이후로, 오선영여사가 화장품만은 공짜로 써야 한다는 관념이 생겼다. 화장품 가게에 취직을 했으니, 화장품쯤은 공짜로 쓴다는 것이 얼른 듣기에는 그럴성싶지만, 따지고 보면 매우 옳지 못한 관념인 것이다. (중략)에서 당초 안 될 말이다. 그렇건만 오 여사에게는 그런 그릇된 관념이 생겼다. 공짜를 좋아하는 그런 관념이 협잡의 기초였을지도 모를 일이었다.」

(『자유부인』 p.152)

오선영이 화려한 화장과 冶裝을 즐기고 이쿠코는 나이에 비해 젊게 보이고 華麗한 색상을 좋아하여 두 사람이 화려함을 좋아하는 것에 다섯 번째 공통분모를 이루고 있다. 이는 모든 여성들이 나이에 비해 젊게 보이려고 하는 慾望의 発露라 하겠다.

「妻八年ヨリモ派手好ミナノダガ、ソノ長襦袢ハ殊ニケバケバシイ感ジガシタ。」

(『鍵』 p.52)

「아내는 나이보다도 화려한 것을 즐기는 경향이 있는데 그 속옷은 너무나 현란한 느낌을 주었다.」

신춘호가 오선영의 조카 오명옥하고 결혼하여 미국 유학을 떠난다. 落心한 오선영이 한태석하고 사교 파티에 참석하고 隱密한 시간을 가지려 한다. 서울역에서 창경원 수정궁에서 열리는 댄스파티 파트너로 데려갈 심상으로 오선영이 기다렸으나 부인인 이월선이 나타나 종로에 있는 다방에서 만나기로 한다. 다방 문이 슬며시 열리면서 한태석이 나타나자 오선영의 얼굴에는 꽃송이 같은 微笑를 떠올리며,

「“야아, 오래간만입니다. 여행에서 돌아오는 사람더러 삼십 분 내로 오라는 명령을 내리시니 사람을 그렇게 끌리는 법이 어디 있습니까!”

한태석이 가까이 다가오며 그런 소리를 지껄이다가, 문득 오 여사의 차림새를 보고 황홀하게 놀라며,

“아-니, 굉장하시군요!”

(『자유부인』 p.153)



오선영의 상그레 웃기만 하는 그 모습은 살인적인 미소로 기어코 한 가정을 파괴하면서까지 탈선의 밤을 보내기 위해 댄스파티 장소로 데려간다.

밤 아홉시가 넘어 수정궁 댄스파티를 마친 한태석이 오선영이와 함께 가회동에 있는 旅館으로 가자고 誘惑한다. 끌려주기 위해서도 오선영이 하룻밤쯤 独占해 보고 싶은 慾望이 깔려있고 가회동에 위치한 看板없는 호텔에 들어간 오선영이 몹시 不安한 語套로 이 집에 대하여 물어본다.

「오선영여사가 핸드백을 손에 든 채, 몹시 불안스러운 어조로 물었다.

“어떤 집이나 마나, 절대로 안전한 지구(地區)입니다. 그 점만은 안심하십시오. 내가 위험한 장소로 모시고 왔을까봐 걱정이십니까? 하하하.”

(『자유부인』 p.172)

강한 支配力과 남성적 魅力을 띤 한태석에게 빠져드는 오선영이 돌이킬 수 없는 不倫의 破滅 속으로 뛰어든다. 오늘 밤 집에 들어가지 않고 자유의 세계를 마음껏 누리겠다며 오선영이 핸드백 까지 내던진다.

「“좋아요! 안 가겠어요!” 하고 핸드백을 방구석에 내던졌다. (중략) 남편과 자식을 버리고 집을 나오기까지 했는데, 하룻밤 외박쯤이 무슨 중대사이라 싶었던 것이다.»

(『자유부인』 p.174)

마음만 먹으면 그 다음은 無制限 展開되는 자유의 세계였고 오선영이 한태석이 원하는 대로 麥酒도 마시고 춤도 추었다. 오선영이 남편에게 良心의 苛責을 느껴 스스로 눈을 감고 자유의 세계로 没入한다.

「상대자가 다르다는 것은 안 될 말이었다. 그러기에 오선영여사가 눈을 감았다. 눈을 뜨면 상대자의 얼굴이 보여서 양심의 가책을 아니 느낄 수가 없었지만, 눈만 감으면 그만이었다. 눈을 뜨면 양심의 구속을 받게 되지만 눈만 감으면 그 다음은 자유의 세계였다. 그러므로 해서 ‘그저 이번 한 번만 눈을 감아주십시오’ 라는 말이 생겨났을지도 모를 일이었다.»

(『자유부인』 p.178)

두 사람의 베드신은 도덕적, 윤리적으로 도저히 容納할 수 없는 당시 시대적 분위기에 의해 發覺되는 것으로 작품을 마감 처리한 반면 이쿠코와 기무라의 性的描写는 아주 纖細하고 사실적으로 처리한 것이 한, 일 양국 소설에 있어서 문화적 차이라 볼 수 있겠다.

「私と木村氏とはありとあらゆる秘戯の限りを尽して遊んだ。私は木村氏がかうして欲しいと云ふことは何でもした。何でも彼の注文通りに身を捻ぢ曲げた。夫が相手ではとても考へのつかないやうな破天荒な姿勢、奇抜な位置に体を持つて行つてアクロバットのやうな真似もした。(いつたい私は、いつの間にこんなに自由自在に四肢を扱ふ技術に練達したのであらう

か、自分でも呆れる外はないが、これも皆木村氏が仕込んでくれたのである。) ところで、いつもは彼とあの家で落ち合ふと、合つてから別れるギリギリの時間まで、一秒の暇も惜しんで全力的にその事に熱中し、何一つ無駄話などはしないのであるが、」 (『鍵』 p84)

「나와 기무라는 온갖 테크닉을 부리며 즐겼다. 나는 기무라가 어떻게 해주면 좋겠다고 하는 것을 무엇이든 하였다. 어떤 것이든 그의 주문대로 몸을 뒤틀었다. 만약 남편이 그 상대라면 도저히 생각할 수도 없는 파격적인 자세 기발한 모습으로 마치 곡예사 같은 흥내도 내었다. (도대체 나는 어느 사이에 이토록 자유자재로 사지를 다루는 기술에 숙달되어 있었던 것일까? 내 스스로도 놀랄 뿐이지만 이것도 모두 기무라가 가르쳐 준 것이다) 나는 언제나 그와 그 집에서 만나고 헤어지는 빠듯한 시간까지 일초도 아까워서 온힘을 다해 그 일에 열중하며 쓸데없는 말은 하지 않았다.」

이쿠코와 기무라는 온갖 테크닉을 구사하며 기무라가 어떻게 했으면 좋겠다고 하는 것을 다 받아들이고 남편과는 도저히 생각할 수도 없는 破格적이고 奇拔한 姿勢로 마치 曲芸師와 같은 흥내도 내었다.

오선영이 불륜 현상이 発覺되어 亡身을 당한 뒤 밤을 꼬박새우고 장태연이 집을 나갈 것을 懲憚한다.

「아무리 생각해도 불쾌한 일이었다. 세상이 통틀어 민주자유를 부르짖기에, 장태연교수도 아내에게 대해 되도록 방임주의를 써왔다. 취직을 허락한 것이나 댄스·파티의 출석을 묵인하는 것이나, 모두가 그 결과였다. 그리고 그러한 근본 사상에는 지금이라도 별로 변동이 없었다. 그러나 현모양처이던 마누라가 남편을 무시하고 자식을 무시할 정도로 악화되었다면, 방임주의라는 것을 다시 한 번 엄밀히 검토해 볼 필요가 있는 것 같았다.」 (『자유부인』 p.183)

오선영이 이월선의 急襲으로 逢變을 당하여 집을 나가 생활하면서 자신의 잘못을 크게 反省하며 집을 그리워하며 나의 집만이 자유의 세계요 행복의 보금자리로 깨닫게 된다.

「‘내가 미쳤구나!’ 그런 뉘우침이 들어가자, 불현 듯 그리워지는 곳이 ‘나의 집’이었다. 절대 안전 지구라고 하던 호텔도 믿을 수가 없었고, 진심으로 사랑 하겠다고 한 태석의 애정도 믿을 수가 없었다. 오직 ‘나의 집’만이 유일한 자유의 세계요, 행복의 보금자리라고 생각되었다.」 (『자유부인』 p.194)

파리양행 미스 윤 집 건넛방 신세를 지게 된 오선영이 남편과 자식들을 날이 갈수록 그리워하며 結局 잃어버린 것은 남편과 자식들이었고 얻은 것이라고는 淒涼한 신세뿐 진정한 自由가 집 안방에 있는 줄을 모르고 오로지 거리에서만 그 自由를 찾아보려고 했다. 남편이 進歩的인 한글학자인 만큼 집 안

방에 앉아서도 얼마든지 자유를 누릴 수가 있었다는 것을 이제야 깨달았다.

이처럼 오선영이 徹底하게 慾望에 지배당하는 인물로 묘사되었고 그 욕망의 충동질에 의해 점점 墮落해가는 과정을 서술한 것이 『자유부인』의 中樞를 이루었다. 오선영의 욕망은 댄스와 돈으로 당대 사회의 풍속에 뒤지지 않으려는 노력에서 비롯된다.

맑게 갠 일요일 오후 장태연이 雅量을 베풀어 아내를 容恕하고 집으로 데려온다. 오선영이 몸과 마음이 아울러 그리운 옛 품으로 돌아가는 것으로 작품은 해피엔드로 幕을 내린다. 이로 인해 작품의 勸善懲惡의인 주제와 해피엔드의 構成이 완성된다. 당시 대중은 오선영의 탈선에서 대리만족을 느끼고 오선영의 歸還에서 그들 대부분이 올바르다고 믿었던 가치관이 붕괴되지 않았음에 安堵感을 느꼈을 것이다.

이처럼 『자유부인』은 가치관의 混亂과 자유주의 사상의 흐름 속에서도 封建社會의 가부장적 가치관에서 자유로울 수 없었던 한국 사회를 反映한 작품이다. 많은 평자들은 『자유부인』을 당대의 현실관과 가치관을 잘 반영한 작품으로 평가한다. 1950년대 전후 대중소설은 새로운 근대화라는 시대적 靄圍氣나 要求에 대응하는 하나의 態度를 보여주고 있다고 볼 수 있으며 『자유부인』은 여성의 역할 공간을 집안으로 제한하는 전통적 가치관을 強調하는 결말을 採択함으로써 혼란한 당대 상황을 克服하는 하나의 방안을 제시한다. 이 과정에서 오선영이라는 여성인물을 生動感 있게 浮刻시켜 그 효과를 倍加시키고 있다.

### 三 結論

베스트셀러 作品인 『자유부인』은 韓國文學歷史上 典例가 없는 社會的인 反響을 불러일으켜서 猥褻 是非에 올랐던 點에 다니자키준이치로(谷崎潤一郎)의 작품 『열쇠』와 첫 번째 共通分母를 이루고 있다.

『자유부인』은 한글에 관한 일이라면 四足を 못 쓰는 소장파 한글학자 張泰淵교수(42세)의 부인 吳善英여사(35세)가 家庭에서 脫出하여 自由를 滿喫하다 脫線의 길로 빠진다는 내용을 담고 있는데 이는 당시로서는 破格的인 設定으로 다니자키준이치로의 작품 『열쇠』에 등장하는 56세인 대학교수 남편과 45세의 아내인 이쿠코(郁子)의 人物形成過程과 남자주인공들의 직업이 대학교수라는 두 번째 共通分母를 이루고 있는 것이 特徵이라 하겠다. 『자유부인』과 『열쇠』의 작품이 연재소설로 출발한 대중소설이라는 점에 있어 세 번째 共通分母의 성격을 띠고 있다.

장태연교수와 오선영의 性的 不一致는 초로의 대학교수와 아내의 성적기호 불일치와 네 번째 共通分母를 이루고 있다.

화려한 화장과 治裝을 즐기는 오선영이 나이에 비해 젊게 보이고 華麗한 색상을 좋아하는 이쿠코와 다섯 번째 共通分母를 이루고 있다.

『열쇠』는 表面的으로 나타난 대학교수인 남편과 아내, 제자의 性生活를 描写할 뿐만 아니라 남편이 아내의 성적 刺戟劑(기무라)를 이용하여 性教育 次元으로도 읽을 수가 있다. 물론 딸을 제자의 약혼녀로 등장시켜 아내로 하여금 질투를 불러일으켜 刺戟을 통한 성욕의 促進劑로도 이용하고 있다. 남편이 아내를 이상적 여성으로 만들기 위해 教育을 시키지만 오히려 남편이 아내에게 性的으로 支配당하여 죽음에 直面하게 된다.

小説이란 원래 자유의지의 劇이며 주인공인 56세의 대학교수와 오선영의 破滅까지도 자신의 자유로운 의지로서 감히 選択하는 것이라면 『자유부인』과 『열쇠』에 있어서도 주인공이 스스로 즐겨 自己破滅에 뛰어들었다는 점에서 여섯 번째 共通分母를 이루고 있다 하겠다.

하지만 『열쇠』의 주인공인 대학교수는 性的慾望 이외의 모든 인간적인 屬性을 비춘 抽象的인 인물이기 때문에 거기에는 사실 본능적 욕구만이 있고 인간의 의지가 없는 반면 오선영이 스스로 선택한 돈과 춤바람에 의해 가정이 破綻地境에 이르나 勸善懲惡의 사회 분위기에 의해 남편 장태연교수로부터 容恕를 받게 된다. 그렇다면 『열쇠』는 자유의지의 悲劇이 아니고 성적 욕망의 喜劇인 것이며 『자유부인』은 오선영의 자유의지에 의한 喜劇으로 幕을 내린다.

『열쇠』는 남녀 두 주인공의 성욕만을 순수하게 抽出하여 묘사하는 奇妙한 방법을 시도 한 것으로 奇怪한 성적 본능의 背後에 있는 인간의 삶과 죽음에 관해서 通察하고 있는 반면에 『자유부인』은 성적본능은 아주 약하게 처리하고 대신 오선영의 金錢追求와 춤바람만을 強調하였다.

『열쇠』는 老境에 이르러 達성한 인간에 대한 통찰의 일단이고 거기에는 인간의 性적인 사랑과 죽음이 불가분한 관계로 묘사했고 『자유부인』의 작가 정비석은 당시 자유스런 사회분위기를 묘사하고 춤바람이 난 대학교수 부인을 등장 시킨 것이 사회적 물의를 일으키는 발단이 된다. 만약 대학교수 부인을 주인공으로 등장시키지 않고 평범한 일반 가정주부를 인물형상화 하였더라면 베스트셀러 작품이 되지 않았을 것이다.

## 【参考文献】

- 정한숙(1977) 『현대한국소설론』 고려대학교출판부 p.110
- 김우중(2010) 『비평문학의 이론』 신아출판사 p.198
- 강진호(2004) 『현대소설사와 근대성의 아포라』 소명출판 p.153
- 이호철 (1997) 『이호철의 소설창작 강의』 정우사 p.48
- 김한식(2000) 『1930 일상성 수용과 표현에 관한 연구』 고려대학교 박사학위논문 p.172
- 송하춘(1994) 『1950년대의 소설가들』 나남 p.39
- 김동윤(2004) 『우리 소설의 통속성과 진지성』 리토피아 p.67
- 고미숙(2000) 『비평기계』 소명출판 p.39
- 정비석(2010) 『자유부인』 지식을 만드는 지식사
- 吉田精一(昭和三三年一月) 『自然主義研究』 下卷 東京堂 p.57
- 長谷川泉(昭和三三年六月) 『近代名作鑑賞』 至文堂 p.39
- 五十嵐文 「『鍵』의 二重性」 『国語国文学』 第33号 福井大学国語学会 p.98
- 笹淵友一(昭和三五年一月) 「『文学界』とその時代」 明治書院 p.59
- 土佐享(昭和三四年六月) 「『鍵』」 『解釈と鑑賞』 p.77
- 村松剛(昭和三二年七月) 「『鍵』」 『解釈と鑑賞』 p.91
- 白井吉見 「さまざまの『鍵』論」 『谷崎潤一郎』 有精堂 p.137
- 大島佳代子(平成八年) 「<犯罪小説>としての『鍵』」 『相模国文』 第23号 p.57-66
- 大浦康介(平成三年) 「日記と小説のあいだに-『鍵』をめぐって-」 『文学』 p.97
- 藤田浩一郎(昭和三九年四月) 「日記体フィクションの可能性-谷崎の『鍵』をめぐって-」 『国文学』 p.152
- 谷崎潤一郎(昭和三十二年十二月) 「谷崎潤一郎全集第二十八卷」 『鍵』 p.3~126

## 要 旨

鄭飛石の『自由夫人』が社会的な反響を呼び起し猥褻の是非に上がった点に谷崎潤一郎の作品『鍵』と第一番目の共通分母を成す。『自由夫人』の張泰淵教授(42歳)夫人の呉善英女史(35歳)と『鍵』に登場する56歳の大学教授と45歳の郁子の人物形成過程と男子主人公らの職業が大学教授という二番目の共通分母をなす。『自由夫人』と『鍵』の作品が連載小説で出発した大衆小説という点が三番目の共通分母をなす。張泰淵教授と呉善英女史の性的な不一致は『鍵』の大学教授と郁子四番目の共通分母を成す。華麗な化粧と治装を楽しむ呉善英は年に比べて若く見え、華麗な色合いを好む郁子とは五つ目の共通分母を成す。『自由夫人』と『鍵』における主人公が自ら楽しみ自己破滅に飛び入った点に六つ目の共通分母を成す。

キーワード：鄭飛石, 『자유부인』, 오선영, 공통분모, 谷崎潤一郎  
『열쇠』, 이쿠코, 범죄소설, 노인의 성

투 고 : 2011. 8. 31  
1차 심사 : 2011. 9. 10  
2차 심사 : 2011. 10. 1

# 巖谷小波の「梢之月」とキリスト教

兪在真\*

(e-mail: jaejin@korea.ac.kr)

---

## 目次

---

1. はじめに
  2. キリスト教寓意小説としての「梢之月」
  3. 巖谷小波とキリスト教
  4. キリスト教批判への反証
  5. おわりに
- 

## 1. はじめに

日本児童文学の嚆矢といえる巖谷小波(以下、小波)は、硯友社へ入会した年にキリスト教の洗礼を受けた後、独逸学協会学校基督教徒青年会を設立したり日曜学校の教師をしたりするなど、篤実なキリスト教信者であったが、小波のキリスト教との関わりを論じた研究は意外に少いのである。そのわけは小波自身がキリスト教との関わりを「語学練習の方便」<sup>1)</sup>と述べ、キリスト教関係の著述が少ないからである。高瀬嘉男がキリスト教児童文学の観点から「巖谷小波をして児童文学の父たらしめたのは、氏が基督信者であったことに因を発している」<sup>2)</sup>と指摘しているが、その根拠といえば、「欧米の文物への親和性を助長し、基督教への間接手引きをしたわけである」というもので、児童文学とキリスト教の関係も小波の洗礼を受けたという事実以上の掘り下げは行っていない。管見の限りでは、中川理恵子・宮崎芳彦の「巖谷小波とキリスト教—新たな小波論の可能性—」<sup>3)</sup>(以下、

---

\* 高麗大学校 助教授、日本近現代文学。

1) 巖谷小波(1913)『小波身の上噺』宝学館書店 p.81。

2) 高瀬嘉男(1933)「基督教童話各論(第三)」日本童話協会『総合童話大講座(四)宗教童話』日本童話協会出版部 p.2。

3) 中川理恵子・宮崎芳彦(1995)「巖谷小波とキリスト教—新たな小波論の可能性—」富田博之・上笹一郎編『日本のキリスト教児童文学』国土社 pp.115-129。

中川・宮崎論)が唯一小波とキリスト教との関係を詳細に考察した先行研究といえる。中川・宮崎論は、小波がキリスト教へ入信する過程、彼が関わった自由キリスト教の特徴と小波の作家活動におけるこの教派の影響関係を詳細に調査し考察している。しかし、小波とキリスト教との関わりを網羅しているこの論文で小波がキリスト教小説として書いた「梢之月」に関する言及が欠けており、小波におけるキリスト教の問題を実際の作品分析を通しては考察していない。「梢之月」は1889年12月20附の『基督教新聞 付録』に「漣山人訳」として掲載された作品である。掲載されたメディアが『基督教新聞』であるうえに、その内容からもキリスト教を題材にしたと明白に読みとることが可能な作品だが、中川・宮崎論で全く言及されなかったばかりか、管見の限り、先行研究での「梢之月」に関する言及は皆無に等しいのである。

従って本稿では、小波が書いた唯一のキリスト教小説と言える「梢之月」の紹介と、その特徴を考察する。そのうえで、小波のキリスト教への関わりを中川・宮崎の調査を踏まえて、小波の日記と同時代の資料を含めて検討し、「梢之月」との影響関係を検証する。そして、この作品のコンテキストを読み取る作業として同時代のキリスト教言説との関係を考察する。

## 2. キリスト教寓意小説としての「梢之月」

「梢之月」は、『基督教新聞 付録』の一面から二面にわたって掲載された短編小説である。物語は木枯らし吹く或冬の夜、官省に勤める今村兼良が愛妻島村愛子の醜聞を耳にして帰宅するところから始まる。愛子は温順で心優しく、姑との折り合いも良く、夫との仲も睦ましいが、半年ばかり前から近所の細君に誘われて近くの教会に通い始めた。通うにつれ彼女はいつの間にか「真の愛もて人と交はり、口数用ひず行状もて、神の榮を彰はすななど、まことに稀なる信者になり、牧師や伝道師からも大事に思われ、教会の事を色々相談されるまでになった。婦人会の執事を任せられた愛子は、「神の為なれば」と更に骨を惜しむことなく努め、連夜の祈禱会や相談会に出かけるようになるが、教会の伝道師吉元と「道ならず契をなせしと」噂されるようになった。遂には夫の兼良が知人から愛子の醜聞を忠告されるまでに至ったのである。木枯らしの吹くその夜も愛子は、祈禱会に出かけて留守であった。下女から愛子が或男性と山の上の方へ行つたと知らされた兼良は、早速そちらへ向う。そこで彼が耳にしたのは、自分達は「天に居ます神様の前にハ、露恥づることなく潔白であるが、「神様の前さへ正しければ、此の世のこと何どうならうと、かまはんものでハ決してな」く、濡衣を晴すためにも愛子は婦人会の執事を辞め、夜の祈禱会や教会の仕事も慎むようにと互いに語り合った後、自分達に濡衣を着せた「訳



知らぬ人をつまづかせじと」共に祈禱を捧げる愛子と伝道師の声であった。兼良は「お愛、許してくれ。」と、許しを乞うところで物語は終わる。

「梢之月」は教会の伝道師と女性信徒とのスキャンダルを題材にした小説である。この作品がキリスト教小説であるという根拠は、ただ作品の題材や主人公として教会関係者を登場させているだけでなく、短い作品ながらも随所で聖書の言葉が引用されているからである。

「梢之月」の同時代評として、『女学雑誌』に掲載されたXYZ(内田魯庵と思われる。以下、魯庵)の「○漣山人の「梢之月」」<sup>4)</sup>でも、山の上で二人が共に祈禱を捧げている「これ偏に教のため。訳知らぬ人をつまづかせじと、思ふ心の真実のみ。「我れ」ト云ふ事その間になし。夜風も今は定まれば、心もすみて更に清く、真心こめし祈禱には、などで耳を傾けざらん、天に在す吾等の神！」という箇所を引いて以下のように述べている。

[こ]の一句の如きは実に聖經の文を脳裏に蓄へて出せしものと云ふべし。<sup>ペテロ</sup>彼是前書第四章に曰く、

「(上畧) 愛する者よ爾曹を試むる火の如き苦を非常事の如くして爾曹異しとする勿れ、却てキリストの苦に与るを以て歡樂とすべし然れば其榮の顕れん時また爾曹喜び躍らん。若しなんぢらキリストの名の為に謗られれば福なり蓋榮の靈すなはち神の靈なんぢらの上に止れば也 (中略) 若しキリストアンのに因て苦に遇ば羞ること勿れ却て之に縁て神を崇むべし (中略) もし義者辛じて救はるるを得ば神を敬はざる者と罪人は何処に立んや。是故に神の旨に従ひて苦に遇ふものは善を行ひて其靈魂を信ずべき造物者に託すべし」

是れは、基督教徒が常に服膺して確と動かざる教示なり。<sup>5)</sup> (以下、[ ]は引用者注)

上の引用で魯庵が引用しているのは、<ペテロ前書 4:12-19>で、基督教徒であるがために受ける迫害を苦に思わず、善を行い、己れの靈魂を神に託せよという内容の箇所である。魯庵が特にペテロ前書のこの部分を引用したのは、「基督教徒が常に服膺して確と動かざる教示なり」と述べているように、『女学雑誌』の読者となるキリスト教信徒を戒める為であろう。しかし、作中の二人の祈禱は「我れ」の為に捧げられたのではなくて、真相も知らずに自分達について有らぬ醜聞を立てている人たちが却って自分達のせいで信仰上「つまづか」ないようにと、自分たちに濡衣を着せた人たちのために捧げられているのである。すると、下のマタイ伝の方がこの祈禱文の内容に適しているように思われる。

「なんぢの隣を愛し、なんぢの仇を憎むべし」と云へることあるを汝等きけり。されど我は汝らに告ぐ、汝らの仇を愛し、汝らを責むる者のために祈れ、これ天にいます汝らの父の子と

4) XYZ(1890.1)「○漣山人の「梢之月」」『女学雑誌』p.8.

5) 上掲書。

ならん為なり。(中略) 兄弟にのみ挨拶すとも何の勝ることかある、異邦人も然するにあらずや。さらば汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ。

【マタイ伝5:43-48 (ルカ伝6:27-28、32-36)】<sup>6)</sup> (山上の説教)  
(下線は引用者に拠る。以下同。)

上の引用文は、「汝らの仇を愛」せよという『新訳聖書』におけるキリストの最も中心的思想をあらわした一文である。このように、「梢之月」では、随所で聖書の言葉を引用しているので、それらを次に挙げてみる。

引用① はじめの程はどうやら妙なものと、薄気味悪気に思ひ居たるも、沃土に蒔し種なりけん、鳥も啄ます茨も妨げず、次第に聖霊の験力現はれて(「梢之月」)「譬にて数多くのことを語りて言ひたまふ、『視よ、種蒔く者まかんとて出づ。蒔くとき路の傍らに落ちし種あり、鳥きたりて啄む。土うすき石地に落ちし種あり、土深からぬによりて速かに萌え出でたれど、日の昇りし時やけて根なき故に枯る。茨の地に落ちし種あり、茨そだちて之を塞ぐ。良き地に落ちし種あり、あるひは百倍、あるひは六十倍、あるひは三十倍の実を結べり。耳ある者は聴くべし』  
【マタイ伝13:3-9、マルコ伝4:1-4、ルカ伝8:4-8】

引用② 只管に云ひふらして、吾は斯くまで信仰深き者ぞと、人に知られん事をつとむ、此等は所謂偽善者の己が前にらつはをふかして、施済をなすものゝ如し。イエスもこれを戒め給ひぬ。 (梢之月)  
「汝ら見られんために己が義を人の前にて行はぬやうに心せよ。然らば、天にいます汝らの父より報いを得じ。さらば施済をなすとき、偽善者が人に崇められんとて会堂や街にて為すごとく、己が前にラッパを鳴すな。誠に汝らに告ぐ、彼らは既にその報を得たり。汝は施済をなすとき、右の手のなすことを左の手に知らすな。是はその施済の隠れん為なり。さらば隠れたるに見たまふ汝の父は報い給はん。 【マタイ伝6:1-4】 <山上の説教>

引用③ 真の愛もて人と交はり、口数用ひず行状もて、神の榮を彰はすなんと、まことに稀なる信者なれば、かくてこそ世の塩なれと、牧師伝道師も又なき者に思ひ (「梢之月」)  
「汝らは地の塩なり、塩もし効力を失はば、何をもてか之に塩すべき。後は用なし、外にすてられて人に踏まれるのみ。 【マタイ伝5:13、マルコ伝9:50、ルカ伝14:34】  
<山上の説教>

引用④ ……然し此世にある限りは、どこまでも御榮を現はしたく、そればかり始終心に掛けて居ますに、 (梢之月)

6) 以下、聖書の引用は、聖書協会連盟(一九一)『旧新約聖書』出版社未詳による。

「また人は灯火をともして升の下におかず、灯台の上におく。かくて灯火は家にある凡ての物を照すなり。かくのごとく汝らの光を人の前にかがやかせ。これ人の汝らが善き行為を見て、天にいます汝らの父を崇めん為なり。」

【マタイ伝5:15-16、マルコ伝9:50、ルカ伝14:35】 <山上の説教>

このように、「梢之月」には『新約聖書』のキリストの言葉や語句が援用されていることが確認できる。特に、引用②、③、④と、魯庵も引いた愛子と伝道師の祈禱の言葉には、キリストの<山上の説教>の言葉が多く引かれているのが特徴的である。愛子と伝道師の二人が語り会い、祈禱を捧げる場面が「山の上」になっているのも、偶然の一致というより、意識的な設定と捉えられよう。また、<山上の説教>の場面でキリストが繰り返して戒めている偽善者が、引用②で作中の偽善的な信者として語られている。なお、<山上の説教>での「敵を愛しなさい」という最も基本となるキリストの教えは、濡衣を着せられている自分達よりも自分達を疑う事でその信仰の妨げや疑心を抱くようになる人の為に祈る伝道師と愛子の行為を通して説かれていることは、前述したとおりである。

また、「梢之月」では、伝道師と愛子の濡衣を「神の子なるイエスすら、謀反人といふ汚名を受けぬ。」というキリストの受難に譬えて語り始めている。愛子が濡衣を掛けられる過程は、教会外部の人からではなく「教会の仲間には、さすがに信ずるものもなきやうなれと、下様なる出入者、下女車夫などか口善悪なく、陰にまはりて云ひ合ふにぞ」と、信徒たちは最初は信じなかったが、教会に出入りする者から噂が広まり、「今では教会の人までも、妙な考を持やうになり」と、信者までもが疑いを持ち、ついには愛子の真心を疑ってはならぬ夫と姑までが噂を信じるようになったという設定になっている。これは、キリストが同じユダヤ人の祭司達に謀られ、ユダヤの民と弟子達の裏切りに遭う受難の過程と類似していると言えるだろう。そして、十字架につけられたキリストの「父よ、彼らをお赦してください。」(ルカ伝23:34)という叫びに呼応するかのように愛子の潔白と真心を知った夫兼良が物語の最後に発する言葉も「お愛許してくれ！」と、許しを乞う言葉で締めくくられているのである。

以上、見てきたように「梢之月」は、キリスト教信徒のスクァンダルの物語を通して真の信徒の有り様とキリストの教えを伝える寓意小説として読むことができる。

### 3. 巖谷小波とキリスト教

小波がキリスト教と関わりを持つようになったのは、1885年、独逸学協会学校へ入学<sup>7)</sup>

7) 「父は小波を医師にしようと八歳のころ松野クララ夫人についてドイツ語を学ばせ、一四歳医学予備校、一六歳独逸語協会学校に転じ」(福田清人「巖谷小波」日本近代文学館・小田切進編(1977)『日本近代文学大事典』第1巻、講談社、p.185)

てからである。小波がはじめて教会に行ったのは、硯友社へ入会した一ヶ月後の1887年2月であり<sup>8)</sup>、同年6月、番町教会で小崎弘道牧師より洗礼を受けた<sup>9)</sup>。その後、小波は足繁く教会に通い、1888年6月には仲間たちと独逸学協会学校基督教徒青年会を設立<sup>10)</sup>、内村鑑三を演説に招く<sup>11)</sup>など活発な活動をしていた。小波は独逸学協会学校の教師より新教神学校への進学を奨められた<sup>12)</sup>が、9月独逸学協会学校普通科を卒業した後、同校の専修科へ進学、法律・経済の勉強をした<sup>13)</sup>。だが、文学の道に進みたいという気持が強く、初の単行本『初紅葉』が出版された1889年4月に専修科を退学<sup>14)</sup>、作家になる決心をつけた。独逸学協会学校退学後も文学の方に比重を移してはいいたが、1889年6月より安息日学校の教員を務たり、『六合雑誌』<sup>15)</sup>に「ゴエー伝」を連載したりと、宗教活動と文学活動を併行して行っていた。本稿で取り上げた「梢之月」もこのように活発に宗教活動をしていた時期に書かれた作品である<sup>16)</sup>。

「梢之月」執筆後のキリスト教との関わりを中川・宮崎論によって辿ってみると次のようである。1891年「教育勅語」発布に伴う保守的なナショナリズムの高りや内村鑑三の「不敬事件」などを受けてドイツ系宣教師や教師たちが次々に帰国したため、小波の属していた普及福音系の教会は日本人の手に委ねられた。こうしたなか番町教会の小崎牧師が退任し、金森通倫が新牧師として着任した。金森は新神学支持者のなかでも急進派に属

- 
- 8) 「十一日 (中略) 夕刻副島氏来り番町教会へ行かんかト云ふ、あとから行くと答ふ、氏先ツ帰る (中略) 氏等ト教会へ赴ク 生憎ヘーリング欠席」(巖谷小波「丁亥日録」瀬沼茂樹編(1968) 『巖谷小波・川上眉山集』明治文学全集20、筑摩書房 p.251)
- 9) 「十九日 晴 早朝山城町ヨリ帰り食後[番町]教会へ行ク 今日聖バプテスマヲ受ク小崎牧師ヨリ (他十五人アリ)」(前掲書、p.261)
- 10) 「十九日 (中略) 一時ヨリ合併教場にて学生基督教徒青年会設立相談アリキ」(巖谷小波「戊子日録」前掲書、p.286)
- 11) 「卅日 (中略) 青年舎へ行キ二時ヨリ皆共ニ教会へ行ク 青年会演説農学学士内村鑑三氏也」(前掲書、p.287)
- 12) 「十四日 (中略) 三時辞し上車ヘーリング師ヲ訪フ 卒業後ノ方向ヲ定メンガ為也 師ハ新教神学校ニ行カンコトヲ進メル」(前掲書、p.290)
- 13) 「十九日 晴雲 今朝上車杉浦[重剛]先生ヲ訪ヒ相談専修科行きに定る」(前掲書、p.290)
- 14) 「廿九日 (中略) それヨリ学校へ行き退校願ヲ出し月謝ヲ収メ書籍を返ス」(巖谷小波「己丑日録」前掲書、p.306)
- 15) 『六合雑誌』(1880.10~1921.2) は、キリスト教主義の総合雑誌。小崎弘道、田村直臣、植村正久らにより東京基督教徒青年会から創刊。キリスト教主義に立って宗教、神学上の諸問題を論じ、あわせて学術、教育、文学、社会、政治の全般にわたる啓蒙的評論を掲載し、その清新な立場は広く読書界の歓迎を受けた。(川合道雄「六合雑誌」日本近代文学館・小田切進編(1977) 『日本近代文学大事典』第5巻、講談社、p.447)
- 16) 「十六日 晴 今朝十時帰塾 午前梢之月草す 夜塾主来  
十七日 晴 梢之月清書 十二時独逸協会学校により高階を誘ひ共に弥石へ行 (中略)  
廿二日 晴 午前八時出て教会、午後一時より又教会(中略) [梢之月不知庵二送ル] (巖谷小波「己丑日録」前掲書、p.321)

し、彼の神学・伝導上の方針について教会員の中で賛否両論が生じたため、番町教会は分裂の危機を迎えた。金森は分裂を恐れ辞表を提出し、金森を支持していた小波も教会に退会届けを出したのである<sup>17)</sup>。こうして明確な主張を持って、教会を退会した小波であったが、1892年2月に上梓した『当世少年気質』（春陽堂）の第四編「負けるが勝ち」に「なんじの仇敵を愛しめ」と副題をつけて聖書の教えに従う少年を描いていたことがらも、彼が棄教したのではないことが窺える。

以上、概観したように小波のキリスト教との関わりは、主に独逸学協会学校と番町教会によるものである。以下、独逸学協会学校と番町教会が属していた自由キリスト教教派の特徴を中川・宮崎論により、概観してみる。

独逸学協会学校の特徴は第一に、1881年の秋に設立した独逸学協会の実際運動の一つとして設立されたものであったということだ。学校の母体である独逸学協会は、当時勃興してきた民権思想、つまり、フランスや英米からその言語と共に輸入された自由民権主義に対し、ドイツ語及びドイツの政治、経済、法律に関する国家主義を研究主張することを目的としていた。協会の設立には政治家の平田東助、品川弥次郎、桂太郎が協力し、その頭目は伊藤博文であった。

第二の特徴は、当時有力であった三つの学校—三田(慶応)、早稲田(早稲田専門学校)、江戸川(同人社)—では英語を教え、共に私学の特徴を活かして官学あるいは官僚を排斥していたのに対し、独逸学協会学校は、ドイツ語を教え、官僚養成を目的としていたことである。

さらに、独逸学協会学校の特色としては、イエナ大学出身のヘーリングと、宣教師として来日していたスピネルの二人の存在が挙げられ、この二人は互いに助け合い、特にヘーリングは、スピネルの布教活動に協力を惜しまなかったそうである。

このような環境により、小波は独逸学協会学校に通ううちに、自然とキリスト教に触れることになったのである。スピネルは、学校で歴史を教える傍ら、1886年の春より自宅で、ドイツ語を解する青年学徒にキリスト教を系統的に講義しはじめた。独逸学協会学校の生徒たちが中心に集まり、講義のあとで洗礼を受けるものもいた。小波もこの講義を聞きに通った一人である。1886年11月に番町教会ができると、この外国人教師たちは、そこでも説教や講演を行うようになり、小波もこの教会に出入りするようになったそうである。

このように小波が通っていた当時の番町教会は、スピネルが創立した普及福音新教伝導会の伝道場であった。同じく中川・宮崎論より番町教会の特徴を概観してみる。

普及福音新教伝導会は、1884年福音の宣教を超教派的に行うべきであると主張するスイスの牧師ブースを会長に、ドイツのヴァイマールにおいて結成された。ベルリンに留学中であった和田垣謙三の要請により日本を第一伝道区と決定し、1885年最初の宣教師とし

17) 「廿六日 (中略) 十時頃教会へ行く 小崎氏説教後総会、金森氏辞職の件自説容れられず半途にして去ル (中略) [教会へ退会書差出ス]」(巖谷小波「辛卯日録」前掲書、p.348)

て、創立者の一人であるスピネルが来日した。小波が接したキリスト教は、ヨーロッパにおいても、極めて新しい宗派であったのである。小波が通っていた番町教会は、和田垣謙三が、三好退蔵(当時司法次官)一やはりドイツ留学中に入信し、以前よりスピネルを自宅に招いて講義を受けていた一とともに小崎弘通を牧師に押し、1886年に番町講義所を開き、会堂建設に至ったものである。

普及福音新教伝導会は、ユニヴァーサリスト、ユニテリアンとともに、〈自由キリスト教〉と称される宗派であり、宗教上の基本的な特色は以下になる。

普及福音新教伝道会の主義方針は、教会権威からの解放を求めるもので、独自の教会を組織しようとしなことを一つの特徴としていた。しかしながら、内村鑑三の唱えた無教会主義とは異なり、教会や教義の深い意義を認めるといものであったため、もともと教会も教義もほとんどなかった当時の日本においては、まず宣教師たちの主義と信仰を伝え、門下生を養成することからはじめる必要があった。そこでもっとも好都合であったのは日本におけるドイツ学の勃興と独逸学協会学校の存在であり、スピネルはここを拠点として伝道活動を進めたのである。この伝道会は、宣教師たちに学究の徒が多く、聖書と教理の歴史、批判的な解釈を行い、キリストの示した教訓や彼の人格と生活に直接教えを求めた。

また、キリスト教と学術、政教の調和という考えをもっていたため、日本におけるキリスト教は、日本の歴史及び国民的、文化的特色を踏まえて作り上げるべきであるとし、仏教からキリスト教へという改宗も問わなかった。キリストの精神が伝道地の国民精神に感化を与えることの方がより重要だと認識していたからであるようだ。

例えば、明治24年の『読売新聞』では、この宗派を次のように紹介している。

○日本に於ける自由主義基督教　進化発達ハ宇宙の大法なり物質界のもの駸々乎として発達す精神界亦た其の法則の中にあり　近時欧米諸国に於ける自由主義基督教ハ其の勢力甚だ大にして文明の進歩精神界万般の進歩と共に各般の旧物を撃碎し盲信迷信を打破するに至れり従つて我国に於ける基督教中にも自由新神学の風潮頗る強大にして保守的教会の本城たる某々教会に於ても隠然一大革新を見んとするに至りたる由なるが今試みに我国に於ける自由基督教の三派に就き其の重なる勢力を表示すれば大畧左の如くなるべしと云ふ

普及福音教 〔渡来の年——明治十八年

| 機関 〔教会二ヶ所(信徒二百人)

| | 神学校一ヶ所(生徒六名)

| | 雑誌二種 〔福音会叢書(廃刊)

| | 眞理(十五号まで発兌)

〔伝道者 〔外国人一スピネル、シミューデル、ムンチンゲル

〔日本人一三並良 丸山通一<sup>18)</sup>

上の記事では、自由キリスト教の三派一普及福音教、ユニテリアン教、ユニバーサリス  
ト教一を紹介していたが、普及福音教以外は引用を省略した。自由キリスト教の教会の権  
威や原理主義に陥らずに、日本の歴史や国民性、文化的特色を踏まえながらの伝道が  
1891年頃には広く世間に知られていた事が上の記事から窺える。また、他の記事を通して  
この宗派がどのように認識されていたのかをしてみる。

然るに日本に於ける基督教伝道ハ豪も是等の点[外国に宗教を移植する時に生じる問題  
点]に注意せざりしものゝ如し、故に第一に受くる所の攻撃ハ国体と矛盾する所ある事これ  
なり、日本の人情風俗に適せざることこれなり、(中略)而してその伝道の方法ハ極めて狭  
隘なる定規の中にたてたるを以て、信者ハ概して其大本を攻めずして枝葉のみに孜々と  
し、終に因循不活発の厭世的人物を造り出すの傾なしとせず、(中略)果して然らバ日本  
の基督教が今日に執るべきの方針ハ其教理を学理的に説明して万人に承認せしむるにあ  
り、其伝道を改めて日本の人情国風に適合せしむるにあり、現に自由派の基督教なるもの  
ハ力めて此方針を執りつゝあるにも関はず、彼の固執派と称する一体ハ頻りに之を排斥  
し、其反動として却つて益々内城退縮せんとするが如き傾なしとせず19)

スピネル氏ハ日本に於ける自由派基督教の開山なる(中略)元来基督教の教理ハ一  
見最も解し易きが如くなるも其の実頗る誤解を來たし易く為に門外漢ハ勿論の事既に堂に  
入るの人にして尚ほ能く其真味を知るもの稀なり スピネル氏が此書[『基督教約説』]  
を著すや最も進歩したる神学上哲学上の真理を以て基礎となし勉めて日本人の思想知識  
の傾向を察し最も能く其の耳に入り易からんことを期し20)

上の最初の引用文は、日本における種々の宗教を紹介しながら、キリスト教を批判的に  
論じている記事である。ここでキリスト教の浸透を妨げている原因として挙げているのが、日  
本の「国体と矛盾」している点、「日本の人情風俗に適」しない点である。そして伝道  
方法もとても厳格な教理を求めるために、大概の人がその真意を理解することができず、  
「終に因循不活発の厭世的人物を造り出す」に至ると批判している。これらの問題点を改  
善するためには「其教理を学理的に説明して万人に承認せしむるにあり、其伝道を改めて  
日本の人情国風に適合せしむるにあ」とし、「現に自由派の基督教なるものハ力めて此  
方針を執りつゝある」と、評価している。このように、自由キリスト教は、キリスト教の教理を  
平易に日本の状況や文化に合わせて伝道している点で特に広まり得たのである。この点  
は、二番目の引用文であるスピネルの著書を紹介している記事でも、彼が「勉めて日

18) (1891.1.7)「○日本に於ける自由主義基督教」『読売新聞』朝刊2面。

19) 伊藤蘇水稿(1891.7.19)「日本の宗教 下(続)」『読売新聞』朝刊1面。

20) S.T.(1892.2.23)「批評○基督教約説(博士スピネル氏著)」『読売新聞』付録1面。

本人の思想知識の傾向を察し最も能く其の耳に入り易からんことを期し」ている点を評価しているところからも窺える。

このように、小波が支持していた自由キリスト教は、教理だけを固執せずに伝道のためには宗教以外の学術や政治と調和を取るという特徴を持ち、日本においても日本の状況や文化と衝突せずに受け入れられるよう、その教理を平易に伝えることに努めていたのである。自由キリスト教のこのような特徴ゆえに、小波は文学活動と教会活動を何ら衝突なく併行して行えたのである。小波の例は、中川・宮崎論も指摘しているように、同時代のキリスト教文学者とは異なる趣きがある。例えば、小波からは同時代の北村透谷の悩み―「キリスト教の洗礼を受け、フレンド派に属していながら、しかも他方でも西行さんとあだ名されるほどに古い日本の詩人とその生活態度に心をひかれていた透谷が、自ら文化綜合を引き裂き、且つ自分自身を引き裂いて自殺にまで駆りやられた」<sup>21)</sup>―や、島崎藤村の葛藤―「青年時代に心に戦った宗教と芸術のささやかな相克」<sup>22)</sup>―は、見られない。それは、透谷や藤村の信じた英米派のキリスト教と小波の信じた自由キリスト教との差異に起因するものであると言える。

「梢之月」で愛子は、神の為、教会の為に一所懸命に働いたことで却って有らぬ濡衣を着せられた。愛子が「元より妾共は潔白な身の上、此の世の人にハ彼是云ハれても、天に居ます神様の前にハ、露恥づること」がないと伝道師に訴えると、伝道師は「神様の前さへ正しければ、此の世のことハどうならうと、かまはんものでは決してないので。此世にある限りハ、やはり此世に賞められるやう、神の栄へを現はすやうにするのが、吾々の務めであるのですから、私共ハ何処までも、この濡衣を晴さなければなりません。」と答えながら、教会の仕事はもう辞め、夜遅くの祈禱会も慎むように諭している。すなわち、神や教会の為の宗教活動であるならば、世の人々に理解されなくても貫くべきであるという保守且原則的な態度を否定している。「此の世」に理解されない信仰生活を貫くのではなく、「此世にある限りハ、やはり此世に賞められるやう」折り合いをつけないと、「此の世」に「神の栄へを現はす」ことができないという考え方である。ここでの「此の世」を日本に置き換えたなら、教会や教理に固執せずに日本の風土や文化と調和しながらの伝道に重きを置いた自由キリスト教の特徴と同じであることが分かる。

このように小波におけるキリスト教、特に自由キリスト教の影響が「梢之月」から明確に読み取ることができる。そして、この作品の主題提示の単純明快さと、キリストの教えを物語を通して伝えようとする寓意小説の特徴も、また自由キリスト教の一伝道する教理を平易に、受容する側に受容れ易くするところ―の裏付けであると思われる。自由キリスト教に裏付けられている「梢之月」の平易さ、寓意性が以後、小波が進む児童文学へ方向に影

21) 久山康(1956)『近代日本とキリスト教』基督教学徒兄弟団、p.160。

22) 上掲書、p.154。



響したかについては、更なる考察が必要であるため、本稿では判断を留保するが、少なからずの影響があっただろうと推測する次第である。

#### 4. キリスト教批判への反証

以上、見てきたように「梢之月」には自由キリスト教の影響が多分に見られるが、その他にもこの作品からは明治20年代初期のキリスト教に関する批判的言説も読み取ることができる。小波がキリスト教の「通弊」に意識的であったことは、「梢之月」を発表してから2年後の1891年に発表した「近時の基督教小説を見て所感を陳ぶ」という批評から窺うことができる。

余ハ其の[金森通倫の『日本現今の基督教並将来の基督教』出版]際も驥尾に就いて、日本現今基督教会の、一即ち信徒社会の通弊をも論破し、聊か警醒する処あらんと企てたり。然れども是余輩が出で、喋々すべき幕にあらずと思惟し、且つハ二三知人の忠告もありしかバ、遂に其俛にして黙したりしが。余と同感の人の随分多きにも係らず、教会内部の通弊ハ、遂に摘発せられずして止みぬ。(改行) 然るに豈図らんや、此頃文壇に現はれたる二個の短編小説の、傍若無人にも教会内部の通弊一而も余輩の未だ認め得ざりし醜事の暴露しあらんとハ。其一を柵山人が「めつき牧師」となし、他を松華庵主人の「ひつじかひ」と為す。而して共に是牧師の醜聞を記せるものなり。<sup>23)</sup>

引用箇所は小波が自由主義的な新神学的立場からキリスト教と文化一般また他宗教との融和を強調した金森通倫の『日本現今の基督教並将来の基督教』を読んでから、自分も「信徒社会の通弊」、「教会内部の通弊」を論破しようとして止めたが、この度柵山人の「めつき牧師」と松華庵主人の「ひつじかひ」が共に「傍若無人にも」それを暴いているという冒頭の部分である。上の引用文が発表されたのは、「梢之月」発表から二年後であるが、小波が信徒社会や教会内部の「通弊」に意識的であったことが確認できる。また、「梢之月」が当時一般にはまだ新しい文化であったキリスト教や信徒に対する批判が横行していた時期に出された作品であったことが同時代評からも確認できる。

漣山人は実に基督教の命ずる処に頼り、ヒポクリットがいまはしき風説も虚に乗ぜんとするサタンが暴力も道徳の堅塁を侵しがたき活例を写したるなり。神の恵みに浴する信心無二の兄弟姉妹は此一編を読み、かの「くされ玉子」著者の意を悟らで基督教攻撃の好

23) 漣山人(1891.11.6)「批評○近時の基督教小説を見て所感を陳ぶ」『読売新聞』付録1面。

材料と心得たる悪魔の敗じくを見たる心地して、更に神の恵みを感謝すべし。24)

これは、前述したXYZ(魯庵)の同時代評であるが、「梢之月」より10ヶ月前に発表された嵯峨の屋おむろの「くされ玉子」の本意—「悪を写して信者を反省せしめ」—を悟らず、キリスト教攻撃の好材料を得たと思っていた批評家もこの「梢之月」を読んで深く恥じ入ったであろうという内容である。この引用文からも当時「基督教攻撃」があったこと、「梢之月」がそのような文脈の中で読まれていたことが確認できる。

魯庵がここで「梢之月」と比較している「くされ玉子」は、嵯峨の屋おむろが1889年2月『都の花』に発表した短編小説である。その概要は次のようになる。女主人公松村文子は女学校の教師で、熱心な耶蘇教信者と自称しているが、内実は勤先の学校の校主の息子宮川と性的関係を結んでいるほか、宮川の甥の少年晋を誘惑してこれとも関係を結ぶという多淫の女であり、晋と同衾の場面に宮川に発見されたために彼らの関係は破局に達する。憤激した宮川があり合わせた鶏卵を晋の顔へ投げつけると、「黄み汁べつたり貌は狼籍、鶏卵は腐つてありし者か、鼻持ならぬ悪臭汚穢、晋は其処へ打倒される。」その時の宮川の「くゝくさつてらア、腐敗鶏卵め。」という言葉が題名のよるところである。文子はその後、「宮川よりは白眼、学校よりは背中に塩、知人からは爪はじき」にあひ、身には父なし子を宿して途方に暮れるという後日談がついている。

文末の「嗚呼腐敗玉子、然り真にくされ玉子なり。伏したる者も、倒れたる者も、将亦罵る者も共に腐れり。彼等は皮相より見る時は頗る美しきものにして腐れざる鶏卵と異ならねど、一たび其皮を破り其内を窺へば一身唯是腐敗の塊……悲哉聖者の遺教さへ、輕薄者流の玩具となる今の世の中、嗚呼案じらるゝ世の行末……」から作者の文明批評的意図が明確に窺える作品である25)。

「くされ玉子」と「梢之月」が共に当時のキリスト教徒の醜態を題材にしているところをまず検討してみる。両作品は共に偽善的な信者と当時としては新しい西洋文化であるキリスト教を信じているというだけで持ち得た優越心を批判している。例えば、「梢之月」では以下のような語りがそうである。

総て女は心浅墓なれば、少しばかりのもの知りたるも、それを誇りたがるか常なり。謙遜を旨とする基督教信者か中にも、折ふしは斯様な婦人ありて、妾は教を聞そめてより、更に罪を犯せし事なし、妾は安息日に教会に出てぬ事なし、妾は幾人道を伝へたり、妾は神の爲ならハ、宝も惜します投つべしなど、只管に云ひふらして、吾は斯くまで信仰深き者ぞと、人に知られん事をつとむ、此等は所謂偽善者の己が前にらつはをふかして、施濟をなすものゝ如し。

24) XYZ(1890)、前掲書。

25) 笹淵友一(1974)「解説」『近代日本キリスト教文学全集』1、教文館。

ここでは、自分が如何に篤実な信者であるかを言い触らしている信徒を批判しながら、ヒロインである愛子がそのような偽善的な外面だけの信徒でないことを対照的に浮彫りにさせている。一方「くされ玉子」のヒロイン文子はまさに「梢之月」で批判している偽善的信徒の典型として描かれている。

扱又此婦人は宮川の父の立てたる女学校の教師といふ事、熱心なる耶蘇教信者といふ事、耶蘇教の宗旨の事、是等の事が話の種にて、談笑凡そ一時間。(中略)

「さうさ、感心する程でもないのねえ、知ツている事ばかりです。如何も博士の議論だとは思へませんツ、如何して貴君。一体人間は汚れた罪のある心を以て、世の中に生まれたんですものを、神の恵みでなけりやア、幸になれますものか。」(中略)

「おや、不思議さうな顔して、厭ひ？え、私の所では飲まないの。何ですと私にすまないツて。何故、宗教家だから？宗教家だツても私は飲むのさ。無論管はないのさ、お酒を禁ずるのは儀式上の事でもの、儀式も無学の者には入要ですけれど、道理を知つてる者には要りやアしません。」(中略)

「日本の男女の様に真実といふものは、薬にたくも少もなく、厭ならおよし他にあるからといふ様な浮気一三味の恋で、寄ると触ると一所になりツこでは、実に困りますねエ、其といふが畢竟無宗教だからですよ。神の教なんといふと、頭からかつけなして相手にしないんですもの、道徳が地に払ツてないからですよ。其も宜が、自分たちが左様なものですから、其を標準にして人の事を兎や角と云のでもの、失敬ぢやありませんか。私の事などは妙な事を言ツてますとき、貴君と怪しいツて、真成に人を馬鹿にした、私は此様拳主義ですが、是でも神の教は奉じてますからねエ、いやに外部を飾ツて内々醜行を極めてる利口な人とは違ますからネ (中略) / 「何とでも言ふなら言はせて置かさ、人は何と言はふと自分さへ正しければ良心に恥づる事はないさ、良心に恥づる事さへなければ其で宜さ、さア飲う飲う」

「くされ玉子」の女主人公は、非信者を「無学の徒」と蔑視し、キリスト教を「新主義」であるとキリスト教徒としての優越感を露骨に述べる女性である。しかし、口では神を説きながら飲酒も二人の男との浮気をも辞さない偽善的な信徒なのである。そして、引用文の末尾にあるように、醜聞について世間はどう云われようと、「良心」—「梢之月」では「神」—に恥じなければ良いとしている。「梢之月」では前述したように、濡衣を解こうと務め、キリスト教信徒というのは、神の前のみでなく世に対しても善であるのが真の姿であるということが小波の強調している部分であり、世俗と折衷しているところは自由キリスト教派の影響であろう。しかし、「くされ玉子」では、キリスト教信徒としての内なる「良心」に恥じなければ、世間の道徳に縛られることなく、勝手気ままに振るうことが却って「新主義」であるとされている。「くされ玉子」が当時の知識人や彼らが振り翳す文明を批判的に描いている作品であった事を踏まえると、当時の似非キリスト教信徒たちが如何にキリスト教の教

理を歪曲し、それがキリスト教批判の要因となっていたのかが窺える。

また、両作品共に教会での男女の醜聞を題材に取り上げているが、明治初期教会は新しい男女交際の場であった。1887年6月から翌年の2月まで『我楽多文庫』に連載された小波の小説「真如の月」は、教会に通う若い男女を主人公にした恋愛小説であり、中川・宮崎論も指摘しているように、「一六、七歳の彼[小波]にとって教会は楽しい男女交際の場でもあったのである。大浜徹也は、教会が「西洋文明を象徴するものとみなされ、ハイカラな場所として訪れるものが跡をたたなかった。中でも都市教会のサロン化は著しかった」<sup>26)</sup>と指摘し、1881年7月、大阪心斎橋「綿喜」が定価四銭で売り出した番付「耶蘇退治馬鹿のしんにう」を紹介している。

耶蘇を信ぜねバ不開化という奴（東前頭二十二枚目）

耶蘇を信じてやたらにをどる奴（西前頭二十五枚目）

耶蘇の婚礼式をする奴（西前頭六枚目）

また、都市教会が社会上流の人士によって構成されていくなかで醸し出された雰囲気がつぎのような演歌に歌い込まれていた。

博愛仁義の道を説く、基督教者の集まりも 男女同権飛び越えて 結婚自由の見合い  
場所 松の緑に比較べき 清き操も打忘れ 親の許さぬいたづらに 恥る少女の行末は  
思ひやるだに長大息<sup>27)</sup>

「梢之月」は伝道師と女性信徒との醜聞であるが、小波が1891年の批評で取り上げていた「ひつき牧師」と「ひつじかひ」は「梢之月」と同じく牧師と女性信徒とのスキャンダルを題材にした小説である。このように、当時教会やキリスト教徒の墮落についての批判が取りざたにされていた事実を踏まえると、「梢之月」は、これらの批判に対して一つの反証として読まれる事を欲したのではないだろうか。そして、まさに同時代評の魯庵がその点を見事に指摘していたように思われるのである。

## 5. おわりに

以上、小波の唯一のキリスト教小説と言える「梢之月」を中心に、作品の特徴と小波におけるキリスト教の問題、そして「梢之月」の同時代キリスト教に関する言説との関わりを見てきた。この作品の特徴は、何より愛子というヒロインの造型と愛子と伝道師の醜聞を取り

26) 大浜徹也(1979)『明治キリスト教会史の研究』、吉川弘文館。

27) 添田知道(1963)『演歌の明治大正史』、岩波書店。

まく彼らの態度を通してキリストの教えを寓意的に伝えている作品である。そして、そこには、当時小波の関わっていた自由キリスト教宗派の特徴が見受けられる。英米系の宗派とは異なり、教会や教理に固執するのではなく、布教を宗教以外の事柄との調和のうで行うことを特徴として点が小波の当時の文学と宗教活動との衝突なき平行や作品の内部からも窺えた。また、この作品が書かれていた当時には、キリスト教は一般的にまだ新しい宗教であったため似非信者が多く、彼らを含めてのキリスト教への批判がなされており、「梢之月」はそれらの批判に対する反証として読まれる作品である。

「梢之月」は『基督新聞』に掲載された際、「漣山人訳」となっていたが、たぶん小波のほぼ創作に近い翻案か、或は創作であろうと思われる。しかし、「訳」とある以上、原作が全くないとも断言できない。それと言うのも、明治20年代、日本ではフランスの写実主義作家エミール・ゾラに関する様々な情報や作品が紹介され、硯友社の作家達もその英訳本を読んでいたという。大西忠雄によると、「紅葉は其の頃[1887年]ゾラの『ムーレ司祭の誤ち』を英訳版で読んでいた(中略)紅葉のゾラへの傾倒ぶりは、右述の『ムーレ司祭の誤ち』を翻案して、『恋の山賊』(明治22.10)を書いている所からも窺われる」<sup>28)</sup>そうである。例えば「梢之月」が発表された1889年だけに限って硯友社やその周辺の作家達が翻案した作品をみても、5月に内田魯庵がゾラの『居酒屋』を翻案して「酒鬼」(『女学雑誌』)を、7月に山田美妙が『ナナ』を翻案した「いちご姫」(『都の花』)を、10月に尾崎紅葉が『ムーレ司祭の誤ち』を翻案して「恋の山賊」(『文庫』)を発表している。「ムーレ司祭の誤ち」は、敬虔で誠実な神父セルジュ・ムーレが野性的な少女アルビーヌとの自然な男女間の愛情を分かち合った後、自らの罪を悔い、元の禁欲的な生活に戻るが、彼に捨てられたアルビーヌはお腹の中に彼の子を宿したまま自殺するという、神父のスキャンダルを題材にした小説である。もちろん、「梢之月」と「ムーレ司祭の誤ち」を比べると聖職者のスキャンダルという題材以外に類似している点はないが、小波周辺の作家達が当時ゾラに傾倒し、相次いで翻案作を書いていた状況から、小波もゾラの「ムーレ司祭の誤ち」を知っていた可能性は大きい。そして、翻訳の概念がまだ曖昧であった当時としては、題材を借りてきただけの「訳」も考えられるのである。

現段階では、小波におけるゾラ受容は更なる考察が必要であろうが、「梢之月」という一編の短編小説が、自由キリスト教、当時のキリスト教やその信徒への批判、そして、硯友社仲間のゾラ受容という様々な要因によって生まれてきた作品であることは、確かに言えると思われる。

28)大西忠雄(1974)「ゾラ」『欧米作家と日本近代文学 フランス編』教育出版センター、p.145。

## 【参考文献】

- 伊藤蘇水稿(1891.7.19.)「日本の宗教 下(続)」『読売新聞』朝刊1面。
- 巖谷小波(1913)『小波身の上噺』宝学館書店 p.81。
- 巖谷小波(1887)「丁亥日録」瀬沼茂樹編(1968)『巖谷小波・川上眉山集』明治文学全集20、筑摩書房 p.251。
- 巖谷小波(1888)「戊子日録」瀬沼茂樹編『巖谷小波・川上眉山集』明治文学全集20、筑摩書房 p.286。
- 巖谷小波(1889)「己丑日録」瀬沼茂樹編『巖谷小波・川上眉山集』明治文学全集20、筑摩書房 p.306、321。
- 巖谷小波(1891)「辛卯日録」瀬沼茂樹編『巖谷小波・川上眉山集』明治文学全集20、筑摩書房 p.348。
- 巖谷小波(1891.11.6.)「批評○近時の基督教小説を見て所感を陳ぶ」『読売新聞』付録1面。
- 大西忠雄(1974)「ゾラ」『欧米作家と日本近代文学 フランス編』教育出版センター、p.145。
- 大浜徹也(1979)『明治キリスト教会史の研究』吉川弘文館。
- 川合道雄(1977)「六合雑誌」日本近代文学館・小田切進編『日本近代文学大事典』第5巻 講談社、p.447。
- 聖書協会連盟(19-- )『旧新約聖書』出版社未。
- 笹淵友一(1974)「解説」『近代日本キリスト教文学全集』1 教文館。
- 添田知道(1963)『演歌の明治大正史』岩波書店。
- 高瀬嘉男(1933)「基督教童話各論(第三)」日本童話協会『総合童話大講座(四)宗教童話』日本童話協会出版部 p.2。
- 中川理恵子・宮崎芳彦(1995)「巖谷小波とキリスト教—新たな小波論の可能性—」富田博之・上笙一郎編『日本のキリスト教児童文学』国土社 pp.115-129。
- 久山康(1956)『近代日本とキリスト教』基督教学徒兄弟団、p.160。
- 福田清人(1977)「巖谷小波」日本近代文学館・小田切進編『日本近代文学大事典』第1巻、講談社、p.185。
- 無記名(1891.1.7.)「○日本に於ける自由主義基督教」『読売新聞』朝刊2面。
- S.T(1892.2.23.)「批評○基督教約説(博士スピネル氏著)」『読売新聞』付録1面。
- XYZ(1890.1)「○漣山人の「梢之月」」『女学雑誌』p.8。

## 要 旨

本稿では日本児童文学の嚆矢といえる巖谷小波がの『基督教新聞 付録』(1889年12月20日附)に発表した「梢之月」を巖谷小波におけるキリスト教受容、同時代のキリスト教文学、作中の聖書の言葉などを中心に考察した。この作品は従来の巖谷小波の先行研究では言及すらされてこなかった作品であるが、小波の初期文学におけるキリスト教受容を克明にみせてくれている。

「梢之月」はキリスト教信徒のスキャンダルという素材を通して真の信徒の有り様とキリストの教えを伝える寓意小説として読める作品である。ここには、当時小波が関係していた自由キリスト教宗派の特徴が大きく影響していたと見られる。自由キリスト教は英米系の宗派とは異なり、教会や教理に固執せず、キリスト教と日本の文化と調和に重点をおいた布教活動が特徴的であるが、宗教との間で何ら葛藤を感じなかった小波の文学活動や「梢之月」の作品内容からもその特徴が窺えた。この作品が発表された時代にキリスト教は一般的にまだ新しい宗教であったため似非信者が多く、彼らを含めてのキリスト教への批判が往々になされており、「梢之月」はそれらの批判に対する反証としても読まれる作品であった。この作品の主題提示の単純明快さと、キリストの教えを物語を通して伝えようとする寓意小説の特徴も、また自由キリスト教の一伝道する教理を平易に、受容する側に受容れ易くするところ—の裏付けであると言える。

「梢之月」は「漣山人訳」となっているが、これは、硯友社の作家達が当時エミール・ゾラに傾倒し、相次いで翻案作を出していた状況から、小波もゾラの「ムーレ司祭の誤ち」を知っていた可能性は大きく、翻訳の概念がまだ曖昧であった当時としては、題材を借りてきただけの「訳」も考えられる。

以上、小波の「梢之月」という一編の短編小説は、自由キリスト教、当時のキリスト教やその信徒への批判、そして、硯友社のゾラ受容という様々な要因によって生まれてきた作品であったことを確認した。

キーワード：巖谷小波、「梢之月」、キリスト教、普及福音新教伝道会、「くされ玉子」

투 고 : 2011. 8. 31  
1차 심사 : 2011. 9. 10  
2차 심사 : 2011. 10. 1





# 「厭世詩家와 女性」論

-에머슨의 「LOVE」(「戀愛」)의 受容을 中心으로-

李 淙 煥\*

(e-mail: jhwlee@knu.ac.kr)

---

## 目 次

---

序論: 「厭世詩家와 女性」의 執筆動機 및 背景

第一: 明治初年代(1870-80年代)의 日本人의 女性觀과 戀愛觀

第二: 에머슨의 「LOVE」(「戀愛」)

第三: 「厭世詩家와 女性」의 兩文學像인 「想世界」와 「美世界」의 原拠  
- 「꽃봉오리 같은 시절」(蕾のころ)과 「어른의 세계」(大人の世界)

第四: 에머슨과 透谷 兩者의 戀愛觀과 結婚觀의 比較

結論: 에머슨의 「樂天主義」的 戀愛觀과 透谷의 「厭世主義」的 戀愛觀

---

## 序論: 「厭世詩家와 女性」의 執筆動機 및 背景

「厭世詩家와 女性」은 1892年(明治25年) 2月 6日과 20日 두 번에 걸쳐서 「女學雜誌」에 發表되었다. 이 當時 北村 透谷(기타무라 도코쿠)의 나이는 23歲였다. 그해 1月 15日 그의 日記에 依하면 透谷은 「이제부터 바야흐로 문단에 뛰어들 생각뿐이다」라고 決意한다. 이 評論의 原稿를 가지고 巖本善治(이와모토 요시하루)를 訪問했다. 善治는 곧바로 이 원고를 자신이 主宰하는 「女學雜誌」에 掲載하였다. 透谷은 이와 同時에 이 잡지의 文學 評論 藪을 担当해 달라는 依賴를 받았다.

「厭世詩家와 女性」은 透谷에게 있어서 評壇에 오른 첫 번째 作品이 되었다. 以後 透谷은 旺盛한 創作 意慾으로 1893年 가을까지 붓물 터진 듯한 情熱로써 계속해서 評論을 써내려간다. 이때 그는 「人世を相渉るとは何の謂ぞ」(인생을 산다는 것은 무슨 의미

---

\* 慶北大学校 日語日文学科 教授

일까), 「内部生命論」(내부생명론), 「万物の声と詩人」(만물의 소리와 시인), 「徳川氏時代の平民的理想」(도쿠가와씨 시대의 평민적 이상), 「明治文学管見」(메이지문학관견) 등으로 文學을 本質적으로 把握함과 同時に 文學史를 叙述하는데에 着手한다.

「厭世詩家와 女性」의 첫머리는 다음과 같다.

恋愛は人世の秘鑰なり。恋愛ありて後人世あり、恋愛を描き去りたらずには人生何の色味かあらむ。

戀愛란 인생이라는 비밀을 푸는 열쇠이다. 戀愛가 있고서야 비로소 참다운 인생이 있다. 戀愛를 생각하지 않고서 어찌 인생의 참맛을 느낄 수 있으랴.

이 序頭는 이와 같은 戀愛至上主義로부터 시작된다. 이어서 透谷는 「厭世詩家」를 다음과 같이 단정 짓고 있다. 「오히려 그 정이 많음(濃靑)이 보통사람의 몇 배나 되는 경우도 많다. 그럼에도 불구하고 남과 화합하여 일생을 보내는 자 그 수가 극히 적은 것」이다. 이러한 「厭世詩家」에 있어서 戀愛가 가지는 意味 그리고 그 結婚觀 내지는 女性觀을 다음과 같이 말하고 있다. 첫째 「厭世詩家」가 보통 사람보다도 더 「戀愛」에 대한 熱情이 남다른 理由. 둘째 「여성으로 하여금 詩家の 妻가 되는 것을 경계한다」(女性をして嫁して詩家の妻となるを戒める)는 理由.

以上과 같이 評論 「厭世詩家와 女性」은 많은 先學者들이 指摘한 것 같이, 前半에는 「戀愛」에 대한 熱烈한 讚美가, 後半에는 婚姻에 대한 幻滅과 戀愛의 葬送曲이 각각 주된 論제로서 記述되어 있다. 즉 전체적으로는 「戀愛」가 갖는 根本的인 矛盾으로 因하여 마치 主題가 分裂되어 있는 것 같이 여겨진다. 「厭世詩家와 女性」의 주제와 관련시켰을 때, 일찍이 吉本隆明(요시모토 다카아키) 氏가 「日本近代詩の原流」(일본 근대시의 원류)에서 다음과 같은 견해를 밝히고 있다)

이 評論의 基底에 흐르고 있는 美那子와의 戀愛와 결혼의 체험, 그리고 집필당시의 透谷가 1892년에 작품 활동을 하는 가운데 가장 固着한 것이 바로 「戀愛」였다. 그 이유는 무엇인가. 透谷는 自由民權運動으로부터 離脱하였으며, 이를 계기로 해서 생긴 鬱狀態, 美那子와의 戀愛를 成就함으로써 그 굴레로부터 벗어날 수가 있었다. 그러나 곧 이은 결혼 생활은 바로 社会的束縛이며, 그는 곧 実生活에서 비롯된 번거로움으로 둘러싸이게 된다. 이리하여 透谷는 어떻게 해서든 戀愛의 自然性, 純粹性에 집착하지 않을 수가 없었다.

透谷에게 있어서 女性이야말로 秩序와 束縛의 代弁者인 同時に, 秩序 그 自体의 象徴이다. 그리고 戀愛야말로 「想世界」의 敗將이 편하게 쉴 수 있는 牙城이다. 이리하여 「実世界」로 되돌아가서 살아가려는 慾望을 일으킨다. 透谷는 이러한 생각에 사로잡혀 있었다.

1) 吉本隆明. 『吉本隆明全著作集5』所収 「日本近代詩の原流」, p81

平岡敏夫(히라오카 도시오)氏は 윗글의 前半部인 戀愛至上主義를 인용하면서 「戀愛의 自然性 純粹性」을 「戀愛 記憶의 再生産」과 關聯시키고 있다.<sup>2)</sup> 위의 「1892년에 作品活動」이라는 것은 戯曲 「蓬萊曲」(1891年 5月)을 가리킨다. 美那子와의 結婚이 가지는 意味와 結婚生活에 의한 戀愛의 喪失에 이르기까지의 過程을 叙述한 부분이 「厭世詩家와 女性」의 내용과 같다. 그리고 그 期間 동안 크게 흔들리고 있는 透谷의 마음 이 잘 表現되어 있다. 결국 結婚生活이란 옛날에 지냈던 「戀愛의 自然성, 순수성」을 잃어가는 過程이다. 이리하여 옛날의 斬新한 追憶을 잃지 않으려는 努力이 「戀愛 記憶의 再生産」으로 나타난 것이다. 그 때문에 「戀愛의 새로운 발견」이 필요했고, 이를 위해서는 그 相対는 美那子가 아니라 弟子인 富井松子(도미이 마쓰코)였던 것이다.

透谷는 松子와의 戀愛를 媒介로 하여 以前에 있었던 美那子와의 「戀愛 記憶의 再生産」을 되찾으려 한다. 이 時點에 이르러 透谷에게 있어서 美那子와의 「戀愛 記憶의 再生産」은 觀念的, 抽象的인 것이다. 이 평론의 첫 부분에서 「戀愛」가 가지는 根本的 矛盾, 즉 「戀愛」의 「宣言」(マニフェスト)임과 동시에 「장송곡」(葬送曲)이라는 相反된 構想의 裏面에는, 美那子와의 결혼생활에서 비롯된 幻滅과 松子와의 플라토닉한 감정 이 二重 이미지(double image)화 되어서 透谷의 意識 속에서 作用하고 있다.

笹淵友一氏は 松子는 透谷가 精神的 友愛를 기울였던 제자(教子)였다고 말하고 있다.<sup>3)</sup> 그러나 두 사람은 결코 이루어져서는 안 될 관계였다. 결국 두 사람의 관계는 結婚에 다다르지 못하고 「悲恋」의 형태로 끝나고 만다. 이 「悲恋」은 「狂愛」로 增幅되어 展開되어 간다. 이러한 透谷의 「狂愛」에 관해서는 다음 機會에 言及하기로 하겠다.

지금껏 「厭世詩家와 女性」의 執筆 動機 및 그 前後 事情에 關하여 叙述해 보았다. 결과적으로 吉本隆明氏가 앞에서 지적하듯이 이 評論의 基底에는 美那子와의 戀愛時節에 엮을 수 있었던 戀愛의 讚美와 結婚生活에서 겪었던 「厭世思想」이 이 評論의 基底에 흐르고 있다. 이러한 透谷의 의도를 살펴보면 즉 과거의 아름다웠던 戀愛讚美를 다시 謳歌하려는 소위 「戀愛 記憶의 再生産」이 그에게는 切實한 問題로 登場하게 되었다. 이것이 곧 「厭世詩家와 女性」을 執筆 할 當時 즉 1892年頃에 透谷가 「戀愛」에 固着할 수밖에 없던 그 背景이었다.

透谷는 자살하기 바로 前月인 1894年 4월에 評伝 「에머슨」을 刊行했다. 따라서 評伝 「에머슨」은 그의 遺作에 해당된다. 그 序頭에 「에머슨은 무릇 그를 숭배하는 자의 에머슨이다. 나는 그 중의 한 사람일 뿐」(エマルソンは凡て彼を崇拜する者のエマルソンなり)。余は其中の一人なるのみ)이라고 되어있다. 透谷가 思想的으로 가장 影響을 받은 사람이 에머슨임을 그 스스로가 밝히고 있다.

에머슨(Emerson, Ralph Waldo : 1803~1882年)은 美国의 哲學者이며 詩人이다. 처음

2) 平岡敏夫. 『続北村透谷研究』, 「透谷その『戀愛』の行方」, 1971年. p.119

3) 笹淵友一, 『文学界とその時代 上』, 「北村透谷」, 1950年, p.68

에 聖職에 있었지만 教会와 衝突하고 1835年 以来 뉴햄프셔 주의 콩코드에 居住하였다. 이리하여 '콩코드의 哲學者'로 불린다. 그의 社會觀은 貧者를 擁護했으며 美國의 黑人 奴隸制度를 反對했다.

透谷의 作品 중에 처음으로 「에머슨」의 이름이 나오는 것은 「厭世詩家와 女性」이다. 따라서 透谷가 에머슨을 접하기 시작한 것은 적어도 「厭世詩家와 女性」을 집필하기 以前 즉 1892年 1月 以前의 일이라고 推定되어진다. 따라서 「厭世詩家와 女性」은 透谷에 있어서 에머슨과의 만남에서 이루어진 첫 作品이라고 할 수 있다.

以上の 觀點에서 알 수 있듯이 透谷가 執筆 한 「厭世詩家와 女性」은 에머슨의 「LOVE」(「戀愛」)으로부터 많은 영향을 받았다고 여겨진다. 따라서 에머슨의 作品인 「사랑」을 透谷가 어떻게 受容하고 있는가. 이를 分析해 봄으로서 「厭世詩家와 女性」에 그려져 있는 透谷의 戀愛觀을 總體的으로 把握해 보고 싶다. 여기에 本稿의 主된 目的이 있다.

本稿의 進行은 主로 다음과 같다. 「厭世詩家와 女性」의 執筆 動機 및 그 背景. 透谷와 에머슨과의 만남. 明治初年代의 日本人의 女性觀과 戀愛觀 「想世界」와 「実世界」의 原拠. 에머슨의 戀愛觀과 透谷의 戀愛觀의 比較 等の 順序이다. 論의 展開는 무엇보다도 本文을 解釈하는 데에 重点을 두면서 進行해 나가겠다.

## 第一： 明治初年代의 日本人의 女性觀과 戀愛觀

- 「戀愛란 인생이라는 비밀을 푸는 열쇠이다.」(恋愛は人世の秘鑰なり).-

「厭世詩家와 女性」이 發表된 時代가 아직 封建的殘滓가 強하게 남아있던 時代였다. 따라서 이러한 戀愛至上主義의 宣言에 該当하는 한 句節은 그 당시 青年들에게 크나큰 波紋을 던졌다. 島崎藤村(시마자키 도손)은 小説 「桜の実の熟する時」(벚꽃나무 열매가 익을 무렵 1919年 1月)에서 「厭世詩家와 女性」을 처음 접했을 때의 感動을 다음과 같이 披瀝하고 있다.

이토록 大膽하게 말한 청년(青年)이 이제까지 있었던가. 적어도 자신들이 말하려 했지만 아직까지 말하지 못했던 것을 이토록 大膽하게 말한 사람이 있었던가. 스테기치(捨吉)는 먼저 이 문장에 숨겨진 강한 힘에 끌렸다. 그의 버릇(癖)인 양 마치 전기에라도 닿은 듯이 깊고도 그윽하게 몸서리(電氣にでも触れるやうな深い幽かな身震ひ)가 그의 몸 속 깊이 스며들었다<sup>4)</sup>

4) 島崎藤村. 「桜の实の熟する時」, 1919年 1月

그리고 바로 이 時期에 青年期를 보낸 木下尚江(기노시타 나오에)는 後年에 다음과 같이 回想하고 있다.

이 한 구절은 마치 대포로 한방 맞은 듯 한 느낌을 가져다 준다(この一句はまさに大砲をふちこまれた様なものであつた). 이처럼 진지하게도 적절하게 戀愛를 표현한 말은 일본에서 최초(我国最初)의 것이라고 생각한다. 이전까지의 戀愛-男女間의 일은 웬지 어딘가 불결한 것(なにか汚いもの)으로 여겨져 왔다. 그것을 이토록 明快하게 喝破(갈과 :잘못을 바로잡고 진리를 말하여 밝힘)한 적은 없었다)

封建的 女性觀에서 아직 벗어나지 못했던 當時에 있어서 이 句節은 확실히 青天霹靂과도 같은 것이었다. 透谷의 戀愛觀의 意義는 당시에 澎湃해 있던 封建的 人間觀·倫理觀에 對抗하여 思想的인 革命을 鼓吹시키는 데에 一翼을 担当한 점에 있다. 바꿔 말하면 당시의 青年들에게 커다란 충격을 주고, 그 과문을 던져준 것은 透谷가 지니고 있는 「戀愛」의 문제를 중심으로 살펴본 社會位相의 面 가운데에서 그 一面에 지나지 않는다.

以下 1892年 「厭世詩家와 女性」이 執筆 되기까지의 日本人의 女性觀 내지는 戀愛觀을 살펴볼 필요가 있다. 先驅者 透谷으로서도 새로운 戀愛觀이 간단히 形成되어진 것은 아니다. 透谷가 활약한 明治時代의 前代는 江戸時代부터 慣習的으로 내려온 男尊女卑 制度가 社會 全般에 널리 投影되어져 있었다. 當時 社會의 特色은 오늘날과 같은 一夫一妻制가 아니고 蓄妾制度나 遊里制度가 公認되어져 있었다. 이러한 社會 風潮 속에서 當時의 독특한 男女間의 愛情을 나타내는 美學으로서 好色이 澎湃하기도 했다.

明治維新이라는 새로운 時代를 맞이하여 西洋으로부터 近代的 戀愛라는 新思潮가 물밀듯이 다가온다. 이러한 近代的 戀愛의 思想的 背景이 된 것은 西洋의 그리스도교였다. 神앞에 모든 人間은 平等하다는 西歐의 浪漫主義가 그 思想的 支柱가 되었다. 이리하여 「戀愛」라는 新造語가 태어나게 되었다. 「戀愛」라는 單語가 日本에서 처음으로 나타난 것이 1874年(明治7年)에 출간된 『英和辭書』이다. 이것은 이미 平岡敏夫氏에 의해 指摘된 바가 있다<sup>6)</sup> 1887年版 『仏和辭林』에는 “Amour”를 「戀愛. 種愛. 好愛. 愛. 愛セラルル所の者」라고 翻譯되어있다.<sup>7)</sup>

巖本善治는 「女學雜誌」(1890年 10月)에 다음과 같이 적고 있다.

日本の男子が女性に恋愛するはホンノ皮肉の外にて、深く魂(ソウル)より愛するなどの事なく、随つてかかる文字を最も嚴肅に使用したる遺伝少なし.

日本 男子가 女性을 사랑한다고 하는 것은 정말이지 가족과 살에 지나지 않으며, 魂이 魂을 사랑하는 것은 아니다. 따라서 옛 부터 사랑이라는 文字를 진지하게 사용한 예는 적다.<sup>8)</sup>

5) 木下尚江. 「福沢諭吉と北村透谷」-思想上の二大恩人-, 「明治文学研究」, 1934年 2月.

6) 平岡敏夫, 『北村透谷研究』, 「我牢獄」, p.170.

7) 『翻譯語成立事情』, 1982年, 岩波新書.

8) 巖本善治. 「女學雜誌」. 1890년 10월

善治에 이어서 같은 雜誌에서 山路愛山(야마지 아이잔)은 「戀愛의 철학」(恋愛の哲学)(1890년 11월)을, 그리고 徳富蘇峰(도쿠도미 소호)은 「국민의 벗」(國民之友)에서 「非戀愛」(1891년 7월)를 각각 發表했다. 善治는 이것에 應戰하여 1891년 8월, 「戀愛란 무엇인가」(非戀愛を非とす)를 發表했다.

福沢諭吉(후쿠자와 유키치)는 「日本夫人論」(1885年), 植木枝盛(우에키 에모리)는 「男女의 同權」(男女의 同權 1888年)에서 각각 透谷보다 먼저 婦人問題를 社會問題와 聯関 지어 論하고 있다. 福沢는 女性의 「춘정을 만족」(春情の満足)시키고, 「춘정을 달래고」(春情を慰る), 「정감을 키우는」(情感を養う), 즉 성의 개방(性の開放)을 主張하고 있다. 또한 婚姻의 權利平等과 女性에게 있어서 再婚의 自由·權利는 「인간세계의 자유쾌락은 남녀공유」(人間世界の自由快樂は男女共有)하는 것이라고 呼訴하고 있다. 植木는 婦人參政權을 강도 높게 주장함과 동시에 女性側의 恣意性을 認定하고 있다. 이러한 것들이 그들의 独自の 見解라고 할 수 있다. 自由平等이라는 觀點에서 볼 때 그들이 主張하는 男女同權論은 重要な 意味를 가진다.

福沢諭吉 中村正直(나카무라 마사나오) 등과 함께 「明六社」를 設立한 西周(니시 아마네)는 「明六雜誌」에 「情慾論」(1885年)을 발표했다. 西周는 다음과 같이 이야기하고 있다.

情欲ハ吾人天賦ノ尤重切ナル者ニシテ吾人ノ因テ以テ生存スル所以ナリ、若夫レ吾人ノ性中情欲ヲ欠ク時ハ人類何ニ由テ生々蕃植スルコトヲ得ンヤ。

정욕은 우리가 하늘로부터 부여받은 가장 중요한 것으로 인간은 이것에 의해서 생존하는 바이다. 만약 우리의 性 중에서 情慾이 없으면 人類는 어떻게 끊임없이 子孫을 繁殖할 수 있겠는가

이같이 그는 「정욕의 천부」(情欲の天賦)·「정욕의 자연」(情慾の自然)을 主張하면서 啓蒙活動에도 한 몫을 担当했다. 그리고 山口鼎軒(마구치 데이켄)은 「婦人に 관한 新語」(婦人に関する新語)(1892年 5月-6月, 「東京經濟雜誌」)에서, 「남녀동권은 반드시 이루어져야 한다」(男女同權ならざるべからず) 「남존여비가 대체 무슨 말인가」(男尊女卑とは何ぞや)라고 呼訴하였다. 여기서 男女同權이 그 當時의 社會問題가 되었음을 알 수 있다.

以上과 같이 明治初年代(1870-80年代)는 아직까지도 前代의 封建的 잔재가 澎湃한 時代였다. 이러한 社會 雰囲気 속에서 새로운 自由의 물결인 西欧의 思想으로 武装한 近代的 戀愛가 胎動하기 시작했다. 先驅者 透谷의 「厭世詩家와 女性」은 이러한 時代的 狀況下에서 태어났다.

## 第二: 「에머슨」의 「LOVE」(「戀愛」)

透谷가 翻譯 한 「에머슨」은 7章으로 나누어져 있다. 그런데 그 중에서 「사랑」이라는 별도의 章은 두고 있지 않다. 그러나 透谷 자신은 「에머슨」의 「제7 그의 실제교」(其七 彼の實際教) 중에서 다음과 같이 이야기하고 있다.

彼は愛情(ラブ)を論ずるにありても、プラトニック・ラブの原則より演繹して、高尚なる思求より発するを論じ.

그는 애정을 논하는 데 있어서도 플라토닉 러브의 원칙을 연역해서 고상한 사구에서 생겨난 것을 논하여

여기에 에머슨의 「LOVE」(「戀愛」)이 拳論되어 있다. 이것을 보아 透谷가 에머슨의 評論 「사랑」을 읽은 것을 뒷받침하고 있다고 볼 수 있다. 「厭世詩家와 女性」속에 에머슨의 이름이 2회에 걸쳐 다음과 같이 引用되어져 있다.

에머슨이 말한 적이 있다. 가장 냉담한 철학자(冷淡なる哲学者)라 해도, 戀愛의 맹렬한 기세(戀愛の猛勢)에 쫓겨 여기저기 정처 없이 돌아다니던(逍遙徘徊せし) 少年시절, 그 영혼이 진 빛을 갈을 수 없다. - 라고

혼인과 죽음이란, 자국의 언어를 겨우 구사하기 시작하는 유아(幼兒)로부터 무덤(墳墓)에 이르기까지 인간이 항상 입에 담은 말이다. 이것은 에머슨의 지당한 말이다.

吉田精一(요시다 세이치) 氏의 指摘에 依하면, 後者の 訳文에 정확하게 들어맞는 原文은 찾아볼 수 없다.<sup>9)</sup> 그리고 前者는 에머슨의 「LOVE」(「戀愛」)의 다음 文에서 引用된 것이다.

For persons are love's world, and the coldest philosopher cannot recount the debt of the young soul wandering here in nature to the power of love, without being tempted to unsay, as treasonable to nature, aught derogatory to the social instincts.

왜냐하면 인간사회(人間社会)는 사랑의 세계다. 그리하여 가장 냉담한 철학자라도, 이 자연계(自然界)를 방황하는 젊은 영혼이 사랑의 힘에 입고 있는 은혜를 이야기할 때, 만약 이 사회본능(社会本能)의 가치(価値)를 조금이라도 상처 입히는 것 같은 것을 말하면, 이는 대자연(大自然)에 거스르는 행위이며, 따라서 반드시 이 젊은이의 이야기를 철회시키고 싶어 하기 때문이다.(以下 原文은 入江勇起男(이리에 유키오) 氏가 日本語로 翻譯한 것을 参照로 한다.)

透谷는 두 번에 걸쳐서 에머슨의 글을 引用하고 있지만, 그것은 原文과는 相当히 距離가 있다. 그것은 誤訳이나 意識이라고 하기보다도 透谷의 独自の인 見解라고 보는

9) 吉田精一, 『近代文芸評論史・明治篇』, 「浪漫主義の文学論」, 「北村透谷」. p.574

편이 좋을 것 같다. 이것은 透谷가 그 자신이 경험한 사랑을 토대로 하여 독자적인 견해를 追求해 가는 것을 의미한다. 바꿔 말하면, 透谷는 에머슨의 글을 읽으면서 거기에다 自己의 見解를 덧붙여 이것을 이야기하고 있다. 그 점에서 「透谷에게 있어서 에머슨은 規範적인 것이 아니다」<sup>10)</sup>라고 하는 北川透(기타카와 도루) 氏의 指摘은 注目할 만하다.

에머슨의 이름을 직접 거론하고 있는 부분을 제쳐두고라도, 이 평론 속에 에머슨의 「사랑」의 원문에서 原拠를 얻었다고 보여 지는 부분이 대략 10여 곳 있다. 그 중에서 몇 가지 例를 들어보자. 우선 첫머리의 「戀愛은 인생의 비밀을 푸는 열쇠이다」(戀愛は人世の秘鑰なり). 이것의 典拠는 「LOVE」(「戀愛」)의 다음 부분에 있다.

Then he passes from loving them in one to loving them in all, and so is the one beautiful soul only the door through which he enters to the society of all true and pure souls.

사랑이란 어느 한 사람이 지니고 있는 두드러진 모습을 사랑하는 것으로부터 시작하여, 나아가서는 만인(萬人)을 사랑하게 된다. 이렇게 해서 하나의 아름다운 혼(美しい魂)은 온갖 眞実하고 청순한 혼(清純な魂)과 사귀게 되는 입구(入口)인 것이다.

이 原文의 「the door」(入口)가 『厭世詩家와 女性』에서는 「비밀을 푸는 열쇠」(秘鑰)로 바뀌어져 있다. 「戀愛」는 「모든 진실하고 순결한 사람들이 사회 속에 들어가는 실마리가 된다」(すべての眞実で純潔な人々の社会の中に入るよすがとなる). 이것은 서로 생각하고 서로 사랑함(相思相愛)으로서 비로소 「사계의 한 분자」(社界の一分子)가 된다고 하는 의미이다. 이것은 『厭世詩家와 女性』에서 말하는 「戀愛」의 役割과 같은 뜻으로 쓰여 지고 있다.

男女既に合して一となりたる暁には、空行く雲にも顔あるが如く、森に鳴く鳥の声にも悉く調子あるが如く。

남녀가 어우러져 하나가 되는 새벽에는 하늘을 지나가는 구름에도 얼굴이 있는 것과 같이, 숲에서 우는 새소리에도 모두 다 音調가 있는 것 같다.

이러한 戀愛의 陶醉境은 「LOVE」(「戀愛」)의 다음 문장에 의한 것이다.

The passion rebuilds the world for the youth. It makes all things alive and significant. Nature grows conscious. Every bird on the boughs of the tree sings now to his heart and soul. The notes are almost articulate. The clouds have faces as he looks on them.

사랑은 청년으로 하여금 지금까지 지녀왔던 세계관을 바꾸어 버리게 한다. 그것은 만물을 살리고 의미 있는 것으로 만든다. 저절로 의식이 싹튼다. 나뭇가지에 머무는

10) 北川透, 「エマソンとの出会い」, 「現代詩手帖」, 1975年 4月.



작은 새(小鳥)는 바야흐로 젊은이의 가슴과 혼을 향해 노래하고 있다. 그 울음소리는 거의가 의미 있는 말이다. 젊은이(若人)가 구름(雲)을 바라보면 구름은 얼굴(顔)을 가지고 있다.

에머슨의 「LOVE」(「戀愛」)으로부터의 影響關係에 関한 先行研究는 吉田精一氏와 笹淵友一氏(사사부치 도모이치 씨), 이 두 분의 見解로부터 出發하는 傾向이 있다. 吉田精一氏에 의하면 「厭世詩家와 女性」의 前半에서 볼 수 있는 戀愛讚美는 「에머슨의 사상을 그대로 승계한 翻案에 가까운 것」(エマーソンの思想をそのまま承けた翻案に近いものである)이다. 그래서 論者는 두 분의 주장에 論者 나름대로의 見解를 덧붙여서 透谷가 에머슨의 戀愛觀을 어떤 식으로 받아들이고 있는지 좀 더 면밀히 검토해 보겠다.

우선 에머슨의 「LOVE」(「戀愛」)을 透谷의 戀愛觀과 比較하면서 叙述하고자 한다. 「LOVE」(「戀愛」)에 인용되어 있는 詩를 보면 다음과 같다.

Thou are not gone being gone, where'er thou art, Thou leav'st in him thy watchful eyes, in him thy loving heart.

당신은 그의 곁을 떠나 어디에 있더라도 당신은 떠나 있는 것이 아니다. 당신은 그의 안에 당신이 응시하는 눈을 남기고 또 그의 안에 당신의 사랑하는 마음을 남기고 있다.

여기에는 戀愛의 感覺性과 官能性은 止揚되고 오로지 純粹한 精神的 憧憬的 性格이 重視되고 있다. 바로 透谷가 말하는 대로 이 「사랑」은 「플라토닉 러브의 원칙을 연역해서 고상한 사구에서 생겨남을 논」한 것이라고 할 수 있다. 에머슨도 透谷와 같이 唯心化 傾向이 顯著하다.

에머슨은 戀愛에도 進歩가 있음을 認定한다. 그에 의하면 戀愛는 自然히 血氣 가득 찬 것으로 聯想되는 것이다. 따라서 그것을 생생한 色彩로 그려내기 위해서는 그리는 사람이 너무 나이를 먹지 않는 것이 바람직하다. 그러나 그는 반드시 青春期의 情熱을 과대평가 하지 않으며, 또한 戀愛는 젊은 시절에 시작된다고 말하면서도, 老人에게도 사랑을 누릴 수 있는 가능성이 있다고 보고 있다. 戀愛의 從僕이 되어버린 사람이라면 누구나 늙지 않는다. 왜냐하면 老人이 謳歌하는 사랑은 젊은이들의 사랑과 언뜻 달리 보이겠지만, 그 사랑의 高潔함 그리고 그 사랑에 바치는 정열은 젊은이에게도 뒤지지 않는 것이기 때문이다. 戀愛는 全世界와 大自然의 모든 것을 비추어 빛나게 하는 「일종의 불」(一種の火)이다. 그런 까닭에 우리들이 戀愛를 20歲에 30歲에 혹은 80歲에 시작을 하더라도 그것은 問題가 되지 않는다. 笹淵友一氏가 말한 대로 에머슨의 이 老成한 戀愛觀에는 그의 특징인 매우 樂天的인 調和思想이 一貫되게 흐르고 있다!<sup>1)</sup>

에머슨에 의하면 戀人의 얼굴이나 모습에서 문득 엿보이는, 말로 표현하기 어려운 魅力은 조금이라도 그것을 理論的으로 설명하려고 해버리면 그 매력은 破壞되어 버린

11) 笹淵友一의 前掲書, 「第1章 北村透谷」 「第6節 戀愛觀」, p242.

다. 「戀愛」는 사회에서 일반적으로 이야기되는 어떠한 友情이나 愛情과는 전혀 다르며, 이것은 우리들이 근접할 수 없는 또 달리 도달할 수 없는 세계, 즉 「절대적인 미와 우아함」(絶對的な美とゆかしさ)인 것이다. 소위 戀愛는 「지복의 세계」(至福の世界), 「천국에서 내리찍는 성스런 환희」(天国から降りそぐ聖なる歡喜)라고 말할 만한 것이다. 透谷의 경우도 마찬가지로 「戀愛」 속에 포함된 미」(恋愛の中に含める美)는 도저히 설명할 수 없는 것이다. 또 「戀愛」는 「지하에 있는 것이 아니고, 천상에서 지하로 내려온 신의 사절과 같은 것」(地下のものにはあらざるなり、天上より地下に降りたる神使の如きもの)(『노래염불』을 읽고)이다.

그리고 에머슨은 「사랑이 있으면 자기를 남에게 바치면서도, 그 이상으로 자기를 자기 자신에게 바치고 있다」(愛があれば、おのれを人に捧げながらも、それ以上におのれを自分自身に捧げている)라고 말한다. 이것은 透谷가 말하는 「戀愛는 일단 나를 희생함과 동시에 나인 『자기』를 비추는 거울이다」(戀愛は一たび我を犠牲にすると同時に我れなる『己れ』を写し出す明鏡なり)라는 뜻과 거의 같이 쓰여 지고 있다. 에머슨은 「사랑」의 문장 속에서 戀愛 中心的인 心理를 볼 수 있는 첫째 조건은 「이 사랑의 정조를 역사에 의해서가 아니라 희망 속에 나타나는 대로 연구하는 것이다」(この愛の情操を歴史によってではなく、希望の中にそれが現れるがまゝに研究することである)라고 말하고 있다. 이것은 「戀愛」는 「현재 뿐만이 아니고 일부는 희망에 속하는 것」(現在のみならずして、一分は希望に属する者)이라고 하는 透谷의 意向과 一致하고 있다.

### 第三: 「厭世詩家와 女性」의 「想世界」와 「実世界」의 原拠

- 「꽃봉오리 같은 시절」(蕾のころ)과 「어른의 세계」(大人の世界)-

透谷는 「厭世詩家와 女性」에서 그의 文學世界를 「想世界」와 「実世界」라는 兩 文學像으로서 설명하고 있다. 「想世界」는 「実世界」에서 살아가는 人間이 志向하고자 하는 理想의 世界이며 希望의 世界이다. 이 둘은 單純히 対立하고 있는 것이 아니다. 兩者는 서로 간에 拮抗性의 關係로서 存立한다. 透谷의 兩 文學像인 「想世界」와 「実世界」의 原拠에 해당되는 부분이 에머슨의 「LOVE」(「戀愛」)에 다음과 같이 그려져 있다.

어른(大人)이 되면 한없이 양심(良心)의 가책(苛責)을 받음으로 해서, 꽃봉오리 같은 시절(蕾のころ) 맛보았던 달콤한 환희(歡喜)로 가득 찬 추억(追憶)을 쓰디쓴 것으로 바꾸어 버리고, 모든 그리운 사람의 이름을 기억 속에 사라져 버리게 한다. 어떤 일이라도 지성(知性)이나 진리(真理)의 관점에서 바라보면 아름다운 것이다. 그러나 체험(体験)을 통해서 바라보면 모든 것은 쓰다(酸). 상세한 기억은 슬프다. 그러나 계획 그 자체는 훌륭하고 고귀(高貴)하다. 現實世界-때(時)와 장소(所)에 제약받는 이 고통스러

은 왕국(王國)에는 걱정(心配), 고뇌(なやみ), 및 공포(恐怖)가 살아 숨 쉬고 있다. 사상(思想)에는 영원한 희열(永遠の喜悅), 환희의 장미가 피어나 있다. 뮤즈의 신들은 모두 그 주위에서 노래하고 있다. 하지만 비탄(悲嘆)은 어제 오늘의 국부적(局部的)인 이해(利害)에 집착한다.

「꽃봉오리 같은 시절」(蕾のころ)이 「어른」(大人)의 세계와 자주 對比되어지고 있다. 「꽃봉오리 같은 시절」은 「少年」의 세계 「어린 시절」(幼いころ)이라고도 말하고 있다. 이 시절은 歡喜를 만끽할 수 있는 追憶이 있고, 어떠한 일도 知性 혹은 真理의 觀點에서 바라보려고 한다. 이것을 다른 말로 하면 다음과 같다.

最も幼いころのいんぎんと親切の表明は自然界の示す最も魅力できな絵となる。それは粗野で質朴な人の中に見られる礼節と優雅さの曙光である。

아주 어린 시절 겸손하고 예의바르게 보여준 친절은 자연계에서 볼 수 있는 가장 魅力적인 그림이 된다. 그것은 조잡하고 소박한 사람들 속에서 볼 수 있는 禮節과 優雅함으로 가득 찬 曙光이다.

이 「어린 시절」(幼いころ)에는 체험을 통해 겪는 「쓴」(酸) 맛은 없고 「아름다운 것」(きれいなもの)만 느껴진다. 체험을 한 뒤 때와 장소에 제약받는 「현실의 세계」(現実の世の中)가 「어른」(大人)의 세계이다. 이것은 透谷가 말하는 「実世界」 그 자체이다. 그곳에는 「걱정」 「고뇌」 및 「공포」가 도사리고 있다. 「어린 시절」은 한없는 良心의 苛責을 받고 있는 「어른」 세계에 의해서 철저히 否定된다. 그러나 그 속에서 永遠한 喜悅과 歡喜의 꽃을 피우게 하는 思想이야말로 戀愛이다. 뮤즈의 神들은 그 주위에서 戀愛를 謳歌한다. 이것은 바로 「厭世詩家와 女性」에 있어서의 「想世界」와 「実世界」, 그리고 「戀愛」의 문제와 同質인 것이다.

「厭世詩家와 女性」에 있어서 「想世界」의 主体는 「小兒」 「少年」이다. 「小兒」·「少年」은 「사회의 규율에 얽매이지 않고 곧게 자」(社會の夤縁に苦しめられず真直に伸び)라, 「본래의 想세계에 나서 성장했기 때문에 实세계를 모르는」(本来の想世界に生長し、実世界を知らざる) 者이다. 즉 「사계의 부조화를 모르」(社界の不調和を知らざる)는 「순수한 少年」(純撲なる少年)의 세계가 「想世界」이다. 「想世界」와 「実世界」는 각각 「친난만한 세계」(無邪氣の世界)·「想世界」, 「뜬 세상」(浮世)·「사마」(娑婆)라고도 말하는데, 두 세계는 서로 싸우고 서로 맞서서 미워하는 관계에 있다.

그러나 「実世界」는 강대한 세력이다. 이러한 「実世界」에서 살아가는 「詩家」의 삶의 方式을 다음과 같이 말하고 있다.

浮世の刺衝に当たりたる上は、好しや苦戦搏闘するとても、遂には弓折れ箭尽くるの悲運を招くに至るこそ理の数なれ。

현세에 살아남기 위한 싸움이 시작되고 나면, 설령 어떠한 어려운 상황에서도 굽히

지 않고 맞붙어 싸운다. 그러나 아무리 살려고 애쓰더라도 끝내는 활이 부러지고 화살이 다하는 비운을 초래하게 된다. 이것이야말로 이치이다

이리하여 「想世界」를 指向하고자 하는 「小兒」·「少年」이 「 뜯세상」에 부딪쳐서 敗한다고 하는 것은 어찌면 当然한 結果이다. 이 때 「想世界の 敗將」은 마음이 꺾이고 지쳐서 무엇인가를 얻어 만족을 구하려 하는데, 이것이 다름 아닌 「戀愛」이다. 즉 「想世界와 実世界와의 전쟁에서 想世界の 牌將으로 하여금 스스로 위안을 삼게 하는 아성」(想世界と実世界との争戦より想世界の敗將をして立籠らしむる牙城となる), 이것이 바로 「戀愛」이다. 바꿔 말하면 「이 戀愛가 있음으로써 고된 実世界에서도 살아갈 수 있는 욕망을 일으킨다」(此恋愛あればこそ、実世界に乗入る欲望を惹起するなれ). 결국 「戀愛」의 역할은 「想世界」와 「実世界」를 媒介하는 데에 있다. 또 서로가 대립하는 가운데에 있어서 그 속에서의 「戀愛」의 役割 等に 관한 透谷의 見解는 에머슨의 논리와 一致하고 있다.

결론적으로 말하면 透谷가 말하는 「想世界」와 「実世界」의 문제는 반드시 透谷의 獨創적인 思想만은 아니다. 「想」과 「実」이라고 하는 用語의 援用에 관한 문제는 제쳐두고라도, 그 源頭는 역시 吉田精一氏가 指摘하는 대로 에머슨으로부터 나온 것이다. 단 「想世界の 敗將」을 돕고 만족시키는 牙城은 「戀愛」라고 하는 点에 限해서 透谷의 獨創적인 思想이 들어있다.

## 第四: 에머슨과 透谷 兩者의 戀愛觀과 結婚觀의 比較

### 1: 戀愛와 肉情

에머슨은 戀愛를 肉情과 관련지어서 다음과 같이 말한다.

이 지상(地上)에서 육체(the body)에 싸여진 인간의 혼(魂: the soul)은 이 세상에 오기 전에 존재하였던 그 본래의 세계를 찾아 이곳저곳을 배회(徘徊)한다. 그래서 神은 魂의 눈앞에 빛나는 젊은이(若者)들을 파견하신다. 그것은 혼이 아름다운 육체를 보고, 그것을 통해서 「천계의 선과 미」(天界の善と美)를 想起하는 계기로 삼기 때문이다. 그래서 남자(男)는 이러한 아름다운 女性을 찾아내고, 거기에 다가가 그녀의 모습(姿), 말씨, 태도(態度), 총명(聰明)함에 감탄하고 최고의 환희를 맛보게 된다. 그것은 여성의 모습이 남성에게 진실로 아름다움 속에 숨겨져 있는 實在와 미(美)의 원인을 暗示해주기 때문이다. 이같이 육체(the body)의 美를 매우 칭찬한 에머슨은 다음과 같이 경고(警告)한다. 육체의 찬미는 무조건적인 것이 아니다. 물질 대상(物的對象, material object)과 교섭을 너무 많이 하다보면 혼이 야비(野卑)해지고, 또 자칫 육체에 만족을 두다 보면 그 혼에 돌아오는 것은 비탄(悲嘆)뿐이다. 왜냐하면 육체는 미

(beauty)가 제시하는 약속(the promise)을 실행할 수 없기 때문이다. 그러나 만약 미(美)가 주는 환상(幻想)이나 암시(暗示)가 지향(指向)하는 바를 혼이 수용(受容)하고, 그리고 혼이 육체를 뛰어넘어 품성(品性)이 지니는 힘을 찬미하기 시작하고, 말할 때나 일할 때도 연인들이 서로 그리워한다면, 그들은 「진실한 미의궁전」(眞の美の宮殿, the true palace of beauty)에 다다를 수 있다. 그것에 의해서 그들은 비속(卑俗)한 정애(情愛)를 소멸(消滅)하고 「순수하고 거룩하며 정결한 몸」(純粹聖淨の身)이 되고, 이 전보다 더 고귀한 특질을 사랑하고 재빨리 그것을 이해하게 된다 라고 하는 것이다.

以上으로 에머슨의 肉体讚美는 透谷의 見解와 잘 對比된다. 戀愛와 肉情과의 관계에 관한 兩者의 見解 差異는 兩者가 함께 다루고 있는 「로미오와 줄리엣」의 評書에 잘 나타나 있다. 로미오와 줄리엣 두 사람에게의 있어서 人生의 價値는, 바로 그 두 사람에 있는 것이지 다른 어느 것에도 그 가치를 賦與할 수 없는 것이다. 즉 두 사람의 目的과 希望은 「혼으로 가득 찬 모습, 바로 그 혼속에 포함되어 있다」(魂に満ちた姿、この姿そのものなる魂の中に含まれている). 여기에 「혼은 완전히 육체를 꾸미고, 그 육체는 완전히 혼을 나타내고 있다」(魂は完全に肉体を装い、肉体は完全に魂を現している).

이와 같이 에머슨은 戀愛를 肉情과 같은 위치에 놓고 있다. 그 반면 「厭世詩家와 女性」과 『노래염불』을 읽고」에서 엿볼 수 있는 透谷의 견해는 그와 다르다. 영국의 浪漫派詩人이며 批評家인 골릿지(Coleridge :1772 ~1834年)는 「셰익스피어의 비극에 관한 주」(シェークスピアの悲劇に関する注)를 집필하여 「로미오와 줄리엣」을 비평하고 있다. 透谷는 『厭世詩家와 女性』에서 골릿지의 文章을 引用하면서 다음과 같이 그의 見解를 稱讚하고 있다.

(골릿지는) 로미오의 戀愛로써 그 자신의 戀愛觀을 대신하고자 한다. 愛婦인 로자린은 그 자신이 고안해낸 임시적인 인물(仮物)이다 라고 (그가) 논하는 것은, 인간의 愛情을 金수(獸)의 境地로 下等視하고 実性を 제대로 파악하지 못하는 작가를 나무라는(誠しむる) 데 충분하다.

그리고 透谷는 『노래염불』을 읽고」에서 다음과 같이 이야기하고 있다.

何が故にロメオが鬱樹叢中に彷徨したりしやを記せず。彼は唯だロメオに自然なる一種の思慕ある事を躰はずに甘んじたり。

(로미오와 줄리엣의 著者)가 무슨 까닭으로 로미오가 울창한 숲 속에서 방황했는지를 기록하고 있지 않다. 그는 단지 로미오로 하여금 자연스런 일종의 사모하는 마음을 나타내 게 하는 데에 만족하고 있다.

이 作法은 「햄릿」의 저자인 셰익스피어가 햄릿과 오페리아와의 「狂愛」를 그리는

것과 같이, 「戀愛에 대한 극치와 정취를 하나」(戀愛に対する極致と趣を一)로 하는 것이라고 透谷는 칭찬하고 있다.

藤村의 小説 『春』의 「第5」에 가련한 오피리아가 불렀던 노래를 青木(아오키)가 맑은 소리로 부르는 장면이 그려져 있다. 그 訳文은 다음과 같은 詩句로 시작한다. 「사랑하는 그대가 어디 계신지 / 난 알 수가 있어요 / 조개관과 짝는 지팡이 / 그리고 신은 신이 그것을 일러 주어요」(いつれを君が恋人と / わきて知るべきすべやある。 / 貝の冠と、つく杖と、 / はける靴とぞしるなる)。이것은 「햄릿」의 제4막 5장에서 연인 햄릿의 손에 자신의 아버지가 죽음을 당한 후 미쳐버린 오피리아가 王妃 앞에서 부르는 노래이다. 이 노래에 들어 있는 一種의 厭世思想에 이끌려 透谷와 藤村을 비롯한 當時의 青年들은 愛唱했던 것 같다.

要컨대 에머슨은 「진실한 미의 궁전」(眞の美の宮殿)에 도달하는 道程 上에 있어서 肉體의 美를 肯定的으로 把握한다. 동시에 육체에만 만족을 두는 것을 警戒하고 있다. 이것은 透谷의 견해와 다르다. 즉 透谷는 에머슨과 같이 戀愛를 肉情과 같은 위치에 두고 있지 않다. 그뿐만이 아니라 透谷의 「戀愛」는 더 나아가 肉情的이며 感覺的 要素를 徹底하게 排斥하고 순수한 精神的 憧憬으로까지 昇華해 간다. 「천지에 사랑할 만한 것은 많다. 그러나 그 중에서 가장 애호할 만한 것은 처녀의 순결이다」(天地愛好すべき者多し、而して尤も愛好すべきは処女の純潔かな)。이것은 評論 「処女の純潔を論ず」(처녀의 순결을 논하다 1892年 10月)의 冒頭이다. 肉情을 排擊하고 高貴한 精神的인 사랑을 渴求하는 透谷의 戀愛觀을 잘 反映하고 있다.

## 2 : 結婚觀

다음으로 에머슨의 結婚觀에 대해 살펴보기로 하자. 에머슨에 依하면 夫婦生活을 통해서 서로 상대의 特性이나 欠点 분명히 알려주고, 그것을 지적하고 矯正해서 고치기 위한 가능한 한 모든 援助와 위로(慰め)를 해준다. 결국 두 사람은 결혼생활을 통해서 최고의美와 神의 사랑(愛)과 知識을 얻게 된다. 그리고 결혼은 모든 自然界 原子에 새로운 價值를 부여한다. 그렇게 함으로써 宇宙全體를 묶는 인연의 그물(縁の網)이 되는 모든 실(糸)은 黄金빛(黄金の光)으로 바뀌고, 영혼(魂)은 새롭고 보다 감미로운 물에 잠긴다. 이와 같이 결혼이란 戀愛를 完成함으로써 도달할 수 있는 境地이다.

덧붙여서 에머슨은 人間性的 希望이나 愛情을 말라버리게 하는 「肉慾主義」 sensualism를 警戒하고 있다. 그것은 「肉慾主義」가 젊은 사람들에게 결혼이란 아내가 집안 일만 돌보는 것에 지나지 않고, 여자의 일생에 다른 목적은 없다 라고 가르치기 때문이다. 한 마디로 말하자면 에머슨은 戀愛의 必然的인 結果로서 幸福한 結婚生活을 営為할 수 있다고 이야기한다. 바로 이 점이 透谷의 경우와 전혀 다르다. 透谷는 다음과 같이 戀愛와 結婚의 不一致를 이야기하고 있다.

始に過重なる希望を以て入りたる婚姻は、後に比較的の失望を招かしめ、慘として夫婦相對するが如き事起るなり。

처음부터 과중한 희망을 가지고 시작한 혼인은, 나중에 상당한 실망을 초래하게 되어 부 부가 서로 비참하게 대하게 되는 일이 생겨난다.

에머슨은 에세이 「LOVE」(「戀愛」)의 마지막 부분에 이르러 戀愛를 거쳐 「일종의 원만한 이해」(一種の円満な理解) a thorough good understanding를 바탕으로 한 「진정한 결혼」(眞の結婚) the real marriage에 이르기까지의 過程을 서술하고 있다. 그에 따르면 남녀는 「신전에 사는 천사」(この神殿に住む天使) the angels that inhabit this temple라고 불려지는 「肉体」에 의해 맺어지고, 나아가서는 狂熱적인 戀愛에 빠져 결혼한다. 그러나 예전에는 불같이 뜨거웠던 서로가 존경하는 마음도, 아름다운 얼굴도, 그 매력적이던 움직임도 시간이 흐름에 따라 서로의 가슴에서 식어가고 정열도 잃어버리게 된다. 예전에는 잠시도 상대를 보지 않고서는 견딜 수 없었던 두 사람이었지만, 이제는 상대가 곁에 있든 없든 상관하지 않게 된다.

결국 두 사람은 「危機」the crisis를 발견하게 된다. 그러나 두 사람은 「일종의 원만한 이해」로써 이 「危機」를 이겨낸다. 기나긴 結婚生活에 있어서 이 「危機」는 「어릴 때」(子供)부터 이미 預言되어져 있었다. 두 사람은 「일종의 원만한 이해」로 毎年 知性と 心情을 淨化해 간다. 그 결과 처음부터 예상되고 준비되고, 게다가 완전히 의식하고 있지 않았던 「진정한 결혼」에 두 사람은 도달하게 된다.

以上에서 에머슨의 幸福한 結婚觀이 透谷의 不幸한 結婚觀과 相反的이라는 것을 알 수 있다. 「厭世詩家와 女性」에도 에머슨이 말하는 結婚生活의 「危機」와 거의 同質의 「危機」는 존재한다. 「戀愛」할 때는 想像도 하지 못했던 여성에 대한 輕蔑, 수동적인 女性觀, 結婚生活에 대한 絶望感 등이 이 「危機」에 해당할 것이다. 그러나 「厭世詩家」는 이 「危機」를 전혀 예상하고 있지 않다. 왜냐하면 「厭世詩家」는 원래 얽히고 얽힌 社會생활(社會の夤緣)에서도 전혀 고생을 모르고 티 없이 자란, 즉 애초부터 「想世界」에서 生長한 「少年」·「小兒」였기 때문이다. 이렇듯 「사계」(社界)의 不調子를 모르고 자란 「少年」은 「厭世詩家」가 된 뒤에도, 「세상」(世)을 타하기에 앞서 「자신을 미워」(己れを厭ふ)하고 「자신을 욕」(己れを罵る)하여 社會에 등을 돌리는 존재가 된다. 그러므로 「厭世詩家」가 結婚生活에서 招來되는 「危機」를 予想하고 있지 않은 것은 當然한 일이다. 그뿐만 아니라 「厭世詩家」에게는 이 「危機」를 이겨내기 위한 「일종의 원만한 이해」라는 것도 없다. 그 때문에 에머슨이 말하는 「진정한 결혼」에 도달하지 못하고 「厭世」의 奈落에 빠지고 마는 것이다.

## 結論: 에머슨의 「樂天主義」의 戀愛觀과 透谷의 「厭世主義」의 戀愛觀

以上에서 에머슨의 「LOVE」(「戀愛」)를透谷의 戀愛觀과 비교함으로써透谷가 어떤 식으로 에머슨의 「사랑」을 受容하고 있는지를 살펴보았다. 이 두 사람의 생각을 간단하게 정리해 보면 다음과 같다.

첫째, 두 사람은 모두 戀愛를 讚美하는 共通點을 갖고 있다. 그러나 에머슨은 戀愛를 肉情과 같은 위치에 두고 있는 반면,透谷는 肉情을 철저하게 排擊한다. 둘째,透谷와는 다르게 에머슨의 結婚은 戀愛의 完成이다. 에머슨이 지향한 것은 人間의 靈魂이 神과 融合하는 것으로 狂熱的인 사랑은 「원만한 이해」를 바탕으로 하는 「진정한 결혼」으로 普遍化되는 것이다. 에머슨은 「시인」(the poet)에게 있어서 戀愛는 진정한 개방이 아니라, 一時的인 自由를 얻기 위한 「준기계적인 대용품」(準機械的代用品) quasi-mechanical substitutes이라고 말하고 있다. 즉 인간의 遠心力 傾向이란 인간이 自由로운 空間으로 나가는 것을 말한다. 바로 이러한 인간의 원심력 경향을 돕는 手段이 戀愛이다. (Love is auxiliary to the centrifugal tendency of a man, to his passage out into free space).

한편 透谷의 「戀愛」는 일시적인 자유를 얻기 위한 「준기계적인 대용품」이 아니라 그것은 「자유 의 정신」(自由の精神), 「타계의 정신」(他界の精神)과 통하는 것이다. 셋째, 「필연적으로 因果의 法則을 따르는 세계를 말하는」(必然的で因果の法則にかなう世界を語る) 予言者로서의 役割 (the poet is a beholder of ideas and an utterer of the necessary and causal)을 詩人에게서 찾으려 하는 점에 있어서 에머슨과 透谷는 상당히 비슷한 견해를 보이고 있다.

笹淵友一 氏의 지적에 의하면 다음과 같다. 獨立戰爭 以後 美國의 國家精神이 한창 昂揚期에 이르렀을 때 그 속에서 成長한 에머슨과, 明治維新 以後 近代國家 成立期의 日本에서 青年期를 맞은 透谷 사이에는 共通點이 있다. 그것이 透谷가 에머슨의 先驗的 戀愛觀에 共感한 하나의 이유일 것이다.<sup>12)</sup> 透谷가 「厭世詩家와 女性」에서 문제시하고 있는 거의 대부분이 에머슨의 「LOVE」(「戀愛」)에 內包되어져 있는 觀點이다. 그러나 거기에는 透谷의 独自の인 전개가 보인다. 透谷는 에머슨의 「사랑」을 바탕으로 자기 자신의 문제를 덧붙여 언급했다. 말하자면 에머슨의 「樂天主義」의인 戀愛觀에 對比되는 「厭世主義」의인 戀愛觀을 自己自身の 問題와 關聯시키면서 전개시키고 있다.

透谷는 평서 「에머슨」의 「第6 그의 樂天主義」에서 에머슨의 「樂天主義」가 어떻게

12) 笹淵友一의 前掲書, p245.



해서 生成되었는가에 대해서 다음과 같이 自身の 見解를 말하고 있다.

에머슨의 樂天主義는 그의 교리에서 중심(敎理の中心)이 되는 것이라고 많은 이들이 말하고 있다. 그의 자연교(自然敎)를 연구한 뒤, 그의 樂天主義를 공부하는 것은 지당한 순서일 것이다.

에머슨의 樂天主義는 그의 고유한 성(固有의性)이라고 할 수 있다. 괴테와 같이 많은 상처(疵瑕)를 입으면서도 어둡고 큰 계곡(幽暗なる大谷)을 지나 도달한 것과는 다르다. 에머슨의 樂天主義는 그의 8대 선조(先祖)가 그의 피 속에 새긴(印銘) 결과라고도 말할 수 있다. 거기에 그의 생활(生活), 그의 주변(周邊), 그의 재산(財産), 그의 지위(地位) 등이 樂天主義라는 결과를 낳았다. 에머슨에게 있어서 樂天主義는 그가 손수 취한 것이 아니라, 하늘(天)이 그를 통하여 진귀한 복음(稀有なる福音)을 인류(人類)에게 전하려고 한 것일 뿐이다.

透谷는 에머슨의 「樂天主義」를 에머슨 「敎理의 中心」이라 看做한다. 또한 에머슨의 「樂天主義」가 「그의 생활, 그의 주변, 그의 재산, 그의 지위」 등의 모든 個人的, 社会的 環境에 起因한 것이라고 말하고 있다. 그러나 透谷가 에머슨으로부터 感化를 받았음에도 불구하고 兩者의 戀愛觀에는 많은 差異点이 있다. 그것은 주로 兩者를 둘러싸고 있는 個人的, 社会的 環境의 差異에 根柢했기 때문이다.

## 1. 結婚生活의 生活苦에서 비롯된 透谷의 「厭世主義」의 戀愛觀

余裕 있는 生涯를 보냈던 에머슨에 비해서 透谷는 너무나도 힘든 生涯를 보냈다. 自由民權運動에서 挫折하고 또한 美那子와의 結婚生活에서도 救援받지 못했다. 여기에 透谷가 「厭世主義」의 立場을 취할 수밖에 없었던 根本的인 理由가 있다. 結局 透谷의 결혼관이 에머슨의 그것과 正반대의 결과에 다다른 主 原因도 透谷의 結婚生活과 깊은 관계가 있다. 當時의 結婚生活을 背景으로 한 그의 戀愛觀을 생각하면 상당히 興味가 깊다.

巖本善治는 「滿洲からの通信」(만주로부터 온 통신)(「明治文学研究」1934年 4月)에서 다음과 같이 이야기하고 있다.

透谷が私に語つた言葉で永久忘れぬ印象を私に残したのは左の一句です / 厭世といふものは家庭の平和の破れた時でなくては起りません.

透谷가 나에게 한 말 중에서 영원히 잊지 못할 인상을 준 것은 다음의 한 구절입니다 / 厭世라는 것은 가정의 평화가 깨어졌을 때가 아니면 일어나지 않습니다.<sup>13)</sup>

13) 巖本善治. 「明治文学研究」. 「滿洲からの通信」. 1934년 4월 .(『北村透谷』日本文学研究資料叢書, 有精堂

이 글에 따르면 「戀愛」의 「宣言」(マニフェスト)과 「葬送曲」이라는 「厭世詩家와 女性」에 있어서 「戀愛」가 가지는 根本적인 矛盾. 이것을 提示하는 것도 원만하지 못한 透谷의 결혼생활에서 비롯된 「厭世」觀 때문이다. 1893年 8月 下旬 透谷가 아내인 美那子에게 쓴 書簡을 보면 다음과 같다.

詩人은 面(面)을 쓰고 道(道)를 이야기하는 伝道師가 아니다. 슬픔(悲)을 기쁨(喜)으로 꾸며서 世(世)을 속이는 隱(隱)君子도 아니다. 철두철미하게 世(世)의 實(實)勢(勢)를 파악하고, 그 기세가 어긋나 있음(不調子)을 간파(看破)하여 眞(眞)理(理)에 비추어 나아간다. …(중략)… 나의 아내인 당신은 무엇이든 늦고 大(大)道(道)를 간파하는 것도 늦다. 詩人의 아내가 어찌 幸(幸)福(福)할 수 있겠는가. 하물며 독신 생활자에게는 기쁨이 찾아오지 않는다. 그렇다고 結(結)婚(婚)生(生)活(活)을 한다고 하더라도 고통은 여전히 그 곁을 떠나지를 않는다. Celibacy has no pleasure, but marriage has no less pain. 이것은 古(古)今(今)의 名(名)言(言)을 기억하시죠.

이 서간은 「厭世詩家와 女性」보다도 約(約) 1年(年) 半(半) 뒤에 쓰인 것이다. 이 해 7月(月) 下旬(旬) 透谷(透谷)는 平(平)田(田)禿(禿)吉(吉)(히라타 히데키치), 戸(戸)川(川)秋(秋)骨(骨)(도가와 슈코쓰) 등과 함께 關(關)西(西)에서 돌아온 藤(藤)村(村)을 東(東)海(海)道(道)鈴(鈴)川(川)(도가이도 레이가와)에서 맞이하여 다 같이 箱(箱)根(根)芦(芦)(하코네 아시코) 湖(湖)水(水)에 갔다. 透(透)谷(谷)만이 일단 歸(歸)京(京)했다가 다시 東(東)北(北)地(地)方(方)으로 伝(伝)道(道)旅(旅)行(行)을 떠났다. 이 書(書)簡(簡)은 거의 한 달이나 집을 비운 남편을 타하는 아내인 美(美)那(那)子(子)로부터 온 편지를 읽고서는 透(透)谷(谷)가 激(激)昂(昂)하여 쓴 答(答)狀(狀)이다. 오늘날 우리는 透(透)谷(谷)가 쓴 答(答)장(장)을 보고 美(美)那(那)子(子)로부터 온 편지의 大(大)략(략)의 內(內)容(容)을 想(想)像(像)할 수 있을 뿐 그 全(全)文(文)은 알 수 없다.

이 편지에 의하면 남편으로서의 의무를 다하지 않는, 말하자면 「세상의 실세를 파악」(社(社)界(界)의 實(實)勢(勢)를 觀(觀)하)려고도 하지 않는 透(透)谷(谷)의 行(行)爲(爲)에 대해서 美(美)那(那)子(子)는 不(不)滿(滿)을 품고 있다. 이에 反(反)해서 透(透)谷(谷)는 한층 더 격렬하게 美(美)那(那)子(子)의 背(背)後(後)에 있는 物(物)質(質)世(世)界(界), 現(現)美(美)世(世)界(界), 크리스트教(教)에서 말하는 소위 「이 세상」(此(此)世(世)의 世(世)界(界))의 原(原)理(理)와 對(對)決(決)하고 있다.<sup>14)</sup> 이 서간의 내용에 관해 先(先)行(行)研(研)究(究)者(者)가 지적한 대로 「厭世詩家와 女性」의 문제가 다시 나타나고 있다. 「想(想)世(世)界(界)」를 志(志)向(向)하는 「厭世詩家」가 「美(美)世(世)界(界)」와 衝(衝)突(突)하여 「세상의 실세를 파악하고, 그 기세가 어긋나 있음을 간파하여 眞(眞)理(理)에 비추어 나아간다」(社(社)界(界)의 實(實)勢(勢)를 觀(觀), 不(不)調(調)子(子)를 看(看)做(做)し、眞(眞)理(理)を かざして 進(進)む)는 것이다. 또한 詩(詩)人(人)의 아내가 不(不)幸(幸)하다는 것, 그리고 結(結)婚(婚)生(生)活(活)의 絶(絶)望(望)感(感) 등을 말하는 書(書)簡(簡)의 內(內)容(容)이 「厭世詩家와 女性」의 結(結)婚(婚)觀(觀)과 같다고 하는 점이다.

透(透)谷(谷)는 같은 書(書)簡(簡)에서 다음과 같이 이야기하고 있다. 「남편은 가난해서야 비로소 아내의 소중함을 알게 되는 것을, 나는 가난해서야 비로소 아내로부터 원망하는 말을 듣게 되었다」(夫(夫)貧(貧)すれば 初(初)めて 妻(妻)の 助(助)ありと きくものを、われは 貧(貧)して 初(初)めて 妻(妻)の 怨(怨)言(言)不(不)足(足)を 聞(聞)く).

所在에서 間(間)接(接)引(引)用(用)했음

14) 平(平)岡(岡)敏(敏)夫(夫), 『北(北)村(村)透(透)谷(谷)研(研)究(究)第(第)三(三)』, 「透(透)谷(谷)おける手(手)紙(紙)の意(意)味(味)」, 1982年(年), p93

父母의 反對를 무릅쓰고 성난 波濤와 같은 情熱로서 戀愛를 하고, 그리고 結婚生活에 突入하게 된 透谷와 美那子. 이 두 夫婦는 結婚後 어쩔 수 없이 經濟的 生活苦로 허덕이게 된다. 戀愛와 結婚의 落差는 生活苦로부터 비롯된 龜裂에서 생겼다. 이 서간의 내용에서 알 수 있듯이 그 落差를 뼈저리게 體驗한 者의 絶叫로서 나타나고 있다.

「여성은 감정의 동물이기 때문에 사랑을 하기보다는 사랑을 받기 위해 사랑하는 경우가 많다」(女性は感情の動物なれば、愛するよりも、愛せらるるが故に愛すること多きなり). 이러한 「厭世詩家와 女性」에서 엿볼 수 있는 여성에 대한 輕視思想도 透谷가 結婚生活 過程에서 겪었던 生活苦에서 起因 한 否定的 意識에서 생겨난 것이다. 端的으로 말해 「厭世詩家와 女性」에 보이는 女性觀은 여성이 男性에 대해 受動的으로만 愛情을 표현한다고 하는 매우 消極的인 것이다. 이것은 結婚前의 戀人인 美那子에게 보낸 편지, 그리고 戀愛와 結婚으로부터 그리 멀지 않은 시기에 쓴 「楚囚之詩」(초수의 시)에서 보이는 肯定的이고 밝은 女性觀과는 완전히 다른 것이다. 이들 편지와 「楚囚之詩」에는 新鮮한 사랑의 詩句가 넘치고 있다. 예를 들면 1887年 8月 18日 美那子에게 쓴 書簡에는 다음과 같은 글이 있다.

貴嬢は常に生のハツピイなるを祈りたまふ我親友なりかし、然らば則ち生のミザリイを察して心の苦を慰むる術もかなあらば、是れを指示してくれたまふ可き道徳上の義務をもちたまふ御身なるべし).

당신은 항상 저의 행복을 빌어주시는 친구이십니다. 그리하여 저의 어려움을 헤아려 주시고, 마음의 고통을 위로해 주시는 도량으로써 저를 지시해 줄 수 있는, 도덕상의 의무를 가지 신 님이 되어 주십시오

그리고 「楚囚之詩」에는 다음과 같이 노래 불리어져 있다. 「나를 울리고, 또 나를 기쁘게 하지만, 그대의 노래는 나를 불행에서 건져주지 못한다」(余を泣かしめ、又た笑まむれど、卿の歌は、余の不幸を救ひ得じ)(第15)라고 되어 있다. 이 둘을 연관 지어서 생각해 보면 피꼬리(鶯)인 「그대」(卿)의 存在는 「나」(余)에게 있어서 能動的인 것이고 그만큼 소중한 존재로 認識되어져 있다. 거기에는 透谷가 크리스트敎에 入信한 일과, 文學者의 길을 걷는데 큰 役割을 한 美那子의 能動的인 姿勢가 담겨져 있다. 게다가 透谷는 자신을 수렁에서 구해 준 美那子에게 感謝하는 마음도 들어있다.

われ思ふ、きみ《半身》既に婚して夫に合すれど、半身夫の物にして、半身然らず、君が常に苦しむ所、夫の事業の爲ならずして他にあり、夫の沮喪したる勇気を挽回せんとはあらずして、夫のわれに忠ならん事を望むに過たり(同書簡)。

나는 생각한다. 당신의 몸 반쪽은 이미 혼인하여 남편의 몸과 합쳐짐으로써 그 반쪽은 남편의 것이 되었지만, 다른 반쪽은 그렇지 않다. 당신이 항상 괴로워하는 바, 이것은 남편을 위해서가 아니고 달리 그 이유가 있다. 기력을 잃어버린 남편에게 용기를 심어주지 않고 있다. 지금부터는 다만 남편인 나에게 충성을 다할 것을 바랄 뿐이다.

이 부분은 透谷의 小説 「我牢獄」(나의 감옥 1892年 6月)의 다음의 文을 聯想시켜 준다.

この半裁したる二靈魂が合して一になるにあらざれば彼女も我も円成せる靈魂を有するとは言い難かるべし.

이 반쪽으로 나누어진 두 영혼이 합쳐져서 하나가 되지 않으면 그녀도 나도 원성한 영혼을 가지고 있다고는 말하기 어렵다

透谷는 男女의 存在를 하나의 完成된 것으로 보지 않고, 반쪽으로 나누어진(半裁) 것으로 파악하고 있으며, 이 둘이 하나로 합쳐질 때 비로소 「원성한 영혼」(円成なる靈魂)으로 승화된다고 본다. 이어서 아내인 美那子에게 보낸 같은 書簡에는 다음과 같이 그려져 있다.

昔へより詩人の如き、大改革者の如き、多くは妻と折り合はぬなり、多くは妻と離るるなり、ミルトンを捨て去りし妻あり、カアライルをして其自伝中、常に憤懣して妻の不徳を挙げたる妻あり、而して彼等の妻はなほ夫の犠牲となりしものなり。

옛날부터 시인이나 대개혁자의 대다수는 아내와 맞지 않아 아내와 헤어지고 만다. 밀턴(Milton)을 버리고 떠난 아내가 있고, 칼라일(Carlyle)로 하여금 그의 자전 중에서 항상 울분을 터트리며 아내의 부덕을 이야기하게 하고, 그래서 그들의 아내는 더욱 더 남편의 희생이 되었다.

※ Milton John(1608~1674) : 英国詩人 『失樂園』의 著者

※ Carlyle Thomas(1795~1881) : 英国批評家

여기에 透谷와 美那子와의 살아가는 방식(生き方)의 차이가 克明하게 나타나고 있다. 이것은 「厭世詩家」와 여성이 가지는 삶의 방식의 차이와도 통한다. 「어제는 귀족의 딸이 오늘은 가난한 시인의 아내」(昨日の公家の娘、今ま貧詩人の妻、同書簡). 이러한 美那子が 볼 때는 경제적인 문제가 생활의 최우선이다. 그러므로 「돈 생길 일이 적고, 세상에 나가는 것이 늦고, 있을 곳의 폭이 좁은 것을 탓하」(金得ること少なく、世に出づることの晩く、居所の幅狭まきを責むる、同書簡)는 美那子. 이러한 아내인 美那子が 내뱉은 원망스런 말(怨言)은 당시의 가정생활이 얼마나 궁핍한가를 충분히 반영하고 있다.

그러나 透谷는 가난한 생활 때문에 설령 「내가 이대로 아파서 타인의 웃음거리가 되어도 닦하지 않는다」(われこのままに病みくちて、人の笑はれものとならんとも恨みじ)라는 긍지(矜持)로 자신을 지탱하고 있다. 이것은 「厭世詩家와 女性」에서 말하는 「시인은 완고하여 세상의 길을 확보하는 것을 좋아하지 않는다」(詩人は頑物なり、世路を闊歩することを好まない)라는 것에 해당된다. 두 사람의 삶의 방식은 타협과는 거리가 먼 이른바 「부조화」(不調子) inconsistent (同書簡)인 셈이다. 이 「부조화」가 「세상을 미워하고 멀리하는 사상」(人世を厭離するの思想), 즉 「厭世思想」을 增幅시켜 결국에는 結婚生活を 崩壊시

킨다. 바꿔 말하면 두 사람의 삶의 방식이 「부조화」를 이룸으로써 結婚生活의 絶望感을 낳은 것이다. 「아아 불행한 것은 여성인가」(嗚呼不幸なるは女性かな)라는 語句를 「厭世詩家와 女性」의 내용에 덧붙여 생각해 보면, 透谷의 心情에는 자신을 위해 희생한 아내 美那子를 가엾게 여기며 同情하는 마음이 끓어오르고 있었을 것이다.

以上과 같이 透谷는 에머슨의 「사랑」(LOVE)을 原拋로 해서 「厭世詩家와 女性」을 집필하였지만 그 方向은 完全히 달랐다. 즉 에머슨의 幸福한 結婚觀이 透谷의 不幸한 結婚觀과 相反的인 關係로 因해서 에머슨 쪽이 「樂天主義」的 戀愛觀, 그 反面 透谷는 「厭世主義」的 戀愛觀을 제각기 자기 자신의 問題와 聯関지어면서 展開시켰다. 따라서 이 評論의 題名과 主人公이 왜 「厭世詩家」인가하는 것에 透谷의 意圖가 있다고 여겨진다.

## 2. 透谷의 타고난 天性으로 因한 「厭世詩家」

透谷의 「厭世」는 그의 타고난 天分과도 관계가 있다. 恋人인 美那子(結婚前의 이름은 石坂ミナ혹은 美那子임)에게 보낸 편지(1887年 8月 18日)와 아버지에게 보낸 편지(1890年 8月 9日)에 透谷는 자신의 성격을 다음과 같이 말하고 있다. 「과민하고 악질적인 신경」(神經の過敏な悪質)·「惡習慣」, 오만하고 굽힐 줄 모르는 성격(「傲慢不羈」)이다. 이러한 성격은 정확히 아버지와 어머니로부터 半半씩 물려받은 것이라고 한다. 그는 幼少年時節 父母가 東京으로 移住하는 바람에 祖父의 嚴格한 教育을 받으며 成長했다. 그는 이에 대해 불평이 심했으며 항상 憂鬱한 나날을 보냈다. 그는 이를 다음과 같이 回想하고 있다.

生は最も甚きバツシヨネイトの人物となり、又た極めて涙もろく考へつめてはなかなかいやすべくもあらぬこまりもの

나는 성질이 몹시 걱정적이며, 아주 눈물에 약하며 무엇인가를 골똘히 깊이 생각하고 서는 좀처럼 마음을 풀 줄 모르는 외골통 같은 사람이었다고 한다.

이렇게 感受性이 銳敏한 性情은 過敏한 神經이 惡化되었기 때문이며, 이는 그 후 氣鬱症(憂鬱症)과 腦病을 앓는 原因이 된다. 따라서 이러한 그의 性情은 그가 厭世的 傾向을 띠게 하는 母體가 되었다. 즉 이 厭世的 傾向은 後天的인 것만이 아니라 幼少年時節부터 싹튼 것이었다. 더욱이 이 「과민하고 악질적인 신경」(神經の過敏なる悪質)은 芸術的 天性과도 깊은 연관을 맺고 있다. 어머니로부터 흐르고 있는 이러한 素質이 文學者 透谷을 낳았다고 보여 진다.

『만프레드』 및 『파우스트』라고 하는 短篇 에세이가 있다. 이것은 透谷의 死後 藤村이 発見하여 그의 「亡友反古帖」(망우반고첩) 속에 紹介한 글이다. 勝本清一郎氏의 『

『透谷全集』解題에 의하면 執筆 時期는 1890~1891年頃이 된다. 여기에서 透谷는 바이런(Byron: 1788~1824年 英国 詩人, Manfred의 作家)과 괴테(Goethe: 1749~1832年 独逸 詩人 作家)를 「厭世家」라고 하면서, 두 사람의 「厭世」를 比較하여 論하고 있다. 그에 의하면 바이런의 厭世觀이 괴테의 厭世觀보다 훨씬 더 根本的인 것이다. 그 이유는 바이런의 「厭世」는 母親의 胎中에 있을 때부터 形成된 것이라고 되어있기 때문이다. 透谷가 바이런의 「厭世」에 가장 親密感을 품고 있는 것은 바이런의 어린 시절의 家族 環境, 그리고 母親으로부터 이어받은 性格 등이 자신에게 주어진 여건과 상당히 일치한다고 여겼기 때문이다. 藤村도 「透谷와 어머니와의 관계는 마치 바이런과 그 어머니와의 관계와 같고, 透谷君의 아주 神經質的인 部分은 어머니로부터 이어받은 것이다」<sup>15)</sup> 라고 하고 있다.

評論 「에머슨」의 「第6章 그의 樂天主義」에서 透谷는 「厭世」와 「樂天」을 對比하면서 論하고 있다. 이것에 의하면 「智識」은 「슬픔의 本원」(悲の本源)이다. 「智識」에 들어가는 것은 쉬워도 「智識」을 나오는 것은 어렵다. 그리고 「智識」은 甘酒와 같은 것이며, 이것을 마시는 사람은 자신의 存在를 쉽게 잊어버리며, 醉한 後에야 이윽고 「苦惱」를 앓게 된다. 이 「苦惱」에 쫓기어 마음의 肺와 肝으로부터 넘쳐 나오는 一種의 呼吸, 이것을 「厭世思想」이라고 한다. 한편 이 「苦惱」를 벗어나 스스로의 本性을 명확히 하는 것, 이것을 「樂天思想」이라고 부른다. 바이런, 괴테, 西行(사이교)는 「厭世家」이다. 反面 에머슨은 「樂天家」이다.

以上的 文을 간단히 정리해 보면 透谷의 「厭世思想」의 生成에는 그의 어머니로부터 갖고 태어난 天性和 密接한 關係가 있다고 보아진다. 그리고 透谷는 幼少年時節을 거치면서 게다가 不幸한 結婚生活을 嘗爲하면서 그의 厭世思想은 더욱더 增幅되어 갔다. 이것이 곧 「에머슨」의 「樂天主義」的 戀愛觀을 透谷가 「厭世主義」的 戀愛觀으로 受容한 根本 理由 中の 하나라고 보아진다.

向後 透谷의 「厭世思想」에 관해서는 더욱더 살펴 볼 여지가 많다. 이것은 다른 機會에 새로운 觀點을 가지고 再 挑戰 해보고 싶다.

\* 北村透谷의 本文 引用은 勝本清一郎氏가 作製한 『北村透谷全集』(岩波書店)에 依함.

\* 에머슨의 「LOVE」(「戀愛」)을, 吉田精一氏는 「戀愛論」이라 말하고 笹淵友一氏는 「愛情論」이라고 말하고 있다. 그러나 以下 에머슨의 訳文引用은 入江勇起男(이리에 유키오) 氏의 訳著 『에머슨선집2』(日本教文社) 「愛」에 依한 것이다. 다시 말해 論者는 入江勇起男氏가 사용한 「LOVE」(「戀愛」)을 기준으로 하여 本稿를 展開하고 있다. 또한 에머슨의 「LOVE」(「戀愛」)의 原文引用은 『The Best Of Ralph Waldo Emerson』, Edited, with introduction, by Gordons. Height, associate professor of English, Yale University-에 依한 것이다.

15) 島崎藤村 「北村透谷の短き一生」

## 【参考文献】

- 吉本隆明, 『吉本隆明全著作集5』, 「日本近代詩の原流」. p81
- 平岡敏夫(1967), 『北村透谷研究』, 「我牢獄」, 有精堂. p170
- 平岡敏夫(1971), 『続北村透谷研究』, 「透谷その『戀愛』の行方」, 有精堂. p119
- 平岡敏夫(1982), 『北村透谷研究第三』, 「透谷における手紙の意味」, 有精堂.
- 笹淵友一(1950), 『文学界とその時代 上』, 「北村透谷」, 福音書店. p242, p245
- 島崎藤村(1919). 「桜の実の熟する時」
- 島崎藤村, 「北村透谷の短き一生」
- 木下尚江(1934), 「福沢諭吉と北村透谷－思想上の二大恩人」, 「明治文学研究」
- 「翻訳語成立事情」(1982), 岩波新書
- 巖本善治(1890). 「女学雑誌」
- 吉田精一(1975), 『近代文芸評論史・明治篇』, 「浪漫主義の文学論」, 至文堂. p574
- 北川透(1975), 「エマソンとの出会い」, 「現代詩手帖」
- 巖本善治(1934). 『明治文学研究』. 「満洲からの通信」
- 家永三郎(1949), 『北村透谷における近代市民精神』, 「人間」

## 要 旨

本考は日本の明治作家、北村透谷の評論「厭世詩家と女性」(明治25年)に関する研究である。そのポイントはエマソンの恋愛観を透谷がどのように受け止めているかを調べるところにある。「恋愛は人世の秘鑰なり。恋愛ありて後人世あり、恋愛を描き去りたらむには人生何の色味かあらむ」。この評論の冒頭が示す恋愛至上主義の宣言は島崎藤村、木下尚江らの同時代の青年達に大きな衝撃を与えた。

男尊女卑の思想が澎湃していた明治時代に男女平等あるいは女性を恋愛の相手として考えている。言わば、女権伸張に力を注いだ透谷の文学活動はエマソンの恋愛観に感化されたところが多い。以下、両者の恋愛観を比較検討してその主眼点をまとめてみよう。

一つ、「想世界と実世界との争戦より想世界の敗将をして立籠らしむる牙城となる」ものが「恋愛」である。それで、「恋愛」の役割は「想世界」と「実世界」を媒介するところにある。このような透谷の両文学像である「想世界」と「実世界」の原拠に相応しいものがエマソンの「LOVE(恋愛)」に見られる。それは「蕾のころ」は「大人の 世界」である。従って、透谷の言う「想世界」と「実世界」の問題は、かならずしも透谷のオリジナリティではないと思われる。

二つ、透谷、エマソン、両者は共に恋愛を賛美しながらもそれぞれの恋愛観への見方は大きく違う。透谷の恋愛観は「厭世主義」的である。これに比べてエマソンの恋愛観は「楽天主義」的である。このような両者の相異点には両者の結婚観に関わりあっている。すなわち、透谷の結婚生活が不幸なものであった。その反面エマソンの結婚生活は幸福なものであった。透谷の言う「厭世詩家」にはこの結婚生活からもたらされた「危機」を乗り越えるための「一種の円満な理解」というものもない。それ故にエマソンの言う「真の結婚」に到達せず、「厭世」のどん底に陥ってしまう。そこに「厭世詩家」が女性を愛せざるを得ない背景がある。

キーワード：北村透谷、「想世界」、「実世界」、「厭世詩家」、エマソン、  
「蕾のころ」、「大人の 世界」

투 고 : 2011. 8. 31  
1차 심사 : 2011. 9. 10  
2차 심사 : 2011. 10. 1



# 金嬉老事件と〈反共〉

—映画「金の戦争」論—

林 相 珉\*

(e-mail: y3k76@hanmail.net)

---

## 目 次

---

1. はじめに
  2. 反転する女優・李恵淑
  3. コード化される〈愛〉物語
  4. 外交文書と〈反共〉
  5. 国籍書換え問題と〈左翼〉
  6. まとめ
- 

## 1. はじめに

「金嬉老事件」とは1968年2月20日、在日コリアン金嬉老が借金返済のもつれから静岡県清水市において暴力団員2名をライフル銃で射殺、その後寸又峽温泉のふじみ屋旅館に経営者と宿泊客合わせて13名を人質に立て籠り、警察官による在日コリアンへの蔑視発言についての謝罪を要求し、逮捕されるまでの88時間、テレビでの実況中継などマスコミをも巻き込んだ劇場型犯罪とも言われた事件である。逮捕後の金嬉老は、8年間の法廷争いの末、1975年11月4日に最高裁から無期懲役が確定され千葉刑務所に服役し、1999年9月には二度と日本に入国しないことを条件に70歳で仮出所、強制送還という形で韓国に帰国させられることになる。

2010年3月26日に前立腺癌のため亡くなった金嬉老（享年82歳）について、韓国メディアは「幕降れた「金の戦争」・・・差別無き国へ」（「ソウル新聞」2010年3月27日）、「在日僑胞の差別に立ち向かった「金の戦争」終わった」（「中央日報」2010

---

\* 韓南大学校、非常勤講師。日本文学／在日文学・文化研究

年3月27日)、「映画「金の戦争」の实在人物である権嬉老氏別世」「在日僑胞差別に抗議」(「朝鮮日報」2010年3月27日)、「彼はこうして亡くなったけど、「金の戦争」は現在進行形である。日本社会の在日同胞に対する差別は、まだ相変わらず変わらぬままだからである」(「韓国日報」2010年3月27日)など、ほとんどの新聞が1992年2月29日に公開された柳仁村主演の映画「金の戦争」(金永彬監督、韓進興業)を経由しながら同事件を報じている。しかし、注意すべきは映画「金の戦争」は、前年の1991年4月5日に日本のフジテレビから放送されたテレビドラマ「金の戦争」(ビートたけし主演)を強く意識して作られた映画であり、両方とも本田靖春『私戦』(1978年3月、潮出版社)を原作としている。

在日コリアン3世の朴一(現在、大阪市立大学の教授)は、韓国の映画「金の戦争」は「金嬉老事件の背後にある日本の深刻な民族問題を抉りだしながら、そうした差別と何らかの方法で闘わざるをえなかった金嬉老の苦悩を描くことに成功して」おり、「韓国の人々が金嬉老を「在日韓国人差別と闘った英雄」と見なすのは、彼らが金嬉老事件の背後にあるこのような「日本人の嫌韓意識」を嗅ぎ取っているからにはかならない<sup>1)</sup>と語っている。このことから分かるように朴一は金嬉老が亡くなった後の韓国の多くの新聞メディアの報道と同じく、日本と在日、そして日本と韓国に差異の線を走らせ、〈差別／被差別〉という二項対立図式から同事件を捉え解釈している。しかし、同映画にかかわった映画製作陣や俳優は、

事件をテーマにした映画「金の戦争」が昨春、韓国で封切られた。出演者は日本語を使い、韓国語の字幕をつけるという異色の演出。興行的にはいま一つだったが、この年の各種芸術祭で賞を総なめにした。「五輪を開催するほどになった今、韓国人の目でさまざまな歴史を見直す時期にきている」。制作した韓振興業の韓甲振会長(六八)はそう語る。監督には戦後派の若手を起用。金服役囚を英雄視したり、反日感情をあおるようなことは意識的に避けたともいう。金服役囚役を演じた韓国のトップ俳優、柳仁村さん(四二)は「民族や国がどうというより、世界に通じる人権問題として考えたかった」と話す<sup>2)</sup>。

と述べているように、金嬉老事件を「英雄視したり、反日感情をあおるようなことは意識的に避けた」とする製作陣と〈差別／被差別〉を読み取る批評が少し食い違っていることが分かる。

本稿では、まずおなじ原作をもとに作られた日本のテレビドラマ「金の戦争」と映画「金の戦争」を交差させる。しかし、それは単純比較のためだけではなく、二つを交差させることにより、韓国で韓国人が在日コリアンをテーマにして映画を作るというポジションが孕む問

1) 朴一『「在日コリアン」ってなんでんねん?』(2005年11月、講談社プラスアルファ新書、132頁)

2) 「「金嬉老事件」を韓国は忘れない」(「朝日新聞」1993年3月24日)

題を考えるためである。そして2000年から一般公開された同事件に関する韓国の外交文書と、同事件の裁判と同時進行する形で展開されていた国籍書換え問題を經由・分析しながら、映画「金の戦争」をく韓国人>という立ち位置から読み解いてみることを目的とする<sup>3)</sup>。

## 2. 反転する女優・李恵淑

映画とテレビドラマには、共通して出てくる一人の女優がいる。それは韓国の李恵淑である。李恵淑は、日本のテレビドラマでは金嬉老と獄中結婚する「チェムンヒ」（金文子）の役を、韓国の映画ではキャバレー「みんくす」で働き、後から金嬉老の愛人となる日本人の「房子」を演じている。

まず、テレビドラマは、チェムンヒが獄中にある金嬉老と結婚するために、成田空港に降り立つ場面からスタートする。チェムンヒは韓国で知った同事件に強いショックを受け、「日本で生まれ育った金嬉老が背負ってきた大きな悲しみと痛み」を慰めるために「何かしなけ

### 3) 同事件の関連年譜

1968年2月20日午後8時	静岡県清水市のキャバレー「みんくす」で暴力団稲川組準幹部・曾我幸夫と大森靖司をライフル銃で射殺。
午後11時	同県寸又峡温泉「ふじみ屋」旅館（望月和幸経営）に立て籠り、13人を人質にする。
1968年2月21日午前0時	「ライフルのタマ1200発とダイナマイトを持っているからさわぐな」と清水署へ電話。
午後11時	朝鮮人侮辱発言をした小泉勇刑事、NHKテレビ放送を通じて「私の扱った事件で迷惑をかけて申し訳ない。どうか関係のない人に迷惑をかけるな」と謝罪。金嬉老は侮辱の発言について一切触れてないとして納得しない。
1968年2月22日午前9時	望月さんの妻・英子さんと3人の子供を釈放。人質9人となる。
正午	人質釈放の条件として、①射殺した暴力団の悪事を公表すること。②小泉刑事がテレビではっきり謝ること、の2項目を出し、23日正午までに回答を要求。
1968年2月23日午前11時	金嬉老の提示した2条件に警察側回答。李裕天韓国居留民団団長らが説得。
午後6時	人質9人のうち3人を釈放。人質6人となる。夜に入り、作家の金達寿らが説得（いわゆる「文化人グループ」）。
1968年2月24日午後3時	人質6人のうち1人を釈放しようと旅館の玄関を出たところを、記者に扮していた刑事10人にはがいじめにされたまま逮捕。
1972年6月17日	死刑求刑に対し静岡地裁は無期懲役の判決を下す。検察側と弁護側ともに控訴。
1975年11月4日	最高裁が上告棄却し無期懲役を確定。ほぼ8年間の裁判闘争終結。

ればいけない」と思うようになり、獄中結婚を決心することとなる。ドラマの中のチェムンヒは単なる獄中結婚の相手だけでなくナレーターも兼ねていて、彼女の現在の視点によって事件の発端と経緯が回想される仕組みになっている。しかし、注意していいのは、チェムンヒすなわち金文子が金嬉老と獄中結婚したのは1971年10月5日であり、その当時はまだ海外旅行が自由化されていない時期だったということである（韓国の海外旅行自由化は1989年1月1日）。彼女自身、当時の雑誌インタビューの中で「もし、私の日本入国が許されなければ、そして彼が獄中から釈放されなければ、私は死ぬまで彼をまちつづけます」<sup>4)</sup>と、一般人の入国それ自体が本人の意思だけでは決定しないことを物語っている。しかし、金文子は不思議にも無事に日本に入国することとなる。事件当時の外交文書には、獄中結婚をめぐる金文子の来日の経緯について、韓国の外務省と日本領事官との間で次のようなやり取りが交されていたことが記されている。

金被告は日本人妻と離婚した後、数ヵ所から結婚の話が持ち込まれていて、その中でも韓国の趙重泰氏が仲介中の金文子（金文子、慶北ギソン出身。32歳で現在ソウルの南山旅館で働いていると言う）という女性について、金被告自身及び金被告の母親がもっとも好感を抱き、一旦写真の見合いで結婚を決めたそうであり、婚姻問題に関しては現在、総連系から■■■にいる某女性をしつこく斡旋されている関係で出来るならいち早く金文子との結婚を早期決着付けたいとのこと。一方、金被告は金女性が結婚目的で渡日するに当たって必要な手続きを民団静岡県の本部団長である趙濬衍氏にも頼んでいるが、大韓民国政府の格別な便宜を提供して下さいとのこと<sup>5)</sup>。

上の外交文書で注意すべきは、下線である。下線は論者によるものではなく、公開された原文のままであり、当時の政府がどこに力点を起しながら同事件に注目していたのかの痕跡が下線を通して現れていると言える。そういう視点からもう一度下線のところに注目してみると、当時の韓国政府は同事件を単なる<日本／在日>の問題だけでなく、離婚した金嬉老を包摂しようと「しつこく」働きかける「総連」に敏感に反応し牽制しようとしたこと、すなわち同事件を<民団／総連>の図式からも捉えていたことが分かるのである。

しかしながら、日本のテレビドラマはチェムンヒ（金文子）を通して前景化するこうした民団と総連の軋轢問題を映像の中に取り込むことなく、うまく回避させている。たとえば、チェ

4) 金文子「金嬉老と獄中結婚した私」（『婦人公論』1972年5月、151頁）。金文子は金嬉老との獄中結婚に至るまでの経緯について、「一九六九年の冬」、ソウルの南大門地下道における「百万人署名運動」に強くゆさぶられ参加し、「一九七一年二月中旬頃」に金嬉老救出運動推進会の趙重泰と丁俊瑞に「長く苦しい民族闘争をつづけるには、同じ民族の血をわけた同伴者としての妻が必要だ」と勧められ結婚を決心したと語っている。ちなみに金文子は、金嬉老から「韓国人の女性を妻にむかえれば、闘争の末、倒れても悔いはない」という言葉をも伝え聞いたと言う。

5) 『在日国民 金嬉老事件、1971』（受信：長官 発信：駐横浜領事官、1971年3月19日、番号：725-206）。本文中の■■■は判別不能な文字である。

ムンヒは獄中の金嬉老に会う前に、「二人の日本人を殺した場所を見ておきたい」と言いながら事件現場へと向かう場面がある。その時、カメラのフォーカスはチェムンヒがスクラップした以下の事件当時の新聞記事をクローズアップする。

テレビ局側も、悩み抜いたフシがある。金がかかげた民族問題を、どこまで正面からとりあげるか。金がテレビを常にながめ、内容によってはすぐ反応をみせるだけに、きわめて微妙なものがあった。たとえばNHKの「スタジオ102」が、韓国居留民団代表を出演させたい、金は「代表が朝鮮人差別問題にふれなかった」と興奮し、ライフル銃を乱射した。

(中略) こんどの「ライフル男」は「テレビ時代」のおそろしさを、あらためて感じさせた事件だった<sup>6)</sup>。

上記の記事の見出しは「88時間の対決〈中〉」である。この新聞記事の見出しがクローズアップされる理由は、同事件を分かりやすく観客に伝えることが出来ると考えたからであろう。しかし、同記事には「民族問題」を訴える金嬉老の姿だけでなく、ふじみ屋旅館に籠城している金嬉老を説得に来た韓国居留民団団長である李裕天との摩擦や対立関係も書かれていた。上の記事だけではなく、「李裕天氏が出演しているのを見ているうちに「きのう涙を流しておれを説得してくれたのに、ちょっと言うことが違っている。最も信頼している人に裏切られた」と涙を流して口惜しがり、次第に興奮、周囲の言うことに耳をかそうとしなくなった」(「警察、忍耐の勝利」「毎日新聞」1968年2月24日、夕)、「在日朝鮮人団体も、差別をなくすることと、ライフル事件とは、何の関係もないと言明している。犯人はじぶんの悪業を正当化するために民族意識を持ち出したにすぎない。サミュエル・ジョンソンによれば「ならず者の最後のよりどころは愛国心である」(社説「ライフル魔事件の終末」「読売新聞」1968年2月25日)と当時の新聞は金嬉老と民団の摩擦や対立、そしてすれ違いを一斉に報道していたことが確認できる。しかも、テレビドラマの原作ともなっている『私戦』にも、二人の対立は次のように書かれている。

いうことはモグモグしちゃって、的を射た、直接私と話をしていたこと、自分の方から民族問題としてとりあげるといいながら、そんなことは何もいわないのです。(中略) そんなテレビなら、何で出るんだ。売名行為じゃないか、と私はいったのです。そうしたら、あとになって、民団本部長に対してそういう口をきいた、無礼だ、援助しない、といったというから、援助も何もいらない、といったといういきさつがあったのです> (最終陳述から) <sup>7)</sup>

6) 「88時間の対決〈中〉」(「朝日新聞」1968年2月26日)

7) 本田靖春『私戦』(1978年3月、潮出版社、309~310頁)

原作では、裁判における金嬉老の「最終陳述」をそのまま引用するかたちで金嬉老と李裕天との対立関係を描いている。しかし、テレビドラマでは、李裕天民団団長による説得の場面は映像からカットされていて、「日本中の目と耳が金嬉老、あなたの戦いに向けられるようになりました。テレビや新聞に出るあなたの声に、大勢の人が動き始めたのです。日本の文化人という人たちもやってきました。大学教授、作家、評論家、弁護士、みんな名のある人たちです。同じ在日朝鮮人の人も来ました。説得に、です」とだけチェムンヒのナレーションを通して語られている。つまり、日本のテレビドラマ「金の戦争」では、原作にはあった金嬉老と民団との対立関係を映像から削除することによって、結果的に事件そのものをく日本／在日 > <差別／被差別>という二項対立的関係に固定化してしまったと言えるのである。

### 3. コード化される〈愛〉物語

日本のテレビドラマにおいてチェムンヒを演じていた李惠淑は、韓国の映画「金の戦争」では事件が起きたキャバレー「みんくす」で働くホステス「房子」を演じている。しかし注意すべきは事件当時、房子が働いていたのは「みんくす」ではなく「クラウン」だったのである。金嬉老の手記によると「たまたま、足を向けた『クラウン』というキャバレーで私は房子という女性と知り合いました。彼女は東北弁丸出しで、お客からからかわれるようなホステスでした。聞けば、青森の農村の出とのことでした。そんな調子だからお客の指名もまったく取れていませんでした」<sup>8)</sup>と書いてあるように、房子が働いていた店は「クラウン」だったのである。さらに映画において李惠淑の演じる房子は美人で歌も上手な売れっ子として映像化されている。映画の中で柳仁村の演じる金嬉老が「みんくす」の房子に惚れてしまうきっかけは、華やかな姿でみんなの視線を集めながらステージで歌う次の歌を聞いてからである。

- ①生きてるかぎりはどこまでも 探しつづける恋ねぐら 傷つきよごれたわたしでも 骨まで骨まで骨まで愛してほしいのよ
- ②やさしい言葉にまどわされ このひとだけはと信じてる 女をなぜに泣かすのよ 骨まで骨まで骨まで愛してほしいのよ
- ③なんにもいらない欲しくない あなたがあればしあわせよ わたしの願いはただひとつ 骨まで骨まで骨まで愛してほしいのよ

この歌は1966年にリリースされ、140万を売り上げ大ヒット曲となった城卓矢の「骨まで愛して」である（但し、シナリオには房子がどういう歌を歌ったかは書いてない）。またこの歌は「みんくす」で房子を庇うために曾我一派と大喧嘩をした金嬉老を家に連れて帰って看

8) 金嬉老『われ生きたり』（1999年12月、新潮社、69頁）

病している時に、「俺だけいるここで俺一人のために君の歌が聞きたい」と言われ房子が歌う曲でもある。

注意すべきは、まさしく房子の歌う歌のタイトルの如く、映画は二人が「骨まで愛し」合う物語へと設定がすり替えられていることである。そもそも暴力団の曾我と房子は直接的な接点がない。しかし映画の中では、房子は青森から曾我の経営する「みんくす」に「18万円」で売られて来たという設定になっている。そして金嬉老に殺される曾我は、「俺は事業には冷静だが、お前のことだけはそろばんはじくみたいにできないんだ」、「お前のことであいつに手を出したくねえんだ。分かるか」<sup>9)</sup>と語っているように、曾我が金嬉老をいじめるときは借金のもつれからではなく、普段曾我の可愛がる房子を金嬉老にとられたからに他ならない。つまり、借金返済のもつれから起きた射殺事件は、「みんくす」に「18万円」で売られて来た房子を、金嬉老が暴力団の曾我から引き抜くための<愛>物語へと設定が変わったのである。

ここで大事なのは、曾我を対立項としながら金嬉老と房子の関係が<愛>物語へとコード化してしまえば、下手すると裁判過程において弁護士側が受刑減量のために主張していた問題を無効化する危険性があるということだ。

これまでの公判で弁護側は訴訟事実をほぼ認めながらも①被告は大森さんに対し殺意はなかった②旅館にいた客ら十三人は自由に出入りできる状態にあり、監禁ではない、などと主張、検察側と鋭く対立していた。(中略)さらには昨年末、被告が韓国在住の韓国女性と獄中結婚するなど、法廷内外で事件や話題が絶えなかった<sup>10)</sup>。

当時の裁判過程において弁護士側と検察側がもっとも対立していた問題は二つほどある。ひとつは曾我と一緒に殺した暴力団員の「大森」に対しては殺意がなかったということ。そしてもうひとつは旅館にいた人質たちは自由に行動できたのだから、監禁罪は成立しないということである。映画では、①に対して「一人(大森)は殺すつもりじゃなかったけど」と裁判における弁護士側の反論に即した描き方をしている。しかし、映画そのものがすでに<愛>物語に変更され前景化されているため、曾我の率いる暴力団員に散々いじめられた末の犯行に対して「大森」は「殺すつもりじゃなかった」というセリフは当時の裁判記録をなぞってはいるものの、ストーリーのうえでは不自然な設定になっている。それだけではなく、金嬉老と房子に直接に手を出してくるのは曾我ではなく大森であり、大森は「どじょうヒゲ」をしていて、韓国では悪役の日本人としてステレオタイプ化された人物として造形されている点からも、映像そのものが弁護士側の文脈を裏切っていると言えるだろう。

そして、②の人質監禁罪において焦点となっていた問題は、銃口の位置である。岩成

9) シナリオ『金の戦争』(2005年11月、CommunicationBooks、34~35頁)

10) 「金嬉老に死刑求刑―検察側「民族差別」ふれず」(「朝日新聞」1972年2月16日、夕)

重義検察官は「(被告人は)計一三名に対して、ライフル銃及びダイナマイト等を示し、「静かにしろ、一人でも逃げると連帯責任だから生命の保証はない、一人逃げれば一人殺す」などと申し向け、同人らの生命、身体に危害を加えかねまじき氣勢を示して脅迫<sup>11)</sup>と金嬉老が人質にライフル銃とダイナマイトを向けながら脅かしたとして人質監禁罪を追加すべきだと主張する。しかし、金嬉老は事件当時について、

その入るときも私は、表で「今晚は、今晚は」という声を三、四回かけております。(中略)私は、そのときの状態というものは、検察官の起訴状にあるように、片手にダイナマイト、片手にライフル銃、私はそんな器用なことではできません。そのときは、ダイナマイトは車の中に全部おいてありました。ライフル銃だけを、銃口を下に向け、右手に下げて、それも相手にあまり目立たないように私は下げております。そして相手に声をかけたとき、非常に私としては、ていねいすぎるほどていねいな言葉を使ったつもりです<sup>12)</sup>。

と人質を脅かしたことも「銃口」を向けたこともないと陳述している<sup>13)</sup>。しかし映画の中では、ふじみ屋旅館に入った金嬉老は人質に「銃口」を向けているし、初めて記者たちを部屋に迎え入れる時と途中の記者会見でも「朝鮮人」という言葉に激情して記者たちに「銃口」を突きつけている(ちなみに日本のテレビドラマでは人質や記者に対して「銃口」を突きつける描写は一度もない)。すなわち、映画では裁判過程において検察と弁護士側がもともと対立していた上記の①と②の問題を無造作に描くことによって、人質との信頼関係を描いている場面が多々あるにもかかわらず、人質監禁罪を認めざるを得ない作りになっているのである。

#### 4. 外交文書と〈反共〉

映画の中では、ふじみ屋旅館に立てこもった金嬉老を説得しに二人の在日コリアンが訪ねて来る。一人は静岡民団幹部の「趙濬衍」、もう一人は金嬉老の友達で後から日本に帰化する「チェサンス」(日本名は金本茂)である。しかし、事件当時、趙濬衍という人は金嬉老も書いているように「同胞の金融業者」<sup>14)</sup>であり、同時代のメディアにも「静

11) 岩成重義「検察官の起訴状」(『金嬉老の法廷陳述』1970年1月、三一書房、225頁)

12) 金嬉老の意見陳述「寸又映の八八時間」(『金嬉老の法廷陳述』1970年1月、三一書房、107頁)

13) 事件後、「人質」と呼ばれた宿泊者を訪ね聞き取り調査をした山本リエは、事件当時、「人質は監禁され、恐怖におのっている」というマスコミの報道は事実ではなく、宿泊者「B」からは「彼は一度も銃を突きつけたわけではないからね。・・・大体、人間というものは、その人に当って、その人を見て、その人の動作やその人のいうことをきけば、わかるもんだ。ウソをいっているか、ほんとうのことをいっているか、いいかげんのことをいっているかね。あの時、死を覚悟してものを言っている人間に肌で感じたものね」という証言を紹介している。(『金嬉老とオモニ』1982年11月、創樹社、44～45頁)

14) 金嬉老『われ生きたり』(前同、115頁)



岡市新川二丁目豊商事趙濞衍さん（四四）」<sup>15)</sup>とだけ紹介されている。しかし、映画では事件前、小泉刑事の侮辱発言に憤激している金嬉老に対して「我慢しろ。民団の方で小泉に言ってやるから」と趙濞衍は民団の幹部として設定が変更され、曾我との一戦を前にして「母を頼む」（金嬉老のセリフ）のも趙濞衍であり、曾我との借金返済の時にも「趙さんに会って相談してみるのはどうだい」（お母さんのセリフ）と金嬉老一家を支えてくれる人物として設定されている。しかし、趙濞衍が「在日韓国居留民団静岡地方本部の団長」をつとめることになるのは事件後である（『私戦』前同、155頁）。すなわち、同時代に金嬉老事件をリアルタイムで接した人なら、「民団」と「説得」というキーワードから思い浮かべる人は趙濞衍ではなく、民団本部長の「李裕天」に他ならず、映画では当時の金嬉老と民団（李裕天）の対立をほかしつつ、頼もしい民団像を作り上げているのである。しかし、次の記事を読めば、当時の民団が金嬉老事件をどういうふうに捉えていたのかがはっきりと見えてくる。

東京・春日町の民団本部で、留守居役の金宣伝局長は、この団長をふくめた在日韓国人の気持ちを、こう語る。「本当に申し訳ない気持ちでいっぱいです。民団の組織に属してはいなかったが、（中略）もちろん、正直な話、犯人の言い訳もわからないわけではない。しかしとくに日韓関係正常化後、日本の政府も友好関係に神経を使ってくれている。私の方でも、日韓親善運動をさらに盛り上げようとし、“善良な外国人”として、エリを正して生きようと話し合っている。もし差別があったとしても、ダイナマイトを振り回し、あんな形で訴えるべきものではありません。これで韓国人はみんなあんな乱暴者だなんて観念でも持たれたら、一步一步築いてきた親善ムードも水のアワだ。韓国の新聞もこの事件を扱ってはいるが、まったくのヤクザの事件とみている。なかには、日韓関係にクサビを打ちこむための、左翼ゲリラじゃないかという人もあるほどなんです」<sup>16)</sup>。

民団の関係者によると、韓国では同事件を単純な「ヤクザの事件」と見ていて、さらには日韓関係を妨害しようとする「左翼ゲリラ」と考える人までいると伝えている。しかし、当時の新聞メディアに注目すれば、事件後、韓国では「金嬉老救出署名運動委員会」が作られたり、金嬉老の獄中手記『君は君、ボクはボク』が出版されるなど、同事件を民族問題として捉えていたことが確認できる<sup>17)</sup>。勿論、問題は金嬉老を「左翼ゲリラ」として韓国人は見えていなかったということではなく、民団関係者が事実を歪曲してまで果たして何を

15) 「人質また三人帰す」（「朝日新聞」1968年2月24日）

16) 「“民族差別”と別問題—ライフル魔 気づかう民団、総連」（「読売新聞」1968年2月24日、夕）

17) 「広がる各種の運動—韓国では`救出`の署名も」（「朝日新聞」1969年2月21日）。韓国で出版された獄中手記『君は君、ボクはボク』には、日本では『朝鮮詩集』で有名な詩人の金素雲が「こらえ切れぬ感情の激発をせめる前に、日本の政治、社会倫理、正義と人道主義を掲げた日本の良心はどこで昼寝をしているのか」という序文を寄せている。

語ろうとしていたのかである。そこで気になるのは、民団関係者が何回も口にする「日韓関係正常化」「日韓親善」「友好関係」「親善ムード」などの言葉である。つまり、これらの言葉から分かるとおり、民団側にとっては同事件を在日コリアン問題としてではなく、日韓関係の妨害物であるかないかを中心に把握していたのである。そして、「左翼ゲリラ」という言葉に注目しつつ、次の外交文書に目を転じれば、外見的には同裁判に介入しないとしながらも巧妙に介入している韓国政府の在り方が見えてくる。

1) 今まで当館で措置したところによれば、「金嬉老公判対策委員会」は日本人が発起人となり、日本人弁護団の後援を目的に結成された集団であり、主旨は思想を超越して金嬉老の救出活動をするためのものである。しかし、同「対策委員会」の構成要素から見ると左翼系列になっており、同後援をうけている日本人の弁護団自体も共産党、左翼系列で構成されている。

2) 上記の事実を踏まえて「金嬉老救出署名運動推進委員会」が「金嬉老公判対策委員会」と直結することになれば、好ましくない結果をもたらす恐れがあることから、必要ならば上記の民団側の弁護人と相互連絡を取らせたほうが良いと思われる。

3) 従って、この度の権愛羅などの渡日の必要性はないと思われる<sup>18)</sup>。

1) 金被告は事件発生直後、多くの韓国人（総連を含めて）が自分を庇い、弁護及び様々な親切を施してくれたものの、当時は自分自身が誰の助けをもらうべきかについて正しく判断することが出来なかった。しかし、本人は相変わらず韓民族の一人であり誇りを自覚しており、現在は総連の親切が韓日両国間の友好関係を阻害していることを正確に自覚している。従って、現在金達寿らが弁護人団に加入しているが、彼の発言がこれから日韓両国間の友好増進面の妨害になる場合は、彼を弁護人団から除名するように要求する<sup>19)</sup>。

上の外交文書の下線はどちらも原文のままである。ひとつ目の外交文書は金文子の獄中結婚を斡旋した韓国の「金嬉老救出署名運動推進委員会」が、金嬉老公判に参加するための訪日を求める嘆願に対する駐日大使の返信である。韓国政府は日本の「金嬉老公判対策委員会」を「左翼」として捉えていて、日本人の弁護人団も「共産党、左翼」と見なしている。だから韓国の推進委員会と日本の対策委員会と直結すれば、「好ましくない結果をもたらす恐れ」があるとして訪日を差し止める。そして、ふたつ目の外交文書は、裁判中の金嬉老と面会した横浜領事官の報告である。横浜領事官によれば、金嬉老は「総連」は「韓日両国間の友好関係を阻害」していることを正確に把握してい

18) 『在日僑民 金嬉老事件、1970』(受信：長官 発信：駐日大使、1970年3月17日、番号：JAW-03208)

19) 『在日国民 金嬉老事件、1971』(受信：長官 発信：駐横浜領事官、1971年3月19日、番号：725-206)

て、日本の対策委員会の弁護人をつとめている総連系の作家・金達寿が「日韓両国間の友好増進面からして妨害」になる場合はいつでも除名すると伝えている。

金嬉老事件に関する韓国政府の立場は、「日本政府は同事件が明白な殺人事件だから、国内法の手続きに従って裁判に回附しており、我が政府としては同事件が一旦日本国内問題で正式裁判に掲留中なので公式的に関与していない」<sup>20)</sup>とあるように、政府の立場から金嬉老裁判そのものに直接介入した痕跡はない。しかし、総連を牽制するために獄中結婚の相手である金文子の訪日を許可したこと。そして、日本の「金嬉老公判対策委員会」を「左翼系列」と見なし、韓国の「金嬉老救出署名推進委員会」の渡日をストップさせたこと（後日、「個人資格」で許可）。作家の金達寿を総連の警戒人物として見なすだけでなく、在日コリアンを民団と総連とにくっきりと線引きし、韓日両国の「友好増進」に妨げとなる要素を事前に除外しようとしたこと、同裁判に対する韓国政府の立場は在日コリアンの境遇よりはく反共><反左翼>を優先する立場だったのである。

## 5. 国籍書換え問題とく左翼>

金嬉老事件を前にして韓国政府が何故ここまでく左翼>に敏感に反応していたのかを考える時、外交文書にさりげなくスクラップされている次の東亜日報の記事は金嬉老事件そのものが他のどのような文脈と繋がっていたかを示唆する手がかりとなる。

【光州】趙重泰氏（光州市ケリム洞一区五〇五）は、日本「静岡」刑務所に収監中の在日僑胞の金嬉老氏が彼の日本人妻「ちくばふさこ」（筑場房子）婦人（21）が日本国籍を捨て韓国籍へ変更するように申請したところ、日本法務省が朝鮮籍として許可したという書信を先月28日に送ってきたことを2日あきらかにした。この手紙によると、金氏と金氏家族そして「静岡」居留民団支部長の趙滯衍氏などは、このような措置を「掛川」市役所に強く抗議する一方、日本全国で繰り広げられているこうした事態を訂正するよう、駐日韓国大使館にも要請したと言<sup>21)</sup>。

同記事は、金嬉老の日本人妻・筑場房子が結婚とともに日本国籍を捨て「韓国籍」を申請したところ、日本政府は意外にも「朝鮮籍」として許可したことを伝えている。同事件に関する駐日大使の報告によれば、「法務省は大韓民国の国籍取得に伴う日本国籍の離脱者からとて韓国の旅券あるいは国民登録証の提示がない場合は、従来の慣習上「朝鮮」表記を使用」しており、しかしながらこの場合の「朝鮮」は「いわゆる北朝鮮の

20) 「在日僑胞金嬉老事件（答弁資料）」（『在日僑民 金嬉老事件、1970』フィルム番号：1688）

21) 「「朝鮮籍」申請 金嬉老氏婦人」（『東亜日報』1970年12月3日、『在日僑民 金嬉老事件、1970』所収、フィルム番号：1706）

国籍」を意味するものではなく「あくまでも地域を意味するもの」であり、だから「外国人登録上の国籍欄の表記の訂正に関しては、いつでも韓国の国民登録証を提示して異議訂正を申し出れば、これを訂正する用意が出来ている」<sup>22)</sup>とのことである。

注意しているのは、なぜ日本の法務省はここまでややこしい手続きをとりながら対応せざるを得なかったのかである。実はここにこそ、なぜ韓国政府が日本の〈左翼〉にアレルギー反応を起こさざるを得なかったかの理由がある。それは金嬉老裁判が真っ只中の1970年、国籍書換え問題をめぐって社会党や共産党などのいわゆる〈左翼〉市長と対立関係にあったからである。国籍書換え問題とは、

六〇万在日朝鮮人の国籍問題は、七〇年の政治状況を深い部分から規定していた。日韓両政府および居留民団は、日韓法的地位協定にもとづく永住権申請（「韓国籍」取得を条件にして）を強引におすす、七一年一月の申請期限切れ近くには、買収や脅迫に近い手段をもって韓国籍の増大をはかった。在日朝鮮人総連合会（総連）と日本の革新勢力は、これに対して「祖国を選ぶ自由」の侵害に抗議し、不当に韓国籍を強要された者の朝鮮籍への書換え申請およびその支援の運動を展開した<sup>23)</sup>。

とあるように、日本と韓国は1965年の日韓国交正常化の際、日韓法的地位協定を締結しており、外国人登録証明書の国籍欄に「韓国」（「朝鮮籍」から「韓国籍」へと変更）と記載し永住権申請をした在日コリアンに限っては、麻薬犯罪や内乱に関する罪など重大な犯罪を犯さない限り退去強制の対象とならないなど、他の在留外国人に比べ優遇措置が適用されることになる<sup>24)</sup>。しかし、永住権申請の期限が金嬉老裁判の真っ只中である1971年1月16日までであるにもかかわらず、その申請者が在日コリアン約60万人の半数にも達しないことから、韓国政府は日本政府にその申請促進への協力を求めることになる。これに対して当時の愛知外相は「外務、法務の両省に自治省を加えて協力促進の

22) 『在日僑民 金嬉老事件、1970』（受信：外務部長官 発信：駐日大使、1970年12月17日、番号：JAW-12232）

23) 津村喬「田川市一〈在日〉の基本構造・序説」（『現代の眼』1971年4月、108頁）

24) 「在日韓国人の法的地位協定」（『日本外交主要文書・年表（2）』1965年6月、外務省条約局、596～598頁）。刑事法関係だけでなく、韓国籍の永住権申請者は次のような優遇措置が適用されることになる。

「第四条 日本国政府は、次に掲げる事項について、妥当な考慮を払うものとする。（a）第一条の規定に従い日本で永住することを許可されている大韓民国国民に対する日本国における教育、生活保護及び国民健康保険に関する事項。（b）第一条の規定に従い日本国で永住することを許可されている大韓民国国民（同条の規定に従い永住許可の申請をする資格を有している者を含む。）が日本国で永住する意思を放棄して大韓民国に帰国する場合における財産の携行及び資金の大韓民国への送金に関する事項」。1965年の法的地位協定では協定永住の許可がその子の世代までに限られ、孫以降の世代に関する協定の不備の解消のため、さらには、類似の境遇にありながら制度面で差が生じていたいわゆる朝鮮籍、台湾籍の永住者等の処遇の改善を含めた抜本的な永住制度を構築するため、1991年11月1日に対象を韓国籍者に限定しない「特別永住者」制度が施行されることになる。協定永住及びそれら類似の永住者の在留の資格は法令の一斉適用によりこの「特別永住者」に一本化され、協定永住の制度はその役割を終えたのである。

態勢を固める」として協力を約束し、様々な方法で「韓国籍」へ書換えるように圧力を加える。特に日本政府としては、一旦「韓国籍」になった在日コリアンが「朝鮮籍」への書換えを申請しても、それを受け付けなかったり仮に受け付けても申請を認めない方針を取ってきたのである<sup>25)</sup>。

しかし、1970年8月13日に福岡県田川市の社会党出身の坂田九十百市長が、在日コリアンの外国人登録の国籍欄の記載を申請により「韓国」から「朝鮮」に書換えることを認めてしまう。もともと国籍の書換えは、市町村長への国からの機関委任事務であり、法務省は1963年の通達で「朝鮮から韓国への書換え申請は、市町村かぎりでもただちに行なってもさしつかえない」「韓国から朝鮮への書換えは原則として認められない」「特別の事情があるときは、県を経由して法務省へ経伺するよう」との三原則を示していた。しかし、坂田市長は「おうかがい」（「経伺方式」）の手続きをとらず、市長判断でしかも「朝鮮」への書換えを強行したのである（「田川方式」<sup>26)</sup>。これを機に全国で18区77市17町が同様の態度をとるなど、多くの地方自治体が国籍書換えに応じることになり、たちまちこの問題は法務省と地方自治体の対立へと展開することになる。憲法22条の「国籍離脱の自由」、世界人権宣言15条の「国籍選択の自由」までからめ、戦後初めて在日コリアンの法的地位問題がトータルに問い直される場として注目されたものの、対立からほぼ半年後の1971年1月29日、坂田市長と法務省との間に①「経伺方式」でも問題のない10人については法務省が自主書換えを追認する。②韓国旅券の発給を受けている李判福さん一家四人は「韓国」へ再訂正して経伺、法務省で検討する。③職務執行命令は撤回する、などを条件に和解が成立することになる。

国籍書換え問題に対する韓国政府の理解は、「1）永住権申請促進への対抗策として総連が今年の春から推進したもの。2）約四万人の総連系僑胞が永住権申請のため駐日大使館の確認を得て「韓国」籍に変更したことが直接的な動機である」と把握しているとおり、国籍書換えを「革新市長及び社会党をはじめとする左翼系政党の社会団体などの協力を得て永住権申請の妨害」をした問題として捉えていた<sup>27)</sup>。つまり、当時の韓国

25) 宮崎繁樹「在日朝鮮人の国籍登録変更―「韓国」籍から「朝鮮」籍書換えをめぐる―」（『法律時報』1971年1月、57頁）

26) 「朝鮮人国籍―「田川方式」の決着」（『世界』1971年4月、119頁）。同記事は在日コリアンの法的地位問題を軸にして戦後の日本史を四期に区分している。「法的には日本国籍をもちながら外国人とされていた外国人登録令時代の第一期、一九五〇年のサンフランシスコ条約、外国人登録法によって日本国籍を失ってから第二期、一九六五年に日韓条約と法的地位協定によって韓国側にだけその地位を約束した第三期を経過、協定による永住権申請の期限が切れたこの一月十六日から、法的地位の「分裂」が膠着させられた第四期に入った。その「国籍」の取扱いも、この時代区分を追って変遷する。が、根底にある思想は、GHQの占領政策の踏襲と朝鮮半島分裂化への荷担だといえる。

27) 「総連が推進している在日僑胞の国籍を「朝鮮」に変更する問題」（『在日僑民の外国人登録国籍欄の変更問題、1970』フィルム番号：262）

政府が〈左翼〉に敏感だった理由は、単に時代が時代だったからだけではなく、国籍書換え問題を永住権申請促進に対抗して総連主導下の〈左翼系政党〉が起こした妨害として把握していたからであり、だからこそ同時期に金嬉老裁判にかかわった日本の金嬉老公判対策委員会の法廷闘争の具体的な内容や意味も省みず、ただ〈左翼〉という名によって引く締め警戒／牽制していたのである。

## 6. まとめ

韓国政府は何故、金嬉老事件に際して在日コリアンより〈総連〉や〈左翼〉に敏感に反応したのだろうか。こういう疑問に対して、1970年前後の韓国という国そのものが〈反共〉だったから仕方ないという説明もあり得る。しかし、こういう説明の仕方には二つの点において注意する必要がある。ひとつは〈反共〉という言葉を前提にして金嬉老事件を理解してしまう時、同事件と韓国政府との具体的な関係性が見えなくなり、結果的に映画「金の戦争」と韓国人の関係が一面的な捉え方に陥りかねない。そしてもうひとつは、あの当時は時代が時代だったからねという文脈で語られる〈反共〉という言葉は、当時の国家だけを批判する言葉としてスライドしていくことにより、逆説的にも普通の韓国人と〈反共〉とは全く関係ないという免罪符とも言える意識を植え付けていくことになるのである。大事なものは、大きな物語としての〈反共〉という言葉から過去を振り返り短絡的に良し悪しを判定することではなく、当時の視点から同事件がどういう文脈と衝突／交渉／包摂されていくかを正確に描き出すことである。

映画「金の戦争」は、事件そのものよりも「金嬉老が裁判で問題にした犯行に至るまでの歴史的背景の追求に焦点があてられている」（朴一）と評価される映画である。しかし、そのために殺人そのものを曾我から房子を引き抜くための〈愛〉物語へと文脈を練り直すことにより正当化させたこと。そして、民団本部長の李裕天を映像からカットし、普段親密な関係にあった「金融業者」の趙濞衍を民団の幹部へと設定を変更／焦点化することにより、金嬉老と民団との間にあった対立関係を忘却させたのである。現在、映画「金の戦争」を〈韓国人〉という立場から読み解くことの意味は、同事件を〈日本／在日〉〈日本／韓国〉と線引きする二項対立的な思考がいつしか事件当時の〈反共〉〈反左翼〉を反復することになりかねないということ、すなわち当時の韓国政府と現在のわれわれとは共犯関係であるということに自覚することに他ならないだろう。

## 【参考文献】

- (2010.3.27) 「幕降りた「金の戦争」…差別無き国へ」 「ソウル新聞」
- (2010.3.27) 「在日僑胞の差別に立ち向かった「金の戦争」終わった」 「中央日報」
- (2010.3.27) 「映画「金の戦争」の实在人物である権嬉老氏別世」 「朝鮮日報」
- (2010.3.27) 「「金の戦争」後もうすでに42年が…」 「韓国日報」
- テレビドラマ(1991.4.5) 『金の戦争』 小田切正明演出、ビートたけし主演、フジテレビ
- 映画(1992.2.29) 『金の戦争』 金永彬監督、柳仁村主演、韓進興業
- 本田靖春(1978) 『私戦』 潮出版社
- 朴一(2005) 『「在日コリアン」ってなんでんねん?』 講談社プラスアルファ新書、132頁
- (1993.3.24) 「「金嬉老事件」を韓国は忘れない」 「朝日新聞」
- 金文子(1972.5) 「金嬉老と獄中結婚した私」 「婦人公論」、151頁
- (1970) 『在日僑民 金嬉老事件、1970』 外交通信部、マイクロ資料
- (1971) 『在日国民 金嬉老事件、1971』 外交通信部、マイクロ資料
- (1968.2.26) 「88時間の対決 <中>」 「朝日新聞」
- 金嬉老(1999) 『われ生きたり』 新潮社、69頁
- シナリオ(2005) 『金の戦争』 CommunicationBooks、34～35頁
- (1972.2.16.夕刊) 「金嬉老に死刑求刑—検察側「民族差別」ふれず」 「朝日新聞」
- 岩成重義(1970) 「検察官の起訴状」 『金嬉老の法廷陳述』 三一書房、225頁
- 金嬉老(1970) 「寸又峡の八八時間」 『金嬉老の法廷陳述』 三一書房、107頁
- 山本リエ(1982) 『金嬉老とオモニ』 創樹社、44～45頁
- (1968.2.24) 「人質また三人帰す」 「朝日新聞」
- (1968.2.24.夕刊) 「“民族差別”と別問題—ライフル魔 気づかう民団、総連」 「読売新聞」
- (1969.2.21) 「広がる各種の運動—韓国では、救出、の署名も」 「朝日新聞」
- (1970.12.3) 「「朝鮮籍」申請 金嬉老氏婦人」 「東亜日報」
- 津村喬(1971.4) 「田川市—<在日>の基本構造・序説」 「現代の眼」、108頁
- 外務省条約局(1965) 「在日韓国人の法的地位協定」 『日本外交主要文書・年表(2)』 596～598頁
- 宮崎繁樹(1971.1) 「在日朝鮮人の国籍登録変更—「韓国」籍から「朝鮮」籍書換えをめぐる—」 「法律時報」、57頁
- (1971.4) 「朝鮮人国籍—「田川方式」の決着」 「世界」、119頁

## 要 旨

金嬉老事件は1968年2月20日、在日コリアン金嬉老が借金返済のもつれから静岡県清水市において暴力団員2名をライフル銃で射殺した後、寸又峽温泉のふじみ屋旅館に経営者と宿泊客合わせて13名を人質に立て籠り、射殺した暴力団・曾我の悪行を公表することと小泉刑事による在日コリアンへの蔑視発言についての謝罪を要求した事件である。同事件は彼のストレートな発言故に、差別と被差別という枠組みで理解されやすかった。しかし、1992年に公開された映画「金の戦争」を事件当時の外交文書と裁判の同時期に展開されていた国籍書換え問題とを照らし合わせながら考察してみると、今まで金嬉老裁判に直接介入してなかったかのように思われてきた韓国政府は、総連を牽制するために獄中結婚の相手である金文子の訪日を許可したり、日本の金嬉老公判対策委員会を<左翼>と見なし、韓国の金嬉老救出署名推進委員会の渡日をストップさせたり、ましてや作家の金達寿を総連の警戒人物として見なすだけでなく、在日コリアンを民団と総連とにくっきりと線引きし、韓日両国の「友好増進」の妨げとなる要素を事前に除外しようとした点などから、同裁判に対する韓国政府の立場は在日コリアンの境遇よりは<反共><反左翼>を優先する立場だったことが明らかになった。そして、映画の製作陣は同事件を反日感情をあおるようなものではなく「世界に通用する人権問題」を考えたかったとしながらも、殺人そのものを曾我から房子を引き抜くための「愛」物語へと文脈を練り直すことにより正当化させたり、民団本部長の李裕天を映像からカットし、普段親密な関係にあった「金融業者」の趙滌衍を民団の幹部へと設定を変更・焦点化することにより、金嬉老と民団との間にあった対立関係を忘却させたりするなど、当時の<反共>と在日コリアンとの関係を考える手がかりを映像から削除したのである。映画「金の戦争」を<韓国人>というポジションを意識しつつ批判的に読み解くことは、当時の韓国政府だけでなく、今のわれわれ韓国人の内面に潜む<反共>が在日コリアン理解にどういう作用をしているかについて考えることであり、そういう意味でそれは今日の問題とも言えるのである。

キーワード：金嬉老事件、金の戦争、外交文書、反共、左翼、国籍書換え運動

투 고 : 2011. 8. 31  
1차 심사 : 2011. 9. 10  
2차 심사 : 2011. 10. 1



# 일본근현대문학 수업 사례 연구\*

-일본근대문학사 수업 사례를 중심으로-

임 태 균\*\*

(e-mail: yimtkje@sungkyul.ac.kr)

---

## 目 次

---

1. 들어가는 말
  2. 다매체 시대의 교과목 개발
  3. 일본근대문학사 수업 사례
    - 3-1. 인터넷을 활용한 수업방법
    - 3-2. 파워포인트의 활용 사례
    - 3-3. 만화 텍스트의 도입
    - 3-4. 감성을 자극하는 다양한 수업방법
  4. 나오는 말
- 

## 1. 들어가는 말

무라카미 하루키(村上春樹)의 『1Q84』 1,2권에 이어 3권도 역시 베스트셀러로 많은 이들에게 읽히고 있다. 이른바 하루키 현상이라 불리는 상징적인 현상에 힘입어 일본문학 붐 현상이 일어난 지 20여년이 되어간다. 2010년에는 일본 소설이 832종이나 번역 소개되었는데!) 문학에 있어서 일류현상은 일본에서의 한류 대중문화 붐 못지않게 한국을 강타하고 있다. 그러나 대학교육에 있어서의 일본문학 교육의 현실은 바라볼 때 반드시 이러한 사회현상이 전공교육에서도 그대로 일치한다고는 보기 어렵다.

---

\* 이 논문은 2011년도 성결대학교 교내연구비 지원으로 연구되었음.

\*\* 성결대학교 일어일본학과 부교수, 일본근현대문학전공.

1) 대한출판문화협회 통계자료에 의함(<http://www.kpa21.or.kr/>). 본 협회 자료에 의하면 주요국가별 번역 출판 현황에서 일본은 2위인 미국(496종)에 크게 앞선 것으로 나타났다.

급변하는 멀티미디어 환경 속에서 문학 교육 역시 교수에게서 학생으로의 일방향적인 교육방식에만 의존하고 새로운 교육방법론을 모색하지 않는다면 학습자들의 관심에서 멀어지고 점점 더 고립될 수밖에 없을 것이다. 수요자의 입장에서 눈높이에 맞춘 문학 교육의 필요성이 요구되는 요즘이다.

정식적인 통계조사를 거친 것은 아니지만, 일본어 관련학과를 선택한 학생들의 대다수는 전공을 선택한 이유로 J-POP, 드라마, 게임 등에 흥미를 느껴서라고 대답을 하는 경우가 많다. 이에 비해 일본문학이 좋아서 전공을 선택하는 학생들이 상대적으로 적은 것이 사실이다. 이러한 현실 속에서 전공 학생들에게 일본근현대 문학을 과연 어떤 식으로 가르쳐야 하는가 라고 하는 방법론적인 문제가 대학에서 문학을 가르치는 교수들의 공통된 관심사이기도 하다.

특히 문학사와 같은 과목은 많은 작가와 작품, 문예사조가 쏟아져 나와 이를 학생들에게 이해시키는 데 많은 어려움이 뒤따른다. 가르치는 입장이나 배우는 입장에서 모두가 다 고민거리일 수밖에 없다. 다행인지 불행인지 알 수 없지만, 필자가 재직하는 대학교의 일어일문학과에서는 일본문학사를 전공필수 과목으로 지정하고 있다. 많은 학생들이 수강하는 과목이지만 문학사 수강을 원치 않는 학생들에게는 고역스러운 일인지도 모른다. 하지만 문학사는 일본문학 전반에 대한 이해와 더불어 소설강독 등의 수업을 위한 가장 기초가 되는 교과목인 까닭에 무시할 수 없는 과목이다. 따라서 교육의 방법론적 모색이 절실한 것으로 여겨진다.

그러나 지금까지 일본문학과 관련한 교육방법론에 대해서 구체적인 논의는 거의 이루어지지 않았던 것이 사실이다. 일본어교육 분야에서 이러한 교육방법론에 대한 논의가 충실하게 이루어지고 있는 것에 비하면 기현상이라고까지 할 만하다. 다행히도 최근에 위덕대의 이정희 교수<sup>2)</sup>를 중심으로 현장에서의 문학수업 교육방법론에 대한 발표와 논문이 나오기 시작하면서 문학방면에서도 새로운 시대에 걸맞은 교육방법론에 대한 논의가 활성화되고 있다. 실제로 지난 2011년 4월 23일에 백석대학교에서 개최된 한국일본문화학회 제39회 국제학술대회에서는 ‘한국대학에 있어서의 일본문학교육’라는 주제 아래 미니심포지엄이 열려 4명의 발제자에 의한 실제수업사례가 발표되었다. 당시 필자도 미니심포지엄의 발제자로 참가하게 되었는데, 다른 발제자들의 발표를 통해 문학교육방법론에 대한 많은 시사를 받았다. 또한 2011년 6월 30일부터 7월 2일에 걸쳐 계명대학교에서 개최된 한국일본학연합회 제9회 국제학술대회에서도 ‘글로벌시대의 디지털자료 활용과 일본학 연구’라는 주제로 각 학문분야별로

2) 이정희(2010.8) 「다매체 시대의 일본문학 교육방법론」 『일본문화학보』 제46집, 한국일본문화학회  
이정희(2011.2) 「일본문학 교육 방법Ⅱ-아베 고보의 『붉은 누에고치(赤糸繭)』 읽기-」 『일본문화학보』 제48집, 한국일본문화학회 참조.

심포지엄과 학술발표가 이루어졌다. 이처럼 최근에 연구자들 사이에서 대학에서의 문학교육에 대한 방법론적인 모색이 이루어지고 있는 것은 매우 바람직한 현상이라고 본다.

본 논문에서는 성결대학교 일어일문학과 2학년 2학기 전공필수 과목으로 개설한 일본근대문학사 수업의 실제 사례 보고를 통해 보다 더 효과적인 교수법에 대해서 고찰해보고자 한다. 특히 멀티미디어 교육이라고 하는 기술적인 측면의 교육방법론에 역점을 두면서도 문학이라고 하는 교육대상이 지니는 특수성을 고려하여 정서적이면서도 감성적인 측면에 호소하는 교육방법론과의 조화에 대해서 살펴보도록 하겠다.

## 2. 다매체 시대의 교과목 개발

어떤 교과목이건 마찬가지겠지만, 오늘날의 대학교육에서는 학습의 주체인 ‘학습자’에 교육의 초점을 맞춰 학습자들의 요구를 충실히 반영한 보다 효율적인 교육방법론을 개발함으로써 교육의 질과 서비스를 재고해야 할 필요성이 절실히 요구되고 있다. 본 논문에서는 이와 같은 이른바 ‘학습자 위주’의 수업방식을 기본골격으로 하여, 일본근대문학사 수업의 교육방법론을 실제 사례를 중심으로 설명함으로써 문학수업의 현재와 앞으로의 문학수업이 지향해야 할 바에 대해서 검토하고자 한다.

일본근대문학사의 실제 수업사례를 살펴보기에 앞서서 필자가 소속한 대학의 학과에서 담당하고 있는 일본근대문학 관련 수업에 대해서 간단하게 살펴 보도록 하겠다. 2011년 현재, 발표자의 소속대학 일어일문학과에서 현재 개설 중인 일본근현대문학 관련 수업은 다음과 같다.

- 2학년 2학기- 일본근대문학사
- 3학년 2학기- 일본문학산책
- 4학년 1학기- 일본현대소설연습
- 4학년 2학기- 일본근대문학강독

각각의 교과목에 대한 소개를 하자면, 먼저 일본근대문학사는 일본근대문학의 대표적인 문예사조와 대표작가 및 작품세계에 대해서 살펴봄으로써 일본근대문학의 전반적인 흐름과 특징을 이해하고 더 나아가 근대 일본과 일본인에 대한 이해를 돕는 수업이며, 일본문학산책은 다양한 장르의 일본문학을 접함으로써 중급수준의 일본어 표현을 익히고 일본문학에 대한 전반적인 이해를

도모하는 수업이다. 4학년에 개설된 일본현대소설연습은 최근에 발표된 일본 유명작가들의 소설을 읽고 감상함으로써 일본어의 다양한 표현을 배우고 독해력을 향상시키며 일본현대소설의 특징과 경향에 대해서 검토하는 수업이며, 일본근대문학강독은 명문을 중심으로 일본의 근현대문학을 감상하여 고급수준의 일본어 표현을 익히고 작품을 해석하는 능력도 배양하는 데 중점을 둔 수업이다. 일본근대문학사는 일본근대문학의 전체적인 흐름에 대한 이해를 도모하고 그 밖의 강좌는 일본근현대문학 중에서도 소설을 중심으로 각 작가의 작품에 대한 소개와 감상이 주를 이루고 있다.

현재 대학교 강단에서 가르치고 있는 교강사들이 대학교 시절 전공수업을 통해 배웠던 텍스트는 이른바 작품성 있는 작품들이 주류를 이루었다. 그러나 오늘날과 같은 다매체학습 환경 속에서 교육을 받아온 학생들의 다양한 요구를 반영한다는 입장에서 볼 때, 텍스트 선정 시 작품성이 있는 작품만을 고집하기 힘든 것이 사실이다. 대중성 있는 작품도 어느 정도 다룰 필요가 있는데, 교과목의 특성에 따라서 텍스트 선정 시 어느 쪽에 무게를 둘 것인가 고려할 필요가 있다.

4학년 1학기에 개설된 일본현대소설연습 수업에서는 기발한 착상과 기상천외한 전개가 돋보이는 호시 신이치(星新一), 아카가와 지로(赤川次郎)의 쇼트 쇼트 스토리를 중심으로 수업을 진행한다. 한편 일본문학산책 수업에서는 최근에 영화화된 작품을, 일본근대문학강독 수업에서는 작품성 있는 작품을 다루되 다양한 매체로 제작된 작품을 다수 반영하고 있다.

잘 아는 바와 같이 일본의 경우 하나의 매체로 발표되었던 것이 소설, 만화, 애니메이션, 게임, 드라마, 음악, 영화, 캐릭터 상품 판매 등의 다양한 방면으로 전개되는 이른바 미디어 믹스, 즉 원소스 멀티유즈(One Source Multi Use)라고 하는 현상이 빈번하게 이루어지고 있다. 소설의 경우도 영화나 드라마, 애니메이션 등으로 제작되는 경우가 많다.

개설 교과목 중 개별적인 작품의 감상과 이해를 목표로 한 수업들의 경우, 학생들의 흥미유발을 위해 영화나 드라마 등으로 제작된 소설을 중심으로 텍스트를 선정하고 있다. 예를 들어 일본문학산책 수업에서는 가타야마 교이치(片山恭一)의 『세상의 중심에서 사랑을 외치다(世界の中心で、愛をさけぶ)』, 이치카와 다쿠지(市川拓司)의 『지금 만나러 갑니다(いま、会いにゆきます)』, 무라카미 하루키의 『노르웨이의 숲(ルウエイの森)』 등의 작품을 다루고 있다. 또한 일본근대문학강독 수업에서는 이즈미 교카(泉鏡花)의 「고야히지리(高野聖)」, 시마자키 도손(島崎藤村)의 『과계(破戒)』, 나쓰메 소세키(夏目漱石)의 「열흘 밤의 꿈(夢十夜)」, 다자이 오사무(太宰治)의 「비용의 처(ヴィヨンの妻)」 등을 작품 본문과 해설을 엮은 줄거 『일본 근·현대소설의 이해와 감

상』(제이앤씨)을 교재로 사용하고 있다.

다매체 시대를 맞이한 요즘, 영화나 드라마, 만화 등과 같은 다양한 매체를 활용한 문학교육의 방법론을 모색해야 하며, 교과목 역시 이러한 시대적 상황을 고려해 개발해나갈 필요가 있다고 본다.

### 3. 일본근대문학사 수업 사례

#### 3-1. 인터넷을 활용한 수업방법

일본근대문학사는 전공학생들을 대상으로 한 전공필수 과목이기는 하지만, 낮은 외국문예사조와 더불어 생소한 작가와 작품 등이 계속 이어지고, 많은 문학사적인 현상과 내용들을 단기간 내에 학습하게 되는 관계로 학생들에게 주어지는 부담이 매우 큰 과목이다. 따라서 강의 내용을 학습자에게 보다 더 효과적으로 전달하고 수업에 참여하도록 유도하는 것이 필요하며, 학습자들의 주의를 집중시키기 위해서 다양한 미디어의 활용을 적극적으로 검토하는 것이 바람직하다고 본다.

본 교과목은 학습자로 하여금 일본 근대문학의 전반적인 흐름을 이해하도록 하는 데 초점이 맞춰져 있는 까닭에 작가 개인과 작품 하나하나에 대해 많은 시간을 할애할 수가 없다는 난점이 있다. 하지만 그렇다고 해서 개개의 작가와 작품에 대한 대략적인 이해가 뒷받침 되지 않는다면 문학사의 전반적인 흐름을 이해하는 데 어려움이 있을 수밖에 없다.

일본문학사와 같이 많은 작품들을 다루어야 하는 수업은 자칫 수박겉핥기식의 수업이 될 위험성도 있고, 또 수많은 작품명 등을 외워야 하는 관계로 학생들의 집중도도 떨어지기 쉬운 것이 사실이다. 이러한 수업 운영상의 난점을 해소하기 위한 하나의 대안으로, 소설 작품을 원작으로 한 영화의 예고편이나 다이제스트판, 애니메이션 등을 활용하는 것을 검토해 볼 수 있다. 이 경우, 인터넷을 통해 근현대문학 관련 자료를 접하는 것은 매우 효과적인 교육방법이라고 할 수 있다.

예를 들어 1994년에 후지TV에서 방송된 「문학이라고 하는 것 스페셜(文学云フ事スペシャル)」이라는 프로그램은 일본 문학작품을 하나씩 들면서 작품의 영화 예고편을 모방한 영상작품을 방송하고 ‘문학 예고인’이 그 작품에 대해서 상세히 해설하는 방식을 취하고 있는데, ‘유튜브(YouTube)’(<http://www.youtube.com>)나 ‘니코니코 동영상(ニコニコ動画)’(<http://www.nicovideo.jp>) 등을 통해 이러한 영상을 손쉽게 얻을 수 있다. 영상작품은 1편당 약 2~3분 내외로 이루어져 있어 짧은

시간 내에 작품의 줄거리를 파악할 수 있는데, 주요작품의 줄거리를 영상과 더불어 소개했을 때 학생들의 반응은 매우 좋았다. 수업에서 활용한 영상은 후타바테 시메(二葉亭四迷)의 『뜨거운 구름(浮雲)』, 다야마 가타이(田山花袋)의 『이불(蒲団)』, 나쓰메 소세키의 『산시로(三四郎)』, 모리 오가이(森鷗外)의 『기러기(雁)』, 다자이 오사무의 『사양(斜陽)』 『인간실격(人間失格)』 등이다.

특히 ‘니코니코 동영상’의 경우는 다른 동영상 커뮤니티 서비스와 차별화된 서비스인 동영상에 직접 코멘트를 올릴 수 있는 기능이 있어 이를 수업 시간 중에 이용해 볼 수도 있다. 이 때 학생들의 반응을 실시간으로 반영하여 코멘트를 올려보는 것도 수업의 흥미를 유발하는 한 방법이 될 수 있다.

영화나 애니메이션 외에도 동영상 서비스의 활용방법은 여러 가지가 있다. 그 중의 하나가 작가의 육성을 직접 들어보는 방법이다. 예를 들어 가와바타 야스나리(川端康成)나 미시마 유키오(三島由紀夫), 오에 겐자부로(大江健三郎), 무라카미 하루키, 무라카미 류(村上龍) 등의 인터뷰 자료를 볼 수 있는데, 작가의 육성을 직접 접한다는 것은 작가와 작품세계를 이해하는 데 있어 크게 도움이 된다고 본다. 특히 미시마 유키오의 경우는 가와바타 야스나리와의 대담, 각종 연설을 담은 영상 등을 통해 달변가로서의 그의 면모를 확인할 수 있다.

다음으로 일본 근현대문학과 관련된 스페셜 프로를 활용하는 방법을 들 수 있다. 일본에서는 각종 TV프로그램 속에서 일본문학관련 스페셜 방송을 제작하여 방영하는 경우가 흔히 있다. 예를 들어 이즈미 교카는 외식은 절대로 하지 않았으며, 선물 받은 과자를 알코올램프로 구워 먹거나 술도 팔팔 끓여 마셨을 뿐만 아니라, ‘두부(豆腐)’라는 한자에 포함된 ‘腐’라는 글자마저 꺼려 자신의 작품에는 ‘豆腐’라고 쓸 정도로 지독한 결벽증 환자였던 것은 잘 알려진 사실인데, 이러한 것을 화제로 삼은 스페셜 프로그램을 ‘유튜브’ 등을 통해 접할 수 있다.<sup>3)</sup>

한편 낭독 자료를 활용하는 것도 하나의 방법이다. 일본은 직업성우 뿐만 아니라 아마추어 자원봉사자들이 유명작가들의 소설 낭독 mp3 파일을 각종 사

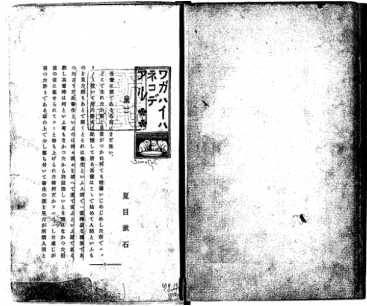


<자료1> ‘니코니코 동영상’ 사이트

3) 1995년 12월 29일, 기타노 다케시(北野武)와 아카시야 산마(明石家さんま)의 사회에 의한 니혼TV의 ‘世界超偉人伝説’에서 이즈미 교카의 결벽증을 화제로 삼은 스페셜 프로를 방영한 바 있다.

이트와 블로그에 올려놓고 있다<sup>4)</sup> 성우가 낭독해주는 자료를 활용한다면 학생들의 집중력을 유발하는 데 도움이 될 것이다. 소설의 경우는 교재에 실린 인용문을 확인하는 수준에서 그치겠지만, 시의 경우는 학습에 있어서 매우 효과적이라고 생각된다.

영상과 음성뿐만 아니라 인터넷을 통해 다양한 화상 자료를 수업에 활용할 수 있다. 국립국회도서관의 근대 디지털 라이브러리 사이



<자료2> 국립국회도서관 소장도서

트(<http://kindai.ndl.go.jp/>)에서는 출판 당시 판본을 디지털 화상으로 제공하고 있다. 해당 사이트에서는 메이지, 다이쇼, 쇼와시대 간행도서의 디지털 화상을 일반에게 소개하고 있는데, 도서 약 57만권을 수록중이고 이중 인터넷 제공수는 약 24만권에 이르고 있다. 컬러가 아니라는 점에서 다소 아쉬움이 남지만, 출판당시의 판본을 눈으로 확인할 수 있어 참고자료로 유용하게 활용할 수 있다.

물론 영화나 드라마, 작가의 육성을 수록한 CD나 테이프, 혹은 성우에 의한 작품 낭독CD나 테이프 자료 등을 교과목 담당자가 소장하고 있는 경우는 그들 자료를 적극 사용할 만하다. 하지만 인터넷의 하이퍼링크 기능 등에서 볼 수 있는 작업의 편의성과 자료의 방대성 등을 바탕으로 파워포인트 자료 등을 통해 보다 간편하고 효과적으로 학습자들에게 자료를 제공할 수 있다는 점이 큰 장점이라 할 수 있다.

### 3-2. 파워포인트의 활용 사례

본 문학사수업에서는 수업자료를 파워포인트로 정리하여 주교재)와 병행하여 수업에 활용하고 있다. 이 때 파워포인트 자료를 학생들에게 배부하는데, 인쇄된 자료에 모든 내용이 실려 있으면 자칫 집중력을 잃을 수도 있는지라 중요한 사항 등은 괄호 속에 알맞은 말을 써넣도록 함으로써 수업에 집중할 수 있도록 유도하고 있다. 예를 들어 의고전주의를 전개해 나간 겐유샤(硯友社)에 대한 설명에서는,

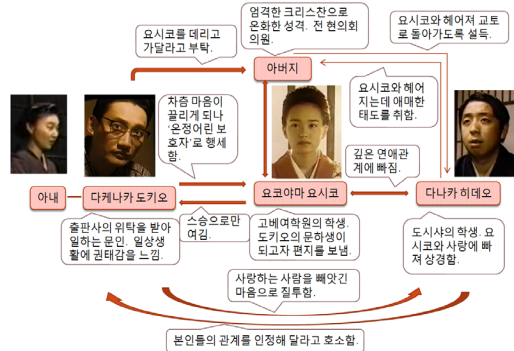
4) <http://epuron-rodoku.seesaa.net/>  
<http://www.koetaba.net/3book/index.html>  
<http://www.voiceblog.jp/ted606/>  
<http://www.voiceblog.jp/hitoha/> 등 참조.

5) 이일숙·임태균 공저(2009) 『신개정판 포인트일본문학사』 제이앤씨.

( )는 1885년에 오자키 고요(尾崎紅葉), 야마다 비묘(山田美妙) 등이 결성한 일본최초의 문학결사이다. 기관지 「잡동사니문고(我楽多文庫)」를 발간하였으며 가와카미 비잔(川上眉山), 이와야 사자나미(巖谷小波), 이즈미 교카(泉鏡花) 등이 참가하여 메이지 20년대 문단의 주류가 되었다.

와 같이 괄호 넣기 방식을 도입하여 학생들이 수업 중에 필기하도록 지도하고 있다. 또한 내용 파악을 위해 인물관계도를 작성하여 수업에서 활용함으로써 학습 효과를 배가하는 방법을 취하기도 한다. 인물관계도는 <자료②>이나 <자료 47>와 같이 『이 한 책으로 이해하는 일본의 명작(この一冊でわかる日本の名作)』(青春出版社)과 같은 해설서를 참고하여 작성한다. 물론 경우에 따라 원서를 그대로 수업도중에 활용하는 방법도 가능하지만, 본 강좌의 주요 수강대상자가 2학년인 점을 고려하여 내용 파악의 편의 도모를 위해 인물관계도의 문구를 한국어로 번역하여 사용하고 있다. 이 때 대상 작품이 앞서 언급한 「문학이라고 하는 것 스페셜」 등의 영상물에 있는 경우는 등장인물들의 얼굴을 캡처하여 인물관계도에 반영시킴으로써 내용 이해에 도움이 되도록 한다.

주요작품의 줄거리에 대해서 설명할 때는 우선 인물관계도로 1차적으로 설명을 한 뒤 ‘유튜브’ 등에 실린 동영상을 보며 확인하는 작업을 거치면 학생들의 이해도를 높이는 데 크게 도움이 된다. 경우에 따라서는 줄거리를 설명하는 순서에 맞춰 문구나 사진 등이 순차적으로 나타나는 ‘사용자 지정 애니메이션’의 ‘나타내기’ 기능을 적용함으로써 슬라이드 쇼 진행시 내용 전달이 효과적으로 이루어지도록 하고 있다.



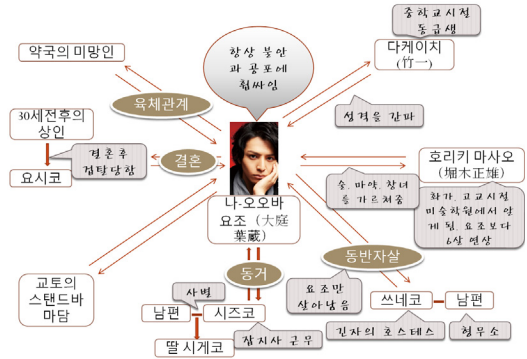
<자료3> 다야마 가타이 『이불』 인물관계도

파워포인트 제작 시에는 영상자료 뿐만 아니라 음향자료도 적극적으로 활용하고 있다. 예를 들어 오자키 고요의 『금색야차(金色夜叉)』에 대해서 소개할 때, 아타미(熱海) 해변에서 간이치(貫一)가 미야(宮)의 변심을 알고 그녀를 걷어차는 장면의 삽화를 슬라이드 쇼로 보여주면서 고토 시운(後藤紫雲)과 미야지마 이쿠요시(宮島郁芳), 두 명의 엔카시(演歌師)가 다이쇼 7년(1918)에 작사·작곡한 ‘금색야차의 노래(金色夜叉の歌)’를 BGM으로 들려주는 것은 당시의 시대적 정취를 느끼는 데 도움이 된다고 본다.

6) 木と読書の会編(2010) 『この一冊でわかる日本の名作』 青春出版社. p.75 를 참고하여 필자가 작성.  
7) 위의 책 p.19 를 참고하여 필자가 작성.



그 외에도 수업을 마치기 직전에 슬라이드 쇼 형식으로 그날의 주요 학습내용을 문제풀이를 통해 확인함으로써 학습효과를 배가하는 방식도 취하고 있다. 수업시간에는 실제로 다음과 같은 문제를 학생들에게 제시하여 정답을 함께 생각하고 맞혀 보는 시간을 마련하고 있다.



<자료4> 다자이 오사무 『인간실격』 인물관계도

1. 다음 중 일본최초의 언문일치 근대소설을 고르시오.
  - 1)쓰보우치 쇼요(坪内逍遙) 『당세서생기질(当世書生氣質)』
  - 2)후타바테 시메(二葉亭四迷) 『뜬 구름(浮雲)』
  - 3)모리 오가이(森鷗外) 「무희(舞姫)」
  - 4)히구치 이치요(樋口一葉) 「키 재기(たけくらべ)」
  
2. 다음 중 오자키 고요(尾崎紅葉)와 더불어 메이지 20년대를 풍미했던 고다 로한(幸田露伴)의 대표작으로, 성격과 처지가 다른 두 명의 목수의 대립과 갈등, 예술의 위대함을 그린 작품을 고르시오.
  - 1) 「두 비구니의 참회(二人比丘尼色懺悔)」
  - 2) 「오층탑(五重塔)」
  - 3) 「다정다한(多情多恨)」
  - 4) 「염세시인과 여성(厭世詩家と女性)」
  
3. 다음 중 독일 유학을 마치고 돌아온 모리 오가이(森鷗外)가 메이지23년(1890)에 발표한 낭만주의의 대표작은?
  - 1) 「십삼야(十三夜)」
  - 2) 『금색야차(金色夜叉)』
  - 3) 「무희(舞姫)」
  - 4) 『다키구치 뉴도(滝口入道)』
  
4. 다음 중 가와바타 야스나리(川端康成)의 초기 대표작으로, 고아근성으로 굴절되었던 주인공의 마음이 치유되는 과정을 그린 소설은?
  - 1) 『천 마리 학(千羽鶴)』
  - 2) 「잠자는 미녀(眠れる美女)」
  - 3) 『설국(雪国)』
  - 4) 「이즈의 무희(伊豆の踊子)」

물론 수업자료를 파워포인트로 작성하기 데는 적지 않은 시간이 소요되는 까닭에 수업준비 부담이 만만치 않지만, 한번 작업을 해두면 비교적 오랜 기간에 걸쳐 활용할 수 있고, 또 해를 거듭해가면서 수정작업을 거침으로써 보다 더 원활한 수업진행이 가능하다는 장점이 있다.

### 3-3. 만화 텍스트의 도입

일본은 만화 대국이라고 일컬어질 정도로 만화에 대한 관심이 매우 높은 나라이다. 일본 출판물 중에서 만화가 차지하는 비중은 엄청나게 높다. 2006년에 출판된 만화 단행본만 무려 10,965종에 이르고, 만화와 만화잡지 판매부수는 동년에 판매된 출판물 전체의 36.7%에 이른다고 하는 통계수치를 보더라도 만화에 대한 인기를 실감할 수 있다<sup>8)</sup>

문학작품 역시 만화로 재생산되는 일이 흔히 있는데, 활자에만 의존하는 소설과 비교하여 만화의 경우는 다의적 표현 특성으로 인해 학습효과가 우수하며, 시각적인 측면에서 독자에게 호소하는 바가 크다. 물론 만화로 재생산되는 과정에서 원작 본연의 모습이 다소 훼손될 수는 있겠지만, 만화의 교육적 효과가 소설의 그것보다 훨씬 구체적임은 부인할 수 없다. 적어도 일본의 만화문화에 익숙한 학생들의 입장에서 볼 때는 이러한 매체가 수업의 흥미유발을 위해서 적지 않은 도움이 될 수 있을 것이라고 본다.

지금까지 일본 근대문학 관련 만화는 빈번히 간행되어 왔는데, 그 중에서도 『일본명작문학안내(日本の名作文学案内)』(集英社)는 일본근대문학사 수업에 활용하는 데 있어서 최적의 교재라고 생각한다. 이 책은 나쓰메 소세키의 『나는 고양이로소이다(吾輩は猫である)』(1905)로부터 나카가미 겐지(中上健次)의 『곶(岬)』(1975)에 이르기까지 메이지시대로부터 쇼와시대에 걸친 일본 근현대소설의 대표작을 만화를 중심으로 소개한 책인데, 작가 및 줄거리에 대한 소개와 더불어 각 소설의 내용을 2,3페이지 분량의 짧은 만화 형식으로 요약함으로써 해당 작가와 작품에 대한 전반적인 이해에 큰 도움이 된다. 단, 2학년 수준에는 다소 어려운 어휘가 나오는 관계로 미리 다음 주 진행할 분량을 예고하여 학생들이 예습해 오도록 지도한다.

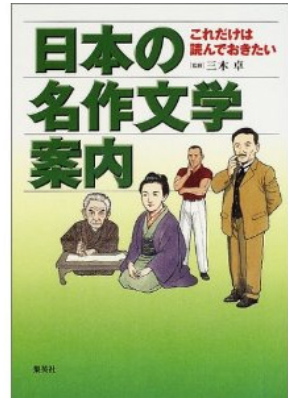
수업진행은 먼저 일본어로 된 작품의 줄거리와 만화 속 대사의 의미에 대해서 설명하고 학생들에게 역할분담을 하여 읽어보도록 한 뒤 작품에 대한 주변 지식이나 작가에 대한 설명을 덧붙이는 방식을 취하고 있다. 수업시간에 다루지 못한 작품에 대해서는 만화 대사 번역을 과제로 제출하기도 한다.

8) 『2007出版指標年報』全国出版協会・出版科学研究所、2007年 참조.

한편 1991년에 발간된 <문예만화 시리즈(文芸まんがシリーズ)>(ぎょうせい, 전 30권)는 메이지시대로부터 쇼와시대에 걸쳐 발표된 작품들 중 소위 걸작으로 평가받는 작품들을 선별하여 수록하고 있는데, 이 가운데 일부를 수업시간에 활용하고 있다. 수업에서는 본 만화의 주요장면을 스캔하여 파워포인트자료 속에 포함시켜서 소설의 줄거리를 소개할 때 보조자료로 이용하고 있다. 본 시리즈 작품은 장면 하나하나가 마치 원작을 실제로 읽고 있는 듯한 착각이 들 정도로 원작의 감동을 생생하게 전달하고 있을 뿐 아니라 원작의 문장과 스토리 전개, 심리묘사 등의 면에서 충실하게 재현해 내고 있다는 특징이 있다. 어려운 한자에는 요미가나가 달려 있고 난해한 용어에는 각주로 친절할 설명을 곁들이고 있어 나이 어린 학생에서 어른에 이르기까지 누구나 흥미롭게 읽을 수 있는 내용으로 구성되어 있다. 실로 일본어를 배우는 외국인의 입장에서는 더없이 훌륭한 일본문학 안내서의 역할을 하고 있는 셈이다.

이들 작품들 중에서 특히 인기가 있었던 작품 15권이 선별되어 2010년에 신장판으로 새롭게 발간되었다. 이 중 그동안 문학사 수업에서 활용해 온 작품의 리스트를 소개하면 다음과 같다.

- 히구치 이치요—『키 재기(たけくらべ)』
- 이즈미 교카—『고야산 스님(高野聖)<sup>9)</sup>』
- 나쓰메 소세키—『도련님(坊っちゃん)』 『산시로(三四郎)』
- 모리 오가이—『산초대부·다카세부네(山椒大夫·高瀬舟)』
- 아쿠타가와 류노스케(芥川龍之介)—『두자춘·라쇼몬(杜子春·羅生門)』 『지옥변·봉교인의 죽음(地獄変·奉教人の死)』
- 다자이 오사무—『달려라 메로스·후지산 백경(走れメロス·富嶽百景)』
- 가와타 야스나리—『이즈의 무희(伊豆の踊り子)』



<자료5> 『日本の名作文学案内』



<자료6> <文芸まんがシリーズ>

9) 이즈미 교카, 임태균 역(2010) 『고야산 스님·초롱불 노래』 문학동네 참조. 그동안 이 작품은 국내에서는 일반적으로 '고야성' 또는 '고야히지리' 등으로 불려져 왔으나, 작품의 내용을 유추하기 어려운 관계로 국내 독자들에게도 알기 쉽게 전달하기 위해 '고야산 스님'이라고 번역하였음을 알려둔다.

특히 이 시리즈 중에서도 이즈미 교카의 『고야산 스님』의 경우는 교카 특유의 난해한 문장을 만화를 통해 알기 쉽게 잘 풀어냄으로써 원작을 이해하는데 매우 유익한 작품이라 여겨진다. 행각승 슈초(宗朝)가 도야마(富山)의 약장수의 뒤를 쫓아 험한 옛길을 따라가다가 뱀을 만나는 장면이나, 숲속에서 산거머리떼의 습격을 받고 자신의 몸에 착 달라붙은 산거머리들을 뜯어내며 숲을 빠져나오는 장면, 그리고 하룻밤을 묵어가게 된 산속 외딴 오두막집에서 그 집주위를 에워싼 온갖 짐승들의 기척으로 인해 잠을 이루지 못한 채 공포에 휩싸여 염불을 외는 장면 등은 원작의 느낌을 실감나게 잘 표현해 내고 있다.

또한 최근 발간된 이스트 프레스(イースト・プレス)의 <만화로 독파(まんがで読破)>시리즈는 일본국내외의 유명작품의 만화요약본으로 문학사 수업에서도 부분적으로 활용하고 있다. 단, 문장 하나하나에도 최대한 원작의 느낌을 살린 <문예만화 시리즈>에 비해서 이 <만화로 독파>시리즈는 만화적인 재미는 더한 반면 문장은 만화가의 자유로운 해석에 맡겨져 있다는 차이점이 있다. 만화를 수업에 도입할 때는 이러한 부분에 대해서도 인식하고 학생들을 지도하는 세심한 주의가 필요하다고 본다.



<자료7> <まんがで読破>시리즈

수업시간에 활용할 만한 주요 작품의 리스트를 소개하면 다음과 같다.

- 모리 오가이—『무희(舞姫)』
- 나쓰메 소세키—『나는 고양이로소이다(吾輩は猫である)』 『마음(こころ)』
- 시마자키 도손—『과계(破戒)』
- 아쿠타가와 류노스케—『라쇼몬(羅生門)』
- 다자이 오사무—『사양(斜陽)』 『인간실격(人間失格)』
- 미야자와 겐지(宮沢賢治)—『은하철도의 밤(銀河鉄道の夜)』

만화 텍스트가 지니는 장점은 원작에 대한 빠른 이해와 더불어 주요 장면에 대한 이미지화가 가능하다는 점이다. 또한 이러한 점 외에도 만화 대사가 지니는 일본어 교육적인 면에서도 긍정적인 효과를 기대할 수 있다는 점에서 교육매체로서의 만화 텍스트의 이용가치가 인정된다.

### 3-4. 감성을 자극하는 다양한 수업방법

필자의 일본근대문학사 수업에서는 이러한 방법 외에도 복각본이나 문학관

런 복제품 자료 등을 학생들이 돌려가며 볼 수 있도록 제시한다거나 하는 방법을 취함으로써 학생들의 감성을 자극하는 수업방법도 시도하고 있다. 문학사 수업이 자칫 지식 전달의 수업으로 그치게 되는 폐단을 막기 위해 문학이 지니는 감성적인 면을 수업시간에 살려보려고 노력하고 있는 것이다.

근대문학관에서 간행된 『명저복각전집(名著復刻全集)』(近代文学館) 시리즈는 1970년부터 간행이 이루어져 이미 오랜 세월이 흘렀지만, 일본의 고서점 등을 통해 손쉽게 구입할 수 있다. 복각본을 제시하는 방법은 학생으로 하여금 당시에 발표된 판본 형태를 확인하게 함으로써 일본문학을 더욱 가깝게 느끼도록 유도한다는 측면에서 감성적 또는 정서적 교육방법론의 한 시도가 될 수 있다. 책이나 인터넷을 통해서만 보던 당시 판본을 복각본의 형태로 직접 만나보는 것은 학생들에게 또 다른 볼거리 제공한다는 데서 큰 의미가 있다.



<자료8>

『小説神髓』 복각본(近代文学館刊)

실제로 쓰보우치 쇼요의 『당세서생기질(当世書生氣質)』의 컬러풀한 삽화나 같은 작가에 의한 『소설신수(小説神髓)』, 후타바테 시메의 『뜬 구름(浮雲)』, 시마자키 도손의 『과계(破戒)』 등 문학사적으로 큰 의의가 있는 저자들의 복각본을 학생들에게 보여줄 때는 교실 곳곳에서 탄성이 터지곤 한다. 특히 나쓰메 소세키의 『나는 고양이로소이다(吾輩は猫である)』나 기타하라 하쿠슈(北原白秋)의 『사종문(邪宗門)』 등의 뛰어난 장정과 삽화 등을 당시의 판본과 동일한 복각본을 통해 직접 접해본다는 것은 학생들의 문학에 대한 이해의 폭을 넓히는 데 크게 도움이 된다.

그중에서도 1984년에 간행된 다니자키 준이치로(谷崎潤一郎)의 『순킨쇼(春琴抄)』 『문신(刺青)』 복각본 특선세트에는 다니자키가 평소 애용하던 특제 페이퍼 나이프 겸용 문진의 복제품이 포함되어 있어 학생들에게 작가의 향기를 느끼게 해주는 데 큰 도움이 된다. 일본이 캐릭터 상품을 잘 만들어내는 것은 익히 알려진 사실이지만, 문학작품과 관련하여서도



<자료9> 다니자키 준이치로가 애용하던 특제 페이퍼 나이프 겸용 문진의 복제품

이처럼 다양한 상품이 제작되어 판매되고 있다는 것은 경이롭기까지 하다.

이처럼 작가나 작품세계와 직간접적으로 관련된 실물 모형은 직접적 학습경험과 가장 밀접하게 연결되어 있는 입체적 시각자료로서 그 학습효과는 매우

크다고 본다.

그 밖에 수업시간에 실제로 활용하고 있는 실물 모형에는 ‘후미에(踏絵)’가 있다. 예전에 학생들을 인솔하여 나가사키 소재 자매대학에 단기연수를 갔을 당시에 비교적 저렴한 가격에 구입한 복제품인데, 문학사 수업시간 중에 학생들에게 돌려보도록 하면 무척 신기해하며 반응이 좋아 구입한 가격 그 이상의 가치를 충분히 하고 있다. 문학사 첫 수업시간에 일본의 근대로의 이행 과정을 설명하는 도중에 가톨릭의 전파와 박해에 대해서 가르칠 때나 엔도 슈사쿠(遠藤周作)의 『침묵(沈黙)』 등에 대해서 소개할 때 매우 효과적이다.

또한 운문문학에 대한 학습이 마쳐질 무렵에는 일본의 근현대시를 암송하여 발표하는 시간을 갖기도 한다. 다카무라 고타로(高村光太郎)의 「도정(道程)」이나 하기와라 사쿠타로(萩原朔太郎)의 「대나무(竹)」 등의 시 암송을 성적에 일부 반영함으로써 학습자가 수업에 참여하도록 지도하고 있다. 시를 단순히 기계적으로 암송하는 것이 아니라 각종 낭독사이트를 통해 전문성우의 낭독을 미리 들어보고 반복해서 따라 읽게 함으로써 해당 시를 충분히 음미하고 이해하도록 지도한다.

한편 한국어 하이쿠(俳句) 짓기를 과제로 내 학생들이 직접 창작의 주체가 되어보도록 유도하기도 한다. 문학사 수업은 2학년을 대상으로 한 수업인지라 일본어로 과제를 수행하는 것은 쉽지 않다는 판단 하에 한국어로 하이쿠를 짓도록 지시한다. 실제로 학생들이 직접 지은 한국어 하이쿠를 소개하도록 하겠다.

달 밝은 밤에 / 모락모락 지어낸 / 고구마 몇 개

눈 녹을 때쯤 / 내 마음의 얼음도 / 녹아내릴까

낙하산 꽃씨 / 파란 봄을 적시는 / 새하얀 꽃비

한국하이쿠연구원에서 주최하는 일본어하이쿠대회와 한국어하이쿠대회가 올해로 각각 제15회와 제6회를 맞이하여 많은 사람들이 꾸준한 참가가 이어지고 있어 세상에서 가장 짧은 정형시인 하이쿠에 대한 높은 관심을 실감할 수 있다. 학생들에게도 이러한 대회가 존재하는 사실을 수업시간에 알려 참가를 독려하고 있다.

이처럼 다양한 매체의 활용이라고 하는 기술적인 측면의 접근과 더불어 문학교육에 있어서 중요한 요소인 정서적이고 감성적인 측면의 접근이 적절한 조화를 이루는 것이 중요하다는 판단 하에 다양한 수업방법을 시도하고 있다.

## 4. 나오는 말

이상과 같이 본 논문에서는 일본근대문학사 수업에 나타난 멀티미디어 활용 사례를 비롯하여 교육방법의 다양한 시도에 대해서 소개하였다.

오늘날과 같이 멀티미디어 환경이 급변하는 상황 속에서 다양한 매체를 활용한 수업방법론의 개발은 필요불가결한 일이라 할 수 있다. 그것은 일본근현대문학 수업에서도 예외는 아니라고 본다. 수업에서 실제로 시도해 보지는 않았지만, 최근 화제가 되고 있는 소셜 네트워크 서비스(SNS)인 페이스북(Facebook)을 수업에서 활용하는 방법도 적극적으로 검토해 볼 만하다. 전세계 페이스북 가입자 수는 약 7억 명, 국내 가입자 수도 약 370만 명에 이르고 있다고 한다.<sup>10)</sup> 페이스북 서비스를 교육현장에서 활용하게 된다면 교실 안팎에서 다이내믹한 수업활동이 가능하게 될 것으로 기대된다. 이러한 소셜 네트워크 서비스를 활용한 수업은 교수-학생 간 커뮤니케이션의 활성화와 더불어 교실에서 오프라인과 온라인을 넘나들며 동시에 수업을 진행할 수 있는 가능성을 열어줄 수 있다고 본다. 최근 날이 갈수록 거세지고 있는 스마트폰 열풍을 고려해 볼 때, 수업을 진행하면서 스마트폰을 활용하여 실시간으로 페이스북에 접속하게 함으로써 학생들이 수업에 참여하게 유도할 수도 있다. 스마트폰의 보급 확산으로 다양한 교육방법의 장이 열리게 된 셈이다. 스마트폰 사용자 인구 2000만 시대를 맞이한 지금, 앞으로 일본근현대문학과 관련한 각종 어플리케이션의 개발도 점차 진다.

최근 일고 있는 갤럭시탭이나 아이패드와 같은 태블릿PC 붐에서 보는 바와 같이, 각종 기술문명의 이기가 앞으로 점점 우리 사회에 깊이 뿌리를 내리게 된다고 볼 때, 이러한 멀티미디어 학습 환경의 조성에 관심을 가져야 할 필요가 있다고 본다. 이러한 점에서 앞으로는 스마트폰이나 태블릿PC 등을 활용하여 교수와 학습자가 동시에 수업에 참여하는 멀티미디어 수업방식도 고려해 볼 만하다. 물론 이러한 다양한 매체를 통한 학습만이 능사는 아니라고 본다. 작품에 대한 정확한 해석, 작품 배경에 대한 설명 등 철저한 수업준비가 우선 시되어야 함은 말할 필요도 없을 것이다. 기술문명의 이기를 최대한 활용하되, 문학의 본질에 대한 깊이 있는 자기조명이 함께 보조를 맞추어 나가야 할 것이다.

향후 문학교육과 미디어와의 관계에 대한 교육자와 학습자 간의 가치체계 정립도 문제시될 것으로 사료된다. 그러나 중요한 것은 문학과 미디어의 관계를 종속 혹은 병치의 관계로 보는 관점에서 벗어나, 학습자가 채 인식하지 못

10) <http://www.ugn.kr/coding/view.asp?seq=43492> 참조.

하고 있는 문화적 현상을 교육의 장에서 다양한 형태로 형상화함으로써 학습자 스스로가 자신의 언어로 생산해 내도록 유도하는 상생의 관계로 바라보는 좀 더 적극적인 관점이 필요하다고 본다.

### 【参考文献】

- 데이비드 버킹엄, 기선정·김아미 역(1994) 『미디어 교육』 JN Book
- 이일숙·임태균(2009) 『신개정판 포인트 일본문학사』 제이앤씨
- 임태균(2010) 『일본 근·현대소설의 이해와 감상』 제이앤씨
- 김희선(2010.12) 「교수법에 있어서 페이스북 활용사례(1)」 (성결대학교 인문과학연구소 『인문학논총』 제15집 1권)
- 이정희(2009.10) 「일본문학 교육방법론 I -문학 교육의 의의를 중심으로-」 (국제언어문화학회 『국제어문학』 제20호)
- 이정희(2010.8) 「다매체 시대의 일본문학 교육방법론」 (한국일본문화학회 『일본문화학보』 제46집)
- 이정희(2011.2) 「일본문학 교육 방법Ⅱ-아베 고보의 『붉은 누에고치(赤い繭)』 읽기-」 (한국일본문화학회 『일본문화학보』 제48집)
- 정재찬(2009.4) 「미디어 시대의 문학교육」 『문학교육학』 한국문학교육학회
- 황보영식(2010.12) 「교수법에 있어서 페이스북 활용사례(2)」 (성결대학교 인문과학연구소 『인문학논총』 제15집 1권)



## 要 旨

本稿は、筆者の大学に専攻必須科目として開設されている〈日本近代文学史〉科目の実際の授業事例を報告し、より効果的な教授法について考察することを研究目的とする。特に学習者の視点に立ち、特にマルチメディア教育という技術的な面での教授法に利点を置きながら、学習者の感性に訴える教授法との調和について探りたい。

具体的な授業事例においては、まずインターネットを利用した授業方法について紹介した。〈YouTube〉や〈ニコニコ動画〉などの動画共有サイトを通して、文学作品の映画の予告編を模した映像作品を紹介し、作品の理解に役立たせている。またインターネットを通して作家の肉声や声優による朗読資料を聴くことにより、作家や作品に対する関心を高める。

本授業ではパワーポイントを使って人物相関図を作成し、学生に提供している。授業が終わる前にその日の学習内容を穴埋め、あるいは四択クイズ形式の問題を解くことによって確かめる。

それから作品の理解を助けるために、小説の漫画本も授業で使う。文学作品を原作とする漫画本は数多くあるが、中でも原作の文章、ストーリーの展開、心理描写などにおいて、できるだけ原作にそった内容の作品を選んで授業で紹介する。

その他にも感性に訴える教育の一環として復刻版や作家の愛用品の複製などを学習者に提示したり、学習者自らが詩の暗唱や俳句の創作を試みたりすることにより、文学を体験できる授業になるように心掛けている。

これからの文学授業では、マルチメディアの積極的な導入とともに文学本来の特性を生かした教育方法が必要になってくると思う。

キーワード：学習者、教授法、日本近代文学史、マルチメディア、インターネット、  
パワーポイント、漫画本、感性

투 고 : 2011. 8. 31  
1차 심사 : 2011. 9. 10  
2차 심사 : 2011. 10. 1



# 『或る女』論\*

—木部という人物について—

鄭旭盛\*\*

(e-mail: jungsung@nsu.ac.kr)

---

## 目次

---

- I. 序論
  - II. 木部と葉子の出会い
  - III. 二人の「恋」の饗宴
  - IV. 「本能」もしくは「性」への芽生え
  - V. 結論
- 

## I. 序論

『或る女』の登場人物の中で、木部という人物はどちらかというと重要人物として分類されることはまずない程作品の中でその存在感は薄い人物である。一般的に『或る女』を論ずる際、重要人物であげられるのは、この作品の主人公の葉子・アメリカ行きの船の事務長である倉地・婚約者の木村の親友で、葉子の面倒を見てくれる古藤らが考えられる。やはり、これらの人物に較べると作品のなかで、木部がしめるその役の重みは確かに貧弱していることは言うに及ばない。

この木部という人物は、実際作品の中で登場する頻度も非常に低いのである。『或る女』は周知の通り、前編が21章（この前編はよく知られているように前作の「或る女グリンピス」の改作である）・後編が28章で、あわせて全49章の構成になっている。しかし、木部の登場は、その前・後編49章の中でも、特に、注目に値するところは、わずか4章（1章と3章は横浜行きの電車の中で偶然に再会する場面、2章は木部との最初の出会ってから

---

\* 본 논문은 2011년도 남서울대학교 학술연구비지원에 의해 연구되었음.

\*\* 남서울대학교 일본어과.

二人の結婚生活そして離婚にまで至った木部との過去の回想の場面、37章は鎌倉で偶然に再び再会する場面)にわたって登場するくらいで、他の個所では殆んど注目する程度ではないくらいである。<sup>1)</sup>

木部という人物の作品上のその役についてひとごとで概括すれば、葉子の過去の夫という役を担う人物であると言える。換言すると、葉子に取り返しのつかない痛い過去歴(子持の離婚した女)を与えた人物であったわけである。一時木部に惹かれた葉子は、親の反対にも関わらず、木部と恋に落ち、挙げ句に、結婚はしたものの、二人の恋は長続きすることなく、はかなく終わってしまう。言ってみれば、これが木部と葉子との関係のすべてである。このように作品の外見上、先も言及したが、木部という人物は現在の葉子象を物語るに当たって、恥すべき一つの過去歴の相手役を担った登場人物に過ぎないとも言えよう。

このような木部について、この作品における役の重みの理由もあって、それほど木部に注目していなかったことも事実である。手元にある論文の中でも木部と関連のあるものは、次の江藤氏の論<sup>2)</sup>の他には殆んど見つからないと言っていいほどである。その論文の中で江藤氏は登場人物の木部をこう意味付けしている。

後編に於ける木部と定子は、葉子の破滅の有り様を示す存在でもあった。木部と定子の葉子との位置関係を見るならば、そこに葉子を破滅へ向かわせるべく様々の装置が張り巡らされているのがわかるだろう。

この江藤氏の意見は、主に後編の第37章に登場する木部にその論点を置いてある。そして、江藤氏は、後編の第37章の視点を踏まえたうえで、登場人物の木部が葉子を「破滅」に向かわせる装置の役を担う人物として見なしていたのである。その木部が「破滅」的な役を担う人物という江藤氏の意見に異議はなく、むしろ非常に適切な指摘であるように思われる。しかし、本論文は37章に関する検索ではなく、主に第2章に重点を置いて論ずるつもりである。

つまり、この論文の素朴な趣旨は、第2章での木部という登場人物がこの作品にもしくは葉子にいかなる影響関係をはらんでいるのだろうか、というそのような問題に注目してみたい

1) 「こんなことまで比較に持ち出すのはどうか知らないが、木部氏のような実行力の伴わない夢想家は、わたしなどは初めから不賛成だった。」(8章)、「木部と別れてから、何という事なしに捨てばちな心地になって、だれかれの差別もなく近寄って-来る男たちに対して勝手気ままを振る舞ったその間に、偶然に出あって偶然に別れた人の中の一人でもあろうか。」(9章)、「そして十八の時木部に対して、最初の恋愛らしい恋愛の情を傾けた時、葉子の心はもう処女の心ではなくなっていた。」(16章)、「そして木部と別れて以来絶えて味わわなかったこの甘い情緒に自分からほだされおぼれて、心中でもする人のような、恋に身をまかせる心安きにひたりながら小机に突っ伏してしまった。」(18章)、「しかし考えてみると、木部と別れた時でも、葉子には格別これという謀略があったわけではなく、ただその時々にはわかまを振る舞ったに過ぎなかったのだけれども、その結果は葉子が何か恐ろしく深い企みと手練を示したかのように人に取られていた事も思った。」(19章)というくらいのことである。

2) 江藤茂博「『或る女』・後編の構造に関する試論—木部孤と定子形象の意味—」(『日本文学』1986年6月)

のである。なぜなら、登場人物の木部は、葉子にただの痛い過去歴を与える役を担う人物に過ぎない人であるとはどうしても思わないからである。もしかすると、主人公の葉子に多大な影響を及ぼし、そして葉子にして一代変貌を与えた注目すべき人物（先の引用の江藤氏の指摘のように「破滅」をも含めて色々な影響関係が想定されるが）ではなかったのだろうか。このような筆者の推論については、これからの本論を通して明らかにしていくつもりである。しかし、このような論述も言ってみれば、結局のところ、ある意味では葉子象になるのかもしれない。だとしても、この論を通して新たな木部という登場人物の意味を提示したということに意義があると思われる。以上のような理由で、これから木部という人物についてのささやかな一考察を進めることにしよう。

## II. 木部と葉子の出会い

葉子に「初恋的」でもあった木部の外見について、本文の中ではこれ以上ない絶賛の言葉を惜しまない。

木部はその性格ばかりでなく、容貌一骨細な、顔の造作の整った、天才風に蒼白いなめらかな皮膚の、よく見ると他の部分の鮮麗な割合に下顎骨の発達した—まで何所か葉子のそれに似ていたから、自意識の極度に強い葉子は、自分の姿を木部に見付け出したように思って、一種の好奇心を挑発せられずにはいなかった。（2）

これだけを見ても、木部という人物の外貌がいかに素晴らしくしかも秀麗な容貌の持ち主であったか推定するにむずかしくないだろう。これだけの外貌の表現をみても、木部は一般的に女性から関心が持てる男であったことは容易に推測されよう。申し分なく、木部は、同年輩の人よりも頭抜けた時代を先駆ける感覚を持っていた葉子の関心を惹くには十分な容貌であったわけである。

しかし、木部はその容貌だけが優れていたわけではない。大新聞社の記者として戦場に従軍し、「月並みな通信文の多い中に、きわだって観察の飛び離れた心力のゆらいだ文章を発表して」当時の日本社会で「天才記者」として名をとどろかした才能のある文筆家でもあったわけである。それに、日清戦争は当時の日本で国民的な大きな関心事であっただけに、木部の活躍は一つの「英雄」として讃えられてもいたのである。

当時の日本社会のなかで木部がどのように評価されているのか、本文を見るとよくわかる。

木部の記者としての評判は破天荒といってもよかった。いやしくも文学を解するものは木部を知らないものはなかった。人々は木部が成熟した思想をひさげ世の中に出て来る時の華々しさをうわさし合った。ことに日清戦役という、その当時の日本にしては絶大な背景を背負っているで、この年少記者はある人々からは英雄（ヒーロー）の一人とさえて崇拝された。（2）

このように、木部はその優れた容貌もいい、文筆家として才能もいい、今で言うと、超人気のアイドルと同じように日本の国民一般の関心を惹く人気者であった。恐らく、エリートで、真面目で、ロマンチストであった木部は、当時の若い女性から憧れの対象であったはずであろう。木部に対する当時の日本での人気は、若い女性だけにとどまっていなかったのであるようだ。キリスト教婦人同盟の副会長を努めていた葉子の母も、この木部に関心を抱き、葉子の家にまで招待したことをみても、木部がいかに人気が多かったかわかる。

一方の葉子も葉子で、もうすでに15才の時から流行をリードしていたし、老校長に「思いもよらぬ浮き名を負わせ」たり、自分の気に食わないと言って上野の音楽学校を勝手にやめたり、母の弱点をじゃんとおさえて、一步もひけをとらないくらい、はやいときからただの少女ではなかったのである。しかも、19才になる今の葉子は、もう既に何人の男から関心を持たれながらも、それをうまく操りぬけるほどの「タクト」を持っていた少女であった。しかし、その多くの男達は「自分達の獣性を恥じる」ばかりで、葉子を恨む者はなかったことを見ると、決して<性的>に乱れていたようではなさそうに見える。とにかく葉子は感覚の溢れる、時代の先端を歩んでいたきちんとした女性であったわけである。

このような二人の運命的な出会いは、葉子の母が催した慰労会であった。木部はこの葉子に吸い込まれるように一目惚れしてしまう。葉子も木部の秀麗な容貌に「何所か葉子のそれに似」ったような感じを受けていたのか、何か不思議な好奇心を抱くのである。お互いはこのようにして関心を持ち始めたのである。作品の中ではこのような二人の間の関心についてこう描かれている。

木部の全霊はただ一眼でこの美しい才気の張り溢れた葉子の容姿に吸い込まれてしまった。葉子も不思議にこの小柄な青年に興味を感じた。そして運命は不思議な悪戯をするものだ。

(中略)

木部は燃えやすい心に葉子を焼くようにかき抱いて、葉子はまた才走った頭に木部の面影を軽く宿して、その一夜の饗宴はさりげなく終わりを告げた。(2)

これを見ても分かるように、お互いに相手に関心を抱いていることは、疑いを入れない。しかしこの引用を丹念に読み返してみると、二人の間の関心の濃淡の差が感じられる。木部は「吸い込まれ」るよう葉子に惹かれる。葉子も勿論関心がないわけではないが、木部ほどではないが「興味を感じ」るのではある。このように二人の間では、その関心の濃淡が感じられる。より正確にいうと、濃淡の差というより、お互いに相手に対する関心の身体上の違いに気づくであろう。

木部は「心」に葉子のことを抱き、葉子は「頭」に木部の「面影を軽く宿し」ているのである。このように相手に対する関心を、木部は「心」に、葉子は「頭」にという、身体上の違いを読み取ることができる。「心」という身体上の記号が意味するように、木部は葉子に対する思いがいかに熱かったかを物語っているのかも知れない。少なくともこれを見る限

り、葉子に対する木部の思いがいかに切実であったのかは確かなように思われる。

一方、葉子は木部のように「心」ではなく、「才走った頭に木部の面影を軽く宿し」とあるように、その「頭」で関心をしめし始めたのである。これは葉子の木部についての思いが木部ほどのものではなかったことを意味するかも知れない。本文を見ても分かるように、最初葉子はそれほど積極的ではなかったこともそれを裏付けるだろう。しかし葉子も最初は「頭」で関心を示したものの、その後木部が度々葉子の家に訪れ、家中の人々の心を捕らえたりする内に、やっと「心を許して木部に好意を見せ始めた」のである。木部の努力と母に対する反感が募り、葉子も「頭」ではなく、「心を許して」しまうのである。

このような葉子の「頭」から「心」への変貌のプロセスは、一般的に男女の間によく見当たられるプロセスとして理解しても何一つおかしいとは思われない。しかし葉子にとっては、まったくその一般的なこととして理解していいとも限らないような気もする。なぜかというと、葉子はこの「頭」が他の人よりも非常に発達した「頭」型の人であったからである。葉子が「頭」型の人物であることは、作品を見ても十分に察せられることであろう。

何よりも、上野の音楽学校でヴァイオリンを習ったときの回想の場面が、これをよく物語ってくれる。才気溢れる葉子はヴァイオリンを習ってから、わずか二ヶ月もならない内に、教師や生徒達からその才能をほめられる。しかしケーベル博士は葉子の演奏を聞いた後、葉子の演奏を聞いて、その能力の本性を見抜き、こう述べるのである。「お前の楽器は才で鳴るのだ。天才で鳴るのではない」のだと、酷評する。葉子も葉子で、「それで御座いますか」と、言い捨てて、なにげなしにヴァイオリンを窓から放り出しやめてしまう。あんまりにも、そのやめ方がきっぱり過ぎる。先のケーベル博士の「お前の楽器は才で鳴るのだ。天才で鳴るのではない」という評価の言葉は、よく吟味する必要があると思われる。これは一体何を意味しているのだろうか。もしかすると、博士の評価の言葉は、次のことを言うのではないだろうか。葉子のヴァイオリンは「心」からにじみ出る感性に基づいた演奏ではなく、「頭」でという技巧の慣らしの基で演奏された、即ち一種の頭で覚えただけのことで演奏する浅い技巧にすぎないことを意味するのではなかったのだろうか。心の奥底からではなく、「頭」で習った、もしくは覚えただけのことを演奏しているのだと、ケーベル博士は評価していたのである。

このように、上野の音楽学校の回想の場面からうかがわれるように、どちらかというとな葉子は「心」で接する人ではなく、「頭」で接する人であったわけである。それに葉子は「頭」型の少女であるだけに、感傷にも揺れることのない冷静な少女であったであろう。葉子がいかに冷静な少女であったかは、夫にも負けないくらいただ者ではなかった母の弱点をちゃんと押さえて、一步もゆずらなななことや、葉子に近づく男たちをうまく操る行動からいかに冷静な少女でもあったか十分に分かるだろう。このように、葉子は心の感傷に頼ることのない、冷静な判断力の鋭い「頭」型の少女であったわけである。

さすがの「頭」型の葉子は、先ほども言及したが、木部について最初に関心を示したのもやはり「頭」からであった。「心」ではなく、「頭」で相手に関心を示すということは、

よく考えてみると、外見に敏感であることを意味するのではないだろうか。葉子が木部に関心を抱いたことに「何所か葉子のそれに似ていたから」と言っている。これはまさに木部の外見について葉子がどれほど敏感に反応していたのかを物語っていると言えよう。「心」という内面の世界より、「頭」で判断するビジュアルの世界。先ほども言及したが、木部のビジュアル（その外貌だけではなく、人々から「英雄」として崇拝されている木部という人物）は、「頭」型の葉子にこれ以上ない外見の条件を持っている相手であった。

つまり、「頭」型の葉子には、よく合う相手が木部であったわけである。このような運命的な二人の出会いから、やっと「恋という言葉で見られねばならぬような間柄」にまで発展する。お互いに「恋」が募るにつれて、葉子も「心を許して木部に好意を見せ始め」るのである。葉子も「頭」から「心」に変貌してしまうのである。「頭」型の葉子がいかにして「心」に変貌していたのか、その決定的な原因は、一体何であったのだろうか。それについては、次に節を改めてさらに考察を進めて見ることにしよう。

### Ⅲ. 二人の「恋」の饗宴

もう既に過去の「頭」型の少女ではなく、別人のような葉子に変貌してしまったのである。なぜ「頭」型の葉子が「心を許して」しまったと言うように、「心」型の葉子に変貌してしまったのだろうか。一体、何が葉子をそのようにさせてしまったのだろうか。それは次の引用の内容がよく物語ってくれている。

葉子はこんな目くらむような晴れ晴れしいものを見た事がなかった。女の本能が生まれて始めて芽をふき始めた。そして解剖刀のような日ごろの批判力は鉛のように鈍ってしまった。

(中略)

そして木部の全身全霊を爪の先き想いの果てまで自分のものにしなければ、死んでも死ねない様子が見えたので、母もとうとう我を折った。そして五ヶ月の恐ろしい試練の後に、両親の立ち会わない小さな結婚の式が、秋のある午後、木部の下宿の一間で取行なわれた。(2)

何が葉子をこんなに「目くら」ませるほどに変貌させたのだろうか。それは引用の中でもあるように、他ではなく、ぴりぴりする「女の本能」に刺激され、その快感の痺れを味わってしまったからであった。そして始めて味わったその快感の相手が木部であった。もう木部しか目に見えない少女になってしまったのである。引用の内容は、もう葉子は「頭」型の人でもなければ、過去の冷静な葉子でもないことを意味する。それに、葉子の母も「我を折」る程、誰が見ても葉子の木部に対する思いは、もう愛という名に相応しいほど、ただものではないことがわかる。どちらかという、もう木部よりも積極的であると言っていいくらいである。このような変貌は葉子の母（葉子の母の反対が敢えて葉子に火を付けたようなこともあろう



が) や葉子自身の性格 (もともと積極的な性格の持ち主であることは、彼女の学生時代からの履歴で十分に察せられることである) によるものでもあろうが、なによりも直接的な原因は、木部という若い青年に対する<性>の芽生えという一人の少女の運命的な出来事があったからだと思われる。つまり、男女の運命的な出会いとそれと自然的に付きまとう「女の本能」へ自覚がそこにあったわけである。このようにして、二人の「恋」の饗宴は、まるで油に火をつけたように炎々と燃え始まったのである。

しかし、二人の「恋」の饗宴は、祝福をうけることもなく、二人だけの「恋」の饗宴になってしまうのである。家族や知人から祝福された目出度い結婚ではなく、二人だけの寂しい首途であった。しかし、それは二人には何のこともなかった。二人のための隠れ家を構え、二人だけの新婚生活、それだけでも二人は十分に幸せであったわけである。今の葉子は例えこの道が辛いいばらの道であっても、木部との「恋」、木部と味わえる「女の本能」それだけで充分であった。そこには家族も知人も入る隙がない、だった二人だけの世界が存在するばかりである。そしてこのように家族や社会と妥協することなく、例えいばらの道であっても、その道を何の躊躇もなく選んだその根元的な原動力は、今更いうまでもない、「女の本能」への芽生えであったことを見逃してはいけない。

「女の本能」、葉子にとってこの「女の本能」への芽生えということの意味は、なにを物語っているのだろうか。恐らく、それは他ではなく<性>への芽生えと置き換えることができるのではないだろうか。葉子は木部との出会いで、今まで経験したこともない新たな<性>への経験とその<性>の歓喜に芽生えたのである。その歓びは母の反対を退けたばかりでなく、「頭」型の冷静な葉子も変えてしまう原動力でもあったわけである。

しかしこのように完璧であるかのように思われた二人の世界は、いざ二人だけの世界を始める瞬間、はかなく終りを告げようとする。今まで経験したこともない歓喜溢れる<性>という新たな世界に出会った葉子は、<性>の歓びだけに芽生えていたのではない。不幸にもその歓びと同時に<性>の裏に潜んである裏面に会いされてしまったのである。まず、次の引用を見てみよう。

日清戦争というものの光も太陽が西に沈むたびごとに減じて行った。それらはそれとしていちばん葉子を失望させたのは同棲後始めて男というものの裏を返して見た事だった。葉子を確実に占領したという意識に裏書きされた木部は、今までおくびにも葉子に見せなかった女々しい弱点を露骨に現わし始めた。後ろから見た木部は葉子には取り所のない平凡な気の弱い精力の足りない男に過ぎなかった。筆一本握る事もせずに朝から晩まで葉子に膠着し、感傷的なくせに恐ろしくわがままで、今日今日の生活にさえ事欠きながら、万事を葉子の肩になげかけてそれが当然な事でもあるような鈍感なお坊ちゃんじみた生活のしかたが葉子の鋭い神経をいらいらさせ出した。始めのうちは葉子もそれを木部の詩人らしい無邪気さからだと思ってみた。そしてせっせせせと世話女房らしく切り回す事に興味をつないで

みた。しかし心の底の恐ろしく物質的な葉子にどうしてこんな辛抱がいつまでも続こうぞ。結婚前までは葉子のほうから迫って見たにも係わらず、崇高と見えるまでに極端な潔癖屋だった彼であったのに、思いもかけぬ貪婪な陋劣な情欲の持ち主で、しかもその欲求を貧弱な体質で表わそうとするのに出喰わすと、葉子は今まで自分でも気がつかずにいた自分を鏡で見せつけられたような不快を感じずにはいられなかった。（2）

少し長い引用になってしまったが、ここの引用は注目しておく必要があると思われる。これは二人が夢見ていたはずの二人だけの新居を構え始めて、間もない内のことであるが、二人の新婚生活についてもう後悔の影がうかがわれる。まず、引用の一番目の傍線は、葉子にとって今まで夢にも知らなかった世界であったことがやっと分かったということ物語っている。木部に対する過去の華やかな輝きは「西に沈」んだように薄れると、それと同時にもう一つの別な木部が葉子に見え始めたのである。それは葉子にとっては想像もしたことがない全く違う別な木部の「裏」の面が自分の考えを裏切るように迫ってきたことを意味するのではないだろうか。それは、<性>というものの本当の姿への芽生えを通して、男という実体が分かるようになったということでもある。

すると、ここで言う葉子がやっと分かった木部の実体とは一体何であろうか。否、木部と言うより、男そのものの実体であるかも知れない。いずれにせよ、葉子が気付いたその実体とは、いったい何だったのだろうか。

結婚する前に人々から讃えられた英雄としての木部の面影は薄れ、今はただの平凡で弱すぎる程無気力な男に過ぎない。そればかりではなく、今までおくびにも出さなかった坊ちゃんてわがままな態度を見せ始める。それに、「極端な潔癖屋」であると思ったが、それが「貪婪な陋劣な情欲の持ち主」にすぎなかったこと。それから、なによりも「貧弱な体質」の木部の姿が徐々に葉子の目から見え始まったのである。先の引用では、大体このような思いもかけなかった葉子の不満が述べられている。

これを見る限りでは、葉子不満は一見して一般的に男女のあいだにありがちな出来事であるようにも見えなくもない。即ち、結婚の前は二人の間はこれ以上ない理想的な間柄であることへの確信を持っている。しかしそれが結婚した後、徐々にその理想がまるでバブルが弾けるようにあともなく消え去ろうとすることがよくある。恐らく、葉子と木部の間もこのような一般的なプロセスによく似ているかも知れない。しかし先の引用を含めて、作品の前後を丹念に読み替えてみると、男女の一般的な不満だけを物語っているのでは決していないような気がする。どちらかという、先の引用の内容は、葉子不満と言うよりも、ある種の不安を抱いていたように思われるのである。そのように思う理由は、他ではなく次の二番目の傍線の部分である「葉子は今まで自分でも気がつかずにいた自分を鏡で見せつけられたような不快を感じずにはいられなかった」と思っていたように、葉子は木部を見ていたのではなく、木部という「鏡」を通して自分自身を見ていたからである。

木部という「鏡」を通して自分自身を見ていた、これは一体何を意味するのだろうか。木部の何が「自分を鏡で見せつけられた」というのだろうか。そして、それが一体いかなることで「不快を感じたのだろうか。それより、木部という存在がどうして葉子の「鏡」になるのか。葉子の目に木部が「鏡」に映されるような二人の間の特別な関係があるのだろうか。なければ、そもそもここで言う「鏡」そのものの意味は、一体何であるのか。これらの疑問を明らかにするため、さらに論を進めてみよう。

葉子が木部に対して何よりも「不快を感じていたことは、以前の輝きが薄れると共に、おとずれた無気力な男の姿もあろうが、なによりも引用で言う「貪婪な陋劣な情欲の持ち主」として映られた木部の醜い欲情であっただろう。このような醜い欲情に満ちた木部の姿は、結婚前には思いもなかったことだけに、その驚きや「不快」感は一層大きかったに違いない。しかし、厳密に考え直してみると、何よりも最も葉子に衝撃をあたえたのは、木部の「貪婪な陋劣な情欲の持ち主」としての姿はいまでもなかろうが、それよりも木部のいわゆる「偽善」に満ちた行動に、より根元的な原因があるようである。つまり、初めは「崇高と見えるまでに極端な潔癖屋」だと思っていた木部がそれとは裏腹に「貪婪な陋劣な情欲の持ち主」として見られたこと。これは木部の「英雄」として人々から讃えられた時の第一印象と結婚後の木部像との間の格差が大きいだけに、葉子が受けていた衝撃はより一層強かったであろう。今は結婚前の木部の姿は、影もなく薄れ、ただ、欲情に浸された醜い木部でしか葉子には映っていない。

しかし、葉子はこのような木部の姿を、木部その自身の問題としてみていたのではなかったのである。誰よりも自意識の強い葉子は、このようなある意味で非常に偽善的とも言える木部の行動に、自分をダブらせ、自分を省みていたと思われる。つまり、「鏡」にしていたのである。ここで言う「鏡」ということの意味は、木部に見られる「性」の問題や「偽善」の問題が、木部その人の問題ではなく、ごく一般の問題であることの意味としての「鏡」ではなかつたのだろうか。即ち、葉子は木部ではなく、人間そのものがいかに醜い「性」という問題を抱えているか、そしてその醜い「性」のために人間の「偽善」性が現れるということを感じ取るに至るのである。これが葉子にはまた受け入れられなかった。そのような気持ちがやはり木部とのこれ以上の結婚生活を続ける原動力を失わせてしまったのであろう。とうとう木部と葉子の結婚生活は、あっという間に終りを告げたのである。

以上が木部と葉子の出会いと、そして別れである。このような木部との出会いと別れが葉子に残したのはなんであつたのだろうか。まず、子持の離婚した女という社会的に痛い勲章を貰ったことが考えられる。それから、親の反対にも関わらず、我を張って一步も譲らなかつたことが間違つた結果になつたこと。木部に対する失望、結婚ということの実体、などなど様々な後悔に苛まれていたであろう。いずれにせよ、葉子はこれ以上結婚生活を続けることができず、木部と別れてしまうのである。

#### IV. 「本能」もしくは<性>への芽生え

木部との結婚、そして離婚が葉子に残したものは、何であったのか。それは、まず考えられることは前章でも調べてみたことであるが、思いもなかった色々な痛い経験をしたことであろう。が、それよりも最も注目しておくべきことは、葉子の<性>への芽生えではなかったのではないと思われる。ここで言う<性>への芽生えということの意味は、一般的に言われる一人の少女が<性>に芽生えたという、ある種の成長物語りのようなことを意味するのでは決してない。それよりもここで言う葉子の<性>の芽生えとは、ごく一般的に考えられるセクシュアルな面の<性>と、木部との結婚生活を通して経験したつまり葉子に「貪婪な陋劣な情欲の持ち主」として映された木部の<性>への欲求、即ち<性>そのものの裏に潜んである醜い面をも含めた<性>の両面に芽生えたというような意味である。

そしてこの<性>の芽生えだけではなく、もうひとつ見逃しては、いけない重要なことがある。それは他のことではなく、前にも言及したが、<性>の醜い欲求を裏に隠す<偽善>たる木部。そしてそれを見た葉子は木部ではなく、まるで「鏡」に映る自分をみたように、人間のいわゆる<偽善>という側面を葉子は木部との結婚生活を通して、見てしまったと言うことであろう。このような筆者の推論を検証するために、ここで、もう一度、木部という人物について振り返って見る必要があると思われる。

もう既に言及したことであるが、木部という人物は、だれが見ても優れた、そして「天才風」の綺麗な外貌の持ち主であった。そればかりではなく、当時の日本社会で「破天荒」という凄い勢いで、人々から人気を一身に受けていた人物でもあった。葉子も勿論、このような華々しい木部に関心を注いでいたことは、いまさら言うまでもないことである。木部という人物は、どちらかという前途が囑望される「崇高と見えるまでに極端な潔癖屋」の人柄の人物であった。つまり、木部は誰が見ても秀麗な外貌で申し分のない人格の人かのように思われたはずであろう。やはり、葉子もそのような人並みはずれの優れた相手とと思っていたし、そうだと思っていたからこそ、母の反対にも関わらず、我を通して結婚までしたのではなかったのか。

執拗にまでの母の反対にも負けず、自分の確信を信じ、木部と結婚はしたものの、「崇高と見えるまでに極端な潔癖屋」であると思っていた人がいざ結婚してからはからっと別人のように変わってしまうのである。葉子は殆んど無能力なこと、「情欲」を丸出しにすること、葉子を驚かせるばかりでなく、失望させる幼稚的な行動などを身近で経験してしまったのである。思いもがけなかった木部のこのような行動に、葉子は驚きや「不満と失望」に浸され、どうしていいか「いらいら」するばかり、途方に暮れてしまうのである。

葉子は思いもなかった衝撃的な出来事に出会わされてしまう。結婚以前の「英雄」たる面影や秀麗な外貌とはうらはらに、「情欲」をまんまと丸出しにする木部。そのような木部の姿は、他の人は知らないことではあろうが、特に葉子にだけは<偽善>たる木部に過ぎなかったはずであろう。そしてその木部の<性>的な醜い様態を身近で見てしまった葉子

は、ある種の驚きと失望で、めまいがするほど戸惑っていたことは、容易に察せられることであろう。勿論、木部の「情欲」に満ちた＜性＞的な醜い様態は、結婚の前は思いもしなかったことだけに、驚きと衝撃を葉子にあたえるに十分であった。しかし、最も葉子を当惑させたのは、木部の＜性＞的な醜い様態ではなかったと思われる。それよりも最も根本的な問題がそこにはあったのではないだろうか。

それについて検討を進める前に、ひとまず、前章で挙げられた引用に再び注目しておく必要がある。特に、先の引用の二番目の傍線のところであるが、これは注目に値する非常に重要な一節であると思われる。それは、木部の＜性＞的な醜い様態を経験した葉子が独り言のようにつぶやく一節であった。そこで、葉子は「今まで自分でも気がつかずにいた自分を鏡で見せつけられたような不快」感を覚えたことを驚き半分の気持で述べられている。この葉子の独り言の意味は、一体何を意味するのだろうか。恐らく、それは葉子が木部の＜性＞的な醜い様態を通して、まるで木部の姿が木部だけの問題ではなく、もしかすると、自分にも内在している問題かも知れないという、＜性＞そのものの本質的な問題に芽生えたことを意味するのではないだろうか。つまり、この引用の一節が物語っていたのは、葉子の驚きや衝撃もしくはある不安感ということの、より根本的な原因が木部その人の行動にあったのではなく、今まで葉子の気づいていなかった＜性＞そのものの醜さがやっと見え始めてきたということである。これが葉子を衝撃に追い詰めた根元的な原因であったと思われるのである。

もう一つの原因として、見逃がしてはいけないことは、＜偽善＞という問題である。つまり、人々から知られていた木部の外貌と人々は夢にも知らない木部のもう一つの裏面。ここで言う木部の裏面というのは、他ではなく「情欲」に満ちた全く違うもう一つの姿が相両立するという＜偽善＞の問題がそれである。人々から見られている木部の外貌と人々は知られざる＜性＞の醜い様態という全く異なる表裏なる木部の行動から露呈された、そしてそれが象徴する人間の＜偽善＞的な一面を目の当たりにしてしまった葉子は、やはり我慢が出来なくなってしまったのであろう。

葉子は木部を通して経験した＜性＞そのものの醜さであれ＜偽善＞であれ、「自分でも気がつかずにいた自分を鏡で見せつけられた」と葉子自身が言っているように、それらは木部の問題に止まっていたのではなく、もしかすると葉子自身の問題ではないだろうかという恐れが芽生え始めていたと思われる。今まで知らなかった自分に内在されているはずの＜性＞と＜偽善＞の問題が木部と同じように自分も繰り返すのではないだろうか、否それよりも葉子自身にも既に内在されている問題で、それを受け入れる心の準備が出来ていなかったのではなかったのではないだろうか。葉子の驚き、葉子の「不満と失望」、葉子の不安は、恐らくそこにあったと思われる。

葉子はこのような不安に苛まれ、居ても立っても居られなくなり、＜性＞と＜偽善＞の悩みから逃れるためにも木部と別れることを決心したのであった。このようにして短かった二人の結婚生活は、はかなく終りを告げるのである。しかし、葉子は木部と別れることで、＜性＞と

<偽善>の問題から逃れることができたのだろうか。この<性>と<偽善>の問題が木部その人だけの問題であったならば、そこから逃れることも不可能なことでもないはずである。だが、前にも言及したが、葉子が「自分を鏡で見せつけられた」と言ったように、<性>と<偽善>が木部を通して芽生えたとは言え、すでに自分の内面に内在していたものではなかったのかという認識がおぼろげながら葉子にはあったと思われる。つまりこの<性>と<偽善>の問題は、木部の問題でもあったが、それと同時に葉子自身の問題でもあるという認識が徐々に芽生え始めていたのであった。周知の通り、勿論この問題は二人だけではなく、人間そのもののごく一般的な問題であるかも知れない。いずれにせよ、葉子は木部と別れたからといって、きれいさっぱりこの<性>と<偽善>の問題と立ちきることは出来なかったはずであろう。

とにかく、葉子は人間の<性>の醜さやその醜いところを隠すための<偽善>という人間そのものの醜面に、否それよりも自分の内面に内在されていることに木部という登場人物を通して、始めて気づいてしまったことは、確かである。つまり、木部という登場人物との出会いがいかなる影響を葉子にもたらしたのかを考える際、以上の論述をふまえた上で言い得ることは、<性>そのものと木部の結婚前後の全く相反する両面が象徴する<偽善>についての芽生えであったと言えることが出来よう。

まるで、創世記に出てくる善悪果を味わってしまったイブのように、木部を通して人間の<性>と<偽善>に始めて芽生えてしまった葉子は、木部と別れたからといって、木部と出会った以前の才気煥発な少女の葉子には、もう戻れることは出来ないのである。もう19才の若い少女ではなく、子持の離婚女であり、以前の<性>に対して純粋に思っていた少女ではもうなく、人間の内在されている醜い<性>を味わった女に変わっていたのである。登場人物の木部は葉子に、このように新たな世界へ導いた作品上の重要人物の役を担っていたのであった。

人間の醜い<性>と<偽善>を味わってしまった葉子の前途に待ち構えていたのは、何であろうか。『或る女』という作品は、ある意味ではこのように人間の醜い<性>と<偽善>を味わってしまった葉子が自分の前に置かれている、どの道を選択するのかという二者択一の物語でもあったと思われる。もう少し説明を加えておくと、葉子のアメリカ行きは婚約者の木村に会いに行く道であった。しかし、アメリカ行きの船の中で出会った運命の人の倉知と愛に落ち、葉子に選択を強いられることになる。木村か倉知か。結局、葉子は婚約者の木村ではなく、倉知を選択することになる。『或る女』という作品の一番の要に当たる倉知への選択が葉子を結局に不幸に導く一つの原因であったことを思えば、なぜ葉子はその不幸になるにも関わらず、倉知を選んだのかという疑問に対する答えは、既に木部との出会いにその原因があったと言えよう。つまり、葉子は未来の不幸への道进行を恐れることなく倉知を選んだことは、今まで考察したように木部との結婚生活の経験を通して始めてめばえた<性>と<偽善>を味わってしまった葉子であるからこそ可能であったと思われるのである。

## V. 結論

本論では、今まではあまり注目していなかった木部という人物について注目をしながら論じてみた。今まで注目されなかったのは作品でそれほど重要な人物とっていなかったからであろう。しかし本論で考察してみたように、木部は葉子にとってただの痛い過去歴を与える役を担う単純な登場人物ではなかったのである。しかも、主人公の葉子に多大な影響を及ぼし、一代変貌を与えるほど、木部は『或る女』という作品において欠かせない重要な人物であることは今までの本論での検証から判断すると、間違いないような気がする。

特に葉子像の形成過程において、大きな影響を及ぼしていたことは疑いをいれない。葉子の短かった木部との結婚生活を通して希望と失望、浪漫と現実、表と裏、というような世界を味わっていたのであった。その中でも特に<性>と<偽善>への芽生えは、葉子を別人に変えてしまった最も注目すべきことであつたことを本論を通して明らかにされたことであろう。

木村ではなく、倉知を選択することが破滅に向かうことであるのを自分でも感じていたはずの葉子がどうして自分の破滅の道であることを知りながら、敢えてその道を選んでしまったのだろうか。言うまでもなく、葉子自身も容易い選択ではなかったはずであろう。しかし結局木村ではなく、倉知を選んだ葉子の選択は、要するに決して偶然な選択ではなかったのである。このような葉子の選択には、今まで論じてきた木部との短かった結婚生活を通して芽生えた、即ち<性>と<偽善>への芽生えが大きく作用されていたことを本論を通して既に考察したことである。このように葉子と木部との出会いは『或る女』という作品において、一つの方向性、つまり葉子のこれからの行歩を予言する一つの機能を担っていたと言い換えることもできよう。

## 【参考文献】

- ※この論文のテキストとして使用していたのは、『或る女』（新潮文庫、1998年5月）を使用した。
- 政宗白鳥(1927)「有島武郎『或る女』」、「読売新聞」
- 本多秋五(1954)『「白樺」派の文学』講談社
- 奥野健男(1959)「有島武郎『或る女』の早月葉子」『国文学』
- 青山孝行(1961)「葉子の中のエリス—『或る女』の明晰な位置づけのために—」『国語と国文学』38-9
- 笹淵友一(1964)「『或る女』の主題—有島武郎研究—」『東京女子大学付属比較研究紀要』17
- 山田昭夫(1966)『有島武郎』明治書院
- 本多秋五(1967)「私小説にみた『或る女』」中央公論社版『日本の文学』の『有島武郎・長与善郎』の解説
- 安川定男(1967)『有島武郎論』明治書院
- 上杉省和(1985)『有島武郎一人とその小説の世界—』明治書院
- 増子正一(1994)『有島武郎研究』

要 旨

---

I discussed it while paying attention about a person called Kibe whom I did not pay attention to very much by the main subject so far. What did not attract attention will be because I did not think it to be such an important person with a work so far. However, Kibe was not the simple character who carried just the position who gave a career in the past who hurt for Yoko as considered by the main subject. Besides, as for Kibe, judging from the inspection by the conventional main subject, it feels like having to be it in the work called "a certain woman" to be an indispensable important person so as it has a great influence on Yoko of the chief character, and to give a change in a lifetime.

In the formation process of the Yoko image, the big thing that I had an influence on does not turn in particular on doubt. If hope and disappointment, a wave were abusive, I tasted reality, a list and the back and the world where it was said through a married life with short Kibe of Yoko. The sprouting to particularly <-related> and <hypocrisy> will be that it was clarified that it was the most notable thing that I have changed Yoko into another person through the main subject in that.

キーワード：偽善、性、女の本能、頭、心、登場人物

투 고 : 2011. 8. 31  
1차 심사 : 2011. 9. 10  
2차 심사 : 2011. 10. 1



# 재일코리안 고령자의 사회보장에 관한 연구

-민생(방면)위원제도를 중심으로-

조 문 기 \*

(e-mail: kito2@hanmail.net)

---

## 目 次

---

I. 서론

II. 본론

1. 식민지시대의 사회사업과 방면위원제도

2. 해방전 일본의 방면위원제도

3. 민생위원제도와 재일코리안 고령자

III. 결론

---

## 1. 서론

재일코리안<sup>1)</sup>의 도항(渡航)<sup>2)</sup>에 관한 연구는 한일양국의 식민사 연구자들의 연구로 구체화 되어왔다. 재일코리안의 도항이 빈번하던 식민지 시대의 사회적 배경은 만성적인 토지경작지 부족, 몰락농민을 흡수 할 만 한 노동시장의 부재, 한반도와 가까운 입지조건, 고임금의 일본노동시장, 저임금의 조선노동자의 유입 등으로 연구되었다 (최영호, 2008).

---

\* 조문기(特別養護老人ホーム 故郷の家、韓國語相談員、介護支援専門員、桃山學院大學 博士後期課程)

- 1) 재일코리안:식민지시대를 전후 일본에 살면서 현재는 조선 또는 한국국적을 가지고 일본에 재류하는 사람들을 칭한다. 1980년말 냉전체제가 붕괴되고 본격적으로 사용되어진 용어이며 필자 또한 서용달(2005),박용구(2010)의 재일코리안 연구의 맥락을 기본으로 용어사용에 있어서 재일코리안 아이덴티의 중요성을 강조하여 재일코리안으로 통합 사용하였다.
- 2) 도항(渡航): 넓은 의미로 사용. 정용, 정병, 생계형, 자유형 도항을 포함한 의미로 사용하였음.

일제에 의해 사회사업이 도입 된 1929년으로 부터 해방까지 약 950,308명이 일본으로 도항하였다. 이러한 도항의 사회적 현상은 100년 역사를 가진 재일코리안의 자화상이다.

최근의 재일코리안은 한국의 경제성장 활발한 한일 민간외교 의해 인권의 많은 변화를 가져왔다. 1965년에 타결된 법적지위협정(法的地位協定)에 의해 영주권 문제는 완화 되어 왔으며 1991년 한일교환 각서의 체결로 재일코리안 가족의 영주권 문제도 안정되었다. 또한 외국인등록증에 대한 후대의 제도가 탈력적으로 운영 되었다(김철주, 2001). 더불어 하토야마(鳩山)내각의 집권으로 일본역사상 처음으로 재일코리안 영주권자에 대한 참정권 부여문제가 거론 되었으나 입법화 되지는 못하였다. 또한 칸내각(菅)의 각료였던 전외무상 마에하라(前原)는 재일코리안의 정치적 후원금을 받아 결국 사임하는 사태에 이르렀다.

또한 일본의 극우파 재일특권을 용서하지 않는 시민회(在日特權を許さない市民の會, 이하, 재특회)는 재일코리안의 사회보장의 일부가 특권이라면 철폐를 외치고 있으며 한류붐을 경계하면서 후지텔레비전 방송국에 한류드라마 방송을 중지 할 것을 요구하는 시위 등으로 재일코리안 인권단체의 운동을 탄압하고 있다. 이러한 극우파는 식민지시대의 강제연행, 특별영주자격, 생활보호제도, 민족학교, 외국인참정권, 연금제도를 모두 부정하여 그들만의 논쟁으로 역설하고 있다. 또한 일본 내의 회원을 약 8,000명 보유하고 있으며 최근에는 교토의 조선학교(민족학교)의 토지문제를 거론하며 학교 행사를 방해하는 데모로 초등학교생들의 동심을 그들만의 이데올로기로 짓밟아 언론의 주목을 받기도 하였다.

본 연구는 일본의 이러한 사회적 배경 속에서 재일코리안의 도항시기에 거쳐 실시되어진 방면위원제도 전반에 대한 문제인식과 그들이 노후생활을 영위하는데 있어서 필수 불가결한 사회보장제도의 일부인 민생위원제도의 문제점을 파악하고 개선하는 데 목적을 두고 있다.

먼저 일본에서의 재일코리안의 사회보장에 대한 선행연구를 시기별로 살펴보면 다음과 같다.

요시오카마스오(吉岡増推)는 1970년~1980년대 재일외국인의 차별과 인권침해에 대해 일본인으로 참여 한 연구자로서 재일코리안의 사회보장입문 등의 변천과정을 연구하였다. 1980년대 초 재일코리안의 사회보장문제는 거품경제를 달리고 있는 일본사회에 경종을 울리며 외국인에 대한 인권문제의 실태를 알리는 역할을 하였다. 1989년에는 재일코리안 인권운동가들은 단일민족주의에 편협한 일본사회에 다민족사회로의 이행을 역설하였다. 일본형 인권은 자국의 국적 획득을 전제로 하고 있어 지금도 많은 논쟁이 되고 있다. 이러한 요시오카의 연구는 재일코리안 뿐만 아닌 재일외국인에 대한 시야를 넓혀 가고 있었다. 이러한 연구는 현재 일본의 크고 작은 인권단체들이 재일코리안 중심의 운

동에서 모든 외국인의 인권문제로 확대 변화 시키고 있다.

심지어 교토의 노인주간보호센터「엘화」에서는 재일중국인고령자의 개호문제에 대한 연구와 실천방안을 주제로 중국인 고령자문제를 다루고 있다. 또한 교베의「KFC」에서는 재일코리안 고령자의 주간보호센터「하나」를 운영함과 동시에 재일필리핀, 베트남 등의 외국인을 상대로 일본어 교실과 법률상담 등의 여러 가지 서비스를 제공하고 있다.

또한 요시오카마스오(吉岡増推)연구는 일본의 연구자에 의해 그 맥을 잇게 되어 쇼야레이코(庄谷怜子), 나카야마도우르(中山徹)에 의해 오사카중심의 재일코리안의 생활구조와 고령자 문제를 다루게 되었다. 크게는 사회보장 전반에 걸친 무연금자의 문제에서 작게는 고령화를 맞이한 재일코리안의 개호(부양)문제에 대한 연구로 진행되었다. 특히 나카야마 등의 연구는 개호보험이 시작되기 전 그 실태조사를 기본으로 한 재일코리안 고령자의 복지실태를 파악 하였다. 그들의 연구에서는 사회보장의 제반적 문제를 다루고 있으며 재일코리안 고령자의 노후 문제의 리스크를 밝혀내었지만 개선대안은 부족하였다(2004, 二階堂).

그 후 현재에 이르기까지 일본 각지의 지역에서 재일코리안 고령자의 실태 조사가 이루어졌다. 대표적으로는 2005년도 NPO법인(KFC)의 코베 나가타구(長田區)를 중심으로 한 조사와 2007년 셴슈(泉州)지역에서 재일코리안 고령자의 복지실태에 대한 조사가 있었다. 또한 2010년 오사카시 니시나리구(西成區)에서도 재일코리안의 복지실태 및 생활주거환경에 대한 조사가 이루어 졌다. 이러한 조사는 저자도 참여하여 「재일코리안 고령자의 개호문제」<sup>3)</sup>대한 논문을 발표, 재일코리안 고령자의 개호(Care)문제를 연구하는 기초연구 자료로 삼고 있다. 결과적으로 재일코리안의 사회보장에 대한 연구는 현재도 진행 중에 있으며 복지현장에서도 그 중요성을 인식한 연구논문들이 등장 하고 있다. 물론 재일코리안의 대다수는 실업보험, 재해보상보험, 의료보험, 연금보험 등의 사회보험에 적용되며 가족수당, 공적부조, 사회복지의 일정 혜택을 받을 수는 있다. 하지만 재일코리안 1세 고령자의 대다수는 무연금자로 사회보장과는 거리가 먼 생을 살아 왔으며 타국에서 그 생을 마감 하고 있다.

이런 현실을 직시하면서 재일코리안의 사회보장에 대한 연구 중에서 식민지 시대의 일본도항과 정세가 맞물려 그들이 재일코리안으로 정착하는 과정을 함께한 방면위원<sup>4)</sup>(민생위원)제도에 대한 연구에 초점을 두고 있다.

본 연구 이러한 도항 초기의 식민지의 현실성을 반영하고 있는 사회사업의 근간 모델인 방면위원제도를 통해 한국사회보장의 초기현상과 당시 재일코리

3) 모모야마학원대학사회학논집 제 43권 에 발표(桃山學院大學社會學論集第43卷)

4) 방면위원제도는 식민지시대 실시되어 1946년에 민생위원으로 개칭되어 지금 까지 일본에 현존하고 있는 제도.

안들이 대한해협을 건널 수밖에 없던 사회문제를 사회학적 관점에서 서술하면서 식민지 시대의 사회사업 현실을 통해 도항의 증가현상과 재일코리안의 인과관계를 파악하기 위한 연구이다.

또한 서술 논점은 해방 전 일본에서도 시행된 방면위원제로 그 맥을 이어 서술하였다. 해방 전 관동대지진(1923년)의 수난사를 거쳐 차별과 편견 속에서 정착하는 과정 그리고 강제연행, 징용, 징병 등에 의한 해방 전의 시대적 사건을 배경으로 한 재일코리안과 민생위원의 원조관계를 검토하였다.

마지막으로 방면위원제도는 1946년 민생위원령 공포로 개칭되어 현행 민생위원으로 제도의 존속을 이어왔다. 이러한 현실 속에서 사회보장에서 배제된 재일코리안 1세는 고령화를 맞이하여 노후대책이 없이 지역사회 속에서 고립화 되어 왔다. 저자는 일본의 오사카부 센슈(泉州, 2007) 오사카시 니시나리(西成區, 2010)지역에서 실시된 재일코리안 고령자의 실태 조사를 통해 지역사회에서 주민으로 살고 있는 재일코리안과 민생위원의 원조관계를 고찰하였다.

## II. 본 론

### 1. 식민지시대의 사회사업과 방면위원제도

사회사업의 근대화를 논하기 전에 근대화의 광의적 개념을 정리하면 근대화는 현대사회를 일괄하는 것으로 근대화의 과정으로써 정치, 경제, 사회생활, 문화 모든 영역에 있어 선단적인 경향을 표출함을 말한다(宮本, 2009). 협의적 개념으로는 민주화, 자유화, 국민국가, 국제사회형성, 핵가족화, 도시화, 조직사회화, 탈종교화, 문화의 대중화를 들 수 있다. 이러한 의미에서의 식민지시대의 사회사업의 근대화이론은 많은 논쟁을 일으키고 있다.

실제로 많은 연구가 들은 한국의 사회사업의 기점을 19세기 후반의 카톨릭 교회의 실천 활동으로 보는 견해와 식민지시기, 미군정기, 한국전쟁기 등으로 명확한 근거와 배경이 없이 시사 하고 있다(박정란, 2007).

조선왕조가 근대화의 물결에 휩싸여 봉건사회가 무너지면서 변화를 시도 하는 시점에서 일본의 침입으로 식민지시대를 맞게 되었다. 일제는 사회적 자원 획득을 목적으로 여러 채찍과 당근정책으로 불리어 지는 문단정치(1910년대), 문화정치(1920년대), 황국식민화(1930년대)를 거치게 되었다.

1910년 한일합방의 당위성을 주장하면서 일제황실의 은사금(恩賜金)은 형식적인 자선 행위로 실제로는 구지배층을 붕괴시키기 위한 수단으로 사용 되었다.

구제(救濟)는 원금의 이자로 실시되었다. 은사금의 대상자를 분리 해 보면 귀족 및 한일합방의 공로자(3,638명), 양반유생(3,150명), 효자절부(3,209명), 지방유생의 직업훈련, 교육 등에 배분되었다. 실제로 구제기금으로 사용된 명목은 일반 빈민구제기금, 한센병원자금, 정신병자 구호자금 등이 있었으며 이러한 사업은 은사금의 이자로 이루어졌다. 정리하자면 이러한 사업은 조선의 지배층을 안정시키기 위한 민심안정 자금으로 순수한 구제 목적의 사회사업이라고는 결론 내리기 어렵다. 또한 이러한 은사금은 매국문권(賣國文券)이라고도 불릴 만큼 민심의 불만을 사기도 하였으며 그 후 식민지의 경제적 변화에 의해 그 가치가 없는 한 장의 증권에 불과 하였다.

무단정치의 반발은 결국 민중의 독립운동으로 이어져 일본은 식민지에 대한 정책의 변화가 불가피한 시기로 접어든다. 이러한 변화는 일본의 정내회(町内會)를 모방한 정동회(町洞會)를 수도권지역에 설치하고 주민공동체를 하부 행정기관으로 삼아 식민당국의 협조와 이해를 주입해 왔다. 이러한 연대의식을 바탕으로 한 정동회(町洞會)는 주민의 감시, 친목융합, 생활개선 등으로 운영되었으며 식민지의 지배를 위한 교화사업(敎化事業)의 밑바탕이 되었다. 이 과정에서 저자가 주목하는 민생위원제도의 전신인 방면위원제도(方面委員制度)가 실시 전개되었으며 전개과정을 통해 재일코리안의 도항시기의 식민지의 사회성을 살펴보기로 한다.

식민지시대의 민중의 빈곤은 단순한 빈곤 문제만이 아니었다. 일본에서 방면위원이 설치된 계기는 1918년 사회적 혼란을 초래한 쌀소동<sup>5)</sup>이 계기가 되어 오사카에 설치되었다. 이러한 빈민에 대한 사회적 운동은 식민지의 민중 봉기를 일으킬 원인으로 파악 되었다. 이러한 상황에 식민지의 빈곤문제는 통치불능 사태에 이르고 있었다. 조선사회사업회의 간사 카미우치히코사쿠(上内彦策)는 대다수 민중의 극심한 빈곤을 해결하기 위해 조선에서의 교화사업의 필요성을 역설하였다<sup>6)</sup>. 실제로 1920년대부터 급속히 빈민화 된 민중은 토막민(土幕民)<sup>7)</sup>, 세궁민(細窮民)<sup>8)</sup> 등으로 불리어 지면서 서울(경성)의 경우 1935년도에는 세궁민조선인(22,496명)과 세궁민일본인 186명이 존재하였다. 빈곤에 대한

5) 쌀소동: 1918년 일본의 토야마현에서 쌀유출 관계 일어난 민중봉기, 그 후 일본 전역으로 확산 되어 민생위원제도를 만드는 계기가 되기도 하였다.

6) 카미우치 히코사쿠(上内彦策) 조선사회사업 1930년 12월호 9면.

7) 토막민: 조선인 빈궁계급으로 시내나 시외를 불문하고 제방, 강바닥, 다리밑, 산림, 관유지, 사유지를 무단으로 점거하고 초라한 움막을 짓고 살아가는 빈민. 비참과 혼잡, 불결을 특색으로 부락을 이르기 까지 한다.

8) 당시 궁민(窮民)은 빈곤, 질병 등으로 사회적 지원을 받은 자로 자립생활 불능 등의 독거 생활을 하는 사람을 말하며 1종 카드계급으로 구별. 세민(細民)은 자립이 가능하나 생활이 궁핍한자를 2종 카드계급으로 분리했다. 이 둘을 합하여 세궁민이라고 일컬음.

문제는 식민지의 민중뿐만 아니라 일본인도 포함되어 있었다. 또한 주택의 부족문제는 경성일보에 의해 보도 된 바로는 1933년 조선인(15.15%), 일본인(2.74%)으로 조선인의 주택난이 심각했음을 보여주고 있다. 이러한 사회적 문제는 토지조사를 통한 농민의 몰락과 삶의 기반을 잃은 농민의 빈민화가 확산된 결과였다.

<표-1> 식민지시대의 빈민수 (단위:명)

주요 도항지	세민(細民)		궁민(窮民)		비율(100%)		부랑인 총수
	세대수	인구	세대수	인구	세대	인구	
전라도	82,183	362,612	17,517	69,582	29.1	25.4	2500여명
경상도	77,783	340,708	17,675	64,733	22.7	18.6	4,300여명
경기도	43,249	196,844	6,663	28,200	12.8	1.1	900여명
강원도	37,453	164,180	6,395	28,070	16.5	14.4	800여명

출처: 「조선사회사업」 제6권 제5호 1928년, 인용

위와 같이 제일코리안의 도항은 입지 조건이 유리한 전라도, 경상, 경기도를 살펴보면 역시 슬럼가(토막)의 형성으로 빈농, 화전, 토막민의 증가는 전라도, 경상도에서 높은 수로 나타났다. 다만 이 자료는 제일코리안의 출신자의 상당수를 차지하는 제주도(15.81%)<sup>9)</sup>의 현황은 기록되어 있지 않다.

이러한 1920년대의 「조선토지사업」, 「산미증산계획」의 사회적 배경에 의해 일본으로 도항 하는 촉매제의 역할을 하게 되었다. 일본의 통치 정책도 조선에서 사회사업으로 전환점을 맞이하여 방면위원제도와 같은 사회사업이 전개되었다. 식민지시대의 조선에 있어서 사회사업의 전개는 1921년 「조선사회사업연구회」의 출발로 1929년에는 「조선사회사업협회」가 발족 되었다.

이러한 초기의 목적은 민중의 사회복지증진을 표면화 하였으며 방면위원, 사회교화, 아동보호, 실업자구제, 세민생활안정, 세민구제 등을 목적으로 활동 하였으며 서민을 위한 진료소설치 등과 같은 역할을 하여 적십자는 조선본부병원을 개설하기도 하였다. 이러한 연구회의 조사연구는 오늘날의 일제시대의 사회복지를 연구하는데 중요한 자료로 쓰이고 있는 「조선사회사업」이라는 잡지가 발간되었다.

전국적인 잡지발간을 통해 방면위원의 활동은 구체적으로 보고되었다. 초기의 방면위원제도의 정신은 인보상조(隣保相祖)를 공동체 의식의 함양과 빈곤문제를 사회연대의식(social solidarity)에 의해 해결하고자 하는 사회연대의주

9) 제일코리안 출신지별 자료 경상도(26.65%),강원도, (27.4%),제주도(15.81%),경기도(5.65%) 전라도(3.68%),제일대한민국민단자료<http://www.mindan.org>(2011,7,30)

의 영향이 있었다. 이는 일본이 프랑스의 19세기 연대운동을 새롭게 사회사업에 도입하려는 의도가 있었기 때문이다.

방면위원제도는 독일, 미국, 영국 등의 우호방문사업제도를 유사한 모델로 일본이 도입하게 되었으나 경제적 공황에 따른 민중의 봉기(쌀소동)가 관동대지진을 거치면서 동경과 오사카지역으로 확대 전개되었다. 방면위원의 역할은 최소한의 재정으로 자원봉사에 의한 저항세력의 감시 등의 역할과 민(民)에 의한 관리, 통제를 조장하였다. 방면위원은 임기는 2년으로 무보수의 봉사직이다.

일본의 방면위원 제도는 수동적 사회사업으로 인한 출발이었으나 이후 적극적인 사회사업으로 활발히 전개되어 구호법(1929), 방면위원령(1936)등으로 전개되어 일본 복지제도의 기반인 모자보호법, 국민건강보험, 국민연금보험법 등으로 이어졌다.

식민지에 있어서의 방면위원제도는 1927년에 이루어졌으며 빈민의 구제를 조선의 향약(響約) 등과 같은 전통풍습으로 이해시키려 하였다. 1927년 12월 15일 경성부방면위원규정이 발표되면 제도적 틀을 갖추게 되었다. 조선식민지에 있어서의 방면위원의 역할은 네 가지로 분류된다.

- 첫째, 관계구역의 생활실태조사, 개선, 향상도모(실태조사사업)
- 둘째, 대상자에 대한 생활사정 (방문조사사업)
- 셋째, 사회복지시설 지원(공공사업지원)
- 넷째, 위촉사업 등

방면위원은 물론 조선인으로 채용되었다. 방면위원의 고문(顧問) 역할은 철저하게 일본인으로 구성되었다. 당시, 1927년의 방면위원은 12명으로 서울의 동부지역과 북부지역을 담당하게 되었다. 방면사업은 초기 총독부로 부터 긍정적인 평가를 받아 방면사업을 후원하는 후원단체들이 등장하였으며 방면위원은 1943년대 말까지 1,341명으로 확산되었다. 범위 또한 인천, 개성, 마산, 광주, 신의주, 함흥 등 전국에 배치되어 314개소를 설치하였다.

방문위원의 주요 업무내용은 직업, 생활, 교육, 호적, 분쟁 법률에 관한 사항을 다루게 되었으며 미풍교정사업, 선도사업과 보호구제사업(유소년보호, 독거노인 보호, 피학대자 보호, 고아사업, 행려병인 보호 그리고 정신장애인 보호, 석방자 보호, 한센병자, 모르핀 중독자 보호 등으로 사회사업 전반에 걸친 내용을 주 업무를 다루고 있었다. 또한 연말에는 불용품을 모아 세민들에 나누어 주는 인보상조를 실천하기도 하였다. 1928년부터 1930년까지의 일부 방면위원의 실적을 다음과 같다.

&lt;표-2&gt; 방면위원의 실적(1928년 1930년대) (단위/인원)

사업내용	동부방면			북부방면			합계
	1928	1929	1930	1928	1929	1930	
생활실태조사	1,725	1,750	0	1,075	1,467	0	6,017
상담지도사업	1	26	0	1	15	2	45
보호구제사업	519	753	924	273	486	617	3,572
보건구호사업	18	45	71	33	28	25	220
알선소개사업	20	3	12	14	5	36	90
호적정리사업	1	13	2	3	5	1	25
기 타	2	0	68	1	0	21	92
합 계	2,285	2,590	1,077	1,400	2,006	702	10,601

출처: 愼英弘 「近代朝鮮社會事業史研究 : 京城における方面委員制度の歴史的展開」  
綠蔭書房, 1984.3 53page.

방면위원의 단순 활동인 생활실태조사를 제외하면 보호구제사업은 전체의 8할을 차지한다. 이는 장마와 엄동설한의 이재민을 일시보호 하는 사업과 이탈부랑민에 대해 고향으로 가는 경비를 보조 해 주었다. 빈곤사망자에게는 화장비용을 보조 해 주는 사업으로 활용되었다. 그 다음의 절반에 달하는 주요사업은 보건구호사업으로 당시의 경성국제대학부속병원, 세브란스, 적십자병원 등의 의료권을 빈민 환자에게 제공하는 사업이었다.

하지만 방면위원은 해방을 맞이하여 활동이 정지 되었으며 여러 가지 한계를 드러냈다. 방면위원과 조선인의 원조관계를 살펴보면 그 당시 사회적배경을 추리 할 수 있다.

방면위원의 한계점에 가장문제기 된 것은 세궁민의 현황을 빈곤으로 묶어서 파악하였다. 그러한 원인에 의해 개별적 니드가 무시되는 경우가 많았다. 이는 세궁민을 개별화(individualization) 하여 각각 고유의 특별한 욕구, 열망, 장점과 약점을 가진 개인으로서 대우 받을 권리를 역행하는 사업이었다. 또한 세궁민을 원조하는 과정에서 객관적 판단보다는 우애(友愛) 에 근거한 인간성에 대한 구제활동이 많았음을 여러 근거를 통해 볼 수 있다. 이는 원조관계 중 세궁민에 대한 수용(acceptance), 비심판적 태도(nonjudgemental attitude)의 결여에 의해 세궁민의 독특한 개인적 문화 그리고 개성이 존중 되지 못 하였으며 세궁민의 행동에 대해 중립적 태도를 유지하지 못한 방면위원의 판단에서 비롯되었다.

이러한 문제점은 당시 제도에 있어서의 미성숙 된 사회사업으로 판단 되었지만 일본에 있어서의 방면위원제도와 식민지의 방면위원제도의 운영은 차이가 있었다. 물론 일제정부의 국고지원을 받아 실시 정착된 제도와는 비교 할



수 없는 운영의 차이를 지적 할 수 있다. 마지막으로 그 당시 방면위원의 자격 선별과 인재육성에 대한 지원이 없이 시작 된 식민지의 방면위원제도는 그 실효성이 문제 되었다. 사례관리에 대한 능력의 한계에 대한 문제점이 지적 되었던 것이다. 담당구역의 사례는 100명에서 1000명의 케이스를 담당하게 하는 무모한 정책이었다.

이러한 방면위원의 활동과 더불어 식민지시대의 여러 사회법령이 제정되었으며 사회사업과 관련 된 법령은 다음과 같다.

<표-3> 일제식민지 시대의 조선의 사회법령(1930년대) - 사회사업중심

법 령	년도	법 령
혈 구	1916 1917	은사진혈자금관리규칙, 은사진혈자금빈민구조규정, 군사구호법
이재구조	1914	은사이재민구호령
수난구조	1914	조선수난구호령
행려병인	1917	행려병인 구호자금관리규칙
위생풍습	1916 1918	창부 건강진단실시요령 노동자모집 단속요령
구제보호	1912	실야 <sup>10)</sup>
소년보호	1923	조선감화령

출처:朴貞蘭 『韓國における社會事業の成立と展開に關する研究』 인용.

방면사업은 식민지의 민중에게는 사회안전망(social safety network)이라고 할 수 있었다. 그러나 이러한 사회적 안전망은 전쟁의 총동원과 함께 식민지의 인력약탈과 자원착취를 위한 도구로 활용되기 시작하였다. 이 때 부터 재일코리안은 대거 전쟁지원사업과 전쟁을 위해 동원되어야 했다. 이러한 방면위원사업은 전쟁지원사업으로 전환 되어 공적지원을 받지 못하고 가맹단체들의 각출금과 기부 등으로 행방되기 전 까지 유지 되었다.

결과적으로는 방면사업은 일제 식민지정책에 의해 만들어진 사회사업의 일부였으며 수동적인 사회복지사업의 근대화 거치는 과정 중에 하나였다. 다시 말하자면 방면위원은 사회전반에 걸친 복지분야의 인력으로 사회조사, 정신갱생, 인보상조를 위한 사회사업가로써 빈민구제와 빈민의 이탈을 막는 사회안전

10) 실야:(시찌야)말아둔 물건에 따라 돈을 빌주는 업자, 에도시대의 서민금융기관으로 부터 유래(일종의 전당포를 말함).

망으로 정의 될 수 있다. 이러한 방면위원은 일제의 패전과 더불어 그 역할을 다하지 못하고 빈민들의 농지이탈 및 일본 도항을 저지하지는 못하였다.

현재의 재일코리안 고령자를 재특회의 근거 없는 학설로 단순 도항자로서 취급 되는 것은 실로 유감이다. 재일코리안 고령자는 식민정책에 의해 유입된 「특수성을 가진 도항자」로 구분 되어야 하며 그들의 사회보장을 부정하는 것은 실로 안타까운 일이다. 재특회의 움직임은 재일코리안의 사회보장의 수혜 조건을 일본 국적 취득자에 한 함으로서 인권보호를 받을 수 있는 일본식 인권의 실체가 표면화 된 것이라 할 수 있다. 다시 말하자면 식민지시대의 사회사업의 실체는 당시 사회사업의 확충의 목적이 아닌 식민정책을 위한 인프라 구축에 지나지 않는다.

이런 식민지시대의 사회사업을 등 뒤로 하고 도항한 재일코리안은 또 다시 일본에서의 법적지위 차별의 반복 속에서 고령화를 맞이하게 되었다.

## 2. 해방 전 일본의 방면위원제도

해방전 일본에 있어서의 방면위원제도의 변천은 1916년 5월 열린 지방장관회의에서 당시 오카야마현(岡山縣)지사인 카사이(笠井)지사는 천황으로 부터 현의 빈곤자의 현황을 하문 받았다. 카사이지사는 그 후 빈곤자의 실태를 처음으로 조사 하였으며 극빈자들이 현인구의 10%에 달하는 것을 알게 되었다. 이러한 실태를 파악한 지사는 연구를 통해 독일에서 시행된 구빈위원제도를 참고로 1917년 5월 제세고문 설치 규정을 공포 현행 민생위원제도의 전신을 만들었다<sup>1)</sup>.

이러한 방면위원제도는 당초 빈곤자들의 조사 임무가 주 업무였지만 조사대상자이었던 빈곤자의 구제까지도 업무를 확장 시켜 나갔다. 그 후 일제 강점기에는 주민의 통제 감시기능 까지도 수행 하였다(許光茂, 2000). 방면위원제도의 의의로써는 상시 빈곤자의 조사가 이루어졌다는 점과 구제현장과 밀접한 연계를 통해 빈곤자의 보호구제가 가능하게 되었다는 점이다. 또한 빈곤자의 규정이 사회문제를 이해하는 기본 조사로 사용 되었다는 점을 제도적 의의로 파악 할 수 있다. 이러한 방면위원제도의 기본은 빈곤자를 구제하기 위해 그들을 카드형식의 계급으로 나누어 그 목록(대장)을 기록하고 구분하여 카드계급으로 분류 되지 못하면 보호를 받을 수 없는 제도였다.

이러한 일제 강점기 일본 내의 방면위원제도와 재일코리안은 어떠한 관련이 있는지 그 실태를 파악 해보면 실제적으로 방면위원과 재일코리안의 접촉은 많았던 것으로 알려졌다. 사실 해방 전 일본의 구빈정책은 노동 불능의 빈곤자

11) 『民生委員制度40年史』 (全國社會福祉協議會) 참조

보다는 “Working Poor”, 즉 “일하는 빈민”에 역점을 두고 있었다. 이는 ‘구빈(救貧)’보다도 ‘방빈(防貧)’이 사회·경제적으로 더 효율적이라는 현실적인 판단에서 비롯된 것이었다.

앞에서 서술한 것처럼 식민지의 사회사업의 실패와 태평양 전쟁 등의 영향으로 황폐화 된 식민지의 통치 불능 사태는 급기야 많은 조선인이 일본으로 유입 되는 데 막대한 영향을 미치게 되었다. 이러한 조선인의 대다수는 농가의 부농민이 대다수였으나 일본(內地) 내에서는 일하는 빈민인 2종의 카드계급으로 전략 하였다. 그 당시의 시점으로 보면 재일코리안은 내선융화를 주장하는 일본의 신민(臣民)으로 당연히 보호구제의 대상으로 속하게 되었다.

그러나 재일코리안의 대다수는 일본의 도시하층사회에 유입되어 정착하고 그곳에 침전되는 과정에서 일본 기존의 피차별부락민과 연결되었다. 실제로 재일코리안의 생활수준은 피차별부락민의 생활수준과 비슷하거나 그 이하로 조사 되어졌다.

또한 빈곤자의 보호구제의 실패를 파악하여 보면 피구제자의 비율은 피차별부락민과 비교 해보면 5배의 차이가 있었다(許光茂, 2000). 이러한 차이는 재일코리안의 높은 유동성, 언어의 불통성 등으로 빈곤자 파악에 있어 어려움이 원인으로 파악 되었다. 그러나 이러한 원인을 극복 할 수 있는 사회적 배경은 존재하였다. 높은 유동성에 관계없이 파악되는 케이스도 존재하였으며 실제적으로 언어문제를 해결 할 수 있는 재일코리안의 많은 인재를 존재 하였다. 이러한 인재를 활용, 재일코리안을 방면으로 위촉하는 대책이 있었음에도 불구하고 그러한 대책은 활용 되지 못하였다.

재일코리안에 대한 방면위원제도의 차별은 일본의 6개 대도시 등에서 나타났으며 재일코리안의 유입이 많았던 오사카지역도 별반 다름없었다. 구제대상으로 파악 되었던 카드계급의 평균 월수입면에서는 재일코리안은 전술 한 것처럼 일하는 빈민에 포함되어 인정을 받을 수 있었다. 그러나 실제로 보호구제를 받은 재일코리안은 극히 일부에 속한다. 이는 해방전 일본의 사회보장제도인 방면위원제도에서 재일코리안은 보호구제의 대상에서 배제되었음을 의미한다. 즉 빈민자의 규정에 이중기준을 두었던 결과이다.

이것은 오사카부의 재일코리안에 대한 정책에서도 엿볼 수 있다. 오사카부는 재일코리안에 대한 정책의 논리로 조선의 생활양식과 문화의 탈피와 다른 한편으로는 그것에 대한 수용과 이용을 전제로 하였다. 이러한 이중적인 측면은 방면위원제도에서도 2중 기준으로 작용하게 되었다. 재일코리안에 대한 인식은 일본인과 다른 차원의 별개의 것이었다. 일본인과 생활양식이 다르며 단순하고 그 생활양식은 극도로 하위라고 표현 되었다. 이러한 인식의 차별속에서는 일본인과 같은 동등한 보호구제의 대상자로 파악 될 것은 전무하다. 이러한 이

중기준에 의한 재일코리안은 빈민자 구호제도에서 배제되었으며 해방전 일본 내의 빈민조사에서 대량으로 제외되는 결과를 가져왔다.

방면위원제도에 의한 재일코리안의 차별의 실태는 해방 전부터 계속 진행되어 왔다. 일부지역의 이러한 행정의 실태는 1930년대 중반을 거치면서 행정조직에 의해 전국으로 확산 되었으며 이것은 일본 내의 재일코리안에 대한 정책적 차별의 이중기준을 남기게 되었다.

시대적으로 그 배경을 살펴보면 1920년대부터 1930년대의 내선융화를 조장하는 단체에 의해 시행된 정책은 1919년 조선한반도의 독립운동의 영향으로 무단정치에서 문화정치로 전환되었다. 이러한 정책은 관동대지진으로 재일코리안에 대한 학살이 시행되어 일본인과 재일코리안의 민족적 갈등의 계기를 낳게 되었다. 이러한 정책은 재일코리안에 대한 회유책으로 운영되었다. 특히 행정주도적 정책에 의해 내선융화(內鮮融和)를 주장하며 재일코리안 빈곤자를 염두 보호구제를 위한 가식적인 내용으로 방면위원제도를 운영하였다.

그러나 이러한 정책은 1935년을 전후로 동화(同和)정책으로 전환되면서 행정주도의 내선융화단체의 주도자들도 사회사업에서 대다수 퇴진하게 되었다. 또한 그 동안 실시되었던 가식적인 재일코리안의 구제사업도 동화정책시대에 추진되어진 협화(協和)사업의 정당성을 주장하면서 그간 시행되었던 내선융화사업에 있어서 재일코리안의 구제사업을 오류라고 인정하였다. 또한 동화정책을 추진함에 있어서 재일코리안의 문제는 궁극적으로 일본인으로 동화시키려는 방법을 추진하였다. 결론적으로 내선융화 정책에서 동화정책으로의 이동은 공적인 일본의 행적조직이 재일코리안에 대한 이중기준을 공식적으로 선언 한 결과이다.

해방 전 조선 식민지의 종주국이었던 일본(內地)에서 시행된 방면위원제도는 그 당시 식민정책의 흐름에 의해 재일코리안에 대한 빈민구제에 적극적으로 못하였으며 배타적이며 축소되는 결과를 초래하였다.

### 3. 민생위원제도와 재일코리안 고통자

민생위원제도는 전술 한 것과 같이 오카야마, 오사카 등의 지역에서 실시된 방면위원제도를 기반으로 시작 되었다. 1937년의 아동법의 제정의 영향을 받아 1946년도에 민생위원으로 명칭을 바꿔 본격 실시하게 되었다. 민생위원이 되려면 후생노동대신으로 부터 위촉받아 거주지역에서 주민의 입장에서 상담, 필요한 원조를 통한 사회복지증진에 노력하는 자로 아동위원을 겸직하여야 한다. 현재(2011년)까지 94년 역사를 자랑하는 일본의 독특한 지역밀착형 사회안정망이라 할 수 있다.

<표-4> 방면(민생)위원제도 연표

연표	방면위원제도 연표
1917년	오카야마현에서 방면위원제도의 전신인 제세고문제도발족
1918년	오카가부에 방면위원규정공포
1928년	방면위원제도 전국보급
1932년	전일본방면위원연맹발족
1936년	11월13일방면위원제정·공포→실시37년1월15일, 임기4년
1946년	민생위원연맹 (전민연) 발족 (민생위원으로 개칭)
1947년	아동복지법공포 (민생위원은 아동위원겸직)
2007년	민생위원 제도90주년

출처 : 전국민생위원연합회<http://www2.shakyo.or.jp/> 인용

또한 민생위원은 자원봉사직으로 임기는 3년이면 재임도 가능하다. 2009년을 기준으로 전국에 23만명 정도가 배치 되어있다. 구체적인 자격 조건으로는 도도부현(都道府縣)지사가 시정촌의 민생위원을 추천한다. 사회복지에 관한 이해와 열의가 있는 사람을 추천, 지방의 사회복지심의회의 의견을 들어 노동후생대신(大臣)이 위촉하는 극히 이례적인 방법을 택하고 있다. 이는 지역성을 반영하기 위한 제도적 장치로 생각되어진다. 이러한 민생위원의 직무내용은 민생위원법 제14조에 의해 규정되어 다음과 같다.

<표-5> 일본 민생위원의 직무내용

기 능	역 할
사회조사	주민의 생활 상태를 필요에 따라 파악 할 것
상 담	주민에 관한 상담에 응하며 적절한 조언과 원조를 할 것
정보제공	복지서비스를 적절하게 이용할 수 있게 필요한 정보를 제공 할 것
연락통지	사회복지사업과 밀접하게 연대하여 그 활동을 지원 할 것
조 정	사회복지사업소와 그 외 관계기관에 협력 할 것
생활지원	그 외 주민복지향상을 위해 정진 할 것

출처: 노동후생성 홈페이지<http://www.mhlw.go.jp/>인용

민생위원의 기능과 역할은 일제강점기 시대의 방면위원제도인 빈민구제 자선사업이 감화구제사업, 사회사업, 후생사업으로의 발전을 통해 그 역할은 조금씩 변화 되어 왔다. 현재 이러한 민생위원과 재일코리안 고령자와는 어떠한 원조관계가 있는지 알아보면 민생위원법(1938년 7월 29일 법률 제198호) 전문에는 재일코리안을 포함한 외국인에 대한 문구는 어디에도 찾아 볼 수 없다.

그 당시의 사회적 배경을 보면 식민지의 조선인과 대만인은 일본국적을 가지고 있었으며 690,501명의 재일코리안이 일본에 존재하고 있었다. 이는 현재의 재일코리안 보다 많은 인구를 차지하고 있었다. 그 당시 빈민 정책의 대상자에는 역시 재일코리안(외국인)은 시야에 두지 않은 이중적 기준과 동화정책으로 일본인과의 구별에 의한 정책적 흐름에 문제가 있었다.

이러한 민생위원과 재일코리안 고령자의 수평적인 원조관계는 해방 되어 지난 65년 동안 특별한 변함이 없었다. 후생노동대신의 위촉으로 임명 되어지는 민생위원의 자격에는 국적조항이 아직도 존재하기 때문이다. 사회보장제도를 실행하는 하부조직에도 공적인 업무 즉 공권력을 수행한다는 이유로 국적조항을 유지하고 있는 것이다.

이에 대한 개선으로 2007년 7월 코리안NGO센터(코리아NGO센터)와 이쿠노구지역복지활동책정위원회「生野區地域福祉アクションプラン策定委員會」는 민생위원의 국적조항을 철폐하고 외국인 정주자에게도 민생위원에 위촉 될 수 있도록 규제완화에 대한 요망서를 일본정부에 제출하였으나 실행되지 못하였다. 오사카시 이쿠노구는 장래 경제특구를 목적으로 하고 있으며 주민의 1/4 가량이 재일코리안으로 이루어져 있다. 외국인도 지역복지에 공헌 할 수 있는 환경을 만드는 것이 목적이며 다양한 복지서비스의 제공, 상호이해를 증진하는데 중요한 정책적 대안 이었다.

이러한 민생위원은 전술 한 것처럼 민생위원법에 근거하여 시정촌시의원 피선거권을 가진 자 만이 위촉 될 수 있으며 2004년도 시가현 마이바라시(米原市)에서는 규제완화를 정부에 요청하였으나 정부는 이를 거절하였다.

그렇다면 현재의 민생위원과 재일코리안 고령자의 원조관계는 구체적으로 어떠한 상태에 놓여 있는지 살펴보면 저자는 2007년 셴슈(泉州)지역과 2010년 니시나리쿠(西成區)의 재일코리안 고령자의 실태조사에 조사인 자격으로 참가하면서 민생위원과 재일코리안의 원조관계를 파악 할 수 있었다.

이 두 조사의 개요를 간단하게 요약하면 먼저 2007년 셴슈(泉州)에서 실시된 재일코리안 고령자 실태조사는 오사카부의 셴슈지역의 3개의 시(市)와 1개의 정(町)을 지정하여 65세 이상의 재일코리안 고령자를 대상으로 실시하였다. 이 지역 살고 있는 547명의 대상자 중 208명의 대상자로 부터 방문 설문조사를 실시하여 38%의 유효회답을 얻을 수 있었다. 또한 2010년 니시나리쿠(西成區)의 조사는 438명의 재일코리안 고령자를 대상으로 129명(유효회답35%)을 방문조사 하였다. 이 조사는 재일본대한민국민단(이하, 민단)과 재일조선인총연합(이하, 조총련)의 각 기관의 지원을 받아 전자는 이즈미시인권 단체의 주최로 후자는 오사카시립대학의 코리안커뮤니티연구회의 주최로 실시되어 한국어와 일본어가 가능한 조사원과 복지관련 단체와 대학연구자들의 협력으로 구

성되어 조사 되었다. 저자 또한 설문지의 구성단계에서 부터 조사에 참여 하였다. 설문지의 구성은 다음과 같다.

<표-6>. 재일코리안 고령자 실태조사

지 역	센슈(泉州)	니시나리쿠(西成區)
대상자	재일코리안 고령자(65세이상)	재일코리안 고령자(65세이상)
회수율	대상자: 547명 유효회답: 208명(38%)	대상자:438명 유효회답:129명(35%)
조사 내용	기본속성 경제적 현황 교육현황(학력 등) 일상생활 현황 지역사회 참여 현황 개호보험 현황 개호보험 이용현황 곤란 할 때 상담자 복지서비스 정보습득 자유의견 등	기본속성 건강의료 개호보험 서비스 현황 개호보험 외의 이용 실태 외국인을 위한 복지서비스 의향 복지서비스 정보습득 경제적현황 교육현황(학력 등등) 경제적 현황(세대 수입) 주거환경에 대해

출처: 『泉州地域在日高齢者福祉実態調査報告書(2007)』, 『コリアンコミュニティにおける高齢居住者の生活と住まいからみた地域再生の課題: 西成区在日コリアンからみた地域再生の課題、(2011)』 참조.

이 조사를 통해 민생위원과 재일코리안 고령자의 원조관계를 파악 할 수 있는 질문 항목은 다수 존재 하며 특히 민생위원에 대한 인지도와 복지서비스에 대한 정보습득 과정과 생활이 곤란 할 때의 상담자에 대한 질문과 지역사회 참여에 대한 항목을 통해 파악 할 수 있다.

센슈지역의 조사결과 민생위원의 인지도는 전체의 35%정도에 지나지 않는다(조문기, 2009). 또한 곤란 할 경우 상담을 할 수 있는 대상자를 묻는 질문에 민생위원은 전체의 1.7%에 속한다. 그리고 복지정보를 제공하는 정보원으로서의 역할자로서는 전체 0.2%로 원조관계가 매우 미비한 상태로 조사 되었다.

2010년 니시나리쿠(西成區)의 조사에서는 복지서비스의 정보원으로 민생위원은 3.1%에 속한다. 그리고 곤란 할 경우 상담자로서는 0.8%로 민생위원과 재일코리안 고령자의 원조관계는 극소수에 불과하다고 말 할 수 있다. 구체적으로 니시나리쿠(西成區)조사의 설문을 예로 들면 다음과 같다.

<표-7>고령자의 복지서비스 정보원

고령자복지서비스에 관한 정보는 어디서 얻고 있습니까?	N	%
해당 관청 홍보지	37	29.8
정내회, 자치회 홍보지	14	10.9

민족단체 홍보지	6	4.7
신문	4	3.1
라디오, 텔레비전	6	4.7
인터넷	0	0.0
가족, 친척	28	21.9
친구, 이웃	35	27.3
민족단체 접수처	5	3.9
시청(구청)	15	11.7
지역포괄지원센터직원	0	0.0
민생위원*	4	3.1
의사	17	13.3
병원상담원	1	0.8
개호지원전문원(케어메니저)	9	7.0
방문개호원(홈헬퍼)	5	3.9
기타	8	6.3
특별히 없음	23	18.0

출처: 『コリアンコミュニティにおける高齢居住者の生活と住まいからみた地域再生の課題: 西成區在日コリアンからみた地域再生の課題』、大阪市立大學都市研究プラザ.

조사결과에서도 알 수 있듯이 현재 민생위원의 인지도가 낮은 것은 물론이고 복지서비스와 연결 할 수 있는 정보 매개체로서의 역할을 하는 민생위원과의 원조관계는 미비하게 분석 되고 있다. 이러한 상황 속에서 제일코리안 고령자는 복지서비스에 대한 혜택을 받을 수 있는 전달 체계의 문제가 발생하며 조사의 결과에서도 나타나듯이 특별히 상담자가 없는 상태에서 개호문제로 가족 붕괴 되는 경우도 있다. 또한 독거노인의 경우 고립 되어 고독사 할 위험도가 높다 할 수 있다.

이런 조사 결과 속에서 개선방안을 마련하기 위해 선구적인 사례를 통해 일본의 민생위원제도의 개선점을 살펴보면 다음과 같다.

민생위원제도의 최대 걸림돌인 국적조항의 철폐를 부르짖던 복지단체들은 정책의 방향성을 전환하여 복지단체의 교육을 통해 외국인을 위한 복지위원을 양성하고 있다.

교토(京都)의 모아넷(モアネット)이 그 모델이다. 교토시의 조성사업으로 실시되고 있으며 외국인복지 양성강좌 이수를 통해 외국인복지위원으로 활동 할 수 있다. 외국인복지 위원양성강좌는 외국인의 사회역사적 배경을 이해하고 또한 그 대상자를 방문, 경청, 생활지원의 방법과 외국인에 대한 복지인식을 테마로 하고 있다.



이 외국인복지위원의 활동으로는 외국인 고령자, 장애인의 가정방문 활동(안부확인), 생활 상담 및 원조활동 등이 있으며 대상자의 생활 상태를 파악하여 고립을 방지하는데 그 목적을 두고 있다. 또한 개호예방차원의 역할도 하고 있다.

현재 모아넷의 외국인복지 위원강좌는 3회에 걸쳐 시행되고 있으며 등록된 외국인복지위원은 100명을 넘어서고 있다. 또한 강좌의 내용을 살펴보면 재일외국인에 관한 복지의 방향성, 사회보장, 역사, 외국인 상담사례, 인크루전과 다문화사회, 고령자의 이해, 장애인 대한 생활지원과 이해, 상담지원활동, 다문화공생 등의 다양한 테마로 지역의 복지시설 종사자와 복지관련 대학의 교수들이 그 강좌를 진행 하고 있다.

이는 일본의 현재 민생위원이 한계를 극복하고 당사자의 입장에서 주체적으로 재일코리안 고령자의 네트워크가 구축 되어지고 있는 현상을 설명 할 수 있는 사례라고 할 수 있다.

### Ⅲ. 결 론

재일코리안은 고령사회(2008년 17%)에 진입하였다. 그렇다면 부양(개호) 할 가족의 부양능력은 충분 한 것인가? 일본은 개호보험제도의 변화와 개혁으로 독특한 일본형 노인복지의 시스템을 만들어 왔다. 재일코리안 고령자의 장기적 부양체계를 마련하기 위해 사회자원(「사적 私」, 「공적-公」, 「민-民」)의 자원개발의 필요성과 개선점에 대한 연구는 별도의 차원에서 연구 되어야 한다.

연구 결과를 요약하여 보면 일제강점기의 방면위원제도는 많은 제도적 모순을 가지고 있었다. 특히 제도적 보장이 없던 방면위원제도는 빈민구제와 방민의 역할을 하지 못하였다. 그 결과 식민정책에 이용 되면서 많은 조선인들이 일본으로 도항하게 되었다. 또한 일본에서 실시 된 방면위원 제도는 재일코리안을 빈민구호의 대상에서 배제 시키면서 이중기준을 가지고 빈민구호사업을 실시하였다. 마지막으로 현재의 민생위원제도와 재일코리안 고령자의 원조관계는 일본 각 지역의 실태조사 결과 과거의 방면위원제도와 별반 다름없는 보이지 않는 이중기준(국적조항)이 존재 한다 할 수 있다.

저자는 먼저 민생위원제도의 변화를 통해 재일코리안 고령자의 문화를 이해하는 지역사회를 만들 것을 제언한다. 필요하다면 재일코리안의 국적으로 민생위원에 선출되어 재일코리안의 복지문제를 대변하여야 할 것이다. 이는 참정권의 문제와는 별도로 그러한 니드(다문화)를 개호보험에 접목한 인재양성을 통해 고령자의 문화, 정체성(Identity)을 존중 한 복지시설운영이 필요 할

것이다.

구체적으로는 민생위원제도의 개선을 통해 다양한 생활과제에 대응하기 위한 다문화소셜워커(multicultural social worker)로서의 민생위원의 제도적 변화를 촉구 하는 바이다. 이미 일본사회는 미국의 영향으로 다문화소셜워커의 양성사업(총무성 「다문화추진에 관한연구회」 2006년)을 발족 하였으나 아직도 사회복지정책은 소극적인 자세를 취하고 있다. 사회복지대학 및 개호지원전문원(케어메니저)의 커리큘럼 과정에도 적극적인 재일코리아안 고령자의 생활양식과 문화를 접목 한 교육이 필요하다. 그것이 진정한 일본의 국제화와 연결되는 길이라 볼 수 있다.

본 연구의 한계점으로는 재일코리아안 고령자의 사회보장을 다룬 연구로서 현행 일본의 사회보장(공적부조, 국민연금, 의료보험, 개호보험 등) 전체를 파악해야 함에도 불구하고 본 연구는 민생(방면)위원제도라는 좁은 제도적 접근을 시도 하였다. 도항초기의 재일코리아안의 사회적 배경과 오늘날의 재일코리아안 고령자를 이해하기 위해 시계열적으로 분석하여 설명하는 것으로 그 범위가 한정 되어 있다.

마지막으로 본 연구는 한일양국의 식민사관에 대한 근대화의 논쟁을 벗어나 역사 속으로 사라져가는 재일코리아안 고령자의 복지시스템과 그 페러다임을 연구하기 위한 기초 연구라 할 수 있다.

## 【参考文献】

- 박세훈(2006), 「식민국가와 지역공동체:1930년대 경성부의 도시사회정책 연구」 학술정보원.
- 최영호(2008), 「재일교포사회의 형성과 민족 정체성 변화의 역사」 한국사연구.
- 코리안커뮤니티연구회(2011), 『코리안커뮤니티における高齢居住者の生活と住まいからみた地域再生の課題：西成區在日コリアンからみた地域再生の課題』、大阪市立大學都市研究プラザ.
- NPO法人神戸定住外国人支援センター(KFC)(2005), 『在日マイノリティ高齢者の生活権 — 主として在日コリアン高齢者の實態から考える』, 新幹社.
- 吉岡増推(1980), 『在日朝鮮人の生活と人權— 社會保障と民族差別』 社會評論社.
- 庄谷怜子(2005), 「エスニック・マイノリティと社會保障・社會福祉「意見書」： 大阪・生野における在日高齢者調査をふまえて」, 大阪府立大學社會問題研究.
- 泉州地域在日高齢者福祉實態調査委員會(2007), 『報告書泉州地域在日高齢者福祉實態調査報告書』、和泉市立人權文化センター
- 愼英弘(1984), 『近代朝鮮社會事業史研究 : 京城における方面委員制度の歴史的展開』 綠蔭書房.
- 宮本、森下、君塚(1994), 『組織とネットワークの社會學』, 新聞社.
- 寶田玲子(2009), 「日本における多文化ソーシャルワーカーの育成の必要性について : アメリカにおける多文化ソーシャルワークの實踐事例より」, 關西福祉科學大學紀要.
- 許光茂(2000), 『歴史學研究733』, 「戰前貧困者救濟における朝鮮人差別「二重基準」の背景を中心に」 青木書店.
- 朴貞蘭(1997), 『韓國における社會事業の成立と展開に関する研究』, 日本女子大學.
- 金永子(2007), 「解放出版社在日外國人に關連する生活保護制度のいくつかの問題について 在日朝鮮人を中心にして」, 部落解放.
- 趙文基(2009), 「在日コリアン高齢者の介護問題 二つの社會調査にもとづいて」, 桃山學院大學總合研究.

## 要 旨

本稿では、朝鮮植民地時代の占領国（日帝）によって行われた社会事業の展開を通じて、当時の社会的背景の理解を深めることと、在日コリアンが来日（渡航）した要因を社会学（福祉制度）的視点からのアプローチを試みている。また、高齢社会に到達した在日コリアン高齢者が、日本での老後の生活を営みながらも、あらゆる場面で社会保障から排除された状況を概観する。

すなわち、在日コリアン高齢者ための社会保障(社会的全網)の転換と提言を試みる。研究の方法については、文献研究をベースにし、植民地時代の方面委員制度と社会事業内容を載せ出版された雑誌『朝鮮社会事業』を基に時代の背景を把握し、論点を明確にするために、韓国と日本において研究された論集や文献の整理を行った。さらに、民生委員制度の運営については、厚生労働省が発表したデータと記事を参考にした。

結論的には、朝鮮における植民地の産業革命と社会事業の試みは、日帝の産業革命と社会事業の実験の足場にしか思えない。方面委員制度の運営上の失敗により、在日コリアンの来日を増加させた結果に繋がるのだろう。つまり、植民地社会事業の形成過程の矛盾がもたらした結果であると考えられる。解放後、日本帝国の方面委員制度の枠組みが生み出した民生委員制度は、在日コリアン高齢者とは、どんな関係があるのだろうか。『2007年泉州地域の在日コリアン高齢者の福祉実態調査』の結果によれば民生委員の周知度は35%にすぎない。海を渡ってきた在日コリアンの歴史はほぼ1世紀の間、在日コリアン高齢者の無年金問題、生活保護法の「準用」措置が未だにも解決されていない。日本に流れ来た運命の異邦人は帰れない福祉難民である。こうした、現状を踏み込んだ筆者の研究は、極めて限定的な在日コリアン高齢者の社会保障について、植民地時代から現在に至る民生委員制度までの変遷を考察した。

最後に、現在の民生委員制度は、在日コリアン高齢者にとっては、一番の身近に存在する社会保障の一部ということ是否定できない。外国人高齢者にも目を向けることはできないだろうか。福祉の先進国のような多文化ソーシャルワーカー (multicultural social worker) としての民生委員の活動を求められる。すでに、日本の社会は、多文化ソーシャルワーカーの養成事業(総務省「多文化共生の推進に関する研究会」2006年)を拡大しつつあるが、未だに福祉政策は日本人(内向け)向けである。大学の社会福祉士養成課程及び介護支援専門員研修コースにも積極的に多民族の福祉文化を取り入れ、「内外人平等」を目指すことが、真の日本の国際化の本質に繋がるだろう。

キーワード：在日コリアンの高齢者、社会保障、方面委員制度、民生委員制度、多文化社会福祉士、外国人福祉委員

투 고 : 2011. 8. 31  
1차 심사 : 2011. 9. 10  
2차 심사 : 2011. 10. 1

# ‘황민화’와 ‘내선일체’로 본 친일문학의 양상\*

鄭昌石\*\*

(e-mail: chung51@dongduk.ac.kr)

---

## 目次

---

1. 머리말
  2. 친일문학의 이데올로기 - ‘황민화’와 ‘내선일체’
  3. 친일문학의 양상
    - 1) 친일문학에 이르는 길 - 이석훈
    - 2) 천황주의에의 종교적 귀의 - 이광수
    - 3) 징병제 실시의 감격과 피로써 이루어지는 ‘내선일체’ - 최재서
    - 4) 지원병제 실시와 출세주의 ‘내선일체’ - 김동환
    - 5) 군신사상의 식민지화 - 정인택
    - 6) 한국인 구원의 길 ‘황민화’ - 장혁주
    - 7) 민족적 굴종과 신분상승의 길 - 이광수
    - 8) 천황귀일로서의 민족합일 - 최재서
  4. 맺음말 - 친일문학이 다다른 곳
- 

## 1. 머리말

친일문학(親日文學)이란 일본제국주의의 지배하에서 식민지 지배 이념을 문학적으로 실천한 문학작품 및 문학활동을 이른다. 친일문학은 1930년대부터 1945년 8월 15일 해방의 날까지 출현했으며, 당시의 용어로 ‘신체제문학(新體制文學)’ 혹은 ‘국민문학(國民文學)’, ‘국책문학(國策文學)’이라고 불리었다.

---

\* 이 논문은 1910년도 동덕여자대학교 학술진흥 연구비에 의한 것임.

\*\* 동덕여자대학교 교수, 일본근대사

친일문학의 다른 이름인 소위 ‘신체제문학’이 본격적으로 출현한 배경에는 1930년대 식민지 한국에서 전개된 일본제국주의의 ‘신체제운동(新體制運動)’이 그 계기가 되었다. 한국에서의 ‘신체제운동’은 1931년의 만주사변과 1937년의 중일전쟁으로 이어지는 일본제국주의의 침략 전쟁이 장기화됨에 따라, 이 전쟁에 한국인을 동원하기 위해 1938년 7월 ‘국민정신총동원조선연맹(國民精神總動員朝鮮聯盟)’을 조직하면서 본격적으로 시작되었다. 이것을 1940년 10월 ‘국민총력조선연맹(國民總力朝鮮聯盟)’으로 개편하고, 당시의 조선총독 미나미 지로(南次郎)는 한국에서의 ‘신체제운동’ 강령을 선언했다. 이것은 다시 1945년 7월 ‘조선국민의용대(朝鮮國民義勇隊)’로 개편되었다. 이러한 일련의 과정은 말할 것도 없이 식민지 한국에 대한 총동원체제의 완성과 강화에 다름 아니다.

식민지 한국에서의 ‘신체제운동’은 한국인의 사상 통제 및 언론 통제는 물론, 지식인들의 대대적인 협조와 참여를 강요하였던 것이고, 문학자도 예외 없이 ‘신체제운동’의 참여와 실천이 요구되었다. 한국 문학계의 ‘신체제운동’은 1939년 10월 ‘조선문인협회’(회장 이광수)의 조직으로부터 시작되었고, ‘신체제문학’을 실천한 대표적인 문학잡지가 1941년 11월 최재서(崔載瑞)에 의해 창간된 『국민문학(國民文學)』이다.

이러한 추세 속에서 1930년대 후반부터 40년대 전반까지 각양각색의 ‘신체제문학’ 논의가 부침했지만, 그 모든 것의 전제(前提)가 일본제국주의의 식민지 지배 이념인 소위 ‘황민화’와 ‘내선일체(內鮮一體)’였다. 다시 말해 ‘신체제문학’이란 ‘황민화’와 ‘내선일체’를 문학적으로 실천한 것이었다. 따라서 식민지 한국에서의 ‘신체제운동’이 그러하듯이 ‘황민화’와 ‘내선일체’를 전제하지 않으면 ‘신체제문학’이라는 것도 성립되지 않는 것이다. 이것이 한국에서 친일문학이라 불리는 소위 ‘신체제문학’의 정체이다.

이것과 관련하여 대한민국 정부는 1948년 7월에 공포(公布)한 헌법 제101조에 의거, 법률 제3호 반민족행위처벌법을 제정했으나, 독립 후의 정치와 사회적인 혼란, 이승만 정권의 친일파 비호, 1950년의 한국전쟁 등 험난한 격동기 속에서 끝내 그 실효를 거둘 수가 없었다.

그러나 이것은 다만 역사의 한 과거사(過去事)로서가 아니라, 지금도 하나의 상흔으로서 살아 남아 있다. 역사는 반전(反轉)하여 독립 후의 한국에서 항일문학은 역사의 각광을 받아 ‘독립운동사(獨立運動史)’로 정착되어 갔으나, 친일문학은 당연히 역사의 부끄러움을 상징하여 친일문학자들은 ‘친일파(親日派)’로 일괄되어 기피되어 왔던 것이 사실이다.

1966년에 임종국(林鐘國)의 『친일문학론(親日文學論)』(平和出版社)이 출판되자 비로소 친일문학의 실체가 드러났으나, 전반적인 작품 소개의 범위를 벗어나지 못하였고, 1986년 실천문학사에서 『친일문학작품선집』 2권과 『친일논설

선집』을 출판했으나 역시 작품 소개의 성격이었다. 이후 단편적인 연구가 진행되어 온 것은 사실이나, 식민지적 정신 풍토의 천착(穿鑿)과 극복의 계기로 살아나지 못하고 역사의 한 구석으로 밀려나 있는 것이 현실이다.

본 논문에서는 이러한 친일문학을 당시 일본제국주의의 식민지 지배 이념인 ‘황민화’와 ‘내선일체’를 주제로 하여 실천했던 대표적인 작가의 작품을 중심으로 그 양상과 논리성 및 이들의 문학 활동을 일본제국주의가 식민지 지배 정책으로서 추진했던 ‘신체제운동’의 일환으로 파악하여 그 의미와 성격을 규명하고자 한다.

## 2. 친일문학의 이데올로기 - ‘황민화’와 ‘내선일체’

여기서 일본제국주의의 식민지 한국 지배이념이며 한국에 대한 거대한 위선적 시혜의식의 결정체로서의 ‘황민화(皇民化)’와 ‘내선일체(內鮮一體)’의 내용을 살펴보기로 한다.

일본제국주의의 한국 통치의 소위 ‘대정신(大精神)’은 1910년 8월 29일 한·일 병합(韓日併合)에 즈음하여 나온 일본 천황(당시의 明治)의 소위 조서(詔書)에 나타나 있다. 거기에 의하면,

‘(한국-인용자) 민중은 직접 짐(朕)의 수무(綏撫)하에서 그 강복(康福)을 증진할 것이며……짐은 특히 조선총독(朝鮮總督)을 두어 짐의 명령을 받아 육해군을 통솔하여 제반의 정무(政務)를 통할(統轄)하게 한다.’<sup>1)</sup>

라고 규정, 한국인을 ‘황국신민(皇國臣民)’으로 하여 직접 통치할 것을 천명(闡明)했다. 또한 1919년 3·1독립운동 후에 나온 ‘제도개정(制度改定)의 조서(詔書)’에는

‘짐은 일찍부터 조선의 강녕(康寧)을 마음에 두고 그 민중을 애무(愛撫)함에 있어 일시동인(一視同仁), 짐의 신민(臣民)으로서 추호(秋毫)의 차이도 두지 않고 각각 그 있을 곳을 얻어 그 생활에 안락함을 도모하여 한결같이 휴명(休明)의 혜택을 누리기를 바라왔고……’<sup>2)</sup>

라고 하여 ‘내선일체(內鮮一體)’를 선언함과 동시에 한국인이 ‘황국신민(皇國臣民)’임을 재천명했다. 이후 역대 조선총독은 이 두 개의 조서에 나와 있는 소위 ‘성지(聖旨)’를 받들어 ‘황민화’와 ‘내선일체’를 강력하게 추진한다.

1) 朝鮮總督府 『併合の由來と朝鮮の現狀』 朝鮮印刷株式會社 1924. 1頁.

2) 위와 같은 책. 2頁.

소위 ‘황민화’와 ‘내선일체’라는 동화정책으로서의 지배 이데올로기는 일본제국주의의 한국통치의 특징을 상징하는 것으로, 식민지 한국에서 팔방미인(八方美人)의 권위를 휘두르는 것은 물론, 한국인을 정치·경제·사회·문화적으로 규정하는 억압기조로서의 행동규범이 되었던 것이다.

소위 ‘황민화’와 ‘내선일체’는 동화정책의 일신양두(一身兩頭)가 되어 ‘황민화’가 주로 도덕적 규범으로써 정신면을 강조하여 일본제국주의에의 충성심을 강요한 데 대해, ‘내선일체’는 소위 ‘동조동근론(同祖同根論)’을 내세워 역사적 근거 제시를 피해 한국지배를 정당화하려 했다.

즉 ‘황민화’는 ‘조선민중 2천 5백만 모두가 국체(國體)의 본의(本義)를 관철하기 위해 철저하게 황국신민으로서의 수양(修養)과 연성(鍊成)을 실천궁행(實踐躬行)하는 것’<sup>3)</sup>이고, ‘내선일체’는 ‘하나의 조상(祖上)으로부터의 피의 연결에 기초하여 필연적이고도 발전적인 환원’<sup>4)</sup>이라고 선전했다.

그러므로 친일문학으로 불리는 소위 ‘신체제문학’이란 ‘팔굉일우(八紘一宇)’의 무한확대 혹은 무한 연장선상의 일 지점에 위치하고 있는 식민지 한국에서 ‘황민화’와 ‘내선일체’를 제재(題材)로 하여 창작, 비평하는 문학이 되는 것이다. 국난 극복의 오랜 역사를 갖는 한국에서 단 30여년의 일본제국주의 식민지 통치에 굴복한 친일문학의 다른 이름인 소위 ‘신체제문학’ 논의는 당시 지식인의 안이한 현실타협과 위기의식에 대한 값싼 자기패배의 산물이며, 지식인의 현실 인식의 중요성을 점검하는 역사의식의 담론을 던져주고 있는 것이다. 당시 한국의 진정한 국민문학의 필요성이 절규되는 위기상황하에 그것을 위해 치열하고 가열(苛烈)한 모색을 계속한 항일문학의 한 옆에서 친일문학으로서의 소위 ‘신체제문학’은 초라한 모습으로 반역의 늪을 파고 있었던 것이다.

### 3. 친일문학의 양상

이 시기 가장 중요한 것은 1941년 11월 최재서(崔載瑞)에 의해 창간을 본 문학잡지 『국민문학(國民文學)』의 출현이라 할 수 있다. 창간 벽두 ‘조선문단의 혁신과 재출발’을 호언한 이 잡지의 편집요강은 급변하는 시국의 종합적인 반영이며 소위 ‘신체제문학’의 성격을 규정하고 있다.

‘(1) 국체관념(國體觀念)의 명징(明徵) - 국체에 반(反)하는 민족주의적 사회주

3) 朝鮮總督府 『新しき朝鮮』 朝鮮行政學會 1944. 25頁.

4) 위와 같은 책. 15~16頁.



- 의적 경향을 배격함은 물론이고 국체관념의 명징을 지키지 않는 개인주의적 자유주의적 경향을 절대 배제한다.
- (2) 국민의식의 양양(昂揚) - 조선 문화인 전체가 항상 국민의식을 갖고 사물을 생각하고 또한 쓰도록 유도한다. 특히 끊어 오르는 국민적 정열을 그 주제에 담을 수 있도록 유의한다.
  - (3) 국민사기의 진흥 - 신체제(新體制) 하의 국민생활에 맞지 않는 비애, 우울, 회의, 반항, 음탕 등의 퇴폐적 기분을 일소할 것.
  - (4) 국책(國策)에의 협력 - 종래의 불철저한 태도를 일척(一擲)하고 적극적으로 시대의 난관 극복에 정신(挺身)한다. 특히 당국이 수립한 문화정책에 대해서는 전면적으로 지지 협력하여 각각의 작품을 통하여 구체화되도록 노력한다.
  - (5) 지도적 문화이론의 수립 - 변혁기에 조우한 문화계에 지도적 문화이론이 되어야 할 문화이론을 하루라도 빨리 수립할 것.
  - (6) 내선문화(內鮮文化)의 종합 - 내선일체(內鮮一體)의 실험적 내용이 될 내선문화의 종합과 신문화의 창조를 향해 모든 지능을 총동원한다.
  - (7) 국민문화의 건설 - 총체적으로 옹혼(雄渾), 명량, 활달한 국민문화의 건설을 최후의 목표로 한다’(인용자역) 5)

이 잡지는 창간에 즈음하여 조선총독부와 협의를 거친 후에 창간에 이르렀음을 밝히고 있어 출발부터 일본제국주의 어용잡지임을 드러내고 있다. 다시 말해 신문에서 『매일신보(每日新報)』가 담당하는 역할을 문학에서 『국민문학』이 담당하는 것임을 알 수 있다. 최재서에 의하면 창간호부터 ‘용어(用語)에 대한 사명’을 띠고 있는 이 잡지는 총독부와의 협의 결과 년8회는 한국어판, 4회는 ‘국어(일본어)’판으로 낼 예정이었으나, 본래 『국민문학』은 지식계급을 대상으로 하고 있고 지식계급은 ‘국어’를 해독할 수 있으므로 ‘무엇보다도 솔선하여 용어문제를 해결할 사명을 띠고 있음’을 유의해야 한다고 되어 있다.<sup>6)</sup>

그 때문에 1942년 5, 6월 합병호부터 전면적으로 일본어판으로 바뀌었다. 최재서는 그 이유를 1941년 12월 8일의 소위 ‘선전(宣戰)의 대조(大詔)’ 즉 일본제국주의의 미국에 대한 선전 포고와 1942년 5월 한국에 공포된 징병제에 감격하여 국어(일본어)와 한국어의 병용이라는 ‘과도기적 조치’의 청산을 결의했다고 되어 있다.<sup>7)</sup>

이렇게 하여 한국에 단 하나 남아 있던 문학잡지로부터도 한국어는 말살당

5) 崔載瑞 ‘朝鮮文學の現段階’ 『國民文學』 1942. 8月號. 12~13쪽.

6) 위와 같은 책. 13쪽.

7) ‘國語雜誌への轉換’ 『國民文學』 1942. 5・6月合併號 44~45쪽.

했다. 나아가서 최재서는 ‘조선어는 최근 조선의 문화인에게 있어서는 문화의 유산이라기보다는 오히려 고민의 씨앗이다. 이 고민의 껍질을 깨지 못하는 한 우리의 문화적 창조력은 정신적 수인(囚人)이 될 뿐이다’<sup>8)</sup>라는 발언도 서슴치 않았다. 문학자에게 자신의 모국어가 ‘고민의 씨앗’이 되고 모국어를 사용하는 지식인이 ‘정신적 수인(囚人)’이 되어 문학자 스스로가 모국어를 버리는 것이 지식인의 ‘사명’으로 둔갑하는 시대가 도래한 것이다. 이것은 한국 문학계 스스로 한국어와 한국문학의 포기를 선언하는 것 이외의 다른 아무것도 아니다.

1943년 4월 ‘문학자의 총력을 대동아전쟁의 목적에 집결’하기 위해 ‘조선문인협회(朝鮮文人協會)’를 해체하고 ‘조선문인보국회(朝鮮文人報國會)’가 발족했을 때, 『국민문학』은 ‘결전문학(決戰文學)의 확립’을 내세우며 문학의 소위 ‘성전(聖戰)’ 수행을 역설했다.

이와 같이 한국에서 시국에 편승하는 소위 ‘신체제문학’이 논의되기 시작한 것은 주로 1931년 만주사변 이후부터였다. 이 시기는 시국론으로 시작되어 전쟁문학, 애국문학 혹은 총후문학(銃後文學)<sup>9)</sup>이라 불렸다. 그러나 1937년 중일전쟁 발발 이후 일본제국주의가 그 전쟁을 소위 ‘성전’이라 부르면서 전쟁열기가 차차 식민지 한국에까지 밀려 오자, 소위 ‘신체제문학’은 결전문학이라 불리며 그 주장하는 내용의 강도도 높아져, 이윽고 용어문제라는 명목으로 한국문학자 스스로가 한국어를 버리는 곳까지 가 버렸다.

일반적으로 소위 ‘성전(聖戰)’이라는 용어는 1937년 7월부터의 중일전쟁(처음에는 北支事變, 1937년 9월 2일부터는 支那事變, 1941년 12월 13일부터는 태평양전쟁을 포함하여 大東亞戰爭으로 개칭)에서부터 사용되기 시작했다.<sup>10)</sup>

중일전쟁 이후 친일문학 곧 ‘신체제문학’이 부르짖는 구호도 ‘황민화’와 ‘내선일체’를 시작으로 소위 ‘성전’의 수행, ‘대동아공영권’, ‘팔굉일우(八紘一字)’, ‘신주불멸(神州不滅)’ 등 격렬해져만 갔다. 또한 그 논의가 시국적이었기 때문에 식민지 지배권력의 중요정책이 나올 때마다 그것이 한국의 민중에게 어떠한

8) ‘編輯を了へて’ 위와 같은 책, 208쪽.

9) 총후(銃後)라는 용어는 전쟁시에 전장(戰場, 國外)과 총후(銃後, 國內)라는 대립개념으로 쓰인 말로 일본에서 청일전쟁과 러일전쟁 이후 사용되기 시작했다. 근대전(近代戰)이 총력전 개념으로 바뀐에 따라 총후문학이라는 용어도 결전문학으로 대체되어 갔다.

10) 그 시초는 역시 일본제국주의 군부(軍部)로 1937년 11월 18일 육군성(陸軍省) 신문발행의 ‘시국(時局)의 중대성’이라는 팜프렛에는 다음과 같이 적혀 있다.

‘원래 이번 사변은 일면적으로 관찰하면 일본과 지나의 분쟁임에 틀림없지만, 이것을 좀더 깊은 각도에서 관찰하면 무모한 배외사상, 위험한 공산주의, 패도적 제국주의를 옹정하여 세계에 국제정의를 확립하려는 신국(神國) 일본의 성전(聖戰)인 것이다.(陸軍省新聞班 『時局の重大性』 1937. 11. 18. 66頁)

영향을 끼치는가를 돌아 볼 여유도 없이 마치 정책을 앞지르듯 선견성(先見性)마저 보여 가며 항상 시국의 중심적 존재로 남으려 했고 또 주도하려 했던 것이다. 그러나 그 시끌벅적한 환소(喧騷)에 비해서는 일본제국주의의 꼭둑각지에 지나지 않았음은 물론, 조국관념의 상실로 인해 시대에 대한 통찰력, 미래에 대한 대응력 하나 확보하지 못한 채 다만 일본제국주의의 한국 통치이념에 충실히 굴종한 한국 지식인의 반민족적 현실참여로 끝났다.

## 1) 친일문학에 이르는 과정 - 이석훈

이러한 ‘신체제문학’을 문학자가 수용해 가는 과정을 그린 작품에 이석훈(李石薰, 牧洋)의 ‘조용한 폭풍(靜かな嵐)’ 연작(제2부 ‘夜’, 제3부 ‘善靈’)<sup>11)</sup>이 있다.

이 소설의 주인공 박태민(朴泰民)도 한때는 민족주의적 작가의 한 사람이었다. 한국인에게 ‘황국신민(皇國臣民)’의식과 시국의 중대성을 고취하기 위해 문인협회가 주최하는 문예강연대(文藝講演隊) 대원으로 지명된 박태민은 ‘소승적(小乘的)인 민족주의 입장’을 극복하고 ‘대승적(大乘的) 지성과 예지’를 획득하기 위해서 또한 ‘회의와 방황을 거듭하고 있는 자신을 단련하기 위해’ 이 강연회에 참가할 결심을 한다.

함경도(咸鏡道) 지방을 지원한 그는 금번의 행사에 한국의 문학자들이 냉담한 반응을 보이는 것이 못내 섭섭하고 쓸쓸하게 느껴졌다. 또한 그는 친구인 신진작가 고영목(高永睦)이 시국 비판의 죄목으로 검거된 소식을 듣고 놀라는 한편 걱정과 불안감이 교차한다. 동시에 그는 ‘이 시대가 안고 있는 공포와도 같은 엄숙함’을 실감으로 느낀다. 이리저리 동요하는 마음을 다지기 위해서 그는 아내의 권유대로 많은 추억이 배어 있는 러시아 잡지를 태워 버린다. 문학자에 대한 투서사건으로 원고를 압수당한 박태민은 주재소(駐在所) 주임인 다케나카(竹中)로부터 단순한 필적 감정 때문이라는 말을 듣고도 안절부절하는 나날을 보내던 중, 드디어 강연대와 합류하여 밤기차를 타고 자신에게 다짐하듯 혼잣말을 한다. ‘화살은 이미 시위를 떠났다’(제1부).

강연회에서도 그는 함흥(咸興)의 강연에서는 청중이 도중에 자리를 뜬다든지 나선희(羅仙姬)라는 옛날 여자 친구로부터는 ‘농담인가, 호신술인가, 진심인가’라는 힐문과 비판의 말을 듣고 현저하게 사기가 떨어져 버린다. 성진(成津)에서는 한국인 청년기자로부터 ‘작가의 타락’이라고 매도당한데다가 폭행까지

11) 李石薰 ‘靜かな嵐’(第一部) 『國民文學』 1941. 11月號, ‘夜’(第二部) 같은 책 1942. 5・6月合併號, ‘善靈’(第三部) 같은 책 1944. 5月號.

당한다(제2부).

그러나 그는 나머지 청진(淸津), 나남(羅南), 원산(元山), 춘천(春川)에서의 강연회를 마치고 이러한 시련을 체험으로 극복, ‘조선의 진로를 확신하는 황국 신민’이 되어 간다. 이러한 중에도 시국은 긴박해져 지원병제도의 실시, ‘창씨 개명(創氏改名)’, 태평양전쟁의 발발, 징병제 실시의 발표 등 급변하여 간다. 박태민이 ‘조선이 나아갈 길이 확실히 결정되었다’고 확신하고 있던 어느날, 나선회와 그에게 폭행을 가했던 청년기자로부터 편지를 받는다. 편지에는 그들도 ‘조선민족의 진로’에 확신을 가질 만큼 자각했다는 내용을 담고 있었다.

이렇게 적극적으로 ‘항민화’를 실천하게 된 박태민은 신사(神社) 참배는 물론이고 성지(聖地) 순례단에도 참가한다. 또한 총독부의 어용단체도 가입하며 ‘내선일체’의 이념을 주제로 한 소설도 쓴다. 그러나 시간이 흐름에 따라 박태민은 정신적 동요와 혼란이 깊어 간다. 존경하는 선배로부터 경멸을 당해 정신적 충격을 받기도 하고, 신사참배에 늦어 관계자에게 꾸중도 듣고 가입한 단체로부터 탈퇴할 결심을 하는 등 갈팡질팡한다.

군대의 보도연습반(報道演習班)에 참가했을 때에는 아츠섬의 옥쇄(玉碎) 소식을 듣고 신경질적이 되어 자신을 억제하지 못하고 주위와 좌충우돌하기도 한다. 그러던 어느날 그의 친일적 태도를 노골적으로 비난하는 현(玄)이라는 시인에게 ‘이 몇 년 간의 울적해진 감정의 폭풍’을 터뜨리며 맹렬하게 폭행을 가한다. 이윽고 박태민은 문학자대회 참가를 거부하고 만주(滿洲)로 건너가 죽은 동생의 장례를 지내며 다시 한번 생활에 도전하겠다는 결심을 한다(제3부).

이 소설은 당시의 한국문단의 분위기, 문학자의 시국행사 참가와 한국인의 반응과 민족의식, 시국의 긴박성, 신문 잡지가 폐간 정리되어 발표 기회가 줄어든 문학자들의 생활난과 자기모순을 묘사해 당시 한국 문학자가 처한 현실을 단면도처럼 보여주고 있다.

당시 유진오(兪鎭午)는 ‘조용한 폭풍’을 평해 ‘주인공의 사상적 전신(轉身)의 정체가 확실하게 추구되어 있지 않기 때문에 정치적으로는 상당히 침예한 각도를 취하고 있음에도 불구하고’, ‘그 행동이 행동인의 행동이 되지 못하고 문단적 범주에서 머뭇거리고 있다’고 비판했다.<sup>12)</sup> 유진오의 지적대로 주인공 박태민은 회의(懷疑)를 위한 회의, 방황을 위한 방황을 거듭하는 문약한 지식인에 불과하고 줄거리 또한 정해진 대로 따라가는 작위성(作爲性)을 면치 못하고 있다.

한국 문학자가 소위 ‘신체제문학’을 주장하고 있는 한편에서는 ‘얼음과 같은 침묵’으로 응시하고 있는 한국인도 있었다. 이러한 분위기 속에서 ‘신체제문학

12) 兪鎭午 ‘知識人の表情’ 『國民文學』 1942. 3月號. 6~7쪽.

자’ 곧 친일문학자의 피해의식이 숨어 있었던 것이다. 주인공 박태민의 정신적 방황과 갈등은 곧 이석훈의 것이기도 한 것이다.

이러한 피해의식은 이석훈 혼자만의 것은 아니었다. 조선총독부(朝鮮總督府) 경무국(警務局) 검열계(檢閱係)에 취직한 소설가 이효석(李孝石)에게는 다음과 같은 경험이 있었다.

‘취직한 지 보름도 안 되었을 즈음 직장에서 광화문통(光化門通)으로 내려 오는데 이갑기(李甲基)라는 청년을 만났다. 문학을 하는 청년이었다. 조금 안면이 있었다. 이(李)는 다짜고짜 험상궂은 얼굴을 하더니 “너도 개가 되었구나”하고 내뺐었다. 대로상에서의 봉변이었다. 금방 주먹으로 한대 칠 듯한 기세였다. 그러잖아도 피해망상에서 헤어나지 못하고 있던 참이었다. 죄악감과 피해망상에서 피로해진 소심한 그의 신경은 감당치를 못했다. 그는 그 자리에서 졸도하고 말았다’ 13)

경성제국대학(京城帝國大學) 영문과 출신인 이효석은 졸업하고도 취직자리가 없었다. 겨우 찾은 곳이 동포의 원고를 검열하는 곳이었다. 그는 이 사건이 있고 나서 직장을 내던졌다. 이러한 피해의식은 이효석 한 사람만의 것이 아니라 친일문학자 곧 소위 ‘신체제문학자’들 공통의 켤감이었던 것이다.

이석훈(李石薰)의 ‘조용한 폭풍’ 연작의 주인공 박태민도 후반에 갈수록 불리해지는 전황(戰況)을 반영하여 초조함과 불안과 동요를 드러내 어찌면 멍에스러울 수도 있는 문학자대회의 대표도 사양하고 만주로 달아나는 것은 ‘신체제문학자’들의 장래에 대한 불안감을 나타내고 있다. 그러면 이석훈은 어떻게 하여 ‘조선의 진로’를 발견했을까. 주인공 박태민의 연설에서 그것을 알 수 있다.

‘나는 조선의 오랜 역사를 회고할 때 그 중추(中樞)가 없고 통일도 되지 않은 우리 민족의 어리석음을 부끄러워 할 수 밖에 없다. 옛날에는 신라의 조각, 고려의 도자기, 조선시대의 서화와 같이 뛰어난 예술이 있기는 하다. 그러나 중핵체가 없는 국가, 통일이 없는 민족사회에 이리저리 흩어져 있는 탁월한 문화가 어느 정도의 의의가 있을 것인가. 아니, 위에는 정치를 하는 군주가 있기는 있었다. 그러나 그것은 백성이 진실한 중추로 떠받들며 죽음으로 모신 군주가 될 수 있었던가. 동포가 서로 굳게 단결한 유대가 될 수 있었던가. 그런데도 우리 조상들은 대륙에 추종하고 아부나 하는 데 세월을 보냈던 한심스러운 꼴이 아니었던가. 삼천 년이란 세월은 인간이, 민족이 시험받기 위해서는 너무도 긴 세월이었다.

오늘날 우리는 죽는 것도 사는 것도 일본이라는 커다란 생명체의 운명 속에

13) 柳宗鎬 ‘李孝石’ 『韓國의 人間像』 第五卷(文學者篇) 新丘文化社 1967. 515~516쪽.

속해 있다. 그것은 삼천 년이라는 오랜 시험의 결과였던 것이다. 이 엄숙한 운명의 연대성에 눈을 감는 자는 너무나도 무책임하고 태만하고 비열하다고 할 수 밖에 없다. 그것은 스스로 암흑의 운명으로 타락하는 자일 것이다.

나는 이상을 갖고 싶다. 휘황찬란한 행복을 갖고 싶은 것이다. 그리하여 동포 중 한 사람도 빠짐없이 이 휘황찬란한 행복을 나누어 갖고 싶은 것이다. 그러기 위해서 우리는 커다란 로망을 갖자. 우리가 행복의 피안(彼岸)에 일본이라는 광명을 찾아내어 민족의 새로운 신화를 만들어 가지 않겠는가. 이 신화야말로 우리들의 새로운 창생기(創生記)인 것이다. 그리하여 우리 동포는 영원히 구제받으리라(인용자역)<sup>14)</sup>

박태민 아니, 이석훈은 결국 한국의 역사에 절망하여 민족주의를 버리고 ‘국가와 국민을 통일하는 중핵체’로서의 천황제를 동경하여 ‘휘황찬란한 행복’을 얻기 위해서 일본이라는 ‘광명(光明)’에 몸을 던져 동포에게도 그것을 권하고 있는 것이다.

당시 일본제국주의가 안출한 천황제의 역사적 확대 해석과 현인신사상(現人神思想)에 흠뻑 취한 이석훈은 민족허무주의에 빠져 버린 정신적 의지처를 천황에서 찾았던 것이다. 이 한국의 역사 부정과 불신은 소위 ‘식민지사관’과 ‘내선일체’의 원리와 통한다.

이석훈의 ‘조용한 폭풍’은 1943년 제1회 ‘국어문예총독상(國語文藝總督賞)’을 둘러싸고 김용제(金龍濟)의 ‘아세아시집(亞細亞詩集)’, 사토 기요시(佐藤清)의 ‘벽령집(碧靈集)’과 최종심사까지 각축을 벌였으나 김용제의 ‘아세아시집’으로 결정이 나, ‘조용한 폭풍’은 신설된 ‘국어문예연맹상(國語文藝聯盟賞)’으로 돌려졌다.

## 2) 천황주의에의 종교적 귀의 - 이광수

이러한 한국의 친일문학으로서의 ‘신체제문학’을 일찍부터 시작한 사람은 이광수(李光洙)였다. 이광수의 친일문학 즉 ‘신체제문학’은 ‘창씨개명(創氏改名)’으로부터 시작되었다. 이 ‘창씨개명’의 변이야말로 이광수의 일본제국주의에 대한 정신적 위상을 여과없이 보여주는 대표적 사례이다.

‘지금으로부터 이천 육백년 전 신무천황(神武天皇, 일본 신화의 초대천황 —인용자)께옵서 여즉위하신 곳이 가시와라(橿原)인데 이곳에 있는 산이 가구야마(香久山)입니다. 뜻깊은 이 산 이름을 씨로 삼아 가야마(香山)라고 한 것인데

14) 李石薰 ‘夜’ 『國民文學』 1942. 5·6月合併號. 195쪽.

그 밑에다 광수(光洙)의 광(光)자를 붙이고 수(洙)자는 내지(內地)식의 량(郎)으로 고쳐서 가야마 미츠로(香山光郎)라고 한 것입니다’ 15)

‘창씨개명’에 즈음해서 이름을 소위 ‘야마토 삼산(大和三山)’에서 따올 정도로 이광수의 ‘황국신민’으로서의 모범생의식은 살아 있다. 그러나 그것은 언제나 자기에 대한 나르시시즘을 동반하므로 착실한 소년적 순진성에서 빠져 나올 수가 없는 것이다. 또한 그것은 일방통행적 향상심으로 작용하므로 부여된 상황에 대한 반응은 놀랄 정도로 진지하고 정직한 것이다.

즉 배운 것, 본 것, 부여된 것에 대해 선별적 가치판단에 의한 지적 여과과정을 생략해 버린 채, 무엇이든지 그때그때 자기이상화(自己理想化)해 버리는 것이다. 일본제국주의의 한국 지배의 간계(奸計)인 ‘창씨개명’을 이상화하는 것도 그것의 일종이다. 거기에는 사상의 발전적 축적 대신에 단편적 자기성실성(自己誠實性)만이 존재하는 것이다.

이즈음 이광수는 다음과 같은 시를 썼다.

《 모든 것을 바치리 》

황은지극(皇恩至極)하옵시니

피로써 나라를 지키라고 말씀하옵신 지 얼마 안되어 이제 또 정치력으로 황철(皇澈)을 익찬(翼贊)하여 받들라고 하옵신다. 조선의 아들들이 총을 들고 전선에서 싸우는 것과 같이 충성스런 경륜을 안고 의정단상(議政壇上)에 나서리.

병역이 엄숙한 의무이며 존귀한 황민(皇民)의 특권이었던듯이 국정 참여는 공민(公民)의 특권인 동시에 극히 엄숙한 의무이니라.

황국(皇國)은 앞서 삼천만의 폐하의 고굉(股肱)을 더하였음과 같이 황국은 이제 또 삼천만의 보필(輔弼)의 신(臣)을 더하였다.

일억일체(一億一體)로 황국을 지키자, 일억일체로 황모(皇謨)를 익찬하자. 이제 피(彼)와 차(此)가 없다. 오직 하나이다.

자, 조선의 동포들아

우리들이 있음으로써 더 큰 싸움을 이기게 하자.

우리들이 있음으로써 대아시아 건설을 완수시키자.

이러므로써 비로소 큰 은혜에 보답하여 받들이 되리라.

아아, 조선의 동포들아

우리 모든 물건을 바치자

15) 李光洙 ‘指導者 諸氏 選氏 苦心談’ 『每日新報』1940. 1. 5.

우리 모든 땀을 바치자  
 우리 모든 피를 바치자  
 우리 충성에 불타는 머릿속을, 심장을 바치자.  
 동포야 우리들, 무엇을 아끼랴  
 내 생명에서 나온 것이라고 말하지 말지어다.  
 내 생명 그것조차 바쳐올리자  
 우리 임금님께, 우리 임금님께 16)

이 시는 1945년 4월 소위 ‘외지동포처우개선(外地同胞處遇改善)’이라는 명목으로 일본제국주의의 귀족원령증개정안과 중의원의원선거법개정안이 통과되어 한국으로부터도 칙선귀족원의원 7명과 중의원의원 23명을 일본제국주의의 국회에 보낼 수 있게 되었는데, 이에 앞서 1월 17일 ‘처우감사궐기대회’에서 낭독한 시이다. 일본제국주의가 패전에 임박하여 선심용으로 던져준 소위 ‘처우개선’을 ‘내선일체’의 실현으로 착각하여 더욱 더 충성을 맹서하는 이광수의 감격벽(感激癖)에는 말 그대로 질리지 않을 수 없다.

당시 한국문단의 중심적 존재로서 때로는 민족주의자로, 때로는 교육자 사상이 언론인 실천운동가로, 때로는 문학자로 시 소설 평론 수필 등 거의 전분야에 걸쳐 다면적 활동을 펼쳐 항상 화제의 주인공, 물의의 표적이 되었던 이광수, 그는 친일문학에서도 어김없이 한발 앞서 가며 중심적 위치를 고수했던 것이다.

### 3) 징병제 실시의 감격과 피로서 이루어지는 ‘내선일체’ - 최재서

최재서는 이 무렵 ‘신체제문학’의 실천으로서 징병제를 제재로 한 ‘보도연습반(報道演習班)’이라는 소설을 썼다. 소설 ‘보도연습반’은 잡지사에 근무하는 문학자 송영수(宋永秀)가 조선군 보도부의 명령으로 ‘문화보도전사연성(文化報道戰士鍊成)’에 참가, 대동강변의 대동창영(大同廠營)에 입영하여 군인정신과 충군애국을 깨달아 간다는 소위 ‘황민연성(皇民鍊成)’의 과정을 그린 것이다.

소설 속의 송영수는 최재서 자신이라고 보아도 될 것이다. 주인공 송영수는 ‘만주사변, 지나사변(支那事變 = 중일전쟁), 대동아전쟁(大東亞戰爭 = 태평양전쟁) 등 연속되는 강렬한 지진에 의해 땅이 무너져 내려도 그것을 날렵하게 뛰어 넘지 못하고 있었다. 하나의 사실의 의미를 그의 이론이 소화시킬 때쯤이면 또 다른 두 개 세 개의 사실들이 그의 발 밑에 나타났기 때문이다. 조숫물은

16) 李光洙 ‘모든 것을 바치리’ 『每日新報』 1945. 1. 18.



점점 먼 바다로 밀려 가고 있었지만 그는 그저 갯벌에 떠밀려 온 나뭇조각처럼 움직일 수가 없었을’ 정도로 시국의 흐름에 따라가지 못하는 우유부단한 사람이었다.

그러나 ‘보도연습반’에 참가하는 ‘모험’을 감행하고부터는 그의 가슴에 ‘황국 신민’으로서의 신념이 확실히 자리잡기 시작했다. 또한 그는 거기서 만난 한국인 지원병들의 ‘당당한 체격, 엄숙 단정한 태도, 자신만만하면서도 겸손함을 잃지 않는 얼굴 표정, 그 중에서도 그들의 칼라에서 빛나고 있는 별 견장(구일본군 복장의 일부)처럼 빛나는 눈동자와 격렬한 신념에 찬 이야기’를 듣고 깊은 감명을 받음과 동시에 ‘한 사람 한 사람의 얼굴과 말 속에 나타나는 진지함, 성실함, 확신, 정열’을 확인하고 징병제의 성공을 확신하기에 이른다. 그리하여 마음 속으로 ‘젊은 조선의 모습이 여기에 있다’고 되뇌인다. 송영수는 훈련 도중 휴식시간에 눈 앞에 전개되는 한국의 농촌을 바라보면서 다음과 같이 생각한다.

‘그렇다, 여기에는 초목처럼 짧디 짧은 생명이 매일처럼 거친 숨을 쉬고 긴장하고 불타오르고 그리고 단련되어지고 있는 것이다. 평화스러운 농촌과 거칠은 군대훈련! 이 두 개념은 송영수의 머리 속에서 얼른 결합되지 않았다. 그는 황급히 자신의 주위를 뒤돌아 보았다. 저 산처럼 유구한 야마토민족(大和民族), 그 유구한 생명력으로부터 더욱 더 비약하려는 저토록 짧디 짧은 일본국. 그렇다, 일본은 지금 저 초목처럼 활기에 넘쳐 있는 것이다. 그리고 비약하지 않으면 안 된다. 일본의 비약만이 동아의 10억을, 아니 세계의 파탄을 구할 수 있다. 조선 2천 7백만은 내지 동포 7천만을 도와서 이 성스러운 과업을 이룩하지 않으면 안 된다(인용자역).’ 17)

그리고 이러한 농촌으로부터 나온 조선인 지원병의 모습을 다음과 같이 묘사하고 있다.

‘그들은 전부 000 지방 출신으로 모두 가난한 농민의 아들로 태어나 어린 아이로는 감당하기 어려운 생활고를 안고 막일꾼으로 혹은 토목공사로 혹은 만주에서의 희망 없는 방랑의 세월로 나날을 보내지 않으면 안 되었다. 그들이 어렸을 때부터 얼마나 학교를 동경하였으며 지금에 이르기까지도 학문이라는 것에 얼마나 열등감을 품고 있는가를 알고 송영수는 가슴이 아팠다.

그러므로 그들에게는 징병제의 실시는 구세주와도 같은 것이어서 일부 무책임한 사람들이 생각하듯 관리나 마을 유지의 강요로 군문을 들어선 것이 아니

17) 崔載瑞 ‘報道演習班’ 『國民文學』 1943. 7月號. 33~34쪽.

었다. 어머니의 반대와 친구들의 비웃음을 받지 않은 사람은 한 사람도 없었고 그러한 반대를 이겨내고 그들은 벌써 흔들림 없는 확신을 갖고 훈련소의 문을 두드렸던 것이다. 이러한 이야기를 들어 보니 그들의 나라의 은혜에 대한 감사와 보은(報恩)의 마음이 귀동냥하거나 입에 발린 소리가 아님이 단번에 수궁이 갔다.

그러나 뭐라고 해도 그들이 군대에 들어와 이룩한 성장은 커다란 것이었다. “지금까지의 조선인은 다른 사람의 보트에 타고 온 것과 같았습니다. 지금부터는 스스로 저어 가지 않으면 안 됩니다” 라고 오오하라(大原) 상등병은 말했다. 이것이 소학교를 나왔을 뿐인 22, 3세 청년의 말이라고 할 수 있을까? 이 소박한 말 속에는 어떠한 정치가의 웅변보다도 어떠한 시인의 문장보다도 뜻깊은 의미가 들어 있었다.

오오카와(大川) 상등병은 또한 다음과 같은 이야기도 들려 주었다.

“작년 12월 어머니가 돌아가셔서 처음으로 청원휴가를 받아 집으로 돌아왔습니다. 그랬더니 마을 사람들이 호기심에 차서 찾아 왔습니다. 그 중에는 19살 된 아우를 둔 저의 친구가 한 사람이 말하기를 너는 지원병이 되어서 잘 됐다. 내 아우도 어찌피 징병되어 갈 바에야 지원병이 되었으면 좋았다고 생각한다고 말했습니다. 마을에서 그래도 유식하다는 말을 듣는 청년이 이렇게 정떨어지는 말을 하고 있는 거예요. 단지 징병이 되어서 입대했대서야 말이 안 되지요. 가슴 속 깊이 황국신민이 되어 있지 않은 사람은 군대에 들어 와서부터가 더 비참해진다고 생각합니다” 이 간단한 이야기 속에 얼마나 심жат한 진리가 숨어 있을까?

소학교 3년 밖에 다니지 않았다는 기요모토(清本) 상등병은 솔직하게 다음과 같은 의견을 말했다. “내지인 사회가 훌륭한 것은 군대훈련을 받았기 때문이라고 생각합니다. 아무리 학식이 있어도, 아무리 돈이 있어도 군대훈련을 받지 않으면 한 사람의 인간이 되지 못한다고 생각합니다. 지방인(민간인을 비웃는 일본제국주의의 군대 용어 — 인용자)은 아무리 해도 군대와 같이는 될 수 없으니까요” 이 말에 모두들 웃었지만 그러나 거기에는 선서식날 보도부장이 한 “병영은 인생대학이다”라는 말의 실증이기도 했다.

군대에 들어와서 괴로운 일은 없었느냐는 질문에는 모두들 미소를 흘릴 뿐으로 아무도 대답하지 않았다. 과연 그들은 그 괴로움을 미소로 기억할 만큼 성장해 있는 것이다. 그 대신 감격했던 기억을 하나 들쭉 가지고 있지 않은 사람은 하나도 없었다. 그 감격이란 간단히 말해 내무반이 친절하다는 것과 상관들이 내지인과 조선인의 구별 없이 대해 주므로 내지 출신의 전우들과는 진실로 피를 나눈 형제처럼 친하게 지낼 수 있는 데서 오는 것 같았다. “나는 장래 내지 동포와 일심동체가 되어 제일선에서 일하고 싶습니다”라는 가네모토(金本) 상등병의 말은 이윽고 10명의 목소리가 되고 그것은 또한 내무반 생활에서

자연적으로 올려 퍼지는 합창임에 틀림 없었다. 어떠한 문제나 논의라도 이곳에서는 단순한 실천에 의해서 신속히 처리되는 듯했다. 그리하여 충군애국이라는 말이 하나하나의 동작으로 번역되어서 확실하게 소화되어 가는 듯했다(인용자역).’ 18)

근대 일본 군대의 중요한 기반은 농촌이었다. 농촌은 말하자면 장병의 공급원이었던 것이다. ‘양병양민(良兵良民)’의 사상에 입각하여 군대는 항상 일반사회에 대한 영향력을 행사하려 했고 군대를 사회교육의 원점에 놓으려는 ‘국민교육의 장’ 즉 ‘국민의 학교’로 간주했던 것이다.<sup>19)</sup>

‘천황의 군대’로서의 정신교육을 중시한 일본제국주의의 군대는 정신주의가 맹위를 떨쳐 복잡한 억압구조 속에서 곁마음(建前, 다테마에)과 속마음(本音, 혼네)의 괴리가 심각한 문제로 잠재해 있었던 것이다. 최재서의 소설에도 이 점은 나타나고 있다. 지원병이 농민의 아들이라든지, 군대를 ‘인생대학’으로 묘사해 근대주의로 보고 있는 점, 최재서가 알아채지 못하고 있는 바 지원병이 일본인과 동등하게 대우받고 있다는 발언은 세뇌교육에 의한 곁마음의 표출이라는 점, 군인들이 소위 ‘지방인’인에 대한 우월감을 드러내고 있는 점 등은 일본제국주의 군대의 특징을 상징적으로 요약하고 있는 것이다.

그리하여 이 소설은 최재서의 목적의식이 선행되어 작자 자신의 시국에 대한 의식적인 성실성만이 공허하게 올려 퍼지고 있는 것이다. 그야말로 소설 전체가 곁마음의 표출에 시종하고 있는 것이다. 최재서가 그토록 감격적으로 묘사하고 있는 지원병의 생활은 실제로 그렇지 못했던 것이다.

‘이들 식민지 출신의 병사들은 많은 수가 도망을 기도했던 데에서도 드러나듯이 언어와 생활습관 등의 차이에서 오는 차별에 시달리고 개인적 제재(制裁)의 대상으로 비인간적인 상황에 처해 있었다. 이러한 민족적 편견과 차별감정은 일본인 병사에 공통적으로 널리 퍼져 있어 조선인 지휘관에 대한 비판적인 언동도 서슴치 않았다.’ 20)

피지배민족의 인간이 지배민족의 군대에 입영하여 차별을 받지 않는다는 설정은 최재서의 관찰이 얼마나 피상적이고 작위성에 넘쳐 있는가를 짐작하고도 남음이 있는 것이다. 따라서 최재서에게는 문학은 예술 혹은 정신적 산물이 아니라, ‘황민화’와 ‘내선일체’를 실천하기 위해 만들어져야 하는 하나의 목적에

18) 위와 같은 책. 46~48쪽.

19) 大濱徹也, 小澤郁郎 『帝國陸海軍事典』 同成社 1984. 7頁.

20) 위와 같은 책. 17頁.

불과했던 것이다. 더욱이 징병제란 ‘황국신민’이 되어야 하는 한국인의 의무이고, 그리고 그것을 획득하기 위한 수단 의미가 있었던 것이다.

#### 4). 지원병제 실시와 출세주의로서의 ‘내선일체’ - 김동환

지원병을 제재로 한 작품 중에는 김동환(金東煥, 白山靑樹로 창씨개명)의 ‘권취천명(勸君就天命)’이란 시도 있다. 그 일부분이다.

‘이인석(李仁錫) 군은 우리에게 보여 주지 않았던가  
그도 병(兵)되어 생사를 나라에 바치지 않았던들  
지금쯤 충청도 두메의 이름 없는 농군이 되어  
베옷에 조밥에 한평생 묻혀 지내었겠지  
웬걸 지사, 군수가 그 무덤에 절하겠나  
웬걸, 폐백과 훈장이 그 젓상에 내렸겠나.

그대 안 나가면 어떻게 되나 —  
변호사를 하겠지, 교사나 중역이 되겠지  
그러나 한편 남대문과 종오에 폭탄이 떨어지고  
그대의 처자는 미영병(米英兵)에 모욕을 당하면 어떻게 하리  
이 일은 파리 대학생과 이태리 학도들이 먼저 모범을 보여주지 않았는가  
“조국을 나아가 막지 않는 자엔 천벌이 내리느니라!”<sup>21)</sup>

이인석(李仁錫)은 식민지 한국의 충청북도 옥천군 출신으로 ‘육군특별지원병’ 제1기생으로 입영하여 중국 산서성(山西省) 방면의 전투 중 1939년 6월 22일 전사했다는 ‘반도 출신 지원병 최초의 전사자’이다. 당시 일본제국주의 군부는 그를 신격화하여 식민지 한국으로부터의 지원병 동원의 절호의 선전자료로 이용했다.<sup>22)</sup>

또한 ‘귀축미영(鬼畜米英)’사상은 식민지 한국에도 대대적으로 선전되어 있음이 이 시에서도 나타난다. 실제로 1942년 3월 일본제국주의 군부는 ‘일본민족의 우월성을 아시아의 타민족에게도 느끼게 하여 영·미 숭배사상을 일소하기 위해’ 말레시아에서 사로잡은 약 천명의 포로를 식민지 한국에 끌고 와 시가행진을 시킨 사실이 있다. 이것이 ‘극동국제군사재판(極東軍事裁判, 1946~48, 東京)’에서 문제가 되었음은 주지의 사실이다.<sup>23)</sup>

21) 金東煥 ‘勸君就天命’ 『每日新報』 1943. 11. 6.

22) 朝鮮總督府 情報課 編 『新しき朝鮮』 行政學會 1944. 48~50頁.

김동환의 인격이 그대로 반영되어 있는 이 시를 읽고 있다면 지원병 지원이 ‘천명(天命)’이고, 죽어서 유명해지지 않겠으나, 지원병에 지원하지 않으면 천벌이 내린다는 등 시적 표현과는 거리가 먼 구호가 직선적이고 노골적으로 튀어나와 이해하기에 주저되는 부분이 적지 않음을 느낄 수 있다. 가난한 농촌 출신 젊은이의 목숨을 그야말로 주저함이 없이 가지고 놓고 있는 것이다.

1924년 한국 최초의 근대장편서사시 ‘국경의 밤’을 낸 김동환은 1929년 경복궁에서 조선총독부가 주최한 ‘조선박람회’ 개최를 즈음하여 총독부가 기자들에게 배풀어 준 선전비 200엔(圓)을 기반으로 잡지 『삼천리(三千里)』를 창간했다. 그는 1938년 전후의 소위 ‘신체제’에 적극적으로 영합하여 이듬해 1942년 5월호부터 잡지명을 『대동아(大東亞)』로 개제, ‘내선일체’와 ‘황민화’의 실천에 광분했던 천박한 출세주의에 내달렸던 문학자이다.

### 5). 군신사상(軍神思想)의 식민지화 - 정인택

한편 정인택(鄭人澤)은 1943년 ‘뒤돌아 보지는 않으리’라는 소설을 썼다. 지원병에 지원한 아들이 어머니에게 보내는 편지 형식을 취한 이 소설 속에는 일본제국주의에 대한 ‘애국적 충성심’이 그야말로 넘쳐 흐르고 있다. 그 일부분을 보이면 다음과 같다.

‘내가 고향을 떠나면서 “어머니, 이제 곧 도쿄(東京)를 보여드릴게요. 벚꽃이 만발한 꽃의 도시 도쿄 말이예요.”라고 말하자 어머니는 눈을 동그랗게 뜨고 킬킬 웃고 있는 나의 얼굴을 말없이 바라보았지요?’

그 말의 의미는 내가 죽는다는 것이었어요. 죽으면 나는 황공하웁게도 정국신사(靖國神社)에 모셔진다. 그러면 어머니는 유족의 한사람으로 나를 만나러 도쿄에 갈 수 있다. 그런 의미였던 거예요. 어머니는 하루라도 빨리 도쿄에 가고 싶지 않으세요?

웃으면서, 나가서 죽으라고 말할 수 있는 어머니라면 물론 내가 정말로 죽었을 때 울거나 한탄하거나 자세가 흐트러지거나 하지는 않으시겠지요?

천황 폐하의 방패가 되어 전쟁터에서 꽃으로 산화한 자식 때문에 보기 싫게 울며 슬퍼하는 일본의 어머니는 한 사람도 없습니다. 어머니. 나라를 위해 전장에 나가 훌륭하게 죽는다, 그것은 천황 폐하의 나라에 맞추어 태어난 남자가 가장 자랑으로 여길 일이며 바라는 일입니다.

그러므로 그것은 어머니에게도 결코 슬퍼할 일이 아니며 한탄할 일도 아닙니다. 그러기는커녕 더 없는 영광이요 기쁨이기도 한 것입니다(인용자역) 24)

23) 内海愛子, 村井吉敬 『赤道下の朝鮮人叛亂』 勁草書房 1987. 35~36頁.

이 소설은 한국인 아들이 한국인 어머니에게 보내는 편지임을 의식하여 글자 사용에도 한자를 쓰지 않는다든지, 쉽게 읽고 이해하기 편하도록 가타가나(片假名)만을 쓴다든지 한글 표기법을 흉내내어 띄어쓰기를 한다는 등 자질구레한 잔재주를 피우고 있지만, 일본제국주의가 주장하는 ‘언어의 주술(言靈)’이 질릴 정도로 직선적이고도 노골적으로 자갈처럼 튀어 나와 최소한도의 리얼리티도 확보하지 못하고 있다.

그야말로 제목 그대로 그 어느 누구도 ‘뒤돌아 보지 않는’ 졸작인 것이다. 이름도 없는 어린 지원병이 자신의 죽음에 대해 이처럼 태연할 수 있을까. 또한 이토록 초연한 사생관을 가질 수 있을까. 과연 한국인 어머니들이 일본제국주의가 말하는 ‘정국신사(靖國神社)’의 ‘군신사상(軍神思想)’을 얼마나 믿고 있었을까. ‘군국(軍國)의 어머니상’을 무리하게 날조해 낸 것이고, 소위 ‘황국신민’의 억지판이 조작되어 있다.

## 6). 한국인 구원의 길 ‘황민화’ - 장혁주

장혁주(張赫宙)의 소설 ‘순례(巡禮, 뒤에 ‘岩本志願兵’으로 개제)’도 한국인 지원병을 다룬 작품이다. 소설은 화자인 내가 고려신사(高麗神社, 日本의 埼玉縣 高麗郡에 있는 神社)에 참배를 가서 그 참배의 계기를 만들어 준 이와모토(岩本) 지원병을 회상하는 것으로부터 시작된다.

식민지 한국에서의 지원병제도와 징병제 실시의 소식을 듣고 ‘기쁜 나머지 가슴이 두근거린’ 나(장혁주)는 식민지 한국의 어느 기관의 초청으로 단기입소 훈련을 지원한다. 거기에서 만난 지원병이 이와모토이다. 이와모토(岩本)는 일본에서 태어나고 자란 한국인이었다. 이와모토는 술주정뱅이 아버지와 계모의 가정에서 자란 데다 ‘군인이 될 수가 없어’ 비행을 거듭한다.

그러나 ‘소년××소 위탁생 교육장’이라는 마루오카학원(丸岡學院)에 들어가 ‘황민으로서의 연성’을 받는 한편 고려신사에 참배하고 천 이백 년 전의 한국인이 여기에 이주하여 일본인이 된 사실을 알고 ‘내선일체’가 거짓이 아님을 깨닫는다.

이윽고 한국인에게도 지원병이 ‘허가되었을 때’ 곧바로 지원한다. 또한 나는 ‘내선일체’에 대하여 설명하는 훈련소의 교관에게 ‘황민화란 말은 조선인에게는 고대로의 환원’이나고 묻자 ‘단순한 환원이 아니라 황민에의 도약’이라는 대답을 듣고 깊은 감명을 받는다.

단기입소훈련 기간 중 다시 태어난 인간으로서 ‘황민화’를 실천하고 있는 이와모토를 보고 나는 ‘징병제의 실시는 조선의 황민화 촉진이라는 측면에서도

만드시 필요하다’는 확신을 갖는다. 일본에 돌아온 나는 마루오카학원을 방문한 후 고려신사에의 참배를 결심하게 된다. 고려신사의 경내를 향하면서 천 이백 년 전에 일족 1797명을 이끌고 이곳에 이주하여 ‘내지인’이 된 고려왕 약광(若光)의 역사를 생각하고 이와모토를 각성시킨 그 감격을 맛보는 것이었다. 그리하여 손을 씻고 양치질을 한 뒤 신전 앞에 서서 ‘이와모토가 한층 훌륭한 병사가 되고 조선동포 전부가 하루빨리 황민화를 완성하도록’ 비는 것이었다.<sup>25)</sup>

이 시기(1943년)는 장혁주가 노구치 미노루(野口稔)로 창씨개명하고 ‘일본문학보국회’의 회원으로서 그 산하의 ‘대륙개척위원회’, ‘황도조선연구위원회’에 소속하여 ‘황민화’는 물론 일본제국주의의 중국 대륙 침략을 찬미하고 돌아다닐 때이다.

위의 소설에서도 장혁주는 한국인 소년 이와모토가 비행에 빠져든 원인을 일본에서의 민족차별에서 오는 어두운 가정환경보다도 일본제국주의의 군인이 되지 못하는 울분에 중점을 두어 이와모토의 입대 후에 술주정뱅이 아버지가 개과천선했다든지 계모가 참회한다는 식으로 호도, 이와모토 집안의 불화가 마치 ‘황민화’의 기회가 없었기 때문인 것처럼 날조하고 있다. 식민지 한국에 지원병제도가 실시되면서 이 가정의 갈등도 해결되고 평화가 찾아왔다는 것이다. 장혁주로서는 한국인이 인간답게 사는 길은 ‘황민화’ 밖에 없었던 것이다.

그리고 이 실감은 장혁주에게는 사실이었던 듯 소설 속에서도 그 기쁨을 ‘조선에 지원병제와 그 뒤를 이어 징병제가 실시되어 너무 기쁜 나머지 가슴이 다 떨렸다. 그런데 자신의 나이를 생각하니 일년 뒤에 불혹으로 혼자 뒤에 남겨지는 적막감이 잔재처럼 가라앉았다’<sup>26)</sup> 로 표현하고 있다. 친일문학에서 식민지 한국에의 징병제 실시는 한국인이 ‘황국신민’으로서 받아들여야 할 의무이며 일본인과 대등하게 될 절호의 기회로 인식되었던 것이다.

일본사회에서 생활하면서 차별과 빈곤에 허덕이면서 비행을 거듭하던 소년이 의식 있는 일본인의 ‘황민연성’ 교육에 감화되어 역사적 근원에서의 확신을 가지고 지원병에 입대, 그 꿈을 이룬다는 장혁주의 ‘순례’는 전형적인 ‘신체제문학’ 곧 친일문학 작품의 하나인 것이다.

이러한 작품에서도 드러나듯이 ‘신체제문학’이란 기본적으로 일본제국주의의 ‘국책’에 충실한 것으로 최재서가 말하는 ‘국민 성격 형성력으로서의 문학’을 노리고 있다. ‘국민계몽’에 매진하여 모든 문체와 모순을 ‘일본이라는 조국관념’으로 수렴시켜 ‘내선일체’와 ‘황민화’로 해결하려는 획일성을 보이고 있는 것이

25) 張赫宙 ‘巡禮’ 『每日新報』 1943. 9. 22. (이 작품은 1943년 9월 7일부터 22일까지 연재되었다. 후에 ‘岩本志願兵’으로 개제되어 창작집 『岩本志願兵』에 수록되었다)

26) 위와 같음. 1943. 9. 7.

다.

이러한 소위 ‘국책’의 실천 즉 지원병과 징병을 비롯해 강제연행의 희생자가 주로 농촌에서 나왔다는 사실은 식민지 한국에 있어서 상징적인 것이라 할 수 있다. 1920년대부터 궁핍화가 거세게 몰아친 한국의 농촌은 수많은 유민의 무리를 생산했다. 이러한 한국 농촌의 경제적 궁핍과 젊은이의 영웅심을 노려 일본제국주의는 지원병, 학도병, 징병, 징용 나아가서는 여자정신대(중군위안부)까지 인력동원에 혈안이 되어 있었던 것이다.

이렇게 동원된 한국인들은 저 명분없는 전쟁에서 온갖 차별과 억압과 소외감에 시달리면서 꺼져가는 생명의 불꽃을 호소할 길 없는 울분으로 달래야 했던 것이다. 그러함에도 식민지 한국의 친일문학자들은 일본제국주의의 패망이 명백해진 1943년에 이르러서도 ‘신주불멸(神州不滅)’을 맹신하는 ‘결전문학(決戰文學)’를 공허하게 외쳐대고 있었던 것이다.

## 7) 민족적 굴종과 신분상승의 길 - 이광수

이광수는 1941년 소설 ‘그들의 사랑’(『신시대(新時代)』 1941. 1~3월호 연재)을 썼다. 이 소설은 ‘내선인(內鮮人)’ 간의 애정문제를 비롯해 민족감정, 편견, 민족의식의 처리와 ‘황민화’의 필요성 등 당시의 모든 문제를 취급하려 한 이광수의 야심작이다.

이 소설은 지금은 이학박사로 가솔린 대용의 액체연료를 발명한 마키하라 가츠지(牧原勝治, 李元求)가 가난한 고학생 시절, 의학박사로 국학자요 한학자인 니시모토 집안에 가정교사로 있으면서 일본정신을 체득해 가는 과정을 회상하는 것으로 시작된다.

이원구(李元求)는 니시모토 집에 있을 때 니시모토 집안의 딸 미치코(道子)에게 구애한 일로 쫓겨 난 것으로 되어 있다. 조선 덕화론자(德化論者)로 경성제대 교수인 이시모토 마사오(石本正雄)의 감화를 받은 경성제대 학생 니시모토 다다시(西本忠)는 동급생으로 아버지가 세상을 떠나 학업을 계속하기가 어려운 이원구의 사정을 알게 된다.

다다시는 이원구를 도와주기 위해서도 또한 그를 ‘진정한 천황의 신민’으로 만들기 위해서도 동생 다카시(孝)의 가정교사로 함께 살도록 한국인에 대해 매우 회의적인 아버지 니시모토박사를 설득한다. 함께 생활하면서 다다시는 이원구를 ‘재인식’하게 되는 것은 물론, ‘조선동포 전체를 재인식’하는 것이다.

지금까지의 자신의 조선인을 보는 눈이 ‘경계와 천착(穿鑿)’, ‘의심암귀(疑心暗鬼)’의 비뚜러진 것이었음을 깨닫는다. 한편 이원구도 ‘조용하고 예의 바르고



신앙심(日本神道)이 깊은’ 니시모토 집안에 비해 ‘조선인의 가정생활이 얼마나 방만하고 무질서한가’를 알게 되고 ‘조선에는 이 가정과 비교할 수 있는 집안이 없다’고 확신한다.

이원구가 본 일본인의 미덕은 예의 바름, 청결, 정직성, 애타심, 근면성 등 최고의 가치뿐이었다. 또한 조선인의 일본인에 대한 편견도 조선인이 일본인의 생활태도를 배워서 조선인의 나쁜 점을 고쳐 나가야 된다고 생각하기에 이른다.

니시모토 집안에는 다다시의 여동생 미치코가 있었는데 둘 사이에 서로 애정이 싹트는 것을 느끼게 된다. 이렇게 하여 이원구의 ‘일본정신’의 수련도 순조롭던 어느날 추계야유회에서 친일발언을 한 이원구가 동급생들에게 집단 폭행을 당하는 부분에서 소설은 갑자기 중단되었다. 중단 이유는 확실하지 않으나 잡지사는 ‘부득이한 중단’<sup>27)</sup>이라고 쓰고 있다. 이광수는 이 소설로 또 다시 한국인의 분격을 산 것이다.

그러나 이 소설에도 이광수의 문제의식이 추구되고 있다. 우선 일본인의 한국인에 대한 자세와 사명을 지적한 점이다. 이광수는 소설 속에서 경성제대 교수 이시모토 마사오의 입을 빌려 다음과 같이 말하고 있다.

‘조선동포를 이끌어서 천황의 충성된 신민이 되게 하는 일을 할 자가 누구나 하면 그것은 곧 그대들이란 말이다. 조선에 와 있는 내지인들이란 말이다. 관리나 교사만이 그런 것이 아니라, 무릇 일본사람이면 누구나 이 사명을 졌단 말이다. 그런데 우리는 이 사명을 다하였는가. 못하였다. 그대들은 조선동포가 누구인지도 모르고 있지 아니한가’<sup>28)</sup>

이 이시모토교수도 이광수의 상투적인 일본인상 즉 이상적 인간상의 한 사람이다. 이러한 일본인상은 당시의 차별구조로 보아 결국 이광수 개인의 희망사항에 불과하다.

다음이 한국인과 일본인 서로의 편견문제. 이 점에 대해서도 이광수는 맥빠진 해결방법을 보인다. 민족 간의 편견의 지적은 민족성에까지 비약할 수 있는 복잡한 문제인데, 이광수는 한국인에 대한 일본인의 편견을 한국인에게 원인이 있다고 있다고 보아, 일본인을 모범으로 하여 한국인측의 전면적인 수정을 요구하고 있다.

민족단위의 사고에 빠져 1926년 수양동우회(修養同友會)를 조직하여 ‘인격수양과 완성’을 신조로 하는 이광수의 눈에는 일본인과 비교하면 한국인은 구

27) 『新時代』 1941. 5月號. 編輯後記. ‘餘滴’ 304쪽.

28) 李光洙 ‘그들의 사랑’ 『新時代』 1941. 1月號. 155쪽.

제가 불가능한 민족인 것이다.

다음으로 보이는 것이 자민족 불신. 주인공 이원구는 다음과 같이 말한다.

‘우선 광주학생사건을 보시오. 그것이 어떻게 조선 청년 전체에게 불행을 주었는가. 수백 명 학생은 지금 철창에 있소. 설사 그들이 사회에 나오더라도 그들은 나라의 죄인으로 여러 가지 자격과 자유를 잃을 것이요. 또 이런 어리석은 일이 있었기 때문에 조선 청년은 더욱 더욱 국가의 신임을 잃어서 엄중한 감시 밑에 있게 될 것이요. 다행히 이 어리석은 군중심리가 진정되었거니와’<sup>29)</sup>

이 발언에 분격한 한국인 동급생들이 이원구를 폭행하는 부분에서 이 소설은 중단된다. 이광수의 한국독립에 대한 불신은 독립운동 자체를 부정한다.

이 소설에서도 이광수는 광주학생의거를 ‘군중심리’로 보고, 독립운동을 하는 사람을 ‘국가의 죄인, 비국민, 조선민족을 독살하는 자’로 선언하고 있다. 여기에도 이광수의 ‘무저항’의 정신이 노예적 복종임이 드러난다. 그의 ‘천황귀의(天皇歸依)’ 신념이 어느 정도 강한 것인가를 알 수가 있는 대목이다.

이러한 사고방식은 1939년 『문장(文章)』에 발표한 ‘무명(無明)’의 연장이다. ‘무명’에서는 일본제국주의의 정치범인 주인공이 감옥에서 성자(聖者)의 얼굴을 하고 다른 죄수들에게 일본제국주의의 법을 지키라고 설교를 늘어 놓는다는, 구제할 길 없는 소설 내부의 자기기만적 모순이 드러나 있다.

다음이 한국인과 일본인의 애정문제. 소위 경성제대를 다니는 인테리 이원구가 니시모토 집안의 딸 미치코를 연모하면서도 자신을 체념시키는 부분에 다음과 같은 독백이 나온다.

‘첫째로 미치코는 내지인이 아니냐. 내지인 중에도 상류계급 사람이 아니냐. 그런데 나는 조선인이 아니냐. 조선인 중에도 빈(貧)한 조선인이 아니냐. 둘째로 미치코는 주인댁 아가씨가 아니냐. 그리고 나는 그 집에 부쳐서 사는 서생이 아니냐. 안될 말이야! 안될 말이야!’<sup>30)</sup>

왕년의 자유연애론자이며 스스로 그것을 실천한 이광수가 왜 주인공의 의식을 이렇게까지 후퇴시키고 있을까. 자민족에게는 자유연애와 자유결혼을 설교한 그가 일본인 앞에만 서면 왜 이렇게 봉건적 비련의 상념에 젖어드는 것일까.

물론 소설이 중단되었다고는 하나 이제는 가솔린 대용의 액체연료를 발명한

29) 위의 책. 1941. 3月號. 302~303쪽.

30) 위의 책. 1941. 2月號. 266쪽.

대학자로 신분상승을 한 이원구와 미치코의 결혼이라는 해피엔딩의 결말은 눈에 보이듯 뻔한 것이지만, 이것도 결국 일본인과 결혼하기 위해서는 이 정도의 ‘황국신민’으로서의 의무와 역할을 완수하지 않으면 안 된다는 양민족의 개인적 애정문제에까지 ‘황민화’와 연결시켜 생각하는 이광수의 ‘신념’의 표현인 것이다.

여기에도 이광수의 일본인에 대한 민족적 비굴성과 왜곡이 드러난다. 이광수로서는 한국인은 소위 ‘황국신민의 연성’을 아무리 해도 언제까지나 부족할 수밖에 없는 것이다. 당시 문학에 있어 이런 종류의 작품이 일본인에 의해 나오지 않은 것을 생각하면 소위 친일문학에 나타난 비굴하고도 치졸한 연애 놀음과도 같은 양민족의 애정문제도 결국은 한국의 친일문학자 곧 ‘신체제문학자’들의 짝사랑에 불과한 것이었다. 소설 ‘그들의 사랑’은 이러한 자기모순과 억지논리 때문에 독자의 비난이 없었어도 중단되지 않을 수 없는 졸작이었던 것이다.

## 8) 천황귀일로서의 민족합일 - 최재서

최재서는 ‘신체제문학’과 관련된 ‘내선일체’를 다음과 같이 썼다.

‘금후 일본문학은 한편으로 그 순수화의 도를 점점 높여감과 동시에, 다른 한편으로 그 확대의 범위를 점점 넓혀 갈 것이다. 전자는 전통의 유지와 국체의 명징과 연결되는 일면이고, 후자는 이민족의 포용과 세계신질서와 연결되는 일면이다. 전자가 천황귀일의 경향이라면, 후자는 팔굉일우의 표현이다. 양면의 운동은 아무런 모순당착도 없이 동시적으로 달성되어야 할 것은 물론이다. 일본정신은 능히 이 양자의 조화를 성취할 것이다. 사실 일본은 지금까지 몇 번이고 외래문화와 접하여 멋들어지게 그것을 소화시켜 왔고 또한 소화시킴으로써 국체관념을 보다 명백하게 하여 왔던 것이다(인용지역)<sup>31)</sup>

여기서 최재서는 소위 ‘내선일체’를 원심력으로서의 ‘팔굉일우’와 구심력으로서의 ‘천황귀일’의 양면성으로 파악하고 있다. 그는 ‘내선일체’에 있어서의 ‘팔굉일우’로부터는 ‘이민족 포용’과 ‘세계신질서’에 연결되는 ‘종합성’을, 또한 ‘천황귀일’로부터는 ‘국체의 명징’과 연결되는 ‘황민화’를 찾아낸 것이다. 그러나 그에게도 역시 ‘순혈론’의 불안은 있었다.

‘나는 중학생 시절, 아리시마 다케오(有島武郎)씨의 어떤 문장에서 “조선에는

31) 崔載瑞 ‘朝鮮文學의現段階’ 『國民文學』 1942. 8月號. 17쪽.

국가가 없으므로 위대한 문학이 나올 수 없을 것이다”라고 말한 것을 읽은 적이 있다. 그 말은 아직 사색이 여물지 않았던 당시의 나를 절망 속으로 밀어 넣었었는데 오늘날까지도 머리 속에 늘어 붙어 떨어지지 않고 있다.

또한 최근 하야시 후사오(林房雄)씨가 전향작가를 논하는 자리에서 조선의 작가는 전향해도 돌아갈 조국이 없다고 말한 것이 여러 가지 과문을 일으킨 것 같다. 동정하여 한 말일 테지만, 잘못 된 동정이라는 것을 깊이 반성해야 할 것이다. 다음으로 처치곤란한 것이 민족론인데, 이것도 반도내에서 문제가 일어나기보다 내지의 언론계가 여러 가지 물의를 일으키고 있다. 요컨대 나치스류의 순혈론이 그것이다.

그렇게 말하고 있는 사람들도 뭔가 조선을 일부러 제외하려는 의미는 아니겠지만 어쨌든 결론적으로 국민문화 건설에 있어서 조선동포를 제외하는 일이 일어난다면 여간 곤란한 일이 아니다. 내선일체론은 더욱 나아가서 신민족의 창성과 신문화의 창조에까지 이르는 현실을 무시해서는 안 된다(인용자역)<sup>32)</sup>

이 문제에 대한 역사성에의 탐색이 그가 말하는 ‘일본국가를 발견하는 데 이르는 혼(魂)의 기록’<sup>33)</sup> 으로서의 소설 ‘비시(非時)의 꽃’과 ‘민족의 결혼’이다. ‘민족의 결혼’(『國民文學』 1945. 2월호)은 신라의 왕족 김춘추(金春秋)와 신라에 의해 멸망한 가야(伽倻) 왕족의 후예 김유신(金庾信)의 누이동생 문희(文姬)와의 결혼이라는 역사적 사실(史實)을 제재로, 신라인과 가야인의 화해와 삼국통일의 대업을 이룬 주역들을 결합시킨 사건을 형상화함으로써 소위 ‘내선일체’를 암시하려 한 작품이다.

김춘추는 뒤의 무열왕(武烈王), 김유신은 그때의 명장, 그리고 김춘추와 문희 사이에서 태어난 왕자가 삼국통일후에도 한반도에 눌러 앉으려는 당(唐)나라를 몰아낸 문무왕(文武王)이다. 이 소설에서 김춘추와 문희의 결혼은 신분상승

32) 위의 책. 16~17p. 이 하야시 후사오(林房雄)의 ‘약자(弱者) 짓밟기’ 발언은 당시의 한국인에게 많은 충격을 주었던 듯 김용제(金村龍濟)도 다음과 같이 언급하고 있다.

‘하야시 후사오씨가 어딘가에 쓰기를 “우리들은 전향해도 돌아갈 조국이 있지만, 그들(조선인 — 인용자)에게는 그것이 없다”고 말한 모양이다. 그때 나는 저런, 저런, 실언(失言)이겠지 하여 문제시할 필요 없다고 여색한 위로를 하고 만 적이 있다. 그 당시의 조선의 전향자라 해도 전부 실제로 그렇게 보아서는 안 된다고 믿고 있다. 그것은 한편으로 하야시(林)씨 자신의 당시의 의식이 조선의 전향자를 올바르게 이해할 만한 자신이 없었다고 말할 수 밖에 없다. 동시에 일본제국이 조선인의 조국이라는(또한 그렇게 되어야 한다는) 것을 하야시씨가 인식하지 못한 단견(短見)이라고 밖에는 말할 수 없으며, 어쨌든 나로서는 쓸쓸했고 하야시씨를 위해 오히려 슬퍼했던 것이다. “우리들의 조국 일본”을 마음으로부터 외쳐 부르고 있는 조선의 인텔리겐차와 민중을 신뢰할 수 없다는 말인가, 아니라면 그 따위 발언을 즉각 중지해야 할 것이다. 아니면 하야시씨의 조국관이 것처럼 결벽스럽고 편협했던 말인가. 나는 다만 역사의 이름으로 하야시씨가 다시 한번 오늘날의 조선을 진지하게 재인식해 주기를 기원한다’(金村龍濟, ‘日本への愛執’ 『國民文學』 1942. 7월號. 26쪽.)

33) 崔載瑞 『轉換期の朝鮮文學』 人文社 1943. 6頁.

을 노린 김유신의 계략으로 보는 것이 타당한 것으로 ‘민족의 결혼’으로 보는 것은 억지논리이다.

이것도 역시 최재서의 ‘역사의 환상’이다. 주지하는 바와 같이 일본의 관학자(官學者)들은 『일본서기』의 ‘임나(任那)’ 기술과 고구려 광개토대왕 비문(碑文)을 날조, 결합시켜 야마토조정(大和朝廷)이 한국 남부를 식민지로 통치, 소위 ‘임나일본부(任那日本府)’를 가야(伽倻)에 두었다고 주장했다(任那日本府說).

따라서 최재서가 가야 왕족의 후예 김유신의 신라 조정에의 혈연적 진출을 ‘민족의 결혼’이라고 보아 ‘내선일체’를 암시하려 한 것은 그 선구성과 역사적 실재성이라는 측면에서의 ‘환상’을 역사에서 찾아내려 한 작업인 것이다.

그러나 이 소설에서도 언급되고 있는 문무왕은 그 죽음에 이르러 자신의 능을 왜(倭)를 경계하기 위해 동해에 조성하도록 명했다. 이것이 유명한 ‘문무왕해중능(文武王海中陵)’인 것이다. 삼국통일 시기의 백제와 일본과의 관계, 이해중능의 존재 등은 실로 당시의 신라가 반왜(反倭)였다는 것을 말해 준다. 이것은 최재서의 자기모순을 드러내는 것에 다름 아니다.

그래서일까. 소설의 부기(附記) 형식으로 덧붙이고 있는 ‘후일담(後日譚)’에는 김춘추와 문희의 결혼이 신라 왕위계승의 원칙인 골품제도에 의한 성골지배(聖骨支配)로부터 진골지배(眞骨支配)로 이행된 신분제의 개방성과 그 의의에 대해 길게 서술하고 있다.

이른바 ‘피의 개방성’에 대한 암시이다. 그러나 이것도 논점이 빗나간 비약논리이다. 자민족의 역사에서 일어난 부분적인 개방성을 타민족의 개방성으로까지 비약시켜 주장할 수 있을 만큼 ‘내선일체’는 간단한 문제가 아니었던 것이다.

소위 ‘내선일체’는 일개 신분제의 개방 정도의 문제가 아니라 일본제국주의의 간계(奸計)가 몇 겹으로도 굴절되고 압축된 민족문제였던 것이다. 이러한 최재서의 자기모순과 비약논리는 결국 신라라는 조국 내부에서 전개되고 있는 것이고, 거기로부터 한 발자국도 밖으로 나가지 못하고 있다는 것을 말해준다.

이것은 최재서가 ‘일본국가를 발견하기에 이르는 혼(魂)의 기록’이 ‘일본국가’가 아니라 ‘조국신라’에서 머뭇거리고 있다는 것을 증명하고 있다. 최재서는 ‘피’를 찾기 위한 역사성에의 접근으로부터는 ‘혼’의 차원에서의 필연성을 확인하지 못했던 것이다.

‘비시(非時)의 꽃’(『國民文學』 1944. 5~8월호)은 삼국통일 이후를 배경으로 김유신의 아들 원술(元述)과 남해공주(南海公主)의 애정을 주제로 엮은 소설. 당(唐)나라 군사와의 전투에서 패배하고도 살아서 돌아온 원술은 조국과 부모에 대한 죄인이 된다. 그후 원술은 당군(唐軍)과의 전투가 있을 때마다 복면을 쓰고 출몰하여 무공을 세운다. 국가의 위기를 구한 원술은 가을에 피었기 때문

에 열매를 맺을 수 없는 ‘비시의 꽃’과 같은 자신의 운명을 깨닫고 남해공주의 사랑도 뿌리치고 불도에 귀의한다. 소설 ‘비시의 꽃’은 자기희생적 구국애를 그린 작품이다.

이 두 작품은 어느 쪽이나 시국을 의식하여 쓴 것이지만 그 문학적 공간은 신라이다. 이것은 최재서가 신념으로서의 ‘일본’과 피와 혼으로서의 ‘한국’ 사이에서 내적 갈등을 전개하고 있었음을 나타낸다. 그는 결국 ‘내선일체’의 필연성을 탐색함에 있어 일본제국주의가 말하는 바 ‘조상으로부터의 피의 연결’에 입각한 피의 합일성의 검색에 의해서는 피와 혼으로서의 한국을 지양(止揚)할 수가 없었던 것이다.

그로서는 오랜 역사를 이민족으로 각축하여 온 한국과 일본의 관계에 있어서 ‘내선일체’를 ‘피의 연결’로 필연화 할 수 없는 혼의 차원으로서의 한국이 문화개념의 장애물로 여전히 남아 있었던 것이다. 여기까지는 그의 신념의 측면보다는 논리의 측면 내지는 자기정체성(identity)의 확인작업이라고 볼 수 있다.

최재서는 이것을 해결하기 위해 고대에 있어서의 한국과 일본의 향일성적(向日性的) 문화교류를 한국문화가 일본문화의 종합성에 ‘귀의’한 것으로 파악했다. ‘내선일체’란 한국이 그가 말하는 일본문화의 종합성에 ‘귀의’하는 것이요, 또한 그 종합성의 재현(再現)이기도 했던 것이다. 그 ‘귀의’의 결집체는 물론 천황이다.

‘피’로서의 한국은 ‘팔굉일우’라는 ‘이민족 포용’의 종합성 속의 일단위(一單位)로서의 의미를 가질 수 있는 것이고, ‘혼’으로서의 한국은 ‘천황귀일’에 의해 ‘황도(皇道)’ 속의 일단위로서 존재할 가치를 가질 수 있다는 것이다. 이것이 최재서가 말하는 ‘신민족의 창성과 신문화의 창조’라는 말의 의미인 것이다.

이광수가 소위 ‘내선일체’의 연원을 ‘일시동인(一視同仁)’의 ‘황모(皇謨)’로 규정, 그 가부를 결정하는 것은 ‘단 한분 천황의 큰 마음’뿐이라 하여 한없는 천황애의 접근의식과 가치의존을 보이는 한편으로 역사적인 ‘피의 연결’을 주장하며 한국인의 더 많은 헌신으로 ‘순혈론’에 대응한 것에 비해, 최재서는 그가 것처럼 감격하여 맞이한 한국애의 징병제 실시를 ‘이민족 포용의 종합성’으로서의 ‘팔굉일우’를 실천하는 기회로 본 것은 물론이고, ‘내선일체’에 있어서의 한국인의 ‘불안과 의심’을 해소하는 ‘단적이고 명쾌한 해답’으로 규정, 이것에 의해 ‘반도인(조선인)은 명실공히 황국신민이 되어 대동아의 지도민족이 될 수 있는 길이 열렸다’고 보아 그 유효성을 가지고 ‘순혈론’에 대응한 것이라 할 수 있다. 말하자면 피의 희생 위에 선 권리의 획득인 것이다.

그러나 최재서의 이러한 신념도 현실과의 불협화음과 친일문학의 반민족성의 일방통행성에 의한 폐쇄회로에 떨어져 버린 듯, 다나카 히데미츠(田中英光)

의 소설 ‘취한 배’에는 최재서의 한 단면이 다음과 같이 묘사되고 있다.

‘경석(輕石)과 같이 무뚝뚝한 얼굴로 최건영(崔健榮)이 들어온다. 이 사람은 오래 전 경성제대 개교 이래의 좋은 성적으로 영문과를 졸업하고 전에는 맑시즘 문예이론가로 조선 제일의 인물이었다고 한다. 그 탓인지, 돌맹이 같은 완고함이 있어 지금도 때에 따라서는 본부(本府, 朝鮮總督府 —인용자)의 관리들에게도 불당이 같은 기세로 대든다. 관리들은 끝에 가서는 언제나 권력으로 상대를 압도해 버린다. 그런 식으로 압도당했을 때 억울해 하는 최의 표정은 보고 있는 사람의 마음까지도 어둡고 슬프게 하는 처참함이 있었다. 그 때문에 누구나가 최의 가슴 속에 뭔가가 있고 솔직하게 살고 있지 않다고 눈치채고 있었다. 그러나 그 만큼 그의 이면의 생활은 역시 일본의 군관권력과 연결되어 있다고 상상할 수 있는 것이다. 그러므로 그는 울어도 울어도 속이 후련하지 않은 견딜 수 없는 생활을 하고 있을 것이다. 취했을 때의 술버릇이 고약한 것은 유명했다. 가라시마(唐島)박사라도, 츠다 지로(都田二郎)라도 가리지 않는다. 가슴 속으로부터 경멸하고 있다는 태도로 울부짖듯이 고함을 지르며 채떨이, 그릇손에 잡히는 대로 던져 버리는 것이다(인용자역)’<sup>34)</sup>

여기서 최건영은 최재서, 맑시즘 문예이론가는 주지주의 문예이론가로 하던 되고, 가라시마박사는 가라시마 츠요시(辛島驍), 츠다 지로는 츠다 다케시(津田剛)로 보면 될 것이다.

여기에는 우선 일본제국주의의 ‘미코시(神興), 관리, 무법자’<sup>35)</sup>들이 다 갖추어져 있음을 알 수 있다. 조선총독부의 관리든, 가라시마 혹은 츠다든, 그들은 우선 일본인이기 때문에 시혜의식을 가지고 지배민족의 우위성을 발휘하면서 당당히 ‘내선일체’든 ‘황민화’든 주장할 수가 있었다.

그에 비해 최재서는 식민지의 굴복한 지식인이었다. 식민지 지배하의 현실 속에서 자기모순, 갈등, 부조리에의 저항, 인격파탄 등 인간파괴가 어쩔 수 없는 조건이었던 것이다. 최재서의 이러한 상처받은 양상은 다음 단계에서는 발광하여 이욕과 자살에 이르는 폐쇄회로에 들어섰다고 할 수 있는 곳까지 도달했다는 추측을 가능하게 한다. 그러나 그 전에 일본제국주의의 패망이 왔다.

이렇게 친일문학에 나타나는 ‘내선일체’의 논리 속에는 ‘역사의 환상’의 현실화와 그 현실에서 우위성을 확보하고 있는 일본인에의 향상심리가 보인다. 그 속에는 진실로 일본제국주의의 우위성에 편승하려 했으나, 결코 그 우위성에는 오를 수 없는 식민지 한국의 친일파들의 비극성이 투영되어 있는 것이다. 또한

34) 田中英光 ‘酔いどれ船’ 『田中英光全集』 2卷. 芳賀書店. 1945. 274~275頁.

35) 丸山眞男 ‘軍國支配者の精神形態’ 『現代政治の思想と行動』 未來社 1988. 129頁.

그 속에는 일본인과 닮았으나 결코 일본인이 될 수 없는 소위 ‘황민화’와 ‘내선 일체’의 차별과 억압 속에 투영된 친일문학자의 비극적 모습이 크로즈업되어져 어두운 시대를 더욱 어둡게 했던 것이다.

끝으로, 다음과 같은 모범답안적인 시(詩)도 있었다.

원정(園丁)

김 중 한 ( 金 鐘 漢 )

늪은 돌배나무에, 늪은 원정은  
사과나무의 새가지를 접목했다.  
잘 같은 칼을 놓고  
으스스 추운 유리빛 하늘에 담배연기를 흘려 보냈다.  
“그런 일이 있을 수 있을까요?”  
천천히, 원정의 아내는 고개를 갸우뚱했다.

이윽고, 철쭉이 웃음을 팔았다.  
이윽고, 버드나무가 몸을 팔았다.  
늪은 돌배나무에도, 변명처럼  
두 송이 반의 사과꽃이 피었다.  
“그런 일도, 있을 수 있군요.”  
원정의 아내도, 처음으로 웃었다.

그리고, 버드나무는 실연했다.  
그리고, 철쭉은 늪어 시들었다.  
“내가, 죽을 무렵이면”  
늪은 원정은 생각했다.  
“이 가지에도 사과가 열릴 것이다.  
그리고, 내가 잊혀질 무렵이면 ……………”

과연, 원정은 죽었다.  
과연, 원정은 잊혀졌다.  
늪은 돌배나무 가지에는 추억처럼  
사과의 빨간 볼이 주렁주렁 빛났다.  
“그런 일도, 있을 수 있군요”  
원정의 아내도 지금은 죽었다.(인용자역)<sup>36)</sup>

36) 金鍾漢 ‘園丁’ 『國民文學』 1942. 1月號. 58~59쪽.



여기에서 ‘늪은 돌배나무’는 한국, ‘사과나무의 새가지’는 일본을 은유하고 있다. 따라서 ‘접목’은 ‘내선일체’, ‘사과’는 ‘내선일체’의 결실, ‘철쭉’과 ‘버드나무’는 반대론자, ‘아내’는 회의론자로 유추된다. 나아가서 ‘원정’은 ‘내선일체’ 실행의 선구자이고, ‘내선일체’의 이상(理想)은 먼 미래의 자손의 대(代)에 그 결실의 꽃이 핀다는 교묘한 ‘내선일체’ 예찬의 시인 것이다.

그리고 작품 전체에 이해받을 수 없는 ‘내선일체’론자의 비애와 장래에 대한 확신이 멋들어서 대조를 이루고 있다. 특히 ‘접목’이라는 말로 ‘내선일체’를 은유하면서 ‘사과나무의 새가지’(일본)의 ‘뿌리’가 ‘돌배나무’(한국)임을 명확히 하여 어쩔 수 없는 자기정체성(identity)을 내세워, 교묘하게 반항정신을 표현한 문학적 감각은 가히 예술적 경지라 할 것이다. 이 시를 쓴 김종한은 1944년 9월 31세로 요절했다.

#### 4. 맺음말 - 친일문학이 다다른 곳

소위 친일문학으로서의 ‘신체제문학’은 식민지 지배권력이 문학자를 방관할 리가 없고 방관하지도 않았다는 점을 감안하더라도 끝나지 않은 문제는 여전히 남아 있다. 그것은 그들의 자발성(自發性)의 문제이고, 식민지 현실에 순응하는 현실타협의 지적 무기력의 문제이다. 그리고 식민지 시대의 친일행위들이 그렇듯이 그것이 갖는 반민족적 성격의 문제이다.

소위 ‘신체제문학’의 중요한 제재의 하나가 일본제국주의의 침략전쟁인 소위 ‘성전(聖戰)’ 참가의 문제였다. 주지하는 바와 같이 전쟁이란 국가와 국가, 민족과 민족 또는 집단과 집단이 각각의 운명을 걸고 싸우는 것이다. 그 국가, 민족 또는 집단은 같은 가치관과 목적 혹은 이데올로기에 의해 국가, 민족, 집단을 걸고 대결하는 최종적 행위인 것이다.

만주사변과 중일전쟁에 한국 민족의 이러한 요소가 하나라도 내포되어 있었을까. 하물며 태평양전쟁에 한국의 민중이 얼마나 참여의식을 갖고 있었을까. 당시의 한국은 식민지라는 시대상황이었고, 한국의 인적 물적 동원을 노리는 일본제국주의는 강제적으로 민중을 전쟁에 몰아 넣었으며, 친일문학자들이 외치고 있던 일본의 승리와는 반대로 민중은 일본의 패배를 기원하고 있었던 것이 실상이었다. 그리고 친일을 실천한 소위 ‘신체제’의 친일문학자들이 일본인의식 위에 서서 참여의식을 드러내며 그렇게도 꿈에 그리던 ‘야마토민족(大和民族)과의 동등한 지위’ 혹은 ‘아시아의 지도민족의 지위’는 획득되어졌던가.

이렇게 소위 ‘성전’에의 참여를 부르짖는 것은 일본제국주의에의 충실한 복

무와 굴복임은 물론, 한민족의 거대한 희생을 스스로 강요하는 행위이다. 나아가서 이것은 일본제국주의의 피해자인 한민족이 어느새 아시아의 가해자 쪽에 가담하는 모순마저 잉태하고 있었던 것이다(태평양전쟁이 끝난 후 아시아 각지에서 억울하게 희생된 한국인 전범자들을 보라<sup>37)</sup>).

따라서 친일문학의 다른 이름인 ‘신체제문학’의 중요한 주제의 하나인 한국인의 소위 ‘성전’ 참여문제는 한국 민중은 물론 아시아의 민중에 대하여 동시에 전쟁책임을 지지 않으면 안 되는 결과를 초래할 수 밖에 없는 자가당착(自家撞着)의 산물인 것이다.

이상 살펴 본 바와 같이, 소위 ‘신체제문학’이라 불렀던 친일문학의 논리성은 두 가지로 요약할 수 있다. 하나는 식민지 지배하의 현실수용과 타협이 그것이다. 현실이란 일본제국주의의 전쟁 즉 태평양전쟁 수행을 의미한다. 한국은 중일전쟁까지는 소위 ‘대륙병참기지’로 불리다가 태평양전쟁 이후는 소위 ‘대동아병참기지’로 불리는 데까지 이르렀다.

일본제국주의는 소위 ‘성전’의 확대에 따라 식민지 한국의 인적·물적 양면의 총동원체제가 긴급과제로 등장함에 따라 한국에 있어서의 ‘신체제’가 시작되었음은 물론이다. 악랄한 검열하에서의 문학자의 동원도 그 일환이었던 것이다.

또 하나는 식민지 지배 이념인 ‘황민화’와 ‘내선일체’의 수용이다. 친일문학 즉 ‘신체제문학’에서는 급변하는 ‘성전’의 전황을 반영하면서 ‘황민화’와 ‘내선일체’의 실천과 민중의 전쟁참여의식을 고취하는 작품의 창작이 중요시되었다. 말하자면 문학의 정치적 선전도구에의 전략인 것이고, 민족을 부정하는 동화정책을 수용했던 것이다.

식민지 한국의 친일문학 곧 ‘신체제문학’ 논의는 ‘총후문학(銃後文學)’ 혹은 ‘전쟁문학(戰爭文學)’으로 시작되어 ‘국민문학(國民文學)’과 ‘결전문학(決戰文學)’을 부르짖는 데에까지 나아갔다. 그 과정에서 식민지 지배 이념인 ‘황민화’와 ‘내선일체’의 실천이 중요시되었고, 귀결되는 모든 주제가 천편일률적으로 ‘황민화’와 ‘내선일체’로 모아졌던 것이다.

그리하여 그 중국에는 일본어로 창작하여 일본문학으로의 귀속을 목표로 하는 문학이었다. 여기에서 한국문학은 멸망한다. 이 단계에서 친일문학은 없어지는 것이고, 결국에는 일본문학으로 귀속되는 것이다. 결국 이 모든 행위는 반민족적인 반역행위였던 것이다.

37) 일본을 비롯해 아시아 49개소에서 한국인 148명이 BC급 전범자로 재판을 받았고, 이 중에서 23명이 사형을 선고받았다(內海愛子『朝鮮人BC級戰犯の記録』勁草書房 1983. はじめに 2頁)

## 【參考文獻】

柳宗鎬 ‘李孝石’ 『韓國의 人間像』 第五卷(文學者篇) 新丘文化社 1967. 515~516쪽.  
崔載瑞 『轉換期の朝鮮文學』 人文社 1943. 6頁.

内海愛子 『朝鮮人BC級戦犯の記録』 勁草書房 1983. はじめに 2頁.

内海愛子, 村井吉敬 『赤道下の朝鮮人叛亂』 勁草書房 1987. 35~36頁.

大濱徹也, 小澤郁郎 『帝國陸海軍事典』 同成社 1984. 7頁. 17頁.

田中英光 ‘酔いどれ船’ 『田中英光全集』 2卷. 芳賀書店. 1945. 274~275頁.

朝鮮總督府 『併合の由來と朝鮮の現状』 朝鮮印刷株式會社 1924. 1頁. 2頁.

朝鮮總督府 『新しき朝鮮』 朝鮮行政學會 1944. 25頁. 15~16頁.

朝鮮總督府 情報課 編 『新しき朝鮮』 行政學會 1944. 48~50頁.

丸山眞男 ‘軍國支配者の精神形態’ 『現代政治の思想と行動』 未來社 1988. 129頁.

陸軍省 新聞班 『時局の重大性』 1937. 11. 18. 66頁

『國民文學』 1942. 1月號. 58~59쪽.

『國民文學』 1942. 3月號. 6~7쪽.

『國民文學』 1942. 5・6月合併號 44~45쪽. 208쪽.

『國民文學』 1942. 5・6月合併號. 195쪽.

『國民文學』 1942. 7月號. 26쪽.

『國民文學』 1942. 8月號. 12~13쪽.

『國民文學』 1942. 8月號. 17쪽. 16~17쪽.

『國民文學』 1943. 7月號. 33~34쪽.

『國民文學』 1943. 7月號. 46~48쪽.

『國民文學』 1943. 10月號. 33~34쪽.

『新時代』 1941. 1月號. 155쪽.

『新時代』 1941. 2月號. 266쪽.

『新時代』 1941. 3月號. 302~303쪽.

『新時代』 1941. 5月號. 304쪽.

『毎日新報』 1940. 1. 5.

『毎日新報』 1943. 9. 7.

『毎日新報』 1943. 9. 22.

『毎日新報』 1943. 11. 6.

『毎日新報』 1945. 1. 18.

## 要旨

所謂戦争文学から決戦文学に至る「親日文学」である「新体制文学」の時局論議は、植民地支配権力が文学者を傍観する筈がないという事を勘案しても、当局の目を逸らす手段であるとか、権力の強制による屈服であるとかだけでは済ませない問題を未だに残している。

それは、彼らのその自発性の問題であり、植民地の現実に順応する現実妥協の知的無気力の問題である。そして、植民地時代の親日行為がそうであるように、それが持つ背民族的性格の問題である。

「親日文学」の重要な内容の一つが所謂「聖戦」参加の問題であった。周知の通り、戦争とは国家と国家あるいは集団と集団との戦いである。その国家または集団は、同じ価値観や目的、あるいはイデオロギーに支えられ、国家あるいは民族をかけて対決するのである。満州事変、日中戦争に於いて韓国民族にこのような要素が実在したのだろうか。また、太平洋戦争に韓国の民衆がどれ程の参与意識を持っていたのだろうか。当時の韓国は植民地という時代状況で、人的・物的資源の利用を狙う日本帝国主義によって強制的にかの戦争に巻き込まれて行ったのであるが、「親日文学」の文学者たちが叫んだ勝利とは裏腹に、韓国の民衆の動向は日本帝国主義の敗北を願っていたのが実状であった。

そして、いわゆる「親日文学」の文学者たちが日本人意識の上に立ち、参与意識を露にしたにもかかわらず、彼らが夢見た「大和民族との同等の地位」あるいは「アジアの指導民族」にはついに成り得なかったのである。

結局、これらの「聖戦」への参加を呼びかけるのは、日本帝国主義への忠実な服務と屈服を意味する事に過ぎないし、韓国民族の巨大な犠牲を強要する事に他ならないのは勿論、いつの間にか、アジアの加害者の方に加担する矛盾をはらんでいたのである。

したがって、いわゆる「新体制文学」の重要な主題の一つである韓国人の「聖戦」参加問題は、韓国の民衆とアジアの民衆に対して同時的に戦争責任を負わなければならない結果を招くしかない。

「親日文学」たる所謂「新体制文学」の論理は二つに要約できる。一つは、植民地支配下の現実受容と妥協がそれである。現実とは主に日本帝国主義の戦争遂行を意味する。韓国は、日中戦争までは所謂「大陸兵站基地」と呼ばれたが、太平洋戦争以後は所謂「大東亜兵站基地」と呼ばれるに至った。日本帝国主義は所謂「聖戦」の拡大につれて、植民地韓国人の人的、物的の両面にわたっての総動員体制が緊急課題となり、韓国に於いての所謂「新体制」が始まったのである。厳しい検閲の下、文学者の動員もその一環であった。

もう一つは、現実反映である。「親日文学」に於いては、急変する「聖戦」の戦況を反映しながら、「皇民化」と「内鮮一体」の実践と、民衆の戦争参与意識を鼓吹する作品の創作が重要視された。いわば、文学の政治的宣伝道具への転落であるし、この段階で「親日文学」はなくなって日本文学へ帰属するのである。

キーワード：『親日文學、新体制文學、皇民化、内鮮一体、新体制、聖戰、  
國民文學、戰爭文學

투 고 : 2011. 8. 31  
1차 심사 : 2011. 9. 10  
2차 심사 : 2011. 10. 1



# 한국의 울릉도 · 독도개척사에 대한 일본의 조작행위\*

-川上健三와 田村清三郎를 중심으로-

崔長根\*\*

(e-mail : nihonbu@daegu.ac.kr)

---

## 目次

---

1. 들어가면서
  2. 근대조선의 울릉도 · 독도 재개척의 실체
  3. 근대조선의 울릉도 재개척에 대한 일본의 조작행위
  4. 대한제국의 독도 개척사에 대한 일본의 조작행위
  5. 맺으면서
- 

## 1. 들어가면서

현재 일본은 「죽도」(한국의 독도에 대한 호칭에 대해 「죽도」라고 표기함)가 역사적으로나 국제법적으로 일본영토라고 주장한다. 오늘날 일본이 이처럼 「죽도」 영유권을 주장하는 근본적인 원인은 어디에 있다고 할 수 있을까? 연구자들 중에는 영토를 침탈하기 위해, 자원을 확보하기 위해, 국제사법재판소에 갖고 가기 위해 등등 다양한 의견을 그 요인으로 제시하고 있다. 그런데 필자는 그와 다른 의견을 갖고 있다. 일본이 영유권을 주장하는 근본 요인은 독도문제의 본질에 대한 일본정부의 착오에 의한 것이라 생각한다. 일본정부가 착오를 불러 온 근본적 요인은 다음 두 권의 선행연구에 있다. 그 하나는 1966년에 집필한 가와카미 겐조(川上健三)의 『竹島の 歴史 地理學的 研究』<sup>1)</sup>이고, 또 하나는 1965년에 집필한

---

\* 본 연구는 2010년 교육과학기술부 정책중점연구소 지원사업에 의해 연구되어졌음.

\*\* 대구대학교 일본어일본학과 교수 일본정치 전공

1) 川上健三(1966) 『竹島の歴史地理學的研究』古今書院. 『竹島の領有』(川上健三, 1953)를 보완함.

다무라 세이자부로(田村清三郎)의 『島根縣 竹島の 새로운 研究』<sup>2)</sup>이다. 가와카미는 이 책에서 「죽도 도해금제와 그 후의 송도」라는 큰 제목과 「한인의 울릉도 통치」, 「한인과 송도(독도)」, 「독도 명칭의 유래」, 「한국인의 송도(독도) 도항」라는 소제목으로 한인의 울릉도, 독도 통치를 부정하고, 「일본인과 송도」라는 소제목으로 일본인의 울릉도, 독도 통치를 강조했다. 한편 다무라는 본 책에서 「죽도의 영토편입과 관리」, 「죽도에 관한 어업행정」, 「죽도경영의 실태」, 「죽도의 광업권」이라는 제목으로 일본의 죽도경영을 과장 확대하는 방법으로 울릉도와 「죽도(독도)」의 영토적 권원을 조작하여 한국의 고유영토인 독도에 대해 역사적으로나 국제법적으로 일본영토라고 주장한다. 이는 필자들의 당시 직무가 중앙정부인 외무성 관리와 지방정부인 시마네현 관리라는 사실만으로도 충분히 국익을 위해 논리를 조작했음을 알 수 있다. 또한 일본국적자로서 역사학을 연구하는 학자이면서 독도 영유권문제에 관심을 갖고 있는 학자들은 모두가 한결같이 「죽도영토」는 없고, 「독도영토」만 있다는 결론을 내리고 있는 것으로도 충분히 알 수 있다. 이런 측면에서 이들 논리의 조작성과 왜곡성을 규명하는 것은 매우 중요하다. 따라서 본 연구의 목적은 이들 두 도서에 의해 조작된 일본적 논리를 분석하여 일본의 「죽도」 영유권 주장이 얼마나 모순에 찬 것인가를 밝혀내려는데 있다.

일본의 독도의 영유권 조작 계보는 평화선 조치 이후 가와카미 겐조(외무성)/다무라 세이자부로(시마네현)에서 조작된 논리는 최근에는 극우인사 시모조 마사오(타쿠슈쿠대학 교수)의 「죽도는 일한 어느 나라의 것인가」<sup>3)</sup>에 의해 그 망령이 되살아나고 있다. 시모조의 영토적 권원조작에 대해서는 별고에서 다루기로 한다.

본 연구는 1880년 이후부터 시작된 한국의 「울릉도·독도 개척사」에 대한 조작된 부분을 집중적으로 조명하려고 한다. 이는 곧 일본의 ‘다케시마’ 영유권 주장의 모순성을 규명하고 한국영토로서의 독도 영유권논리를 보강하는데 일조하리라 생각한다.

## 2. 근대조선의 울릉도·독도 재개척의 실체

### (1) 울릉도 재개척 이전의 독도에 대한 영토주권 인식

근근대 조선의 동해에는 세종실록과 동국여지승람에 울릉도와 우산도 2개섬이 존재한다고 기록되어 있다. 1667년 「은주시청합기」를 보면 일본의 서북경

2) 田村清三郎(1965) 『島根縣竹島の新研究』 島根縣總務課. 『島根縣竹島の研究』(田村清三郎, 1954)를 보완한 것임.

3) 下条正男(2004) 『竹島日韓どちらのものか』 文春親書377, 文芸春秋, pp.1-188.



계는 오키도로서, 일본쪽의 바다에 존재하지만, 조선쪽의 바다에 죽도(울릉도)와 송도(우산도, 지금의 독도)가 존재한다고 기록하고 있다. 즉 조선 동해에 2개의 섬이 존재한다는 인식은 조선에서나 일본에서나 마찬가지이다. 그런데 조선에서는 세종실록지리지와 동국여지승람 등으로 울릉도와 우산도를 조선영토로 인식하고 있다는 기록이다. 또한 숙종실록에도 안용복이 울릉도와 우산도가 조선의 영토임을 일본의 지방정부와 중앙정부에 따졌다는 기록이었다. 안용복의 주장에 대해 숙종실록에서 조정은 조선영토가 아니라고 기록하지 않았다. 오히려 안용복의 주장을 당연하게 받아들였던 것이다. 그러나 일본에서는 죽도와 송도가 일본영토로 인식하지 않았고, 무라카와 오타니 두 가문의 어부가 영유권을 주장한 것에 대해 적극적으로 일본영토로 인식했다는 기록은 없다. 물론 중앙, 지방정부가 영유권 의식은 갖고 있지 않았지만, 두 가문의 어부들이 「죽도(당시 조선의 울릉도)」에 내왕할 때 「송도(당시 조선의 우산도)」를 이정표로 삼았기 때문에 송도의 형상에 관해서는 상세히 알고 있었던 것이다.<sup>4)</sup> 그러나 섬에 대한 영유의식은 전혀 존재하지 않았다. 그런데 쓰시마 번에서 이 사건이 계기가 되어 죽도(울릉도)가 일본영토라고 주장했던 것이다. 결국 쓰시마의 주장은 막부에 의해 수용되지 못했고 조선영토로 인정되었던 것이다. 여기서 일본에서 말하는 송도에 대한 영유권 주장은 중앙정부의 막부, 지방정부의 돛토리 현, 한일 간의 외교를 담당했던 쓰시마에서도 하지 않았다. 영유권 인식을 갖지 못했던 것이다.

독도에 대한 영유권 인식은 조선에서만 울릉도와 더불어 우산도가 조선영토로 인식되었던 것이다. 조선이 특히 우산도에 대해 영유권 인식을 갖게 된 것은 특별히 우산도에 있어서의 경제적 가치 때문은 아니었다. 일찍이 쓰시마 번이 울릉도에 대한 영유권을 주장하였기 때문에 영토수호 차원에서 동해도서였던 우산도에 대한 영유의식이 생겨났던 것이다. 그러나 조선조정에서는 울릉도를 비웠을 때는 독도에 대한 영유의식을 갖고 있었지만 울릉도에서도 쉽게 확인할 수 없었던 섬이었기에 섬의 형상에 대해 구체적으로 알지 못하고 있었던 것이다.

울릉도는 조선 개국이후 도민을 보호하기 위해 섬을 비우고 관리했다. 섬을 비운 사이에 1592-98년 임진왜란 이후 일본인들이 침입하기도 했고, 쓰시마 번은 2번에 걸쳐 조선에 대해 울릉도의 영토주권을 주장하기도 했다. 그때마다

4) 호레키(寶歷) 연간(1751-63)의 가타조노 쓰안(北園通菴) 편저 『죽도도설』에는 송도를 가리켜 ‘오키국 송도’라고 하였으나, 이는 송도가 사람이 거주할 수 있는 섬도 아니고 2개의 암초로 된 섬임에도 불구하고 영유권을 주장하는 것은 죽도가 조선영토이면 송도는 일본영토이라고 하는 관념적인 주장에 불과하다. 당시 일본에서 「송도」에 대해 영유권을 주장할 만한 가치가 있는 섬인가를 알지 못했다.

조선조정은 조선영토임을 명확히 하여 울릉도를 영토로서 관리하여 영토주권을 수호해왔다.

요컨대 조선조정은 울릉도와 더불어 우산도에 대해서도 영토의식을 갖고 있었다. 일본에서도 울릉도에 대한 영유권을 주장할 입장이 못 된다는 것을 확인하고 울릉도의 영유권이 조선에 있음을 인정했다. 더불어 송도에 대한 영유권은 주장하지 않았다. 당시 일본에서는 조선 측의 동해에 죽도와 송도가 존재한다고 인식하고 있었기 때문에 두 섬은 국적을 달리할 수 있는 별개의 섬이라는 인식은 없었고 국적을 같이하는 부자 섬 또는 형제 섬 정도로 인식하고 있었던 것이다. 그래서 죽도(울릉도)의 영유권을 한국에 있다고 인정했을 때 송도의 영유권도 한국에 있다고 인정했던 것이다. 이러한 인식은 후술하지만 메이지정부도 동일하게 계승했던 것이다.

## (2) 울릉도 재개척을 위한 고종의 독도 영토인식

일본은 명치정부를 설립하여 국가목표였던 부국강병을 달성하기 위해 대외 진출을 본격화했다. 조선에 대해서는 강화도 조약을 강압한 이후 일본인들의 한반도 진출이 본격화되었고 예외없이 울릉도에도 다시 침입하기 시작했다.

일본들의 울릉도 침입사실을 확인한 조선조정은 울릉도 개척을 시작했다. 조선조정은 이규원을 관찰사로 파견하여 울릉도를 비롯한 동해도서를 조사하도록 하였다. 이때 조선조정은 동해의 모든 도서를 조사하여 영토로서 관리하겠다는 것이었다. 다시 말하면 동해의 도서는 조선영토라는 인식을 갖고 있었다. 이들 도서를 지금 관리하지 않으면 일본의 침입으로 영토를 수호하지 못할 수도 있다는 인식 때문이었다. 이규원의 조사보고에 따라 울릉도에 개척민을 파견했다. 그 이후 일본인들의 울릉도 침입은 부산영사관의 지원을 받으면서 더욱 과감해졌다.

고종황제가 이규원으로 하여금 울릉도조사를 파견하였을 때 울릉도, 송죽도, 우산도의 존재를 확인할 것을 요청했다. 즉 동해에 울릉도 이외의 섬이 존재한다는 사실을 알고 있었다. 이는 「세종실록지리지」, 「동국여지승람」의 울릉도와 우산도의 존재를 알 수 있었을 것이다. 동국여지승람의 삼입지도인 「팔도총도」를 보면 울릉도와 우산도가 거의 동일한 크기의 섬으로 그려져 있다. 여기서 고종은 우산도도 울릉도와 버금가는 큰 섬으로 인식하고 있었다고 하겠다. 그리고 「만기요람」군정편(1808년)에서 「우산도는 일본에서는 송도라 호칭한다. 우산도와 울릉도 모두 우산국의 영토이다.»<sup>5)</sup> 「증보동국문헌비고」(1792년)<sup>6)</sup>에서 「여지에서 이르기를 울릉과 우산은 모두 우산국 땅인데 우

5) 신용하(1996) 『독도의 민족영토사 연구』, 지식산업사, p.145, p.231 참조.

산은 곧 왜가 말하는 바의 송도이다」 7)를 통해 울릉도와 우산도 이외에 일본 사람들이 부르는 죽도 또는 송도라는 명칭이 존재한다는 것을 알고 있었다. 게다가 박석창의 「울릉도도」(1711년)와 김정호의 「청구도」를 통해 울릉도의 부속 섬이 「소위 우산도」로 표기되어 있다는 사실도 확인했을 것이다. 여기서 「소위 우산도」라고 하는 섬은 울릉도와 또 다른 섬이 아니고 울릉도 주변의 부속 섬에 불과한 것이었다. 그래서 여기서 고종황제는 동국여지승람의 동해의 2섬 울릉도와 우산도 이외에 「소위 우산도」로 표기되는 또 다른 작은 섬이 울릉도의 부속 섬으로 존재한다는 사실을 확인했던 것이다. 고종은 세종실록지리지와 동국여지승람에 등장하는 우산도와 박석창의 울릉도도의 「소위 우산도」가 동일한 섬이 아니라는 것을 확인했던 것이다. 즉 섬 명칭의 오류를 확인했던 것이다.

그렇다면 울릉도와 그 부속도서인 「소위 우산도」 즉 지금의 죽도, 그리고 또 다른 세종실록과 동국여지승람의 「우산도」 즉 지금의 독도의 존재를 명확히 알고 있었던 것이다. 당시 고종을 비롯한 조선조정에서는 울릉도 이외의 섬에 대한 영토의식이 존재했다. 다시 말하면 독도가 조선영토가 아니라는 인식은 없었던 것이다.

그러나 이규원은 동해도서를 조사할 때 업무태만으로 독도가 엄연히 존재함에도 불구하고 이에 대해서 고종황제에게 보고하지 않았던 것이다. 당시 메이지정부에서도 독도가 일본영토라는 인식을 갖고 있지 않았다. 오히려 울릉도와 더불어 외 1도는 일본영토가 아니라는 인식이었던 것이다.

고종황제는 동해에 3개의 섬이 존재한다는 생각을 하고 있었기 때문에 동해에 2개의 섬밖에 존재하지 않는다고 보고한 이규원의 주장을 전적으로 신뢰하지 않았던 것이다. 그것은 「황성신문」에서 보이듯이 1899년 동해의 도서를 조사하도록 한 것으로 확인된다.<sup>8)</sup>

### (3) 울릉도개척민의 독도영유권 인식과 칙령 41호 「石島」의 생성

중앙에서 파견된 이규원은 울릉도를 조사할 때 울릉도 주변의 바위만 조사했던 것이다. 독도에 대해서는 조사하지 않았다. 그때 조사한 바위와 섬이름은 섬의 크기순으로는 (1)큰바위(大巖) (2) 무지개바위(홍암 :虹巖) (3) 竹島 (4) 鳥項 순이었다. 그 외에 축기암, 형제암, 시어머니바위(老姑巖), 종바위(鐘巖),

6) 『증보문헌비고』(1908년 간행)는 원래 「증보동국문헌비고」(1792년)에서 인용한 것임,

7) 신용하(1996) 『독도의 민족영토사 연구』, 지식산업사, p.145, p.231 참조.

8) 일본인들의 울릉도 침입상태를 확인하기 위해 1899년 5월 배계주가 울릉도도감으로 재임명되었을 때 부산항 세관사를 동행했고, 그해 10월 내부관원 우용정을 울릉도시찰 위원으로 임명하여 한일 합동조사단을 파견했다. 신용하(1996) 『독도의 민족영토사 연구』, 지식산업사, pp.186-187 참조.

장군바위(將軍巖), 투구바위(주암; 冑巖), 꽃바위(華巖), 봉바위(鳳巖) 등을 표기했다.<sup>9)</sup> 이들 섬들은 모두 울릉도 주변에 산재된 암초이다. 암초가 아닌 섬으로서는 竹島와 島項이 있었는데 이들 명칭은 전래되어오던 명칭으로 판단되고 그 이외의 섬 명칭은 전래되어오던 명칭이거나 명칭이 없을 경우는 직접 형상을 보고 지은 명칭일 수도 있다.

울릉도민이 독도에 조업을 나갔다는 구체적인 기록이 남아 있지 않다고 해도 전혀 이상할 것이 없다. 기록문화가 발달되지 않은 당시로서는 어민들의 독도조업 상황을 기록할 리가 없다는 것은 너무나 당연하기 때문이다. 지금도 특별한 경우를 제외하고 조업일지를 남기는 어부는 없을 것이다. 독도를 어느 정도 영토로서 인식했느냐는 문제는 1900년 칙령 41호에서 「석도」라는 이름으로 행정관할구역에 포함시켜 통치했다는 것이 증거이다!<sup>10)</sup> 섬의 형상을 보고 지은 이름이 「석도」인 것이다. 독도를 가지 않았다면 어떻게 「석도(돌로 된 섬)」라는 사실을 알 수 없을 것이다. 그리고 행정관할에 포함시킬 정도라면 타국의 영토라는 인식이 전혀 없었다는 것이다. 그것은 사실 1905년 일본은 편입조치를 취하기 이전에 독도에 대한 영토주권을 주장한 적이 없었다.

1903년부터 나카이 요사부uro가 독도에서 강치잡이를 했다고 한다.<sup>11)</sup> 그때에 한국영토라고 생각되어 한국정부에 대여권을 제출하려고 했다고 한다.<sup>12)</sup> 1903년 시점의 산음지방 일본인들 사이에는 일본영토는 분명히 아니라는 생각을 했고, 이 섬이 한국영토로 인식되었던 것이다. 그것은 한국인이 관리하고 있었기 때문이었을 것이다. 그렇지 않으면 사람이 살수 없는 2개의 암초로 된 무인도임에도 불구하고 나카이가 어떻게 조선영토로 생각된다고 했을까?

중앙정부 차원에서 군함 니이타카호가 울릉도를 조사하면서 독도를 조사하였는데, 「울릉도사람들은 랑코도를 ‘독도’라고 쓴(書)다」라고 보고했다.<sup>13)</sup> 대한제국의 공문서상에는 칙령41호에서는 「석도」라고 기록되어 있지만, 울도군에서는 「독도」라는 호칭으로 공문서에 기록하여 일반적으로 통용되고 있다는 것을 의미한다.<sup>14)</sup> 다시 말하면 울릉도사람들이 독도를 어장으로서 활용하

9) 이규원 관찰사가 그린 「울릉외도」(1882)를 참고함.

10) 「旧韓国官報」第1716号, 光武4年 10月 27日, 신용하(1996) 『독도의 민족영토사 연구』, 지식산업사, pp.192-194 참조.

11) 「란코도 영토편입 및 대하원(1904년 9월 29일)」, 최장근(1910) 『일본의 독도·간도침략 구상』 백산자료원, pp.65-67 참조.

12) 奥村碧雲(1907) 『竹島及嶺陵島』, 최장근(1910) 『일본의 독도·간도침략 구상』 백산자료원, 1910년 p.63 참조.

13) 일본군함의 보고는 매우 중요하다. 당시 울도군의 독도인식을 의미한다. 독도라는 이름으로 영토 의식을 갖고 있었다는 것을 의미한다. 본군함의 보고의 신뢰성을 의심할 수는 없을 것이다.

14) 울도군에서 독도라고 호칭하여 영토로서 관리하고 있다는 사실을 명확히 확인하게 하는 사료이다. 이처럼 울도군에서 독도를 관리하고 있었다고 증명된다. 이를 부정한다면 타국의 영토를 침략

여 생활환경이 되어있다는 것이다. 이는 이미 울릉도에서는 독도라는 명칭이 정착되었다는 것을 의미한다. 2년 후 1906년 심홍택 군수가 방문한 일본인으로부터 독도침탈소식을 접하고 중앙정부에 보고했을 때 「본군 독도」라고 한 것으로 충분히 증명된다.<sup>15)</sup> 이러한 일련의 사료들로 미루어볼 때 1900년 칙령 41호로 울도군의 행정관할 조치된 「석도」가 울릉도에서는 「독도」였음을 알 수 있다. 조선시대의 중앙관청 호칭으로는 「우산도」였다. 칙령41호에서 우산도로 사용하지 않은 이유는 박석창의 「울릉도도」에서 우산도를 「죽도」에 비견하는 잘못을 범하여 그 후 청구도계통의 지도에서도 이를 답습하여 오류를 범하고 있었기 때문이다. 그래서 칙령 41호에서 「석도」 대신에 「우산도」라는 명칭을 사용할 수 없었을 것이다!<sup>16)</sup> 만일 사용했다라면 청구도나 박석창의 지도에 의해 「우산도」는 지금의 「죽도(땃섬)」으로 오인할 수 있기 때문이다. 이를 명확히 하기 위해서라도 칙령에서는 「석도」라는 명칭을 사용했던 것이다. 즉 울릉도민들이 독도의 형상을 보고 지은 「석도」라는 명칭을 사용했던 것이다. 석도라는 명칭은 울릉도민들의 「돌섬」 「독섬」을 공문서형식으로 만들어 붙인 이름이다. 이에 비해 「독도」라는 명칭은 울릉도민들이 순수하게 부르던 돌섬 혹은 독섬에서 진화되어 정착된 호칭이다.

심홍택 군수는 독도가 울릉도의 외향 100여리에 위치하고 있다고 했다.<sup>17)</sup> 황성신문 1906년 7월 13일에 의하면 대한제국 내부는 독도영토를 수호하기 위해 동해의 영토범위를 동서 60리 남북 40리 합이 200리라고 하여 통감부에 항의했다.<sup>18)</sup> 따라서 칙령41호의 석도가 독도임에 의심의 여지가 없다.

이러한 독도에 대해 일본은 강치를 남획해간 것을 가지고 실효적으로 섬을 관리한 것으로 해석하는 것 자체가 제국주의적 영토침탈 행위이라고 할 수 있다.

1882년 재 개척으로 울릉도에 일본인과 조선인이 혼재하고 있을 때 독도의 존재가 부각되기 시작했던 것이다. 이때 조선에서는 독도의 경제적 가치보다는 영역의 일부라는 영토로서의 상징적 가치가 더욱 컸기 때문에 독도에 대한 영유권 의식의 발생했던 것이다. 고종황제는 1899년 두 차례에 걸쳐 다시 울릉도 이외의 또 다른 섬 독도의 존재에 대한 조사를 보냈다.<sup>19)</sup>

하겠다는 행위로 간주할 수밖에 없다.

15) 최장근(1910) 『일본의 독도·간도침략 구상』 백산자료원, pp.69-92 참조.

16) 최장근(1910) 「대한제국의 울릉도/독도 영유권 조치-칙령41호'석도=독도' 검증의 일환으로」, 최장근, 『일본의 독도·간도침략 구상』 백산자료원, pp.83-86.

17) 「本郡所屬 獨島가 在於本外部外洋百餘里許이옵드니」, 『各觀察道案』 第1冊, 「報告書外」, 양태진편(1979) 『한국국경영토관계문헌집』 참조. 울릉도에서 독도가 100여리 외향에 있다는 인식은 황현이 집필한 「梅泉野錄」, 「梧下記聞」에도 기록되어있다.

18) 『皇城新聞』 1906년 7월 13일자.

사실 울릉도민들에게 있어서는 울릉도 동남쪽에 독도가 존재한다는 사실을 명확히 이해하고 있었다. 이는 울릉도에서 독도가 보인다는 것으로도 확인할 수 있고, 또한 일본인들에 의해 울릉도 도항 도중에 그 존재가 확인되어 수탈의 대상이 되고 있었기 때문이다. 울릉도민들의 독도도항은 점차로 빈번해지기 시작했고, 일본인들의 울릉도에 대한 약탈적인 행위가 독도에 대한 영토의식도 강하게 했던 요인이 되었다.

독도는 역사적 권원에 의거해서 보면 섬의 소유자는 한국임에 분명하다. 이는 부정할 수 없다. 이를 부정한다면 그 자체가 침략적 행위이다. 그런데 일본은 한국 몰래 독도에서 강치잡이를 했다고 하여 실효적으로 관리했다고 주장한다. 그렇다면 사람이 자주 왕래할 수 없는 섬인데, 주인이 없는 사이를 이용하여 몰래 그 섬에 들어가 이용했다고 해서 그 섬이 몰래 들어간 사람의 섬이 될 수 있을까?

이처럼 섬에 대한 도적행위도 오랫동안 방치하면 섬을 포기한 것이나 다름 없게 된다. 그런데 일본이 독도를 몰래 편입했을 때 조선의 지방정부와 중앙정부가 항의를 한 것은 타자에게 섬의 소유를 인정하지 않겠다는 것이었다. 1905년 일본의 '죽도'편입조치는 한국이 알 수 없는 상태에서 은밀히 조치한 것이기 때문에 무효이다. 일본은 조치 후 1년 뒤 1906년 울도군수에게 간접적인 방법으로 편입조치사실을 알렸을 때 한국은 이에 대해 일본 통감부에 항의했다. 이는 영토주권에 대한 수호차원이므로 실효적으로 관리했다고 할 수 있다. 그런데 이와 같은 영토주권 수호를 위한 항의를 무시하고 강제적으로 점유를 시도했다면 이것 또한 무효가 되겠다.<sup>20)</sup>

1904년 외무성이 나카이에 대해 영토편입원을 제출할 것을 요구하였을 때, 일본내무성은 「내무 당국자는 이 시국(러일전쟁-필자주)에 즈음하여 한국영지라는 의심이 있는 일개의 거친 불모지인 암초를 취하여」<sup>21)</sup>라고 한 것으로 보더라도 당시 일본정부 내에서도 독도가 한국영토라는 인식이 팽배했던 것이다.

당시의 독도는 경제활동을 위한 지역이 아니었다. 한국에 있어서는 독도가 비록 무인도이지만, 국토의 일부라는 경계로서의 상징성에서 영유의식을 갖고 있었던 것이다. 일본은 이러한 한국의 영유의식을 알고 있으면서도 몰래 무인도였던 독도에서 강치를 남획하였던 것이다. 나카이는 불법 남획에서 한국정부로부터 정식허가를 받아서 강치잡이를 하려고 했는데, 일본외무성은 무인도라는 것을 악용하여 「무주지」 선점론으로 영토침탈을 시도했던 것이다.

19) 각주 12) 참조. 신용하(1996) 『독도의 민족영토사 연구』, 지식산업사, pp.186-187.

20) 최장근(2005) 『일본의 영토분쟁』 백산자료원, pp.33-71.

21) 竹島広報文書科(1953) 『竹島関係資料』 第1卷.

일본은 영토편입을 정당화하기 위해서는 1905년 영토편입이전에 한국이 영토로서 인식하거나 관리한 적이 없다고 강변하고 있다. 조선의 영유의식에 관해서는 일본 측의 여러 문건 에도 등장하고 있다. 그런데 일본은 이를 부정하기 위해 실제로 독도를 관리한 증거를 제시하라고 주장한다. 독도는 경제적 활동이나 행정적 조치를 취할 수 있는 유인도가 아니다. 무인도이기 때문에 당시로서는 그냥 한국영토의 일부라는 인식이 존재하는 것이 전부라고 하겠다. 이것만으로도 당시로서는 영토로서 관리한 것이 된다.

일본은 독도의 강치를 은밀히 남획하고 이를 영토관리의 증거라고 주장한다. 타국의 영토에서 침략적으로 강치를 남획하고 이를 영토관리의 일환이었다고 하는 것은 침략성을 상징하는 제국주의적인 발상에 불과하다.

### 3. 근대조선의 울릉도 재개척에 대한 일본의 조작행위

#### (1) 근대조선 이전의 울릉도 영유에 대한 일본의 조작

위에서 살펴본 바와 같이 일본은 2번에 걸쳐 쓰시마를 통해 울릉도에 대한 영유권을 주장했고 그때마다 조선조정은 울릉도를 영토로서 주권을 수호해왔다. 조선은 영토수호정책의 일환으로 공도정책을 행했기 때문에 일본 측의 울릉도에 대한 영유권 주장에 대응하여 영토를 수호했던 것이다. 그런데 일본 영토론자들은 「조선조정은 울릉도 공도정책으로 영토주권을 포기했고, 일본은 조선이 포기한 울릉도를 실효적으로 관리했기 때문에 일본영토로서 권원을 갖고 있다.」<sup>22)</sup>라는 것이다.

쓰시마가 조선의 울릉도에 대해 영유권을 주장하다가 결국 막부에 의해 1696년 울릉도의 영유권을 포기하여 한국영토로 인정되었다. 그럼에도 불구하고 일본 영토론자들은 100년간 실효적으로 지배했다고 주장하는 것은 사료조작행위이다. 또한 일본에서 제작된 지도들 중에는 일본지도의 윗부분에 울릉도 독도자리에 ‘죽도’와 ‘송도’를 그려둔 것이 있다. 이러한 지도를 가지고 울릉도와 독도가 일본영토라는 증거라고 주장한다. 이는 영유권을 조작하는 행위이다. 예를 들면 나가쿠보 세키스이가 제작한 「日本與地路程全圖」, 하야시 시헤이가 그린 「삼국통람도설」 등이 여기에 속한다.<sup>23)</sup>

22) 일본외무성홈페이지, 「パンフレット「竹島問題を理解するための10のポイント」」 참조, [http://www.mofa.go.jp/region/asia-paci/takeshima/pamphlet\\_k.pdf](http://www.mofa.go.jp/region/asia-paci/takeshima/pamphlet_k.pdf)(검색일:2011.8.30).

23) 일본외무성홈페이지, 「パンフレット「竹島問題を理解するための10のポイント」」 참조, [http://www.mofa.go.jp/region/asia-paci/takeshima/pamphlet\\_k.pdf](http://www.mofa.go.jp/region/asia-paci/takeshima/pamphlet_k.pdf)(검색일:2011.8.30).

독도에 대해 일본 영토론을 주장하는 자들은 과거 일본제국주의시대에도 그러했듯이 조선의 영토였던 울릉도에 불법적으로 도항하여 약탈한 것에 대한 문제의식을 전혀 갖지 않고 오히려 이를 울릉도에 대한 일본의 영토적 권원이라고 주장한다. 이러한 것을 전혀 문제시하지 않고 아주 당연한 것처럼 생각한다. 이는 일본제국주의의 영토침략행위와 전혀 다를 바가 없다.

## (2) 근대조선의 울릉도개척에 대한 川上健三의 조작논리

울릉도는 조선조정이 영토로서 단 한 번도 방기한 적 없이 영토로서 관리하여 그 정통성을 이어받아 한국정부가 한국영토로서 관리하고 있는 곳이다. 가와카미는 울릉도에 대한 한국의 영토적 권원이 결여되어 있다고 사실을 조작하는 방법으로 독도에 대한 한국 측의 영토적 권원이 없다고 논리를 조작하고 있다. 다시 말하면 울릉도도 한국영토로서 권원이 부족한데 어떻게 독도를 한국영토라고 할 수 있는가라는 논리를 조작하기 위한 것이다.

가와카미는 「울릉도 통치」라는 제목으로 조선조정의 울릉도 지배에는 많은 문제점을 갖고 있다고 주장한다.

첫째로 안용복사건 이전의 울릉도 통치<sup>24)</sup>에 대해서는 울릉도를 방기한 것이라는 주장이다. 이는 올바른 지적이 아니다. 섬을 영토로서 포기한 정책이 아니라, 인민을 보호하기 위한 정책이다. 타국이 울릉도에 대해 영유권 주장할 때 그것을 인정했다면 포기한 것이라고 할 수 있다. 쓰시마 번이 1407년 3월 쓰시마 도주 宗貞茂가 平道全을 조선조정에 파견하여 포로 송환과 더불어 울릉도에 쓰시마 사람을 이주하여 거주하도록 요구하였을 때 영토주권 표시를 명확히 하여 쓰시마의 요구를 수용하지 않았던 것이다<sup>25)</sup> 이를 보더라도 울릉도를 포기한 정책이 아니라는 것을 알 수 있다.

둘째로 안용복사건 이후<sup>26)</sup>에 대해서는 공동정책이라는 이름으로 울릉도를 영토로서 관리하였지만, 안용복 사건 당시는 2년에 1번이었으나 시간이 지나면서 5년에 1번도 제대로 관리하지 않았다. 또한 조선인들은 입도도 할 수 없었지만 어업자제도 금지되었기 때문에 제대로 영토로서 관리하지 않았다는 주장이다.

여기서 중요한 것은 쓰시마 번에 울릉도의 영유권을 주장하여 조선조정이 일본의 중앙정부인 막부와 외교교섭을 통해 조선영토임을 확인받았던 것이다. 그 이후 일본이 울릉도의 영유권을 주장하지 않았고, 또한 실질적으로 울릉도

24) 川上健三著·권오엽역(2010) 『일본의 독도논리 -竹島の 歴史地理学的研究-』 백산자료원, pp.188-191.

25) 신용하(1996) 『독도의 민족영토사 연구』 지식산업사, p. 71.

26) 川上健三著·권오엽역(2010) 『일본의 독도논리』 백산자료원, pp.188-191.



에 침범한 자도 없었기 때문에 5년에 1번으로도 충분하였다면 그것으로 영토 관리가 충분했던 것이다. 이러한 사실마저 문제를 삼는다면 그것은 울릉도의 영토적 권원을 조작하려는 행위라고 말할 수밖에 없다.

근대조선의 울릉도 이주정책 실행<sup>27)</sup>에 대해서는 일본인이 먼저 울릉도에 들어가 개척하는 것을 보고 이에 자극을 받아 조선이 후발로 개척을 시작하였다고 주장한다.

울릉도는 조선영토이었음에도 불구하고 일본인들이 은밀히 잠입하여 약탈행위를 자행했던 것이다. 이러한 일본인들의 도적행위에 대한 비판도 전혀 없고 오히려 일본인의 영향으로 울릉도를 개척하기 시작했다고 한국측의 영토적 권원을 조작하고 있다.

근대 조선의 울릉도에 대한 행정조치<sup>28)</sup>에 대해서는 조선조정이 울릉도 개척을 실시했지만 청일전쟁 이전까지는 사실상 관리가 항시 상주한 것이 아니라 삼척과 평해 등의 연안지역 군관이 필요시마다 왕래하는 방식으로 소극적으로 개척에 임했다는 주장이다.

조선조정의 울릉도 관리정책이 소극적이든 적극적이든 그것으로 영토주권이 변동되는 것은 아니다. 가와카미는 울릉도에 대한 한국측의 영토적 권원을 흠집내기 위해 울릉도 관리에 소극적이었다는 논리를 조작하고 있다.

청일전쟁 이후 조선의 울릉도 관리<sup>29)</sup>에 대해서는 한국 측이 울릉도를 적극적으로 관리한 것은 청일전쟁 이후라는 것이다. 그리고 한일합병 이후는 郡을 道로 바꾸어 울릉도 관리에 소홀했다는 주장이다. 한일합병 이후는 일본제국주의가 울릉도를 침탈하기 위해 행정을 개편한 것으로 한국이 영토로서 울릉도 관리를 소홀히 한 것은 아니다.

가와카미는 위와 같이 사실을 조작하여 한국 측의 울릉도개척 사실<sup>30)</sup>에 대해 조선은 울릉도 개발에 소극적이었고, 사실상 울릉도 개발은 농업에 그쳤고, 어업행위는 1905년 일본이 시마네 현에 ‘죽도’를 편입한 이후 시작된 일본 어업을 배워서 1907년 이후부터 시작되었다는 주장이다. 이러한 주장은 한국 측이 일찍이 울릉도를 개척하였지만 독도에 대한 영토적 관리는 없었다는 논리를 만들기 위한 것이다.

사실 거리상으로 보면 조선본토에서 울릉도에 도항하는 거리보다 울릉도에서 독도에 항하는 거리가 짧다. 본토에서 울릉도에 도항한 사람은 농업을 위해 도항한 것이 아니다. 섬에서 거주한다는 것은 어업을 위한 도항이다. 조선본토

27) 川上健三著·권오엽역(2010) 『일본의 독도논리』 백산자료원, pp.188-191.

28) 川上健三著·권오엽역(2010) 『일본의 독도논리』 백산자료원, pp.188-191.

29) 川上健三著·권오엽역(2010) 『일본의 독도논리』 백산자료원, pp.188-191.

30) 川上健三著·권오엽역(2010) 『일본의 독도논리』 백산자료원, pp.188-191.

에서 울릉도에 도항해온 사람이 그 보다 더 가까운 독도도 도항하지 않았다는 주장은 설득력이 없다. 그리고 울릉도 사람들이 독도에 도항했다는 기록이 없다고 하여 도항하지 않았다고 단정하는 것은 사실관계를 조작하는 행위다. 그것을 현재 울릉도에서 독도가 보이지만 울릉도에서 독도가 보인다는 기록이 없기 때문에 울릉도에서 독도가 보이지 않는다고 주장하는 것과 별반 차이가 없다. 따라서 울릉도 거주민들이 어업에는 종사하지 않고 농업에만 종사했다고 주장하는 것은 독도에 대한 한국 측의 영토적 권원을 조작하는 행위이다.

### (3) 근대조선의 울릉도 개척에 대한 田村清三郎의 조작논리

다무라는 「조선수로지에서 관계되는 부분을 발췌하면 다음과 같다.」<sup>31)</sup>라고 하여 조선수로지를 인용하여 울릉도에 대한 한국영토로서의 권원을 부정하고 있다.

조선의 울릉도 공도정책<sup>32)</sup>에 대해서는 조선수로지는 조선이 공도정책으로 섬을 비웠는데 조선인들은 봄과 여름 우기에만 울릉도에 왕래했다는 것이다. 즉 조선이 울릉도를 상시적으로 관리하지 않았다는 주장이다. 울릉도를 관리하지 않았다는 것은 울릉도에 가까운 독도도 관리했다고 할 수 없다는 논리를 조작하고 있다.

반면 조선이 공도정책으로 섬을 방기 했을 때 오히려 일본인이 울릉도를 관리했다는 주장이다.<sup>33)</sup> 메이지 14,5년(1881-1882)에 일본인이 목재벌목을 위해 울릉도에 도항했다는 주장이다. 이는 사실상 조선영토인 울릉도에 대한 불법적인 약탈행위였다. 또한 1883년 이후에는 ‘재 조선국 일본인 통어장정 및 해관 세목“을 조인하여 일본인들의 공식적인 울릉도 도항이 증가했다고 주장한다.<sup>34)</sup> 이는 조선영토에 대한 불법침입에 속한다. 영토적 권원과 무관하다.

이처럼 다무라는 울릉도에 대한 불법 도항마저도 일본이 울릉도를 실효적으로 관리했다는 것으로 일본 측의 영토적 권원이라고 주장한다.

## 4. 대한제국의 독도개척사에 대한 일본의 조작행위

### (1) 독도개척사에 대한 川上健三의 조작논리

가와카미는 1905년 일본이 시마네 현에 ‘죽도’를 편입하기 이전에 한국 측이 독도를 관리하지 않았다고 하기 위해 전술한 바와 같이 한국은 울릉도 개척에

31) 田村清三郎(1965) 「島根県竹島の新研究」, p.34.

32) 田村清三郎(1965) 「島根県竹島の新研究」, p.35.

33) 田村清三郎(1965) 「島根県竹島の新研究」, pp.35-36.

34) 田村清三郎(1965) 「島根県竹島の新研究」, p.36.

도 소극적이었고, 게다가 농업에만 종사하였고 어업에는 종사하지 않았다고 논리를 조작했다.

이번에는 「한인과 송도」<sup>35)</sup>라는 제목으로 가와카미는 다음과 같은 논리로 한국 측이 독도를 직접 관리한 적이 없다고 주장한다. 한국 측의 독도관리 및 경영 그리고 영토인식 자체를 전적으로 부정하고 있다.

독도는 작은 2개의 암초로 되어있다. 따라서 독도를 영토로서 관리했다는 의미는 반드시 그곳에서 경제활동을 했다는 것만은 아니다. 중앙정부가 역사지리서에 포함시켜서 영토로서 인식하여 타국이 영유권을 주장할 때 영유의식을 분명히 하는 것이 독도와 같은 무인암초에 대한 영토관리방법이다. 일본이 말하는 것처럼 독도에 서식하는 강치를 잡아 멸종시키는 행위가 영토관리방식이라는 주장은 설득력이 없다.

가와카미는 「독도」 명칭의 유래에 대한 한국 측 주장에 대해 다음과 같이 반박한다.

먼저 최남선의 주장<sup>36)</sup>에 대해서는 한국의 저명한 역사학자인 최남선의 견해와 한국정부의 공식적인 견해 사이에 차이점이 있다는 것이다. 그러나 오늘날은 독도라는 명칭은 돌섬이라는 의미의 음을 취한 것이라는 설이 정착되어 있다. 학자에 따라 견해는 다를 수 있다. 정부입장에서도 역사학의 발전에 따라 종래에 입장에 잘못되었다면 올바른 인식으로 수정할 수 있는 것이다.

신석호의 주장<sup>37)</sup>에 대해서는 신 교수의 견해에 동조하면서도 1906년에 한국 측 문헌에 「獨島라고 쓴(書)다」라고 하는 것은 한국영토로서의 근거가 될 수 없다고 주장한다. 그 이유는 일본문헌에도 있기 때문이라는 것이다. 그런데 이는 사실을 조작한 것이다. 일본문헌에서 최초로 「獨島라고 쓴(書)다」라는 기록이 등장하는 곳은 1904년에 기록한 니이타카호의 군함일지이다. 1905년 일본이 시마네현에 편입하기 이전에 이미 한국에서는 「이 섬을 독도라고 쓴다」는 사실이 일본에도 알려져 있었다는 것이다. 일본이 1905년 시마네 현의 영토 편입 당시 독도가 「무주지」였다고 한 것은 논리 조작행위임을 알 수 있다.

가와카미는 이처럼 일본이 시마네 현에 ‘죽도’라는 이름으로 편입조치를 취하기 전에 이미 한국이 영토로서 관리하고 있었던 사실을 숨기고 1905년 「무주지 선점론」에 의한 일본의 영토편입의 정당성을 주장하고 있다.<sup>38)</sup> 1906년 경에 한국이 獨島라고 쓰게 된 것은 1904년부터 일본인이 한국인을 고용하여 독도에서 강치조업을 한 일본인의 영향에 의한 것이라는 주장이다. 이는 1905

35) 川上健三著·권오엽역(2010) 『일본의 독도논리』 백산자료원, pp.191.

36) 川上健三著·권오엽역(2010) 『일본의 독도논리』 백산자료원, pp.91-92.

37) 川上健三著·권오엽역(2010) 『일본의 독도논리』 백산자료원, pp.92-93.

38) 川上健三著·권오엽역(2010) 『일본의 독도논리』 백산자료원, pp.191-193.

년 일본의 불법적인 편입조치에 대한 합법성을 내세우기 위해 조선이 그 이전부터 영토로서 관리해온 사실을 부정하기 위한 것이다.

실제로는 한인은 ‘獨島라고 쓴(書)다’라고 한 출처는 1904년의 군함 니이타카호의 일지에 기록되어 있는 것이다.<sup>39)</sup> 이미 1904년 이전부터 독도라고 부르고 있었다는 것을 의미한다. 거슬러 가면 1882년에 울릉도에 이주한 거주민들이 독도를 알게 되어 그 이후부터 1904년 사이에 독도라는 명칭을 사용하고 있었다는 것을 의미한다. 1905년 일본이 ‘죽도’라는 명칭으로 편입하기 이전에 한인들이 독도를 영토로 인식하여 활용하고 있었음을 보여주는 증거이다.

가와카미는 「한국인의 송도 도항」<sup>40)</sup>에 대해 1907년 이후 일본인어부에 고용되어 처음으로 독도에 들어가게 되어 독도를 알게 되었다고 하여 독도에 대한 한국영토로서의 권위를 부정했다. 또한 일본의 해군수로부가 간행한 『조선 연안수로지』(메이지40년 간행)에 「메이지 37년 11월 군함 쓰시마가 이 섬을 실사했을 때는 동쪽 섬에 어부용 작은 초가집이 있었으나풍랑으로 심하게 파괴되어 있다고 한다. 매년 여름이 되면 ‘강치조업’을 위해 울릉도에서 도래하는 자가 수십 명에 이른다. 이들은 섬위에 작은 막사를 준비하여 매회 약 10일간 임시로 거주한다고 한다。」<sup>41)</sup>고 하는 내용이였다.

이에 대해 다나카 아카마로씨는 메이지 39년 논문<sup>42)</sup>에서 일본인은 1903년부터 강치잡이를 위해 실질적으로 독도에 도항하였지만 한국인은 이들 일본인에 고용되어 1906년부터 도항하기 시작하여 처음으로 독도를 알게 되었다고 논리를 조작하고 있다.

일본인의 독도도항<sup>43)</sup>에 대해서는 한국은 울릉도 제주 일본인들이 한국인들에게 오징어잡이를 가르친 이후 1907년 독도에 들어가게 되었지만, 일본은 1883년에 254명의 일본인들이 울릉도에 거주하고 있었기 때문에 이들 일본인들이 일본본토에서 울릉도에 도항하는 과정에 독도를 기항지로 활용했거나 울릉도 거주 일본인들이 독도에 왕래했다. 그러나 한국인은 독도까지 갈 이유가 없었다는 주장이다.

물론 일본인들이 1883년부터 울릉도에 도항을 하면서 독도를 확인한 것은 사실일 것이다. 그것과 영토주권과는 무관하다. 일본이 「무주지 선점이론」으로 독도를 편입한 것이 1905년이라면 그 이전에 한국이 독도에 대한 영토의식을 갖고 있었나 하는 문제가 중요하다. 1904년에 이미 한국이 ‘독도라고 쓴다’

39) 『軍艦新高戰時日誌』1904年 9月 25日条.

40) 川上健三著·권오엽역(2010) 『일본의 독도논리』 백산자료원, pp.193-194.

41) 川上健三著·권오엽역(2010) 『일본의 독도논리』 백산자료원, p.194.

42) 川上健三著·권오엽역(2010) 『일본의 독도논리』 백산자료원, p.195.

43) 川上健三著·권오엽역(2010) 『일본의 독도논리』 백산자료원, p.197.

는 기록이 일본측 문헌에 등장하고 있고, 또한 1900년 칙령41호로 ‘석도’라는 이름으로 독도를 행정적으로 관리되고 있었다는 사실만으로도 한국영토로 인식하고 관리하고 있었다는 증거가 된다.

반면 가와카미는 「일본인과 송도」<sup>44)</sup>라는 제목으로 다음과 같은 논리로 일본인은 한국인 보다 먼저 독도를 영토로서 인식했다고 논리를 조작했다. 즉 일본인의 독도에 대한 도항은 조선이 울릉도 공도정책을 실시했을 때부터 시작되었다고 주장한다. 그 증거로 하치에몬사건 때 송도도해를 명목으로 울릉도에 도해했다고 주장하였는데 그때 송도는 일본영토였기에 문제가 되지 않았다는 주장이다. 이는 사실이 아니다. 하치에몬사건 당시의 『죽도방각도』에는 송도(독도)와 죽도(울릉도)가 그려져 있는데 울릉도와 독도를 같은 색으로 채색하여 일본영토가 아니고 한국영토임을 분명히 했다. 도항금지령은 중앙정부의 정책에 의한 것이므로 당시 중앙정부의 영토인식이었다고 할 수 있다. 또한 이번 도항사건에서 막부가 송도도항에 대해 아무런 말을 하지 않은 것은 1696년 울릉도 도해금제를 내릴 때 송도도해를 금지하지 않았기 때문이다. 그 이유는 당시의 송도는 2개의 암초로 되어 있었기 때문에 도해면허를 할 만한 가치 있는 섬이 아니었기 때문이다.

또한 가와카미는 안용복사건 이후 독도가 일본영토였다는 증거<sup>45)</sup>를 제시하고 있다. 그러나 일부 민간인이 저술한 책자에서 중앙정부의 인식과 달리 송도를 일본영토로 표기하였다고 하여 그것으로 인해 일본측의 영토적 권원이 발생되는 것은 아니다.

가와카미는 다음과 같은 논리로 전근대에 독도에 한해서는 일본에서 영토의식을 갖고 있었기 때문에 이를 바탕으로 일본은 국민국가가 성립된 근대초기 까지도 독도를 일본영토로 인식했다<sup>46)</sup>고 주장한다. 즉 작은 암초에 단지 전복이나 강치잡이 정도로 이용되었기 때문에 기록으로 남겨진 증거는 없지만 오키 도민이 이용했다고 추측된다는 것이다.

여기서 일본 측 고문헌에 등장하는 ‘일본의 송도’라는 기록은 일부 민간인들의 영토인식이고 중앙정부나 지방정부의 인식은 아니다. 일부 어부들의 인식에 불과하다. 그런데 이를 일본영토로서 관리한 적극적인 증거라고 주장한다. 반면 한국 측의 관찬문헌에서 동해에 2개의 섬인 울릉도와 우산도(독도)가 존재한다는 기록이 있어서 중앙정부가 독도를 영토로서 인식했다는 사실을 부정하고 있다.

## (2) 독도개척사에 대한 田村清三郎의 조작논리

44) 川上健三著·권오엽역(2010) 『일본의 독도논리』 백산자료원, p.198.

45) 川上健三著·권오엽역(2010) 『일본의 독도논리』 백산자료원, p.199.

46) 川上健三著·권오엽역(2010) 『일본의 독도논리』 백산자료원, pp. 197-199.

다무라는 메이지정부의 ‘죽도’ 영유권인식<sup>47)</sup>에 대해 울릉도는 1881년 양국의 교섭으로 한국영토로 인정되었지만, 송도는 한국영토로 인정하지 않았다는 주장이다. 그러나 사실 1869년의 「조선국교제시말내탐서」에서 「죽도와 송도가 조선영토가 된 시말」<sup>48)</sup>, 1877년 태정관문서의 「죽도와 1도가 일본영토와 무관함을 숙지할 것」<sup>49)</sup>등에 의하면 메이지시대의 일본정부는 독도는 울릉도와 더불어 일본영토가 아니라는 인식을 갖고 있었다.

다무라는 「조선수로지에서 관계되는 부분을 발췌하면 다음과 같다.」<sup>50)</sup>라고 하여 조선수로지를 인용하여 독도에 대한 한국영토로서의 권원을 부정하고 있다.

독도<sup>51)</sup>에 대해서는 19세기 중반에 프랑스, 영국, 러시아, 미국 함대가 독도를 발견하여 도명을 정했다. 이처럼 한국이 독도를 발견하여 관리하기 이전에 유럽인에 의해 먼저 발견되었다는 것이다. 이는 독도에 대한 한국측의 영토적 권원을 부정하기 위한 논리조작이다. 또한 「메이지 27년(1894년) 1월 14일 산음신문에서는 “오키국 4국 공유하는 어선 改良丸”를 “地夫郡 宇賀村 眞野鐵太郎가 客歲로 빌렸다(借受)”」<sup>52)</sup>라고 하여 다무라는 1894년의 산음신문이 울릉도를 조선영토로서 인정하면서도 울릉도도항 도중에 발견한 리랑코도에 대해서는 조선영토가 아닌 무주지라고 게재했다고 주장한다. 이것 또한 영토적 권원을 결정하는 중앙정부의 인식이 아니고 지방신문의 인식에 불과하다. 이러한 근거없는 신문사설을 영토적 권원으로 활용하고 있다.

또한 「小泉憲貞가 저술한 『隱岐誌後編』 제49철 (메이지 36년 9월 25일 간행)<sup>53)</sup>에서는 小泉憲貞라는 사람처럼 당시 일본 측의 민간인들 중에는 죽도가 일본영토라는 영토의식을 갖고 있는 사람도 있었지만 중앙정부 차원에서 본다면 한국정부도 독도를 한국영토로 인식하고 있었지만, 일본정부에서는 일본영토로서 인식하지 않았던 것이다. 그럼에도 불구하고 다무라는 한국 측의 영토인식을 전적으로 무시하고 민간인 일개인의 영토인식을 가지고 일본 측의 영토적 권원이라고 조작하고 있다. 당시 일본에서는 신영토를 비롯한 영토 확장의 붐이 조성되어 동해안을 왕래하던 일본인들 중에는 조선영토였던 울릉도조차 영토개척을 주장하는 자가 속출할 정도였다.<sup>54)</sup>

47) 田村清三郎(1965) 「島根県竹島の新研究」, p. 28.

48) 日本外務省調査部編, 『日本外交文書』 第3卷, 事項6, 文書番号87, 1870年 4月 25日字.

49) 『公文録』 1877年 3月 20日条, 太政官指令文書.

50) 田村清三郎(1965) 「島根県竹島の新研究」, p. 34.

51) 田村清三郎(1965) 「島根県竹島の新研究」, p. 34.

52) 田村清三郎(1965) 「島根県竹島の新研究」, p. 37.

53) 田村清三郎(1965) 「島根県竹島の新研究」, pp. 35-37.

54) 武藤平学가 1876년에 일본의무성에 「송도개척안(松島開拓之議)」을 제출했는데 그 후에도 몇몇 사람이 울릉도개척안을 제출했다. 신용하(1996) 『독도의 민족영토사 연구』 지식산업사, p.174.

이처럼 다무라는 독도와 관련되는 기사라면 무조건적으로 일본영토로서의 권원이라고 해석하는 방법으로 독도의 영토적 권원을 조작하고 있다는 사실을 알 수 있다.

다음으로는 한국의 독도영유권 주장에 대해 반박하여 다음과 같은 논리를 조작하고 있다.

한국측의 독도의 역사적 권원<sup>55)</sup>에 대해서는 역사적 권원은 물론이고 1905년 「무주지 선점」에 의한 일본의 국제법적 영토조치가 지극히 합당하다는 것으로 1905년 이전에 한국이 독도를 관리했다는 증거가 없다고 논리를 조작하고 있다. 이는 일본의 「무주지 선점론」에 의한 영토편입을 정당화하려는 것으로 사실과 전혀 다르다. 독도의 역사적 권원에 대해서는 실제로는 일본영토에 관한 증거는 전혀 없고, 한국영토에 관한 증거만 존재한다.<sup>56)</sup>

독도가 일본보다 한국이 더 가깝다는 지리적 근접성<sup>57)</sup>에 대해서는 울릉도와 독도가 서로 바라볼 수 있어서 울릉도사람들이 영토적 관념을 갖고 있었다는 사실은 언급하지 않고 단순히 거리만으로 영토적 권원을 논할 수 없다는 것이다. 오히려 일본은 거리상으로는 한국측보다 멀지만 강제조업으로 독도를 실제로 관리했다고 강조하고 있다. 1903년 이후 일본이 독도에서 강제조업을 했다고 주장하지만 그것이 사실이라면 타국영토에 대한 약탈해 해당된다. 영토관리와는 전혀 무관하다.

당시 독도가 한국영토라고 말한 中井養三郎의 영토인식<sup>58)</sup>에 대해서는 실제로 존재하는 나카이관련사료를 아무런 논증 없이 후세가 임의로 조작한 것이라고 단정하는 것은 독도의 영토적 권원을 조작하고 있다.

일본정부측이 간행한 『朝鮮沿岸水路誌』에 독도가 포함되어 있는 것<sup>59)</sup>에 대해서는 일본영토론에 불리한 내용은 수리지편찬자의 오류에 의한 것이라는 방식으로 한국측의 영토적 권원을 부정하고 있다. 먼저 『朝鮮沿岸水路誌』(昭和8)와 『本州沿岸水路誌』 모두는 일본제국시대에 출간된 것으로 1905년 ‘죽도편입’을 의식한다면 조선연안에 포함되어서는 안 됨에도 불구하고 조선연안에 포함되어 있다면 1905년 이전의 영유권 인식을 그대로 반영한 것이라고 해석된다. 그리고 「울릉도주민」을 임의로 「강치조업자들(일본인에 고용된 울릉도 조선인)」로 해석하는 것은 독도의 영토적 권원을 조작하는 행위이다.

55) 田村清三郎(1965) 「島根県竹島の新研究」, p.153.

56) 최장근(2010.8) 「일본의 사료왜곡해석과 독도 영유권의 부정-최신 발굴사료를 중심으로」, 『일본문화학보』 제46집, 한국일본문화학회, pp.113-138.

57) 田村清三郎(1965) 「島根県竹島の新研究」, p.153.

58) 田村清三郎(1965) 「島根県竹島の新研究」, p.154.

59) 田村清三郎(1965) 「島根県竹島の新研究」, p.154

조선이 1905년 이전에 독도를 영토로서 관리했다는 것<sup>60)</sup>에 대해서는 독도에 도항하는 목적이 강제조업만을 위한 것이고, 강제조업은 일본인만 한 것으로 조선인은 미역밖에 채취할 줄 몰랐다는 것이다. 그 때문에 조선인은 독도에 대해서 알지 못했다고 하는 조작된 논리로 조선인의 독도도항을 부정하고 있다.

일본제국시대에 일본인 학자가 독도를 한국지리지에 포함시킨 것<sup>61)</sup>에 대해서는 ‘죽도’ 명칭에 대한 혼란을 겪고 있는 일본학자들을 비판했다. 이는 일본의 저명한 지리학자가 울릉도와 독도의 명칭에 대해 혼란을 초래했다는 것은 일본영토로서의 인식이 없었기 때문이라고 할 수 있다.

## 5. 맺으면서

이상으로 살펴볼 때 1966년에 집필한 가와카미 겐조(川上健三)의 『竹島の歴史 地理學的研究』와 다무라 세이자부로(田村清三郎)의 『島根縣 竹島の新研究』가 한국의 고유영토인 독도 영유권을 왜곡하여 역사적으로나 국제법적으로 일본영토라는 논리로 사실을 조작하였다는 것이 규명되었다. 이들의 조작된 논리는 전후 일본정부, 우익 단체나 우익 정치가들에게 있어서 ‘죽도’ 영유권을 주장하는 데 이용되고 있다. 본연구의 요지를 정리하면 다음과 같다.

첫째로, 독도의 본질적인 면을 보면, 조선은 개국 이래 동해에 2개 섬 우산도와 울릉도를 영토로서 관리해왔다. 여기서 울릉도는 사람이 거주하는 섬이어서 관리했었고, 우산도는 실제로 사람이 거주할 수 없고 울릉도에서도 날씨가 청명하고 바람이 불지 않는 날이면 보이지 않기 때문에 조선조정이 울릉도에 대해 공도정책을 실시하는 기간에는 우산도를 실제로 관리하는 일은 없었다. 그 이유는 지금의 독도인 우산도는 당시로서 경제적 가치도 없었을 뿐만 아니라, 영유권을 주장하는 상대국도 없었기 때문에 관념적인 영토로서 관리했다고 할 수 있다.

둘째로, 일본은 많은 사료에서 확인되는 것처럼 울릉도가 역사적으로 한국영토임에 분명하지만 이러한 지위를 흠집 내기 위해 한국이 울릉도를 실효적으로 관리하였다는 사실에 대해 부정하거나 소극적이었다고 조작했고, 또한 일본이 오히려 울릉도를 실효적으로 관리하였다고 조작했다. 그 이유는 일본의 오키 섬에서는 독도가 보이지 않지만, 한국의 울릉도에서는 독도가 보인다. 보인다는 것은 보이지 않는다는 것보다 영토로서 관리할 개연성이 크다는 것은 의

60) 田村清三郎(1965) 「島根縣竹島の新研究」, p.154.

61) 田村清三郎(1965) 「島根縣竹島の新研究」, pp. 153-155.



심할 수 없다. 그래서 한국이 울릉도를 실효적으로 관리하지 않았다고 부정함으로써 독도의 관리도 하지 않았다는 논리를 조작하기 위한 것이다.

셋째로, 일본은 시마네 현 고시 40호의 「무주지 선점론」에 의한 「죽도영토편입조치」를 정당화하기 위해 수많은 사료에서 확인되는 것처럼 한국 측이 관리해온 독도에 대한 영토적 권원을 부정하고 오히려 사료해석을 조작하는 방법으로 독도의 영토적 권원이 일본 측에 존재했다고 사실을 조작했다.

## 【參考文獻】

- 가와카미 겐조저·권오엽역(2010) 『일본의 독도논리 -竹島の 歴史地理学的研究-』 백산자료원, pp.13-333.
- 신용하(1996) 『독도의 민족영토사 연구』, 지식산업사.
- 양태진편(1979) 『한국국경영토관계문헌집』.
- 최장근(1910) 『일본의 독도·간도침략 구상』 백산자료원, p.63.
- 최장근(2010.8) 「일본의 사료왜곡해석과 독도 영유권의 부정-최신 발굴사료를 중심으로」, 『일본문화학보』 제46집, 한국일본문화학회, pp.113-138.
- 「旧韓国官報」 第1716号, 光武4年 10月 27日.
- 『皇城新聞』 1906년 7월 13일자.
- 奥村碧雲(1907) 『竹島及鬱陵島』.
- 川上健三(1966) 『竹島の歴史地理学的研究』 古今書院.
- 川上健三(1953) 『竹島の領有』 日本外務省.
- 下条正男(2004) 『竹島日韓どちらのものか』 文春親書377, 文芸春秋, pp.1-188.
- 竹島広報文書課(1953) 『竹島関係資料』 第1卷.
- 田村清三郎(1965) 『島根県竹島の新研究』 島根県総務課.
- 田村清三郎(1954) 『島根県竹島の研究』 島根県総務課.
- 日本外務省調査部編(1870) 『日本外交文書』 第3卷, 事項6, 文書番号87.
- 『各觀察道案』 第1冊, 「報告書号外」.
- 『公文録』 1877年 3月 20日条, 太政官指令文書.
- 『軍艦新高戦時日誌』 1904年 9月 25日条.
- 「김정호」, 「박석창」, <http://ko.wikipedia.org/wiki/>
- 日本外務省ホームページ, 「パンフレット「竹島問題を理解するための10のポイント」」, [http://www.mofa.go.jp/region/asia-paci/takeshima/pamphlet\\_k.pdf](http://www.mofa.go.jp/region/asia-paci/takeshima/pamphlet_k.pdf)(검색일:2011.8.30).

## 要旨

本研究は19世紀後半韓国政府が日本の鬱陵島および獨島への侵入を備えて開拓を行ったが、戦後日本は獨島の領有権を確保するために獨島の管理は全くなく鬱陵島においては韓国領土としての管理が消極的であったとして獨島の領土的権原を造作している。本研究は川上健三と田村清三郎を中心として分析したものである。その理由はこの二人が戦後竹島が日本の領土であるという論理を造作した者だからである。研究構成についてはまず、近代朝鮮が行った鬱陵島・獨島の再開拓の實體について考察した。第2に、近代朝鮮が行った鬱陵島の再開拓の事実を歪曲してむしろ日本領土としての権原のみ存在するとした造作行爲を究明した。第3に、大韓帝國が日本の領土侵略から國土を守るために行った獨島の開拓および行政措置に対する日本の造作行爲を究明した。本研究の結果として、近代になって鬱陵島を開拓した島民は鬱陵島から見える獨島を生活場として活用していた。つまり鬱陵島韓民が獨島まで往來したということである。それで島の形象から獨島という名が生まれた。獨島というのは石でできた島という意味である。大韓帝國はこのような認識で勅令41號をもって鬱陵島、竹島とともに「石島」を領土の一部として行政措置をとったのである。前近代においても朝鮮朝廷は鬱陵島を空島政策をもって空にしていたが、東海に于山島と鬱陵島となる2つの島が領土として存在するという領土認識をもっていたのである。このような認識は近代になって日本の侵略に備えて鬱陵島はもちろん今の獨島に対しても領土認識をもって行政措置をとっていたのである。にもかかわらず、川上健三と田村清三郎をはじめとする日本側は戦後から現在まで獨島に対して領有権を主張するために上述したような韓国の鬱陵島における實効的管理を否定して竹島が日本の領土であるという論理を造作した。川上は鬱陵島について当時の朝鮮は空島政策をもって島を廢棄したのを日本が管理していたが、幕府の外交政策の失敗で韓國に奪われたと論理を造作した。獨島については日本人が先に1903年から獨島で海驢漁をおこなった。韓國人は日本人に勞働力として雇われてからはじめて獨島を知ることができたとし、日本が韓國より先に獨島を實効的に管理したという論理を造作した。田村は獨島のみを扱っているが、その認識は川上の論理と同じく竹島の日本領土論を造作した。

キーワード：鬱陵島開拓史，獨島開拓史，領土的権原造作，石島，獨島

투 고 : 2011. 8. 31  
1차 심사 : 2011. 9. 10  
2차 심사 : 2011. 10. 1

# 彙 報

(2011. 5. 1 ~ 2011. 10. 31)

## 【이사회】

2011. 6. 3 상임이사회

장소: 한남대학교 문과대학 세미나실

1. 제39회 국제학술대회에 대한 반성
  - 초청강연 참석률을 높일 수 있는 방안을 강구할 필요가 있음.
2. 제9회 한국일본학연합회 발표신청 현황 및 준비사항 점검
  - 발표 신청 현황(총 16명)  
일본어학-4명, 일본어교육-3명, 고전문학-3명, 근대문학-3명, 일본학-3명
3. 『일본문화학보』 제50집 투고 현황
  - 총 23편(일본어학-6편, 일본어교육-1편, 고전문학-4편, 근대문학-5편, 일본학-7편)
4. 무발표 투고 논문에 대한 게재료 상향 조정
  - 무발표 투고 논문의 게재료를 15만원/30만원(일반/연구비 수혜)으로 상향 조정하기로 함.
5. 해외지부의 우체국 계좌 개설을 위해 「해외지부에 관한 규정」 일부 수정

2011. 10. 15 상임이사회

장소: 대전대학교 문과대학 1층 6116호(박희남 교수 연구실)

1. 제41회 국제학술대회 관련
  - 일시 및 장소: 2011년 10월 22일(토) 대전대학교 30주년 기념관
  - 발표 신청 현황(총 43명)  
심포지엄-3명, 일본어학-5명, 일본어교육-8명, 고전문학-5명, 근대문학-12명(미니 심포 2명 포함), 일본학-10명
  - 심포지엄 발표자: 板坂則子(日本 専修大), 楊錦昌(台灣 輔仁大), 裴貞烈(韓國 韓南大)
  - 제반 준비 사항 점검
2. 보고 사항
  - 2011년도 국내학술지 지원사업 신청기간 - 2011. 10. 26(수) 09:00 ~ 11. 8(화) 18:00
  - 신청에 차질이 없도록 준비

**【편집이사회】**

2011. 6. 11 편집회의

1. 제49집(5월호) 2011년 5월 31일 발간 보고  
\*심포지엄 발표자 투고: 1편, 어학: 7편, 교육: 1편, 고전문학: 1편, 근대문학: 3편, 일본학: 4편, 총 17편
2. 제50집(8월호) 투고논문 1차 심사 심의  
\*1차 심사 결과서 송부  
\*1차 심사 통과 논문에 대해 수정 및 가필 의뢰

2011. 6. 25 편집회의

1. 제50집(8월호) 투고 논문 2차 심사 심의
2. 제50집(8월호) 최종 게재논문 결정  
\*어학: 6편, 교육: 0편, 고전문학: 3편, 근대문학: 5편, 일본학: 7편, 총 21편

2011. 9. 10 편집회의

1. 제50집(8월호) 2011년 8월 31일 발간 보고  
\*어학: 6편, 교육: 0편, 고전문학: 3편, 근대문학: 5편, 일본학: 7편, 총 21편
2. 제51집(11월호) 투고 논문 1차 심사 심의  
\*1차 심사 결과서 송부  
\*1차 심사 통과 논문에 대해 수정 및 가필 의뢰

2011. 10. 1 편집회의

1. 제51집(11월호) 투고 논문 2차 심사 심의
2. 제51집(11월호) 최종 게재논문 결정  
\*어학: 2편, 교육: 4편, 고전문학: 3편, 근대문학: 10편, 일본학: 3편, 총 22편

【학술】

韓國日本文化學會

第41回 國際學術大會

日 時：2011年 10月 22日(土) 09:00~18:20

場 所：大田大學校 30周年 記念館

<學術發表會・Symposium>

- 接受 및 登錄：09:00~10:00
- 學術 發表會：09:30~12:10
- 中 食：12:10~13:20
- 總會・Symposium：13:30~15:30

歡 迎 辭：朴喜南 第41會 國際學術大會 組織委員會 組織委員長

開 會 辭：鄭応洙 韓國日本文化學會 會長

祝 辭：閔燦 學長(大田大學校 人文藝術大學)

Symposium：日本古典文學研究の現狀と方向

司 會 者：朴相鉉 教授(慶熙사이버大)

發 表 者：板坂則子(日本 專修大)

楊錦昌(臺灣 輔仁大)

裴貞烈(韓國 韓南大)

場 所：30周年 記念館 22314號室

- 學術 發表會：15:40~18:20
- 懇 親 會：18:30~

## 【Symposium】

## 主 題：日本古典文學研究の現状と方向

■ 場所：30周年 記念館 22314號室

時 間	発 表 者	発 表 題 目
司 会：朴相鉉(韓国 慶熙사이버大)		
14:00～15:30	板坂則子 (日本 専修大)	「雅」と「俗」の文学 －古典文学研究の現状と方向－
	楊錦昌 (台湾 輔仁大)	危機と転機の狭間に彷徨う日本古典文学研究 －台湾の現状と方向性をめぐって－
	裴貞烈 (韓国 韓南大)	韓国における日本古典文学研究の現状と動向

## 【分科別 學術發表大會】

## 日本語學 分科

■ 場所：30周年 記念館 22317號室

座長：安增煥(韓南大)

時 間	発 表 者	発 表 題 目	討 論 者
中食(12:10～13:20)			
總會・Symposium(13:30～15:30)			
司 会：邢鎮義(韓南大)			*
15:40～16:10	趙恩英 (首都大学 東京大学院)	類義語「急に」と「突然」についての一考察 －新聞コーパスを用いて－	趙英姬 (金剛大)
16:10～16:40	金大星 (全南大)	止撰 諸韻의 中古音 再構	李京哲 (東国大)
司 会：尹錫南(建陽大)			*
16:50～17:20	李京哲・ 金大暎 (東国大)	<국어의 가나 문자 표기법>에 대하여 －수도권 지하철 역명 받침의 가나표기를 중심으로－	李忠奎 (韓南大)
17:20～17:50	都基禎 (南서울大)	『沙石集』의 敬語研究 －「侍り」의 待遇性－	申玟澈 (韓南大)
17:50～18:20	羅熙淑 (又松大)	韓日 양국어의 待遇法の 概念 및 研究史에 대한 고찰	邢鎮義 (韓南大)

# Journal of Japanese Culture

431

## 日本語教育 分科

■ 場所：30周年 記念館 22318號室

座長：片茂鎮(檀國大)

時間	発表者	発表題目	討論者
司会：安熙貞(威徳大)			*
10:00~10:30	姜蓮華 (大田大)	韓国人日本語学習者の促音の指導 －音声指導法の比較を中心に－	金昌男 (金剛大)
10:30~11:00	丹野竜一 (又松大)	外国語環境における教室活動について －言語習得理論と用法基盤モデルから－	趙英姫 (金剛大)
司会：尹楨勛(順天第一大)			*
11:10~11:40	崔貞姫 (白石文化大)	シャドーイング練習は助詞の習得に効果があるのか	李香蘭 (円光大)
11:40~12:10	金英兪 (円光大)	現在の事態成立に関わる時の副詞の意味用法 －「いよいよ」・「ついに」・「とうとう」 について－	尹楨勛 (順天第一大)
中食(12:10~13:20)			
総会・Symposium(13:30~15:30)			
司会：崔貞姫(白石文化大)			*
15:40~16:10	柳京子 (祥明大)	言語文化教育におけるLangueとParoleの往還文化論	安容柱 (鮮文大)
16:10~16:40	安容柱 (鮮文大)	JLPTとN-Testの比較	柳京子 (祥明大)
司会：金直洙(烏山大)			*
16:50~17:20	鄭在恩 (名古屋大)	相手に躊躇されたあとの「再勧誘」について －勧誘者と被勧誘者の意識調査データの分析から－	金大星 (全南大)
17:20~17:50	金栄一 (名古屋大)	話し手の過失に対する指摘の有無による 日韓語の「謝罪」のストラテジー	朴英淑 (水原科学大)

# Journal of Japanese Culture

432

## 日本古典文學 分科

■ 場所：30周年 記念館 22317號室      座長：朴相鉉(慶熙사이버大)

時 間	発 表 者	発 表 題 目	討 論 者
司 会：曹圭憲(翰林大)			*
09:30~10:00	鄭順粉 (培材大)	韓国における平安文学 - 外国文学としての受容 -	朴相鉉 (慶熙 사이버大)
10:00~10:30	朴相鉉 (慶熙 사이버大)	경성제대 '국문과=일문과' 출신 서두수 연구 - 번역 활동을 중심으로 -	曹圭憲 (翰林大)
10:30~11:00	水谷隆 (大阪女子 短期大学)	詞書のゆくえ - 新撰和歌の編纂意識にかかわって -	金 英 (大邱 韓医大)
司 会：裴貞烈(韓南大)			*
11:10~11:40	桧垣泰代	平安朝和歌の漢詩文受容の一側面	金 英 (大邱 韓医大)
11:40~12:10	金 英 (大邱 韓医大)	한일 고대의 혼인제와 여성	金良叔 (明知大)
中食(12:10~13:20)			
総会・Symposium(13:30~15:30)			



# Journal of Japanese Culture

433

## 日本近代文學 分科 I

■ 場所 : 30周年 記念館 22315號室

座長 : 尹在石(한밭大)

時 間	發 表 者	發 表 題 目	討 論 者
司 会 : 尹惠英(忠南大)			*
09:30~10:00	陸根和 (大田大)	엔도 슈사쿠(遠藤周作)의 역사소설에 대한 고찰	朴勝乎 (白石大)
10:00~10:30	李福任 (韓南大)	시바 료타로(司馬遼太郎)의 영웅사관 재고(再考)	林相珉 (韓南大)
司 会 : 李貞熙(威德大)			*
10:40~12:10	李錦宰 (南서울大) 洪善英 (翰林大)	第3회 미니-시posium 韓國의 大學에 於ける 日本文學教育 - 實例としての 方法論을 巡って -	鄭相哲 (極東大) 尹惠英 (忠南大)
中食(12:10~13:20)			
總會 · Symposium(13:30~15:30)			
司 会 : 鄭相哲(極東大)			*
15:40~16:10	金聖恩 (韓國外大)	아리요시사와코의 『황홀한 사람(恍惚の人)』 고찰 - 에코페미니즘 관점을 중심으로 -	林盛奎 (白石大)
16:10~16:40	朴賢玉 (木浦大)	모리 레이코(森禮子)의 「삼채의 여자(三彩의女)」론 - 조선 여인 오타 줄리아를 중심으로 -	朴裕美 (忠南大)
司 会 : 吳秉禹(大邱芸述大)			*
16:50~17:20	金尚垣 (東國大)	『少年』論 - 視點과 關連하여 -	吉美顯 (又松大)
17:20~17:50	吉美顯 (又松大)	「ごっこ」、遊びをめぐるエロティシズムの形象化 - 谷崎作品を読む -	李智淑 (忠南大)

# Journal of Japanese Culture

434

## 日本近代文學 分科Ⅱ

■ 場所：30周年 記念館 22316號室

座長：吳俊永(空士)

時 間	発 表 者	発 表 題 目	討 論 者
中食(12:10~13:20)			
總會・Symposium(13:30~15:30)			
司 会：任苔均(聖潔大)			*
15:40~16:10	朴裕美 (忠南大)	일본근대여성의 직업의식 고찰 - 『세이토(靑鞆)』 1기(1911~12년) 작품을 중심으로 -	洪善英 (翰林大)
16:10~16:40	尹惠暎 (忠南大)	에도시대 일화가 漱石와 鷗外 문학에 미친 영향 고찰 - ‘야채가게 오시치(お七)’ 사건을 중심으로 -	吳俊永 (空士)
司 会：吳俊永(空士)			*
16:50~17:20	金子真樹 (又松大)	『春の雪』に現れる2・26事件 - 三島にとっての恋愛と政治 -	鄭相哲 (極東大)
17:20~17:50	松橋幸代 (忠南大)	遠藤周作におけるユーモア素材の分析	陸根和 (大田大)

# Journal of Japanese Culture

435

## 日本學 分科

■ 場所 : 30周年 記念館 22320號室

座長 : 鄭應洙(南서울大)

時 間	發 表 者	發 表 題 目	討 論 者
司 会 : 李德求(擘田大)			*
09:30~10:00	金英順 (建陽大)	北海道駅弁に関する一考察	李德求 (擘田大)
10:00~10:30	都基弘 (한밭大)	한국 상차림에서 수저의 배치를 둘러싸고 - 한·일 비교문화론을 위한 시론 -	趙文基 (桃山 学院大)
司 会 : 李德求(擘田大)			*
10:40~11:10	朴正義 (円光大)	『季刊三千里』と韓国民主化 - 日本人に知らせる -	林永彦 (全南大)
11:10~11:40	李德求 (擘田大)	도시축제의 참여자 - 히로사키요사코이쓰가루(弘前よさこい津軽)를 중심으로 -	鄭根河 (全南大)
11:40~12:10	趙文基 (桃山 学院大)	노인장기요양기관의 정보공개법 제도화를 위한 한.일 비교연구	鄭根河 (全南大)
中食(12:10~13:20)			
總會・Symposium(13:30~15:30)			
司 会 : 崔長根(大邱大)			*
15:40~16:10	劉多虔 (筑波大)	大河ドラマのジャンル形成とイデオロギー - KBSとNHK大河ドラマの比較 -	朴正義 (円光大)
16:10~16:40	鄭章植 (清州大)	무사도 뒤집어 보기(三)	林永彦 (全南大)
司 会 : 崔長根(大邱大)			*
16:50~17:20	林永彦 (全南大)	일계인디아스포라: 일본 군마현 오라군 오이즈미초(群馬県邑楽郡大泉町) 일계브라질인타운 연구	崔長根 (大邱大)
17:20~17:50	宋英淑 (全南大)	일본의 십이지(十二支) 유래 설화의 연구	鄭章植 (清州大)
17:50~18:20	崔長根 (大邱大)	일본의 전근대 독도역사에 대한 조작 행태 - <杉原通信>을 중심으로 -	郭真吾 (東北亜 歴史財団)

---

---

## 合 評 會

### - 일본근대문학분과 -

---

---

이 정희\*

이번 호 『일본문화학보』에는 일본근대문학 관련 논문이 10편이나 실렸다. 근래 보기 드문 풍성한 수확으로, 수확이 많은 만큼 좋은 논문도 눈에 많이 띄었다. 이들 논문에 대해서 심사위원들의 심사평을 토대로 정리해 보고자 한다.

먼저, 「『풀 베개(草枕)』론-中庸의 美를 중심으로-」는 소세키가 『풀 베개』를 통해서 추구하고 있는 아름다움은 무엇인가, ‘아와레’는 무엇을 의미하는가, 소세키의 삶의 철학은 무엇인지를 도출한 논문이다. 논자가 소세키의 중용사상은 어느 쪽도 배제하지 않고 함께 아우르는 양시론적인 융합의 세계로, 『풀 베개』는 그의 인생철학과 염원을 담고 있는 미학소설이며 사상소설이라 했다. 그러나 연구의 핵심이라곤 할 수 있는 ‘아와레’와 ‘중용’에 대한 분석이 단선적으로, 일본 고유의 미의식인 ‘아와레’가 『풀 베개』에서 어떻게 접목되고 승화되었는가에 대한 분석이 미비하다는 지적도 있다.

다음으로 「『히카루의 바둑』과 일본의 바둑 문화」는 훗타 유미 원작 만화인 『히카루의 바둑』을 일본의 바둑 문화와 연관시켜 고찰한 것으로, 혼인보(本因坊)를 비롯한 일본 바둑의 전통을 개관하면서 작중인물인 후지와라노 사이의 조형의 의미를 명쾌하게 밝혀내고 있다. 나아가 필자의 섬세한 분석을 통해 일본 바둑의 전통에 대한 긍지와 찬미, 그리고 국제화 시대를 맞이한 현대의 바둑에 대한 긍정적 시선 등 작가의 의도를 적확하게 읽어내고 있어서 이 작품에 대한 이해는 물론이고 일본 바둑 문화에 대한 독자의 이해를 도모하고 있다. 다만, 대중문화라는 장르를 감안하여 당시 이 만화가 일반 독자들에게 미친 반향 등의 대중 수용 양상에 대해서도 검토의 여지가 있지 않았을까 하고 생각하는 바이다.

논문 「村上春樹『스포츠ニクの恋人』論」은 무라카미 하루키의 『스포츠ニクの恋人』을 유토피아 사상과 연관 지어 분석함으로써 하루키 문학에 나타난 디스토피아적 정취를 검토하였다. 특히 유토피아 이론에 있어 동서양간의 차이를 비교 분석하고, 동양에 있어서 수용면의 오류가 공통분모를 가지고 있다는 고찰 등은 매우 독창적이다. 이것을 『스포츠ニクの恋人』뿐만이 아니라 무라카미 하루키 문

---

\* 위덕대학교 일본언어문화학과 교수

학 전체로 확대하여 분석한다면 새로운 시도가 될 것으로 기대되는 논문이다. 반면, 가령 토마스 모어의 ‘유토피아’가 분명 디스토피아로 느껴질 만한 요소들을 포함하고 있는 것은 틀림없지만, 그렇다고 해서 巖谷国土의 이론에 의존해 ‘유토피아 = 디스토피아’로 등치해도 좋을지는 재고의 여지가 있다고 보인다.

다음 논문인 「정비석 『자유부인』 과 다니자키 준이치로의 『열쇠』」는 한국과 일본에서 서로 비슷한 시기에 발표해서 외설 시비에 올라 사회적 반향을 불러일으킨 두 작품을 공통분모 찾듯이 비교 분석하였다. 특히 여자 주인공인 『자유부인』의 오선영과 『열쇠』의 이쿠코를 중심으로한 인물형성 과정 고찰은 읽는 재미가 있다.

논문 「巖谷小波の『梢之月』とキリスト教」는 일본 아동문학가의 효시인 巖谷小波가 1889년 「기독교 신문」에 발표한 작품 『梢之月』을 고찰한 것으로 지금까지 전혀 연구가 되지 않았던 이와야 사자나미(巖谷小波)와 크리스트교라는 점을 조명하여 크리스트교와 밀접한 관계에 있었다는 것을 도출한 점은 높이 평가할 수 있겠다. 이와야 사자나미의 유일한 크리스트교 소설이라고 할 수 있는 『梢之月』의 소개를 겸해 크리스트교 소설로서의 특징을 고찰하고, 『梢之月』와 크리스트교와의 관계, 그리고 이 작품의 문맥을 읽어내는 작업으로서 동시대의 크리스트교 언설과의 관계를 고찰했다.

논문 「『厭世詩家와 女性』論-에머슨의 <사랑(LOVE)의 수용을 중심으로>-」는 기타무라 도코쿠의 대표적인 평론 「厭世詩家와 女性」을 에머슨의 「사랑」이라는 코드로 분석함으로써 도코쿠의 연애관을 고찰한 것이다.

논문 「金嬉老事件と<反共>-映画『金の戦争』論-」은 1968년에 재일 코리안 김희로가 일으킨 폭력단원 사살 사건을 영화로 제작한 『金の戦争』을 분석한 것으로, 당시의 외교문서와 재판 당시 전개되고 있던 국적전환문제 등 역사적 사실을 논리적 근거로 삼아 한국 정부의 대일 정책노선을 밝혀내고 있으며, 다른 한편으로는 살인 그 자체를 사랑이라는 문맥으로 정당화시키려 하고 재일 코리안과 반공이라는 대립관계를 희석시키려 한 제작진의 의도를 명확하게 읽어내고 있다. 재일 코리안 문제에 독자들의 관심을 이끌면서 일본 사회의 한 단면을 파악할 수 있는 학술적 가치가 높은 논문이라고 생각한다.

논문 「시마자키 도손 연구-한국에서 도손(藤村)문학 연구 성과와 과제 조명II-」는 1970년대 이후부터 현재까지 도손에 관한 연구 현황 및 성과, 그리고 문제점 등을 일목요연하게 정리함으로써, 한국에서의 도손 연구의 체계를 확립했다고 할 수 있다. 논자가 한국의 도손 연구자들은 선행연구 실적의 연구를 통한 실증적 연구의 자세가 요구되고, 일본연구자와는 다른 관점에서 도손연구의 접근이 필요하다고 한 점은 주목할 만하다.

논문 「『或る女』論-木部という人物について-」는 기베(木部)라는 등장인물을 주목함으로써 기존의 선행연구에서 언급하지 않은 새로운 『或る女』론을 제시한

점은 주목 받을 만하다. 특히 기베와의 만남과 결별이 향후 요코의 행보를 예견하는 것이었음을 정밀한 작품분석을 통해 논증한 점에서 매우 논리정연하고 완성도 높은 텍스트론이라고 생각한다.

마지막으로 「학습자 위주의 일본근현대문학 수업 사례 연구」는 대학의 교육 현장에서 일본문학을, 특히 일본근대문학사 수업을 어떻게 효과적으로 학생들에게 지도할지에 관해 연구한 유익한 논문이다. 본 논문은 그동안 한국일본문화학회에서 3회에 걸쳐 실시한 <일본문학수업 사례발표 미니 심포지엄>의 커다란 성과이기도 하다. 최근 일본문학과 관련한 교육방법론이 하나 둘씩 모색되는 가운데, 다양한 수업방식을 통해 어떻게 지루하지 않는 문학사 수업으로 학생들에게 다가갈 수 있는지 비교적 구체적으로 소개하고 있다. 멀티미디어 등의 다양한 매체를 활용하여 학습자에게 적극적으로 다가가는 점은 매우 높이 평가하고 싶다.

앞으로 효율적인 일본문학 수업 방안에 대해서, 또는 학습자 위주의 수업 현장의 실례를 곁들인 논문들이 대거 출현되기를 기대할 뿐이다.

## 韓國日本文化學會 任員名簿

職 責	姓 名	所 屬	連 絡 處		
			電 話	e-mail	
會 長	鄭 応 洙	南서울大	(041) 580-2173	chunges@nsu.ac.kr	
			017-425-7319		
副會長	片 茂 鎮	檀 國 大	(041) 550-3192	mjpyon@dankook.ac.kr	
			011-9580-1412		
	金 泰 永	江 陵 大	(033) 640-2157	taeyoung@kangnung.ac.kr	
			011-469-0892		
	金 英 順	建 陽 大	(041) 730-5386	rinkai@kongyang.ac.kr	
			010-8978-5386		
	裴 貞 烈	韓 南 大	(042) 629-7339	baejy@hannam.ac.kr	
			010-5629-7339		
實 務 理 事	總 務	申 玟 澈	(042) 629-7332	mcshin68@hanmail.net	
			010-3096-0312		
	金 直 洙	烏 山 大	(031) 370-2636	kimjs3396@hanmail.net	
			010-6473-8889		
	財 務	林 盛 奎	白 石 大	(041) 550-2417	imsung@bu.ac.kr
				010-4548-3278	
	李 珍 鎬	圓 光 大	(063) 850-6533	jhleeh@wonkwang.ac.kr	
			011-656-4778		
	涉 外	李 香 蘭	圓 光 大	(063) 850-6524	ran96@wonkwang.ac.kr
				011-9816-6559	
	吉 美 顯	又 松 大	(042)630-9806	goldmountian@hanmail.net	
			010-3456-8440		
	學 術	金 昌 男	金 剛 大	(041) 731-3455	cnkim42@hotmail.com
				010-8604-6768	
	趙 英 姬	金 剛 大	(041) 731-3461	yhee0410@ggu.ac.kr	
			010-9478-4936		
	編 輯	權 寧 成	清 州 大	(043) 229-8344	kwon@cju.ac.kr
				016-480-1018	
	崔 貞 姬	白 石 文 化 大	(041) 550-0573	chejiny@hotmail.com	
			010-9942-5229		
評 価	林 永 彦	全 南 大	(062) 530-2703	yimye@hanmail.net	
			010-9883-2428		
金 漢 洙	全 北 科 學 大	(063) 530-9293	simhoo9293@hanmail.net		
		019-681-4068			
情 報	都 基 禎	南서울大	(041) 580-2174	kjdo@nsu.ac.kr	
			010-8879-2174		
尹 楨 勛	順 天 第 一 大	(061)740-1334	y7612@suncheon.ac.kr		
		010-8908-7759			
事 務 局	都 基 弘	韓 南 大	010-3432-5662	miyako101@yahoo.co.kr	

# Journal of Japanese Culture

440

職 責	姓 名	所 屬	連 絡 處		
			電 話	e-mail	
分 科 理 事	語學分科	尹錫南	建陽大	(041) 730-5387	ysnw@konyang.ac.kr
				010-2743-5367	
		邢鎮義	又松大	(042) 630-9798	hjini117@hanmail.net
				010-3146-1933	
	日本語教育	安熙貞	威德大	(054) 760-1534	hjahn@uu.ac.kr
				010-2609-0515	
		安容柱	鮮文大	(041) 530-2422	yjan@sunmoon.ac.kr
				010-8823-4132	
	古典文學	閔丙勳	大田大	(042) 280-2259	mbh0301@dju.ac.kr
				016-638-8841	
		朴相鉉	慶熙사이버大	(02) 3299-8573	koreaswiss@hanmail.net
				011-9179-3592	
	近代文學	李貞熙	威德大	(054) 760-1531	leejh@uu.ac.kr
				011-9701-0627	
	鄭相哲	極東大	(043) 879-3642	jeongsc@dreamwiz.com	
			010-3656-3389		
日本學	崔長根	大邱大	(053) 850-6065	nihonbu@daegu.ac.kr	
			010-5553-5733		
	郭眞吾	東北亞歷史財團	(02) 2012-6117	ojkwak@hanmail.net	
			010-3661-6062		



# 韓國日本文化學會 會則

## 제 1 장 총 칙

제1조(명칭) 본 학회는 '한국일본문화학회'라 칭한다.

제2조(목적) 본 학회는 일본 관련 제학문의 연구를 위한 국내외 회원간의 학술 교류를 통하여 일본학 연구의 활성화와 학문 발전을 도모하고, 국제간 교류를 통한 상호 협력과 이해 증진에 기여하도록 한다.

제3조(사업) 본 학회는 제2조의 목적을 달성하기 위하여 다음 각 항의 사업을 수행한다.

1. 정기적인 학술연구발표회(연 2회)
2. 학술지 발간(연 4회)
3. 학술 진흥을 위한 세미나 및 심포지엄 개최
4. 외국 학회와의 학술교류 및 공동연구
5. 외국의 대학도서관 및 학술단체와 학술지 교류
6. 일본문화의 소개

제4조(위치) 본 학회의 목적을 달성하기 위하여 별도의 학회사무실 및 지부를 두며, 상시 업무를 담당하는 사무국장을 둘 수 있다.

## 제 2 장 회 원

제5조(자격) 본 학회의 회원은 일본어문학을 비롯한 일본학 연구에 종사하는 자나 관심을 갖고 있는 자로 한다.

제6조(구분) 본 학회 회원의 구분은 「회원 규정」에 따른다.

제7조(가입요건) 본 학회에 신규로 회원가입을 원하는 자는 원칙적으로 기존 회원의 추천을 받아야 한다.

제8조(권리와 의무) 본 학회의 회원은 다음과 같은 권리와 의무를 갖는다.

1. 임원의 선거권 및 피선거권(단, 명예회원은 제외)
2. 학회활동 참여의 권리와 회칙 준수의 의무
3. 회비 납부의 의무

제9조(징계) 회원이 의무를 수행하지 않고 본 학회의 명예를 현저히 손상하였을 경우에는 이사회 결의를 거쳐 회원자격의 박탈이나 정지 등 징계할 수 있다.

### 제 3 장 기구 및 임원

제10조(기구) 본 학회는 다음과 같은 기구를 둔다.

1. 집행위원회(회장, 부회장, 상임이사)
2. 이사회
3. 해외지부

제11조(임원) 본 학회는 원활한 운영을 위하여 다음과 같은 임원을 둔다.

회장(1인), 부회장(약간 명), 상임이사(약간 명), 해외이사 및 이사(적정인원), 감사(2인)

제12조(임원의 선출) 회장 및 감사는 총회에서 선출하고, 기타 임원은 회장이 위촉한다.

제13조(임원의 임기) 임원의 임기는 2년으로 하되 연임할 수 있다.

### 제 4 장 총회

제14조(종류) 본 학회의 회의에는 총회, 이사회, 각종 위원회가 있다.

제15조(총회의 소집 및 의결)

1. 본 학회는 매년 1회 정기총회를 개최하고, 필요에 따라 회장이 임시총회를 소집할 수 있다.
2. 총회는 다음의 의안을 심의·의결한다.
  - (1) 회장 및 감사의 선출 및 해임
  - (2) 회칙 개정
  - (3) 사업계획의 수립
  - (4) 예산과 결산의 승인
  - (5) 기타 중요사항
3. 총회에서의 의결은 출석회원 과반수 이상으로 한다.

제16조(이사회)의 소집 및 의결)

1. 이사회는 실무이사회와 확대이사회가 있으며, 회장이 필요하다고 인정할 시 이를 소집한다.
2. 실무이사회는 회장, 부회장, 상임이사로 구성하고, 확대이사회는 회장, 부회장을 포함한 전이사가 대상이 된다.
3. 이사회는 제 규정의 개정, 회칙 개정의 발의, 회장 위임사항의 심의, 자문위원의 추대, 특별 및 명예회원의 승인, 기타 중요한 사항을 처리한다.

제17조(각종 위원회의 구성 및 임무)

1. 회장은 분야별 업무의 능률적 수행을 위해 각종 위원회를 설치할 수 있다.
2. 위원회는 위원장과 위원으로 구성하며, 위원장은 회장의 제청으로 이사회에서 선임한다.
3. 위원회의 안건은 출석 위원 과반수의 찬성으로 의결한다.

## 제 5 장 사 업

제18조(재정) 본 학회의 재정은 회원의 회비와 기타 수입금으로 한다.

제19조(회비책정) 본 학회의 회비는 총회에서 결정한다.

제20조(회계연도) 본 학회의 회계 연도는 3월부터 익년 2월까지로 한다.

제21조(국제학술교류상 선정) 본 학회의 학술발전에 지대한 공헌이 인정되는 해외회원을 대상으로 회장의 추천에 의해 이사회에서 결정한다.

## 제 6 장 부 칙

제22조(회칙개정) 본 회칙의 개정은 정기총회에서 출석인원 3분의 2 이상의 동의를 얻어 확정한다.

제23조(시행세칙) 본 회칙 시행에 필요한 제규정은 이사회의 의결을 얻어 시행하되, 본 회칙에 명시되지 않은 사항은 관례에 따른다.

제24조(시행일) 본 개정 회칙은 2003년 10월 1일부터 시행한다.

제25조 개정된 규정은 정기총회의 의결을 거쳐 2007년 5월 1일부터 시행한다.

제26조 개정된 규정은 정기총회의 의결을 거쳐 2008년 10월 25일부터 시행한다.

---

---

한국일본문화학회 편집위원회 규정

---

---

제 1 장 총 칙

- 제1조 본 위원회는 ‘한국일본문화학회 편집위원회’라 칭한다.
- 제2조 본 위원회는 한국일본문화학회 회칙 제17조에 의거하여 설치한다.
- 제3조 본 위원회가 관장하는 학회지 『일본문화학보』는 다음과 같은 지침 하에 발행한다.
1. 연 4회(2월호, 5월호, 8월호, 11월호)로 발행한다.
  2. 발행 날짜는 해당호의 월 말일을 원칙으로 한다.
  3. 기타 발행 과정은 ‘『일본문화학보』 발행 계획’에 준한다.

제 2 장 편집위원회 구성

- 제4조 편집위원회는 다음과 같이 구성한다.
- 위원장, 편집간사, 국내외 위원
- 제5조 편집위원회 위원장은 편집위원 중에서 회장의 제청으로 이사회에서 선임한다. 편집위원회 위원장은 위원회를 대표하며, 편집간사는 학회지 논문의 심사 및 편집을 통괄한다. 임기는 공히 2년으로 한다.
- 제6조 편집위원회 위원은 이사회의 인준을 받아 회장이 임명한다. 임기는 2년이며, 본인의 동의 를 얻어 연장 가능하다.
- 제7조 편집위원은 아래와 같은 기준에 따라 선정한다.
1. 대학의 부교수 이상 또는 이에 상응하는 자격을 갖춘 자, 혹은 해당 전공분야에서 20 년 이상의 연구경력을 가진 자로서 학술 연구 실적이 뛰어난 국·내외 회원 중에서 선 정한다.
  2. 각 학문분야의 대표성을 고려하여 선정한다.
  3. 분과위원회의 분과이사는 당연직으로 임명한다.

제 3 장 기 능

- 제8조 편집위원회는 학회지 『일본문화학보』의 체제, 발행횟수, 발행부수, 논문의 분량, 투고 및 심사규정 등 학회지 발행과 관련한 제반 사항을 결정한다.
- 제9조 편집위원회 편집간사는 각 분과이사와 협의 하에 학회에 투고된 논문의 심사위원을 선 정·의뢰하고, 편집위원회는 심사위원의 심사결과를 토대로 논문게재 여부를 결정한다.
- 제10조 제8조에 제시된 사항 이외에 편집위원회가 의결한 사안은 이사회의 인준을 거친 후에 효력이 발생한다.

## 제 4 장 편집위원회 회의

제11조 편집위원회 회의는 학회지 발간 계획에 따라 위원장이 소집한다.

제12조 연 4회의 정규 편집회의 이외에 필요할 경우에 위원장이 임시 편집회의를 소집할 수 있다.

제13조 편집회의는 원칙적으로 출석위원 과반수의 찬성으로 의결한다.

## 제 5 장 논문 평가 기준

제14조 게재 논문은 학회에서 구두 발표된 것을 원칙으로 하되(단, 구두 발표 후 2년간 유효),  
이사회에 추천이 있는 경우에는 그 기고 논문도 심사 후 게재할 수 있다.

제15조 논문의 심사는 항목별 평가와 종합평가로 이루어진다.

제16조 논문심사에 적용되는 평가 항목은 다음과 같다.

1. 내용의 적절성
2. 내용의 독창성
3. 형식의 적절성
4. 전개의 논리성
5. 연구방법의 적절성

제17조 종합평가는 항목별 평가를 근거로 심사자가 다음의 4등급으로 평가한다.

1. 학술논문으로서 매우 우수하다.
2. 학술논문으로서 우수하나 간단한 수정이 필요하다.
3. 학술논문으로서 내용 및 체제면에서 미흡하여 수정 후 다음 호에 재투고를 요한다.
4. 학술논문으로서 부적격하다.

## 제 6 장 논문심사 기준 및 절차

제18조(심사 기준) 편집위원회에서는 투고 논문에 대한 3인의 책임심사위원의 심사 결과와 지적 사항에 대한 집필자의 처리 결과 및 투고 규정의 준수를 바탕으로, 다음과 같이 해당 논문의 게재 여부를 결정한다.

1. 게재: 심사위원 평가평균 23점 이상인 논문이 대상이 된다.
2. 수정후 게재: 심사위원 평가평균 20~22점인 논문이 대상이 된다.
3. 수정후 재심: 심사위원 평가평균이 10~19점인 논문이 대상이 된다.
4. 게재 불가: 심사위원 평가평균이 10점 미만인 논문이 대상이 된다.

제19조(심사 절차) 논문심사는 다음과 같은 2단계 절차로 이루어진다.

1. 1차 심사(심사위원 심사)
  - a. 제출된 논문에 대하여 3인의 책임심사위원에게 심사 의뢰한다.

- b. 편집위원회에서는 심사위원 평가평점이 23점 이상인 논문은 <게재>, 20~22점인 논문은 <수정후 게재>, 10~19점인 논문은 <수정후 재심>, 10점 미만인 논문은 <게재 불가>의 판정을 내린다.
- c. 투고자에게 1차 심사 결과보고서와 심사결과를 통보하고, <수정후 게재> 판정을 받은 논문에 대해서는 수정·가필을 요구한다. <수정후 재심>, <게재 불가> 판정을 받은 논문은 이의 신청을 할 수 있다.
- d. <수정후 게재> 판정을 받은 논문은 수정·가필하여 <수정 보고서>와 함께 편집위원회에 제출한다.

## 2. 2차 심사(편집위원회 심사)

- a. 1차 심사에서 <수정후 게재> 판정을 받은 논문에 대하여 2인의 편집위원에게 수정 이행 및 투고규정 준수 여부의 심사를 의뢰한다.
- b. 심사위원회 평가평점을 합한 종합평점을 감안하여 게재 논문을 최종 결정하고 투고자에게 통보한다.
- c. 논문 심사 결과에 대하여 이의 신청이 있을 경우 분과위원회에 재심을 의뢰한다.
- d. 투고 논문의 게재유에 관한 편집위원회의 의결 사항은 종합평점에 우선한다.

제20조(심사 시기) 투고된 논문에 대한 심사는 연 4회(3월·6월·9월·12)월에 실시하는 것을 원칙으로 한다.

제21조(논문 게재호) 최종 심사에 통과한 논문의 게재호는 편집위원회에서 결정하며, 동일 집필자의 연속호 게재는 불허함을 원칙으로 한다. 또한 집필자가 복수인 경우, 제1필자를 상단에 표기하고 공동필자는 하단에 표기한다.

## 제 7 장 기 타

제22조 편집위원회 및 분과별 업무를 처리하기 위하여 편집위원회와 별도로 분과 위원회를 둔다.

## 제 8 장 부 칙

제1조 본 규정은 이사회의 의결을 거쳐 1999년 10월 9일부터 시행한다.

제2조 본 규정에 명시되지 않은 사항은 일반 관례에 따른다.

제3조 개정된 규정은 이사회의 의결을 거쳐 2002년 3월 1일부터 시행한다.

제4조 개정된 규정은 이사회의 의결을 거쳐 2006년 8월 1일부터 시행한다.

제5조 개정된 규정은 이사회의 의결을 거쳐 2008년 8월 1일부터 시행한다.

제6조 개정된 규정은 이사회의 의결을 거쳐 2011년 3월 1일부터 시행한다.

---

---

한국일본문화학회 연구윤리 규정

---

---

제 1 장 총 칙

제1조 (개요)

본 한국일본문화학회(이하 '학회'라 한다)는 한국에서의 일본학 연구 및 교육활동을 활성화하기 위한 학술단체로 설립되었다. 본 학회는 학술활동의 일환으로 회원들의 학술연구결과를 엄정한 심사를 통해 선정하여 학술대회에 참여시키고, 그 결과를 학회지에 게재시키고 있다. 본 학회는 지속적으로 높은 수준의 학술지 발표를 통하여 학회의 발전 및 궁극적으로 한일 양국의 문화교류 및 발전을 도모하고자 한다. 이를 위하여 회원들의 학술연구 수행 및 연구논문 발표 시 국제 수준의 연구윤리를 준수함이 우선적으로 중요하며, 학회는 회원들의 진정한 학문적 발전을 위하여 학회연구윤리규정을 제정하고자 한다.

제2조 (목적)

본 규정의 목적은 본 학회의 학회지 및 학술대회 발표 논문에 관한 연구윤리의 규정을 엄격히 정하고 명문화함으로써 신뢰받는 연구풍토를 확립하고, 회원들의 바른 학술활동을 유도하여 학회의 위상을 효율적으로 제고하기 위함이다.

제 2 장 연구윤리위원회의 조직

제3조 (위원회 설치)

본 학회는 연구윤리 규정의 목적을 달성하기 위하여 학회 내에 연구윤리위원회(이하 '위원회'라 한다)를 설치한다.

제4조 (위원회 구성)

1. 위원회는 편집위원장, 부회장, 총무이사, 학술이사, 편집이사 및 3인 이상의 편집위원을 포함하여 15인 이내의 위원으로 구성한다.
2. 위원장은 편집위원장이 겸임하는 것을 원칙으로 하되 필요에 따라서는 위원회 내에서 회장이 임명한다.

제5조 (임기)

위원의 임기는 각 위원의 직책임기에 따른다.

### 제 3 장 연구윤리위원회의 운영 및 권한

#### 제6조 (운영 범위)

1. 학회 연구윤리와 관련된 제반 규정들을 세우고 실행한다.
2. 연구윤리 위반에 대한 제보를 접수하고 이를 규정에 따라 처리한다.
3. 제보자 및 피조사자의 인격과 명예에 대한 사항을 규정하고 이를 준수한다.
4. 최종 조사결과에 대한 공문을 상임이사회에 통보한다.
5. 상임이사회 최종 판정결과에 따라서 후속 사항 및 징계사항을 집행한다.

#### 제7조 (연구자의 연구윤리)

1. 연구자는 각자가 수행하는 연구행위 및 연구물에서의 표절, 조작, 위조 및 변조, 이중출판 등을 심각한 범죄행위로 간주하고 이러한 부정이 발생하지 않도록 해야 한다.
2. 연구자는 제1항에 제시한 부정행위로 의심되는 사례를 발견했을 경우 적절한 방법으로 이를 학회에 보고해야 한다.
3. 연구자는 자신의 이익과 타 연구자 또는 타 기관의 이익이 상충하거나 상충할 가능성이 있을 경우 이를 공표하고 적절히 대응해야 한다.

### 제 4 장 심의 절차 및 징계

#### 제8조 (심의 절차)

1. 위원회는 제보된 사안을 접수일로부터 60일 이내에 심의·의결·집행하는 것을 원칙으로 한다.
2. 제보자의 신원 및 제보내용에 대해서는 비공개를 원칙으로 하되, 공공기관의 요청이 있을 경우에는 통보할 수 있다.
3. 위원회는 제보된 사안의 적부를 자체 심사평가하며, 전문적 의견이 필요한 경우 해당 분야의 전문가들에게 검토를 의뢰할 수 있다.
4. 위원회는 판정을 내리기 전에 피제소자에게 연구윤리 저촉혐의 내용을 알려 주고 충분한 소명기회를 준다.
5. 심의 결과 제보된 사안이 부적절하거나 피제소자의 소명이 타당하다고 인정될 경우, 피제소자의 무혐의를 제보자와 피제소자에게 즉시 통보한다.
6. 심의 결과 연구윤리 저촉이 사실로 인정될 경우, 심사결과를 제보자와 피제소자에게 각각 통보하고, 피제소자로 하여금 일정 기간 내에 재 소명할 수 있는 기회를 준다.
7. 위원회는 피제소자의 혐의가 인정될 경우, 부정행위의 형태, 범위 및 고의성을 판별하여 보고서를 작성한다.



8. 위원회의 징계의결은 재적위원 3분의 2 이상의 출석과 출석위원 과반수의 찬성으로 행한다.
9. 명시된 기간 내에 피제소자의 소명이 없거나 소명의 타당성이 인정되지 않을 경우, 징계 내용을 최종 결정하여 이를 피제소자에게 공식 통보하는 한편, 학회 홈페이지를 통하여 공지한다. 단, 징계를 받은 논문 중 기관의 연구비를 받은 논문은 당해 기관의 확인 요청 여부와 관계없이 당해 기관에 징계 결과를 통보한다.

## 제9조 (징계)

연구윤리 위반이 공식적으로 확정된 저자나 논문에 대해서는 그 위반행위의 경중에 따라 다음 중 하나 또는 복수의 항목에 해당하는 징계를 가하도록 한다.

1. 학회 견책 서한 발송
2. 해당 연구결과물에 대한 취소 또는 수정 요구
3. 3년간 투고자격 제한
4. 제명
5. 소속기관에의 통보
6. 법률기관에의 고발 등

## 제 5 장 기타

제10조 연구윤리 위반 혐의가 인정된 경우, 논문 투고 및 심사에 사용한 제반 경비를 반환하지 않는 것을 원칙으로 한다.

제11조 본 규정은 이사회회의 의결을 거쳐 2008년 8월 1일부터 시행한다.

---

---

『일본문화학보』 투고 규정

---

---

1. (논문)

일본어문학, 일본어교육, 일본학, 한일어 대조연구, 한일비교 문학 등 廣義의 일본문화와 관련된 참신하고 창의적인 것이어야 한다.

2. (사용언어)

한국어나 일본어로 작성한다.

3. (원고작성)

국내 회원 및 해외 회원 공히 반드시 워드프로세서 <한글> 로 작성하는 것을 원칙으로 한다. 원고는 <한글>의 <편집 용지>에서 (사용자 정의 폭 180, 길이 255)를 선택하고, 위 20, 아래 10, 머리말 13, 꼬리말 13, 왼쪽 23, 오른쪽 23, 제본 0으로 조정한 후 작성한다. 논문 내용의 각 글자 크기는 다음과 같다.

논문 제목 - 신명조(약자) 20, 진하게, 가운데 정렬

소제목 - 신명조(약자) 15, 가운데

필자 명, e-mail - 신명조(약자) 12, 오른쪽 정렬

목차 - 신명조(약자) 12, 진하게, 가운데

목차 내용 - 신명조(약자) 10, 줄간격 140

큰제목 - 신명조(약자) 15, 진하게, 줄간격 155, 가운데

본문 - 신명조(약자) 10.5, 줄간격 155

인용문 - 신명조(약자) 10, 줄간격 155, 왼쪽 여백 (한글2002는 20, 한글97은 4)

각주 - 신명조(약자) 9, 줄간격 130

기타 간격 등의 설정은 <한국일본문화학회 논문 작성 요령>에 나와 있는 논문 편집 형식을 참고한다.

4. (원고분량)

원고지 200자×100매 내외로 한다. 이는 투고규정에 따라 작성한 문서 약 19매에 해당하며, 15매~22매를 원칙으로 한다. 원고가 요지문을 포함하여 22매를 초과할 경우에는 1매당 1만원의 게재료를 추가로 부담한다.

5. (요지문)

참고문헌 뒤에 600-800자 정도의 요지문을 기재한다. 요지문은 반드시 외국어(영문 혹은 일어) 로 작성한다.

6. (키워드)

요지문 밑에 그 논문을 이해하는 데 필요한 키워드(Key-Word) 6-10단어를 요지문과 동일 언어로 명기한다.

7. (외래어)

일본어를 한글로 표기할 때는 한글맞춤법의 <외래어표기법>에 따른다.

## 8. (논문작성 요령)

- a. 저서는 『 』, 논문이나 단편은 「 」로 표시한다.
- b. 注는 각주로 하며, 인용 또는 참고한 쪽수를 명기한다.
- c. <참고문헌>은 필자명(연도), 논문명(또는 저서명), 게재지 권 호, 발행처의 순으로 배열하되, 마지막에 참고 혹은 인용한 쪽수를 필히 기재한다.  
예) 安增煥(2001) 「言語와 文化」 『日本文化學報』 11, 韓國日本文化學會. 110쪽  
影山太郎(1993) 『文法と語構成』 ひつじ書房. 212頁  
Stein, Dieter(1995) “Subjectivity and Subjectivisation” : Cambridge University Press. p.113
- d. 배열은 한국어 문헌, 일본어 문헌, 영어 문헌의 필자명을 기준으로 각각 가나다, 오십음, 알파벳순으로 한다. 내용적으로 <사전류>, <전집류>, <단행본>, <잡지>, <논문> 순으로 기재하는 것을 원칙으로 한다.

## 9. (원고제출)

원고는 e-mail로 제출한다. 원고와 함께 투고자의 인적사항(성명, 영문성명, 소속, 직위, 전공 분야), 논문의 영어제목, 연락처(우편번호, 주소, 전화, e-mail) 및 구두발표, 발표장소, 투고일, 심사비 입금을 기입한 논문투고신청서를 제출한다. 또한 집필자가 복수인 경우, 제1필자와 공동필자를 함께 표기한다.

## 10. (원고교정)

편집위원회에서는 필요에 따라 집필자에게 원고의 가필·수정을 요구할 수 있으며, 원고의 교정은 집필자가 책임진다.

## 11. (심사비 및 게재료)

논문 투고를 희망하는 자는 학회 계좌에 심사비로 6만원을 입금하여야 하며, 게재가 확정되면 집필자는 소정의 게재료를 부담한다. (일반논문 : 10만원, 연구비 수혜논문 : 20만원. 단, 22쪽을 초과할 경우 1쪽당 1만원을 추가 부담한다.)

## 12. (별쇄본)

게재된 논문에 대하여 학회지 2부를 증정한다. 단, 별쇄본의 인쇄비용은 집필자가 부담한다.

## 13. (기타)

복잡한 도표 및 투고 규정 위반 등으로 인하여 출판 비용이 많이 들 경우에는 집필자에게 그에 대한 비용을 청구할 수 있으며, 접수된 원고는 반환하지 않는다.

한국일본문화학회 논문 작성 요령

【편집용지】 <사용자 정의 폭180, 길이255> 위20(19.99), 머리말13(12.99), 왼쪽23, 오른쪽23, 제본0, 아래10, 꼬리말13(12.99)

【논문제목】 한국일본문화학회 (신명조(약자) 20, 진하게, 가운데 정렬)

【소제목】 한국일본문화학회(신명조(약자) 15, 가운데)

\*\* 4줄 (소제목이 없으면 5줄) \*\*

【필자명】 홍吉東\* (신명조(약자) 12, 오른쪽 정렬)

【e-mail】 (metrojung@naver.com)(신명조(약자) 12, 오른쪽 정렬)

(필자가 2인 이상인 경우, 제1필자를 상단에, 공동필자를 하단에 표기한다. 필자명 끝에 \* 표를 위 첨자 “\*” (“모양”→“글자모양”에서 “속성-위 첨자”를 선택)로 한 후 소속, 직위, 전공분야를 각주로 기입한다. 각주번호 “1”은 블록을 띄워 “글자모양”에서 글자색을 흰색으로 지정하여 감추고, 본문에서 각주가 시작될 때는 “모양”의 “새 번호로 시작”에서 각주번호를 “1”로 한다.)

\*\* 2줄 \*\*

目次 (신명조(약자) 12, 진하게, 가운데)

신명조(약자) 10 , 줄간격 140

\*\* 2줄 \*\*

【큰제목】 1. 연구 목적 및 방법 (신명조(약자) 15, 진하게, 줄간격 155, 가운데 정렬)

\*\* 1줄 \*\*

【본문】 이 논문은 상대일본어의.....大野씨는 다음과 같이 논하고 있다.

(신명조(약자) 10.5, 줄간격 155)

\*\* 1줄 \*\*

[인용문] 상대에 있어서...

(신명조(약자) 10, 줄간격 130, 왼쪽 여백(한글2002는 20, 한글97은 4))

\*\* 1줄 \*\*

이처럼 상대일본어의.....

\*\* 2줄 \*\*

2. 상대 일본어의 특징 (신명조(약자) 15, 진하게, 줄간격 155, 가운데 정렬)

\*\* 1줄 \*\* (작은 제목과 본문사이는 떼지 않음)

【각 주】 \_\_\_\_\_

\* 한국대학교 조교수 일본고전문학

1) 이에 대해 \*\*\*\*은 다음과 같이 논하고 있다.(신명조(약자) 9, 줄간격 130)  
(인용 및 참고자료에 대해서는 발행년도와 쪽수를 표기한다.)

\*\* 2줄 \*\*

5. 맺음말

\*\* 1줄 \*\*

이 논문에서는....

\*\* 2줄 \*\*

【참고문헌】 (신명조(약자) 15, 진하게, 줄간격 155)

\*\* 1줄 \*\*

· 허웅(1985) 『국어음운학』, 샘문화사. p.131-133 (신명조(약자) 10, 줄간격 155)

\* 전체 글꼴은 신명조 또는 신명조 약자, 전체 줄간격은 155, 각주 130 표 140.

\* <필자명(연도) 논문명(또는 저서명), 게재지 권 호, 발행처>의 순서로 배열

\* 문헌 배열 : 국문, 일문, 영문 순으로 하여 필자명을 기준으로 각각 가나다, 오십음, 알파벳 순.

\* 인용 또는 참고한 쪽수를 명기

\*\* 쪽을 바꿔서 \*\*

【요지】 (신명조(약자) 15, 진하게, 줄간격 155)

\*\* 6줄 \*\*

本論は、上代日本語を通して..... (신명조(약자) 10, 줄간격 155)

( 작성언어 : 영어 또는 일본어. 분 량 : 1장 내외)

\*\* 1줄 \*\*

\* 키워드 : 검색의 편의를 위해 주제어(key word)를 명시(요지문과 동일 양식으로 6-10단어)

\*\* 2줄 \*\*

---

---

학회 발표에 관한 규정

---

---

1. (발표자격)

본 학회 정회원으로서 대학원생이거나, 교원 경력 5년 이상인 자, 또는 이사회의 추천을 받은 자로 한다. 단, 석사과정의 대학원생인 경우는 지도교수 혹은 해외지부장의 추천이 필요하며, 발표 요지문을 해당 분과에서 심사 후 채택 여부를 결정한다.

2. (발표신청)

발표신청은 사무국으로 하며, 신청 시에는 학회 홈페이지상의 발표신청서 양식을 이용하도록 한다.

3. (신청기한)

춘계대회 발표 희망자는 3월 15일, 추계대회 발표 희망자는 9월 15일까지 신청하도록 한다.

4. (발표 요지문)

a. <발표요지문>은 한국어 또는 일본어로 작성한다.

b. 분량은 B5용지 5장(가로쓰기) 이내로 한다.

c. 춘계대회 때는 3월 31일까지, 추계대회 때는 9월 30일까지 제출을 원칙으로 한다.

d. 원고는 가능한 한 E-mail(첨부파일)로 하여 사무국으로 전송한다.

e. 우편의 경우는 학회 사무실로 발송한다.

f. 발표 요지문은 사무국으로 제출하고 요지집 인쇄비 10,000원은 학회 당일 접수에서 납부한다.

5. (외국 교류학술지 투고)

구두발표 신청 시 외국 학술교류학회지(일본비교문화학회 『비교문화연구』)에 투고를 희망하는 경우는 국내회원이 대상이 된다. 교류학회 측의 투고요청 희망자수 범위 내에서 본 학회의 내부 선정 기준에 의하여 대상자를 선정·추천한다.

< 게재료 입금처 >

(韓國) SC제일은행 528-20-112798 임성규(한국일본문화학회)

(日本) 郵便局 00920-9-147169 韓国日本文化学会 日本支部

---

---

외국학회와의 학술교류에 관한 규정

---

---

1. (日本) 表現学会

- a. 표현학회는 한국일본문화학회로부터 추천 받은 1명에 대하여, 전국대회(연 1회)에서 연구 발표의 기회를 제공한다.
- b. 한국일본문화학회는 표현학회로부터 추천 받은 수명에 대하여, 학술대회(연 2회)에서 연구 발표의 기회를 제공한다.
- c. 표현학회는 한국일본문화학회로부터 추천 받은 발표 논문에 대하여 학회지 『表現研究』에 게재할 수 있다.
- d. 한국일본문화학회는 표현학회로부터 추천 받은 발표 논문에 대하여 학회지 『日本文化學報』에 게재할 수 있다.

2. 日本比較文化学会

- a. 일본비교문화학회는 한국일본문화학회로부터 추천 받은 회원에 대하여, 전국 대회(연 1회)에서 연구발표의 기회를 제공한다.
- b. 한국일본문화학회는 일본비교문화학회로부터 추천 받은 회원에 대하여, 학술 대회(연 2회)에서 연구발표의 기회를 제공한다.
- c. 일본비교문화학회의 학회지 『比較文化研究』에 한국일본문화학회 국내회원의 논문을 게재할 수 있다.
- d. c항의 논문은 한국일본문화학회에서 구두 발표한 논문 중에서 학회가 추천하며, 투고자의 추천에 있어서는 학회의 내부 규정에 따라 해당자를 선정한다.
- e. 추천 논문의 심사와 게재료는 일본비교문화학회의 규정에 따른다.
- f. 한국일본문화학회는 학회지 『日本文化學報』에 일본비교문화학회로부터 추천 받은 논문을 게재할 수 있으며, 추천 논문의 심사는 해당 학회의 규정에 따른다.
- g. 일본비교문화학회는 전국대회(연 1회)에서 발표하는 한국일본문화학회로부터의 추천 회원에 대하여 1년 간의 회비를 면제한다.
- h. 한국일본문화학회는 학술대회(연 2회)에서 발표하는 일본비교문화학회로부터의 추천 회원에 대하여 1년 간의 회비를 면제한다.

3. 台湾日本語文学会

---

---

## 해외이사에 관한 규정

---

---

1. (자격)

본 학회에 1회 이상 출석하여 연구발표를 한 외국 학자 중에서, 본 학회의 연구 활동에 관심을 가지고 협력하는 자로 한다.

2. (활동)

- a. 자국 내에 본 학회를 소개하고 학회의 활동 내용이나 정보 등을 제공한다.
- b. 본 학회의 연구발표회에서 발표를 희망하는 자를 모집한다.
- c. 본 학회의 학회지 게재 대상 논문을 심사할 수 있다.
- d. 본 학회의 자국내 회원을 관리한다.

3. (임기)

2년 단위로 하고, 본인의 동의를 얻어 연장 가능하다.

4. (임명)

이사회에서 심의·결정하고, 회장이 위촉한다.

5. (시행)

본 규정은 1997년 5월 5일부터 시행한다.

---

---

## 해외지부에 관한 규정

---

---

- 1. 본 학회는 학문을 통한 국제교류와 학회활동의 국제화를 위해 해외에 지부를 둘 수 있다.
- 2. 해외지부는 본 학회의 취지에 찬동하고 적극적으로 협조할 수 있는 해외이사를 중심으로 결성한다.
- 3. 해외지부의 운영은 지부장이 총괄하며, 회원도 자체 관리한다.
- 4. 해외지부장은 이사회에서 추천을 받아 회장이 위촉한다.
- 5. 해외지부장의 임기는 2년이며 본인의 동의를 얻어 연임도 가능하다.
- 6. 해외지부는 정기적인 연구회를 개최하고, 그 결과를 본 학회에 보고한다.
- 7. 해외지부에서는 본 학회의 전국대회(연 2회)에 발표자를 추천한다.
- 8. 해외지부로부터의 추천 발표자는 1년 간의 회비를 면제한다.
- 9. 본 학회에서는 해외지부에 투고 논문에 대한 심사를 의뢰할 수 있다.



---

---

## 회원규정

---

---

본 학회의 모든 회원은 [국내회원](국내에 소속이나 근무처가 있는 내국인이나 외국인)과 [해외회원](국외에 소속이나 근무처가 있는 외국인이나 내국인)으로 구분하며, 가입 내용에 따라 다음과 같이 분류된다. 단, 한국인 유학생은 국내회원으로 분류한다.

- 1.(정회원) 본 학회의 회원 가입을 필한 자. 단, 3년 간 회비를 납부하지 않을 경우에는 정회원의 자격을 상실한다.
- 2.(준회원) 회원 중 정회원의 자격을 상실한 자.
- 3.(종신회원) 본 학회의 발전에 기여한 회원 중에서 이사회의 동의를 얻은 자로, 소정의 종신회비(30만원)를 납부한 회원으로, 실무이사를 겸하고 있는 경우 이사회비는 2만원으로 한다.
- 4.(특별회원) 본 학회의 발전에 기여한 회원 중에서 이사회의 추천을 받은 자.
- 5.(명예회원) 본 학회 초청강연자 중에서 이사회의 추천을 받은 자.
- 6.(단체회원) 소정의 단체회비(8만원)를 납부하는 국내외 학술단체 및 기관. 단, 해외의 [학술지 교류단체]도 단체회원의 범주에 포함한다.

회원명단 상에 상위점이나 변경사항이 있는 회원께서는 즉시 학회 사무국으로 연락 바라며, 3년 동안 회비를 납부하지 않는 경우에는 회원명단에서 자동 삭제되니(재가입 要) 이 점 양지하시고 협조 부탁드립니다.

---

학회비 납부 안내 (가입비 1만원 / 년회비 3만원)

\* 이사회비 년5만원

(韓國) SC제일은행 528-20-112798 임성규(한국일본문화학회)

(日本) 郵便局 00920-9-147169 韓國日本文化学会 日本支部

## 『日本文化學報』發行計劃

- 原稿 投稿 依頼 (5月初・11月初)
- 論文 原稿 마감 (2月末・5月末・8月末・11月末) : 1次 提出
- 論文 審査 (3月・6月・9月・12月)
- 審査委員 審査結果 通知 (3月中旬・6月中旬・9月中旬・12月中旬)
- 論文 修正原稿 마감 (3月末・6月末・9月末・12月末) : 2次 提出
- 編集委員會 最終 掲載可否 通知 (4月初・7月初・10月初・1月初)
- 1次 校正 : 筆者
- 2次 校正 : 編集委員會
- 發行 (5月31日・8月31日・11月30日・2月28日)

## 學會 住所 및 連絡處

### ☞ 韓國

#### 學會事務局

(300-150) 대전광역시 동구 정동 31-1

신영와코루빌딩 201호(메트로문화사)

Tel (042)488-9155 Fax (042)488-9156

### ☞ 日本

本学会の 関西支部 : 藤井寺市春日丘3-8-1 大阪女子短期大学 水谷隆研究室

関東支部 : 東京都日野市大坂上4-1-1 実践女子大学 山内博之研究室

中部支部 : 名古屋市昭和区山里町18番地 南山大学 坂本正研究室

☞ 학회 Homepage address : //www.bunka.or.kr

## 各種樣式

[제반 양식은 학회 홈페이지에서 다운받아 사용 바랍니다.]

## 編輯委員會

編輯委員長 : 片茂鎮(檀國大)  
 編輯幹事 : 權寧成(清州大)  
 編輯委員 : 具見書(平澤大) 權五曄(忠南大) 金順禎(全南大) 朴正義(圓光大)  
 安增煥(韓南大) 李康民(漢陽大) 鄭昌石(同德女大) 陳明順(靈山大)  
 坂本正(南山大) 島村恭則(關西學院大)

## 分科委員會

[日本語學分科]	* 尹錫南(建陽大)	黃光吉(檀國大)	趙來喆(順天大)
張元哉(啓明大)	辛碩基(建陽大)	吳美寧(崇實大)	崔彰完(가톨릭大)
金東郁(白石大)			
[日本語教育分科]	* 安熙貞(威德大)	金聖京(柳韓大)	金潤喆(群山大)
金仁炫(朝鮮大)	李京哲(東國大)	崔英淑(大邱韓醫大)	尹岡丘(慶尙大)
安秉杰(南서울大)	李夏子(順天大)	康永富(慶熙大)	
[古典文學分科]	* 閔丙勳(大田大)	裴貞烈(韓南大)	金泰燾(韓瑞大)
金祥圭(釜慶大)	金裕千(詳明大)	南二淑(群山大)	李濬燮(慶北大)
鄭順紛(培栽大)	李市竣(崇實大)	李珍鎬(圓光大)	吳起燾(青巖大)
金秀美(高麗大)	朴相鉉(慶熙사이버大)		
[近代文學分科]	* 李貞熙(威德大)	金希中(東南保健大)	權赫建(東義大)
朴勝乎(白石文化大)	韓光洙(清州大)	임태균(聖潔大)	林容澤(仁荷大)
김태연(慶州大)	吳俊永(空軍士官學校)		
[日本學分科]	* 崔長根(大邱大)	金泰永(江陵大)	林永彥(全南大)
朴正義(圓光大)	具見書(平澤大)	鄭應洙(南서울大)	鄭昌石(同德女大)
權柄旭(忠南大)	金英順(建陽大)	朴宰秀(韓國科學技術情報研究院)	

※ (\*는 分科理事)



会則および規定

- ▶ 学会会則
  - ▶ 編輯委員会規定
  - ▶ 投稿規定
  - ▶ 学会発表に関する規定
  - ▶ 海外理事に関する規定
  - ▶ 海外支部に関する規定
  - ▶ 会員規定
- 『日本文化学報』発行計画
- 各種様式
- 2011年度 学会日程表

---

---

会則および規定

---

---

韓国日本文化学会 会則

第 1 章 総 則

第1条(名称) 本学会は「韓国日本文化学会」と称する。

第2条(目的) 本学会は日本関連諸学問研究のための国内外相互の学術交流を通じて、日本学  
研究の活性化と学問の発展を図り、国際交流を通じた相互協力と理解増進に寄与  
する。

第3条(事業) 本学会は第2条の目的を達成するために各項の事業を行う。

1. 学術研究発表会(年2回)
2. 学術誌発刊(年4回)
3. 学術振興のためのセミナー及びシンポジウムの開催
4. 外国学会との学術交流及び共同研究
5. 外国の大学図書館及び学術団体との学術誌交流
6. 日本文化の紹介

第4条(位置) 本学会の目的を達成するために学会事務室及び支部を置き、常時業務を担当する  
事務局長を置くことができる。

第 2 章 会 員

第5条(資格) 本学会の会員は日本語文学をはじめとする日本学研究に従事する者や関心を持つ  
者とする。

第6条(区分) 本学会の会員の区分は「会員規定」に従う。

第7条(加入要件) 本学会に新規に加入しようとする者は既会員の推薦を受けることを原則とする。

第8条(権利と義務) 本学会の会員は次のような権利と義務を有する。

1. 役員の選挙権及び被選挙権 (但し、名誉会員を除く)
2. 学会活動参加の権利と会則遵守の義務
3. 会費納付の義務

第9条(懲戒) 会員が会員の義務を遂行せず、本学会の名誉を著しく損なった場合は、理事会の

# Journal of Japanese Culture

463

決議を経て、会員資格の剥奪または停止など懲戒することができる。

## 第3章 機構及び役員

第10条(機構) 本学会には次のような機構を置く。

1. 執行委員会(会長、副会長、常任理事)
2. 理事会
3. 海外支部

第11条(役員) 本学会の円滑な運営のために次のような役員を置く。

会長(1名)、副会長(若干名)、常任理事(若干名)、海外理事及び理事(適宜)、監事(2名)

第12条(役員を選出) 会長及び監事は総会で選出し、その他の役員は会長が委嘱する。

第13条(役員の任期) 役員の任期は2年とするが再任することができる。

## 第4章 会議

第14条(種類) 本学会の会議には総会、理事会、各種委員会がある。

第15条(総会の招集及び議決)

1. 本学会は毎年1回の定期総会を開催し、必要に応じて会長が臨時総会を招集することができる。
2. 総会は次のような議案を審議・議決する。
  - (1) 会長及び監事の選出・解任
  - (2) 会則改定
  - (3) 事業計画の樹立
  - (4) 予算と決算の承認
  - (5) その他の事項
3. 総会での議決は出席会員の過半数の賛成による。

第16条(理事会の招集及び議決)

1. 理事会には実務理事会と拡大理事会があり、会長がこれを召集する。
2. 実務理事会は会長、副会長、常任理事により構成され、拡大理事会は会長、副会長を含む全理事が対象となる。
3. 理事会は諸規定の改定、会則改正の発議、会長委任事項の審議、諮問委員の迎え入れ、特別・名誉会員の承認、その他重要事項を処理する。

# Journal of Japanese Culture

464

第17条(各種委員会の構成及び任務)

1. 会長は分野別業務の能率的遂行のため各種委員会を設置することができる。
2. 委員会は委員長と委員から成り、委員長は会長の任命動議により理事会で選任する。
3. 委員会の案件は出席委員の過半数の賛成により可決される。

## 第5章 財政

第18条(財政) 本学会の財政は会員の会費とその他の収益金による。

第19条(会費) 本学会の会費は総会で決定する。

第20条(会計年度) 本学会の会計年度は3月から翌年2月までとする。

第21条(国際学术交流賞選定) 本学会の学術発展に多大な貢献が認められる海外会員を対象とし学会長の推薦により理事会において定める。

## 第6章 付則

第22条(会則改正) 本学会の会則の改正は定期総会で出席者の3分の2以上の同意を得て確定する。

第23条(施行細則) 本会則の施行に必要な諸規定は理事会の議決を得て施行する。本会則に明示されていない事項については慣例に従う。

第24条(施行日) 本改正会則は2001年10月1日から施行する。

第25条 改正された規定は、定期総会の議決を経て、2007年5月1日から施行する。

第26条 改正された規定は、定期総会の議決を経て、2008年10月25日から施行する。



## 韓国日本文化学会 編輯委員会規定

### 第 1 章 総 則

第1条 本委員会は「韓国日本文化学会編集委員会」と称する。

第2条 本委員会は韓国日本文化学会会則第17条により設置する。

第3条 本委員会が管掌する学会誌『日本文化學報』は次のような指針のもとに発行する。

1. 年4回(2月号、5月号、8月号、11月号)発行する。
2. 発行日は当該月の末日を原則とする。
3. その他の発行過程は「『日本文化學報』発行計画」による。

### 第 2 章 編集委員会の構成

第4条 編集委員会は次のように構成する。

委員長、編集幹事、国内外委員

第5条 編集委員会委員長は編集委員の中から会長の提請により理事会で選任する。編集委員会委員長は委員会を代表し、編集幹事は学会誌に投稿された論文の審査及び編集を統括する。任期は共に2年とする。

第6条 編集委員会委員は理事会の認定を経て会長が任命する。任期は2年とし、本人の同意を得て延長が可能である。

第7条 編集委員は次のような基準により選定する。

1. 大学の副教授以上またはこれに相当する資格を持つ者。或いは該当専攻分野で20年以上の研究経歴を持つ者で学術研究実績が優れた国内外会員。
2. 各学問分野の代表性を考慮して選定する。
3. 分科委員会の分科理事。

### 第 3 章 機 能

第8条 編集委員会は学会誌『日本文化學報』の様式、発行回数、発行部数、論文の分量、投稿及び審査規程など学会誌発行と関連した諸事項を決定する。

第9条 編集委員会の編集幹事は各分科理事との合意のもとに投稿論文の審査委員を選定・依頼し、編集委員会は審査委員の審査結果を踏まえて論文掲載の可否を決定する。

# Journal of Japanese Culture

466

第10条 第8条の事項以外に編集委員会が議決した事案は、理事会の認定を経たのちに効力が発生する。

## 第4章 編集委員会会議

第11条 編集委員会会議は学会誌の発行計画により委員長が召集する。

第12条 年4回の定期編集会議以外に、必要に応じて委員長が臨時編集会議を招集することができる。

第13条 編集会議は原則として出席委員の過半数の賛成で議決する。

## 第5章 論文評価基準

第14条 掲載論文は学会の研究発表会で発表されたものとするが(但し、口頭発表後2年間有効)、理事会の推薦がある場合にはその寄稿論文も掲載することができる。

第15条 論文の審査は項目別評価と総合評価からなる。

第16条 評価項目は次の通りである。

1. 内容の適切性
2. 内容の独創性
3. 形式の適切性
4. 展開の論理性
5. 研究方法の適切性

第17条 総合評価は項目別評価をもとに審査者が次の4段階で評価する。

1. 学術論文として非常に優秀である。
2. 学術論文として優秀であるが、一部修正を要する。
3. 学術論文として内容・形式面で修正を要する部分が比較的多く、修正後再投稿を要する。
4. 学術論文として不適格である。

## 第6章 論文審査基準・審査過程

第18条(審査基準) 編集委員会では投稿論文に対する3名の責任審査委員の審査結果と、指摘事項に対する執筆者の処理結果及び投稿規定の遵守を基準として、次のように論文の掲載可否を決定する。

# Journal of Japanese Culture

467

1. 掲載  
審査委員評価23点以上の論文が対象になる。
2. 修正後掲載  
審査委員評価20～22点の論文が対象になる。
3. 修正後再審査  
審査委員評価10～19点の論文が対象になる。
4. 掲載不可  
審査委員評価10点未満の論文が対象になる。

第19条(審査過程) 論文の審査は次の2段階の過程からなる。

1. 一次審査(審査委員審査)
2. 二次審査(編集委員会審査)

第20条(審査時期) 投稿された論文の審査は年4回(3月、6月、9月、12月)実施することを原則とする。

第21条(論文掲載号) 最終審査に通過した論文の掲載号は編集委員会で決定する。

## 第7章 その他

第22条 編集委員会及び分科別の業務を処理するため編集委員会とは別に分科委員会を置く。

## 第8章 付則

第1条 本規定は理事会の議決を経て1999年10月9日から施行する。

第2条 本規定に明示されていない事項については慣例に従う。

第3条 改正された規定は理事会の議決を経て2002年3月1日から施行する。

第4条 改正された規定は理事会の議決を経て2006年8月1日から施行する。

第5条 改正された規定は理事会の議決を経て2008年8月1日から施行する。

第6条 改正された規定は理事会の議決を経て2011年3月1日から施行する。

---

---

韓国日本文化学会の研究倫理の規定

---

---

第 1 章 総 則

第1条 (概要)

韓国日本文化学会(以下‘学会’と称する)は韓国における日本学の研究及び教育活動を活性化するための学術団体として設立された。本学会は会員の学術研究を厳正に審査し学術大会に参加資格を与え、その結果を学会誌に掲載している。本学会は持続的に高いレベルの学会誌の発表を通じて、学会の発展はもとより韓国と日本の文化交流及び発展を図っている。そのために会員の学術研究及び研究論文の発表において、国際レベルの研究倫理を守ることは重要である。したがって、本学会は会員の学問的な発展のために学会の研究倫理の規定を設ける。

第2条 (目的)

本規定の目的は本学会の学会誌及び学術大会での発表論文に関する研究倫理の規定を厳正に定め文書化することにより、信頼できる研究の風土を作り上げて会員の正しき学術活動を導き、学会の位相を高めるためである。

第 2 章 研究倫理委員会の組織

第3条 (委員会の設置)

本学会は研究倫理の規定の目的を達成するために、学会内に研究倫理委員会(以下‘委員会’と称する)を設ける。

第4条 (委員会の構成)

1. 委員会は、編集委員長、副会長、総務理事、学術理事、編集理事及び3人以上の編集委員を含む15人以内の委員で構成する。
2. 委員会は編集委員長が兼任することを原則とするが、必要に応じて委員会内で学会長が任命することとする。

## 第5条 (任期)

委員の任期は、各委員の職責任期に準ずる。

## 第 3 章 研究倫理委員会の運営及び権限

### 第6条 (運営の範囲)

1. 学会の研究倫理に関わる諸規定を設けて実行する。
2. 研究倫理の違反に関する通報を受け付け、規定に沿って処理する。
3. 通報者及び被調査者の人格と名誉に関する事項を規定し、これを遵守する。
4. 最終の調査結果を公文書とし、常任理事会に通報する。
5. 常任理事会の最終の査定結果をもって、後続事項及び懲戒事項を執り行う。

### 第7条 (研究者の研究倫理)

1. 研究者は各自が行っている研究行為及び研究物における剽窃、捏造、偽造、作り替え、二重出版などが深刻な犯罪行為であることを自覚し、このようなことをしないようにしなければならない。
2. 研究者は第1項に示した不正行為と疑われる事例を見つけた場合、これを適切な方法で学会に報告しなければならない。
3. 研究者は自信の利益と他の研究者又は他の機関の利益が衝突するか、衝突する可能性がある場合、これを公表し適切に対応しなければならない。

## 第 4 章 審議の手順及び懲戒

### 第8条 (審議の手順)

1. 委員会は通報された事項を受付日から60日以内に審議・議決・執行することを原則とする。
2. 通報者の身元及び通報の内容については非公開を原則とするが、公共機関の要請がある場合は公開することもある。
3. 委員会は通報された事項の適否を審査し、専門的な意見が必要な場合はその分野の専門家に検討を依頼することができる。
4. 委員会は判定を下す前に被調査者に研究倫理に抵触の疑いがあることを知らせ、十分な釈明の機会を与える。

5. 審議の結果、通報された事項が不適切か、被調査者の釈明が妥当と認められた場合、被調査者の疑いが晴れたことを早速通報者と被調査者に知らせる。
6. 審議の結果、研究倫理への抵触が認められた場合、その結果を通報者と被調査者に知らせて、被調査者には一定の期間内に再釈明できる機会を与える。
7. 委員会は被調査者の疑いが認められた場合、不正行為の形と範囲、故意性を判別して報告書を作成する。
8. 委員会の懲戒議決は在籍委員2/3の出席、出席委員の過半数の賛成で行う。
9. 定められた期間内に被調査者の釈明がないか、釈明の妥当性が認められない場合、懲戒の内容を最終決定して、これを被調査者に告知する一方、学会のホームページを通じて公示する。但し、懲戒を受けた論文の中で機関の研究費をもらったものは、当該機関の確認要請とは無関係に当該機関に懲戒の結果を通報する。

## 第9条 (懲戒)

研究倫理の違反が正式に確定した著者や論文については、その違反行為の軽重に応じ、次の内、一つ又は複数の項目の懲戒を下す。

1. 学会の譴責文書発送
2. 当該の研究結果物に対して取り消し、又は、修正要求
3. 3年間投稿資格の制限
4. 除名
5. 所属機関への通報
6. 法律機関への告発など

## 第 5 章 その他

第10条 研究倫理の違反が認められた場合、論文の投稿及び審査にかかった諸経費は一切返還しないことを原則とする。

第11条 本規定は、理事会の議決を経て2008年8月1日から施行する。

『日本文化學報』 投稿規定

【海外会員用】

1. 原稿は<アレアハングル>かMs-Wordで作成する。
2. 原稿の分量は原稿用紙400字×50枚以内とする。<アレアハングル>の文書作成の初期画面で作成する場合は、A4用紙15枚から22枚までとする。要旨を含めて22枚を超えるときは、超過分1枚当たり1万ウォンの掲載料を徴収する。
3. 原稿は<アレアハングル>の<編集用紙>で<使用者定義 幅180、縦255>を選択し、上20、下10、ヘッダー13、フッター13、左23、右23、製本0に調整した後作成する。フォントは韓国語文は新明朝、日本語文は新明朝略字とする。各文字のポイント数は次の通りである。

論文題目 - 新明朝(略字) 20、太字、中央寄せ

副題 - 新明朝(略字) 15、中央寄せ

筆者名, e-mail - 新明朝(略字) 12、右寄せ

目次 - 新明朝(略字) 12、太字、中央寄せ

目次の内容 - 新明朝(略字) 10、行間隔 140、中央寄せ

大見出し - 新明朝(略字) 15、太字、行間隔 155、中央寄せ

本文 - 新明朝(略字) 10.5、行間隔 155、両側混合

引用文 - 新明朝(略字) 10、行間隔 155、両側混合、左余白:ハングル2002は20、ハングル97は4

脚注 - 新明朝(略字) 9、行間隔 130、両側混合。表 - 行間隔 140

その他の設定は<『日本文化學報』論文作成要領>を参照する。

4. <参考文献>の後に600字未満の要旨(英文あるいは日本語)を記入する。
5. 要旨のすぐ下にその論文を理解するために必要なキーワード(6~10語)を要旨と同一の言語で明記する。
6. 原稿上の図表やイメージ資料は必要に応じて原本を添付する。
7. 注は脚注とし、必ず引用・参考したページを明記する。
8. <参考文献>は、筆者名(年度)、「論文名」(または『著書名』)、掲載紙と巻号、発行所の順

# Journal of Japanese Culture

472

とする。最後に参考あるいは引用した頁を必ず明記する。

例) 西隈俊哉(2001), 「-AS使役に関する一考察」, 『日本文化學報』11, 韓国日本文化学会, 110面.

影山太郎(1993), 『文法と語構成』, ひつじ書房, 212頁.

Stein, Dieter(1995), “Subjectivity and Subjectivisation” : Cambridge University Press. p.113

9. <参考文献>の配列は韓国語、日本語、英語の文献の順とし、筆者名を基準にして、それぞれアイウエオ、abc順にする。
10. 原稿はE-mailで提出する。
11. 原稿の表紙は、所定の別紙(論文投稿用)に論文タイトル(英文タイトル併記)、筆者名(漢字、ローマ字式表記併記)、筆者の勤務先(所属)・専攻・住所・電話番号・e-mail、口頭発表した場所と発表日、投稿日を明記する。
12. 投稿論文の査読に所要する費用は学会で負担する。但し、掲載が確定した場合は執筆者は所定の掲載料を負担する。
13. 掲載された論文に対しては学会誌2部を贈呈する。



『日本文化學報』 論文作成要領

【編集用紙】

<使用者定義 幅180, 縦255> 上20(19.99), 下10, ヘッダー13(12.99), フッター13(12.99),  
左23, 右23, 製本0

【論文題目】 韓国日本文化学会(新明朝(略字) 20, 太字, 中央寄せ)

【副題】 韓国日本文化学会(新明朝(略字) 15, 中央寄せ)

\*\* 4行空け (副題がない場合は5行空け) \*\*

【筆者名】 洪吉東(新明朝(略字) 12, 右寄せ)  
【e-mail】 (metrojung@naver.com)(新明朝(略字) 12, 右寄せ)

\*\* 2行空け \*\*

---

目次 (新明朝(略字) 12, 太字, 中央寄せ)

---

新明朝(略字) 10 , 行間隔 140

---

\*\* 2行空け \*\*

【大見出し】 1. 研究の目的と方法 (新明朝(略字) 15, 太字, 行間 155, 中央寄せ)

\*\* 1行空け \*\*

【本文】 この論文は上代日本語の.....大野氏は次のように述べている  
(新明朝(略字) 10.5, 行間 155, 両側混合)

\*\* 1行空け \*\*

[引用文] 上代において.....

(新明朝(略字) 10, 行間 130, 両側混合, 左余白:ハングル2002は20、ハングル97は4)

\*\* 1行空け \*\*

このように、上代日本語の.....

\*\* 2行空け \*\*

2. 上代日本語の特徴 (新明朝(略字) 15, 太字, 行間 155, 中央寄せ)

\*\* 1行空け \*\* (小見出しがある場合, 小見出しと本文の行間は空けない)

【脚注】 \_\_\_\_\_

1) これについて \*\*\*\*は次のように論じている。(新明朝(略字) 9, 行間 130, 両側混合)  
(引用及び参考資料については発行年度とページ数を明記する。)

\*\* 2行空け \*\*

5. 結び

\*\* 1行空け \*\*

本論文では...

\*\* 1行空け \*\*

【参考文献】 (新明朝(略字) 15, 太字, 行間 155, 中央寄せ)

\*\* 1行空け \*\*

・影山太郎(1993) 『文法と語構成』, ひつじ書房, 212頁。(新明朝(略字) 10, 行間 155, 両側混合)

- \* 筆署名(年度) 論文名(あるいは著書名), 掲載誌 巻号, 発行所の順に配列する。
- \* 文献配列は韓国語、日本語、英文の文献の順とし、筆署名を基準にして、それぞれがナ、アイウエオ、abc順にする。
- \* 参考あるいは引用したページは必ず明記する。

\*\* ページを変える \*\*

【要旨】 (新明朝(略字) 15, 太字, 行間 155, 両側混合)

\*\* 6行空け \*\*

本論は、上代日本語を通して..... (新明朝(略字) 10, 行間 155, 両側混合)

- \* 作成言語：英語あるいは日本語
- \* 分量：1枚前後

\*\* 1行空け \*\*

【キーワード】 論文を理解するために必要なキーワード(6~10語)を要旨と同一の言語で明記。(新明朝(略字) 11, 行間 155, 両側混合)

\*\* 2行空け \*\*

## 学会発表に関する規定

1. (発表資格) 口頭発表者の資格は本学会の正会員で、大学院生、教員経歴5年以上の者、または理事会の推薦を受けた者とする。但し、修士課程の大学院生の場合は、指導教授か海外支部長の推薦が必要である。提出した発表要旨文を該当の分科で審査の上、採択の可否を決める。
2. (発表申請) 該当の分科理事や学術理事に口頭で申請可能だが、できるだけ学会ホームページ上の申請様式を利用する。
3. (申請期限) 春季大会は3月15日、秋季大会は9月15日までとする。
4. (発表要旨文)
  - a. <発表要旨文>は韓国語または日本語で作成する。
  - b. 分量はB5用紙5枚(横書)以内とする。
  - c. 最後に発表者の勤務先・専攻・住所・電話番号・E-mailアドレスを記入する。
  - d. 春季大会は3月31日、秋季大会は9月30日までに提出することを原則とする。
  - e. 原稿はE-mail(File添付)で該当の分科理事か学術理事に提出する。
  - f. 発表要旨文の提出とともに発表要旨集の印刷費として10,000ウォンを学会の口座に入金する。但し、海外会員の場合は、発表の当日受付に支払うこともできる。

### <学会の口座>

(韓国) SC第一銀行 528-20-112798 林盛奎(韓国日本文化學會)

(日本) 郵便局 00920-9-147169 韓国日本文化学会 日本支部

## 海外理事に関する規定

1. (資格) 本学会に1回以上出席して研究発表した日本の学者の中で、本学会の研究活動に関心を持ち、ご協力してもらえる方。
2. (活動)
  - (1) 日本国内において本学会を紹介し、学会の活動内容や情報などを提供
  - (2) 韓国国内で行われる年二回の研究発表会で発表を希望する人の窓口役割
  - (3) 学会誌掲載対象論文の審査
  - (4) 日本国内の会員の管理
3. (任期) 2年単位とし、本人の同意を得て延長可能。
4. (任命) 理事会で協議・決定し、会長が委嘱する。
5. (施行) 本内規は、1997年5月5日から施行される。

## 海外支部に関する規定

1. 本学会は、学問を通じた国際交流と学会活動の国際化のために、海外に支部を置くことができる。
2. 海外支部は、本学会の趣旨に賛同し、積極的に協力してくれる海外理事を中心に結成する。
3. 海外支部の運営は支部長が総括し、会員も各支部で管理する。
4. 海外支部長は、理事会の推薦により会長が委嘱する。
5. 海外支部長の任期は2年で、本人の同意により連任も可能である。
6. 海外支部は定期的に研究会を開催し、その結果を本学会に報告する。
7. 海外支部では、本学会の全国大会(年2回)での発表者を推薦する。
8. 海外支部からの推薦発表者は1年間の会費を免除する。
9. 本学会では海外支部に投稿論文の査読を依頼することができる。

## 会員規定

本学会のすべての会員は、「国内会員」(韓国内に所属や勤務先のある内国人や外国人)と「海外会員」(外国に所属や勤務先のある外国人や内国人)とに分け、加入の内容により次のように分類される。ただし、日本での留学生は国内会員とする。

1. (正会員) 本学会の会員として登録を済ませた者。但し、3年間の会費を未納する場合は、正会員の資格を失う。
2. (準会員) 会員の中で、正会員の資格を失った者。
3. (終身会員) 理事会の同意を得た者で、所定の会費(30万ウォン)を納付した会員。
4. (特別会員) 本学会の発展に貢献した人の中で、理事会の推薦による方。
5. (名誉会員) 本学会の招聘講演者の中で、理事会の推薦による方。
6. (団体会員) 所定の会費(年8万ウォン)を納付する国内外の学術団体および機関。但し、海外(日本)の「学術誌交流団体」も団体会員の範囲に含む。

『日本文化學報』 発行計画

- 投稿 依頼 (5月初・11月初)
- 論文原稿 締切) (2月末・5月末・8月末・11月末) : 1次 提出
- 論文審査 (3月・6月・9月・12月)
- 審査委員審査結果 通知 (3月中旬・6月中旬・9月中旬・12月中旬)
- 論文修正原稿 締切) (3月末・6月末・9月末・12月末) : 2次 提出
- 編集委員会 最終掲載可否 通知 (4月初・7月初・10月初・1月初)
- 1次校正 : 筆者
- 2次校正 : 編集委員会
- 発行 (5月31日・8月31日・11月30日・2月28日)

# Journal of Japanese Culture

479

## 各種様式

[諸様式は学会のホームページからダウンロードしてください。]

## 2011年度 學會日程表

實行豫定日	活 動 內 容	擔當理事
2. 7(月)	消息誌 11-1号(通算61号) e-mail 發送	涉外 / 總務
2. 28(月)	『日本文化學報』第48輯(2月号) 發刊 및 學振 登錄	編 集
2. 28(月)	『日本文化學報』第49輯(5月号) 原稿 마감	事務局
3. 5(土)	第39回 國際學術大會 發表申請 마감 / 常任理事會 / 編集理事會	事務局 / 總務 / 編集
3. 28(月)	第39回 國際學術大會 發表要旨 마감	事務局 / 學術
4. 8(金)	消息誌 11-2号(通算62号) e-mail 發送	涉外 / 總務
4. 9(土)	常任理事會	總 務
4. 23(土)	第39回 國際學術大會	學 術
4. 30(土)	常任理事會 / 編集理事會	總務 / 編集
5. 13(金)	第9回 韓國日本學聯合會 發表申請 마감	事務局
5. 31(火)	『日本文化學報』第49輯(5月号) 發刊 및 學振 登錄	編 集
5. 31(火)	『日本文化學報』第50輯(8月号) 原稿 마감	事務局
6. 3(金)	第9回 韓國日本學聯合會 發表要旨 마감	事務局
6. 11(土)	常任理事會 / 編集委員會	總務 / 編集
6. 13(月)	消息誌 11-3号(通算63号) e-mail 發送	涉外 / 總務
7. 1(金)~2(土)	第9回 韓國日本學聯合會(第40回 國際學術大會)	聯 合
7. 16(土)	編集委員會 / 理事修練會	編集 / 總務
8. 31(水)	『日本文化學報』第50輯(8月号) 發刊 및 學振 登錄	編 集
8. 31(水)	『日本文化學報』第51輯(11月号) 原稿 마감	事務局
9. 9(金)	學術誌 發行 支援 申請	總 務
9. 10(土)	第41回 國際學術大會 發表申請 마감	事務局
9. 24(土)	擴大理事會 / 編集委員會	總務 / 編集
9. 30(金)	第41回 國際學術大會 發表要旨 마감	事務局 / 學術
10. 7(金)	消息誌 11-4号(通算64号) e-mail 發送	涉外 / 總務
10. 8(土)	常任理事會 / 編集委員會	總務 / 編集
10. 22(土)	第41回 國際學術大會	學 術
11. 5(土)	常任理事會	總 務
11. 30(水)	『日本文化學報』第51輯(11月号) 發刊 및 學振 登錄	編 集
11. 30(水)	『日本文化學報』第52輯(2月号) 原稿 마감	事務局
12. 10(土)	常任理事會 / 編集委員會	總務 / 編集
2012. 1. 7(土)	常任理事會	總 務
2. 6(月)	消息誌 12-1号(通算65号) e-mail 發送	涉外 / 總務
2. 29(水)	『日本文化學報』第52輯(2月号) 發刊 및 學振 登錄	編 集
2. 29(水)	『日本文化學報』第53輯(5月号) 原稿 마감	事務局



Journal of Japanese Culture

# 日本文化學報

·第 51 輯·

---

發行日 2011년 11월 30일

---

發行處 韓國日本文化學會

(300-150) 大韓民國 大田廣域市 東區 貞洞 31-1  
新榮BLDG. 201號

Tel (042)488-9155 Fax (042)488-9156

<학회계좌번호>

(韓國) SC제일은행 528-20-112798 임성규(한국일본문화학회)  
(日本) 郵便局 00920-9-147169 韓國日本文化學會 日本支部

製作處 메트로문화사

Tel (042) 488-9155 Fax (042) 488-9156

e-mail : metrojung@naver.com

---

※비매품

© 韓國日本文化學會2010 Printed in korea

ISSN 1226-3605

\* 이 학술지는 2010년도 정부재원(교육과학기술부 학술연구조성사업비)으로 한국학술진흥재단의 지원을 받아 출판되었음.